

瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告 1

史跡寒風古窯跡群

史跡整備に伴う確認調査

大
文

2009

瀬戸内市教育委員会

『史跡寒風古窯跡群』 正誤表

頁	行	讀	正
166	37	7世紀第1四半世紀頃	7世紀第1四半期頃
167	33	7世紀第2四半世紀頃	7世紀第2四半期頃
168	5	7世紀第2四半世紀後半	7世紀第2四半期後半
168	5	第3四半世紀前半頃	第3四半期前半頃
168	15	邑久古窯跡群の中でも	邑久古窯跡群の中でも2基の窯跡以外には
169	5	7世紀第3四半世紀前半	7世紀第3四半期前半
169	24	7世紀第3四半世紀頃	7世紀第3四半期頃
170	3	7世紀第4四半世紀後半	7世紀第4四半期後半
170	23	7世紀第4四半世紀後半	7世紀第4四半期後半
170	24	8世紀第1四半世紀前半頃	8世紀第1四半期前半頃
図版7	1	I-I号窯跡中央部土層断面	I-I号窯跡灰原中央部土層断面

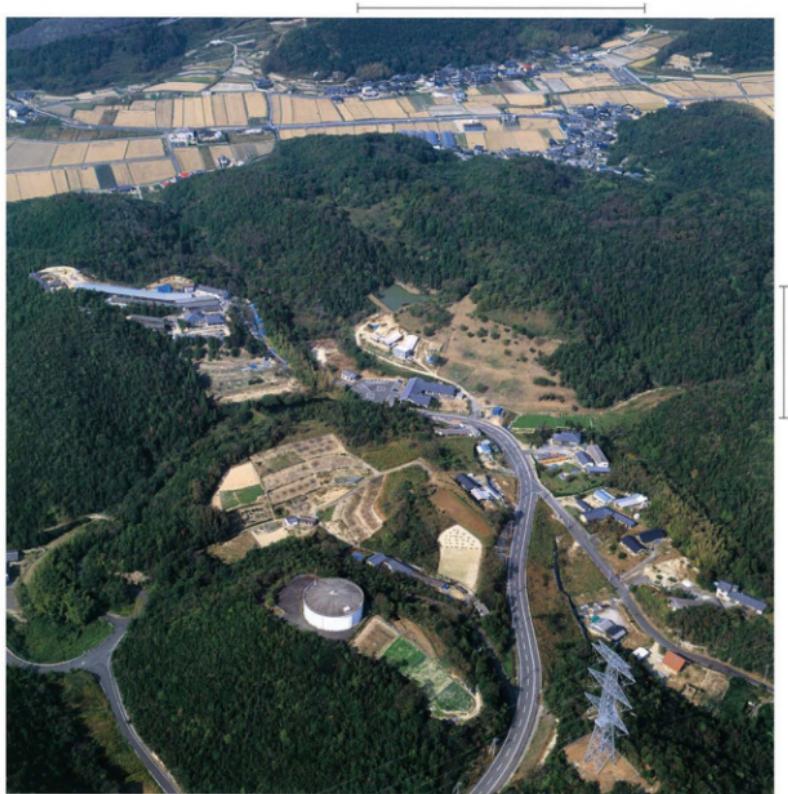
史跡寒風古窯跡群

史跡整備に伴う確認調査

2009

瀬戸内市教育委員会

巻頭図版 1



1 寒風古窯跡群周辺空中写真（南西から）

卷頭図版 2



1 1-I号窯跡焚口部鶴尾出土状況 (T31: 北から)



2 1-II号窯跡焼成部床面遺物出土状況 (T19: 北西から)

卷頭図版 3



1 寒風古墳横穴式石室（T 8-b：北東から）



2 寒風古墳横穴式石室須恵器床（T 8-b：北東から）

卷頭図版 4



25



26



27

1 1-I号窯跡灰原出土刻書文字須恵器 (T21)



152

153

2 1-Ⅲ号窯跡上層土壤 1 出土遺物 (T18)

序

瀬戸内市は、岡山県南東部に位置し、平成16年（2004）11月1日に牛窓町・邑久町・長船町の3町が合併して誕生した市です。豊かな風土と瀬戸内海の海上交通に伴い古くから交通の要衝として多くの人々の交流や物資の流通により、多くの文化財、地域固有の伝統芸能や伝統文化等が残され伝承されています。

寒風古窯跡群は、約130基に及ぶ中・四国地方最大規模の邑久古窯跡群の南端部に位置し、昭和初期から地元郷土史家の時實黙水氏による地道な資料採集や資料報告と共に保護活動が行われてきました。これらの調査により採集された多くの須恵器は、吉備地方の須恵器編年の基準となり、その一部は奈良の都へも運ばれています。さらに特異な資料として鷹尾・便などは注目される資料となっています。このため、学史上貴重な遺跡として昭和61年、国指定史跡に指定されました。

本市の総合計画の施策の大綱に「歴史・文化を活かしたまちづくり」があり、地域の歴史・文化資源を活かした文化の振興を進めているところであります。その中で、寒風古窯跡群の保存と公開活用を図るために平成16年度から国庫補助事業の採択を得て、遺跡の構造や価値を明らかにし環境整備計画に必要な基礎資料を得るために磁気探査・確認調査等を実施してきました。

確認調査の結果、5基の窯跡・寒風古墳・工房跡の構造や規模を確認することができました。その中で、1号窯跡群から新たに1基の窯跡を確認するなど磁気探査の結果を活かす成果をあげることができました。

今回の調査成果が、今後の史跡整備の基礎資料となり、埋蔵文化財保護・保存・活用のため有效地に活用されるとともに、学術研究のため、また郷土の歴史学習の資料として役立てれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたりまして、史跡寒風古窯跡群整備委員会の先生方をはじめとして、文化庁、岡山県教育委員会ならびに地元の関係各位から多大なご指導とご協力を賜り衷心より厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

瀬戸内市教育委員会

教育長 日 下 弘 海

例　　言

1. 本報告書は、瀬戸内市教育委員会が史跡寒風古窯跡群整備に伴い平成16年度（2004）～平成20年度（2008）の5ヶ年の国庫補助事業の採択を受け、平成17年度（2005）～平成19年度（2007）に確認調査を実施した、史跡寒風古窯跡群の発掘調査報告書である。
2. 史跡寒風古窯跡群は、岡山県瀬戸内市牛窓町長浜字寒風5136番地他に所在する。
3. 発掘調査は、平成17年度に馬場昌一・若松拳史・関幸代、平成18年度に馬場昌一・若松拳史・関幸代、平成19年度に馬場昌一・関幸代が担当して実施した。調査面積は、334.7m²である。
4. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、史跡寒風古窯跡群整備委員会（委員長：河本清）を設けた。整備委員各位からは、始終有益な御指導と御協力を賜った。また、文化庁および岡山県教育委員会からは指導・助言を頂いた。深く感謝の意を表す次第である。委員名簿については第2章第2節に示すとおりである。
5. 本報告書の作成は、平成20年度（2008）に調査と整理を担当した馬場・関、調査を担当した若松が行い、文責は節ごとの文末に示した。全体編集は馬場が行った。
6. 本報告書に関係する遺構・遺物のうち、一部について国庫補助事業として探査・分析を次の諸氏に依頼し、有益な御教授を得るとともに、成果については報告文をいただいた。記して厚くお礼申し上げる。

物理探査	金田明大・西村 康・西口和彦（奈良文化財研究所）
胎十分析	白石 純（岡山理科大学）
7. 本報告書に關係する遺物のうち、一部について同定を次の機関に委託した。

炭化物の樹種	株式会社吉田生物研究所
--------	-------------
8. 本報告書に關係する遺物のうち、一部について実測・拓本・トレースを次の機関に委託した。

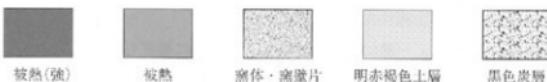
鶴尾・陶棺の実測・拓本・トレース	フジテクノ有限会社
------------------	-----------
9. 本報告書に關係する遺構・遺物のうち、ほとんどの写真撮影を次の機関に委託した。

遺跡・遺構の空中写真撮影	フジテクノ有限会社
遺物の写真撮影	柳生写真館
10. 本書に關係する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は瀬戸内市教育委員会（岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓4911）に保管している。
11. 本書の作成にあたり下の方々及び機関の協力を得ました。記して感謝の意を表す次第である。

石井 啓、岡本寛久、田中久雄、中野雅美、日野浦弘幸、古市 晃、松尾佳子、松尾洋平、山磨康平、宮岡齊文、山本悦世、大津市教育委員会、岡山県古代吉備文化財センター、吉備考古館、奈良文化財研究所	(敬称略)
--	-------

凡　　例

1. 本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方向は平面直角座標第V系の座標北である。
2. 本報告書に使用した高度は、すべて海拔高度である。
3. 図面縮尺については明記しており、主なものについては以下のように統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。
遺構 窯跡1/60・1/50、古墳1/60・1/30、堅穴遺構1/60、土壙1/30
遺物 土器1/2・1/4・1/6・1/8、石器1/2
4. 本書の遺構名は、山麻原平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978で記された名称で表記し、新規発見の窯跡や土壙は続き番号で表記した。
5. 本書の調査区名はトレントの略号Tを番号の前に付している。
6. 遺物番号は土器・石器にわけて通し番号を付け、土器以外については下記略号を番号の前に付している。
石器：S (Stone)
7. 図版のうち遺物写真に付した番号は、挿図の遺物番号と一致する。
8. 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために残存口径が1/6以下で復元に不確実性のあるものである。
9. 掲載した遺構上のスクリーントーンは以下の範囲を示すものである。



10. 土層断面図の土色・遺物に使用した色調は、『新版標準土色帖』2004年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）によるものである。
11. 本報告書の第3図は、『改訂岡山県遺跡地図』（第6分冊岡山地区）2003を複製・加筆したものである。
12. 本報告書の時代区分・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。

目 次

卷頭図版

序

例 言

凡 例

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境.....	1
第1節 地理的環境.....	1
第2節 歴史的環境.....	2
第2章 調査の経過及び体制.....	7
第1節 調査に至る経緯.....	7
第2節 調査の経過と体制.....	16
第3章 調査の概要.....	29
第1節 1号窯跡群の調査概要.....	29
1 位置と調査の概要.....	29
2 1 - I号窯跡の遺構.....	31
3 1 - I号窯跡の出土遺物.....	40
4 1 - II号窯跡の遺構.....	50
5 1 - II号窯跡の出土遺物.....	58
6 1 - III号窯跡の遺構.....	68
7 1 - III号窯跡の出土遺物.....	75
8 土壙1の遺構と出土遺物.....	80
第2節 2号窯跡の調査概要.....	85
1 位置と調査の概要.....	85
2 遺構.....	87
3 出土遺物.....	96
第3節 3号窯跡の調査概要.....	107
1 位置と調査の概要.....	107
2 遺構.....	107
3 出土遺物.....	110
第4節 寒風古墳の調査概要.....	113
1 位置と調査の概要.....	113
2 遺構.....	113
3 出土遺物.....	121
第5節 壇穴造構3の調査概要.....	127
1 位置と調査の概要.....	127

2 造構	127
3 出土遺物	130
第6節 その他の調査区の調査概要	134
1 位置と調査の概要	134
2 トレンチ30	134
3 トレンチ34	135
4 トレンチ22	135
5 トレンチ23	135
6 トレンチ24	139
7 トレンチ25	140
8 トレンチ7	143
9 トレンチ35	143
10 トレンチ36	143
第4章まとめにかえて	147
第1節 1号窯跡群	147
1 立地	147
2 1-I号窯跡の構造と規模	147
3 1-I号窯跡の時期	148
4 1-II号窯跡の構造と規模	148
5 1-II号窯跡の時期	149
6 1-III号窯跡の構造と規模	150
7 1-III号窯跡の時期	151
第2節 2号窯跡	152
1 立地	152
2 構造と規模	152
3 時期	153
第3節 3号窯跡	155
1 立地	155
2 構造と規模	155
3 時期	155
第4節 寒風古墳	157
1 立地	157
2 構造と規模	157
3 時期	157
4 被葬者	158
第5節 出土遺物	159
1 須恵器の編年	159
2 刻書文字	173

3 楕円形当て具痕	182
4 鳥尾	185
第6節 寒風古窯跡群の変遷と位置付け	197
附 載	
1 昭和53年確認調査の出土遺物	203
2 寒風古窯跡群の物理探査	225
3 寒風古窯跡群出土遺物の胎土分析	237
4 濱戸内市寒風古窯跡群出土炭化物の樹種	241
遺物観察表	243
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(黒九印)	1
第2図 用本遺跡出土剣骨(1/3)(文献1)	2
第3図 家風古窯跡群と周辺遺跡分布図(1/25,000)	3
第4図 札幌古墳群出土陶製瓦文地図(1/3)(文献2)	4
第5図 新林(官道) 窯跡出土櫻尾(1/4)(文献3)	5
第6図 大・上八幡宮境内出土五段瓦形石外筒(1/6) (文献4)	6
第7図 家風古窯跡群1号窯跡群灰原探集陶馬(1/2) (文献1)	10
第8図 幕池北遺跡出土陶馬(1/2)(文献2)	12
第9図 大阪府細工谷遺跡出土兔尾(1/4)(文献3)	12
第10図 史跡京風古窯跡群地図(1/2,000)	13
第11図 寒風古窯跡群トレンチ配置図(1/1250)	23
第12図 1-1・1-2・1-3・1-4号窯跡トレンチ配置図 (1/150)	30
第13図 1-1号窯跡平・断面図(1/50)	33・34
第14図 1-1号窯跡T19焼成部断面図(1/50)	36
第15図 1-1号窯跡T31缺口部端尾、陶棺出土状況 (1/30・1/12)	36
第16図 1-1号窯跡T21灰原平・断面図(1/60)	37・38
第17図 1-1号窯跡T19焼成部出土遺物(1/4)	41
第18図 1-1号窯跡T31缺口1出土遺物1(1/6)	43
第19図 1-1号窯跡T31缺口2出土遺物2(1/6)	44
第20図 1-1号窯跡T31缺口1出土遺物3(1/6)	45
第21図 1-1号窯跡T31缺口3出土遺物4(1/6)	46
第22図 1-1号窯跡T21灰原出土遺物(1/4・1/2)	47
第23図 1号窯跡灰原土表採取遺物(1/4)	48
第24図 1-1号窯跡T19焼成部床面遺物出土状況・ 出土物(1/20・1/8)	51
第25図 1-1号窯跡窯体平・断面図(1/50)	53・54
第26図 1-1号窯跡T19焼成部断面図(1/50)	55
第27図 1-1号窯跡T32缺口・前部断面図(1/50)	57
第28図 1-1号窯跡T19焼成部床面出土遺物1(1/4)	59
第29図 1-1号窯跡T19焼成部床面出土遺物2(1/4)	60
第30図 1-1号窯跡T1層T32缺口出土遺物1(1/6・1/4)	63・64
第31図 1-1号窯跡上層T32埋土出土遺物2(1/6)	65
第32図 1-1号窯跡上層T19壁上出土遺物1(1/4)	66
第33図 1-1号窯跡上層T19埋土出土遺物2(1/4)	67
第34図 1-1号窯跡T19壁上出土遺物3(1/4)	68
第35図 1-1号窯跡上層T32埋土出土 中空円錐状把手(1/2)	68
第36図 1-1号窯跡窯体平・断面図・立面図(1/50)	71・72
第37図 1-1号窯跡T18・19・20焼成部断面図(1/50)	73
第38図 1-1号窯跡T33前部・缺口部断面図(1/50)	74
第39図 1-1号窯跡T18・20焼成部床面出土遺物1(1/4)	77
第40図 1-1号窯跡T18・20焼成部床面出土遺物2(1/4)	78
第41図 1-1号窯跡T18・20焼成部上層灰土出土遺物 (1/4)	79
第42図 1-1号窯跡上層T18土壠1平・断面図(1/30)	81
第43図 1-1号窯跡上層T18土壠1出土遺物1(1/4)	82
第44図 1-1号窯跡上層T18土壠1出土遺物2(1/8)	83
第45図 2号窯跡トレンチ配置図(1/150)	86
第46図 2号窯跡窯体平・断面図(1/60)	89・90
第47図 2号窯跡T3・9・10・19平・断面図(1/60)	93
第48図 2号窯跡T14・15・6・16平・断面図(1/60)	95
第49図 2号窯跡T1窯通部・焼成部床面出土遺物(1/4) (堆積部:155・156、焼成部:157~164)	97
第50図 2号窯跡T2焼成部床面出土遺物(1/4)	98
第51図 2号窯跡T2・4焼成部出土遺物(1/4) (T2:180~183、T4:184~186)	99
第52図 2号窯跡T9前底部出土遺物(1/4) (10層:189・193~196、11層:187・188・190~192)	101
第53図 2号窯跡T13前底部出土遺物(1/4) (7層:197、4層:198~204)	102
第54図 2号窯跡T10灰原出土遺物1(1/4) (13層:205・206・213~217・219・222・224・ 225・227、14層:207~212・218・220・221・223・ 226)	104
第55図 2号窯跡T10灰原出土遺物2(1/4) (13層:228~230、14層:226~227)	105
第56図 2号窯跡T14灰原出土遺物(1/4)	106
第57図 2号窯跡T3上層ゴミ穴出土遺物(1/4・1/2)	106
第58図 3号窯跡トレンチ配置図(1/100)	107
第59図 3号窯跡窯体平面・断面・立面図(1/60)	109
第60図 3号窯跡T5焼成部床面出土遺物(1/4)	110
第61図 3号窯跡T11窯通部出土遺物(1/4)	111
第62図 寒風古窯跡平面図・T8-c断面図(1/60)	115
第63図 寒風古窯跡T8-a・T8-d断面図(1/60)	116
第64図 寒風古窯横穴式石室平・立面図・須恵器床平面図 (1/30)	117・118
第65図 寒風古窯周溝出土遺物(1/4)	122
第66図 寒風古窯横穴式石室埋土出土遺物(1/4)	123
第67図 寒風古窯横穴式石室床面出土遺物(1/4)	125
第68図 寒風古窯横穴式石室床面出土陶尾(1/6)	126
第69図 竪穴造構3平・断面図(1/60)	128
第70図 竪穴造構3床面出土遺物状況平面図(1/40)	129
第71図 T29-b西壁土層断面図(1/60)	129
第72図 T29壁内遺構3沖J遺物1(1/4)	132
第73図 T29壁内遺構3・周溝出土遺物2(1/4)	133
第74図 T30平・断面図(1/60)	136
第75図 T34平・断面図(1/60)	136
第76図 T22平・断面図(1/60)	136
第77図 T23・24・25平・断面図(1/60)	137・138
第78図 T24壁内遺構1断面図(1/60)	141

第79図	T 25-a・b溝断面図 (1/60)	141
第80図	T 23b上石芯 (1/1)	141
第81図	T 7-a平・断面図 (1/60)	142
第82図	T 7-b平・断面図 (1/60)	142
第83図	T 7-c断面図 (1/60)	142
第84図	T 35平・断面図 (1/60)	144
第85図	T 36平・断面図 (1/60)	145
第86図	西川礪年寒風1式 (1/6) 〈文献1〉	159
第87図	西川礪年寒風3式 (1/6) 〈文献1〉	159
第88図	伊藤礪牛尾原1式 (1/6) 〈文献2〉	161
第89図	伊藤礪年寒風1式 (1/6) 〈文献2〉	161
第90図	伊藤礪牛尾模式 (1/6) 〈文献2〉	162
第91図	伊藤礪牛尾寒風3式 (1/6) 〈文献2〉	162
第92図	1 - Ⅲ号窯跡焼成部床面出土七杯法量図	168
第93図	1 - Ⅲ号窯跡焼成部床面出土杯法量図	168
第94図	東古窯空隙跡群須恵器縦年 (瀬戸内市編年) (1/6)	171
第95図	瀬戸内市開通出土文字資料1 (1/2・1/4・1/15)	177
第96図	瀬戸内市開通出土文字資料2 (1/4・1/2・1/1)	178
第97図	瀬戸内市開通出土文字資料3 (1/6・1/4・1/2)	179
第98図	瀬戸内市開通出土文字資料4 (1/2)	180
第99図	椿円形当て具痕集成図 (1/4)	184
第100図	鶴尾部分名称 (文献3)	185
第101図	(A-1) 復元図 (文献3)	185
第102図	(B-2) 復元図 (文献3)	186
第103図	(C-2) 復元図 (文献3)	186
第104図	寒風古窯跡群出土鶴尾集成図1 (1/6)	188
第105図	寒風古窯跡群出土鶴尾集成図2 (1/6)	189
第106図	寒風古窯跡群出土鶴尾集成図3 (1/6)	190
第107図	寒風古窯跡群出土鶴尾集成図4 (1/6)	191
第108図	寒風古窯跡群出土鶴尾集成図5 (1/6)	192
第109図	寒風古窯跡群出土鶴尾集成図6 (1/6)	193
第110図	寒風古窯跡群出土鶴尾集成図7 (1/6)	194
第111図	対凹窓寺跡出土鶴尾 (1/6) 〈文献4〉	195
第112図	2号窯跡を中心とした直径60m内の寒風古窯跡群周辺跡分布図 (1/5,000)	197
第113図	切明窓跡灰原探査遺物 (1/4)	198
第114図	切明窓跡山土鶴尾 (1/6) 〈文献1〉	199
第115図	寒風古窯跡場池北遺跡遺構全体図 (1/200)	200
第116図	寒風古窯跡場池北遺跡溝状遺構出土遺物 (1/4)	200
	〈文献2〉	200
	〈文献2〉	201

表 目 次

第1表	寒風古窯跡群窯跡番号対照表	160
第2表	寒風古窯跡群の須恵器縦年表	172

卷頭図版目次

券頭図版1	1 寒風古窯跡群周辺空中写真 (南西から)		
券頭図版2	1 1 - I号窯跡焼成部鶴尾出土状況 (T31: 北から) 2 1 - II号窯跡焼成部床面遺物出土状況 (T19: 北西から)		
券頭図版3	寒風古墳横穴式石室 (T 8-b: 北東から)		
	2 寒風古墳横穴式石室須恵器床 (T 8-b: 北東から)		
	券頭図版4	1 1 - T号窯跡灰原出土刺繡文字須恵器 (T21) 2 1 - III号窯跡上層土塗1出土遺物 (T18)	

図 版 目 次

図版1	1 寒風古窯跡群空中写真 (南西上空から) 2 1号窯跡群空中写真 (左から1 - I号・1 - II号・1 - III号) (西上空から)	
図版2	1 1 - I号窯跡焼成部 (T19: 北から) 2 1 - II号窯跡焼成部 (T26: 西から) 3 1 - I号窯跡焚口部 (T31: 西から)	
図版3	1 1 - II号窯跡焼成部 (T19: 北西から) 2 1 - II号窯跡焼成部 (T27: 西から) 3 1 - II号窯跡焚口部 (T32: 西から)	
図版4	1 1 - III号窯跡焼成部 (T20: 西から)	
	2 1 - III号窯跡焼成部 (T28: 西から) 3 1 - III号窯跡焚口部 (T33: 西から)	
図版5	1 1 - III号窯跡上層土塗遺物出土状況 (T18: 南東から)	
	2 1 - III号窯跡焼成部床面遺物出土状況 (T18: 南東から)	
	3 1 - III号窯跡燒成部土層断面 (T18: 西から)	
図版6	1 1 - I号窯跡灰原 (T21: 西上空から) 2 1 - I号窯跡灰厚断面 (T21: 西から) 3 全景 (T22: 南西から)	

国版7	1 - I 分室跡中央部土層断面 (T21: 北東から)	国版16	1 金具 (T23・T25: 北東から) 2 溝 1 (T25: 南東から) 3 土壙 2 ~ 4 (T24: 北東から)
2 全景 (T34: 北西から)		国版17	1 I - I 分室跡焼成部出土遺物 (T19) 2 I - I 号窯跡焚口出土遺物 (T31)
3 全景 (T30: 北から)		国版18	1 I - I 号窯跡群灰原出土刻書文字頃思器 (T21) 2 1 号窯跡群灰原出土採集の精円形当て具表を有する器
国版8	1 2号窯跡 (上から T 1・T 2・T 4・T 3・T 9・T10・T 6) (南北から) 2 2号窯跡焼成部断面 (T 2: 南北から)	国版19	参考資料 1号窯跡群灰原出土楕円形当て具表を有する器 (吉備考古館保管)
1 2号窯跡焼成部 (T 1: 西から)		国版20	1 I - II 分室跡焼成部床而出土遺物 (T19) 2 I - II 号窯跡埋土出土遺物 (T32)
2 2号窯跡焼成部 (T 4: 北西から)		国版21	1 I - II 分室跡焼成部床而出土遺物 (T20) 2 I - II 号窯跡理土出土遺物 (T19)
3 2号窯跡焚口部 (T 3: 西から)		国版22	1 I - III 号窯跡焼成部床而出土遺物 (T18) 2 I - III 号窯跡理土出土遺物 (T20) 3 参考資料 1号窯跡群灰原出土遺物 (吉備考古館保管)
国版9	1 2号窯跡焼成部断面 (T 9: 北から)	国版23	1 I - III 号窯跡焼成部床而出土遺物 (T18) 2 2号窯跡焼成部 (T 10: 西から)
2 2号窯跡焼成部 (T 4: 北西から)		国版24	1 1・2号窯跡出土中空円筒把手・円筒観 2 3号窯跡焼成部・煙道部出土遺物 (T 5・11)
3 2号窯跡焚口部 (T 3: 西から)		国版25	1 寒風古墳横穴式石室前部床に使用された壺内面の精円形当て具表 2 寒風古墳横穴式石室内出土遺物 3 寒風古墳横穴式石室前部床出土馬頭
国版10	1 2号窯跡焼成部断面 (T 5: 南東から) 2 3号窯跡 (1から T 5・T11・T12) (北上空から)	国版26	1 穴穴造構 3 出土遺物 (T29) 2 参考資料 1号窯跡群採集鶴尾 (時実資料)
3 3号窯跡達道部 (T11: 南東から)			
国版11	1 3号窯跡焼成部断面 (T 5: 南東から) 2 3号窯跡 (1から T 5・T11・T12)		
3 (北上空から)			
国版12	1 寒風古墳 (南東上空から)		
2 寒風古墳横穴式石室遺物出土状況 (T 8-b: 北東から)			
国版13	1 寒風古墳横穴式石室 (T 8-b: 南東から) 2 寒風古墳周溝 (T 8-a: 西から) 3 寒風古墳崩倒 (T 8-c: 西から)		
国版14	1 寒風古墳 (寒風池東敷地) (南西上空から) 2 全景 (T36: 北西から) 3 全景 (T35: 南東から)		
国版15	1 穴穴造構 3 遺物出土状況 (T29: 北西から) 2 穴穴造構 3 (T29: 北西から) 3 穴穴造構 3 P 2 平瓶出土状況 (T29: 南東から)		

写 真 目 次

写真1	時實黒水氏の備前焼陶像 (寒風陶芸会館中庭) 7	写真8	T29窓穴造構3調査状況 (2007.3.1) 20
写真2	高砂山古墳群で休む時實黒水氏 (左) と 長瀬東兵 (右) 8	写真9	T31 1 - I 号窯跡焚成部底尾出土状況 (2008.1.24) 22
写真3	詳細に註記された「時實コレクション」 8	写真10	平成17年度現地説明会状況 (2005.12.18) 28
写真4	寒風古墳横穴式石室内陶棺出土状況 (昭和10年2月10日撮影) 9	写真11	平成18年度発掘調査作業員 (2006.12.23) 28
写真5	寒風古墳群の寒風古墳付近で水野正好氏 (当時: 文化庁調査官) (右から 1人目) へ説明する時實黒水氏 (右から 2人目) (昭和53年3月7日 山崎康平氏撮影、提供) 15	写真12	寒風古墳群周辺跡跡査洞査員・作業員 (2008.3.5) 28
写真6	1号窯跡レーザー探査状況 (2005.3.13) 17	写真13	1 - II 号窯跡焼成部南側壁の指ナア痕 30
写真7	史跡寒風古窯跡群整備委員会現地指導状況 (2005.12.9) 18	写真14	寒風1号窯跡群灰原から杯身が接合した状態で出土したA'類の時實資料 164
		写真15	亀ヶ原1号窯跡から出土した杯蓋 167

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

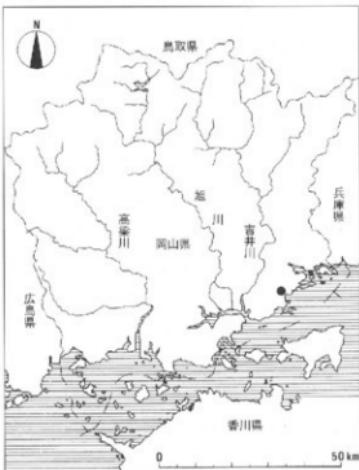
史跡寒風古窯跡群は、岡山県瀬戸内市牛窓町長浜5136番地他に所在する。(第1図)

本遺跡の所在する瀬戸内市は、岡山県の東南部に位置し、西は県都・岡山市、北は備前市に接している。地勢は、市内の西端には県下三大河川の一つである吉井川が流れ、吉井川の左岸には長船・邑久地域に肥沃な平野部が広がり、市街地と田園地帯が広がるほか、東部地域や海岸部は丘陵地となっている。また、南部は「瀬戸内市」の名称となっている瀬戸内海に面し、島嶼や海岸等自然景観に恵まれている。

瀬戸内市の総面積は125.51km²であり、半分以上を邑久地域(68.71km²)が占めている。土地利用現況を概観すると、地域の西端を流れる吉井川及びその支流の千町川、千田川の堆積作用により平坦な沖積平野が開け、市街地や水田地帯として利用されている。邑久駅及び市役所周辺、長船駅及び長船支所周辺では、近年の宅地開発により都市化が進展している。農地については、沖積平野では主に水田として、丘陵地の南面する斜面では畑として野菜やぶどうやみかんなどの果樹園として利用されており、全面積の約3割を占めている。山林については、瀬戸内市を東西方向に横断する形で広がっている。その面積は全面積の約5割を占めている。また、牛窓地域の前島などの島嶼部では良好な自然環境が広がっており、瀬戸内海国立公園に指定されている。さらに、錦海湾に面しては、塩田跡地が広がっている。

寒風古窯跡群の位置する牛窓地域は、東西9.5km、南北7.5km、総面積27.5km²で東部と南部は瀬戸内海に面している。海上には「牛窓の瀬戸」をはさんで横たわる前島をはじめ、大小8つの島があり、東端付近と各島嶼は、変化に富み、自然の緑と海の色によって「日本のエーゲ海」と呼ばれている。陸地一帯は、小丘陵による複雑な地形で、塩田跡地と一部干拓地等の平坦地を除いて、全体的に傾斜地が多く、海岸線沿いに狭長に発達している。

寒風古窯跡群は、錦海湾と呼ばれ、かつて遠浅で湾状の海の北西部海岸線に立地する栗利郷の集落から北西に約1500m程度谷筋に入る。また、邑久地域の西部に広がる千町平野の東側奥となる本庄地区から南東に谷筋に入る、二方向からの谷筋の交わる標高50~60mの南東に張り出した丘陵の南に面した緩斜面に所在する。
(馬場)



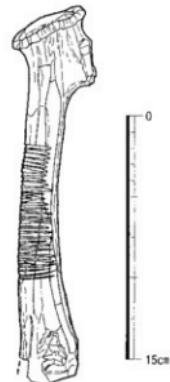
第1図 遺跡位置図(黒丸印)

第2節 歴史的環境

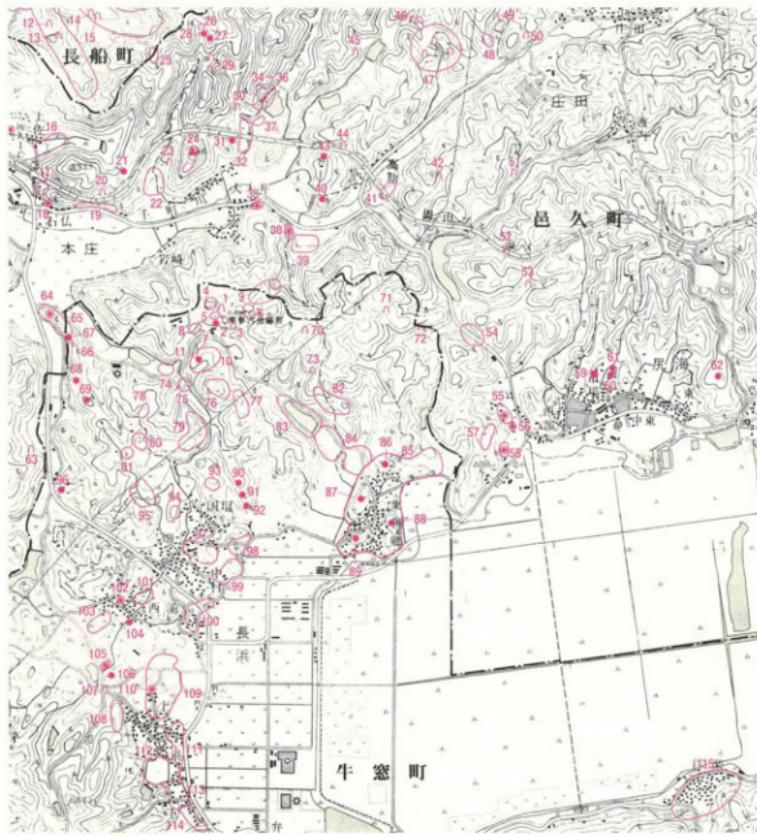
寒風古窯跡群の所在する牛窓町長浜地域周辺部での最古の遺物は、寒風遺跡（5）・中山遺跡（10）・大谷遺跡（76）・山越遺跡（77）・山ノ神遺跡（78）・的・先的遺跡（79）・燈山遺跡（80）から採集されたサスカイト製の凹基無茎式石鏃や国塙遺跡（94）から採集されたサスカイト製の削器と凹基無茎式石鏃で、縄文時代早期及びそれに近い時期の遺跡の存在が知られている。また、縄文時代でも所属時期が不明な遺物のほとんどが長浜地区から採集されている。いずれも標高約50～80mの丘陵上に位置しており狩猟用の石鏃が主となっている。

弥生時代になると、本格的な米作りに伴い人々の定住が行われるようになり、山越遺跡（77）・磯遺跡（99）・殿畠遺跡（98）・寒風遺跡（5）・笹場池北遺跡（8）からサスカイト製の打製石包丁が採集されている。しかし採集地はほとんどが丘陵地であり、遺跡付近では平地での水田の存在は考えられず、本庄地区の平坦部の水田か丘陵の谷水田での水稲耕作で使用されたものと考えられる。また、丘陵部に位置する遺跡からは多くの石鏃が出土しており、農業と共に狩猟も行われていたことを窺わせる。また、弥生時代中期後葉から古代にわたり錦海湾に向した海辺の遺跡が形成される。磯遺跡（99）・殿畠遺跡（98）・奥浦下遺跡（113）・用本遺跡（114）である。このうち用本遺跡は、平成5年（1993）市道水尻-用本線の改修工事に伴い発掘調査が行われ、厚さ1mほどの包含層が確認された。上層から古墳時代中期の製壙土器を含む層、古墳時代前期の土器と貝殻を含む層、弥生時代末から古墳時代前期の土器や貝殻、獸骨を含む層であった。その中で特徴的な遺物として、弥生時代末から古墳時代前期の層から刻骨が1点出土した。4～5歳の鹿の左落角の幹部を面取りし、中央部に30本の線刻を彫ったもので、中央部が磨耗するほどかなり使用されていた。刻骨は、祭祀に伴って楽器のようにして使用したと考えられ、当時の精神文化や遺跡の性格を考究する上で貴重な資料である。（第2図、註1・2）

古墳時代になると、4世紀後半から6世紀後半までの200年間にわたり牛窓湾を巡る5基の前方後円墳、牛窓天神山古墳・黒島古墳・鹿歩山古墳・波歌山古墳・二塚山古墳が連続と築かれる。牛窓と瀬戸内海の海上交通、港湾管理などとの関わりを示す古墳である。6世紀後半から7世紀後半には、牛窓湾の北側の東西に長い牛窓半島の背骨部分にあたる標高100m～150mの阿弥陀山を中心に約50基の円墳からなる阿弥陀山古墳群が築かれる。古墳は阿弥陀山の丘陵上の分布から少なくとも3つのグループにまとめることができる。各古墳は直徑10m前後の円墳で、内部主体は横穴式石室。石室の開口方向はほとんどが牛窓湾を望む南向きであり、これらの古墳群も海との関わりを示す古墳であると考えられる。一方、長浜地区の古墳について数は極端に少なく、錦海湾を望む丘陵上から南北や東斜面にいくつかの古墳が築かれ、近年の畠地の開墾で多くの古墳が消滅しているようである。記録による多く古墳の内部主体は横穴式石室であった。（註3）寒風古窯跡群の中に所在す



第2図 用本遺跡出土刻骨(1/3)
(文献1)

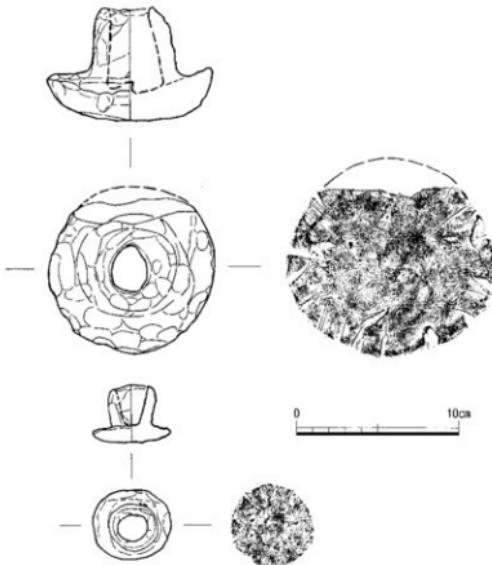


- | | | | | |
|---------------|----------------|----------------|------------|---------------|
| 1. 寒風1号室跡 | 24. 佐井田城跡 | 47. 工田墓跡 | 70. 平田窯跡 | 93. 寺屋敷遺跡 |
| 2. 寒風2号室跡 | 25. 本庄源内奥遺跡 | 48. 田谷坂遺跡 | 71. 流尾原跡 | 94. 因塙遺跡 |
| 3. 寒風3号室跡 | 26. 佐井田口遺跡 | 49. びしょびしょ谷窯跡 | 72. 土瓶窯跡 | 95. 大松遺跡 |
| 4. 寒風池遺跡 | 27. 本庄佐井田口1号墳 | 50. 墓山古墳群 | 73. 小から窯跡 | 96. 松古墳 |
| 5. 寒風遺跡 | 28. 本庄佐井田口2号墳 | 51. 烏三の窯跡 | 74. 街村坂遺跡 | 97. 千葉北小学校古墳群 |
| 6. 寒風東北跡 | 29. 芦谷窯跡 | 52. 奥更分窯跡 | 75. 荒神男遺跡 | 98. 駿河道跡 |
| 7. 寒風古墳 | 30. 芦海鳥山南窯跡 | 53. 更谷窯跡 | 76. 大寺遺跡 | 99. 破道跡 |
| 8. 寒風芦場池北遺跡 | 31. 芦海七手原門古墳 | 54. 芦海ナリ崎遺跡 | 77. 山崩遺跡 | 100. 安長道跡 |
| 9. 切明塚跡 | 32. 芦海構谷道跡 | 55. 芦海下下道跡 | 78. 山神道跡 | 101. 大門道跡 |
| 10. 中山道跡 | 33. 本庄橋谷道跡 | 56. 芦海构造遺跡 | 79. 的先の道跡 | 102. 西浦貝塚 |
| 11. 中山古墳 | 34. 芦海構谷1号墳 | 57. 芦海引ノ山道跡 | 80. 殿口道跡 | 103. 下谷遺跡 |
| 12. 花尻南2号室跡 | 35. 芦海構谷2号墳 | 58. 芦海构造遺跡 | 81. 江造道跡 | 104. 秩母社古墳 |
| 13. 花尻南3号室跡 | 36. 芦海構谷3号墳 | 59. 常住坊塚(成吉坊墓) | 82. 尾子道跡 | 105. 辻の山貝塚 |
| 14. 仙府池上池1号塚跡 | 37. 芦海森明貝塚 | 60. 芦海新林1号墳 | 83. 三平池遺跡 | 106. 小丸山古墳 |
| 15. 仙府池上池2号塚跡 | 38. 芦海カラベ塚 | 61. 芦海新林2号墳 | 84. 二之町街道跡 | 107. 黒柱遺跡 |
| 16. 本庄源内遺跡 | 39. 芦海カラベ道跡 | 62. 芦海松尾古墳 | 85. 斎和鄉遺跡 | 108. 田尾遺跡 |
| 17. 本庄札場遺跡 | 40. 芦海宮山古墳 | 63. 本庄井谷窯跡 | 86. 北代古墳 | 109. 北田遺跡 |
| 18. 石仏貝塚 | 41. 芦海羽根道跡 | 64. 本庄小山貝塚 | 87. 上原敷古墳 | 110. 聖ヶ市貝塚 |
| 19. 本庄長畑遺跡 | 42. 木本灰窯跡 | 65. 小山窯跡 | 88. 伊・古志塚 | 111. 大渡口道跡 |
| 20. 猪のかけ塚跡 | 43. 芦海常古墳 | 66. 吉市村窯跡 | 89. シタの山古墳 | 112. 道跡 |
| 21. 本庄高1号墳 | 44. 新林窯跡(官職窯跡) | 67. 吉市村1号墳 | 90. 山地1号墳 | 113. 奥浦下道跡 |
| 22. 本庄佐井田口遺跡 | 45. ざざら・中池窯跡 | 68. 吉市村2号墳 | 91. 山地2号墳 | 114. 川本道跡 |
| 23. 本庄佐井田口遺跡A | 46. さざら・奥池窯跡 | 69. 吉市村3号墳 | 92. 山地3号墳 | 115. 郡東遺跡 |

第3図 寒風古窯跡群と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

る寒風古墳（7）と寒風古窯跡群から谷を隔てた南斜面に所在する中山古墳（11）がある。いずれも全長4m以内の小規模な横穴式石室を内部主体とする円墳である。昭和10年代の開墾により寒風古墳では石室が須恵器床であり、中山古墳と同様須恵質の陶棺が置かれていることが分かった。古墳の立地や寒風古窯跡群で焼かれた須恵器を副葬していたことから須恵器生産との関係を示す古墳であると考えられる。このように須恵器窯跡に近接する位置関係に古墳が築かれる例は、佐井田山窯跡（26）と本庄佐井田口1号墳（27）・2号墳（28）や邑久町尻海字サザラシに所在する新山2号窯跡と付近の新山1号窯跡・大堤窯跡・広高窯跡を含めた窯跡群とサザラシ1号墳。また、長船町柱山南麓の須恵器窯跡群と十二ヶ丘5号墳（窯廬副葬）や札崎古墳群（陶製無文當て具副葬）（第4図）などがあり、古墳被葬者の性格が、須恵器生産に関わるものであることを窺わせる貴重な例であることが指摘されている。（註4）

長浜地区に集中して古墳時代後半を中心とする遺跡として、土器製塩遺跡がある。丘陵裾部から海浜部には小規模な製塩遺跡が、錦海湾を取り囲むように分布する。その中で、錦海湾の南東部、現在牛窓町牛窓鷹楽の集落が立地する東西約400m、南北250mの範囲が鷹楽遺跡（115）である。鷹楽遺跡は昭和3～4年（1928～29）と昭和6年（1931）、水原岩太郎・時實然木・刈屋栄昌・長瀬薰ら4名による発掘調査が行われ多量の粗製土器が発見された。これらの粗製土器は出土地の地名から「鷹樂式土器」と命名された。その後、1930年代にかけて、時實氏らにより十数ヵ所の発掘や分布調査が行われ、水原岩太郎編纂による『鷹樂式土器図録』が刊行され、鷹樂式土器の形態・分布・年代・性格に関する論考が展開された。（註5）当時これらの粗製土器は海との関係が深いことは指摘されていたが、製塩に伴う土器との理解には至っていないかった。後、1950～60年代に、近藤義郎氏を中心とする香川県喜兵衛島遺跡群の発掘調査と土器製塩法の実態解明により、鷹樂式土器が製塩土器であることが明らかにされた。「鷹樂式土器」という製塩土器の名残遺跡としての鷹樂遺跡の学史的意義は大きい。（註6・7）瀬戸内市海岸東西で作業条件に大差ないエリアの備前市片上から瀬戸内市虫明地域まで、岡山市宝伝地域での製塩遺跡は皆無に等しい状況であり、長浜地区での製塩遺跡の集中する現象の背景には、海域諸集団内部で土器製塩に特化するグループと漁労と海運に特化するグループに分化し集約性の向上を

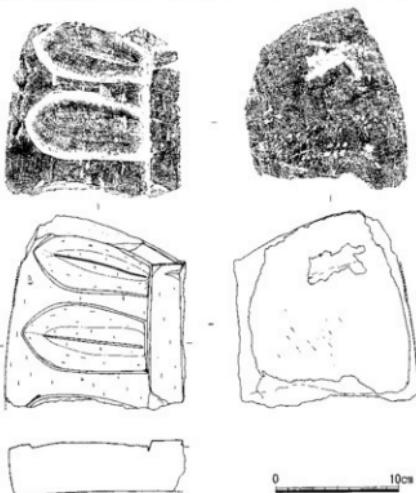


第4図 札崎古墳群出土陶製無文當て具（1/3）（文献2）

図り、生産拡大を実現した分掌体制であると想定されている。(註8)

さらに、6世紀中葉以降の瀬戸内市で特筆すべき遺跡は、窯まれた陶土と専用を拂して焼かれた、約130基もの数を有した須恵器生産遺跡である邑久古窯跡群の存在である。邑久古窯跡群の開始は、現在確認されている長船町土師の桂山北側に派生した舌状丘陵端部所在した木鍋山1号窯跡の6世紀中葉からである。木鍋山1号窯跡は昭和54~56年(1979~1981)にかけて長船運動広場(現:長船スポーツ公園)の造成に伴い全面発掘され、邑久古窯跡群の須恵器窯の中で窯の全容を知ることできる唯一の遺構である。規模は全長8.2m、焚口幅1.2m、焼成部最大幅1.9mを測り、傾斜角度は15°の地下式の窯窓であった。(註9・10) 6世紀後半からは生産地を桂山の南に移動し長船町西須恵地域を範囲として数を増やしていく。邑久古窯跡群の拡大は7世紀代の飛鳥時代をピークとし、長船町西須恵地域から美和神社の立地する広高山を超え邑久町本庄・庄田・尻海の南面する丘陵斜面、さらに南の丘陵を超えて長浜地域にも生産地を拡大し、数も増え操業を本格化させる。この時期の代表的な窯が寒風1~3号窯跡(1~3)や邑久町庄田の新林(宮崎)窯跡(4)、牛窓町長浜の切明窯跡(9)である。新林(宮崎)窯跡は岡山ブルーラインの工事に伴い発掘調査が行われた。窯は丘陵端部に位置し、規模は全長約12m、焚口幅1.8m、焼成部最大床幅2.2mを測る地下式の窯窓である。床面の傾斜角度は20°前後、2面の床面が確認されている。出土遺物は、壺・杯・高杯・壺の他、寒風古窯跡群と近似する須恵質陶棺や鶴尾が出土しており注目される。(第5図、註11)その後、8世紀代になると西須恵地域での窯の操業はほぼ終わり、瀬戸内海に隣接する海側エリアや邑久町尻海・福谷地域、備前市南部の内、佐山・亀戸地域に展開していく。この時期の代表的な窯が奥更谷窯跡(52)である。奥更谷窯跡も新林窯跡と同様、岡山ブルーラインの工事に伴い発掘調査が行われた。窯は丘陵斜面の尾根線上にはほぼ直交し、規模は残存長約4.7m、平均幅1.3mを測る地下式の窯窓が想定されている。出土遺物は、低い基石形のつまみが付く蓋・貼り付け高台を有する杯、壺または壺のみである。(註12) 寒風古窯跡群周辺の須恵器生産も平安時代になると衰退化し備前市佐山南部の竜王山北斜面を中心とした新たな地域へ移動し、さらに平安時代後半には長船町磯上地域へ大きな移動が行われ、油杉窯跡群では新たな器種である碗を中心に焼かれている。古墳時代後半から平安時代後半にわたり、瀬戸内市と備前市の2市にまたがる南北約10km、東西約8kmの範囲内で操業された須恵器生産は終焉を向かえる。その後、平安時代末の12世紀には伊部地域で備前焼として新たな展開をしていく。(註13~16)

文献資料によると古代、長浜地区の旧奥浦村には「津なし」の小字がある。地名のとおり「津がない。すなわち港がないことを示し、邑久郡を構成する15の郷の一つ桔梨郷(『和名抄』では桔梨郷)に比定され



第5図 新林(宮崎)窯跡出土鶴尾(1/4)(文献3)

ている。また、『延喜式』によると備前国の中の品目に綿糸・塙のはか須恵器があり、生産地として寒風古窯跡群を含む邑久古窯跡群との関係が考えられる。

古代宋の遺物として、寒風古窯跡群から北東約1kmの邑久町尻海に所在する大土井八幡宮境内の経塚内から出土したと伝えられる瓦製砧形外筒がある。全形は、底部を欠く壺状の体部に上部が細口状に延び上端部を欠く。体部外面に上位と下位に横位の籠状貼り付け突帯と横位の突帯を繋ぐ4本の籠状貼り付け突帯により4つの区画をつくり、その3区画に焼成前の焼成による願文が施される。「承徳二年九月廿五日」から1098年の11世紀末に特定されるもので、遺物の性格と共に時期が特定できる基準資料として貴重な資料である。(第6図、註17)

中世遺跡について、遺跡はほとんど不明である。その中で辻の山貝塚(105)は、長浜西浜地区から南西に約300mの丘陵斜面に長さ約10m、厚さ約50cmでハイガイを主とする貝塚が露出しており、東播系の捏鉢が採集されている。(馬場)



第6図 大土井八幡宮境内出土瓦製砧形外筒(1/6)
(文献4)

註

- (1) 亀山行雄「長浜・用本遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』24 岡山県教育委員会 1994
- (2) 亀田修一「長浜・用本遺跡」「牛窓町史」資料編Ⅱ 牛窓町 1997
- (3) 牛窓町教育委員会編「牛窓町古墳図」牛窓町 2002
- (4) 亀田修一「新山2号窯跡・サザシ1号墳」「邑久町史」考古編 淀戸内市 2006
- (5) 水原岩太郎「防衛式土器図録」1939
- (6) 近藤義郎「藤原遺跡」「岡山県史」第18巻考古資料 岡山県 1986
- (7) 亀田修一「御来道跡」「牛窓町史」資料編Ⅱ 牛窓町 1997
- (8) 大久保哲也「土器製塙」「邑久町史」考古編 淀戸内市 2006
- (9) 江見正己「木鍋山遺跡発掘調査」「岡山県埋蔵文化財報告」11 岡山県教育委員会 1981
- (10) 江見正己「木鍋山1号窯跡」「長船町史」史料編(1) 長船町 1998
- (11) 伊藤元「薪林(首崩)窯跡の発掘報告」「邑久町教育委員会・東播西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会」1974
- (12) 菊原克人「奥東谷古窯址の調査報告」「邑久町教育委員会・東播西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会」1975
- (13) 小林博昭・白石純・亀田修一・若松拳史「考古」「牛窓町史」資料編Ⅱ 牛窓町 1997
- (14) 亀田修一「原始・古代」「牛窓町史」通史編 牛窓町史 牛窓町 2001
- (15) 亀田修一「邑久古窯跡群」「邑久町史」考古編 淀戸内市 2006
- (16) 山本悦臣「寒風古窯址群 -須恵器から備前鏡の誕生へ-」 吉備人出版 2002
- (17) 岡田博「その他の遺跡出土の古代遺物」「邑久町史」考古編 淀戸内市 2006

参考文献

- (1) 亀田修一「長浜・用本遺跡」「牛窓町史」資料編Ⅱ 牛窓町 1997
- (2) 亀田修一「西山・札崎古窯跡」「長船町史」史料編(上) 長船町 1998
- (3) 亀田修一「新林(宮崎)窯跡」「邑久町史」考古編 淀戸内市 2006
- (4) 奈良国立博物館編「経緯漢宝」東京美術 1977

第2章 調査の経過及び体制

第1節 調査に至る経緯

時實默水氏と寒風古窯跡群

寒風古窯跡群の調査研究と保護保存の経緯について、地元郷土史研究者の時實和一（雅号：黙水）氏を抜きには語れない。時實氏は、明治29年（1896）4月29日、邑久都長浜村（現：瀬戸内市牛窓町長浜）小津4348番地、時實重三郎の次男として生まれる。幼くして病弱で、体格的にも小柄であり、就将小学校尋常科・邑久高等小学校3学年を卒業後は、家業の農業に従事する傍ら、長年の農業で鍛えられた足腰と抜群の記憶力でその非凡な才能を発揮した。時實氏は多くを語ることを好まず、口元には微笑をたたえ物静かに会話をした。よって自らを「黙水」（もくすい）と号した。

黙水氏と須恵器との関わりについて黙水氏は『オクノカマアト1』の中で「ワタクシワ 子供ノ時 サブカゼ ノ山ヤ 道端ニ轉ガツテイル 潤山ノ ヤキモノ ノ カケラニ 心ヲヒカレ サブカゼ ニ行ク度ニ コレヲ モテアソビ アキレバウチワリナゼステル惡童デアリマシタ 大キナモノ ノ ウチガワニ 同心円ノ 打文ガアル ノヲ フシギ ニオモイマシタ」と回想しており、自宅から北へ約1kmに位置する寒風古窯跡群や山の谷間に多く散布する須恵器の破片に触ることから始まるようである。（註1）その後、昭和2年（1927）正月、31歳の時、長浜地区の氏神である大土井八幡宮参拝の帰路、寒風古窯跡群の路上で、須恵器のつまみ付き杯蓋1個を採集し、次第に学識を深め、昭和4年（1929）寒風古窯跡群の一区画の所有権を得て本格的に発掘調査を行った。黙水氏の考古学の原点は寒風古窯跡群の須恵器片であった。（註2）

黙水氏の研究活動は遺跡の現地踏査を主とし、瀬戸内市内を中心とし、邑久郡内の須恵器窯跡を訪ね資料の採集を行った。遺跡踏査の風貌は「黙水スタイル」と呼ばれる独特の身なりで、服装は黙水氏考案で、木綿一反から二着分作ることができる経済的で便利な衣装として、襟付きの前ボタン止めの長袖シャツ風にベルト付巻きスカート風の上下一体となつた黙水氏手作りの服であった。肩から斜めに布製のショルダーバッグ、腰にキンチャク状のポシェット、ひさし付の帽子、夏は草履履き、冬は半長靴である。手には応急の土掘りとなる杖の姿である。ショルダーバッグは採集した遺物入れであるが、中には拡大鏡、地図、記録のための鉛筆、新聞広告の裏面の白紙を畳んだ手作りのメモ帳、ポシェットには金平糖やチチボーロ菓子・みかん数個が入れられていた。（写真1、註3）



写真1 時實默水氏の備前焼陶像
(寒風陶芸会館中庭)

遺跡の踏査や資料採集の結果については、昭和3年（1928）12月に会則が定められ「考古談話会」から名称が改称された「岡山考古会」に32歳の時から参加し、昭和5年（1930）には会名が「吉備考古会」と改称された、機関紙『吉備考古』第20号～第25号、第27号～第29号に「土器ト窯址ニ就テ」を発表し、須恵器甕の車輪文や須恵器の器種などについて報告している。（註4～12）「吉備考古会」では、水原岩太郎・玉井伊三郎・佐上静夫・永山玄石（卯三郎）・桂又三郎・妹尾蔵谷・伊東忠志・佐藤美津夫・御船恭平・大本琢寿・長瀬薰（写真2、註13）などとともに岡山県考古学会の草分けとして活躍に活動した。（註14）



写真2 高砂山古墳群で休む時實黙水氏（左）と長瀬薰氏（右）

特に、寒風古窯跡群を初めとする邑久古窯跡群での研究成果は昭和15年（1940）以降、昭和21年（1946）まで5冊の「オクノカマアト」（大伯ノ窯址）として窯記号の入りの須恵器・甕・鉢・円面鏡を集めした資料集を自費出版している。（註1・15～18）

黒水氏により採集された遺物は「時實コレクション」と呼ばれ、数万点に及ぶ膨大なもので、遺物には遺跡名や採集年月日が註記されている。また、寒風古窯跡群からの須恵器には出土年月日、出土地の地番とともに地表からの深さなどが克明に註記されており、どの窯に伴う資料であるか知ることができ、資料の学術性を高めている。（写真3）戰前に採集された遺物の多くは、昭和19年（1944）

3月28日に開館された総社市山手村の吉



写真3 詳細に註記された「時實コレクション」

備考古館に寄託され公開されている。戦後に採集された遺物は、近年までは牛窓町民俗文化資料館に所蔵され公開されていたが、現在はその一部が寒風陶芸会館で公開されている。(註19・20・21)

昭和30年(1955)牛窓町文化財専門委員に任命され遺跡重要性と保存について地道な活動を行ってきた。昭和52年(1977)岡山県文化財保護協会賞受賞。昭和53年11月3日、黒六等瑞宝章を授章。平成5年(1993)6月13日死去。享年97歳。(註22・23・24)

寒風古窯跡群の調査・研究経過

昭和4年(1929)時實黒水氏による1号窯跡群灰原の発掘以降、昭和53年(1978)の寒風古窯址群緊急調査委員会による発掘調査が行われるまでの49年間は基本的に黒水氏による発掘と遺物採集が行われ、成果の公表と遺跡の保護が行われた。黒水氏の採集須恵器に註記された地番によると寒風5136の1号窯跡群、寒風5139・5140番地の1号窯跡群灰原、寒風5144・5145・5146番地の散布地(工房跡?)、寒風5148番地の2号窯跡・2号窯跡灰原から多く採集されている。(註22)黒水氏の報告した文献の中で、『吉備考古』20号の「土器ト窯址ニ就テ」は窯内面の当て具痕の細かい観察により車輪文に注目し集成を行っている。(註4)また、「オクノカマアト1(大伯ノ窯跡其一)スエノウツツモノノシリシ(須恵器記号集成)」では須恵器のヘラ描きされた記号(一部文字を含む)の集成と長浜村・本庄村・玉津村・蓑掛村・美和村・国府村(以上現:瀬戸内市)、鶴山村(現:備前市)に及ぶ全43基の須恵器窯跡の分布図と地名表が掲載され、永年の地道な現地踏査による邑久古窯跡群の分布概要が初めて公表された。(註1)

黒水氏による調査が行われている間、昭和9年(1934)~10年(1935)頃、寒風古窯跡群の位置する標高40~60mの丘陵が葉タバコや野菜畑としてまた、栗や柿の果樹畑として開墾された。その際、多量の遺物とともに「舟形に焼けた所(窯跡)」と記録が残る、焼成を受けた1号窯跡群の窯体部が露出していたようである。また、2号窯跡では「窯の段」と呼ばれる窯の前提部から灰原に続く窯地があったようで、灰や須恵器片が堆積した包含層は約180cmの深さに及んでいたそうである。(註25)また、昭和10年(1935)2月にはすでに墳丘と天井石が取り除かれて埋没していた寒風古墳の横穴式石室内が掘られ、床面に須恵器片が敷かれた須恵器床に置かれた陶棺1個と台付壺1点が出土している。昭和10年2月10日に撮影された写真によると、須恵器床の上に側壁と底部の一部を欠く陶棺が置かれていたことを確認することができる。陶



写真4 寒風古墳横穴式石室内陶棺出土状況
(昭和10年2月10日撮影)

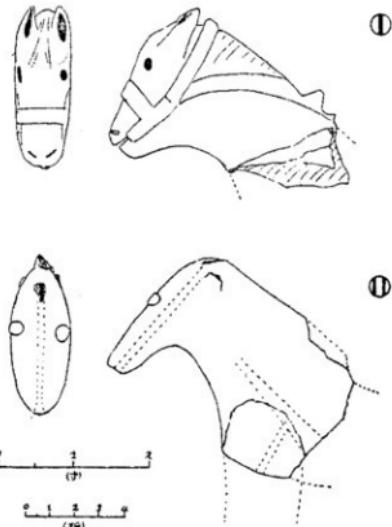
棺の底部には短側辺に写真では2列しか写っていないが、その後確認された横穴式石室の幅から陶棺の大きさを判断すると3列の円筒形脚を有していたと想定される。(写真4、註25)

昭和29年(1954)5月と11月に内藤政

恒氏は黒水氏を訪ね、寒風古窯跡群で採集した遺物を調査した。その中で1号窯跡群の灰原から採集された陶馬と鶴尾のミニチュア土製品の紹介と考察を行った。(註26)2点の陶馬はいずれも頭部のみの破片であるが面長な馬の特徴をとらえた土製品で、一つは、鼻革や手綱を粘土紐で作りつけたものである。陶馬は、その後、昭和56年(1981)寒風釜場池遺跡の発掘調査からも1点出土しており同遺跡との関連性が窺われる。(第7図)

次に続く研究として考古学者西川宏氏(1930~2007)による研究があげられる。西川氏は瀬戸内市・備前市・和気町内の須恵器窯跡からの表探資料による型式設定を行い、寒風古窯跡群では西川氏が寒風1号窯跡と呼んだ2号窯跡灰原資料を基準に寒風1式を設定し、それを飛鳥時代に位置づけるなど岡山県の須恵器編年 第7図 寒風古窯跡群1号窯跡群灰原採集陶馬(1/2)(文献1)の基礎を築いた。(註27)さらに、西川氏が寒風3号窯跡と呼んだI-1号窯跡灰原資料を基準に寒風3式を設定し、それを白鳳時代に位置づけた。(註28)その後、寒風古窯跡群の資料を用いて邑久古窯跡群を中国・四国地方並びに吉備の須恵器窯の中に位置づけ、その形成と展開を略述した。(註29)

昭和52年(1977)11月に発表された「寒風陶芸の里整備構想」は、「岡山県総合福祉計画」の中で「東瀬戸内海洋レクリエーション都市基本計画」という大形地域開発のモデルケースである。計画は瀬戸内海の風光明媚な地域特性を生かした未来志向型の海洋性レクリエーション都市を整備するものであり、西日本有数の須恵器窯の寒風の地をレクリエーション都市の中心基地として整備する錦海塩田跡地との有機的な関連のもとに異色ある陶芸の里として整備するものである。そして、古窯跡の保存をはじめ出土品の顕彰を行う他、全国各地から誘致する陶芸家に対し、創作活動の場所を提供するとともに来訪する人々に対し、焼物の試作と研究、鑑賞の場を提供することなどにより、地域における産業の振興と文化の発展に寄与しようとするものであった。この構想に対して西川氏は、寒風古窯跡群の実態とその価値や重要性について述べるとともに、窯跡は、窯本体とその下方に広がる灰原、またその付近にある成形・乾燥等の作業場と工人の住居及び粘土採掘場などの一連の遺構群より成り立つものであり、これらの遺構群が面的な広がりをもち、寒風古窯跡群は陶棺を含む複合遺跡であることを指摘した。その中で、構想が邑久古窯跡群の中心的存在である寒風古窯跡群のど真ん



第7図 寒風古窯跡群1号窯跡群灰原採集陶馬(1/2)(文献1)

中を対象にしており、窯業遺跡破壊の危険性と今後の開発が遺構保存を最優先に開発区域の線引きをすべきとの展望が示された。(註22)

昭和53年(1978)1月13日、牛窓町は「寒風陶芸の里」構想整備を進める中、国の重要遺跡にリストアップされていた寒風古窯跡群の基数の確認、範囲、並びに窯跡と直接関連を持つ周辺の須恵器散布地の調査を行い、遺跡の性格を立体的に把握し、国指定史跡申請のための資料を得るために「寒風古窯跡群緊急調査委員会」(委員長: 小野啓三岡山県教育委員会教育長) 並びに、調査団(調査団長: 近藤義郎岡山県文化財保護審議委員) を発足し、同年1月14日~20日に寒風古窯跡群周辺の踏査、1月26日~2月2日に磁気探査、2月14日~28日に邑久古窯跡群の分布調査、3月6日~20日に寒風散布地の遺構の確認、1号窯跡群付近の遺構の保存状況と基数の確認、磁気探査の実証を兼ね13本のトレンチ調査を行った。この調査は、昭和4年(1929)、黙水氏による確認調査以来49年後に初めて学術的な発掘調査が行われたもので、磁気探査により1号窯跡群で2基、2・3号窯跡で各1基の計4基の窯跡の位置、窯体の方位、規模等を明らかにした。また、寒風散布地からは窯と同時期と考えられる3基の堅穴遺構と2条の溝状遺構を確認した。堅穴遺構の1基からは粘土塊が出土しており工房跡の可能性が指摘された。さらに黙水氏によりすでに2基の存在が想定されていた1号窯跡群のI-II号窯跡に伴う灰原に設定したトレンチから口縁部受け部にかえりを有する杯とかえりを持たない蓋がセットとなるA類と、口縁部にかえりを持たない杯とかえりを持ち宝珠状のつまみを付ける蓋がセットとなるB類とを含み、西川氏により寒風1式とされた須恵器で構成されることが明らかになった。このことにより従来、1号窯跡群の灰原で大量に採集されている口縁部にかえりを持たず基石状の扁平なつまみを付ける蓋と底部が平坦で高台を有する杯がセットとなるC類(西川氏により寒風3式とされた須恵器)は、1-I号窯跡に伴うことが明らかになった。以上、1号窯跡群の操業年代順が明らかにされ、また、寒風古窯跡群の面的な広がり、遺構の残存状況、操業時期も飛鳥時代を中心とする約100年間の長期にわたるなど具体的になった。(註30)

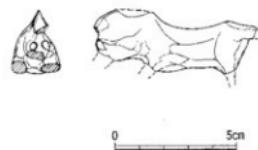
昭和54年(1979)2月16日~24日には岡山県教育委員会により前回トレンチ調査が実施できなかつた堅穴遺構が検出された寒風散布地に南面する箇所(寒風5145番地の2)に5ヶ所のトレンチを設定し確認調査を実施した。この調査では、寒風散布地に近接するトレンチからは須恵器が多く出土したが、堅穴遺構は確認されなかった。また、寒風古墳の横穴式石室の奥壁延長上に設定されたトレンチでは周溝など古墳に関連する遺構は確認されなかった。(註31)

昭和55年(1980)奈良文化財研究所飛鳥資料館の特別展示「日本古代の鶴尾」にちなみ展示品を中心に全国的に調査・集成され飛鳥資料館叢録として編纂された。この中で、200点を超える寒風古窯跡群から採集された鶴尾の鱗部の文様を指標として大きく4型式(A~D型式)に分類し、さらにその文様の違いにより細分された。A型式2種類・B型式6種類・C分類7種類・D型式1種類と16種類にものぼる多種多様の文様を有する鶴尾が製作されている概要が示された。(註32)

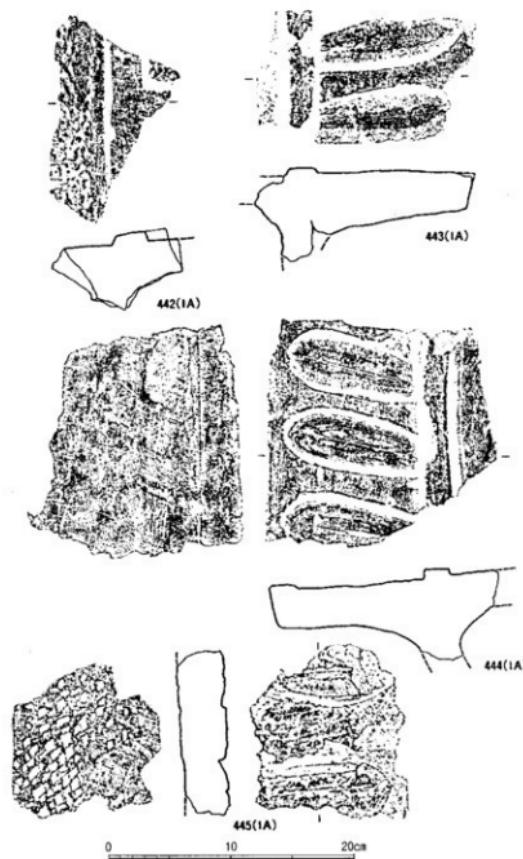
寒風古窯跡群の直接な発掘調査ではないが、昭和56年(1981)1号窯跡群から西へ約230mの笠場池北側の標高55mの斜面(牛窓町長浜5104番地)で現代備前焼陶芸家の築窯作陶器場の造成工事計画がなされた。工事立会中住居跡らしい遺構や須恵器出土箇所を確認したことから、寒風笠場池北遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会(委員長: 森隆牛窓町教育委員会教育長)を組織し1月9日~1月29日まで発掘調査が行われた。調査の結果、住居跡状遺構1基、溝状遺構1条、楕円形土壙2基、不整形土壙及び柱穴状土壙10基などが検出された。住居跡状遺構は平面形が方形で一边290cm、深さ70cmを測る。

柱穴は検出されなかった。窯跡と直接関係する遺構は検出されなかつたが、特異な遺物として溝状遺構から陶馬が出土している。馬具などの表現は無い裸馬であるが目・たてがみ・背など馬の表現がなされている。馬に関わる遺物は官的機関の遺跡や雨乞いなど水に関わる遺構からの出土が多く、律令的祭祀に関わる遺物と考えられてゐる。また、出土遺物は寒風古窯跡群の操業時期と重複しており、極めて隣接した地点に立地していることから寒風古窯跡群と関連性のある遺跡であることが指摘された。(第8図、註33)

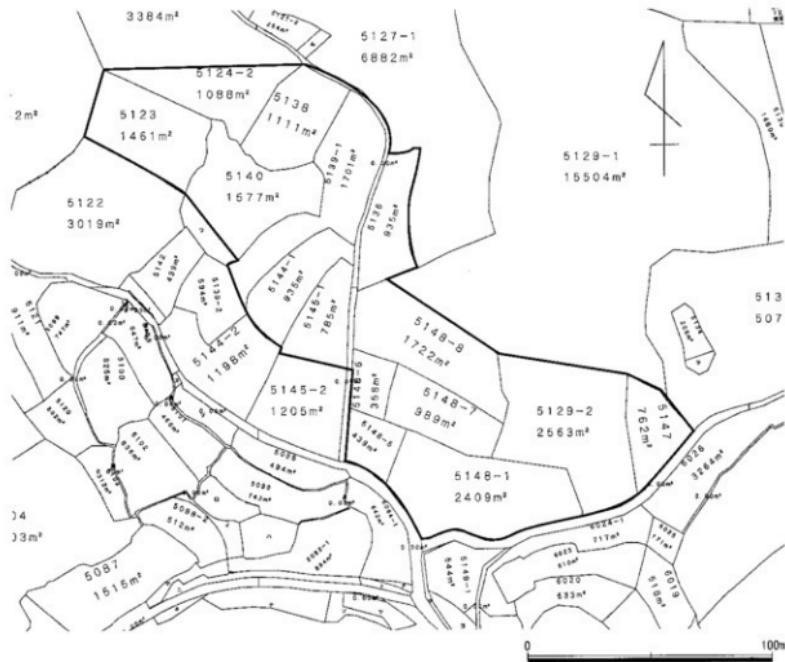
平成13年(2001)白石純氏は、文献史料により邑久古窯跡群から当時の都へ運ばれていたことは指摘されていたが、平城宮で出土した須恵器で形態・製作技法及び胎土、焼成などの特徴から寒風古窯跡群で生産されたと考えられる須恵器を肉眼観察により選定し、蛍光X線分析法という理化学的な手法により須恵器の胎土分析を行った。分析では寒風古窯跡群と同様に平城宮へ貢納された須恵器を生産した大阪府の陶邑古窯跡群、岐阜県の老洞古窯跡群・尾崎人平1号窯跡の須恵器と比較し生産地の特徴を調べた。その結果、平城宮から出土した須恵器の中に寒風古窯跡群含む邑久古窯跡群の胎土分析分布領域に含まれるもののが認められ理化学的分析により産地が特定された。また、大阪府細工谷遺跡から出土した鶴尾を寒風古窯跡群・新林(宮端)窯跡出土の鶴尾と比較したところ、細工谷遺跡出土の鶴尾も寒風



第8図 笹塙池北遺跡出土陶馬(1/2)(文献2)



第9図 大阪府細工谷遺跡出土鶴尾(1/4)(文献3)



第10図 史跡寒風古窯跡群地籍図 (1/2,000)

古窯跡群・新林(宮崎)窯跡を含む邑久古窯跡群で生産されたものであることが科学的に分かった。(註34)

平成14年(2002)6月、史跡地に隣接する寒風古墳の西側(寒風5145番地の2)で現代備前焼作家の篠窯工事に伴い、掘削断面に竪穴状造構の断面を確認した。規模は上幅290cm、下幅230cm、深さ70cmを測り、床面はほぼ水平を呈した。

半成14年には山本悦世氏により寒風古窯跡群の解説書が発行された。吉備地域の焼き物の歩み、寒風古窯跡群の研究史・概要・成果・現状に触れ、邑久古窯跡群の変遷、須恵器の概説から変遷、備前焼への成立過程など多岐にわたり解説し、日本が古代律令国家に向かい始めた時代の中で操業が行われた寒風古窯跡群の地域的・時代的背景について論じられた。(註35)

平成19年(2007)奈良文化財研究所が実施・協力した遺跡探査の事例紹介がなされ、寒風古空跡群について平成16年度に実施した2号窯跡周辺の磁気探査、電気探査、GPR探査の概要が紹介された。(註36)(馬場)

七

- (1) 時實和一「オクノカマトイ「大伯ノ廻路其」スエノウツモノノルシ(須恵器記号集成)ミモザカイ 1940
 (2) 胡楊木「猛蒼翁上記記」牛忠春秋18 牛忠春秋会 1984
 (3) 然水氏の購入した地番は、東京139番地であり、寒風丸池町斜面で1号廻路の原野部分にある。

- (4) 時實黒水「土器ト窯址ニ就テ」『吉備考古』20号 吉備考古会 1934
- (5) 時實黒水「土器ト窯址ニ就テ」(承前)『吉備考古』21号 吉備考古会 1934
- (6) 時實黒水「土器ト窯址ニ就テ」『吉備考古』22号 吉備考古会 1934
- (7) 時實黒水「土器ト窯址ニ就テ」『吉備考古』23号 吉備考古会 1934
- (8) 時實黒水「土器ト窯址ニ就テ」(承前)『吉備考古』24号 吉備考古会 1935
- (9) 時實黒水「土器ト窯址ニ就テ」(承前)『吉備考古』25号 吉備考古会 1935
- (10) 時實黒水「土器ト窯址ニ就テ」(承前)『吉備考古』27号 吉備考古会 1935
- (11) 時實黒水「土器ト窯址ニ就テ」(承前)『吉備考古』28号 吉備考古会 1936
- (12) 時實黒水「土器ト窯址ニ就テ」(承前)『吉備考古』29号 吉備考古会 1936
- (13) 時實黒水の妹である長瀬麗氏は(明治26年5月8日~昭和45年2月14日)、洋服業のかたわら邑久郡内(現:瀬戸内市)を中心に研究活動を行い、門田貝城、高砂山古墳群などの数多くの遺跡の発見や遺物の収集につとめた。昭和11年(1936)1月24日、邑久町公設市場の附上に、門田貝城の出土品を中心に採集品約2,000点を展示した、両山県最初の私設の考古館である邑久考古館を開設。昭和41年(1966)10月8日、邑久考古館開設30周年を機に収蔵品約28,000点すべてを邑久町に寄贈し、長瀬氏は、町立邑久考古館長として同郷の協力者の川崎勝氏と共に両山県考古学会に重きをなした。
- (14) 近藤義郎「岡山県における考古学研究の歴史」『両山県の考古学』 吉川弘文館 1987
- (15) 時實和一『オクノカマアト2』 スエノウツワモノノットテ ミモザカイ 1941
- (16) 時實和一・『大伯ノ窯跡3 台形須恵器』 ミモザカイ 1944
- (17) 時實和一・『大伯ノ窯跡4 コシキ型須恵器』 ミモザカイ 1944
- (18) 時實和一・『大伯ノ窯跡5 円形陶祝』 ミモザカイ 1946
- (19) 松本幸男「時實和一氏の吉備考古館出品物について」『牛窓春秋』創刊号 牛窓春秋会 1982
- (20) 松本幸男「寒風占窯跡群」「牛窓春秋」36 牛窓春秋会 1988
- (21) 松本幸男 時實和一氏 都郡郡山手村吉備考古館出品目録1 寒風5139番(窯址灰原)出土品」「牛窓春秋」58 牛窓春秋会 1993
吉備考古館へ寄託されている須恵器の内、1号窯跡灰原採集の年月日は、黒水氏が寄託するため作成した遺物カードを整理した松本幸男氏の記録によると昭和7年(1932)3月13日から始まり昭和19年(1944)1月2日までの12年間に亘り採集された遺物であることが分かる。
- (22) 西川 宏「寒風陶芸の里整備構想と窯業遺跡の危機」『考古学研究』第24巻第2号 考古学研究会 1977
- (23) 馬場昌一「邑久考古学の先駆」『邑久町史』考古編 瀬戸内市 2006
- (24) 伊藤 晃「須恵器と備前焼研究四方山話2(時實黒水と桂又三郎)」 2007
- (25) 野口ひろ嘉人編『長浜村誌』続編 長浜村誌編さん委員会 1977
- (26) 内藤政徳「岡山県寒風窯址出土の一、二の遺物について」『考古学雑誌』41の1 日本国考古学会 1966
- (27) 西川 宏「備前における須恵器の編年的研究-古墳時代-」『岡山県私学紀要』2 岡山県私学協会 1966
- (28) 西川 宏「窯業」、(5) 瀬戸内「日本の考古学」IV歴史時代(七) 河出書房新書 1967
- (29) 西川 宏「備前の古窯」古代の日本、第4卷 中國・四国、角川書店 1970
- (30) 山鹿康平「寒風古窯址群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 27 岡山県教育委員会 1978
- (31) 山鹿康平「寒風分布地図認定査定概要」岡山県教育委員会 1979
- (32) 猪熊兼勝・大畠潔・松本修子・津村志広「日本古代の鶴尾」奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980
- (33) 江見正己「寒風井場池北遺跡」井場池北遺跡州藏文化財発掘調査委員会 1982
- (34) 白石純「科学が語る須恵器・瓦(鶴尾)の移動」『牛窓町史』透史編 牛窓町 2001
- (35) 山本祝世「寒風古窯址群-須恵器から備前焼の誕生へ-」吉備人出版 2002
- (36) 金田明大・西村康「埋蔵文化財ニュース127 遺跡探査の実際」奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2007

参考文献

- (1) 内藤政徳「岡山県寒風窯址出土の一、二の遺物について」『考古学雑誌』41の1 日本国考古学会 1966
- (2) 江見正己「寒風井場池北遺跡」井場池北遺跡州藏文化財発掘調査委員会 1982
- (3) 同村勝行ほか「福工谷遺跡発掘調査報告」I 財团法人大阪市文化財協会 1999



写真5 寒風古窯跡群の寒風古墳付近で水野正好氏（当時：文化庁調査官）（右から1人目）へ説明する時實黙水氏（右から2人目）
（昭和53年3月7日 山廢康平氏撮影・提供）

第2節 調査の経過と体制

調査の経過

昭和53年「寒風古窯跡群緊急調査委員会」並びに、調査団による確認調査の成果を受け、昭和60年1月17日付けで牛窓町は史跡名勝天然記念物の指定申請を行った。

昭和61年（1986）2月5日、寒風古窯跡群が「出土遺物の製作法は非常にすぐれているものが多く、平城宮跡からも本蘆原の須恵器が出土している。また、須恵器は、吉備地方における須恵器編年の標識にもなっており学史上に高い価値を有する」として国の史跡に指定された（指定面積19,015m²）。

その後、史跡の保存と活用を図るため、指定地の公有化を進めていった。

平成元年度、史跡地内の民有地を一部公有化する（公有化11,341m²、残民地5,917m²）。

平成14年度、史跡地内の民有地を一部公有化する（公有化3,508m²、残民地2,409m²）。

平成15年（2003）5月26日、牛窓町は史跡の保存・公開・活用を図るための事項について検討するため、「史跡寒風古窯跡群整備委員会」（委員長：河本清くらしき作陽大学教授）を設置し、委員会の指導のもと調査・報告書作成等の事業を実施した。

平成16年（2004）11月1日、旧邑久郡の牛窓町・邑久町・長船町が合併し瀬戸内市が誕生した。

平成16年度、史跡地内の民有地を一部公有化（公有化2,409m²、残民地0m²）し、指定地全域の公有化を終える。

平成16年度から国庫補助事業の採択を得て、史跡寒風古窯跡群の保存と公開活用を図るため、発掘調査等により遺跡の価値を明らかにし、環境整備計画に必要な基礎資料を得るために、5カ年の計画で事業を実施した。

平成16年度

史跡地内の詳細な地形測量図が作成されていなかったため指定地19,014m²を標高差25cm間隔で1/200と1/500の地形平面図、3級永久基準点を史跡地周辺部へ3点設置。4級基準点を史跡地内へ5点設置した。

また、史跡地内の磁気探査については、昭和53年プロトン磁力計による磁気探査が実施されたが、今回、奈良文化財研究所に調査委託を行い、奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部の金田明大氏、（財）ユネスコ・アジア文化センターの西村康氏、兵庫県教育委員会の西口和彦氏により3月5日から13日までの間で5日間、丘陵部を除く史跡地内をフラックスゲート磁力計による磁気探査と2号窯跡をプロトン磁力計による磁気探査、電気探査、G P R探査を実施した。

調査日誌抄

- 平成17年3月5日～13日 丘陵部を除く史跡地内をフラックスゲート磁力計による磁気探査と2号窯跡をプロトン磁力計による磁気探査と電気探査。さらに1号窯跡群をG P R探査を実施。
3月21日 第2回史跡寒風古窯跡群整備委員会を開催。整備年次計画について協議。
平成16年度事業、磁気探査成果について報告。



写真6 1号窯跡群レーダー探査状況 (2005.3.13)

平成17年度（1次調査）

調査期間は、平成17年11月8日～平成18年1月27日。調査区20ヶ所。調査面積は85.0mf。1次調査では昭和53年・平成16年度に実施した磁気探査やレーダー探査結果を基に、2号窯跡の煙道の位置確認のためT1、窯体の位置規模確認のためT2～4、前庭部・灰原の位置規模確認のためT6・9・10・13～15、3号窯跡の窯体の位置規模確認のためT5・11・12、寒風古墳の横穴式石室の位置規模確認のためT8-a～d、寒風散布地内の堅穴遺構の位置確認のためのT7-a～cの調査区を設定し確認調査を実施した。また、史跡周辺部と調査区の空中写真撮影を実施した。調査区の掘下げは全て手掘りで行い、廃土は土網袋に入れ調査に影響しない地点へまとめて置き、調査後、人力による埋め戻しにより現状復旧を行った。この調査方法は3次調査まで同様に行つた。

調査日誌抄

- 平成17年11月8日 発掘機材を現場に運搬し、作業テントを設営。発掘調査開始。
- 11月8日～11日 T8-a の掘下げ寒風古墳の横穴式石室と周溝を確認する。2号窯跡の規模を確認するためT2・T3の掘下げ。
- 11月15日～19日 T8-a で寒風古墳の横穴式石室床面が文献にあるように須恵器甕片を敷き詰めた須恵器床が残存していることを確認。石室入口付近に設定したT8-bで須恵器杯3点、鶴尾片2点が出上。須恵器床の写真撮影、実測。周溝内遺物の写真撮影、実測。
- 11月22日～26日 T8-b で寒風古墳横穴式石室の平面プラン・規模を確認。T8-cで寒風古墳の周溝を確認。
- 11月29日～12月2日 T8の寒風古墳横穴式石室の須恵器床検出状況写真撮影。T2で2

- 号窯跡上層の窯天井落ち込みプランを検出。
- 12月1日 文化庁文化財保護部記念物課坂井秀弥主任文化財調査官現地指導で来
跡。
- 12月7日～10日 T8の寒風古墳横穴式石室の須恵器床の実測。T2で2号窯跡窯壁の掘
下げ。3面の窯壁を確認。T5で3号窯跡の壁面で窯体を検出。
- 12月9日 第3回史跡寒風古窯跡群整備委員会を開催。平成17年度事業について報
告。発掘調査状況について現地指導。
- 12月13日～16日 T5の3号窯跡窯体床面から壺・杯蓋・杯身出土。T1で2号窯跡の煙
道部を検出。T8-dで寒風古墳の周溝を検出。
- 12月18日 発掘調査現地説明会。参加者105名
- 12月20日～27日 T9・10で2号窯跡の前庭部、灰原を検出。T8寒風古墳の横穴式石室
の写真撮影。ラジコンヘリで調査区の空中写真撮影。
- 平成18年1月11日～13日 T14・15で2号窯跡の灰原を検出。T11で3号窯跡の煙道を検出。
- 1月17日～20日 T1・3・4・6・8の埋め戻し。T2の2号窯跡窯体内で杯蓋、壺出土。
T2で2号窯跡窯体内を床面まで掘下げ。
- 1月24日～27日 1号窯跡群灰原を5×5mのグリット（A～W）を設定し遺物を表採。
T2埋め戻し。T7-dで竪穴状遺構検出。各調査区の埋め戻し。
- 1月27日 作業テント、機材を撤収し現地での発掘調査終了。
- 平成18年3月18日 第4回史跡寒風古窯跡群整備委員会を開催。平成17年度発掘調査の概要
報告。平成18年度事業計画について協議。



写真7 史跡寒風古窯跡群整備委員会現地指導状況（2005.12.9）

平成18年度（2次調査）

調査期間は、平成18年10月19日～平成19年3月28日。調査区14ヵ所。調査面積は165.24m²。2次調査では昭和53年、平成16年度に実施した磁気探査やレーダー探査結果を基に、1号窯跡群の窯体の規模確認のためT18～20、煙道の位置確認のためT26～28、灰原の堆積状況確認のためT21・22、2号窯跡の焚口の位置確認のためT17、寒風散布地内の竪穴遺構の位置確認のためのT23・24-a・b・25-a・b・29の調査区を設定し確認調査を実施した。また、調査区の空中写真撮影を実施した。

調査日誌抄

- 平成18年10月19日～20日 発掘機材を現場に運搬し、作業テントを設営。発掘調査開始。調査区内の清掃作業。2号窯跡の上部遺構確認のためT17の掘下げ。
- 10月24日～28日 T16で2号窯跡上部に排水溝などの遺構がないことを確認する。寒風散布地内の工房跡の確認のためT23を設定し掘下げ。昭和53年の調査区第12トレンチを確認。
- 11月1日～8日 GPR探査で反応のあった1号窯跡群の規模確認のためT18・19を設定し掘下げ。
- 11月14日～23日 T23で昭和53年検出の竪穴遺構1の検出作業。T17の2号窯跡上層ゴミ穴の須恵器出土状況写真撮影。
- 11月28日～12月7日 T23の調査区北側で2ヵ所のたわみ状遺構を検出。T23で竪穴遺構1のプランの検出作業。
- 12月14日～23日 T18で土壤状の遺構底から完形の須恵器壺2固体と陶棺身片1点が出土。T19の1-I号窯跡で窯壁、1-II号窯跡で崩落した天井の窯壁を確認。
- 平成19年1月10日～1月14日 1号窯跡群の灰原の堆積状況の確認のためT21を設定し掘下げ。T18で上層状遺構の平面プランを確認するため掘下げ。T24で竪穴遺構はプランから2基の遺構は重なっていることを確認。T19の1-II号窯跡の天井崩落後の落ち込みの埋土中から方形の陶棺脚が出土。
- 1月16日～19日 T20で窯壁を検出し、1号窯跡群に新たな窯跡（1-III号窯跡）が存在することを確認。T19で1-I号窯跡、1-II号窯跡窯体内の掘下げ。
- 1月23日～25日 T20で1-II号窯跡の床面を検出。床面で出土した須恵器杯は1-II号窯跡で出土した杯より口径が大きく、杯身のかえりの立ち上がりが高く古様の特徴を示し、寒風古窯跡群で最初に採集を始めた窯であることを確認する。T19で1-II号窯跡床面にA類とB類の二種類の杯身がセットになった状態で出土。
- 1月26日 第5回史跡寒風古窯跡群整備委員会を開催。平成18年度事業内容について、発掘調査概要について報告。発掘調査現地視察、指導を受ける。
- 1月30日～2月2日 T19西壁で1-II号窯跡の天井部が残存していることを確認。1-I号窯跡の窯体の壁が2枚あることを確認。
- 2月4日 発掘調査現地説明会。参加者約100名。
- 2月6日～8日 1-I・1-II・1-III号窯跡の煙道を確認するためT26・27・28を設

定し掘下げ。各調査区で柵道を確認。昭和53年調査で一部確認された堅穴遺構3を確認するためT29を設定し掘下げ。ラジコンヘリによる調査区の空中写真撮影。

- 2月14日～17日 T21で1号窯跡群灰原の基盤面まで掘下げ。T19の1～II号窯跡床面で出土した遺物の実測作業。
- 2月20日～25日 T19の1～II号窯跡床面で遺物の実測、取り上げ。A類の杯身がセットなる杯はほとんどが杯身が上になるよう床面に置かれていることを確認。T18の1～III号窯跡上層の土壤内の甕・陶棺の取り上げ。T29で堅穴遺構3のプランを確認。
- 2月27日～3月3日 T29で堅穴遺構3と並行する溝状遺構を西側と北側で確認。堅穴遺構3の掘下げ。須恵器が多く出土。T21で1号窯跡群灰原の調査区中央部が幅4mにわたり崩落。
- 3月6日～10日 T21の1号窯跡群灰原の平・断面実測。T29の堅穴遺構3で壁体溝を検出。中央ピット内から完形の平瓶1点が出土。完掘状況の写真撮影。T23で堅穴遺構1の平面実測。調査区すべての掘下げ終了。
- 3月13日～21日 T19で1号窯跡群平面・土層断面実測。T29の堅穴遺構3の平・断面実測。T18の1～III号窯跡土層断面実測。
- 3月19日 上京し文化庁文化財保護部記念物課坂井秀弥主任文化財調査官へ調査要の報告と来年度の事業予定について指導を受ける。
- 3月23日～28日 T18の土壤内の甕2個体の取り上げ。さらに東壁面にもう1個体の甕が



写真8 T29堅穴遺構3調査状況（2007.3.1）

存在することを確認。各調査区の埋め戻し作業。作業テント、機材を撤収し現地での発掘調査終了。

平成19年度（3次調査）

調査期間は、平成19年11月13日～平成20年3月11日。調査区11ヵ所。調査面積は84.42m²。3次調査は当初計画が無かったが、1号窯跡群において新規の窯である1-I-II号窯跡の検出や焚口部を含む窯の長さや寒風遺跡（寒風散布地）内の竪穴遺構の確認が不十分であったため、昭和53年や2次調査の結果を基に、1号窯跡群での新規窯跡の有無について確認するためT30・34、1号窯跡群の焚口の位置確認のためT31～33、寒風遺跡（寒風散布地）内の竪穴遺構の有無確認のためT35・36、竪穴遺構3の周溝の位置・規模確認のためT29-a～cの調査区を設定し確認調査を実施した。また、調査区の空中写真撮影を実施した。

調査日誌抄

平成19年11月13日	発掘機材を現場に運搬し、作業テントを設営。
11月23日	調査区（T30～33・35・36）の設定。
12月4日～7日	T30～33の掘下げ。T32の1-I-II号窯跡埋土から鴨尾、陶片片出土。
12月12日～14日	1号窯跡群の灰原の広がりと新規窯の有無について確認するためT34を設定し掘下げ。T33の1-I-III号窯跡の焚口を確認。寒風遺跡での竪穴遺構確認のためT36を設定し掘下げ。
12月18日～21日	T31の1-I号窯跡埋土から円面鏡の脚台部片出土。焚口部から鴨尾片がまとまって出土。T32の1-II号窯跡前庭部で2条の溝を確認。T33の1-I-III号窯跡の焚口、前庭部を検出。
平成20年1月8日～9日	T31～33の焚口を確認するため調査区を拡張し掘下げ。寒風散布地での竪穴遺構確認のためT35を設定し掘下げ。2次調査で確認した竪穴遺構3の全形を確認するため東側にT29-aの調査区を設定し掘下げ。
1月18日～19日	T32の1-II号窯跡埋土中から鴨尾出土。T36で2カ所のたわみ状遺構を検出。たわみ1から多くの須恵器壺片出土。
1月22日～26日	T31で1-I号窯跡焚口の鴨尾と前庭部の黒灰炭層の検出作業。検出状況の写真撮影。鴨尾の出土状況の平面実測。T29-aで竪穴遺構3の周囲を巡る周溝と竪穴遺構内にある溝を検出。
1月31日～2月1日	T36のたわみ1・2の完掘。T32・33で前庭部の黒灰炭層の掘下げ。竪穴遺構3の周溝や方向を確認するためT29-b・cを設定し掘下げ。
2月5日～7日	1-I号窯跡の焚口部の幅を確認するためT31の北側に調査区（T31-a）を設ける。焚口部の内の鴨尾の取り上げ。鰐部に篆手状の文様を施すことを確認。焚口部、前庭部の写真撮影。
2月12日～16日	T31～33の平面実測。T32で1-II号窯跡の焚口部の床面まで掘下げ。焼けひずんだ壺片が溶着した状況で出土。T29-a～cで調査区の平面実測。
2月19日	第6回史跡寒風古窯跡群整備委員会を開催。平成19年度事業内容について、発掘調査概要について報告。今後の整備について協議。発掘調査現地視察、指導を受ける。

- 2月20日 ラジコンヘリでの空中写真撮影のため調査区内の清掃作業。T31の1-I号窯跡の土層断面実測。
- 2月21日 ラジコンヘリで調査区の空中写真撮影。1-I号窯跡の焚口部の幅を確認するためT31-aの調査区の掘下げ。
- 2月22日～29日 T29-a～c・30・34～36の埋め戻し。T31-aで1-I号窯跡の焚口部の北側を確認。現地説明会に向けて調査区内の清掃作業。
- 3月1日 発掘調査現地説明会。参加者約90名。T31-aの1-I号窯跡の焚口部の平・断面実測。T32の土層断面実測。一部発掘資材、出土遺物の搬出。
- 3月5日 T31・35の埋め戻し。寒風古窯跡群周辺部の窯跡や散布地の有無について踏査。切明窯跡で灰原を確認しC類の須恵器杯、甕片を表採。
- 3月6日 T32の1-II号窯跡の土層断面実測。前庭部黒灰炭層の炭化材試料のサンプリング。
- 3月11日 T31の埋め戻し。作業テント、機材を撤収し現地での発掘調査終了。



写真9 T31 1-I号窯跡焚口部鷄尾出土状況 (2008.1.24)

平成20年度

平成17～19年度の3ヵ年の発掘調査により得られた図面・写真及び出土遺物の整理については、調査を終えた段階から図面・写真の整理と出土遺物の洗浄・註記・分類・復元作業を進め、一部主要遺物についても図化を進めていった。また、毎年、寒風古窯跡群に隣接する寒風陶芸会館の5月連休に開催される寒風陶芸まつりに合わせ、寒風古窯跡群発掘速報展として前年度の調査の成果をパネルと遺物展示を行い公開していくった。

本格的な遺物の整理と図化については平成20年度から実施していくた。市教育委員会での十分な整



第11図 寒風古窯跡群トレーンチ配図図 (1/1,250)

理体制がとれない状況の中、本報告書では窯体内や宋風古墳、窓穴遺構3など遺構出土遺物を中心に資料報告を行い、1号窯跡群の灰原や各窯の埋土からの遺物については基準的な一部の遺物しか報告できなかった。

鶴尾、陶棺の一部実測はフジテクノ有限公司、遺物の写真撮影は柳生写真館へ委託した。

調査及び報告書作成の体制

5ヵ年に及ぶ磁気探査・発掘調査・報告書作成に際して、平成15年5月26日に設置し、平成16年11月1日瀬戸内市誕生に伴い要綱を改定し、史跡寒風古窯跡群整備委員会（委員長：河本清くらしき作陽大学食文化学部教授）を毎年開催し、各年度の調査方針や検出遺構や出土遺物の評価など多岐にわたり検討していただき、多くのご指導とご教示をいただいた。

また、補助事業の調整や史跡整備に向けた調査方法等について文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課のご指導、ご助言をいただいた。

史跡寒風古窯跡群整備委員会設置要綱

(設置)

第1条 史跡寒風古窯跡群の整備を行い、史跡の保存・公開・活用を図るために必要なあらゆる事項についての検討を行うため、史跡寒風古窯跡群整備委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(目的)

第2条 委員会は、史跡寒風古窯跡群解明のため必要な調査研究の指導を行うとともに、史跡を後世に伝えていくために必要な保存・管理方法や公開・活用を図るために整備のあり方について検討する。

(事業)

第3条 委員会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 史跡寒風古窯跡群の調査研究に関する事。
- (2) 史跡寒風古窯跡群の保存・管理に関する事。
- (3) 史跡寒風古窯跡群の公開・活用に関する事。
- (4) その他、目的を達成するために必要な事。

(指導・助言)

第4条 委員会は、目的達成のため、必要に応じて文化庁及び岡山県の指導・助言を得ることができる。

(組織)

第5条 委員会は、瀬戸内市長が委嘱する委員をもって組織する。

(委員長及び副委員長)

第6条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員の互選とする。

- 2 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときはその職務を代理する。

(任期)

第7条 委員の任期は2年間とする。ただし、再任を妨げない。

(会議)

第8条 会議は、委員長が必要に応じて招集し議長を務める。

(事務局)

第9条 委員会の事務を処理するため、瀬戸内市教育委員会社会教育課内に事務局を置く。

(委任規定)

第10条 この要綱に定めるものほか必要な事項は、委員会で別に協議する。

(附則)

この要綱は、平成16年11月1日から施行する。

史跡寒風古窯跡群整備委員会名簿

委員長 河本 清（くらしき作陽大学食文化学部教授～同大学非常勤講師）

副委員長 亀田修一（岡山理科大学総合情報学部教授）

委員 犬野 久（京都橘女子大学教授～奈良文化財研究所名誉研究員）

葛原克人（ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授）（～平成17年12月14日）

高瀬要一（奈良文化財研究所文化遺産研修部遺跡調査室長～文化遺産部部長～奈良文化財研究所客員研究員）

正岡睦夫（岡山県古代吉備文化財センター所長）（～平成17年3月31日）

松本和男（岡山県古代吉備文化財センター所長）（平成17年4月1日～平成19年3月31日）

高畠知功（岡山県古代吉備文化財センター所長）（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

岡田 博（岡山県古代吉備文化財センター参事）（平成20年4月1日～）

山口光明（牛窓町議会議員～瀬戸内市議会議員）（～平成17年3月31日）

廣田 均（瀬戸内市議会議員）（平成17年4月1日～平成19年3月31日）

木下哲夫（瀬戸内市議会議員）（平成19年4月1日～）

時實兼行（牛窓町国塙区長・瀬戸内市文化財保護委員）（～平成17年3月31日・平成19年4月1日～）

青山一男（牛窓町国塙自治会行政委員）（平成17年4月1日～平成19年3月31日）

時實幸男（牛窓町国塙自治会行政委員）（平成19年4月1日～）

木村素静（備前焼作家・寒風陶芸の里陶芸家代表）

松本幸男（牛窓町文化財保護委員会委員長・郷土史研究家）（～平成17年3月31日）

原野甲子郎（瀬戸内市文化財保護委員会副委員長）（平成17年4月1日～平成20年3月31日）

指導・助言

坂井秀弥（文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官）

平井泰男（岡山県教育庁文化課埋蔵文化財係課長補佐～文化財課埋蔵文化財班総括副参考）（～平成19年3月31日）

光水真一（岡山県教育庁文化財課埋蔵文化財班総括副参考）（平成18年4月1日～）

田中秀樹（岡山県教育庁文化課文化財保護係課長補佐～文化財課文化財保護班総括主幹）（～平成17年3月31日）

成本俊治（岡山県教育庁文化財課文化財保護班総括主幹）（平成17年4月1日～平成18年3月31日）

金田善敬（岡山県教育庁文化財課文化財保護班主任）（平成18年4月1日～）

事務局

牛窓町教育委員会

平成16年度（～平成16年10月31日）

教育長 高橋重夫

教育課長 森川高博

課長補佐 入澤賢治

参考事 山口喜代子

学芸員 若松栄史

瀬戸内市教育委員会

平成16年度（平成16年11月1日～）～平成20年度

教育長 石原昌郎（平成16年11月1日～平成16年12月24日）

小林一征（平成16年12月25日～平成20年12月4日）

日下弘海（平成20年12月25日～）

教育長職務代理者

福池敏和（平成20年12月5日～平成20年12月24日）

教育次長 佐藤伸一（平成16年11月1日～平成17年3月31日）

斎 恒一（平成17年4月1日～平成19年3月31日）

青山始正（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

福池敏和（平成20年4月1日～）

社会教育課

課長 盛 恒一（平成16年11月1日～平成17年3月31日）

入澤賢治（平成17年4月1日～平成18年3月31日）

森 謙治（平成18年4月1日～）

参考事 光辻百合恵（平成16年11月1日～平成17年3月31日）

小竹俊作（平成19年4月1日～）

馬場昌一（平成19年4月1日～）（調査、整理、報告書担当）

課長補佐 馬場昌一（平成17年4月1日～平成19年3月31日）（調査、整理担当）

係長 馬場昌一（平成16年11月1日～平成17年3月31日）（調査、整理担当）

川壁 誠（平成18年4月1日～平成20年3月31日）

大谷博志（平成20年4月1日～）

主査 大谷博志（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

村上 亘（平成16年11月1日～）

主任 若松栄史（平成16年11月1日～）（調査、報告書担当）

片山恭子（平成16年11月1日～平成17年3月31日）

額田泰充（平成19年4月1日～）

臨時職員 關 幸代（平成16年11月1日～）（調査、整理、報告書担当）

発掘作業員

井上文子 上山千枝子 上野信一 大西 稔 大脇英一 岡崎信行 奥山たもつ 小野 伸
 金居貢一 川口保子 川野一郎 川野素弘 川端芳男 木村芳子 小林美知子 斎藤良介
 立岡孝利 坪井宏之 平川勝馬 内藤信吾 南石茂則 野々村道夫 山内 勇

報告書作成協力者

奥田恵美子 勝部美津江

その他、発掘調査の測量機材については岡山県古代吉備文化財センター、発掘調査・整理作業員については社団法人瀬戸内市シルバー人材センター、現地調査の資材置場テントの設営、調査作業員の休憩、電気・水道の使用、整備委員会の開催、発掘速報展の開催に際し寒風陶芸会館の協力を得た。

調査の方法

調査にあたっては昭和53年（1978）寒風古窯跡群緊急調査委員会による確認調査や平成16年度、奈良文化財研究所に委託した磁気探査の成果を基に、1～3号窯跡・寒風古墳・工房跡の位置・規模確認のための調査区を設定した。調査に先立ち調査区周辺を中心に史跡地の除草作業を行い、調査区を設定し発掘調査を実施した。調査区の掘下げ作業はすべて人力により行い、廃土は掘下げ後に調査区を埋め戻すため一度すべて土嚢袋に入れ写真撮影、実測作業に支障のない地点に集め調査後、人力により埋め戻しを行った。遺構測量に關わるトータルステーションについては、現地調査を実施した平成17年度～平成19年度にかけて岡山県古代吉備文化財センターから機材をお借りした。

発掘調査は秋期から冬期にあたり、1月・2月では「寒風」の地名にあるよう、北西からの強い寒風と小雪が舞うなどの悪天候に見舞われる期間があった。

報告書作成の体制

発掘調査後、各年度で出土した遺物の洗浄は終えており、遺物への註記作業と整理作業、復元作業、遺物実測を次年度の確認調査が始めるまでの期間で実施してきた。本格的な報告書作成は平成20年度に1名の整理担当者の専従と本庁業務と兼ねる1名の整理担当者により進めた。陶棺と鷦尾の大形遺物の一部について実測と拓本をフジテクノ有限公司へ業務委託した。遺物の写真撮影については柳生写真館へ業務委託を行った。報告書の作成は3名の調査担当で執筆を進めた。

また、報告書の附載に、1-II・III号窯跡の灰原出土遺物として今回の調査に関し基本的な資料となる、昭和53年（1978）確認調査を実施した1号窯跡群灰原出土遺物の報告を、調査担当者山磨康平氏から、寒風古窯跡群の物理探査報告を奈良文化財研究所埋蔵文化財センター金田明大氏から、須恵器の胎土分析報告を岡山理科大学白石純氏から玉稿をいただいた。また、出土炭化材の樹種同定報告を吉田生物研究所に委託し報告を得た。

さらに、資料の提供、整理や図化、遺物の写真撮影、報告書作成にあたって、多くの方々の協力を得た。

(馬場)



写真10 平成17年度現地説明会状況（2005.12.18）



写真11 平成18年度発掘調査作業員
(2006.12.23)



写真12 寒風古窯跡群周辺遺跡踏査
調査員・作業員（2008.3.5）

第3章 調査の概要

第1節 1号窯跡群の調査概要

1 位置と調査の概要（第12図、図版1）

1号窯跡群は2号窯跡から北北西へ約80~95m、3号窯跡から北西へ約14~15.5mで標高約60~62mの寒風池のある西側に向かう丘陵緩斜面に立地する。窯体部が所在する地番は瀬戸内市牛窓町長浜字寒風5136番地、灰原が所在する地番は瀬戸内市牛窓町長浜字寒風5139番-1である。昭和9年(1934)10月頃、史跡の南面する丘陵斜面一帯が畠地として開墾されたが、1号窯跡群の位置する丘陵は北から東にかけて背面に丘陵を背負い野菜畠として日照条件が悪いため、地番の寒風5136番地と寒風5139番-1の境となる山道の東斜面（寒風5136番地）は栗畠として開墾され、山道の西斜面（5139番-1）は丘陵斜面が急であり造成されていない雑木林となっていた。

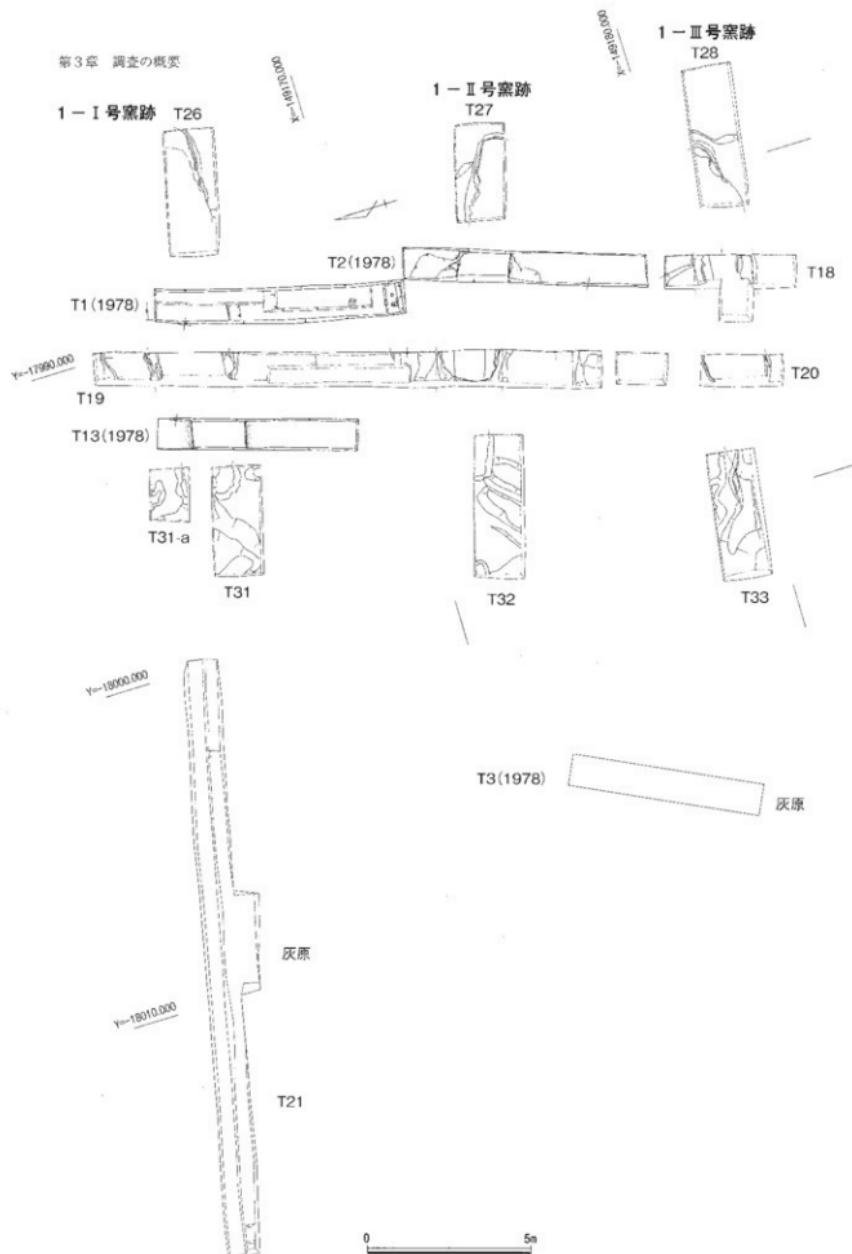
『長浜村誌編』(註1)によると、1号窯跡群は「寒風五一三九窯跡」と命名され、須恵器の散布する灰原部分を窯の窯体部分と考えて地番から名称を付けたものと推察される。また、「五一四六の小径をへだてた上に舟形に焼けた所（窯跡）その上段の岸には煙道に近い所があり鶴尾の上端と思われるものもあった。」と記載されており、「舟形」に被熱を受けた箇所が見られたことから、今回の発掘調査で上部の大半の削平を受けた煙道部が検出されたことから、煙道部の一部が露出していた可能性が高い。

時実コレクションの多くに註記された地番に「五一三九」が記されている。このことは寒風古窯跡群の研究のため灰原の所在する寒風5139番地の一角を購入し資料の収集に努めたためであり、この成果が今日の寒風古窯跡群の研究、しいては吉備地域の須恵器研究の基礎となっている。

西川宏氏は「小さな谷の二つの池の奥の五一三九、五一四〇番地に灰原が露出しているが、その上手の畠、五一三六番地の山境内にも窯の本体が埋まっている。時実氏によると二基並んでいた可能性がある。」とし、西川宏氏はこの1号窯跡群を寒風3号窯跡と呼び、出土遺物を基準に寒風3式を設定した。(註2・3)

その後、昭和53年(1978)1月の寒風古窯址群緊急調査委員会調査團による分布調査段階では、「灰原は池の縁より上手の畠との間の雑木林中の30×20mの範囲に堆積が認められる。」と灰原の須恵器散布範囲を記している。窯体については昭和10年頃の聞き取りから「窯址本体は、上手に畠の開墾時に2基確認されている。当時の踏査によると、2基はほぼ平行して位置し、そのうち南側の1基(1-II号窯址)は、上手の雑木林との境の崖面に、煙道に近い部分が露出していたとのことである。北側の1基(1-I号窯址)は、畠の中ほどでプランが終わっていたらしい。」と記載された。

また、同じ昭和53年1月から2月に奈良国立文化財研究所により磁気探査が行われ、東西方向に長さ約6~7mで、南北に約4~5m離れているとみられる2基の窯跡の存在を示す反応を得ている。(註4)これらの成果を活かし同年3月の寒風古窯址群緊急調査委員会調査團による確認調査では1-I号窯跡に2本のトレンチ、1-II号窯跡に1本のトレンチ、1-II号窯を主とする灰原に1本のトレンチ調査が行われ約7m離れて南北に並列して築造された2基の窯跡の概要が初めて明らかにさ



第12図 1-I・1-II・1-III号窓跡トレンチ配置図 (1/150)

れた。1-I号窯跡と1-II号窯跡の調査概要については『寒風古窯址群』1978に譲るが、調査により2基の窯跡内からの出土遺物から西川氏により設定された「寒風1式」と「寒風3式」の型式を分類することができ、1-II号窯跡→1-I号窯跡へと操業年代順序が判明した。(註5)

さて、発掘調査を実施する前の現状は、窯体の所在する栗畠であった緩やかな斜面には昭和53年の埋め戻されたトレンチの跡と若干の須恵器片が散布する程度、須恵器窯が築窯を窺わせる地形を見せる程度であった。山道を隔てて寒風池に向かう西側斜面は、栗畠の丘陵傾斜と比べ傾斜角度が急で、標高59~51mの雜木林内には大量の須恵器片や窯壁片の散布が東西は寒風池の岸際まで約22m、南北約27mの広範囲にわたって灰原が所在していることが認められた。また、灰原の等高線には地面が隆起した乱れが認められる。1-I号窯跡と1-II号窯跡の窯体主軸の西延長上では窯体からの丘陵斜面に須恵器片・窯壁片・灰などが掛け出され、一部小さな堆積物による盛り上がりであることが後の調査で判明した。

発掘調査を実施する前年度の平成17年(2005)3月、奈良文化研究所に委託し磁気探査とGPR探査を実施した。(詳細について附載2寒風古窯跡群の物理探査を参照)探査の結果、従来確認されている1-I号窯跡と1-II号窯跡の他、1-II号窯跡の南側約7mで遺構の存在を示す反応があり、窯跡の存在が想定された。(註6)

平成18・19年度の発掘調査では平成16年度に実施した磁気探査の結果をもとに、1号窯跡群の2基の窯跡である北側の1-I号窯と南側の1-II号窯跡の窯体・灰原の規模・構造・時期等を確認するため、また、1-II号窯跡の南側で磁気探査反応のあった箇所と1-I号窯跡の北側延長部分や北西側の丘陵斜面で窯の有無を確認するため調査区を設定した。設定したトレンチは、1-I号窯跡と1-II号窯跡窯体の位置・規模・構造を確認するためトレンチ19(1m×17.0)。1-I号窯跡煙道部の位置・規模・構造を確認するためトレンチ26(1.5m×4m)。焚口部の位置・規模・構造を確認するためトレンチ31(1.5m×3.5m)、トレンチ31-a(1.2m×1.6m)。灰原の規模を確認するためトレンチ21(1m×18m+0.7m×3m)。1-II号窯跡の煙道部の位置・規模・構造を確認するためトレンチ27(1.5m×3m)。焚口部の位置・規模・構造を確認するためトレンチ32(1.5m×4.5m)。新発見の窯跡である1-III号窯跡窯体部の位置・規模・構造・時期を確認するためトレンチ18(1m×4m+1m×1m)、トレンチ20(1m×2.5m)。煙道部の位置・規模を確認するためトレンチ28(1.5m×4.5m)。焚口部の位置・規模を確認するためトレンチ33(1.5m×4m)。1-I号窯跡の北側で窯跡の有無について確認するためトレンチ30(1m×6m)。寒風池の北東の丘陵斜面での窯跡の有無について確認するためトレンチ22(1m×7.5m)、トレンチ34(1m×7m)の計14本である。

2 1-I号窯跡の遺構

窯体(焼成部)(第13・14図、図版2)

昭和53年調査の第1トレンチと第13トレンチの間に設定したトレンチ19で検出した焼成部は、地山上層の岩盤は風化し軟質であるが下層は硬い岩盤を検出面から深さ約130cm掘り抜いた、地下式無段の窑窯構造の登り窯である。窯体の構造を確認するためトレンチ19では床面まで掘り下げた。断面から床面は地山をほぼ水平に掘り抜き、厚さ3~4cm程度の薄さで青灰色の粘土により貼り床されている。北側の側壁は床面から緩やかに屈曲しながら真っ直ぐに立ち上がり、南側の側壁は緩やかに屈曲し内傾しながら立ち上がり、天井部に向かい横幅を狭めているようである。断面は南側の側壁を見る

とやや「フラスコ」状を呈した。北側の側壁は床面から100cm、南側の側壁は床面から77cmで天井部が崩落しており側壁の断面を確認することができた。北側の窓壁は第14層のにぶい赤褐色砂質土を間層として2面あり、南側の窓壁には補修による2次窓壁は確認できなかった。確認した側壁から1号窓が築造された当初の第1次の側壁は厚さ5~7cmのスサ入りの粘土を貼り付け築造され、検出面での最大幅は255cmを測る。側壁の外側には幅4~5cmの厚さで被熱により地山が赤紫色とその外部には幅5~7cmの幅で赤色に変色していた。操業停止時の第2次の側壁は、厚さ10~13cmのスサを含む粘土の貼り付けで構築されていた。第1次も側壁との間層では幅8cmの厚さで被熱により間層が赤色に変色していた。検出面での最大幅は240cmを測る。南側の側壁の外側でも幅約10cmの厚さで被熱により地山面が赤紫色に変色し、その外側には15cmの幅で赤色に変色していた。

天井部は側壁部も含め幅約240cmにわたり崩落しており、床面の最下層である第13層にぶい赤褐色粘質土の上層である第12層の灰褐色粘質土の中に崩壊した天井部の窓壁が塊となり非常に多く落ち込んでいた。

焼成部の堆積土は天井部が崩落し、その窪地へ丘陵上部斜面からの砂質土により窓体内が堆積していた。崩壊した天井部の窓壁の塊を含む第12層の上層で窓体北側には、赤色の焼土ブロックを含む第11層の灰褐色粘質土、第10層の砂粒を多く含む浅黄色砂質土、窓体中央から南側には0.5~1cmの窓壁片を含む第9層の灰褐色粘質土、窓全体から南側の窓体外にかけて砂粒を含むがシルトっぽく薄ピンク色をした第8層のにぶい褐色粘質土である。この第8層より上層はなだらかなレンズ状堆積土で粘性のない砂質土であり上斜面丘陵からの堆積土であろう。

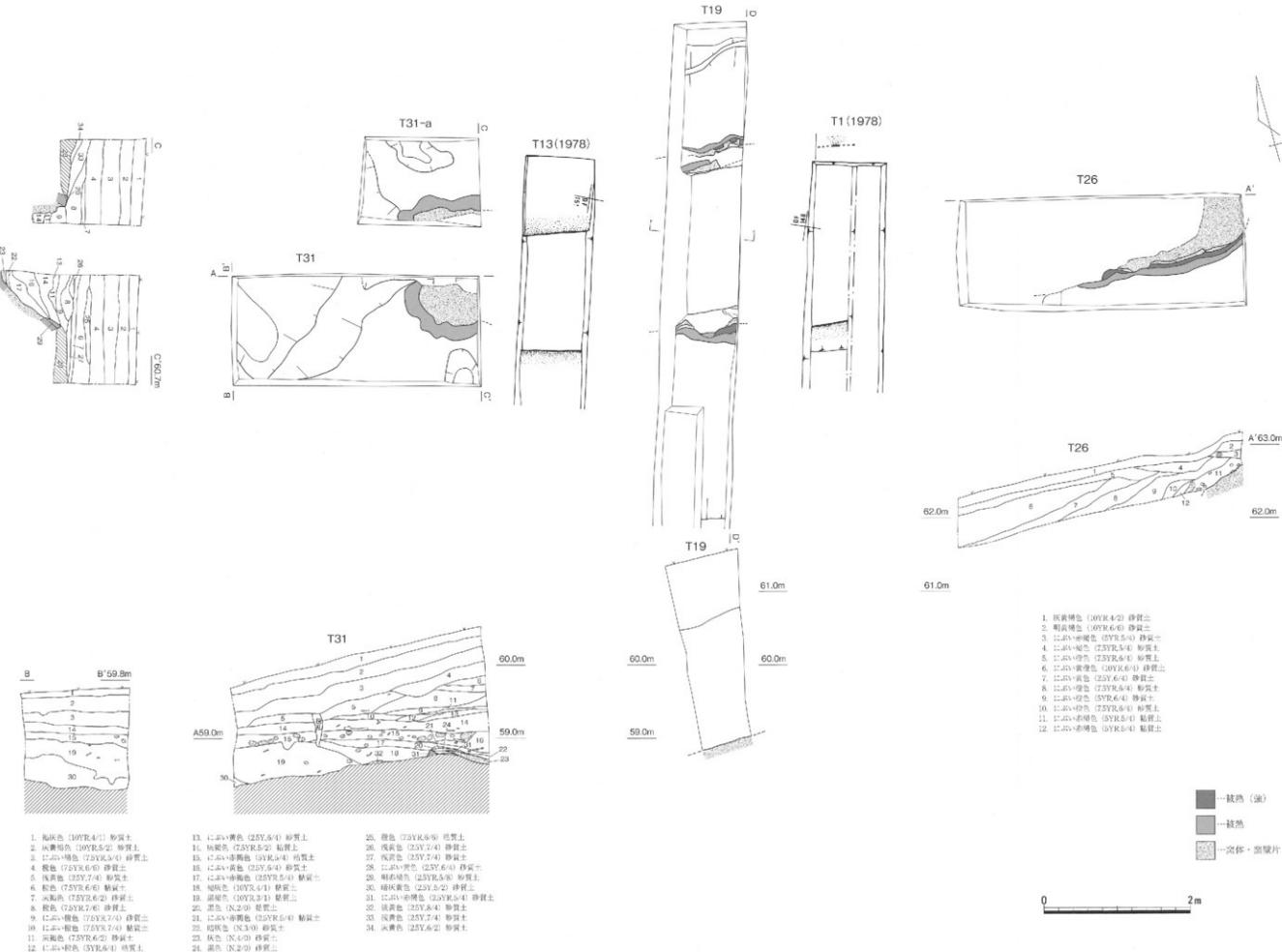
窓体の床面は幅70cmという限られた調査範囲であったが、最終床面上に残存する遺物はほとんどなく、かろうじて床面近くで数点の須恵器片が出土したにすぎない。1-I号窓で須恵器等が焼成され、製品が搬出され、焼成部内も灰や破損した窓壁が片づけられた後、操業を停止したものであろうか。焚口部や灰原から出土した鶴尾や須恵器から1-I号窓跡が1号窓跡群で最後に操業を終えた窓であるため、天井部崩落後の堆積土中にも遺物の混入はなかった。

トレンチ19の調査区は1-I号窓跡から1-II号窓跡の窓体を横断する形であるため、窓の外周部に排水溝などの付随施設の有無についても確認した。調査区の北側端部で第1次の窓体東端部から約130cmで窓体主軸と並行する形で溝状の遺構を検出した。また、立地している地形の影響もあるようが、窓体外側から窓体本体に向かって緩やかに地山面が傾斜していた。特に、窓体南側では幅約280cmにわたり傾斜が確認できた。

以上、トレンチ19の確認調査により1-I号窓跡の築造時の焼成部の最大幅は255cm、操業停止時の焼成部の最大幅は240cm、天井部分が崩落し全高については不明であるが、検出面からの高さから130cm以上を測る。窓の主軸はN-97°-E、床面の傾斜角度は16°を測った。

煙道部（第13層、図版2）

トレンチ19から東へ3m、昭和53年調査の第1トレンチの東へ1mで煙道部を確認するため設定した調査区であるトレンチ26で検出した煙道部は、窓体主軸の延長上で南側半分のプランを検出することができた。特に煙道端部は、昭和10年頃「上手の雜木林との境の崖面に、煙道に近い部分が露出していた」という様に、表土層を取り除くと側壁、赤褐色に変色した地山が確認された。焼成部の側壁から煙道部の側壁は緩やかに立ち上がっている状態で残存していた。側壁には厚さ4cmでスサを含む粘土が貼られ、焼成を受け硬く焼け締まっている。煙道から焼成部の側壁の外側には幅5cmの厚さで



第13図 1-I号踏跡平・断面図 (1/50)

被熱により地山が赤紫色、その外部には幅10cmの厚さで赤色に変色していた。

煙道部については位置確認が目的であり下層までは掘り下げていないが、煙道部内の発掘停止面まで堆積土は丘陵上斜面からの埋土を除き1層に分かれ、煙道部窓壁の下層から0.5~5cmの窓壁片や炭の粒子を多く含む第11層のにぶい赤褐色粘質土、窓壁片を含まず、赤色を呈する第12層のにぶい赤褐色粘質土、土質がやや細かくうすピンク色を呈する第10層のにぶい橙色砂質土、0.5~3cmの炭の粒子を含みうすピンク色を呈する第9層のにぶい橙色砂質土である。出土遺物は、側壁に接し須恵器の杯片が出土したのみである。

焚口部（第13・15図、図版3）

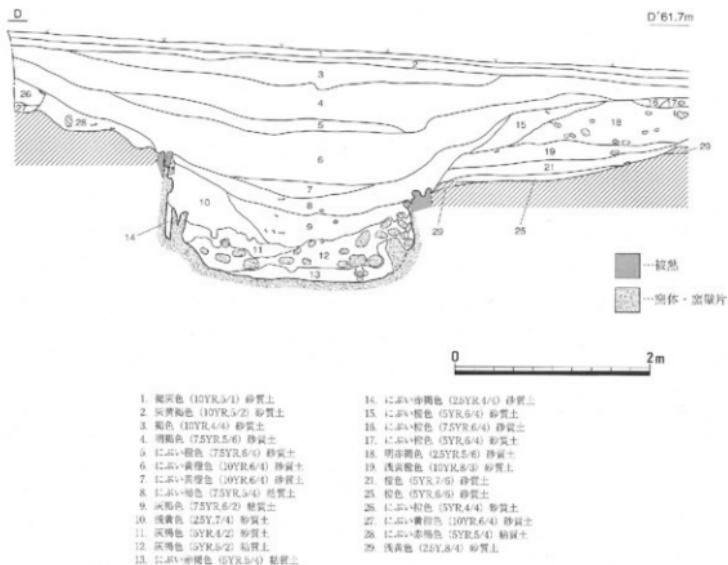
トレンチ19の焼成部から西へ2.5m、昭和53年調査の第13トレンチの西へ1mに設定した調査区のトレンチ31とトレンチ31-aである。トレンチ31の調査区を現地表から95cm下の標高59.54mを測る地山面を検出時、10~18cmの幅で被熱により平面形は半円形で、赤褐色に変色した焚口の堆積土から蕨手状の文様や透し穴を施した鶴尾や陶棺の破片が焚口部へ落ち込んだ状態で出土した。破片は10数点に及んだが、整理段階で破片のいくつかが接合し、比較的大形の破片が窓体中から掻き出され破損したか、焚口部に施棄された時に破損したものと推察される。焚口の規模を確認するため、トレンチ31の65cm北側にトレンチ31-aを設定し焚口部の位置確認のため発掘調査し、焚口部の端部を検出した。この結果、検出面での平面形は、トレンチ31では円形、トレンチ31-aでは不正梢円形を呈した。トレンチ31では焚口部の端部の中央部に西側の前庭部に向け溝状の遺構を検出した。窓の焼成に関係する遺構であろうと推察されよう。検出面での焚口部最大幅は155cmを測った。横断面は、トレンチ31では底面向かい緩やかな「U」字形、トレンチ31-aでは直線的に粘土が貼られていた。床面の貼り床は6~9cmの厚さを測り硬く焼け締まっていた。また、貼り床下部の地山は被熱により赤褐色に変色していた。窓体の主軸方向の断面は、燃焼部方向へ向け15°の角度でドッていて。検出面からの最大の深さは50cmを測った。

焚口部の堆積土は、トレンチ31の北壁土層断面によると下層から貼り床が無くなる西端部の地山上層に第24層の黒色砂質土、第24層と貼り床の上層へ第21層のにぶい赤褐色粘質土、貼り床上面に5cmの厚さで堆積する第22層の暗灰色砂質土、0.5~2cmの窓壁片や0.5~1cmの燒土・オレンジ色のブロックを含む第17層のにぶい赤褐色粘質土、第16層のにぶい黄色砂質土で、その上層は0.5~5cmの窓壁片・0.5~3cmの燒土を多く含む第15層のにぶい赤褐色粘質土で、窓体が崩落した後の窓壁を多く含む堆積層であると考えられる。

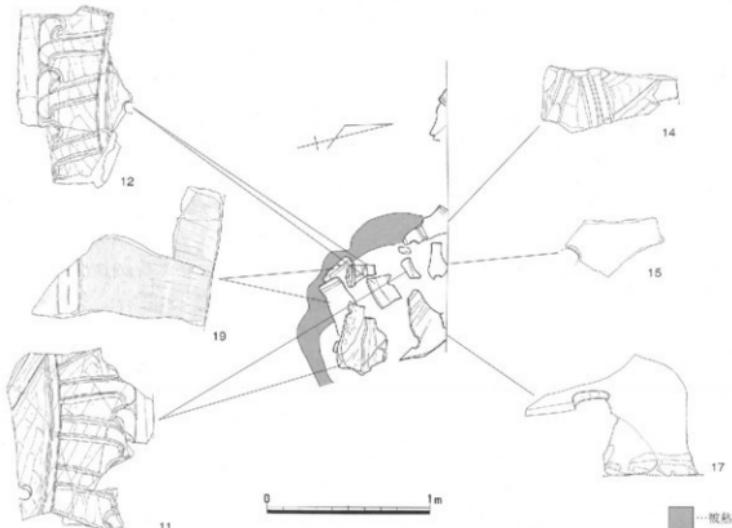
トレンチ31の調査区の南東隅で焚口中心部の西側で平面形が梢円形で幅約50cmを測るピットを検出した。横断面は「U」字形を呈し、出土遺物はなく、底部で扁平な小砾を検出した。また、トレンチ31-aの調査区の北側に東西に長い不正形の土壤状のピットを検出した。底面も水平でなく、遺物の出土もなかった。両トレンチの2個の小ピットと焚口部との関係については不明である。

前庭部（第13図、図版2）

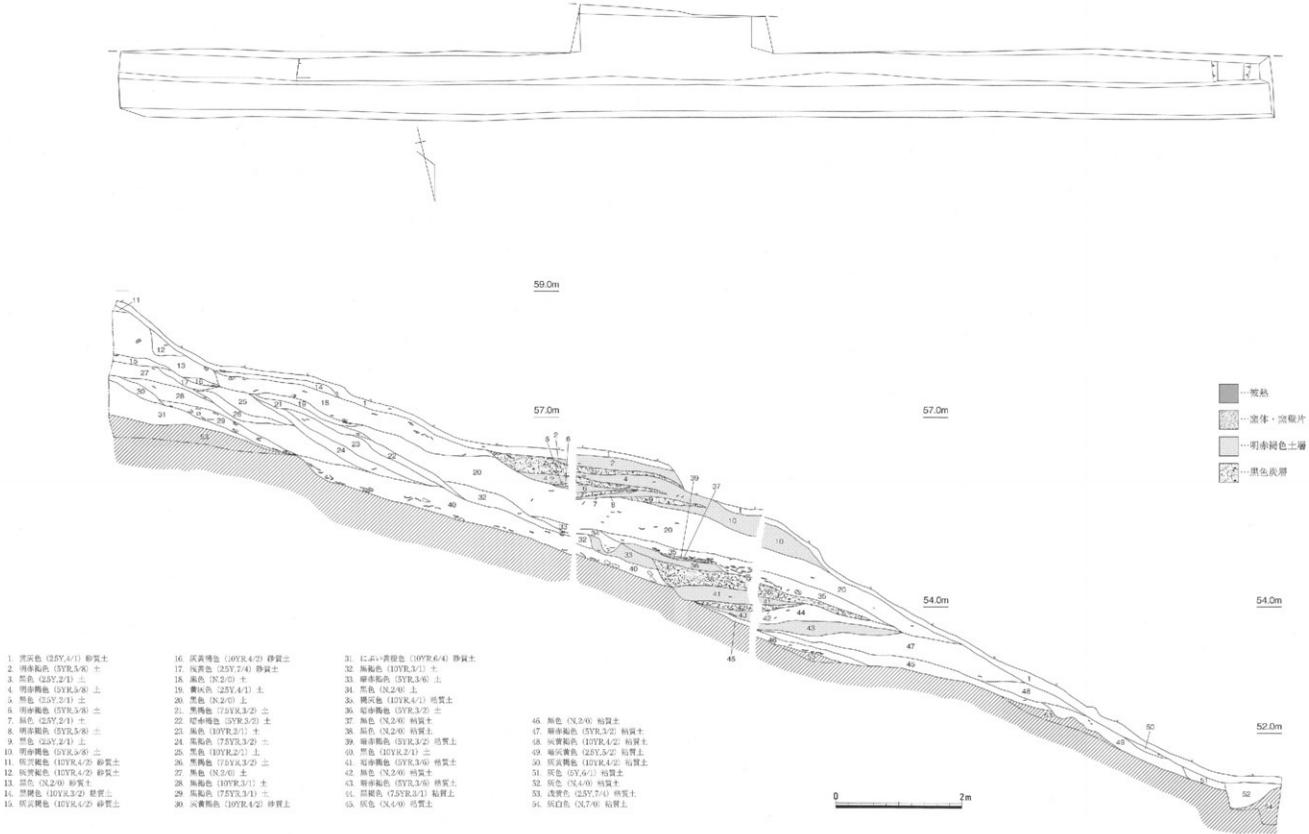
トレンチ31の焚口西端の中央部から西側の丘陵斜面に向かい溝状の遺構が約20cm延びた先から、トレンチ31-aと同様「ハ」の字状に開き、その先約40~90cmから梢円形状に弧を描く前庭部の掘り込みが検出された。前庭部の地山面は地山の岩質によるものか、甲羅状に溝状の亀裂が走りゴツゴツした底面を見せた。底面は水平ではなく、一度わずかに角度を変え西側の灰原方向へ斜めに下りながら延びていた。



第14図 1-I号窯跡T19焼成部断面図 (1/50)



第15図 1-I号窯跡T31焚口部鶴尾・陶棺出土状況 (1/30・1/12)



第16図 1—I号窓跡T21灰原平・断面図 (1/60)

堆積土は大きく3層に分かれ、前庭部の底部分に堆積する、粘性が弱く、砂粒が非常に多い第30層の暗灰黄色砂質土、前庭部の主となる堆積土で、1~3cmの炭の粒子や0.5~1cmのオレンジ色の粘土ブロック・白色ブロックを多く含む第19層の黒褐色粘質土、0.5~2cmの炭の粒子を多く含む第18層の褐灰色粘質土である。第19層の黒褐色粘質土は地山面での遺構検出時、焚口部から弧状に開く炭層の分布から前庭部の形狀が分かるよう前庭部内を埋める状態で堆積していた。

灰原（第16図、図版6・7）

1号窯跡群の灰原については、位置と調査の概要でも記載したが、3基の窯跡の窯体が立地する栗畑の西側山道を隔てた寒風池へ向かう標高59~51mの雜木林内に東西約22m、南北約27mの広範囲にわたって須恵器、窯壁、焼土、炭が大量に散布しており古くから所在が知られているところである。

1-I号窯跡の窯体主軸の延長上の灰原中央部では丘陵斜面部分であるにも関わらずマウンド状の高まりが認められ須恵器片・窯壁片・灰など多く散布していた。このため、焚口部を検出したトレチ31から3m西に、窯体主軸方向の延長上でこの高まりを切る形で山道の下から寒風池手前までの東西方向に長さ18mの調査区であるトレチ21を設定し、灰原の範囲、堆積状況、遺物の出土状況、時期等について確認調査を実施した。灰原を形成したベースとなる地山面は調査区の東から約2.9m地点で地山面の傾斜角度が変わる。標高56.4mの傾斜角変換点から東側の地山面は、傾斜角度も緩やかに窯体部に向かい、調査区東端部の標高は約57mを測る。この傾斜角変換点から東側の地山面は、トレチ31で検出した前庭部の地山面として統くもので、1-I号窯跡の前庭部の長さ表わしているものと考えられる。トレチ31の前庭部始まりからトレチ21の傾斜角変換点までの距離は約8.4mを測り、トレチ31の前庭部始まりの標高が58.6mであることから比高差は22mとなる。また、トレチ21の前庭部堆積土で地山直上の第31層のにぶい黄橙色砂質土はトレチ31の地山直上の第31層のにぶい黄橙色砂質土と対応する層と考えられる。

1-I号窯跡の灰原としてトレチ21を設定し基盤面まで掘り下げたが、1-I号窯が築造される以前には、7m・15m西側に1-II号窯跡・1-III号窯跡がすでに築造されその灰原が形成されていたわけであり、それら2基の形成した灰原と重なり合いながら1-I号窯跡が形成されたものである。灰原のベースとなる地山面は傾斜角変換点から西側の寒風池に向かい約18°で下っていた。寒風池の東から南面の縁辺には池を巡る道状の平坦部があり、調査区の西端部で後世の側溝状の溝を検出した。

灰原の断面調査にあたり、堆積土の色調、土質、包含物の差によりできるだけ分層を行った。断面調査の際、トレチ中央部のマウンド状の高まり部分では表土から基盤面まで深さ約190cmに達し、堆積土がしまりが無く、ボソボソした土壤であったため、トレチに掘り上げ後断面実測の間に上層部分が崩落したため長さ300cm、幅60cmで崩落部分を拡幅し土層を確認した。その結果、灰原の形成状況を概観すると、基盤面の直上に須恵器片や窯壁片が非常に多く、0.5~10cmの木炭状の炭粒子、0.5~5cmの焼土片や黄色ブロックを含む第40層の黒色粘質土や第46層の黒色粘質土が20~30cmの厚さで堆積している。この層が丘陵斜面の基盤面に最初に堆積した層となろう。その後、上手斜面では0.5~5cmの炭粒子を非常に多く含む第28層の黒褐色土や第26層の黒褐色土、第25層の黑色土などの堆積が行われ、下手斜面では第45層の灰色粘質土、しまりなく非常にボソボソした第47層の暗赤褐色粘質土が堆積する。さらに、上手斜面では砂質を多く含む第24層の黒褐色土や第23層の黑色土、第22層の暗赤褐色土が堆積する。次の段階では灰原堆積土で色調的に目立つ堆積土である明赤褐色土が堆積している。この明赤褐色土の堆積は調査区中央のマウンド状を呈する高まり部分に集中して認めら

れる堆積上で、断面から明赤褐色土の堆積層は黒色土を間層として互層堆積しており何回かに分かれて堆積していることが分かる。大きく上層と下層の2つに分けることができる。さらに下層の明赤褐色土層は3つに細部できる。下層から焼土を非常に多く含む第43層の暗赤褐色粘質土、第44の黒褐色粘質土、第42層の黒色粘質土を間層として、中間層が第41層の暗赤褐色粘質土、第38層の黒色粘質土を間層として、上層が第36層の暗赤褐色土となる。堆積状況は地山から明赤褐色土の下層までの堆積層が斜面堆積であったのに対し、この上・中・下の明赤褐色土層はほぼ水平堆積を呈した。次に、明赤褐色土層の上層には須恵器片を非常に多く含む第35層の褐灰色粘質土が堆積する。さらに灰原の大部分にわたり堆積する1~3cmの炭粒子・黄色ブロック・須恵器片を含む第20層の黒色土が厚い箇所では約60cmで堆積している。最後に、調査区中央のマウンド状を呈する高まり部分を形成する上層の明赤褐色土の堆積層がある。この堆積層も1層ではなく黒色土の間層により5つに分層されている。下層から第10層の明赤褐色土、第9層の黒色土の間層を挟んで、2層目である第8層の明赤褐色土、第7層の黒色土の間層を挟んで、3層目である第6層の明赤褐色土、第5層の黒色土の間層を挟んで、4層目の第4層の明赤褐色土、第3層の炭粒子を多く含む黒色土の間層を挟んで、5層目で最上層となる第2層の明赤褐色土となっている。

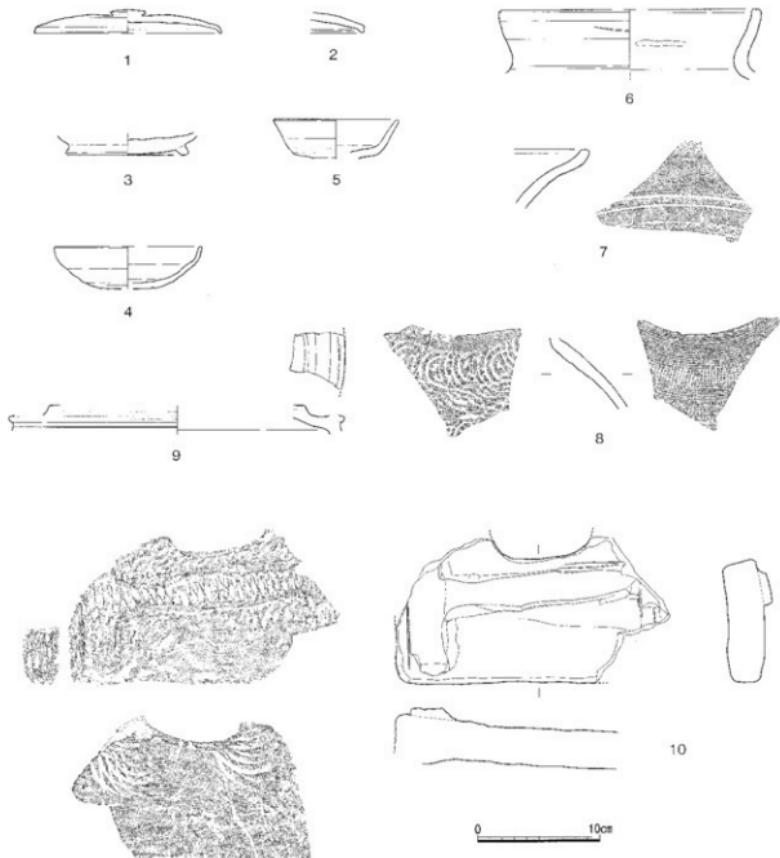
第20層の黒色土を挟んで大きく上下2層に分かれて堆積した明赤褐色土層から考えられる点は、この明赤褐色土は須恵器焼成に伴い窯壁に直接接する地山面が被熱により赤褐色に変色した土壤であることは焼成部、煙道部、焚口部の調査から判断できるものである。須恵器の焼成後は窯体内から須恵器製品や焼け歪み須恵器の取り出し、窯体内や燃焼部の灰・炭の掻き出しが行われたものと考えられ、窯体内からは明赤褐色土は出てこない。何回かの窯の使用により窯壁や天井部などが破損し崩落した場合、窯壁や天井に接した赤褐色に変色した土壤が窯体内に堆積する可能性が高い。明赤褐色土が窯壁等の破損・崩落に伴うものと仮定すれば、上下2層に分かれて堆積した明赤褐色土層がレンヂ19の焼成部の北側の窯壁が2枚存在することとも関係し、1-I号窯の操業期間で、大きく2回以上の窯体の崩落がありその際、被熱した地山の土壤が灰原へ掻き出された状態を表しているのかも知れない。

3 1-I号窯跡の出土遺物

焼成部出土の遺物（第17図、図版17）

遺構報告の際記載したが、1-I号窯跡は須恵器等の焼成・製品の搬出・焼成部内の灰や破損した窯壁が片づけられた後操業を停止したものであろうか、焼成内には遺物はほとんど無く、図化できた遺物は杯蓋1・2、杯身3・4、高杯5・甕6~8、円面硯9、鶴尾10である。杯蓋1は『寒風古窯址群』1978でC類に分類された杯蓋で、つまみ中央がわずかに高くなる扁平なつまみに、天井部は丸みをもたず扁平で罐部を外開きに屈曲する。天井部はヘラケズリ、他はヨコナデ。推定口径は15.1cm、器高は1.9cmを測る。色調は内外面とも灰白色。焼成は良好である。杯蓋2は口縁部のみの破片であるが口縁罐部を短く屈曲する特徴からC類に分類されるものである。器壁が杯1に比べ厚手である。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。杯身3は高台部分のみであるがC類の杯蓋とセット関係にある杯身である。やや厚手の平底で、「ハ」の字状に短い高台を有している。高台の径は9.7cmを測る。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。杯身4はA類の杯蓋を反転し、平坦な底部から口縁部が内湾しながら開き口縁罐部を丸くおさめる形態である。2号窯跡の焼成部からまとめて

出土しており今回、D類と分類した杯身である。底部は器表面が摩耗しており調整が不明瞭であるがヘラ切りであろう。他はヨコナデである。推定口径は11.8cm、器高は3.5cmを測る。色調は外面が灰色、内面が青灰色で、焼成は良好である。高杯5は脚部を欠くが、杯部はB類の杯身の身部が外傾し直線的に口縁部に至る形態を呈し、1-II号窯跡の焼成部床面から出土した高杯に酷似している。内外面は剥離やへこみがあり器表面が荒れている。5は1-II号窯跡の遺物の混入である可能性がある。調整は内外面ともヨコナデである。推定口径は10.1cmを測る。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。壺6は口縁部で頸部から屈曲し内湾しながら立ち上がり、口縁端部を水平におさめる。調整は

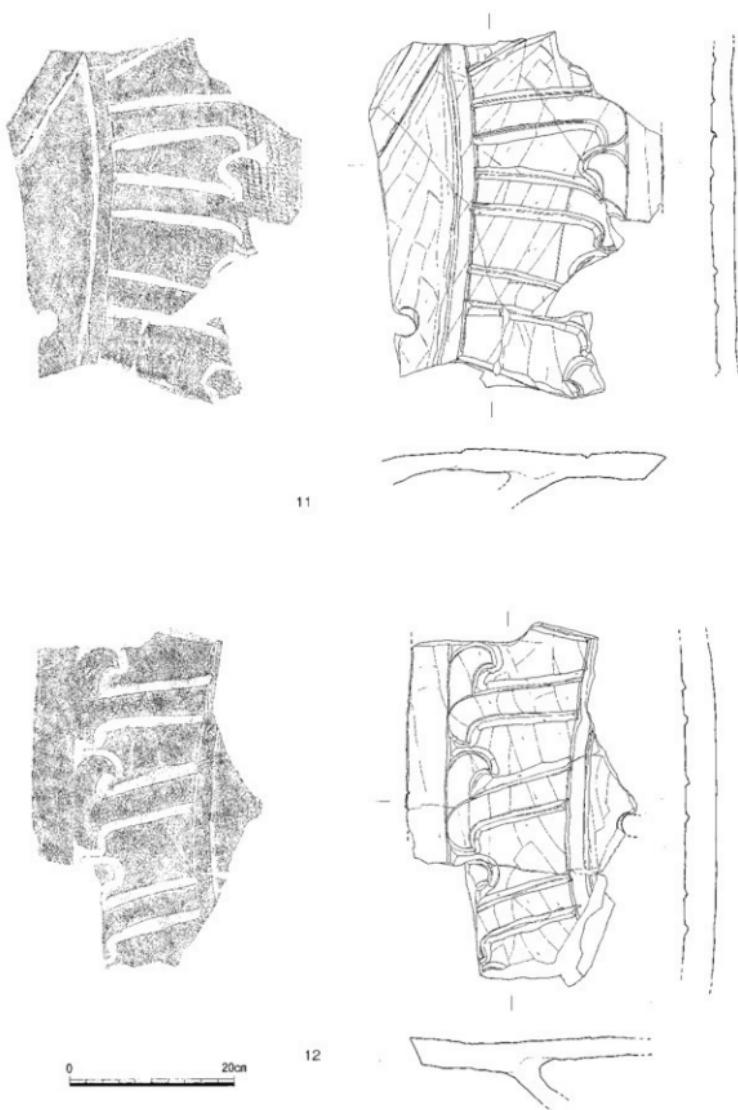


第17図 1-I号窯跡T19焼成部出土遺物 (1/4)

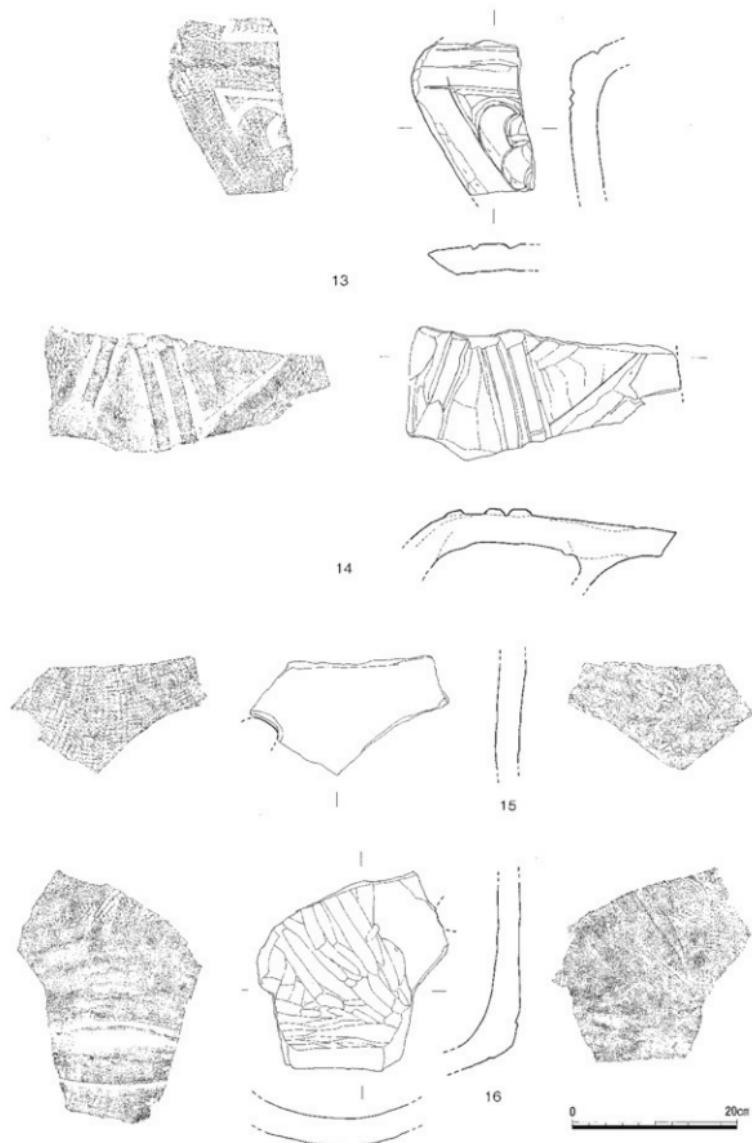
内外面ともヨコナデである。推定口径は21.2cmを測る。色調は内外面とも灰色で、焼成はやや不良である。壺7は口縁部の破片で、大きく外反しながら立ち上がり、口縁端部近くで上方へ曲げ、縦面を水平におさめる。外面には4条の沈線と波状文を施す。また口縁外面の上部にはハケ状の工具によるナメ方向に刺突文を施す。調整は内外面ともヨコナデである。色調は外面が灰色で、内面が灰白色である。焼成は良好である。壺8は頸部から肩部にかけての破片である。調整は外面がタタキ後カキ目、内面は一番内側の同心円文が切れて車輪文状を呈する当て具痕を施す。色調は外面が灰色で、内面がオリーブ灰色である。焼成はやや不良である。円面便9は陸部・海・上方突帯部分の破片である。縁部は全て欠損している。陸部は丁寧なヨコナデで水平に仕上げる。海部は器面を内側に屈曲しており、松尾洋平氏の分類によると、縁部の形態C1類に分類されよう。(註7) 欠損している縁部の下には断面台形で短い上方突帯が1条有する。推定の陸部径は20.8cmを測る。胎土は緻密で、色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。鶴尾10は頭部から胴部の下端部片である。胴部外面には23~25cm幅、高さ7mmの「H」状の突帯が接合されていた。突帯の接合にあたり頭部に近い縦方向の突帯では接合後、側面をケズリ取った際のヘラ状工具による沈線が入っている。さらにもう一つの縦方向の突帯剥離箇所には1条の沈線が施されており、突帯接合の位置を割り付けていたものと推察される。横方向の突帯の上段には半円形になるかもしれないが透し穴を有していた。胴部と頭部の外面には斜格子のタタキ、内面には同心円文の当て具の後ヨコナデを施す。特に外面突帯の上には格子タタキが明瞭に残存していた。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや不良である。

焚口部出土の遺物（第18~21図、巻頭図版2・図版17）

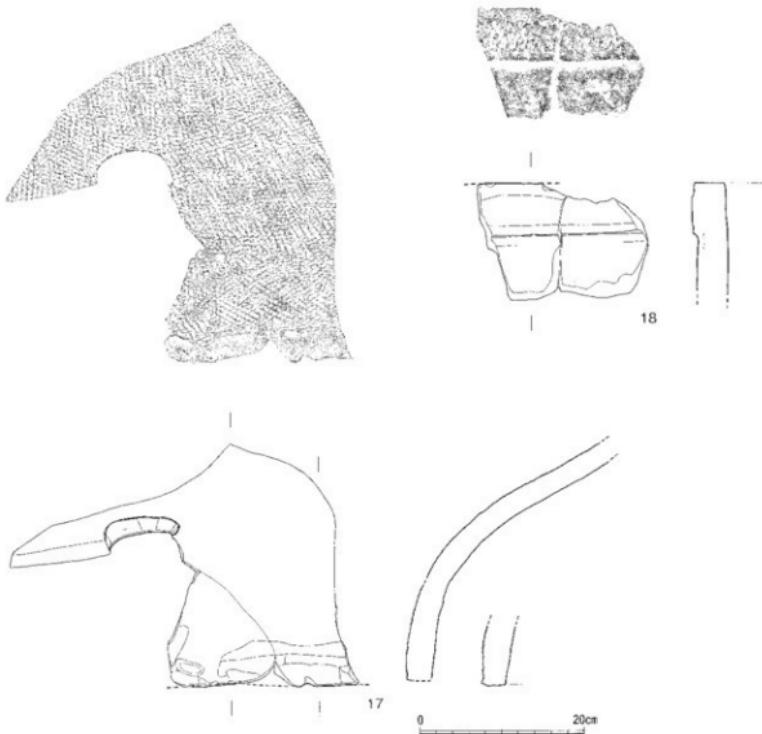
トレンチ31で焚口部へ落ち込んだ状態で一括出土した遺物は10数点に及んだが、整理段階でいくつかが接合した。その結果、図化できた遺物は鶴尾11~17の7点、陶棺18・19の2点に及んだ。11・12は鶴尾の頂部近くの胴部から頸部片で、13は鱗部の先端部片である。11~13は鱗部の文様から同一個体である可能性が高い。11は正面の頭部から向かい右側面部で12は頭部から向かい左側面部である。鱗部の文様や縦帶・脊縫部側面の突帯はすべてヘラ状工具による沈線やケズリを施すことにより表現している。まず、鱗部は2条の沈線で区画された18.5cmの幅の中にヘラ状工具により右側面は蕨手を右方向に、左側面は蕨手を左方向に下線として細く描きさらに、蕨手のみ対になるよう下線を細く描く。そして下線の2つの蕨手と軸部を断面「V」字状にヘラ状工具によりケズリ取る。この二股となった蕨手を連続して文様を施している。縦帶は2条の沈線、脊縫部側面の突帯は1条の沈線で表現している。11・12の縦帶の下には約3.5cmの円孔を施す。鱗部の文様は、今まで寒風古窯跡群で出土した鶴尾には無かった文様を有していた。外面は格子タタキ後全体に斜面下方向にヘラケズリを施すが一部に格子タタキが残存している。内面は格子タタキ・同心円文の当て具痕後ナデを施す。鱗部の先端は斜めであり周囲にヘラケズリを施す。色調は黄灰色から褐灰色で、焼成は良好である。14は鶴尾頂部近くの胴部から鱗部片で、鱗部には正段型の削り出しの文様が認められる。また、縦帶の2条の貼り付け突帯と脊縫部側面の1条の貼り付け突帯がつながる部分に近いことが分かる。外面は格子タタキ後粗いヘラケズリを施す。内面はタタキ後ナデを施す。鱗部の先端は斜めで、ヘラケズリを施す。色調は浅黄橙色で、焼成は良好である。15は円孔の一部を有することから胴部上部か腹部上部の円孔の箇所と考えられる破片である。外面は全面にわたり格子タタキ、内面は同心円文の当て具痕後ナデを施す。色調は灰白色で、焼成は良好である。16は弧を描く胴部が大きく屈曲する破片である。脊部の反り部分であるのか鶴尾のどの位置であるのか不明である。外面は格子タタキ後



第18図 1-I号窯跡T31焚口出土遺物1 (1/6)

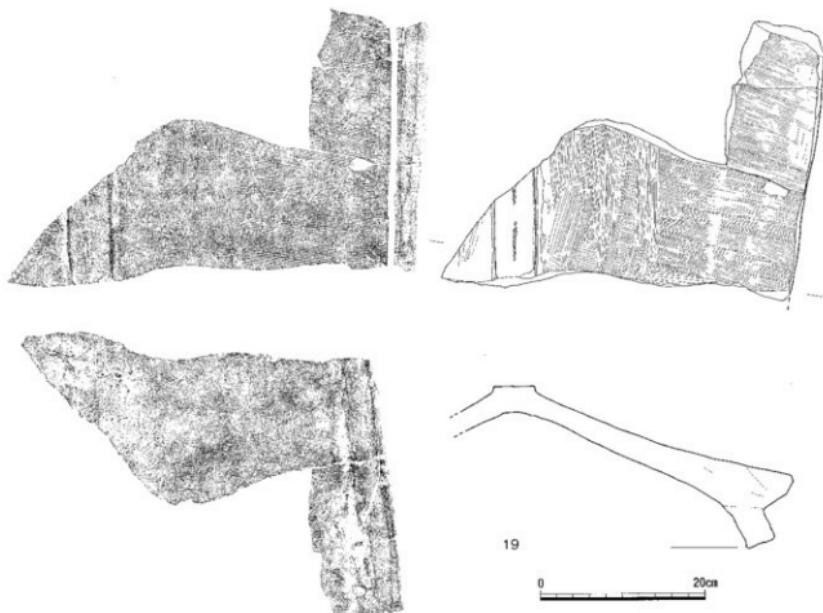


第19図 1-I号窯跡T31焚口出土遺物2 (1/6)



第20図 1-I 号窯跡T31焚口出土遺物3 (1/6)

ケズリ・ナデ、内面は同心円文の当て具痕後ナデを施す。色調は灰色から灰黄色で、焼成はやや不良である。17は焼け歪みにより大きく内側に曲がった鶴尾の胴部の基底部である。基底部から高さ約21cmの位置に下端部を欠くがおそらく長径9cmを測る半円形の透かし穴を有するものと考えられる。底面には乾燥時に下に引かれたすだれ状の痕跡が認められた。外面は15と同様一面に格子タタキ、基底部近くはヘラ状工具によるヨコナデ、内面はヨコ方向のナデを施す。色調は灰白色で、焼成は良好である。18は陶棺の身の上端部片で、外面の上端部6.5cm幅で厚さ6~7mmの粘土帯を有している。器壁の厚さは3.7cmを測る。外面は格子タタキ・ケズリ、内面は器表が摩滅により不明である。色調は2次焼成を受けたのか黄灰色やにぶい橙色を呈し、焼成は不良である。19は陶棺の屋根の天井部である。屋根端部を欠くものの形態は、従来の寒風1号窯跡群灰原から出土した陶棺から切妻家形を呈するものと考えられる。屋根天井部は屋根部から約6mm立ち上がり、幅5cmの平坦部を有する。天井頂部の中心には1条の紐状压痕が認められる。屋根部は端部に向かいやや外反しながら、また、器壁の厚みを増しながら延びる。屋根端部近くでは陶棺の身端部と接する受け部が貼り付けられ、外面で約4cm、内面で約6cm外傾し延びる。調整は外面が軒部分では格子タタキ痕を残すが、天井部に向



第21図 1-I号窯跡T31焚口出土遺物4 (1/6)

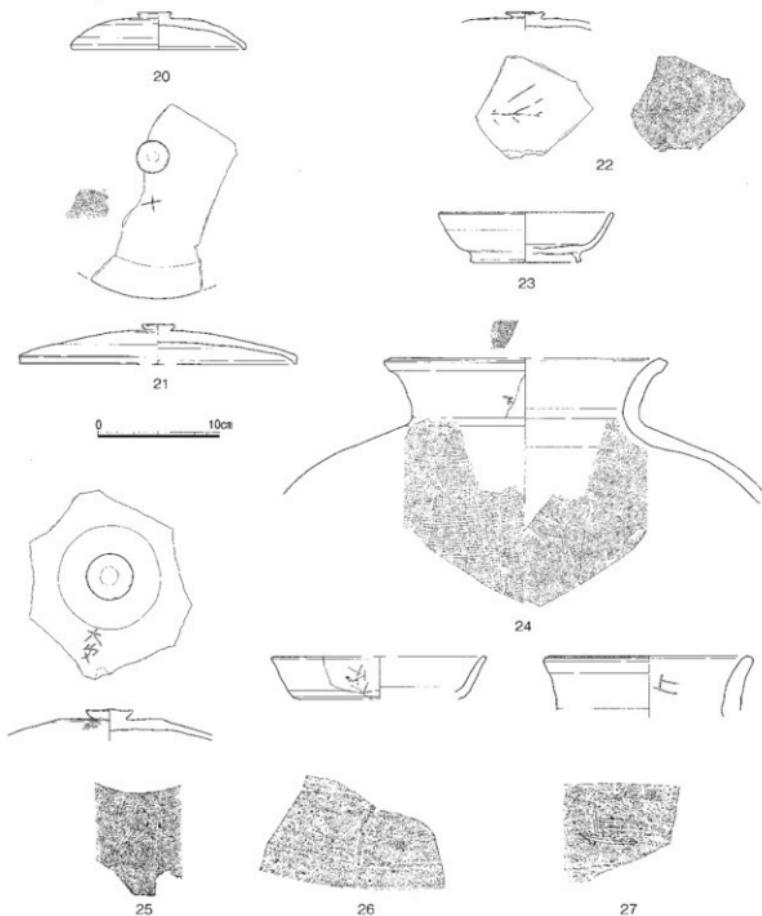
かい全面にわたりハケ目を施し、さらに上半分は棟方向にハケ目を施す。内面は横方向に粗いヘラケズリ、ナデを施す。色調は外面が黄灰色、内面が灰白色、焼成は良好である。

灰原出土の遺物（第22・23図、巻頭図版4、図版18）

トレンチ21の灰原から出土した遺物は非常に多くコンテナ106箱分出土した。また、調査前に1号窯跡群の灰原へ5m×5mのグリットを設定し、壺掘防止のため表面に散布する遺物を採集した。採集、出土した遺物は水洗い、註記、遺物台帳の作成を済ませたが、現在の市教育委員会の体制の中では十分な遺物の整理、検討、図化を進めることは困難な状況であるため、報告書ではトレンチ21の灰原出土の遺物を整理する段階で気づいた点について指摘する。また、今後、寒風古窯跡群の性格や意義を研究する上で重要な資料となる、刻書文字を有する須恵器、鶴尾、特異な当て具痕を有する壺、1-I号窯跡で焼成されたと考えられる資料で胎土分析を行った須恵器等を図化した。

トレンチ21の灰原から出土する遺物の主となる包含層は灰原が最初の段階で形成された、地山直上の第40層の黒色土である。壺・杯類を多く包含し、調査区内では鶴尾・陶棺等の大形遺物の出土はなかった。出土遺物の杯についてみると、『寒風古窯跡群』1978分類による口縁部受け部にかえりを有する身と口縁部にかえりをもたない蓋がセットとなるA類。口縁部受け部にかえりを持たない碗状の身と天井部に宝珠状のつまみを有する蓋がセットとなるB類。平底の底部に断面四角の貼り付け高台を有する身と天井部に碁石状の扁平なつまみを有する蓋がセットとなるC類のいずれもが第40層から出土している。A類・B類は今回の調査で1-II号窯跡で焼成されていることが判明しており、灰原

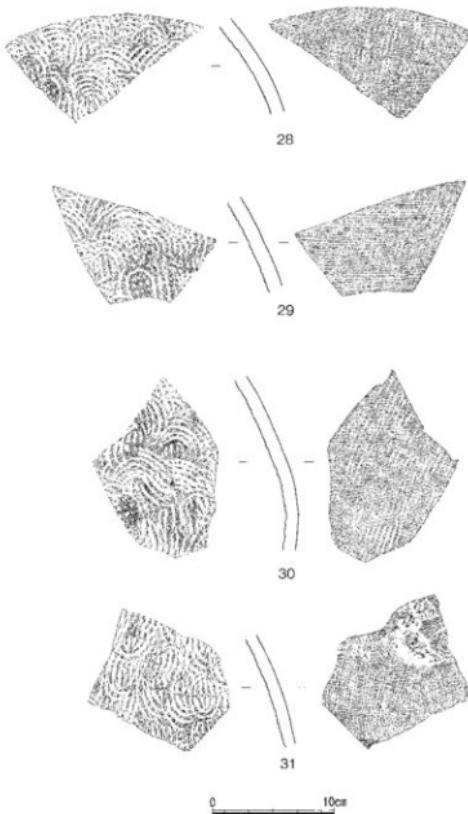
形成にあたり近接する1-II号窯跡の灰原からの遺物が混入し、1-I号窯跡の灰原が形成されていることが分かった。また、第40層からはA類の杯身でも立ち上がりがやや高く、口径が12cm前後の1-III号窯跡床面で出土した杯身は出土していない。このことから、1-III号窯跡の灰原からの遺物はトレンチ21までは及んでいないことが分かった。上下2層の明赤褐色土層の内、下層の明赤褐色土層の上層である第35層の褐灰色粘質土でも第40層と同様な傾向を示した。灰原の大半の堆積層である第20層の黒色土の上層からはC類の出土がA類・B類と比べ多くなる傾向が認められた。



第22図 1-I号窯跡T21灰原出土遺物 (1/4・1/2)

杯蓋20～22は碁石状の扁平なつまみを有しC類に分類される杯蓋である。杯蓋20の天井部は丸みを持ち、口縁端部を短く屈曲する。天井部はヘラケズリ、他はヨコナデを施す。色調は外面が浅黄色、内面がにぶい黄橙色で、焼成はやや良好である。口径は14.0cm、器高は3.1cmを測る。杯蓋21は大型の杯蓋であるが、つまみの径は2.7cmを測り口径の削りに小型のつまみを有する。天井部は扁平で口縁端部を垂直に屈曲する。天井部外面にヘラ状T工具により1.4～1.7cmの長さで「×」状のヘラ記号を有する。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや良好である。推定口径は22.5cm、高さは3.3cmを測る。杯蓋22はつまみを含む天井部の破片である。天井部に貼り付けられたつまみの中央部は窪んでいる。蓋の裏面には細いヘラ状工具により葉脈状のヘラ描きが施されている。ヘラ描きの形態として主脈から左右同時に側脈が出るタイプである。1号窯跡群灰原で採集された時実資料の中に、同じく杯蓋の内面に主脈から左右交互に側脈が出るタイプの葉脈状のヘラ描きを施す例もある。(註8)色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。

杯身23はC類に分類される扁平なつまみを有する杯蓋とセット関係にある杯身である。口縁部は外傾し端部を丸くおさめ、平底の底部には「ハ」の字状に高台を貼り付けている。内外面ともヨコナデを施す。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや良好である。推定口径は14.1cm、推定高台径は8.5cm、器高は4.1cmを測る。壺24は口縁部を「く」の字状に外反し、端部外面を肥厚する。頸部外面にヘラ状工具により「-」の下に「八」を組合せたヘラ記号を施す。胴部外面はタタキ後カキ目、内面は無文の当て具か同心円文を認めず後ヨコナデを施す。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。推定口径は20.2cmを測る。25～27は今回の1～I号窯跡群の窯体主軸延長部の調査区であるトレンチ21で出土した遺物で、焼成前に刻書文字が書かれ、その後焼成された遺物である。杯蓋25は天井部の中央部を直径8.4cm範囲をシャープにヘラケズリして平坦とし、中央部と周辺部をわずかに高くし、宝珠つまみの先端部の面影を残す径3.8cmの扁平なつまみを



第23図 1号窯跡群灰原表探遺物 (1/4)

貼り付けている。ヨコナデした天井部外面に幅1mmのヘラ状工具により縦書きで1.5~1.8cm大の大きさで「大皮」の刻書文字が書かれている。口縁部は欠く。胎土は1mm以下の長石や黒色粒子をやや密に含み、色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。杯身26は口縁部を外傾し端部を丸くおさめる。底部を欠くが高台を有するC類に分類される杯身となる形態を示すであろう。杯部外面には杯を反転した状態で杯蓋25の工具に比べ非常に細い工具により縦書きで1.7cm大の大きさの文字による「大皮」の刻書文字が書かれている。内外面ともヨコナデでゴマ状の灰がかかっている。胎土は2mm以下の長石や黒色粒子をやや粗く多く含み、色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。推定口径は17.3cmを測る。壺27は短く外反する口縁部のみである。焼け歪みにより変形している。口縁内面に幅1mmのヘラ状工具により1.5~2.2cm大の大きさで右にやや傾いた「上」の刻書文字が書かれている。外面は剥離しているが内外面ともヨコナデを施す。胎土は3mm以下の長石や黒色粒子をやや粗く多く含み、色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。推定口径は16.0cmを測る。壺28~31は1-I号窯跡の灰原を確認するための調査区トレンチ21の北側で、盗掘防止のため表面に散布する遺物を表探した壺胴部片である。整理段階で内面の当て具痕に寒風古墳横穴式石室の須恵器床に使用された壺と同じ当て具痕があることから資料報告するものである。壺28・29はおそらく3重の楕円形の中心部の長軸に2条、短軸に3条の格子を施した当て具痕を有するタイプ（Aタイプ）である。外面は格子タタキ後カキ目を施す。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。このAタイプの壺が寒風古墳横穴式石室の須恵器床に使用されていた。壺31は3重の楕円形の中心部の長軸に1条の直線の左右に弧線2条により直線を包む形の計3条と、短軸に1条の線を施し、中心部が「十」字状を呈する当て具痕を有するタイプ（Bタイプ）である。外面はタタキ後カキ目を施す。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。壺30は当て具痕が重なりあって不明瞭であるが、格子状となり方形の当て具痕と楕円の中心部の線が弧状で「十」字状の当て具痕からA・B両タイプを有する壺であろう。外面はタタキ後カキ目を施す。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。以上、壺28~31は内面に特徴的な当て具痕を有するもので、採集位置から明らかに1-I号窯跡で焼成された遺物であることが分かった。また、その遺物の製品が寒風古墳横穴式石室の須恵器床に転用され使用されていることが分かった。このA・Bのタイプを有する壺は寒風古窯跡群以外では今のところ出土例がなく、今後、消費地で同じ当て具痕を有する壺が出土すれば、その壺が寒風古窯跡群の1-I号窯跡で焼成された製品ということになり生産地を知る資料となろう。

(馬場)

4 1-I号窯跡の遺構

窯体（焼成部）（第24~26図、巻頭図版2、図版3）

昭和53年調査の第2トレンチの西側2mに設定したトレンチ19で検出した焼成部は、地山上層の地山は軟質の黄褐色を呈したが下層は硬い岩盤を検出面から深さ約220cm掘り抜いた、地下式無段の密窯構造の登り窯である。窯体の構造を確認するためトレンチ19では床面まで掘り下げた。断面から床面は地山を浅い皿状に掘り抜き、床面の中心部の幅90cmは青灰色の砂質に強い粘土により貼り床され、残りの窯壁までの両床面は岩盤掘り抜きのままであった。窯壁は調査区の西側の土層断面で一部を除くほぼ天井部まで残存していることが判明した。窯壁は床面から大きく角度を変え屈曲し、内湾しながら立ち上がり、天井部はドーム状に丸く粘土を貼り築いている。断面は側壁を見ると楕を伏せた状況を呈した。断面から天井部のスサの入った貼り付けされた粘土の厚さは10~20cmを測った。南側の窯壁ではスサの入った粘土を壁にナデ貼る際、やや弧を描くように指のナデ圧痕が明瞭に残存していた。（写真13）検出した北西側の焼成部の規模は床面幅194cm、窯体最大幅208cm、天井部までの高さ113cmを測った。天井部外面の第70層・第71層は被熱により約15cmの厚さで赤褐色に変色していた。

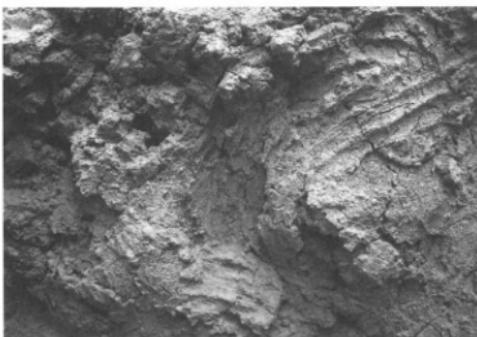


写真13 1-I号窯跡焼成部南側窯壁の指ナデ痕

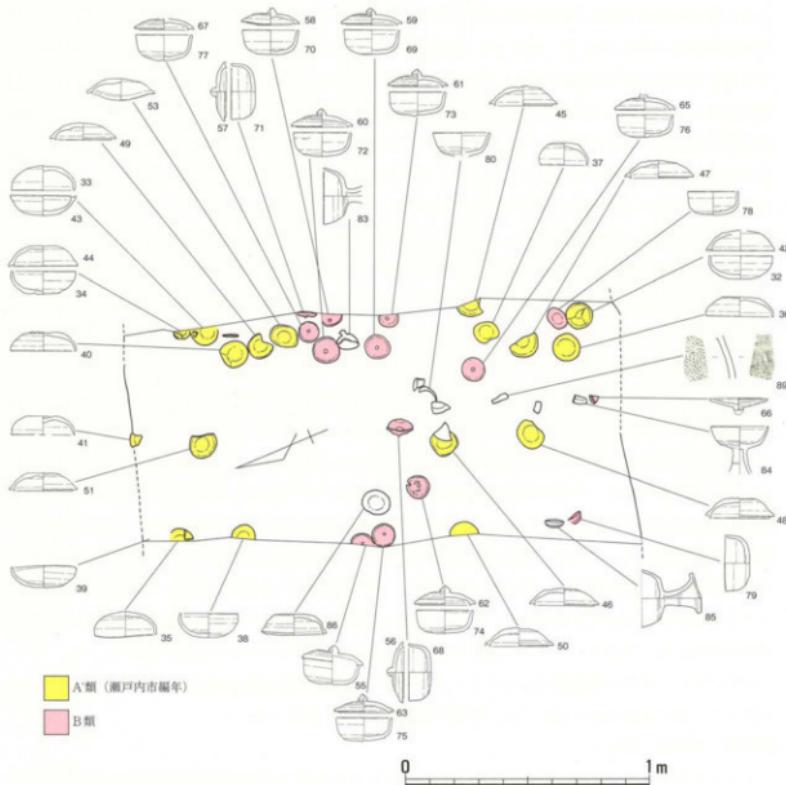
窯体内の堆積層は焼成部の煙道部側の天井が崩落したことにより窯体内に堆積したものである。西側部分の土層では天井部が残存していた結果、天井部との間に長さ93cm、高さ35cmの大きさで空洞が残されていた。5層に分かれた堆積層は下層から粘性が強く、全体に赤い層である第64層のにぶい赤褐色粘質土、窯壁・焼土片を非常に多く含む第63層のにぶい赤褐色粘質土、窯体の中・上層を占める堆積層である第61層の明黄褐色砂質土、第61層の中にブロック状に堆積する第62層のにぶい橙色砂質土、わずかに欠けた天井部の壁や被熱し変色した焼土を含む第60層のにぶい赤褐色砂質土である。

東壁の土層断面では、焼成部の天井部が大きく崩落し窯体内に窯壁が落ち込んだ状況を呈した。床面は西壁同様、地山である岩盤を緩やかな皿状に掘削し、中央部の70cm幅に青灰色粘土の貼り床を行い、他の床面は地山掘削のままで、側壁との境で大きく屈曲し、内湾しながらスサ入り粘土を貼った側壁が天井部へ向かい立ち上がる。南側壁の残存高は103cm、北側壁の残存高は76cm、床面からの窯体の残存高は122cm、焼成部の最大幅は205cm、側壁を含め崩落した天井部の幅は178cmを測った。また、床面の傾斜角度は18°を測った。

窯体の堆積土は天井部崩落後、丘陵上斜面から流れ込んだ埋土や1-I号窯跡の廃棄物である歪んだ須恵器片、陶棺、鷹尾、窯壁片を除く第43層の灰褐色砂質土以下の堆積層と考えられ、10層に分かれた。床面の北側半分の直上には粘性の強い第51層のにぶい赤褐色粘質土が堆積し、その上層には天井・側壁の崩落した窯壁片の層となる第50層~第47層のにぶい橙色粘質土が堆積している。さらに上層には天井上部の被熱により赤褐色に変色した第46層の明赤褐色砂質土や第44層の灰赤色砂質土と第

45層の明黄褐色砂質土が堆積していた。

遺物は窯体の天井部が床面まで崩落したため、窯詰めされ、焼成された遺物がそのまま取り出されることなく床面に残されていた。調査できた床面の範囲は長さ200cm、幅85~100cmの1.85m²で畳の京間1畳(1.82m²)の面積で、出土した遺物の器種と点数は次のとおりであった。A類(『寒風古窯址群』1978分類)の杯蓋10点、A類の杯身13点で内、杯身が合わせとなって出土した組数は3組。B類(『寒風古窯址群』1978分類)の杯蓋13点、B類の杯身13点で内、杯身が合わせとなって出土した組数は11組。他に高杯6点、短頸壺の蓋1点、壺片3点の計58点が出土した。窯体内的限られた調査範囲であったが、焼成された器種は高杯を含めほとんどが杯である。窯体内的器種による窯詰めの場所が異なることを示す事例かもしれない。杯のタイプはA類・B類ともほぼ同数であった。ただし、C類の杯は1点も出土しておらず、改めて1-II号窯跡でC類の杯が焼成されていないことを確認した。



第24図 1-II号窯跡T19焼成部床面遺物出土状況・出土遺物 (1/20・1/8)

第24図は床面上の遺物の出土位置と出土状態を表した図面である。検出した焼成部の床面の傾斜角度は18°であり、床面に置かれた遺物が焼成時や焼成後、天井部の崩落により移動した可能性もあるが、焼成の主となったA類・B類の杯の出土位置と出土状態について観察してみたい。出土位置について、A類の杯は床面の全体にわたり出土している。それに比べB類の杯は杯身のセット関係であるため検討する個体数が少なくなるが、床面の中央部約120cmの幅に収まり出土している。出土状態について、A類の杯身の合わせとなって出土した3組の内2組が通常の蓋と身の関係と異なり、口縁部受け部にかえりを有する身を上にした合わせの状態であった。口縁部受け部にかえりを有するA類の杯身を反転する状態は、身のみ単体で出土した10点の内、出土状況が確認できた8点すべてが反転した状態であった。口縁部にかえりをもたないA類の杯蓋では、蓋のみ単体で出土した7点の内、出土状況が確認できたのは、通常の口縁部を下にした状況で4点、口縁部を上に反転した状況で2点であった。次にB類の杯身が合わせとなって出土した11組の内、明らかに床面の傾斜により横倒しになったと考えられる2組を含めすべて通常の合わせ状況であった。口縁部受け部にかえりを持たない碗状のB類の杯身単体で出土した内1点(図28の78)は通常の状態で出土し、天井部に宝珠状のつまみを有するB類の杯蓋単体で出土した1点(図28の66)は小片であるが、つまみを下に反転した状態で出土した。この2点の杯は他のB類の杯に比べると焼成による歪みや小片のためや小ぶりで、出土状況を観察すると本来蓋杯の合わせとなっていたものが蓋が外れ窓体の下方へ反転して転がったものではないかと推察されるようになった。近くにB類の杯が単独で出土していないことからも本来合わせ状態であったと考えるのが自然ではないか。そうすると単体で出土した杯身79も調査区外に外れた蓋が存在する可能性もあり、B類の杯は合わせ状態で焼成されたことが推察される。

天井部の崩落後陥没した深みに堆積した層の中で、第40・39・38・37・58層からは窯跡片や遺物を含む層であり、特に第40層のにぶい橙色砂質土中には多量の須恵器や窯跡片の他、陶棺、鶴尾片が出土した。出土した須恵器はC類で、鶴尾の鱗の文様には1号窯跡群の灰原から出土した鶴尾と同じタイプの文様を有するものもあり、1-I号窯で焼成され廃棄された遺物であることが分かった。

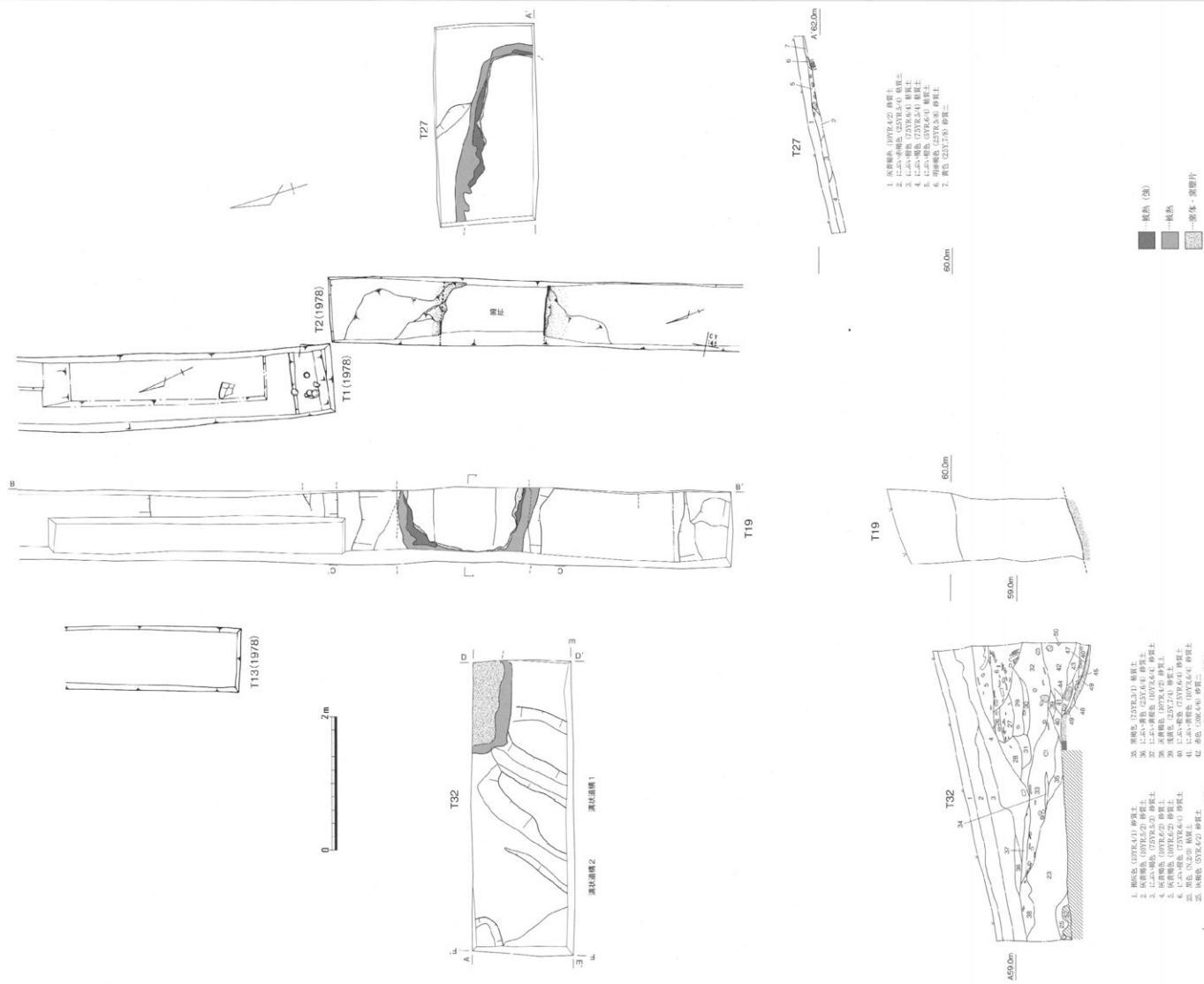
トレンチ19の調査区は1-I号窯跡と同様1-II号窯跡の窯体を横断する形であるため、窯の外周部に排水溝などの付随施設の有無についても確認した。このことは、昭和53年調査の際、第1トレンチで1-II号窯の北側壁から1m北側で排水溝と考えられる幅50cm、深さ20cmを測る溝状造構が検出されていたためである。今回の調査でも溝状造構の有無について確認したところ、窯体の北側壁から約100cm離れた位置で窯体上部と並行し、昭和53年調査の西延長上の位置で幅50cm、深さ15cmを測る溝状造構を検出した。さらに、窯体の南側壁から約180cm離れた位置で断面「U」字形のピット状の造構を検出した。幅は約60cm、深さ20cmを測った。地山面を掘りすぎたためピット状造構の平面でプランを確認することはできなかった。トレンチ19の調査区南端部で1-III号窯跡方向へ向けて傾斜する地山を切り込んでおり、1-II号窯跡に何らか関係する造構ではないかと推察される。

以上、トレンチ19の確認調査により1-II号窯跡の焼成部の最大幅は208cm、天井部の全高は113cmを測った。窯の主軸はN-109°-E、床面の傾斜角度は18°を測った。

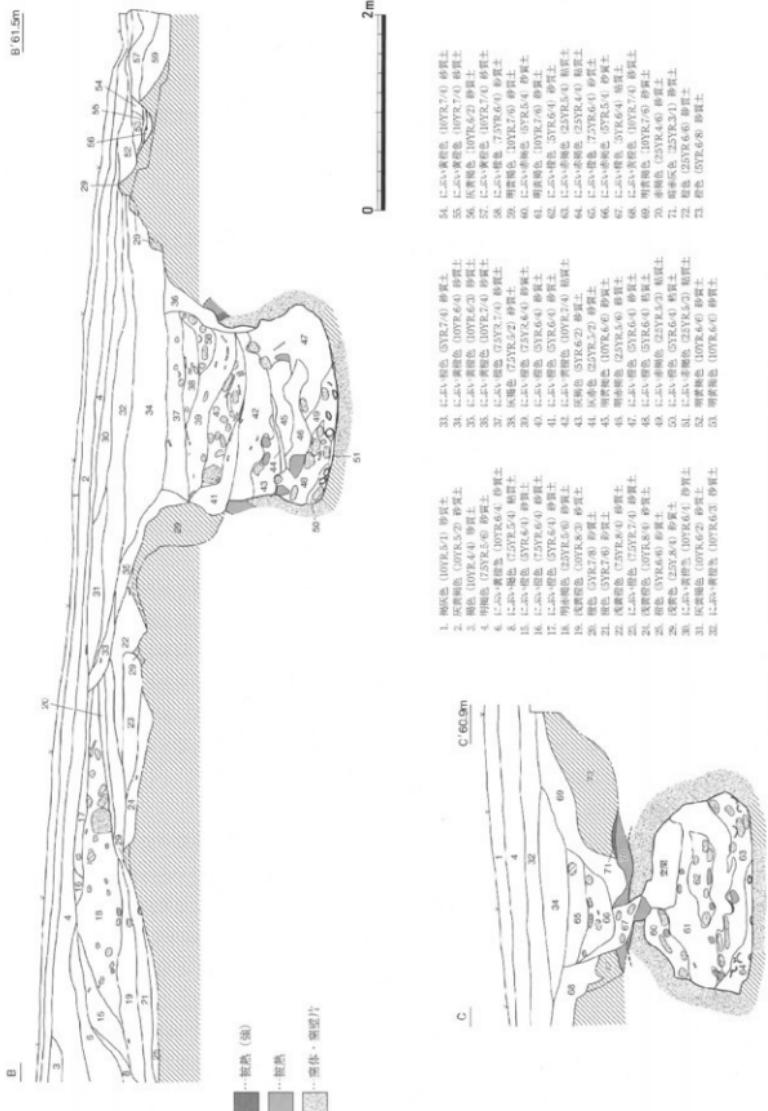
煙道部(第25図、図版3)

トレンチ19から東へ4m、昭和53年調査の第2トレンチの東へ1mで煙道部を確認するため設定した調査区であるトレンチ27で1-I号窯跡と同様、表土層を取り除くと風化花崗岩の地山と被熱し赤褐色に変色した煙道部北側の約半分のプランを検出した。本トレンチでは煙道部の位置を確認するこ

第25图 1—Ⅰ号窑隙窑体平·断面图 (1/50)



1. 硅质岩 (Siwei Yan) / 硅质岩 (Siwei Yan)
 2. 泥质岩 (Nizi Yan) / 泥质岩 (Nizi Yan)
 3. 泥质岩 (Nizi Yan) / 泥质岩 (Nizi Yan)
 4. 泥质岩 (Nizi Yan) / 泥质岩 (Nizi Yan)
 5. 泥质岩 (Nizi Yan) / 泥质岩 (Nizi Yan)
 6. 泥质岩 (Nizi Yan) / 泥质岩 (Nizi Yan)
 7. 风化带 (Fenghua Tai) / 风化带 (Fenghua Tai)



第26圖 1号墓跡 T1焼成部断面図 (1/50)

とが目的であり内部については調査しなかった。検出した煙道部は、焼成部の北側壁が直線に幅を狭めながら煙道部に向かい、煙道端部で角を有する様に屈曲し端面を丸くおさめている。焼成部から煙道部の側壁には厚さ2~4cmで粘土が貼られ、焼成を受け硬く焼け締まっている。側壁の外面には幅5cmの厚さで被熱により地山が赤紫色に、その外部には幅約10cmの幅で赤色に変色していた。

検出面での煙道内部は、焚口端部から焼成部に向かい約100cmの間は半円弧状に赤く変色している上層断面第2層のぶい赤褐色粘質土や、その内側には窯壁片や炭粒子を含む土層断面第5層のぶい橙色粘質土が認められ、煙道の口痕跡を呈する様である。後世に大半が削平されているようであったが、検出時遺物の出土はなかった。

焚口部・燃焼部（第25・27図、図版3）

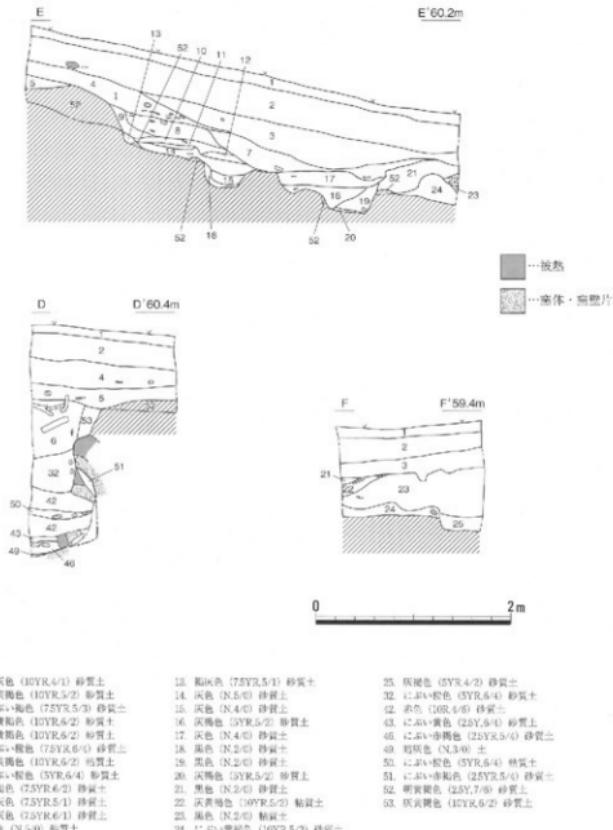
トレンチ19の焼成部から西へ15mに設定した調査区のトレンチ32で焚口部と燃焼部を検出した。焚口部は調査区の南東端部を現地表から約70cm掘り下げるとき地山面を検出。また、北東端部では炭粒子や焼土と共に鶴尾や陶棺片を含む1-I号窯跡からの廃棄物の堆積層を確認した。そして、地山面を追い掘り下げるとき10~20cmの幅で被熱により隅丸長方形状で赤褐色に変色した焚口部から燃焼部の外側と窯内の貼り床面を検出した。調査区内で検出できた最大の長さは125cm、幅47cmを測り、幅から全体の約1/2を検出した。窯体主軸方向の横断面は、焚口端部から約30cmはほぼ水平に粘土の貼り床であるが、それ以降は燃焼部となり窯体内に向かいだして下がっていく。窯体内に向かう貼り床を一部掘り抜いてしまったが約5cmの厚さで粘土が貼られ、その下部の地山は赤褐色に変色していた。調査区東壁の燃焼部の土層断面では、底面は緩やかな「U」字形を呈するが、側壁で大きく屈曲しやや内湾しながら立ち上がっていった。底面にはA類に杯蓋、B類の杯身、壺が出土した。A・B類の杯とも口縁部を床面にした状態で出土した。

焚口部から燃焼部の堆積土は、北壁土層断面によると下層から貼り床面に薄く堆積する砂層状の第47層黄色砂質土。遺物出土あたりから窯体内に向かい場所に堆積する崩落した天井部の窯壁の堆積層である第46層のぶい赤褐色砂質土。窯壁やジャリジャリした砂を含む第45・44層のぶい橙色砂質土・ぶい橙色粘質土。粘性が強く、窯壁のかたまりの層である第43層のぶい黄色砂質土。天井上部の被熱により赤く変色した第42層の赤色砂質土が約50cmの厚さで堆積している。第42層から上層は窯体が崩落した後に窯壁を多く含む1-I号窯で焼成された廃棄物の堆積層であると考えられ、第6層のぶい橙色砂質土中に須恵器・鶴尾・陶棺片を多く含んでいた。

前庭部（第25・27図、図版3）

トレンチ32の焚口南外面の地山が前庭部を囲むよう一段の段を持ち、焚口端部中央から西側に向かいわざかに下りながら平坦部を有する。地山面は主軸方向の中心にはほぼ平坦であったが、中心部を外れると甲羅状に溝状の亀裂が走りゴツゴツした底面を見せた。この前庭部には焚口南端部から窯主軸方向に対し約120°の角度を持ち、南西方向へ上幅約40cm、下幅約17cm、深さ20cmを測る断面が「U」形の溝状造構1を検出した。さらに、溝状造構1の西側約60cmで、溝状造構1と並行する形で上幅約40cm、下幅約20cm、深さ20cmを測り、断面が「U」形の溝状造構2を検出した。この2条の溝の底面は平坦で、レベルから見ると前庭部外面から前庭部や焚口方向へ向かっている。南壁の土層断面から、溝の中には灰色砂質土や黒色砂質土を含む。今回窯体に向かい右側部分での2条の溝であるが左右対称に存在するかについては不明である。位置や2条の溝の関係から須恵器焼成に関わる造構と考えられる。

前庭部の堆積土は、地山面から前庭部全体にわたり半円状に堆積する第23層の黒色粘質土で、0.5~3cmの炭粒子やオレンジ色の粘土ブロックを非常に多く含む。須恵器や窓壁片も含んでいた。第23層の堆積層は厚い箇所で約60cmに達していた。焚口近くには粘性が強く、0.5~2cm大の炭粒子を多く含む第35層の黒褐色粘質土が、第23層と同様焚口部に向かって堆積していた。焚口端部から250cm西側の前庭部床面は甲羅状に凸凹してきて、床面の上層には3cm大の焼土を多く含みボソボソした第25層の灰褐色砂質土が堆積していた。第23・35層より上層は窓体の天井部崩落以降に堆積した層であろうと考えられる。



第27図 1-II号窓跡T32焚口・前庭部断面図 (1/50)

5 1-Ⅱ号窯跡の出土遺物

焼成部床面出土の遺物（第28・29図、図版20・21）

トレンチ19の焼成部は焼成後天井部が崩落したため、窯詰めされ、焼成された遺物が床面に残された状況で出土した。調査できた床面1.85m²の範囲の中で同化できた遺物はA類の杯蓋32~41の10点、A類の杯身42~54の13点、内、杯身が合わせとなって出土した組数は3組。B類の杯蓋55~67の13点、B類の杯身55・68~79の13点で内、杯身が合わせとなって出土した組数は11組である。他に高杯80~85の6点、短頸壺の蓋86の1点、壺87~89の3点の計59点が出土した。

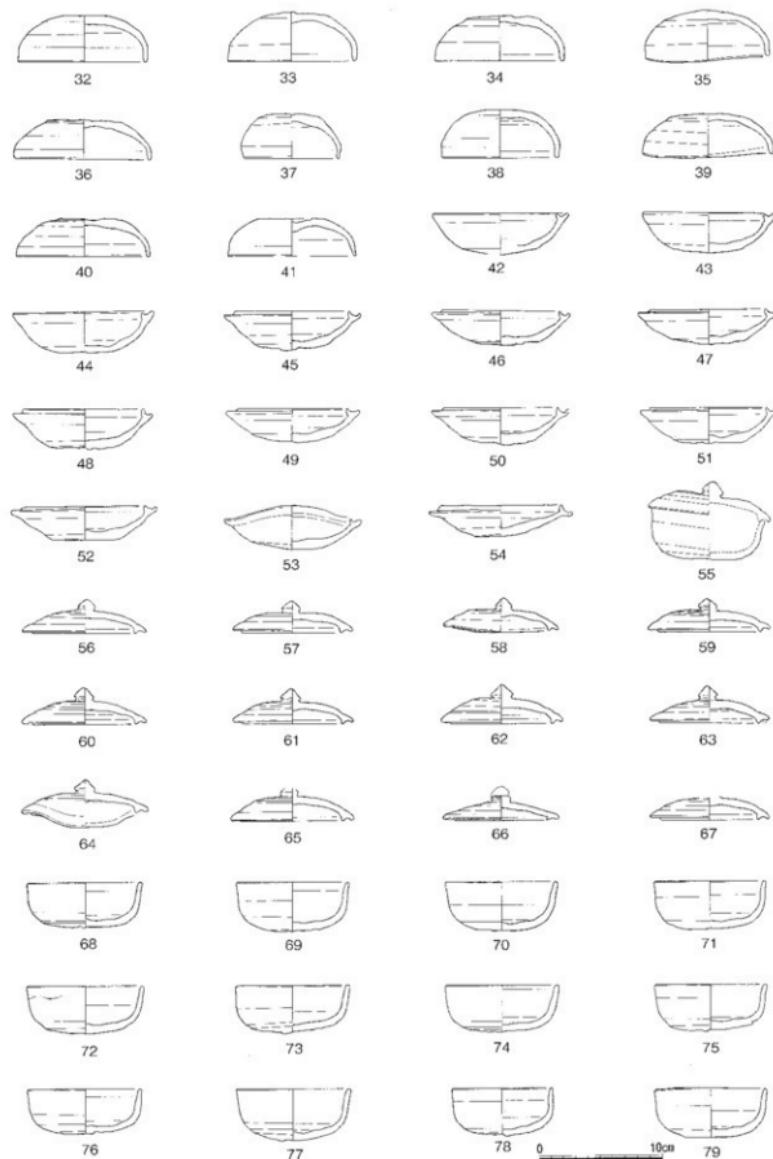
A類の杯蓋は、天井部に丸みがなく平たく、口縁部を屈曲し端部に丸みを持つ形態である。口縁部の特徴から3つのタイプに分類できる。1つ目のタイプは32~36の口縁部を垂直に下ろすタイプ。2つ目のタイプは37・38の口縁部をやや内傾し下ろすタイプ。3つ目のタイプは39~41の口縁部をやや外傾し下ろすタイプである。焼成による焼け歪みが大きく3つのタイプ分けが製作上で意識されたものか、焼成によるものかについては不明である。41の天井部には窯壁片が多数付着していた。各タイプに調整等の差はなく、A類杯蓋の調整は外面天井部がヘラ切りで他はヨコナデである。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。口径は10.0~10.8cmで平均10.3cm（37を除く）、器高は3.1~4.1cmで平均は3.6cmを測った。ただし、37は焼成時の焼けひずみもあり、口径が7.6cmと他の杯蓋と比べ一回り小型であった。

A類の杯身は、かえりは短く内湾し先端を細く仕上げ、5~6mmの高さを測る。受け部は外方へ内湾しながら端部に丸みを持つ。かえりと受け部は高さの関係から2つのタイプに分類できる。1つ目のタイプは42~44・53のかえりの高さが5mm以下で低く、受部より上に出ないタイプ。2つ目のタイプは45~52・54のかえりの高さが6~7mmで、受部より上に出るタイプである。ほとんどが2つ目のタイプである。45の外面には自然釉が付着している。46の外面上には壺片や自然釉が溶着していた。A類杯身の調整は、底部外面がヘラ切り後ナデ、その他はヨコナデである。色調は外面が灰色ないし灰白色、内面が灰色で、焼成は33・34がやや軟質であるが他は良好である。口径は8.9~9.9cmで平均9.5cm、器高は2.6~3.4cmで平均は3.1cmを測った。

A類の杯で蓋身が合わせとなって出土した資料は、32~42・33~43・34~44である。

B類の杯蓋55~65は、A類の杯部の様に天井部に丸みがなく扁平な形状で、中央部に宝珠状のつまみを有している。口縁の内面端部に内傾するかえりを有する。かえり端面は丸く仕上げている。宝珠状のつまみの形状は、径1.4~1.7cmの円柱の上に径1.4~1.7cm、高さ0.5~0.7cmの三角錐を乗せ、台となる円柱部を径1.2~1.5cmにくびれを入れた様を呈する。杯蓋67はつまみ部分のみ被損してないが、天井部の形態から他の杯蓋同様宝珠状のつまみを有していたと考えられる。その中で、杯蓋66は天井部がほぼ直線的に開き口縁部に至る形状を呈し、つまみから天井部にかけて窯壁片が溶着している。出土状況から66は78とのセット関係にあった可能性を指摘したが、蓋の形状等では他の杯蓋とは異なっていた。B類杯蓋の調整は、外面天井部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。色調は外面が灰色ないし灰白色、内面が灰色、灰白色であるが、65の内面は暗オリーブ灰色を呈した。焼成は良好である。口径は7.6~8.4cmで平均8.1cm、器高は2.6~3.1cmで平均は2.9cmを測った。

B類の杯身55・68~79は、平底気味を呈する底部から身部を口縁部に向かいまっすぐ立ちあげ、口縁部をわずかに外反気味に開き、端部を丸くおさめる形態である。A類杯の蓋と身の平均器高差が0.5cmであるのに対し、B類杯の蓋と身の平均器高差は1.1cmもあり杯身の器高が非常に高いことが分



第28図 1-II号窯跡T19焼成部床面出土遺物1 (1/4)



第29図 1-I号窯跡T19焼成部床面出土遺物2(1/4)

かる。B類杯身の調整は、底部外面がヘラ切り後ナデ、その他はヨコナデである。色調は内外面とも灰色ないし灰白色で、焼成は良好である。口径は8.1~9.0cmで平均9.0cm、器高は3.7~4.3cmで平均は4.0cmを測った。

B類の杯で蓋身が合わせとなって出土した資料は、55・56・68・57・71・58・70・59・69・60・72・61・73・62・74・63・75・65・76・67・77である。

高杯80~85は、杯部はB類の杯身の身部が外傾し直線的に口縁部に至る形態を呈し、85の脚部は細長く伸びながら開き、端部を垂直に屈曲している。高さは6.0cmを測る。84・85の脚部中央には1条の凹線を施す。82の杯部と85の脚部は焼け歪みで大きく歪んでいた。高杯の調整は、内外面ともヨコナデである。色調は内外面とも灰色ないし灰白色で、焼成は良好である。口径は9.0~9.3cmで平均9.2cmを測った。

短頸瓶の蓋86は扁平な天井部で、口縁端部を内側に短く屈曲する。口径は9.2cm、高さは3.5cmを測る。色調は外面が灰白色で、内面は灰色で、焼成は良好である。

要87は外反し口縁端部をやや肥厚する口縁部片で、外面に上下方向にヘラ状工具によるヘラ記号を施す。色調は外面が灰色で、内面は灰白色で、焼成はやや不良である。甕88は口縁部片で、外面に凹線に区画された波状文を施す。色調は外面が灰黄色で、内面は灰白色で、焼成は良好である。甕89は胴部片で外面はタタキ後カキ目、内面は同心円文の当て具痕が施される。色調は外面が灰白色で、内面は灰色で、焼成は良好である。

焼成部上層埋土出土の遺物（第30~35図、図版20・21・24）

天井部の崩落後陥没した崖みに1-I号窯で焼成され廃棄された多量の遺物の内、鷹尾90~95、陶植96~100、中空円面鏡101について紹介する。

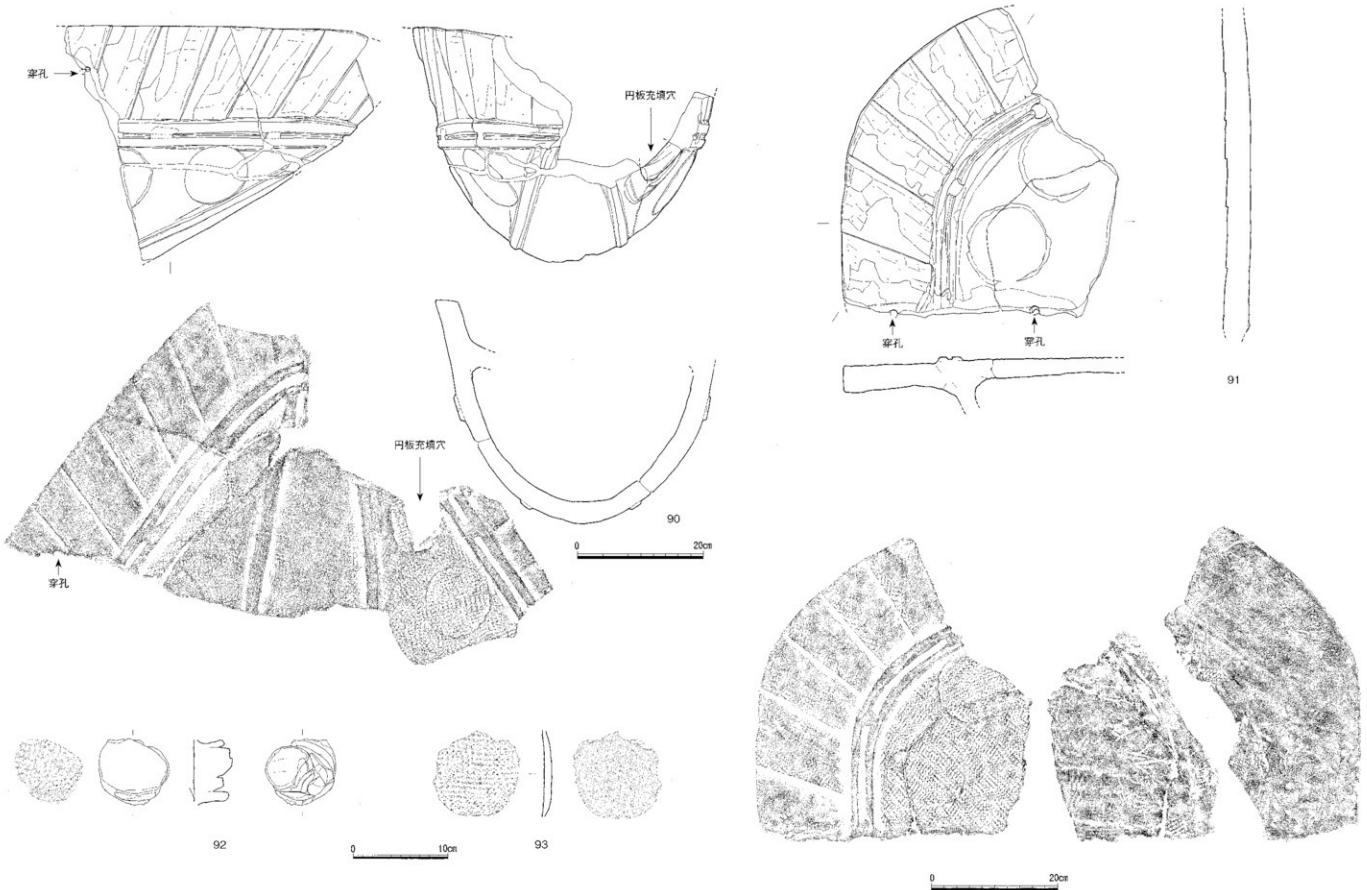
鷦尾90は頂部の中軸から左右に鱗部と側面部が下方に向かっていく破片である。鱗部にはヘラ状工具により7.0~7.5cm幅で平行四辺形の区画を引き、区画の下方を約5.0cm幅で削る「正段型」の割り出しの文様を施す。鱗部の中央部に1ヵ所、径約1.0cmを測る焼成前の穿孔が認められた。穿孔は外面から内面に向かい棒状の工具により施されていた。鱗部と胴側面を区画する縦帯は2条の貼り付け突帯で、約15cmの間隔で粘土塊により繋がれている。また、脊綫部の側面には各1条の貼り付け突帯を施し、縦帯の突帯とつながる。2条の縦帯と脊綫部の側面の1条の突帯の内側には径約10.5~11.0cmを測る円形の粘土円盤が貼り付けられていた痕跡を残している。右側面の粘土円盤の剥落部分には径約7.0cmの透かし穴が認められた。資料の整理段階で何かの蓋ないし栓の様な土製品92が見つかり、外面の格子タタキ目は鷦尾90と酷似していることが分かった。このため、土製品92を鷦尾90の透かし穴に合わせたところピッタリと接合することから土製品92は鷦尾90の透かし穴の閉塞に使用された土製品であることが判明した。土製品92は径35×5.0cmの不正円形、長さ4.1cmを測る円柱状の粘土塊の周囲に扁平な粘土片を径6.0×7.0cmの大きさになるよう周囲に巻き重ね、栓状の土製品を作り、鷦尾90の透かし穴に差し込み外面には格子タタキを施し、さらにその上に皿状の粘土円盤を貼り付けて仕上げたものである。以上の製作工程は、鷦尾が破损したことにより判明したもので、胴部を腹部により空洞に製作し、最後に胴部の手首を抜く透かし穴を塞ぎ、さらに円形の粘土盤を貼り付けて仕上げていることが分かった。このことは、鷦尾の製作工程を知る上で重要な資料となった。色調は灰白色で、焼成はやや不良である。鷦尾90は外面が全面を格子タタキ後、鱗部はヘラケズリを施す。内面は一部、同心円文の当て具痕後、全体粗いナデを施す。色調は外面が灰白色で、内面が浅黄褐色を呈する。焼成はやや不良である。鷦尾91は鷦尾90と同一個体と考えられる個体である。鷦尾の左側面で頂部から側面部にかけて大きく角度を変えている肩部にあたる。鱗部にはヘラ状工具により7.0~12.0cm幅で平行四辺形の区画を引き、区画の下方を約5.0~7.0cm幅で削る「正段型」の割り出しの文様を施す。鱗部と胴側面を区画する縦帯は2条の貼り付け突帯が施され、約17cmの間隔で粘土塊により2条の突帯間を繋いでいる。縦帯内には径13cmの大きさで円形粘土盤が剥離した痕跡が2個体分残存していた。鱗部と縦帯のほぼ中央に各1ヵ所、径約1.0cmを測る焼成前の穿孔が施されていた。外面は全体に格子タタキ、鱗部はヘラケズリを施す。内面は同心円文の当て具痕、一部、格子タタキ後、全体に粗いナデを施す。色調は内外面とも灰黄色。焼成はやや不良である。土製品93は鷦尾90・91の縦帯内に径13cm前後の大きさで円形の剥離痕に貼られていた皿状の土製円盤である。この土製円盤について、昭和13年8月15日に寒風1号窯跡群灰原で出土した土製円盤を時實黙水氏は、「餅型飾?」としてカードに記載し整理しており、陶植に付けられる飾りであると認識していたようである。(註8) 土製品93の大きさは9.3×9.4cm、厚さ0.8cmを測る。外面はオサエ後ナデ、内面は格子タタキの圧痕。色調は内外面共に灰白色。焼成はや良好である。この土製円盤の性格については西播磨の古代寺院で多く使用された縦帯に連続する軒丸瓦である迦葉文や、珠文帯の変形したものと考えられている。(註9) 鷦尾94・95は鱗部に葉状文を施すタイプである。葉状文はヘラ状工具で輪郭部を描き、内側から斜めに削り取り、後ナデ仕上げている。文様の中央には「しのぎ」は認められない。鷦尾95は鱗部の右側面の下端部で側面はヘラケズリ、底面は植物纖維状の圧痕が認められる。鷦尾94は焼成が悪く器面の調整は不明瞭であるが、内外面とも格子状のタタキを施す。色調は灰白色を呈する。鷦尾95は外面が格子タタキ後ヨコハケ、内面が同心円文の当て具痕後ナデを施す。色調は灰色を呈し、焼成はやや不良である。陶植96は陶植の身の側面部片で、上端部から脚部が付けられる底部の屈曲

部まで残存している。側面の高さは47.5cm、厚さは4.5~5.7cmを測る。外面の上端部6.5cm幅で、厚さ5~7mmの粘土帯を有している。外面は粘土帯部が横向のヘラケズリ、側面部は横方向のヘラケズリ後、縱方向にヘラケズリを施す。内面は縱方向にヘラケズリ後、上部は横方向にナデを施す。胎土は3~5mmの黒灰色の粒子を密に多く含む。色調は灰白色で、焼成はやや不良である。

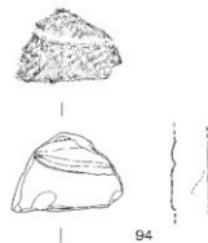
97~100は同一個体の陶棺片である。これらの陶棺の脚部は方形の形状や製作工程で従来の脚部と異なるもので、今まで確認されている陶棺でも類を見ない脚部である。しかし、時實黙水氏はかつて陶棺の説明で「・・・陶棺は主として家型陶棺で、その部品も出土、脚は普通の筒型が多いが、方形のものもあった。・・・」とし、方形の脚の存在も確認していたようである。(註10) 以下、脚部の製作工程を中心概説してみたい。**98・100**から脚部はおそらく粘土紐巻上げにより円筒形の中心となる脚部を製作する。大きさは上端部で径約12cm、下端部で約16cm、高さ約14.5cmを測る。巻上げられた円筒形の脚部は壺の製作と同様に、外面には格子状のタタキ、内面には同心円文の当て具痕が認められる。円筒形の中心部の脚部が出来上がると、円柱の四隅に2.5~4.0cm幅で三角状に中心部の脚で使用された粘土より白色が強い粘土が貼り付けられ、ヘラ状工具により貼り付けられた四隅は角を持つ様に三角形に、他の部分は丸みを水平に、断面が四角柱になるよう器面を下方から上方へ全体にヘラケズリを施す。**100**の脚部外面の四隅に貼り付けられた胎土の砂粒が細かくザラザラしており、また色調も灰白であるため、約2~3cm幅で貼り付けの部分を明瞭に確認できる。内面の角部分は方形気味であるが丸みを持ち、縱方向にナデを施す。こうして、上端部の幅12.0~12.5cm、下端部の幅13.0~14.5cm、高さ14.5~15.0cmを測る方形の脚部が出来上がる。脚部とは別に身部**97**の底面には方形脚が剥落した痕跡が明瞭に残存しており、脚部の配置や接合方法を確認することができた。まず、身の長軸方向には3ヵ所の脚の剥落痕、短軸方向には2ヵ所の脚の剥落痕が残存していた。それによると、長軸方向の脚部の間隔は約6.0cm、短軸方向の脚部の間隔は約12.5cmを測り、長軸方向の脚部は短軸方向と比べ約半分の短い間隔で並べられていることが判明した。脚部は身部に筒状の脚部上端部を配置し、脚部の周囲を2.0cm程度の厚さで埋め込む。剥落した脚部痕から底面は平行タタキを施していたことを確認した。身の厚さ3.8~4.2cmを測り、身内部をヘラ状工具によるヘラケズリとヨコナデ、脚の付けられた底面は平行タタキを施し、脚を付けた後、周囲を押えと粗雑な指ナデを施す。色調は灰白色を呈する。焼成はやや良好である。

101は中空円面鏡の把手である。水鳥の頭部を模した形状を呈し、把手中央部には鳥の目を意識したかのように径4mmの焼成前円孔を有する。頸部上面には幅1.2cm、深さ1.0cmを測る溝を有する。外面はヘラ状工具によりシャープに面取り状に削られている。色調は灰白色で、焼成は良好である。**101**の把手形態は、菊井佳弥氏により「杵型」「鳥型」「亀型」の3つに分類される中の「鳥型」に分類されるものである。また、鳥型の消費地域は畿内を中心に出土していることである。(註11) 寒風古窯跡群からは時實黙水氏により4点の中空円面鏡が採集されているが、その内3点が把手の先端が鳥のくちばしの様に上向きで尖り、さらに先端部に円孔を有する資料がある。**101**は把手の先端が上向きで尖るタイプではないが、「鳥型」の先端形態が今までにない、いかにも水鳥を泳ぐ水鳥の頭部を模した形態を示し注目される資料である。

(馬場・関)



第30図 1 - II号窯跡上層T32埋土出土遺物1 (1/6・1/4)



94



95

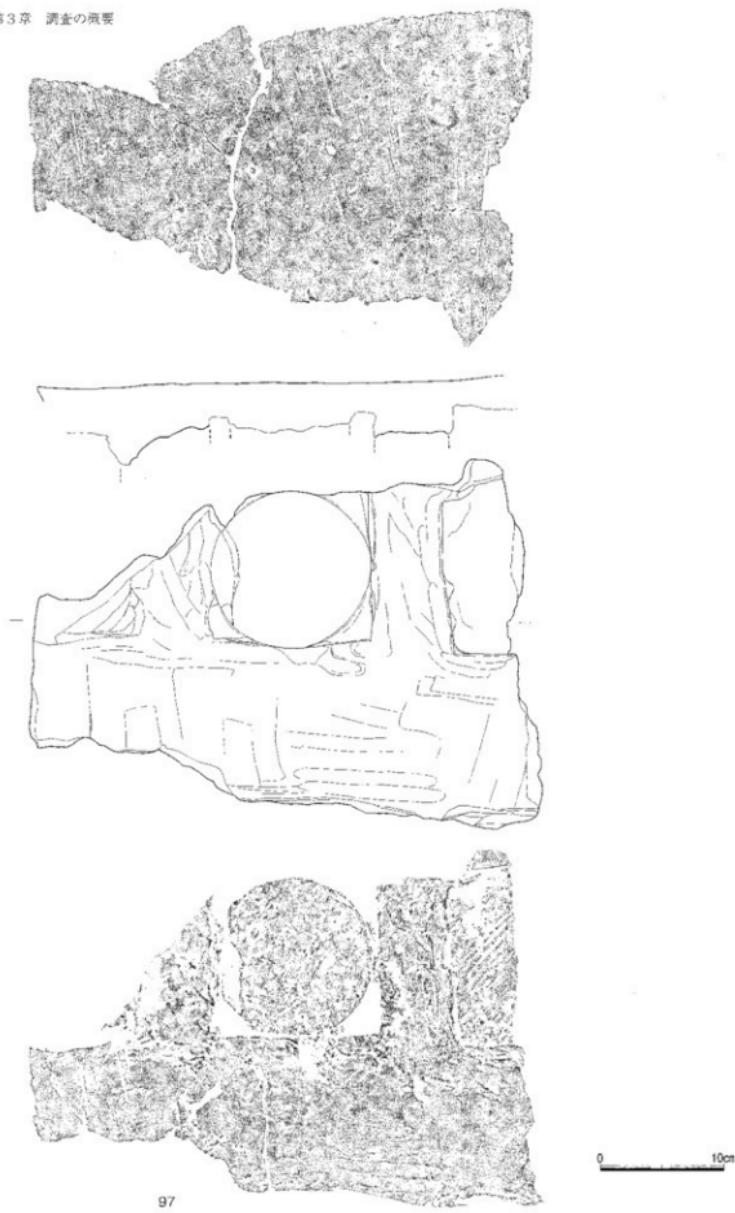


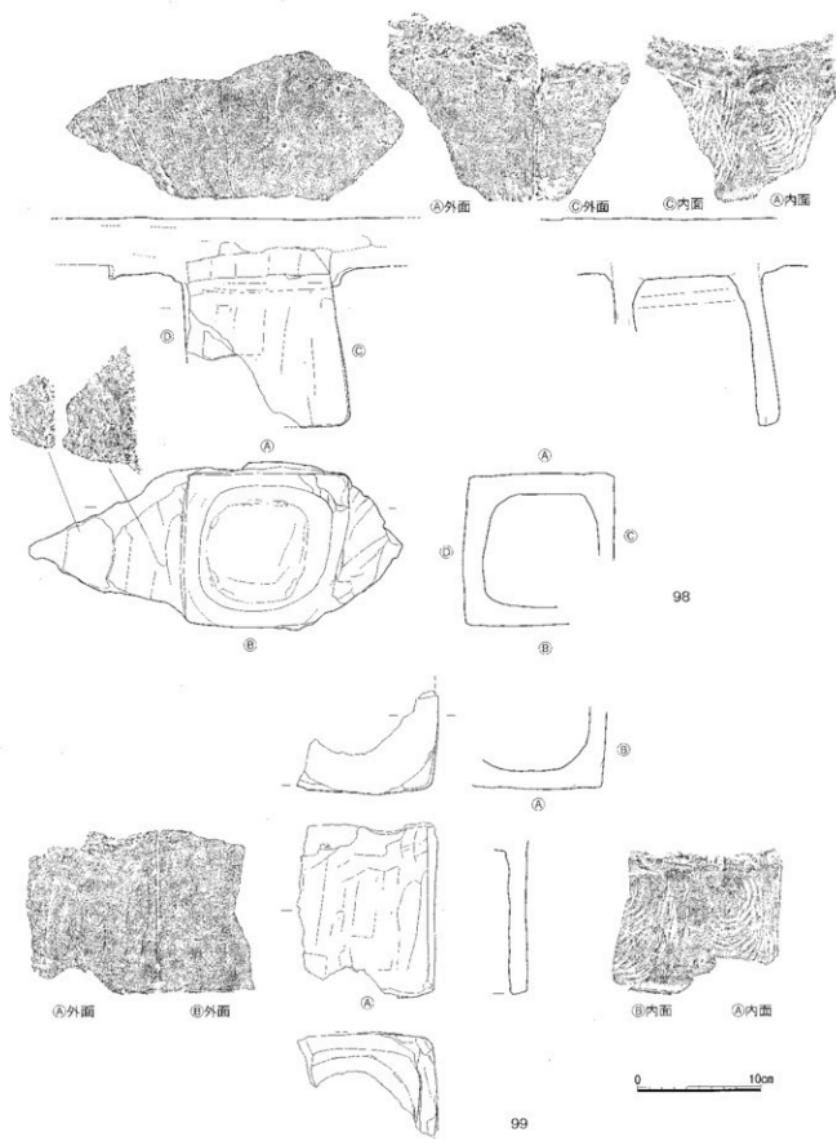
96

0

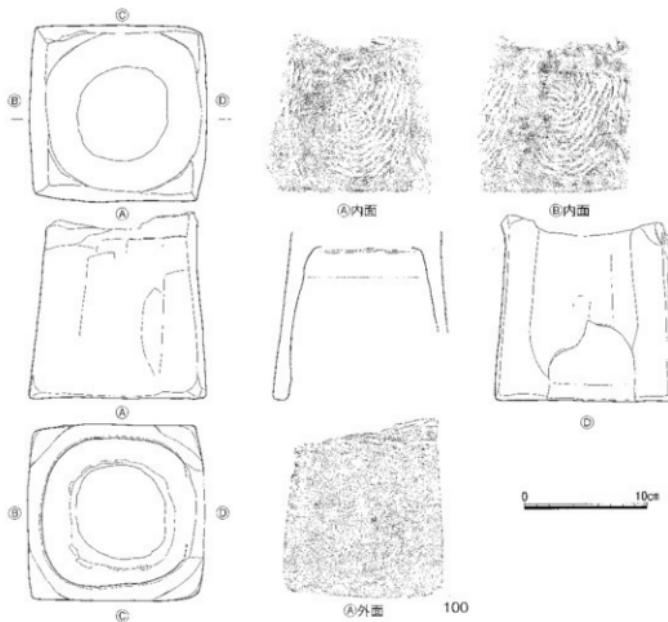
20cm

第31図 1-Ⅱ号窯跡上層T32埋土出土遺物2 (1/6)

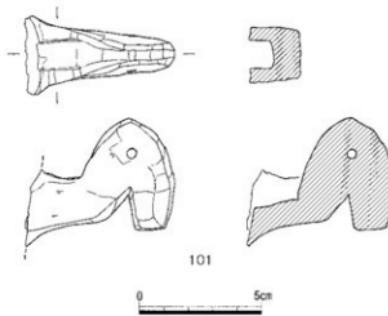




第33図 1-Ⅱ号窯跡上層T19埋土出土遺物2 (1/4)



第34図 1 - II号窯跡上層T 19埋土出土遺物3 (1/4)



第35図 1 - II号窯跡上層T 32埋土出土中空円面鏡把手 (1/2)

6 1 - III号窯跡の遺構

窯体（焼成部）（第36・37図、図版4）

平成17年（2005）3月、奈良文化研究所に委託し1号窯跡群周辺の磁気探査とGPR探査を実施した。その結果、従来確認されている1 - I号窯跡と1 - II号窯跡の2基の窯跡の他、1 - II号窯跡の南側約7mで遺構の存在を示す反応があり、窯跡の存在が想定された。このため昭和53年調査の第2トレ

ンチの西側0.5mにトレンチ18と1-I号窯跡・1-II号窯跡の窯体の主軸に直交するトレンチ19の西側1mにトレンチ20を設定し調査した結果、物理探査で反応のあった箇所のピンポイントで新規に窯跡を発見することができ、調査区も最低範囲の大きさで済むことができた。

まず、トレンチ18では焼成部天井の崩落後、その窯地を利用し大甕3個体以上や陶棺身の破片を埋納した土壌1を検出した。遺構の概要については「8 土壌1の遺構と出土遺物」で紹介するが、土壌1の下層において焼成部を検出した。

トレンチ18で検出した焼成部は、地山上層の地山は軟質の風化花崗岩の地山であったが下層は硬い岩盤となっていた。構造は、地山検出面から深さ約150cm掘り抜いた、地下式無段の窯壁構造の登り窯である。窯体の構造を確認するため上層の土壌1の調査後、床面まで掘り下げた結果、床面は地山をほぼ水平に掘り抜き、床面の南側2/3の約140cmは青灰色砂質土により貼り床され、残りの北側1/3の床面は岩盤掘り抜きのままであった。北側の窯壁は岩盤掘り抜きのままで、内湾しながら高さ28cmまで残存していた。その上は断面に落下した地山窯壁片で確認できなかった。南側の窯壁も岩盤掘り抜きのままで、大きく内湾しながら高さ65cmまで残存していた。それ以上は天井部も含め崩落していた。断面形は「フラスコ」状、若しくは袋状土壌の形状を呈している。崩落した窯壁の外側は被熱により約10cmの幅で赤褐色に変色していた。貼り床面も調査時誤って一部抜いてしまった箇所では地山面が被熱により赤褐色に変色していた。

床面には天井部が崩落したため焼成時のままの状況で遺物が残されていたが、調査範囲が狭いため窯体中央部にあった遺物の大半の位置を記録することなく取り上げてしまった。遺物の大半が杯で、出土状況から蓋身の合わせ状態での出土ではなく、杯蓋の外側と杯身の外側を斜めに乗せ、焼成したことにより溶着した状況で杯（第39図128-121・129-130）が2組出土した。2組の蓋と身の溶着状況がほぼ同じであり、例えば蓋の焼き台などの窯焼成に関わる何らかの状態を呈しているものと推測される。

窯体内的堆積層は焼成部の天井が崩落したことにより窯体内に堆積したもので、南側と北側に残存している窯壁の上端部から下層で土壌1の底部から下層が堆積層となる。13層に分かれた堆積層は下層から焼土を多く含む第37図第26層のにぶい赤褐色砂質土、第24層の浅黄色砂質土、焼成部の北半分を占めて堆積し1枚の窯壁片と推察される第22層の青灰色砂質土、0.5~5cmの焼土、窯壁片を多く含む第21層のにぶい橙色粘質土である。南側の窯壁寄りには天井崩落後堆積したと思われる第18層のにぶい赤褐色砂質土、第19層のにぶい橙色砂質土、第25層のにぶい橙色粘質土が堆積している。さらに焼成部中央全体には土質が細かく、焼土や窯壁片を含む第20層のにぶい橙色砂質土、その上層には第16層のにぶい黄橙色砂質土、第15層の暗赤褐色砂質土、第14層の明黄褐色砂質土、土壌1の底面となる焼土を多く含む第17層の暗赤褐色砂質土が堆積している。

トレンチ18で検出した焼成部の規模は、床面の幅185cm、窯体最大幅190cm、床面から天井部近くまでの窯壁残存高は65cmを測った。また、窯の主軸はN-102°-E、床面の傾斜角度は26°を測った。

トレンチ20で検出した焼成部は、トレンチ18と同様、地山上層は軟質の風化花崗岩であったが下層は硬い岩盤となり、構造は、地山検出面から深さ約165cm掘り抜いた、地下式無段の窯壁構造である。窯体の構造を確認するため床面まで掘り下げた結果、床面は地山を浅く皿状に掘り抜き、煙道側である調査区の東壁面では窯壁寄り約20~30cmを除き非常にしまりがありセメント状の第31層の青灰色の貼り床を有していた。また、焚口側である調査区の西壁面では床面全体に青灰色の貼り床を確認した。

北側の窯壁は床面境から内湾しながら高さ28cmまで岩盤掘り抜きのままで、それより上はスサを含む粘土で窯壁が貼られ、床面境からの高さは107cmまで残存していた。南側の窯壁も岩盤掘り抜きのままで、内湾しながら床面境から高さ63cmまで残存していた。それ以上は粘土を貼った窯壁と天井部も含め崩落して残存していなかった。断面形は下彫れの袋状土壤の形状を呈している。崩落した窯壁の外面は被熱により約5~15cmの幅で赤褐色に変色していた。貼り床面の下層の地山面も被熱により赤褐色に変色していた。

床面上には天井部が崩落し窯壁片が多く堆積していたが、床面にはほとんど遺物は残されていなかった。ただし、天井崩落後の窯地に廃棄されたA類・B類の杯や高杯、壺片が第34層のびい橙色粘質土層からまとまって出土した。遺物から1~II号窯跡で焼成された遺物であることが分かった。

窯体内の堆積層は焚口側である調査区の西壁面の上層断面によると下層から第31層の青灰色の貼り床。その上層に0.5~2cmの窯壁片が多く含む第42層のびい橙色粘質土。床面全体にわたり堆積する炭粒子が多く含む第28層のびい褐色粘質土。北側には第40層の灰黄褐色砂質土。第38層の明黄褐色砂質土が堆積する。さらに窯体の中上層にかけて、第39層の明黄褐色砂質土。第17層の浅黄色砂質土が堆積している。これより上層は1~II号窯跡で焼成された廃棄土器だまりとなっている第34層となり、天井崩落後、堆積に時間的な間を有するものと考えられる。

トレンチ20で検出した焼成部の規模は、床面の幅183cm、窯体最大幅200cm、床面から天井部近くまでの窯壁残存高は132cmを測った。また、床面の傾斜角度は19°を測った。

煙道部（第36図、図版4）

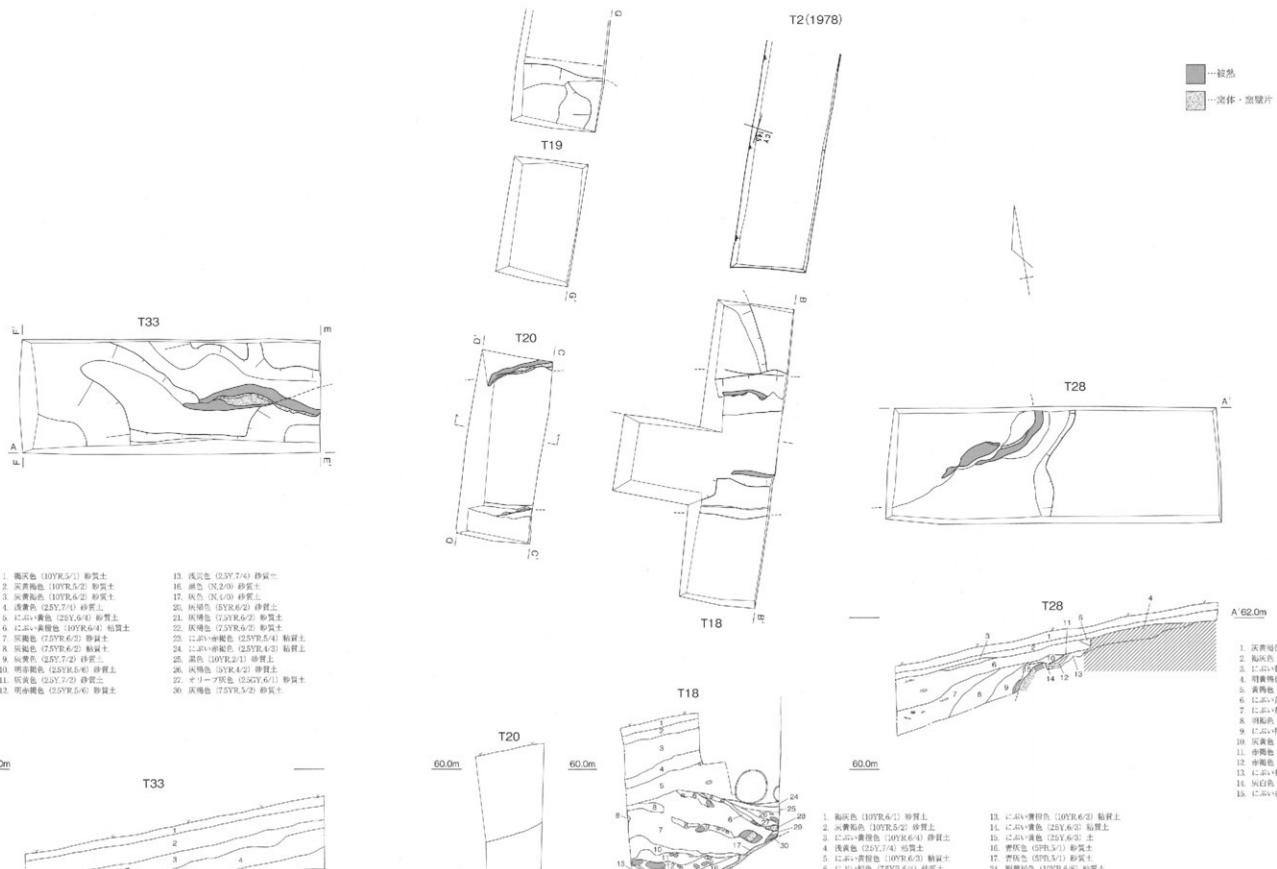
トレンチ18から東へ1.5mで煙道部を確認するため設定した調査区であるトレンチ28は、表土層である灰黄褐色砂質土とその下層の褐灰色砂質土の約15cmを取り除くと風化花崗岩の地山と煙道周辺を弧状に囲む浅い溝状構造を検出した。溝状構造の内側で煙道部から焼成部に至る窯壁を検出した。窯壁の周囲は被熱により約10cmの幅で赤褐色に変色していた。煙道部の上部構造物は崩落、削平を受けすべて残存していなかった。このため、煙道部のプランと窯壁面を確認するため煙道部内を若干掘り下げたところ、平面では直径約80cmに復元できる様、スサを含む粘土により作られた窯壁が円形に巡り、窯壁窓主体輪方向で約66°の急角度で立ち上がっていることを確認した。発掘停止面で煙道部から焼成部にかけて長さ約90cmの範囲が焼土を含み赤味を呈した。この層は調査区北壁の土層断面第8層の明褐色粘質土と第9層のびい褐色粘質土である。煙道部に関係する堆積層であろう。

煙道部から焼成部にかけての堆積層は、煙道壁面にシルトっぽい第15層のびい赤褐色粘質土、発掘停止面で赤味を呈した第9・8層でその上層は焼成部の天井崩落後の埋土で第7層のびい黄橙色粘質土層からは1~II号窯で焼成され廃棄された杯・平瓶・壺片が多く含まれていた。

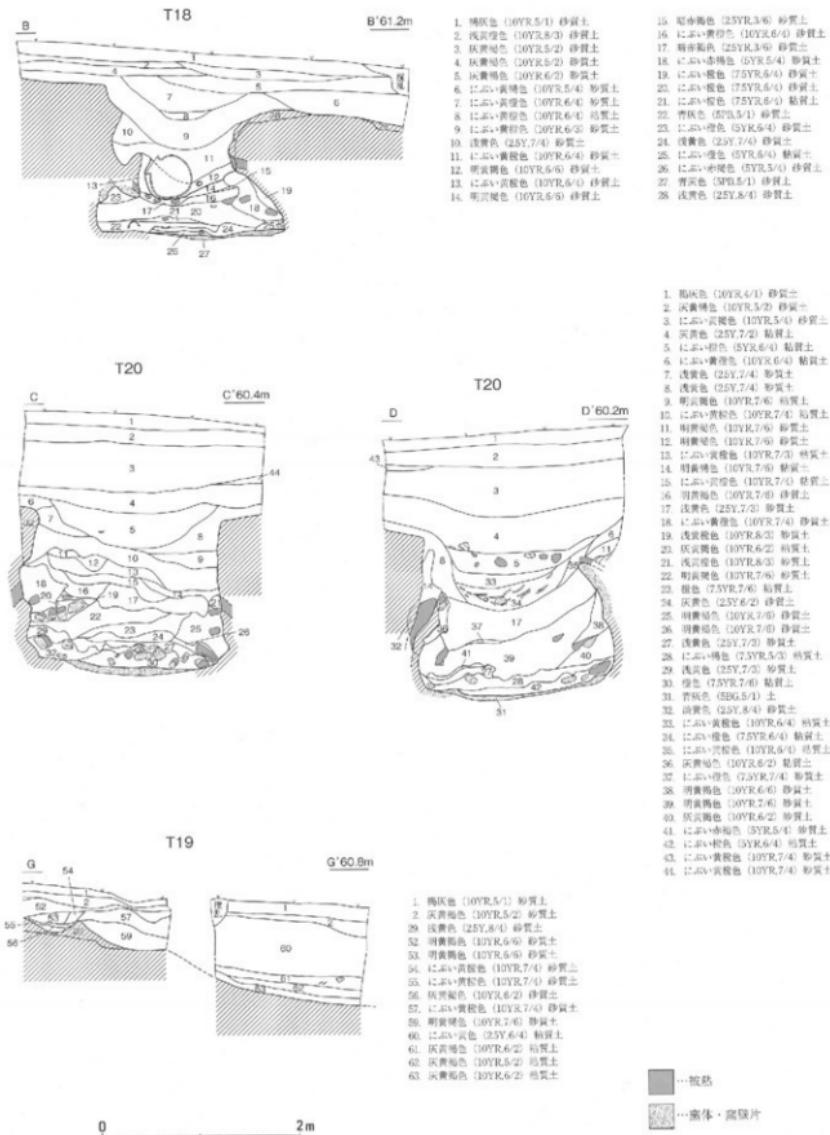
焚口部・前庭部（第36・38図、図版4）

トレンチ20の焼成部から西へ2mに設定した調査区のトレンチ33で焚口部と前庭部を検出した。焚口部は調査区の東端部を現地表から約80cm掘り下げるとき地山面を検出し、さらに約30cmの段を有し、10~15cmの幅で被熱により弧を描く様に赤褐色に変色した地山とその内側に岩盤掘り抜いたままの焚口部から燃焼部にかけての窯壁面を検出した。さらに、窯壁面が無くなり、赤褐色の変色部分が無くなる地点から「ハ」の字状に地山を掘り込む前庭部が広がっている。

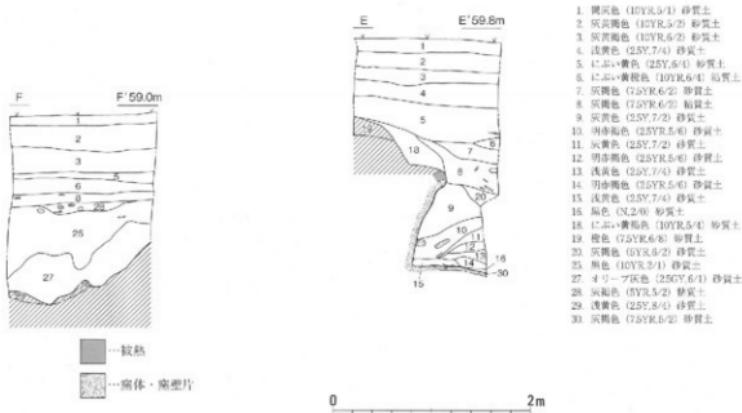
焚口部は左半分のみの調査であったが、平面は燃焼部からしだいに窯壁の幅が狭くなり、貼り床が無くなる箇所では10~20cm幅で弧状を呈し赤褐色に変色した床面を検出。さらに、貼り床が無くなつ



第36図 1-1号窓跡底盤平・断面図・立面図(1/50)



第37図 1-Ⅲ量窓跡 T 18:19:20 横成部断面図 (1/50)



第38図 1-Ⅲ号窯跡T33前部・焚口部断面図 (1/50)

てから前部側へ約65cmまでは地山面が燃焼部に向かい緩やかに下っていた。断面は窯体側の東断面ではトレーナー18と同様、床面は地山をほぼ水平に掘り抜き、地山上に第30層の灰褐色砂質土により貼り床されていた。北側窯壁は岩盤掘り抜きのまま、ゆるやかに内湾しながら高さ85cmまで残存していた。側壁の崩落部分から上層は粘土による窯壁が存在した様で、窯壁片が一部確認できた。天井部は崩落していたが断面では崩落した層状に窯壁片は確認できなかった。断面形は「フラスコ」状を呈す。

焚口部の堆積土は、東壁の土層断面によると下層から第30層の貼り床。焚口中央部に0.5~5cmの炭粒子を非常に多く含む第16層の黒色砂質土。壁面寄りにA類の杯蓋を含む第15層の浅黄色砂質土が堆積し、中・下層にかけて3層の赤褐色の層である第10・12・13層が窯壁中央から窯壁側に流れ込む形態で検出された。さらに窯壁が残存する上層では白・黄色ブロックを含む第9層の灰黄色砂質土が堆積し、その上層は天井部が崩落した後の窯地へ廃棄された大量の須恵器、窯壁・礫片を含む第8・7層の灰褐色粘土質土が堆積していた。

トレーナー33で検出した前部は、焚口から燃焼部に向かい緩やかな傾斜の手前から約150cmの長さは灰原方向に向かいわずかな傾斜であるが平坦な面を呈し、そこから先は円形に窪んでいく。焚口と円形の窪地の間を結ぶ様に検出面で深さ4cmを測る溝状の遺構が走っていた。焚口と前部を結ぶ排水か空気の通気口的な役割を果たしたものと推察される。溝状遺構内には第36図第26層の灰褐色砂質土が堆積していた。前部の堆積土は全面にわたり1~10cm炭粒子を非常に多く含む第25層の黒色砂質土である。この層から採集した炭化材を分析した結果、マツ科マツ属【二葉松類】であることが判明している。(附載4参照) 第25層の下層で円形の窪みの底部には0.1cm程度の砂粒を非常に多く含み、ボソボソした第27層のオリーブ灰色砂質土が堆積していた。第25層より上層は焚口部の上層から続く、窯体部の天井部崩落後に廃棄された大量の須恵器、窯壁・礫片を含む第8層の灰褐色粘土質土が堆積していた。

7 1—Ⅲ号窯跡の出土遺物

焼成部床面出土の遺物（第39・40図、図版22・23）

トレント18の焼成部床面には杯を中心に焼成時ままで遺物が残されていた。調査区が狭く調査区の中央部に残存していた遺物の多くは取り上げてしまったが、杯は取り上げ時、蓋・身として合わせ状況での出土はなかった。その中で、杯身外面と杯蓋外面が斜めに溶着した状況で出土した2点の杯の内、1点は杯蓋が下側でその上に杯身を斜めに乗せたもの、他の1点は杯身が天地逆の状態で、その上に杯蓋を斜めに乗せた状態で出土しており、甕の焼き台などの窯焼成に関わる状態を呈しているものと推定している。図化できた須恵器の内、杯蓋は102～107・128・129の8点、杯身は108～127・130の21点、鉢131の1点、有蓋高杯蓋132の1点、高杯脚133・134の2点、壺135～138の4点である。以下、概要を説明したい。

杯蓋102～107・128・129は『寒風古窯址群』1978分類による口縁部にかえりをもたないA類で、歪みによる106・130を除くと天井部が残存する104・105・128はわずかに丸みを有する。口縁部は屈曲させ端部に丸みを持つ形態である。口縁部の特徴から2つのタイプに分類できる。1つ目のタイプは102～105・128・129の口縁部を垂直に下ろすタイプ。2つ目のタイプは106・107の口縁部をやや外傾し下ろすタイプである。杯蓋128と杯身121、杯蓋129と杯身130は、杯身外面と杯蓋外面が斜めに溶着した状況で出土した2点の杯である。杯蓋128と杯身121は、杯蓋内面の1/3程度、杯身は外面全体に自然釉や砂状の付着物が認められることから、出土状況と同じく、杯身が反転し口縁部を下側に置きその上に杯蓋を56°斜めに乗せて焼成したことが分かった。また、杯蓋129と杯身130は、杯蓋内面の1/2程度、杯身は口縁部近くを除く外面全体に自然釉や砂状の付着物が認められることから、出土状況とは逆に、杯身が反転し口縁部を下側に置きその上に杯蓋を44°斜めに乗せて焼成したことが分かった。A類杯蓋の調整は外面天井部がヘラ切り及びケズリで他はヨコナデである。色調は内外面とも灰色～灰白色で、焼成はやや良好である。口径は12.0～15.0cmで平均13.1cm、器高は3.8～4.7cmで平均は4.3cmを測った。さらに、杯身122の外面の側面に杯蓋片が付着しており、この杯身122も本來上記2点同様に杯身外面と杯蓋外面が斜めに溶着している例であろう。

杯身は108～127・130は『寒風古窯址群』1978分類による口縁部受け部にかえりを有するA類で、かえりはやや内湾し先端を細く仕上げ、9～10mmの高さを測る。受け部は外方へ内湾しながら端部に丸みを持つ。底部はやや丸味を有する。117・119・122・123は焼け歪み著しく、大きく変形していた。遺物の取り上げ時、蓋・身として合わせ状況での出土はなかったと記載したが、受け部に杯蓋片が溶着している108・112・113・114・118・119・124や土器付着痕のある110から多くの杯は杯蓋・杯身の合わせ状況で焼成されていたことが確認された。調整は、底部外面がヘラケズリ、その他はヨコナデである。色調は108～114・116～119・122～124・127・130の内外面が黒っぽい灰色で、他は内外面が灰色ないし灰白色を呈する。焼成は120・126が軟質であるが他はやや良好で、外面が黒っぽい杯身は良好である。口径は10.8～12.8cmで平均11.6cm、器高は10.6～12.8cmで平均は11.6cm、器高は2.7～4.6cmで平均は4.1cmを測った。

131はやや内湾気味に立ち上がる椀部の形態からおそらく台付椀の口縁部と考えられる。口縁端部は丸く仕上げている。調整はヨコナデを施す。色調は内外面とも灰色、焼成はやや良好である。

有蓋高杯の蓋132は椀を伏せた様に体部が丸く、口縁部をほぼ垂直に内湾し、口縁端部を丸く仕上げる。天井部中央には扁平であるが、周囲と中央部を高くした、宝珠形の面影を残すつまみを有する。

調整は天井部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。胎土はやや密で2mm以下の砂粒を多く含む。色調は内外面とも灰色で、焼成はやや軟質である。大きさは、口径13.8cm、器高5.7cm、つまみ径3.8cm、つまみ高0.6cmを測る。

高杯133・134は杯部を欠く脚部である。脚部を大きく「ハ」の字状に開き、133は端部を内側に屈曲している。134は端部を短く屈曲している。調整はヨコナデを施す。色調は133が内外面とも青灰色で、134が内外面とも灰白色を呈する。焼成はやや不良である。大きさは、133の口径が8.4cm、134の口径が15.0cmを測る。

壺135は胴部片で、外面はタタキ後カキ目、内面は楕円形の当て具痕を有する。色調は外面が黒色、内面が灰色を呈する。焼成はやや良好である。壺136は胴部片で、外面は摩耗しており不鮮明であるが、タタキ後カキ目、内面も摩耗を受け不鮮明であるが、星形の車輪文の当て具痕を有する。色調は内外面とも灰白色で、焼成は非常に軟質である。壺137は胴部片で、外面はタタキ後カキ目、内面は同心円文の当て具痕を有する。色調は外面が灰色、内面が青灰色を呈する。焼成はやや良好である。壺138は胴部片で、外面はタタキ後カキ目、内面は径4.8cmで5つ同心円文の中央に「十」字状の車輪文の当て具痕を有する。色調は内外面とも灰色を呈する。焼成はやや良好である。

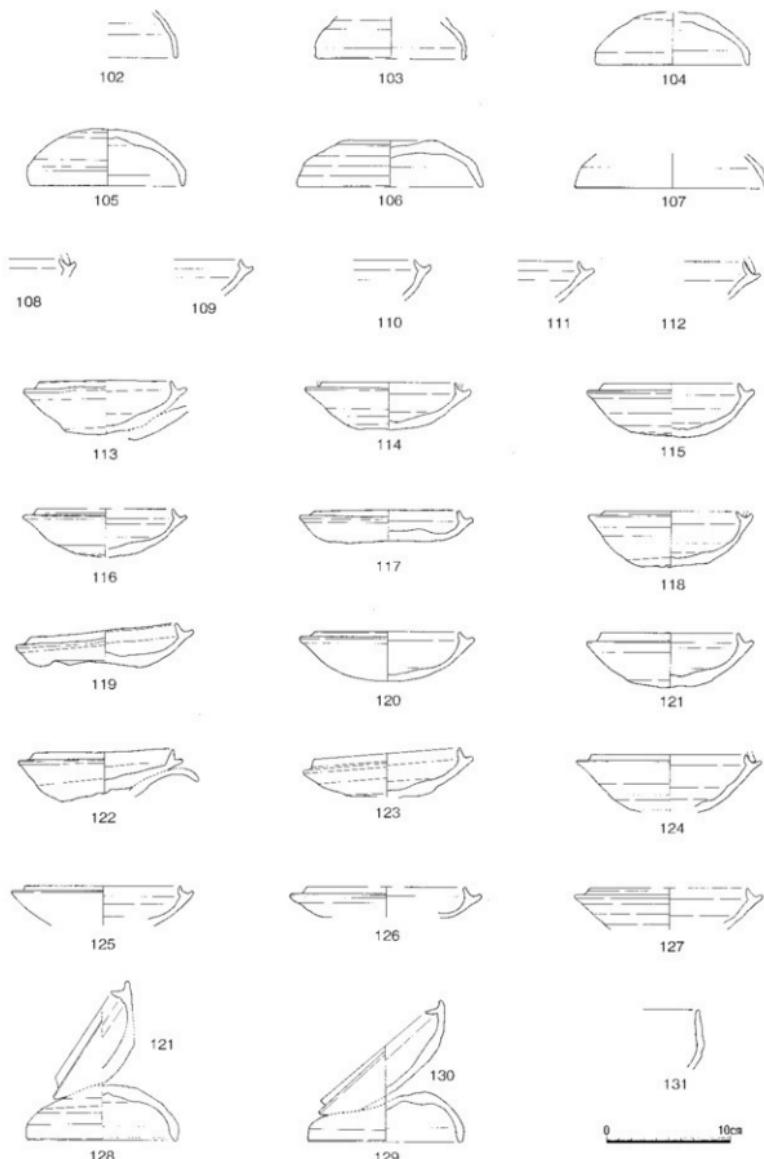
焼成部上層埋土出土の遺物（第41図、図版22）

トレンチ20の焼成部の天井崩落後の埋土である第37団第34層のにぶい橙色粘質土層から須恵器がまとめて出土した。出土した遺物の内、図化できた遺物は外面に波状文を施す蓋139の1点、杯蓋140・141の2点、杯身142・143の2点、高杯144～149の6点、杯か長頸壺の脚部と考えられる150の1点、壺151の1点である。以下、概要を説明したい。

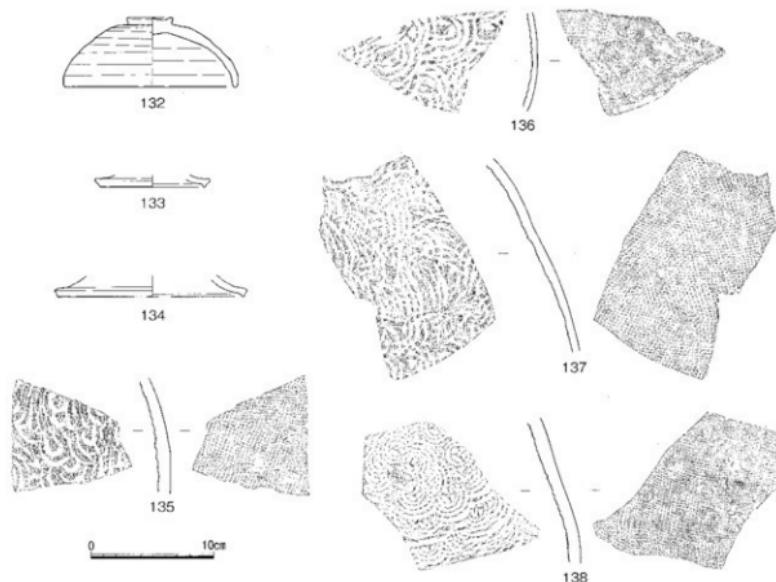
杯蓋139は扁平な天井部に口縁部端部から1.6cm内側に垂直に長さ1.1cmのかえりを有する。天井部中央部のつまみは欠いている。今回の寒風古窯跡群の確認調査で出土した杯蓋と比べ、口径の大きさ、外面に波状文を施すなど異なる点が多い。推定口径は17.0cm、最大径は20.8cmを測る。外面には確認できただけで幅2mmの沈線が7条施され、沈線と沈線の間に口縁部から天井部に向かい4個1単位のハケ状工具による列点文が2列、4条1単位のハケ状工具による波状文が1列、4個1単位のハケ状工具による列点文が1列、4条1単位のハケ状工具による波状文が3列施される。また、口縁部から3条目となる沈線上に焼成前に径2mmの穿孔が施されている。胎土はやや密で、色調は外面が灰白色で、内面の中央部は赤灰色、周辺は灰白色を呈する。焼成はやや軟質である。杯蓋139と同形の資料が吉備考古館に保管されている。（図版22の3）昭和13年4月3日に1号窯跡群灰原で時實點灰水氏により採取された資料で、口縁部を欠くが、天井部中央には4.5cmの円形のベースとなる盤の中央に径3.1cmで宝珠状を呈するつまみを有している。外面の列点文と波状文の配置やハケ状工具はまったく同じで、同一工人により製作された資料である。

杯蓋140・141は天井部に丸みがなく平たく、外面は凸凹して粗雑な調整で、口縁部を屈曲し端部に丸みを持つ形態である。140は焼け歪みにより天井部が歪んでいる。調整は外面天井部がヘラ切りで他はヨコナデである。色調は140が内外面とも灰白色で、141は外面が灰黄色で、内面が灰褐色を呈する。焼成は140が良好であるが、141は軟質で不良である。大きさは140の口径10.8cm、器高3.4cm、141の口径10.3cm、器高3.7cmを測る。杯蓋140・141は形態、大きさ、調整等1-Ⅱ号窯跡の焼成部から出土した遺物と同じであり、1-Ⅱ号窯で焼成された遺物が廃棄されたものと判明した。

杯身142・143はかえりが短く内済し先端を細く仕上げ、5～6mmの高さを測る。受け部は外方へ



第39図 1-Ⅲ号窯跡T18・20焼成部床面出土遺物1 (1/4)



第40図 1-Ⅲ号窯跡T 18・20焼成部床面出土遺物2 (1/4)

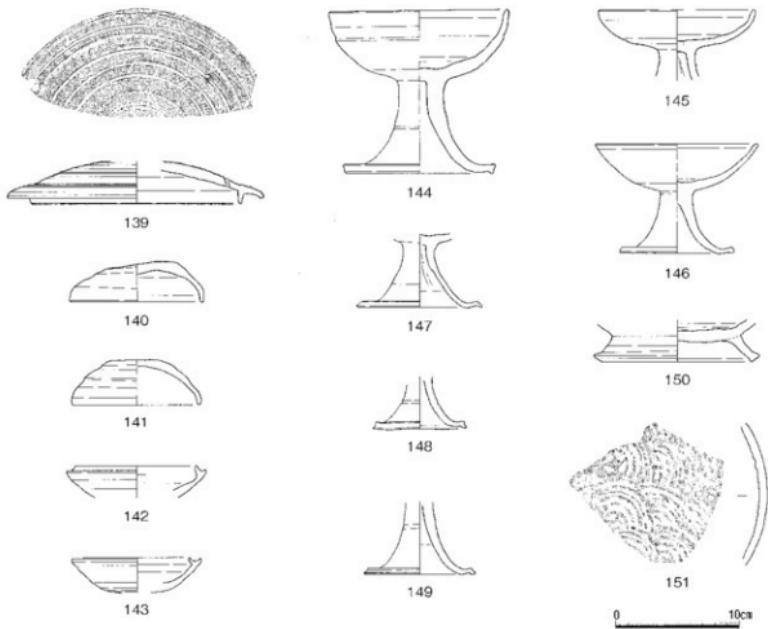
内溝しながら端部に丸みを持つ。調整は底部外面がハラケズリ、その他はヨコナデである。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。大きさは142の推定口径8.6cm、143の推定口径9.8cmを測った。杯蓋140・141と同様、形態、大きさ、調整等1-Ⅱ号窯跡の焼成部から出土した遺物と同じであり、杯蓋と杯身のセット関係になり、A類に分類される杯身である。

高杯144は杯部が内溝しながら立ち上がり、体部と口縁部の境にわずかに段を有し、口縁端部を丸く仕上げる。脚部は緩く開き、端部近くで大きく開き、端部を屈曲させる。中央に1条の凹線を施す。器壁が全体に厚い。調整は全体的に器面が摩滅しているが、杯部底部外面はハラケズリ、その他はヨコナデを施す。胎土は2mm以下の砂粒を多く含み、色調は内外面とも灰白色で、焼成は軟質で不良である。大きさは推定口径14.4cm、器高13.4cm、脚部推定径11.8cmを測る。高杯145～149と比べ桶状の杯部の形態や口径の大きさから古く位置付けられ、1-Ⅱ号窯跡で焼成された遺物というより1-Ⅲ号窯跡で焼成された後、廃棄された遺物であり埋土へ混入したものと考えられる。高杯145は浅い杯部で口縁部をわずかに内溝し、口縁端部を丸く仕上げる。調整は杯部と脚部外面はヨコナデ、脚部内面はシボリ目を有する。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや良好である。推定口径12.6cmを測る。高杯146は浅くやや内溝気味に開く杯部で口縁端部を丸く仕上げる。脚部は緩やかに開き端部を短く屈曲させる。調整は杯部と脚部外面はヨコナデ、脚部内面はシボリ目を有する。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや不良である。推定口径13.0cm、器高9.0cm、脚部径9.2cmを測る。高杯147～149は脚部のみであるが、緩やかに開く脚部の端部を外方に踏ん張る様に短く屈曲する。148・149は中央

部に1条の凹線を施す。148は外面に自然釉が付着している。調整は杯部と脚部外面はヨコナデ、脚部内面はシボリ目を有する。色調は内外面とも灰白色で、焼成は147・148が良好であるが、149は軟質で不良である。脚部径は147が10.1cm、148が7.0cm、149が8.9cmを測る。

150は胸部が平底で、「ハ」の字状に大きく踏ん張り、端部内側を地に付ける貼り付け高台を有する底部片である。高台の長さも約2.5cmと長く、胸部は杯部の深い大形の杯身か長頸壺ではないかと推察される。もし、大形の高台付の杯身であれば、外面に波状文を施した蓋139とセットになる可能性も考えられる資料である。色調は内外面とも灰色で、焼成はやや不良である。高台径12.2cmを測る。

壺151は胴部片で、外面は摩耗により調整は不明であるが、内面は星形の車輪文の当て具痕を有する。色調は内外面とも黄色で、焼成は非常に軟質で不良である。



第41図 1—Ⅲ号窯跡 T 18・20焼成部上層埋土出土遺物 (1/4)

8 土壌1の遺構と出土遺物

遺構（第42図、図版5）

1号窯跡群周辺の物理探査で遺構の存在が確認されていた地点で設定したトレンチ18で検出した土壌である。当初調査区の北側では地表下約40cm、南側で約60cmの深さで地山面を検出するなかで、後に陶棺の身であることが分かった板状の遺物の一部が出土し、さらに完形の大甕2個体が横倒しになつた状態で調査区中央の砂質土の堆積する窪地状の遺構の中にあることを確認した。トレンチ18と平行して西側に設定したトレンチ20において新規の窯跡である1-Ⅲ号窯跡を検出していた。その延長上に位置する遺構であるため、当初1-Ⅲ号窯跡に関係する遺構・遺物であろうと考えていた。遺構のプランや規模を確認するためトレンチ18の中央部を西側に1m×1mで拡張した結果、遺構の下層に1-Ⅲ号窯跡の焼成部が存在することが分かり、床面出土の遺物や甕と遺構の土層断面から遺構は1-Ⅲ号窯の焼成部大甕の崩落後、その窪地を利用し甕や陶棺身の破片を埋納した土壌であることを確認した。

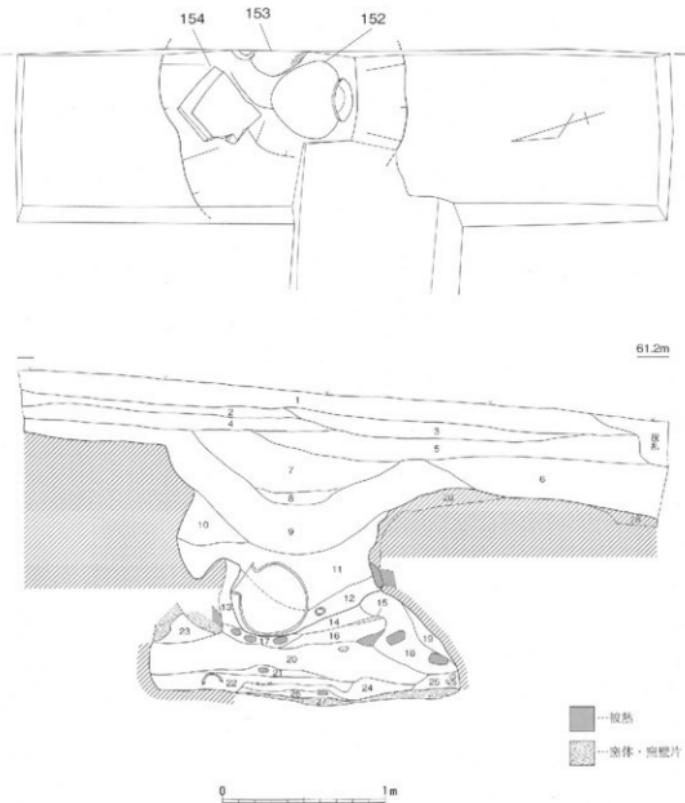
土壌1は1-Ⅲ号窯跡の天井が崩落した窪地を利用して土壌として使用したものである。限られた範囲での調査であったが、平面プランは窯体主軸方向に長い楕円形を呈する様で、1-Ⅲ号窯跡の残存窯壁幅を土壌の幅として検出面で150cm、深さ90cmを測る。上層断面から土壌底面は1-Ⅲ号窯跡の天井上部の地山が被熱により赤褐色に変色した暗赤褐色砂質土を床面ベースとして、中央部が椀状に盛んでいる。側面は1-Ⅲ号窯跡の天井崩落後の被熱した地山から上層地山面に添ってやや袋状に立ちあがる。土壌の北側壁面の地山はブロック状に土壌内に落ち込んでいる。

土壌1の堆積土は3層に分かれた。下層から地山ブロックを多く含む第12層の明黄褐色砂質土。土壌内を占める地山ブロックを多く含む第11層のにびい黄橙色砂質土。北側上斜面から堆積した花崗岩状の地山ブロックを多く含む第10層の浅黄色砂質土である。

出土遺物（第43・44図、巻頭図版4）

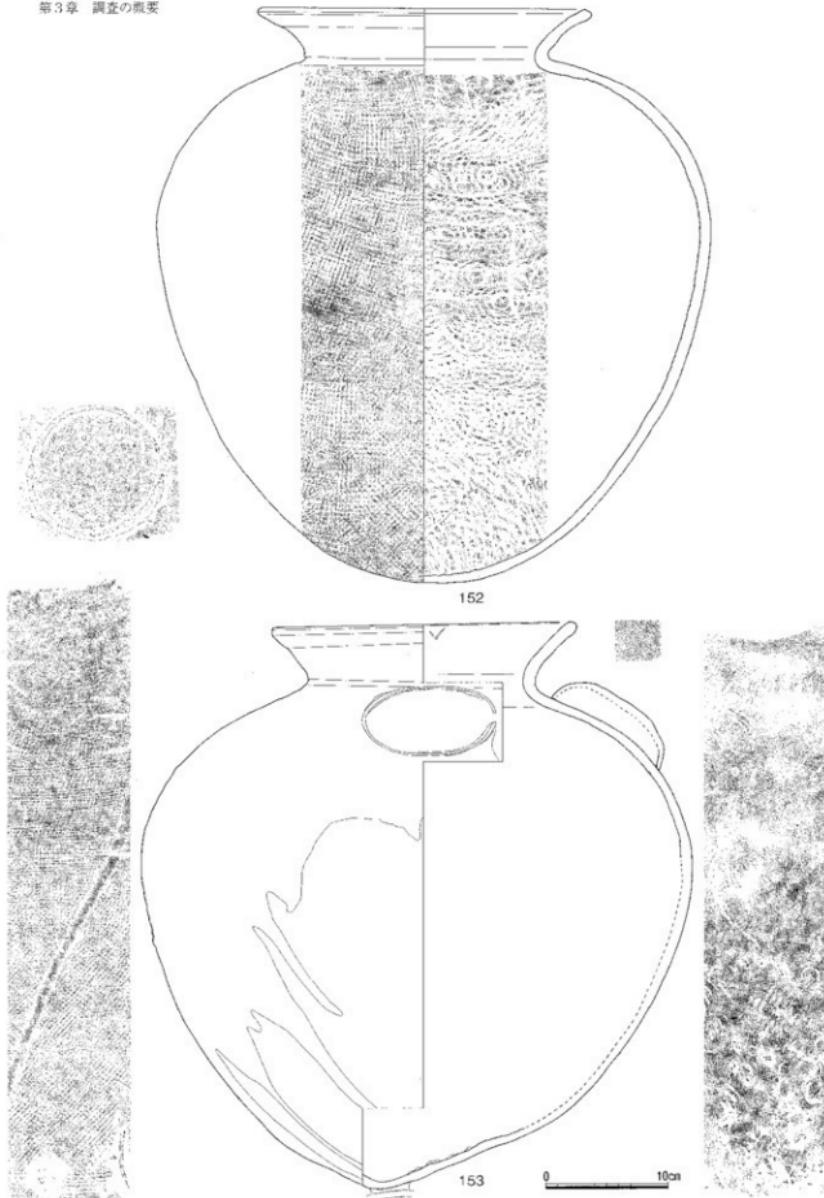
トレンチ18で検出した土壌1の底部にはほぼ同じ大きさの大甕が2個体完形の状態で出土した。その出土状況は、西側の大甕152は口縁部を南側に向け、東側の大甕153は口縁部を北側に向かってそれぞれ斜め45°に土壤壁面に向けて傾いた状況であった。甕の底面は丸底であり、完形品であることから本来2個体は土壌内で脚部を接した状態で立って置かれていた可能性も考えられる。大甕153の胴部外面には線灰色の自然釉が下垂れ状に流れている状態が確認できた。また検出時、口縁部内面の上部1/4程度に空洞があり甕体内を確認したところ内部は土砂が充満していない空洞で、埋納された際、口縁部に陶器製以外の蓋がなされており出土時まで空洞になった可能性があると推察される。甕の使用目的を考える際の一つの事例となろうか。大甕152については内部に土砂が充満していた。焼成も悪く胴部に土圧により亀裂が認められた。さらに東面の土層断面の第12層で大甕の胴部を確認しており、大甕153の東側にもう1個体の大甕が存在していることが判明している。少なくとも土壌1には3個体以上の大甕が埋納されているようである。他の遺物として土壌の北壁に立て掛けた様に陶棺の身が出土した。陶棺は脚部を欠いた身の側面の一部で、側面の外表面を土壌の内側にした状態で、土壌上部から底面に至る北壁面に立て掛けている。以上、3点の遺物以外には破片も含めて遺物の出土はなかった。

甕152は土圧により破損していたが本来完形品で、底部は丸底で、胴部上部に最大径を有する形態で、口縁部は頸部から外反し端部をやや肥厚する。大きさは口径26.4cm、器高47.3cm、胴部最大径は

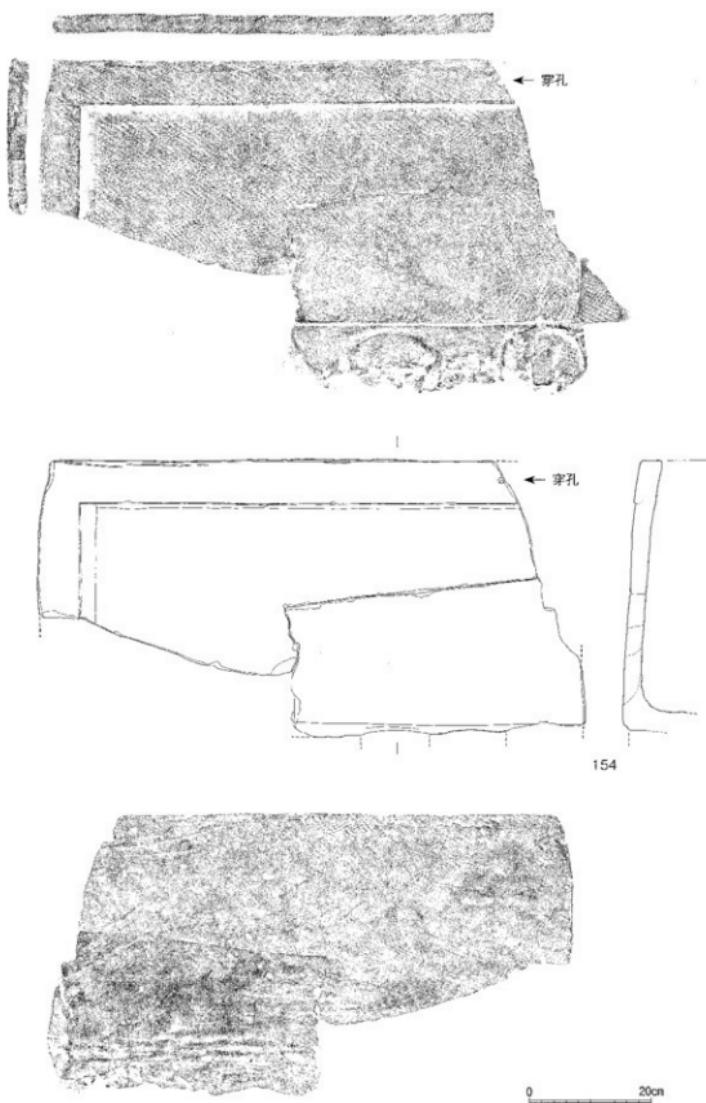


1. 黒灰色 (10YR 5/1) 砂質土
 2. 淡黄褐色 (10YR 8/2) 砂質土
 3. 淡黃褐色 (10YR 5/2) 砂質土
 4. 淡黃褐色 (10YR 5/2) 砂質土
 5. 淡黃褐色 (10YR 6/2) 砂質土
 6. 淡黃褐色 (10YR 6/2) 砂質土
 6. 12.5YV 黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土
 7. 12.5YV 黄褐色 (10YR 6/4) 砂質土
 8. 12.5YV 黄褐色 (10YR 6/4) 砂質土
 9. 12.5YV 黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土
 10. 淡黄色 (25Y 7/4) 砂質土
 11. 12.5YV 黄褐色 (7.5YR 6/4) 砂質土
 12. 明黄褐色 (12YR 6/6) 砂質土
 13. 12.5YV 黄褐色 (10YR 6/4) 砂質土
 14. 明黄褐色 (12YR 6/6) 砂質土
 15. 12.5YV 黄褐色 (10YR 6/4) 砂質土
 15. 12.5YV 黄褐色 (22YR 3/6) 砂質土
 16. 12.5YV 黄褐色 (10YR 6/4) 砂質土
 17. 明黄褐色 (22YR 3/6) 砂質土
 18. 12.5YV 黄褐色 (SYR 5/4) 砂質土
 19. 12.5YV 黄褐色 (7.5YR 6/4) 砂質土
 20. 12.5YV 黄褐色 (7.5YR 6/4) 砂質土
 21. 12.5YV 黄褐色 (7.5YR 6/4) 砂質土
 22. 黑褐色 (5YB 5/1) 砂質土
 23. 12.5YV 黄褐色 (SYR 6/4) 砂質土
 24. 淡黄色 (25Y 7/4) 砂質土
 25. 12.5YV 黄褐色 (SYR 6/4) 砂質土
 26. 12.5YV 黄褐色 (SYR 5/4) 砂質土
 27. 黑褐色 (5YB 5/1) 砂質土
 28. 淡黄色 (25Y 8/4) 砂質土

第42図 1—Ⅲ号窯跡上層 T18土壤1平・断面図 (1/30)



第43図 1-Ⅲ号窯跡上層 T18土壤1出土遺物1 (1/4)



第44図 1-Ⅲ号窯跡上層T18土壤1出土遺物2 (1/8)

45.5cmを測る。胴部外面は焼成があまく明瞭ではないが、上部は横方向にハケメ後格子状タタキ、内面は同心円状の当て其痕後一部ヨコナデ、口縁部はヨコナデを施す。色調は内外面とも灰白色で、焼成は軟質でやや不良である。壺153は底部の一部を除きほぼ完形品である。その底部は焼成時斜め状態に置かれたため、底面は焼け歪みで窪み、窓床の接地面の砂状の塊や焼き台に使用されたと考えられる焼片が溶着していた。また、口縁部から胴部外面に付着した自然釉は焼成時底部となっていた焼け歪みの窪みに向かい玉垂れ状に流れていた。形態的には壺152とはほぼ同じであるが、胴部の最大径の位置が中央まで下がっている。肩部には1個体は焼成時に外れてしまったものであるが1個体の杯身が伏せられた状態で溶着していた。1-I号窯や2号窯跡で出土する杯Dとした杯身である。口径は10.5cm、高さ25cmを測る。壺の大きさは口径24.5cm、器高46.6cm、胴部最大径は45.3cmを測る。口縁部内面に「V」字状のヘラ記号を施す。外面調整は格子状タタキ後カキ目、内面は同心円状の当て其痕後一部ナデ、口縁部はヨコナデを施す。色調は内面が灰色、外側が灰白色で、焼成は良好である。

陶棺154は箱形の身の長軸側面で小口側面の一部が残存しており当初1個体で製作され2分割にされた身の右側の陶棺側面である。蓋と合わせになる身の上部と2分割した左側面には幅6.4~6.8cm幅でヘラ状工具により帯状に区画し身側面を浮き彫り風に削り込んでいる。帯状の区画帯の小口寄りに1カ所焼成前に円形の小孔が穿孔されていた。一部底部が残存し13.8cmの直径の円形脚部が付けられていた痕跡が認められる。脚部は底面の平行タタキを施した後付けられており剥離した脚部面には明瞭なタタキ痕が残る。脚部の離離痕は2箇所のみ残存するが、端部の脚は端部端に付けられている。脚の直径が13.8cm、脚と脚の間が10.5cmで、身の幅が86.4cmを測ることから本来の脚の数について想定してみると、脚が4本であった場合、脚の直径は $13.8\text{cm} \times 4\text{本} = 55.2\text{cm}$ (a)。脚と脚の間は3カ所となり $10.5\text{cm} \times 3\text{カ所} = 31.5\text{cm}$ (b)。脚の合計直径(a)+脚と脚の間合計幅(b)=86.7cmではほぼ身の幅となることから、4本の脚が付けられていたものと考えられる。調整は外面が側面・上端部・右側面・底面、内面上部は $4 \times 5\text{mm}$ の格子のタタキを施す。内面はヨコ方向にヘラケズリを施す。左側面はヘラ切り後ナデを施す。

陶棺の身の大きさは側面の長さ86.4cm、高さ43.2cm、底面の厚さ3.6cm、側面の厚さ2.8cm、側面上端部の幅3.6cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや不良である。
(馬場・関)

註

- (1) 野口左喜太郎『長浜村誌稿編』 長浜村誌編さん委員会 1977
- (2) 西川 宏『寒風陶芸の全盛備構想と寒風遺跡の危機』『考古学研究』第24巻第2号 勤古学研究会 1977
- (3) 西川 宏『寒風(5) 濱戸門「日本の考古学」IV 歴史時代(上)』河山書房新書 1967
- (4) 西村 康『磁気探査結果』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978
- (5) 山藤康平『寒風古窯跡群』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978
- (6) 金田明人『寒風古窯跡群探査成果報告』奈良文化財研究所 2005
- (7) 松尾洋平『備前・備中の古代陶器・円窓面を中心に』『古事』天理大学考古学研究室第6輯 天理大学出版部 2002
- (8) 松本幸男『時実和一氏 都羅郡山手村吉備考古古窯山田岡跡一 寒風五一三九番地(窯址原)出土品』『牛恵春秋』58 牛恵春秋会 1993
- (9) 猪熊義勝・大脇謙・松本修自・津村弘志『日本古代の鶴尾』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980
- (10) 松本幸男『寒風古窯跡群』『牛恵春秋』36 牛恵春秋会 1988
- (11) 霜井住柿『中空円窓小考』『大阪文化財論叢II』-財团法人大阪府文化財センター設立30周年記念論集- 財团法人大阪府文化財センター 2002

第2節 2号窯跡の調査概要

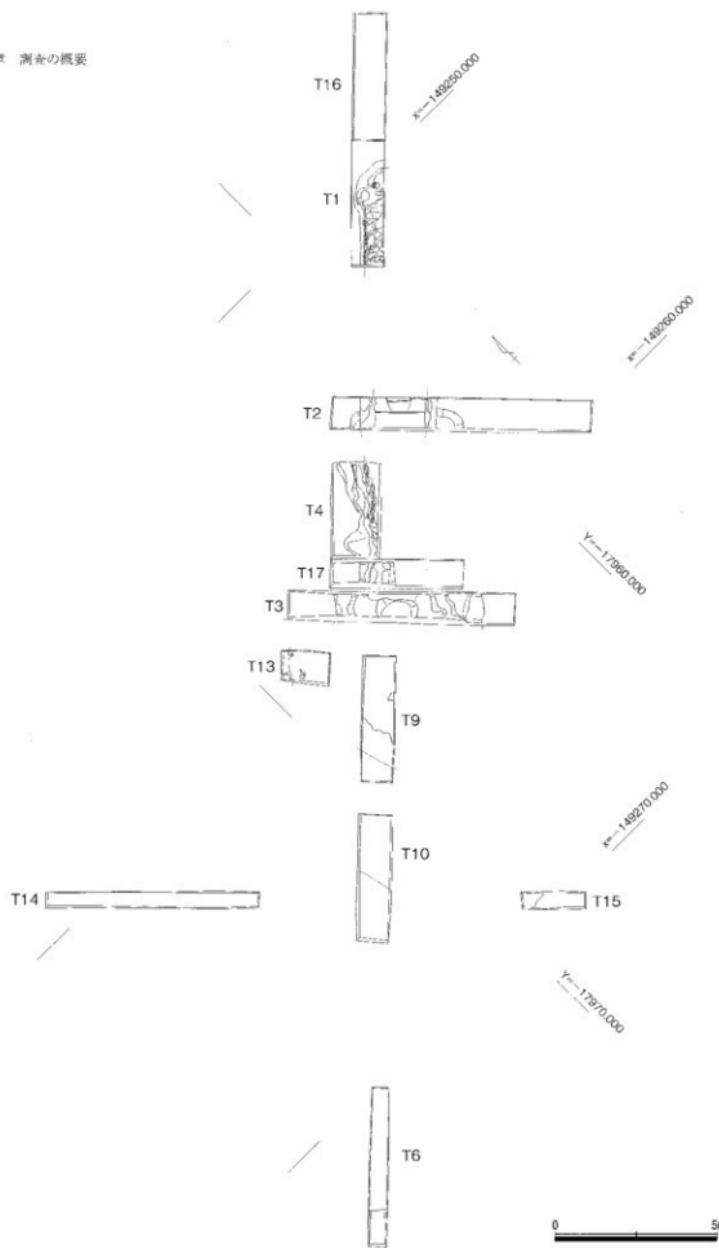
1 位置と調査の概要（第45回）

2号窯跡は1～1号窯跡から南南東へ約95m、3号窯跡から北西へ約65m、標高約54～51mの南西に向かう丘陵緩斜面に立地する。地番は瀬戸内市牛窓町長浜字寒風5148番-8、5148番-7である。昭和9年（1934）10月頃、一帯が畑地として開墾される際、2号窯跡を含む南面する丘陵は緩斜面であり、日照条件も良く4段の畑として開墾され、2号窯跡は丘陵緩斜面の下から2段目と3段目の畑地として造成された。

『長浜村誌続編』（註1）によると、2号窯跡は五一四八窯跡と命名され、「昔から窯の段と言う所あり、小高き所に大松あり。周間に小松群生し破片が散在していた。・・・深い所は破片灰土の包含した所六尺以上あった。」と記載されている。このことは、今回の発掘調査でも前庭部の埋土上層で多量の須恵器片が出土したが、この前庭部が「段」と言われるよう窯地となっており、畑の造成にあたり灰原に散布する須恵器片をその窯地にゴミ穴として利用し捨てたものと推察される。昭和40年代の初めに西川宏氏は時實黙水氏からの聞き取りと現地踏査を行い2号窯跡について「いまもはっきりと灰原のみえる五一四八番地の畑は、時実氏によれば深いところで二メートル位も灰や破片が堆積していたという。そしてこの灰原の西半分はかなり掘り取って他へ移動させたという。しかし窯の本体には手をつけておらず、それは下から2段目の畑の土手に埋まっているはずだという。灰原の規模からすれば、窯は数基並んでいる公算がつよい。」と灰原の規模から複数の窯の存在を考えていた。その後、昭和53年（1978）1月の寒風古窯址群緊急調査委員会調査団による分布調査段階では、「灰原の現状は最下段の畑に長さ40m×最大幅30mにわたり明瞭に認められる。窯址本体は開墾以前には窯の段といわれる落ち込みの場所が確認されていた。現状でも下から2段目の畑の上手が浅くほんでいる。」と記載され、灰原の範囲や窯体埋没による伸びみが確認されている。（註3）また、同じ昭和53年12月に奈良国立文化財研究所により磁気探査が行われ、窯体が等高線に直行して約8mの長さで残存していると推定された。（註4）

発掘調査を実施する前年度の平成17年（2005）3月、奈良文化財研究所に委託し磁気探査とGPR探査を実施した。（詳細について附載2「寒風古窯跡群の物理探査」を参照）探査の結果、下から2段目の畑からさらに上の3段目の畑にわたり延び、長さ約14mにわたる反応があった。また、窯体は深い部分に良好に残存しているのではないかと想定された。（註5）

このため、平成17・18年度の発掘調査では平成16年度に実施した磁気探査の結果をもとに、2号窯跡の窯体の位置・規模・構造・時期等を確認するため調査区を設定した。設定したトレンチは、窯体の位置・規模・構造を確認するためトレンチ2（1m×8m）。煙道部の位置・規模・構造を確認するためトレンチ1（1m×4m）。窯体、焚口部の位置・規模・構造を確認するためトレンチ4（15m×3m）、トレンチ17（1m×4m）。前庭部の位置・規模を確認するためトレンチ3（1m×7m）、トレンチ9（1m×4m）、トレンチ13（1m×15m）。灰原の位置・規模を確認するためトレンチ10（1m×4m）、トレンチ14（0.5m×6.5m）、トレンチ15（0.5m×2m）、トレンチ6（0.5m×5m）。窯外部の排水路等の付随施設を確認するためトレンチ16（1m×4m）の計12本である。



第45図 2号窓跡トレンチ配置図 (1/150)

2 遺構

窓体（焼成部）（第46図、図版8・9）

トレンチ2で検出した焼成部から2号窓跡は、地山上層の岩盤は風化し軟質であったが下層は花崗岩質の岩盤を深さ約190cm掘り抜いた、地下式無段の窓構造の登り窓である。窓体の構造を確認するためトレンチ2では床面まで掘り下げた。断面から床面は地山を浅い皿状に掘り抜き、5cm程度の厚さで粘土による床面が貼られていた。ただし、床面中央部ではトレンチの北東壁部分で幅約75cm、トレンチの中央部分では幅約50cm、深さ約5cmの一段低く溝状の掘り込みがあり、その掘り込み内は0.2cm程度の白色粒子を含みセメント状に非常に良く締まった第43層の青灰色砂質土が堆積していた。貼床面は地山掘り抜いたままと思われる様に非常に硬く焼き締まっている。床面中央部の青灰色砂質土を取り除くと地山である橙色砂質土は、被熱により赤褐色に変色していた。側壁は床面より外方へ張り出し、内湾しながら立ち上がり、天井部に向かい横幅を狭めながら立ち上がっていくもので、断面は北東壁を見ると「フラスコ」状を呈した。側壁面の下層部分では補修のためか、床面との境部分や側壁面に粘土貼り付けが認められた。天井部が崩落しており側壁の断面を確認することができ、側壁を3面持つことが分かった。確認できた側壁から2号窓が築造された当初の第1次の側壁は厚さ5~10cmの粘土を貼り付け構築され、検出面での幅は約160cm、床面からの高さ約140cmを測る。側壁の外側には幅約8~14cmの厚さで被熱により地山面が第21層や第26層の明赤褐色に変色していた。第2次の側壁は、第1次の側壁との間に5~10cmの間層を有し、厚さ10~15cmのスサを含む粘土の貼り付けで構築されていた。検出面での幅は約140cm、床面からの高さ約125cmを測る。西側の側壁の外側には幅約10cmの厚さで被熱により地山面が第23層橙色に変色していた。発掘調査で検出した操業停止時の第3次の側壁は、第2次の側壁との間に5cmの間層を有し、厚さ15~22cmのスサを含む粘土の貼り付けで構築されていた。検出面での幅は約125cm、床面近くの最大幅は205cm、床面からの高さ112cmを測る。天井部は側壁部も含め幅約125cmにわたり崩落しており、床面の上層である第40層の灰褐色砂質土の中に大きいもので15cm×30cmの塊となりほとんどの天井部の壁片が落ち込んでいた。このことから、トレンチ2の焼成部は、廃棄後窓体が空洞の状態であり他の箇所からの土砂の流入を受けることなく天井部が崩落したものと推察される。

焼成部の堆積土は天井部の崩落により、丘陵斜面から埋土により窓体内のほとんどが堆積されていた。第9層の灰褐色粘質土、第16層・第38層のにぶい赤褐色粘質土は窓体外面に接した土層で、窓の焼成による被熱で赤褐色に変色した層である。このため窓体内の堆積土は赤褐色に変色した層より下層は4層に分かれ、下層は床面中央部の窓主軸方向に、幅55~70cm、厚さ約5cmを測る溝状の窓みに堆積する第43層の青灰色砂質土、溝状の窓みの上層に2~3cmの厚さで堆積する第42層の黒色炭層、床面中央部を長さ約120cm、幅約6cmで堆積する第41層の灰色砂質土、窓壁片や須恵器片を多く含む第40層の灰褐色粘質土である。

限られた調査範囲であったが、最終床面上に残存する遺物はなく、窓詰めされた状況を確認することができなかった。東側壁に近い床面付近で須恵器の瓦片が4枚重なりあう状態で出土した。

調査区の南西半分で、窓体の裏面にかけて地山が隅丸方形に掘り込まれていた。また、窓体の南東部を長さ約5mにわたり拡張し、窓の外周部に排水溝などの付随施設の有無について確認したが遺構については検出されなかった。

トレンチ2の調査区で検出された2号窓跡の操業停止時の焼成部の最大幅は205cm、天井部分が崩

落し全高については不明であるが、検出面からの高さから112cm以上を測る。窓の主軸はN-45°-E、床面の傾斜角度は16°を測った。

トレンチ4は焼成部の位置や規模を確認するために設定した調査区で、地山である花崗岩質の岩盤を掘り抜いて築窯した。焼成部の西側の側壁が天井部に移行する箇所を検出した。調査区内で側壁の遺存状態が異なり、煙道部側の北半分では天井部が崩落したため側壁の断面を確認することができた。北壁の土層断面や検出した平面形態によると、北壁断面の標高50.9mで、築窯当初の第1次の側壁が厚さ約10cmの粘土の貼り付けで、長さ約170cmで確認された。トレンチの中央部では天井部に向かい壁面を内湾する状態を呈した。また、側壁を観察すると、側壁は地山壁面に長さ20~25cmの扁平に延ばした粘土ブロックの側端部を外側に重ねていく、窓体内から見ると粘土塊の下端部を重ねていく様に貼られている箇所を確認することができた。第1次の側壁の内側にスサを含む側壁が約18cmの厚さで検出された。トレンチの幅が狭く窓体内を十分に掘り下げることができなく、明瞭な側壁の内面が分からなかった。検出した側壁面は補修による粘土の貼り付けもあるものと考えられるが、かなり凸凹していた。この検出した側壁は第2次と第3次の側壁を含むものと推察される。

焚口部の南半分では、東壁の土層断面によると第12層の赤褐色粘土がトレンチ南から長さ135cmにわたり水平に堆積し、その下層にスサを含む天井部と推察される窓体上部の粘土を検出した。窓体上部はトレンチの南端部から95cmで窓体内に崩落しており、西側部分は弧を描きながら側壁へとつながっていく。

第1次の側壁の外面は焼成による被熱により地山が幅10~20cmの幅で、第3次の側壁の外面は幅10~15cmの幅で赤褐色に変色していた。

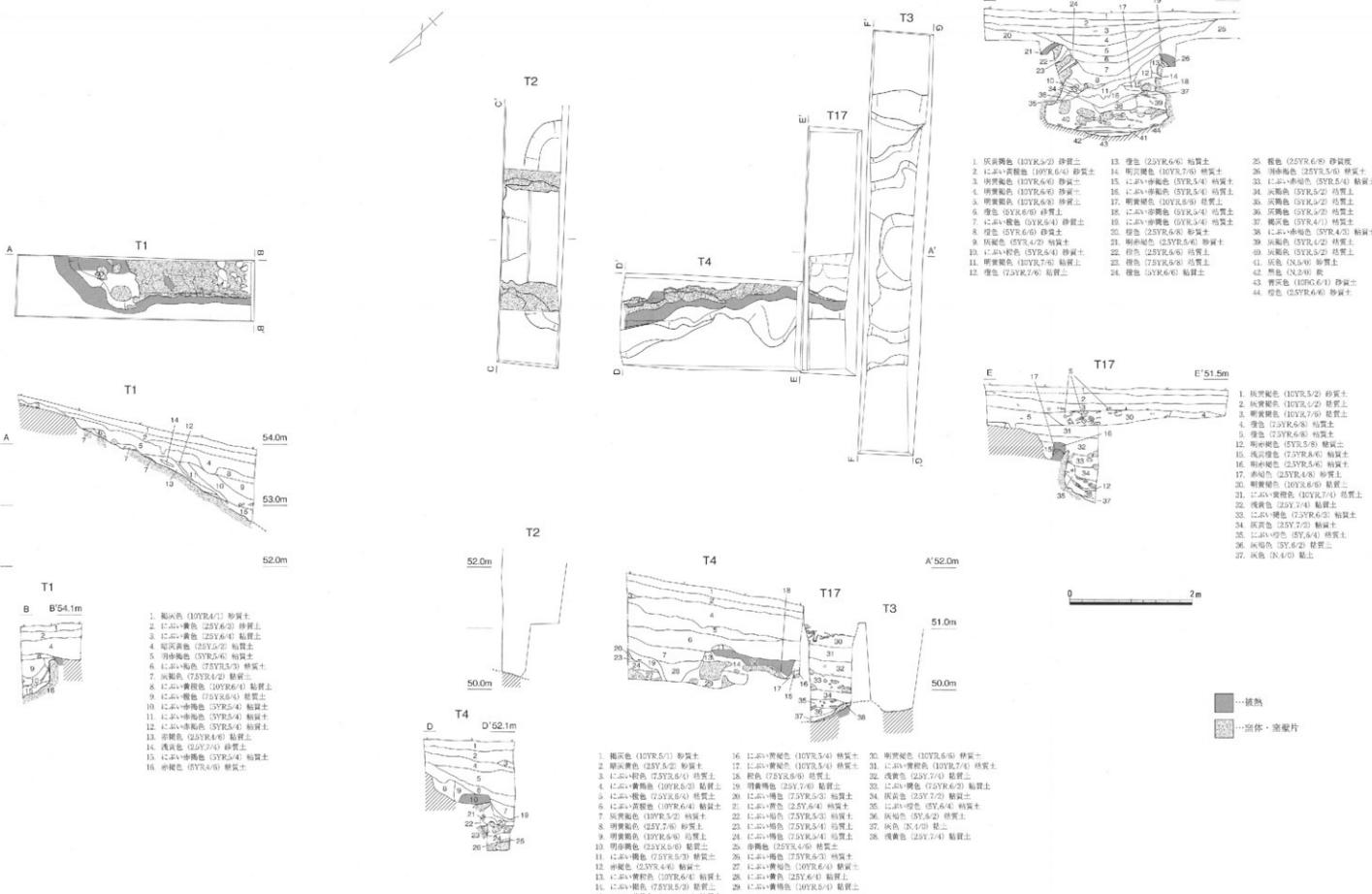
煙道部（第46図、図版9）

トレンチ2から北東へ4mで窓体の西半分にあたる調査区であるトレンチ1で検出した煙道部は、南面する丘陵斜面を煙地として造成した下から3段目の窓の上斜面にあたるため、特に煙道端部の地山上面まで削平を受けておりかろうじて煙道部下端部が残存していた。煙道部から下斜面にあたる焼成部については床面から直立に立ち上がる側壁が残存していた。

まず、煙道に続く焼成部について概説する。南壁の土層断面では床底から底端部に向かい弧を描きながら立ち上がり、側壁面は床との境から窓体内に内傾しながら立ち上がる。側壁の厚さは12cmを測る。床面は粘土が貼られているが、表面は平滑にするわけではなく全面にわたり甲羅状に凹凸していた。床面の傾斜角度は31°を測った。立ち上がりが残存していた側壁は、長さ10cm程度の大きさの粘土ブロックを地山壁面に貼り付けて、側壁を築壁している状況が確認できた。側壁の外面は焼成による被熱により幅10~15cmで赤褐色に変色していた。遺物はトレンチの南壁近くの床面で須恵器壺の体部と杯蓋・杯身が出土した。

煙道部は、焼成部から焼成を受け硬く焼け縮まった床面が斜め上方へ直線的に伸びてきて終わる附近から、平面で外方へ不正円形に張り出しながら煙道端部へ移行する。床面の焼きがややあまく、掘り下げ段階で一部の床面を剥がしてしまった。剥がした床面は炭で煤けた様に部分的に暗灰色を呈し、貼り床面の下層は被熱により赤褐色に変色していた。煙道端部の立ち上がりについては、上層部が床面近くまで削平を受けていたが赤褐色に変色した地山面から、焼成部の床面の傾斜に比べさらに上部へ傾斜角度を増すことが確認できた。遺物は床直須恵器の杯蓋と杯身が各1点出土した。

トレンチ1での煙道部と焼成部の堆積土は、丘陵上斜面からの埋土を除き12層に分かれ、焼成部の



第46図 2号窯跡断面図 (1/60)

下層の第15層は粘性が強く、0.2~3cmのオレンジ、灰、黄色のブロックと0.2~1cmの炭粒子を含むにぶい赤褐色粘質土で窓片や窓壁片を包含していた。第9層~第15層までの堆積土は煙道部のある斜面上部から窓体内へ流れ込む様に堆積していた。煙道部では貼り床面の上層に第7層の粘性が強い灰褐色粘質土と第6層のにぶい褐色粘質土が堆積していた。第6・7層、第9層~第16層の上層にはオレンジ、灰、黄色のブロックや炭粒子を含む第5層の明赤褐色粘質土と第8層のにぶい黄橙色粘質土が堆積していた。

燃焼部（第46図）

トレンチ4の南東側では焼成部の天井部と推察される窓壁が残存し、窓内の状況を確認することができなかつたため、トレンチ4の南側に接して燃焼部や焚口部を確認するために設定したトレンチ17である。地表下約35cmで東西方向に長さ210cmの幅で多量の須恵器片や窓壁片、礫を含む地積層を検出した。前庭部となるトレンチ3の上層でも検出した須恵器片の集中区は、以前「窓の段」と呼ばれていた窓地に、畑地の開墾の際、灰原に散布していた須恵器や窓壁片を集めて捨てたものではないかと考えられ、調査時にはこの須恵器の集中区をゴミ穴と呼んだ。調査区の掘り下げにより、ゴミ穴の広がりの幅の下層で燃焼部と考えられる遺構を検出し、ゴミ穴は燃焼部の天井の崩落と関係があることが確認された。

燃焼部は窓体主軸の西側半分を床面まで掘り下げ構造を確認した。窓体主軸に設定した東壁の土層断面によると、床は5~7cmの厚さで暗灰色の貼り床で、焼成部のある窓奥に向かい斜めに落ち込んでいた。落ち込み深さは、検出したトレンチ内で32cmを測った。また、床面の下層となる中央部の第37層の灰色粘土層は0.5~5cmの炭の粒子を非常に多く含み、窓焼成の燃料や木炭の残存範囲を示すものと考えられ、この箇所が燃焼部であると推察された。燃焼部と直行する北壁の土層断面では、床面は側壁の境から床底に向かい斜めに落ち込み、側壁はやや内傾しながら立ち上がる。ただし、側壁の南西部は側壁の立ち上がりがなくなり、床面に移行していた。側壁の床面との境からの最大残存高は約60cm、厚さは7~8cm程度を測った。側壁の外側には燃焼による被熱により第17層の赤褐色砂質土は赤褐色に変色していた。

燃焼部の堆積土は、丘陵上斜面からの埋土を除き6層に分かれた。いずれの層も燃焼部の下層に向かいレンズ状の堆積状況を示した。下層から窓焼成の燃料や木炭の残存層である第37層灰色粘土層。0.5~2cmの焼土粒子や炭の粒子を多く含む第36層の灰褐色粘質土。焼土片が集中した第12層の明赤褐色粘質土。粘性が強く0.5~2cmの焼土粒子を非常に多く含む第35層のにぶい橙色粘質土。第34層の灰黄色粘質土。砂粒を含み土質がやや粗く、窓壁片を多く含む第33層のにぶい褐色粘質土である。第35層は側壁や天井部外側の被熱により変色した土層である可能性が考えられる。

焚口部（第46・47図）

トレンチ4の焼成部から南西へ1mに設定した調査区でトレンチ3である。平成17年度に調査したトレンチで、次年度の平成18年度にはトレンチ4とトレンチ3の間に燃焼部を確認したトレンチ17を設定している。調査前年度の平成16年度に奈良文化財研究所に委託し実施した2号窓跡のGPR探査において前庭部あるいは灰原と思われる箇所で地表下30cm程度から始まり、直径2~3mの異常反射を示す円形の範囲が認められていた。（註5・6）今回の調査ではこの円形の範囲に合わせ、窓体主軸に交差する位置にトレンチを設定した。

焼成部に向かう北壁の土層断面によると、地表下25~30cmで大量の須恵器片、窓壁片、破礫が長さ

約370cm、厚さ約40cmで堆積していた。遺物に中には須恵器陶片や円面鏡片も含まれていた。この須恵器集中区はトレンチ17でも確認されており、また、G P R探査で存在が確認されていたものである。トレンチ17同様調査時、この須恵器の集中区をゴミ穴と呼んだ。遺構は上半分の側壁では2~3段となる段状に地山を掘り下げ、下半分は緩やかな「U」字状に掘り込んでいた。底面は緩やかな皿状を呈した。床面の標高は49.8mで、燃焼部の貼床が床底から焚口部へ向かい上がりてきて終了する高さと同レベルであった。「U」字形を呈した下半部の地山は焼成による被熱により部分的に赤褐色に変色していた。床面を平面的に観察すると、燃焼部である北東部は長さ175cm、検出幅13cmにわたり被熱により強く赤褐色に変色している。灰原部分側である南西部では幅125cm、深さ9cmを測る、平面形が隅丸方形状を呈する落ち込みがあった。床面の被熱による変色は強いものではなかった。

落ち込みの堆積土は丘陵斜面上部や後世のゴミ穴等の堆積層を除き6層に分かれた。下層から床面に薄く堆積する第10層の灰白色粘土層。下半分の壁面に堆積する第8・9層のにぶい黄褐色粘質土。東側上半分の斜面に堆積する第7層の褐灰色粘質土。落ち込みの全体にわたりレンズ状に堆積する第6層の灰黃褐色粘質土。上層の中央部に堆積し0.2~1cm程度の炭の粒子を含む第5層の黄灰色粘質土である。どの堆積土中にも遺物、窓壁片は包含されていなかった。

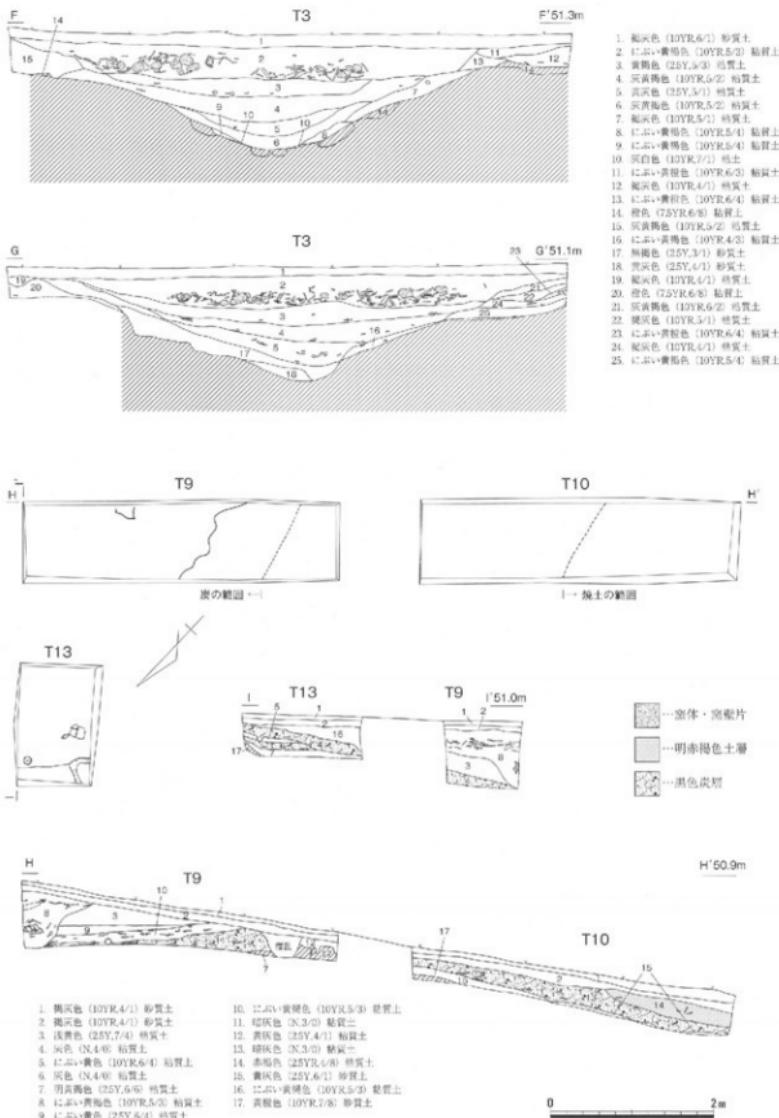
この落ち込み部分の床面には貼り床がなく、床面付近が被熱により赤褐色に変色していた。堆積層に窓壁片を含まない等のことから、この落ち込み部分が2号窓跡の焚口部であろうと推察された。焚口部の地山検出面からの幅460cm、深さ97cmを測った。

前庭部（第46・47図、図版9）

トレンチ3で焚口部と推察され、地山検出面からの幅約460cmで断面「U」字形の落ち込みは、南西方向へ延びていた。このため、窓体の焼成にあたり焼成の作業、須恵器の搬入搬出、燃料の運搬等の空間としての前庭部が広がっていることが想定でき、前庭部の位置や範囲を確認するため、窓体主軸に対して並行しトレンチ3の南西1mにトレンチ9、西側部分の広がりを確認するためトレンチ9の北西1mにトレンチ13を設定した。

トレンチ9の調査区北端部から南西へ87cm、地表から12cmの深さで大量の須恵器片、窓壁片の堆積したゴミ穴を検出した。トレンチ17・3でも検出しており南北方向で約370cmにわたって堆積していることを確認した。ゴミ穴には須恵器以外に脚付の陶片も含まれていた。調査区の南西寄りで地山面を検出し、標高約50mで掘り下げを止め精査した。この面で0.2~5cmの炭の粒子や1~3cmの焼土片を多く含む第11層の暗灰色粘質土である炭層が30cmの厚さを有し、窓体部に向かい緩やかに下る状況が認められた。この炭層の平面的な広がりは、調査区の幅が狭いが、窓体主軸から外方へ弧を描くよう広がっているようである。炭層の上層には粘性が強く須恵器や窓壁片を含む第10層のにぶい黄褐色粘質土。第9層のにぶい黄色粘質土が第11層同様、窓体部に向かい緩やかに下り堆積していた。調査区の南西部端では、窓地の雨水排水のため土管が東西方向に埋設されていた。この土管の埋設掘形の南側から第11層の炭層が始まり、地山も窓体方向へ緩やかに下っており、この箇所までが前庭部の南端部と推察される。

トレンチ13では調査区の北西部で地山が前庭部の中心部に向かい下がっていく状況を確認した。この下がっていく地山の上層には第7層の明黄褐色粘質土。炭片を非常に多く含む炭層である第6層の灰色粘質土。第5層のにぶい黄色粘質土が堆積していた。また、それらの層を切り込む形で0.5~1cmの炭の粒子を含む炭層である第4層の灰色粘質土が堆積した。第4層はトレンチ9の北壁の土層の



第47図 2号窓跡T3・9・10・19平・断面図 (1/60)

第4層に対応するもので、前庭部の下層に堆積する燃焼部から掻き出された炭化した燃料材や焼土が堆積した土層であろう。第4層の炭層は北壁の土層断面を観察すると調査区外に延びており、もう少し北西へ広がっているものと推察される。

遺物は地山の直上で宝珠状のつまみを有する須恵器の杯蓋と第6層から須恵器の窓片が出土した。
灰原（第46~48図、図版10）

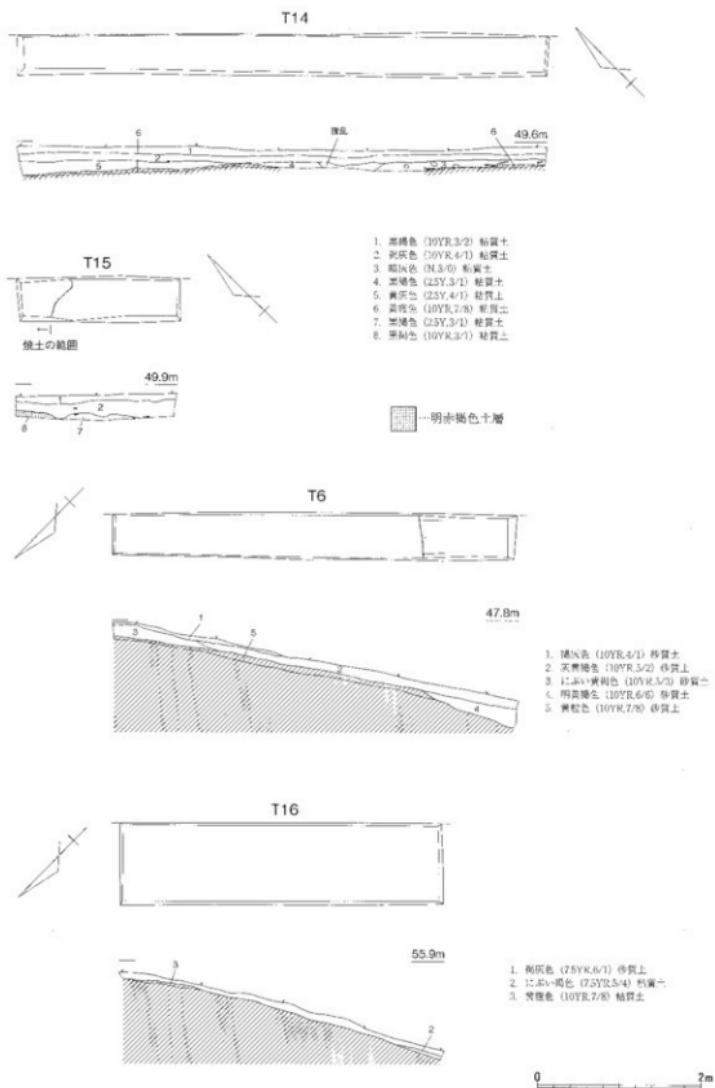
昭和53年（1978）1月の寒風古窯址群緊急調査委員会調査団による分布調査段階で灰原が最下段の烟で長さ40m×最大幅30mにわたり明瞭に認められるとされており、前庭部の下方の烟地に須恵器片、炭、焼土が認められていたようだ、現状でも、2段目の旧烟地（地番：寒風5148番-8）の南部と最下段日と2段日の旧烟地との境の土手面には灰と共に多くの小片となつた須恵器片が散布していた。平成17年度の調査では2段目の旧烟地での灰原の東西方向での広がりと最下段日の旧烟地での南への広がりについて調査区を設定し発掘調査を実施した。設定した調査区は前庭部と想定したトレンチ9から南西1mにトレンチ10。西側への広がりを確認するためT10の北西3mへ位置するトレンチ14。東側への広がりを確認するためトレンチ10の南東4mへ位置するトレンチ15。南への広がりを確認するためトレンチ10の南西4.5mへ位置するトレンチ6である。

トレンチ9で確認した前庭部の南端部から水平に地山面が調査区外へ続くことを確認していたが、トレンチ10では傾斜角度14°で地山面が南向きに下がっていた。この地山の上層には0.5~5cmの炭の粒子や須恵器、窓片を多く含む炭層と言える第13層の暗灰色粘質土が15~20cmの厚さで堆積し、灰原の状況を示した。調査区の南1/3からは、第13層の炭層の上層へ焼土塊や須恵器片を多く含む焼土層である第14層の赤褐色粘質土が20cm厚さで認められ、さらに調査区を超えて斜面下方へ続いている。

トレンチ14は現地形の等高線に平行する形での調査区であり、調査区の西半分では緩やかに西側へ下る地山を検出した。調査区の中央東寄りではトレンチ9でも検出したが、烟地の雨水排水用の土管を埋設した掘形を東西方向に検出した。掘形から東側では現地表下23cmで地山となり、地山の上層には1~5cmの炭片、0.2~1cmの焼土粒子、須恵器片や窓片を多く含む炭層である第3層の暗灰色粘質土が7~8cmの厚さで堆積していた。第3層までが灰原の分布範囲であろうと推察される。

トレンチ15はトレンチ10を挟み、トレンチ14と同じく現地形の等高線に平行する形での調査区である。基盤面の地山までは掘り下げなかったが、調査区の西端から50cmで0.5~1cmの焼土を非常に多く含む焼土層である第8層の黒褐色粘質土。その下層に焼土や炭の粒子、須恵器片を含む第7層の黒褐色粘質土を検出した。第8層の焼土層はトレンチ10で検出した第14層に対応する上層と考えられる。調査区は2段目の烟地の南壁面があり東側に延長することができなく2段目の烟地東側の灰原の端部については確認することができなかった。

トレンチ6は最下段の烟地で現地形に直行し、トレンチ10の延長上の南西4.5m離れた位置に設定した。現地表面から約10cmで地山面を検出。地山面の傾斜角度は10°を測った。調査区の南端部近くから地山面の傾斜角度が変わり下っていく。調査区の北側では地山の上層には0.5cmのオレンジ色のブロックを含む第3層のにぶい黄褐色砂質土が厚い部分で15cmの厚さで堆積していた。第3層がなくなる地点から南側は、地表から地山までを12cmの厚さで第2層の灰青褐色砂質土が堆積していた。この第2層は灰原に含まれる炭の粒子を含む旧烟地の耕作土層であると考えられる。上層断面から判断して、第3層の南端部までが灰原を構成する土層でないかと推察されよう。



第48図 2号窯跡T14・15・6・16平・断面図 (1/60)

トレンチ16（第48図）

トレンチ1で2号窯跡の煙道部を検出したため、窯外部の排水路等の付隨施設を確認するためトレンチ1に接した北東側に設定した調査区である。表土層を約8~10cm掘り下げる傾斜角度16°で地山面を検出した。地山面は調査区の北側約80cmは標高55.7mでほぼ水平を呈した。これは段状の畑地を造成した際、地山面まで削平を受け平行となった結果と推察される。調査の結果、煙道端部から外斜面を450cmの間には排水施設等の付隨施設は存在しないことを確認した。

3 出土遺物

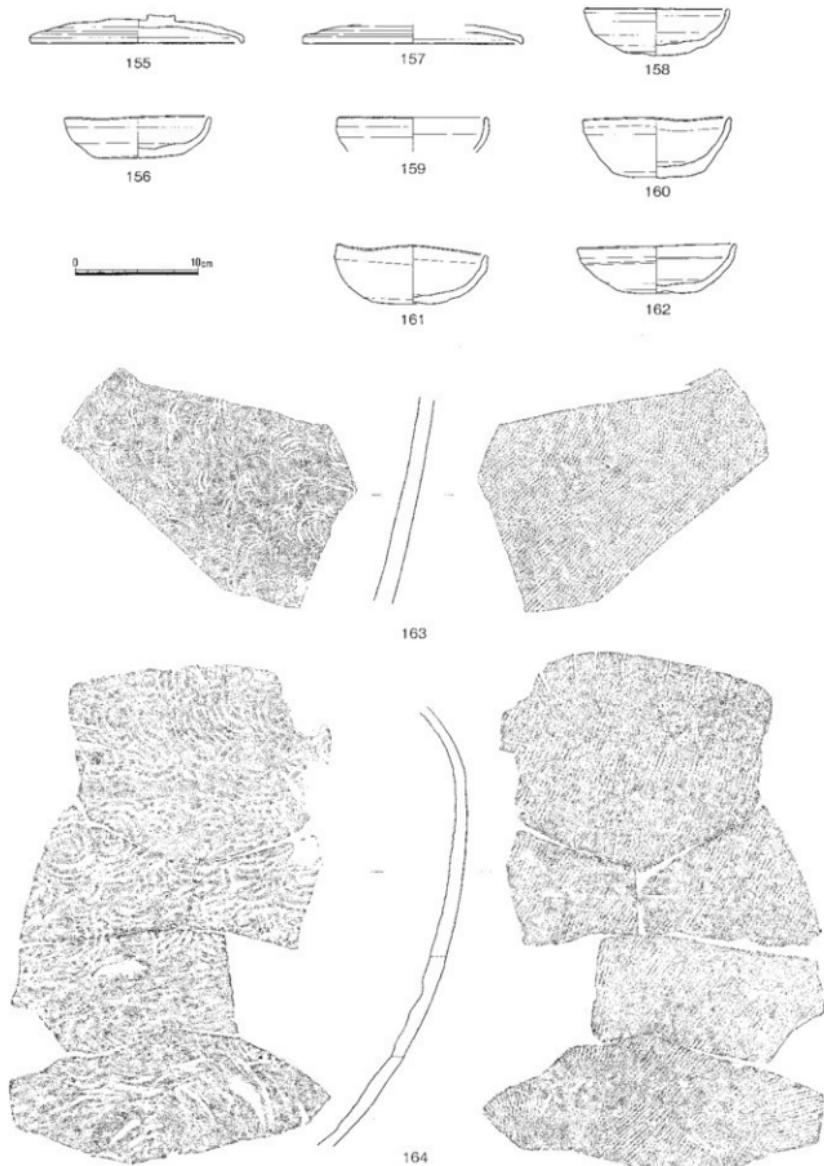
煙道部出土の遺物（第49図、図版23）

トレンチ1の煙道部床面から出土した須恵器の杯蓋と杯身である。杯蓋155は上部が深んだ扁平なつまみに口縁端部内側にかえりをもたず短く屈曲する口縁部。天井部は丸みをもたず扁平な形態を呈するもので、C類に分類（『寒風古窯址群』1978）された杯蓋である。扁平なつまみは蓋の中心になく偏っており作りもやや粗い。天井部はヘラケズリ、他はヨコナデ。口径は17.1cm、器高は2.4cmを測る。色調は外面が灰白色、内面灰色。胎土は砂粒を含みや粗く、焼成は不良である。杯身156は平坦な底部から口縁部に向かいやや内湾しながら立ち上がり口縁端部を丸くおさめる。口縁部は焼成により歪みが認められる。口径は11.7cm、器高は3.8cmを測る。色調は外面が灰色、内面が暗灰色で、焼成は良好である。

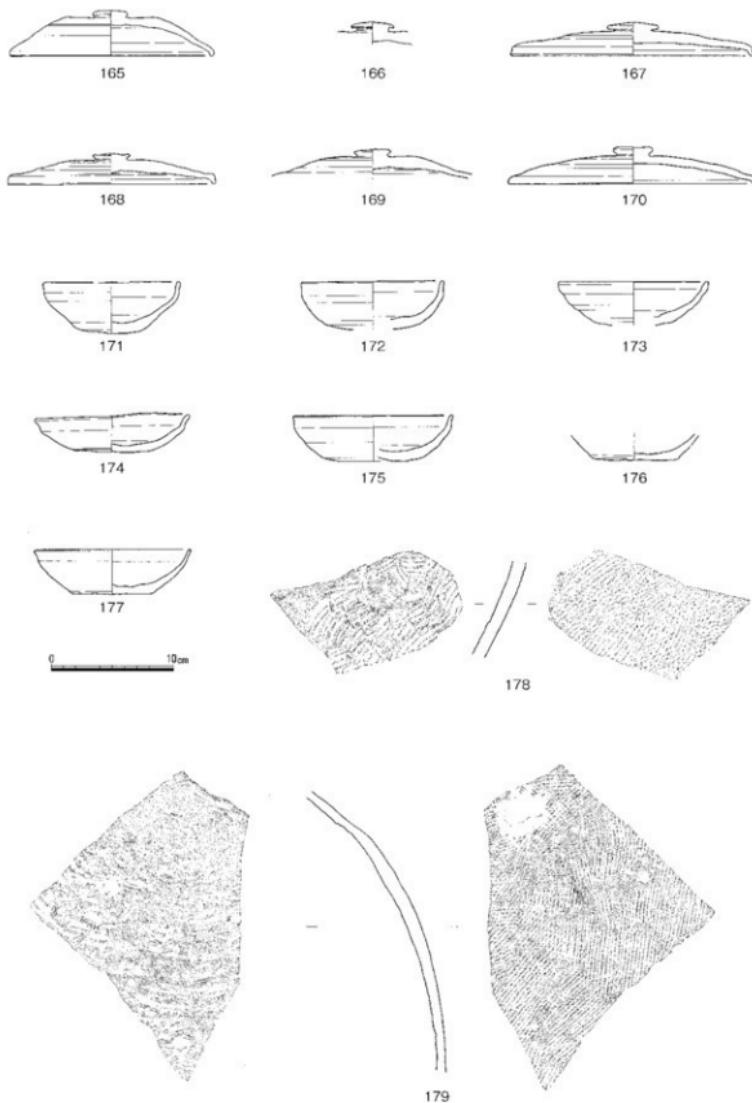
焼成部出土の遺物（第49~51図、図版23）

トレンチ1の焼成部床面から出土した遺物は全て須恵器で杯蓋1点、杯身5点、壺2点である。杯蓋157はつまみを欠くが口縁端部を短く屈曲する形態からC類の杯蓋で、推定口径は17.8cm、焼成が悪く非常に軟質である。158~162は杯身で158の底部はヘラ切り後ナデでやや丸く、椀状の体部を有し口縁端部を丸くおさめる。復元口径は11.6cm、器高は3.9cmを測る。色調は外面が暗灰色、内面が灰色で、焼成は良好である。159は内湾する口縁部片で復元口径は12.0cm。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。160は扁平な底部から口縁部に向かい直線的に立ち上がり口縁端部を丸くおさめる。外面のみ全体に器表が剥離している。口縁部の歪みが大きいが復元口径は11.9cm、器高は他の杯身と比べ高く4.9cmを測った。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。161は完形の杯身で、椀状の体部を有し口縁端部の外面を強くヨコナデを施している。口縁部のゆがみが強いが、復元口径は12.2cm、器高は4.9cmを測る。色調は外面が暗オーリーブ灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。162は底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部で内外に浅い1条の沈線があり、浅い1条の部分からさらに内傾し端部を丸くおさめる。内面のみ自然釉が付着している。口径は12.2cm、器高は4.1cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。163・164は壺の胴部片で、163の外面は格子状のタタキを施す。内面は同心円文の当て具痕後ヘラ状の工具で当て具痕をも右から左方向にナデ消している。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。164は壺の肩部から体部下部までの破片である。窯体床面で出土しているが焼成が非常に悪く軟質で内外面とも調整が不明瞭であるが、外面は平行タタキを施し一部カキ目を施す。内面は同心円文の当て具痕跡が残る。下部は同心円文の当て具の後、無文の押さえにより器面が凸凹している。色調は内外面とも浅黄色である。

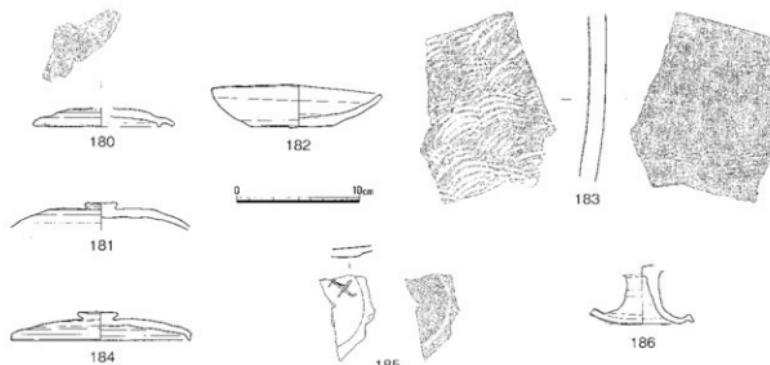
トレンチ2の焼成部床面から出土した遺物は全て須恵器で実測できた遺物は、杯蓋6点、杯身7点、壺2点である。杯蓋165~170はC類に分類されるものであるが、天井部の形態やつまみの形状から



第49図 2号窯跡T1煙道部・焼成部床面出土遺物(1/4) (煙道部: 155・156、焼成部157~164)



第50図 2号窯跡T 2焼成部床面出土遺物 (1/4)



第51図 2号窯跡T 2・4焼成部出土遺物 (1/4) (T2: 180~183、T4: 184~186)

4つのタイプに分けられる。165は碁石状の扁平なつまみを有し、天井部が丸みをもち、口縁端部が短く屈曲する。口径は16.2cm、器高は3.8cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は不良である。166・167は宝珠状に中心部に向かいゆるく尖っているつまみ（Aタイプ）を有し、直径は他のつまみと比べ大きく167では4.2cmを測る。天井部は165と比べると扁平である。167の天井部はヘラケズリ、他はヨコナデを施す。口径は19.4cm、器高は2.7cmを測る。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。168はつまみ中央部と周辺部がわずかに高くなり、宝珠つまみの先端部の面影を残す扁平なつまみを有する。（Bタイプ）天井部は扁平で、口縁端部を屈曲する。天井部はヘラケズリで他はヨコナデを施す。口径は16.6cm、器高は2.5cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は硬く良好である。169は165と同様の碁石状のつまみ（Cタイプ）を有し、天井部は扁平で、口縁部は欠く。天井部はヘラケズリで他はヨコナデを施す。色調は外面が灰色で、内面が灰白色で、焼成はやや軟質である。170は上部中央部がわずかに窪むつまみ（Dタイプ）を有し、天井部は扁平で、口縁端部をわずかに屈曲させる。天井部はヘラケズリ、他はヨコナデを施す。口径は19.8cm、器高は3.0cmを測る。色調は外面がオリーブ灰色で、内面が明オリーブ灰色で、焼成はやや軟質で不良である。171～177は杯身で口縁端部と底部の形状で分類できる。171のヘラ切りされた底部はやや丸く、身部をわずかに外反しながら口縁部で角度を変え上方へ立ち上がる。推定口径は10.7cm、器高は4.3cmを測る。色調は内外とも灰色で、焼成は良好である。172は底部を欠き、碗状の身部で口縁部をわずかに立ち上げる。身部内面には濃緑色の自然釉が多量に付着している。推定口径は11.4cm、色調は内外とも灰色で、焼成は非常に良好である。173は底部を欠き、緩やかな碗状の身部から口縁端部を丸くおさめる。推定口径は12.0cm、色調は内外とも灰色で、焼成は良好である。174は緩やかな碗状の身部から口縁端部を短く外反する。全体にゆがみがある。口縁部外面に重ね焼きによる濃い灰色の変色部分と内面見込み部分に砂状の付着物がある。口径は12.4cm、器高は3.1cmを測る。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。175は174同様緩やかな碗状の身部から口縁端部を短く外反する。口縁部に歪みがある。口縁部外面に重ね焼きによる濃い灰色の変色部分がある。推定口径は12.8cm、器高は3.8cmを測る。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。176・177はヘラ切りされた平底状の底部から身部が直

線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。全体的に薄手でシャープな形状を呈する。**177**の口径は12.8cm、器高は3.7cmを測る。色調は外面が灰色、内面が灰色で、焼成は良好である。**178・179**は甕の胴部片で、外面は平行タタキ、**178**の内面は木製の亀裂のある同心円文当て具を使用したと考えられる当て具痕を有する。**179**の内面は器面の剥落により調整が不明瞭であるが同心円文当て具痕を有するようである。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。

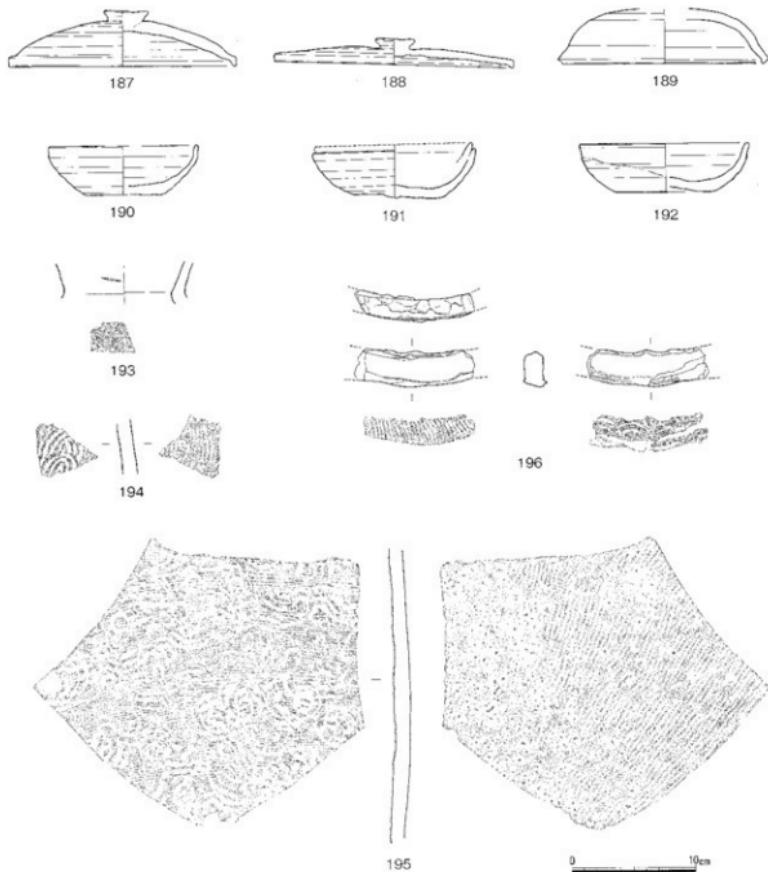
トレンチ2の焼成部内の堆積土から出土した遺物は須恵器杯蓋、杯身、甕である。**180**はつまみ部を欠くが、口縁部に短いかえりを有する形態から従来B類に分類（『寒風古窯址群』1978）された杯蓋である。天井部にヘラ状工具による平行する3条のヘラ記号を有する。口径9.4cm、色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。**181**は扁平なつまみを有するC類の杯蓋で口縁部を欠く。色調は外面が灰黄色、内面が橙色で、焼成は非常に軟質で不良である。**182**は全体に歪みが大きく内面の器面が荒れている。底部はヘラ切り後ナデ、他はヨコナデである。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。**183**は甕胴部片で外面は平行タタキ後ナデ、内面は半円形状の当て具痕。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。

トレンチ4の焼成部内の堆積土から出土した遺物は杯蓋、杯身、高杯である。**184**の杯蓋は扁平なつまみを有するC類の杯蓋で天井部は扁平で口縁端部をシャープに屈曲する。屈曲端部に綫を有する。口径は14.5cm、器高は2.3cmを測る。色調は内外面とも灰色で、焼成はやや不良である。**185**は平底の杯身片で底面にヘラ状工具による平行する2条の沈線を切る様1条の沈線によるヘラ記号を有する。色調は外面が褐灰色、内面が灰白色で、焼成はやや良好である。**186**は高杯の脚部で、端部近くで屈曲する。歪みがあり外面に自然釉が付着している。色調は外面が灰白色、内面が灰色で、焼成は良好である。

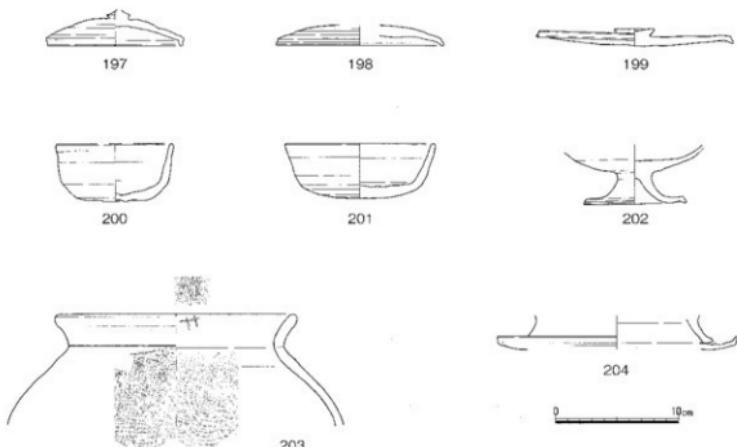
前庭部出土の遺物（第52・53図）

トレンチ9前庭部から出土した遺物は全て須恵器で、遺物は前庭部を埋める堆積土で、炭粒子や焼土片を多く含む第11層の暗灰色粘質土である炭層と、炭層の上層で須恵器や窯壁片を含む第10層のにぶい黄褐色粘質土から出土しており、杯蓋、短頸壺蓋、杯身、甕等である。**187・188**の杯蓋はC類に分類されるものである。**187**は中央部がややむしらなつまみを有し、天井部が丸みをもち、口縁端部が屈曲する。天井部に自然釉が付着している。推定口径は18.4cm、器高は4.5cmを測る。色調は外面が灰白色、内面は灰色で、焼成は良好である。**188**はつまみ中央部と周辺部がわずかに高くなり、宝珠つまみの先端部の面影を残す扁平なつまみを有する。天井部は非常に扁平で、口縁端部をわずかに屈曲する。天井部外面に自然釉が付着する。推定口径は19.3cm、器高は2.5cmを測る。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は硬く良好である。**189**は口縁端部の内面側をわずかにつまみ出す形状から短頸壺の蓋であろうと考えられる。天井部は欠くが緩やかに丸く、ヘラケズリで他はヨコナデである。推定口径は16.2cmを測る。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は硬く良好である。**190～192**は杯身で、平底の底部から内湾しながら身が立ち上がり、口縁端部をまるく仕上げる。底部はヘラ切り後ナデ、他はヨコナデを施す。**191**は身2枚が重なって付着しており焼成時、重ね焼きをしたことが分かる。また、**192**の身の口縁外面部に土器の付着痕があり重ね焼きの痕跡を示した。**190**の推定口径は12.0cm、器高は4.0cmを測る。**191**外側の杯身の口径は13.1cm、器高は4.6cmを測る。**192**の推定口径は13.6cm、器高は4.0cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成はいずれも良好である。**193～195**は甕で、**193**は「く」の字状に屈曲する甕の颈部と思われる。口縁部外面にヘラ状工具によ

り横に1.7cmの長さでヘラ記号を施す。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。194は外面がタタキ後カキ日、内面が4重の稍円形の当て具痕を施す壺胴部片である。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。195は外面が格子タタキ、内面が鮮明ではないが「+」字の車輪文の当て具痕後ヨコハケを施す壺胴部片である。外面と断面の一部に自然釉と付着物があり、内面は全体にニスを塗ったように自然釉による光沢があることから壺破片を焼き台に転用したものと考えられる。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。196は上から見ると緩やかに円弧を描く、側面から見ると水平ではなく、こちらも弓なり状を呈する須恵質の土製品である。内外の調整は壺と同様で、外面は格子タタキ、内面は同心円状の当て具痕が施される。底面はヘラケズリ、上面は指頭による押



第52図 2号窯跡T9前部出土遺物 (1/4) (10層: 189・193~196、11層: 187・188・190~192)



第53図 2号窓跡T13前庭部出土遺物 (1/4) (7層: 197、4層: 198~204)

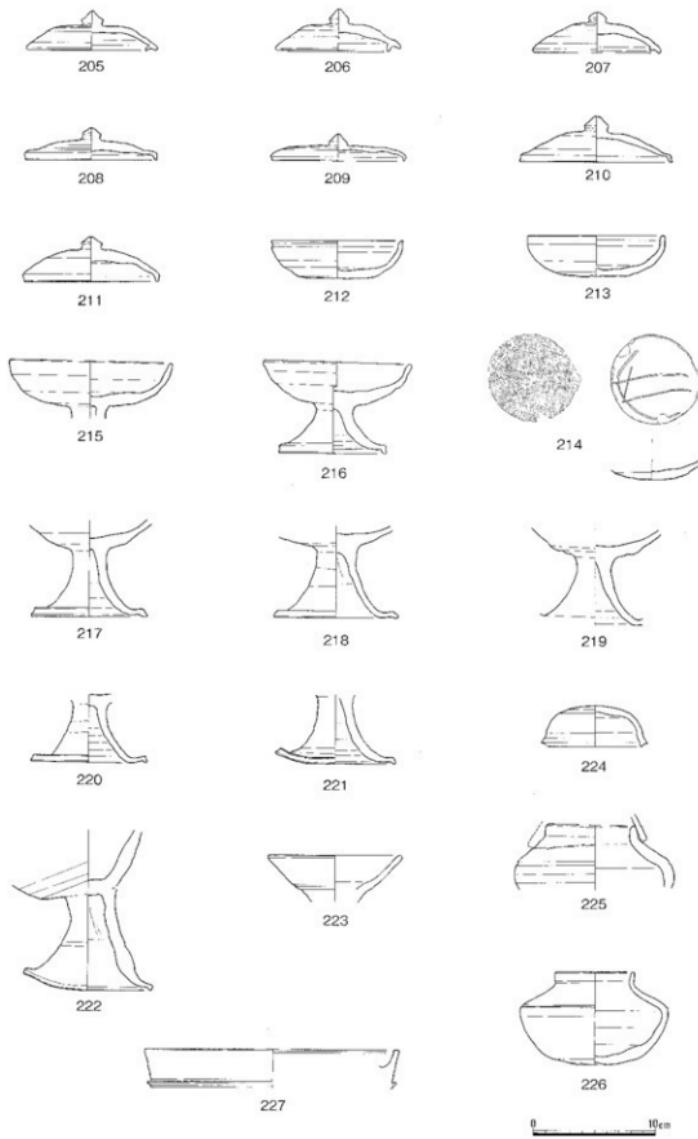
え痕跡が認められる。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。幅3cm、厚さ1.5cmの板状を呈するものであるが、器種については不明である。

トレンチ13の前庭部出土の遺物は197~204の杯蓋、杯身、高杯、甕である。遺物の出土した地山の上層の第7層とその層を切り込む形で堆積した炭層である第4層とは形成される時期に時間的差があると考えられる。197は第7層から出土した杯蓋で、先端部を欠くが天井部の中央に宝珠状のつまみを有するB類に分類された形態であるが、口縁端部は屈曲させるC類に分類された形態を示すものである。外面全体に自然釉が付着している。口径は11.0cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。198・199はC類の杯蓋で198はつまみを欠き、口縁端部の屈曲が弱い。推定口径は13.6cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。199は内側を窪ませた扁平なつまみで、口縁端部を短く屈曲する。焼け歪みにより天井部が内側に膨れている。口径は16.0cm、器高は1.4cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。200・201は杯身で、200はヘラ切りされた底部から口縁部に向かいまっすぐ立ちあがり、口縁端部を丸くおさめる。身の立ち上がりが高く、宝珠状のつまみが付き口縁部にかえりを有するB類に分類される蓋とセットになる身である。推定口径は9.4cm、器高は4.7cmを測る。色調は外面が灰白色、内面が灰色で、焼成は良好である。201はわずかに丸みをもつ底部から口縁部に向かい直線的に立ち上がり口縁端部を丸くおさめる。器壁幅からやや厚手な感じがする。口径は12.0cm、器高4.5cmを測った。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや良好である。202は口縁部を欠く高杯である。脚部は低く、端部を屈曲し、屈曲面に1条の沈線が巡る。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成はやや不良である。203は口縁部を「く」の字状に屈曲し、口縁端部を丸くおさめる甕である。口縁部はヨコナデ、胴部外面は格子タタキ後カギ目、内面は同心円文の当て具痕を施す。口縁上部の内側に185の杯身で見られた、ヘラ状工具による平行する2条の沈線を切る様1条の沈線によるヘラ記号を有した。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや良好であ

る。204はC類に分類される杯蓋が反転しその上に、盤か高台付の杯身の脚部が付着した状態を呈する資料で、C類の杯蓋が焼き台代わりに使用され、その上に盤が置かれ焼成されたものと考えられる。上部外側には自然釉が大量に付着している。

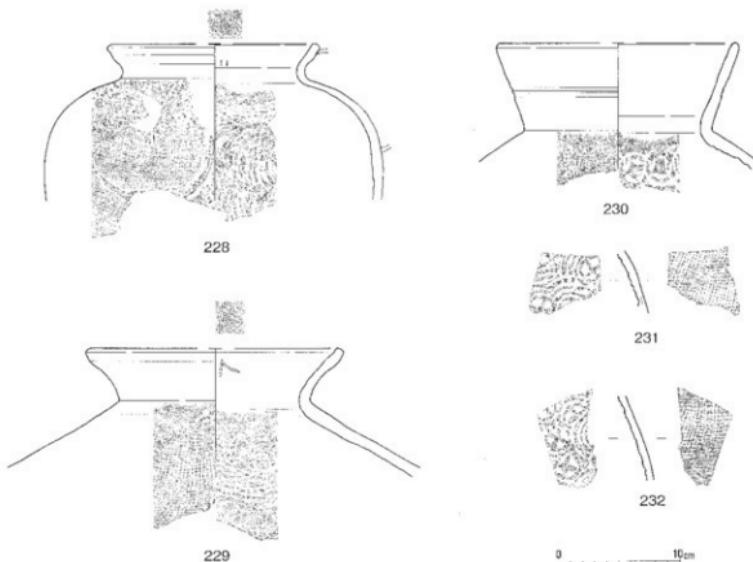
灰原出土の遺物（第54～56図、図版24）

トレンチ10の灰原から出土した遺物は全て須恵器で、第13層の炭層と焼土塊や須恵器片を多く含む焼土層である第14層から杯蓋、杯身、高杯、短頭壺、短頭壺蓋、甌、円面鏡、甌である。205～211は杯蓋で口縁部のかえりの有無により2つのタイプに分類される。1つは205～207で天井部の中央に宝珠状のつまみを有し、口縁内面端部に内傾するかえりを施すB類に分類される杯蓋である。205・207は外面全体に自然釉が付着している。205の口径は8.8cm、器高3.2cmを測る。206の口径は8.1cm、器高3.5cmを測る。207の口径は8.8cm、器高3.4cmを測る。205～207の色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。208～211は天井部の中央に円柱形で上部が円錐形に尖った宝珠状のつまみを有しB類に分類される杯蓋の形態であるが、口縁内面端部にかえりを施さず、口縁端部を屈曲させるC類に分類される杯蓋の形態を示すものである。208・210・211の外面に自然釉が付着している。208の口径は10.5cm、器高は2.6cmを測る。209の口径は10.7cm、器高は2.2cmを測る。210の口径は12.5cm、器高は3.8cmを測る。211の口径は10.8cm、器高は3.7cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。212・213は杯身でヘラ切りされた底部から縫やかな椀状の身部を有し、212は口縁端部を短く外反し、213はまっすぐ立ちあがる。外面に自然釉がわずかに付着している。212の推定口径は10.6cm、器高は3.1cmを測る。213の推定口径は11.3cm、器高は3.1cmを測る。いずれも色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。214は杯身の底部片である、底部部分のみにするため周縁を打ち削った様に断面から想定される。底部にはヘラ状工具による直線や半円形の線刻が施されている。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。215～222は高杯で215・216は椀状の杯部で口縁端部を丸くおさめる。216の脚部の高さは4.0cmで短く、端部近くで屈曲し端部はやや鋭い。215の推定口径は13.0cm。216の推定口径は11.9cm、器高は7.7cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、全体に白っぽく焼成は不良である。217～221は高杯の脚部である。脚部の高さは4.9～5.7cmとやや高く、端部近くで屈曲する。色調は内外面とも灰色～灰白色で、焼成は良好である。222の高杯の杯部と脚部は焼成時大きく歪み内外面に自然釉が付着している。脚部の高さは8.2cmと高く、端部近くで短く屈曲する。脚部中央に1条の凹線を施す。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。223は甌で、口縁部を大きく外反し、端部は丸みをもつ。口縁部中央外側に2条の沈線を施す。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。224～226は短頭壺の蓋と短頭壺である。224の蓋は丸い天井部で、口縁端部の縫をシャープに仕上げる。口径は7.6cm、高さは3.5cmを測る。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。225・226の短頭壺は張りのある体部に短く立ち上がる口縁部を有する。体部に1条の凹縫を施す。225は蓋の一部が接合しており、それ以外の部分も接合痕を残す。226の推定口径は6.2cm、高さは7.6cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。227は円面鏡の縁部・海・上方突帯部分と考えられる。縁部は外方し立ち上がり、口縁端部を水平に仕上げる。縁部の下には断面方形で短い上方突帯が1条残存する。推定口径は20.2cm。胎土は緻密で、色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。228～232は甌で口縁部の形状で2種類に分類できる。1つ目のタイプは228・229の「く」の字に屈曲する頭部から口縁部が外反し、口縁端部近く外側がやや肥厚するものである。228は外面の口縁部から胴部にかけて径約10cmの杯身と推察される付着痕が残存している。

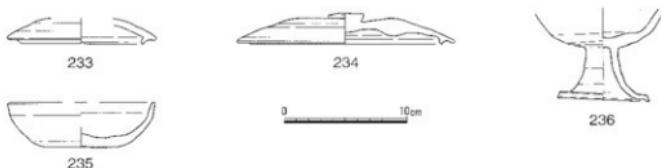


第54図 2号窯跡T10灰原出土遺物 1 (1/4)

(13層: 205・206・213~217・219・222・224・225・227、14層: 207~212・218・220・221・223・226)



第55図 2号窯跡T10灰原出土遺物2 (1/4) (13層: 228~230、14層: 226~227)



第56図 2号窯跡T14灰原出土遺物 (1/4)

口縁部内面に平行する2条のヘラ記号を施す。推定口径は16.4cm。また、229でも口縁部内面に「へ」状にヘラ記号を施す。推定口径は20.0cm。いずれも外側はタタキ後カキ目、内面は同心円文の当て具痕を施す。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。2つ目のタイプは230の「く」の字に鋭く屈曲する頸部から直線的に外方する口縁部で端部を丸く仕上げる。口縁部外面の中央に2条の凹線を施す。外側はタタキ後カキ目、内面は同心円文の中心に星状の車輪文を有する当て具痕を施す。推定口径は19.4cm。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。231・232の壺胴部片で同一個体である可能性がある。外側はタタキ後カキ目、内面は同心円文の中心に十字の車輪文を有する当て具痕を施す。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや不良である。

トレンチ14の灰原から出土した遺物は杯蓋・杯身・高杯である。233の杯蓋はつまみ部を欠くが、口縁部に短いかえりを有する形態からB類に分類された杯蓋である。推定口径9.8cm、色調は内外面

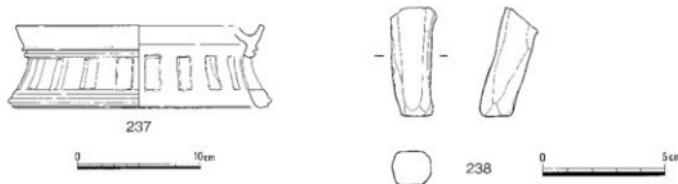
とも灰白色で、焼成は良好である。**234**の杯蓋はつまみが扁平であるがわずかに中心部に高まりを有し、口縁内面端部に短くかえりを施す。内外面全体に自然釉が付着している。天井部に焼け膨れや歪みがある。口径は15.6cm、器高2.6cmを測る。色調は外面がオリーブ灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。**235**の杯身はヘラ切りされた平底から椀状の体部を有し口縁端部を丸くおさめる。復元口径は11.8cm、器高は3.7cmを測る。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。**236**の高杯は杯部の口縁を欠く。脚部の高さは4.3cmとやや低く、端部近くで屈曲する。内外面に自然釉が付着している。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。

T 3上層ゴミ穴出土の遺物（第57図、図版24）

トレンチ3の上層で以前「窯の段」と呼ばれていた窯地に、烟地の間隔の際、灰原に散布していた須恵器や窯業片を集めて捨てたものと考えられるゴミ穴から出土した遺物である。ゴミ穴から杯蓋・杯身・高杯・甕・須恵質陶棺・硯等が大量に廃棄されていた。これらの遺物は2号窯跡の立地する丘陵斜面の位置から1・3号窯跡の遺物が混入する可能性は低いと考えられ、基本的に2号窯跡で焼成されたものであると推察される。その内、特殊遺物として円面鏡と土製品を報告する。

円面鏡**237**は脚台部に3か所の方形の透かしが認められる破片で、かつて2号窯跡で同様の円面鏡が出土しており報告されている。陸部を欠くが、海部から縁部に至る器壁を内側に屈曲させる。脚台部は「ハ」の字状に開き、上から2条の上方突帯、文様帯には $13 \times 27\text{cm}$ の方形の透かし、2条の下方沈線を施す。松尾洋平氏の分類によると、縁部の形態C1類、脚部の形態はウ類に分類される。（註7）色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。**238**は表面をシャープにヘラケズリした四角柱状で下部端面は水平に仕上げている。端面を水平に置くと斜めに立ち上がり水平面から4.4cmと3.5cmの高さで他の部材に接合していたかのように斜めに欠損している。色調は灰色で、焼成は良好である。器種については、表面のケズリによる面取り調整や端面からの立ち上がり状況から脚部であろうと考えられる。あえて想像をたくましくすれば、かつて出土している陶馬の脚の可能性も考えられよう。

(馬場)



第57図 2号窯跡T 3上層ゴミ穴出土遺物 (1/4・1/2)

註

- (1) 野口左嘉太編『長浜村誌続編』 長浜村誌編さん委員会 1977
- (2) 西川 宏『奈良風陶芸の里堺遺構と窯業遺跡の危機』『考古学研究』第24巻第2号 考古学研究会 1977
- (3) 山鹿康平『奈良古窯址群』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』27 岡山県教育委員会 1978
- (4) 西村 康『磁気探査結果』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』27 岡山県教育委員会 1978
- (5) 金田明大『奈良古窯跡群探査成果報告』奈良文化財研究所 2005
- (6) 金田明大・西村康『埋蔵文化財ニュース127 遺跡探査の実際』 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2007
- (7) 松尾洋平『備前・備中の古代陶器－円面鏡を中心に－』『古事』天理大学考古学研究室第6冊 天理大学出版部 2002

第3節 3号窯跡の調査概要

1 位置と調査の概要 (第58図、図版11)

3号窯跡は2号窯跡から南東へ約65m、標高約42mの南面する丘陵斜面に立地する。地番は瀬戸内市牛窓町長浜字寒風5129番-2である。昭和9年(1934)10月頃、畠地として一帯が開墾された際、3号窯跡付近は丘陵がやや急斜面であり東側は谷部に向かっており地理的・日照条件から畠地としては不適であったため開墾されていなかった。しかしながら、当地の南側は、寒風古窯跡群から約1.2km南に位置する牛窓町長浜の国塩集落住民の氏神様としての邑久町尻海に所在する大土井八幡宮への参拝道であった。このため後に、林道工事により3号窯跡の位置する丘陵の下斜面が削平を受け、窯体本体は削平を受けてしまったようである。西川宏氏はこの3号窯跡を寒風4号窯跡と呼んだ。(註1)

その後、昭和53年(1978)1月に寒風古窯跡群緊急調査委員会調査団による分布調査段階では、「林道工事により窯址が切断され、山側の崖面に窯断面が露出している。上手の雜木林中をボーリングした結果では、崖面から5m程焼土を確認している」と記され、窯体断面が露出していた。(註2)また、同じ昭和53年1月から2月に奈良国立文化財研究所により磁気探査が行われ、断面露出箇所から北西方向に約6~7mにわたり窯体が残存していることが推定された。

調査前の平成17年(2005)段階では、史跡地南端部の高さ約2mに及ぶ削平された丘陵崖面は雜草や土砂の流失により崖面で窯体断面を確認できる状態ではなかった。

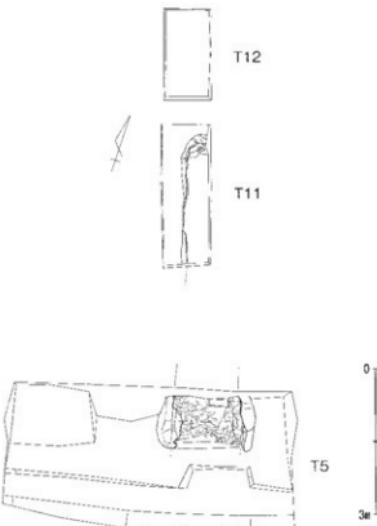
このため、崖面での3号窯跡の窯体断面を確認により位置と構造を確認するため、崖断面に調査区を設定した。設定したトレチは、窯体の

位置・規模・構造を確認するためトレチ
5 (15m × 6 m)。トレチ5で窯体を確
認したため窯体の規模や煙道部の位置確認
のためトレチ11 (1 m × 3 m)。窯の上
部の排水施設等の遺構のためトレチ12
(1 m × 2 m)。の計3本である。

2 遺構

窯体(焼成部) (第59図、図版11)

トレチ5の丘陵斜面が削平された崖面で検出した焼成部は、花崗岩質の地山である岩盤を約110cm掘り抜いた、地下式無段の窯構造の登り窯である。窯体の断面から床面は地山を水平気味に掘り抜き、3~4cmの厚さで粘土による床面が浅い皿状に貼られていた。床面は焼成により非常に硬く焼き締まっていた。貼り床下層の第10層の赤褐色砂質土は、被熱により厚さ約10cm



第58図 3号窯跡トレチ配置図 (1/100)

にわたり赤褐色に変色していた。床の表面は平滑にするわけではなく全面にわたりU型状に凹凸していた。側壁は天井に向かいやや弧を描きながら幅を狭めていくもので、断面が「フラスコ」状を呈した。側壁にも約8cmの厚さで粘土が貼られ焼成により非常に硬く焼き締まっていた。側壁の外側の第11層の赤褐色砂質土は、床面と同様、被熱により厚さ約15cmにわたり赤褐色に変色していた。天井部は崩落しており、床面の上層である第8層の橙色砂質土の中に1~10cm程度の破片となり堆積している。このことから、窯の廃棄後窯体が空洞の状態から天井部が崩落したものと推察される。

焼成部の堆積土は5層に分かれ、下層から1~10cm程度の窯壁片や0.5~5cmの赤色礫を多く含む第8層の橙色砂質土、第7層の明赤褐色砂質土、第6層の橙色砂質土は天井部や側壁の裏側となる層で、窯の焼成による被熱により赤褐色に変色したものと考えられる。第5層は0.5~1cm程度の焼土片や炭粒子を含むにぶい橙色砂質土、第4層は0.5cm程度の炭粒子を含む橙色砂質土である。

床と側壁の粘土の貼り付け状況を観察した結果、床面と側壁の境となり角度が変わる部分では、側壁面に粘土を貼った後、床面に粘土が貼られ、その粘土は側壁面との境部分では側壁に重なるよう貼られている箇所もあり、壁面の補強か補修と考えられる箇所を確認することができた。また、西側の側壁には補修のためかさらによく貼り付け壁面が盛り上がっている箇所も見られ窯の補修がなされていることが分かった。

トレンチ5の調査区で検出された焼成部の最大幅は147cm、天井部分が崩落し全高については不明であるが検出高さから約70cm以上を測る。窯体は平面で地山が赤褐色に変色した部分を確認し、指定地外の林道の下層へ延びていることを確認するに止まり、長さについては不明である。窯の主軸はN-18°W、床面の傾斜角度は25°を測った。

煙道部（第59図、図版11）

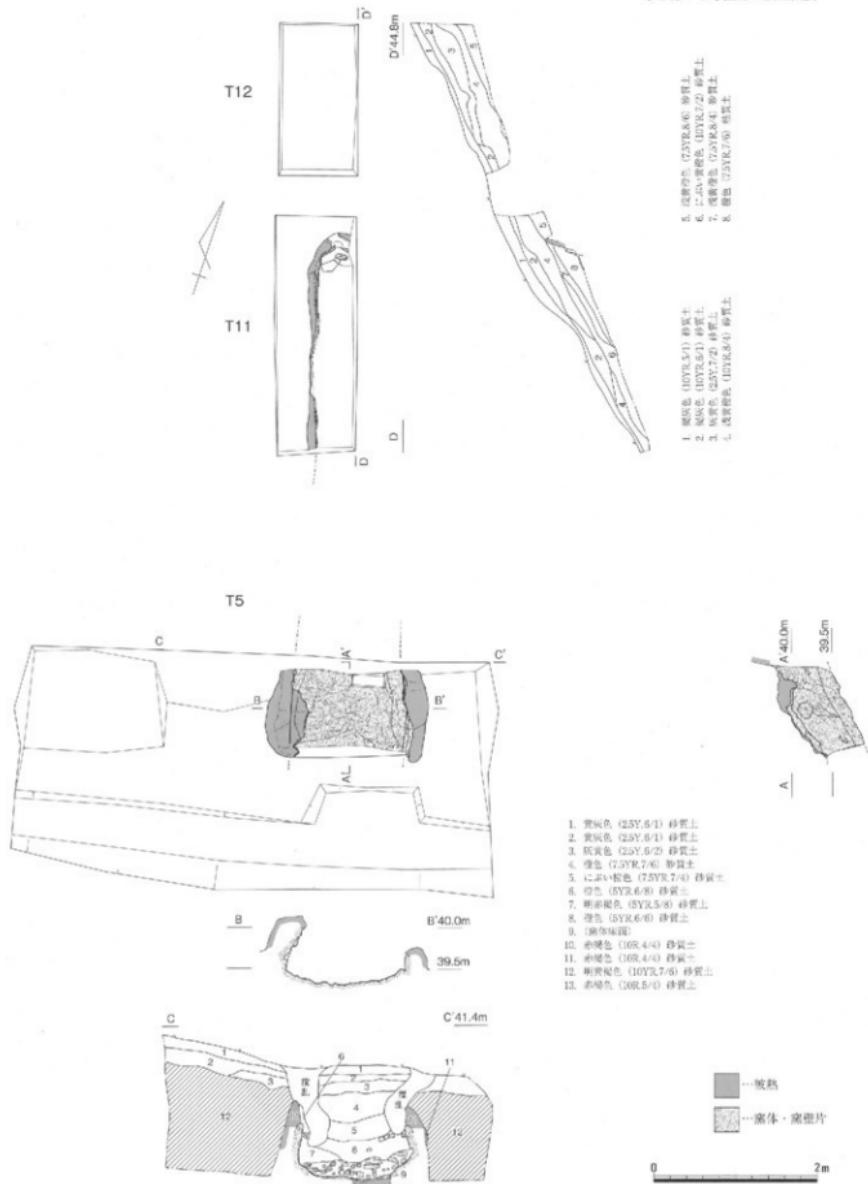
トレンチ5から約24m北斜面に設定したトレンチ11で焼成部から煙道部を検出した。トレンチ11では3号窯跡の煙道部の位置を確認することが目的であったため、平面プランを確認できる深さまでしか掘り下げをしておらず、窯体内部についてはほとんど掘り下げをしなかった。

検出した煙道は、長さ約250cmにわたり煙道部から焼成部で、西側半分のプランであった。西側壁は煙道部に向かいほぼ直線的に延び、煙道部では壁面が次第に円弧を描き、端部の壁面は水平面に対して約71°の角度で立ち上がっていた。煙道端部の壁面の一部で崩れ欠けている箇所があった。壁面の裏面は被熱により幅約20cmで赤褐色に変色して、壁面と同様に変色箇所も立ち上がっていた。煙道部を含む窯体内で検出した堆積土は3層で、第8層は須恵器の杯身や壺片、窯壁片を含む橙色粘土質土、第7層は0.1cmの炭片を含む浅黄橙色砂質土、第6層は0.1cmの炭片を含むにぶい黄橙色砂質土である。

灰原

3号窯跡の灰原については、西川宏氏は「灰原は林道の下手の6026番地にのこっているはずであるが、現在は全く露出していない」と報告している。（註1）また、昭和53年（1978）1月に寒風古窯址群緊急調査委員会調査団による分布調査段階でも同様で「須恵器片は、林道下方の雜木林、田の付近から若干採集しているのみで現状では灰原は露出していない」と報告され、（註2）灰原についてはいずれも確認されていない。

今回の発掘調査でも、林道工事により窯体が切斷され一部は林道の地下に残っているが、林道下方の南東斜面に向かい以前は傾斜角度が急になっており、その斜面部分に灰原が存在していたであろうが、現在その斜面部分が畠地として造成されており灰原は露出していない未確認である。



第59図 3号窯跡窯体平面・断面・立面図 (1/60)

トレンチ12（第59図）

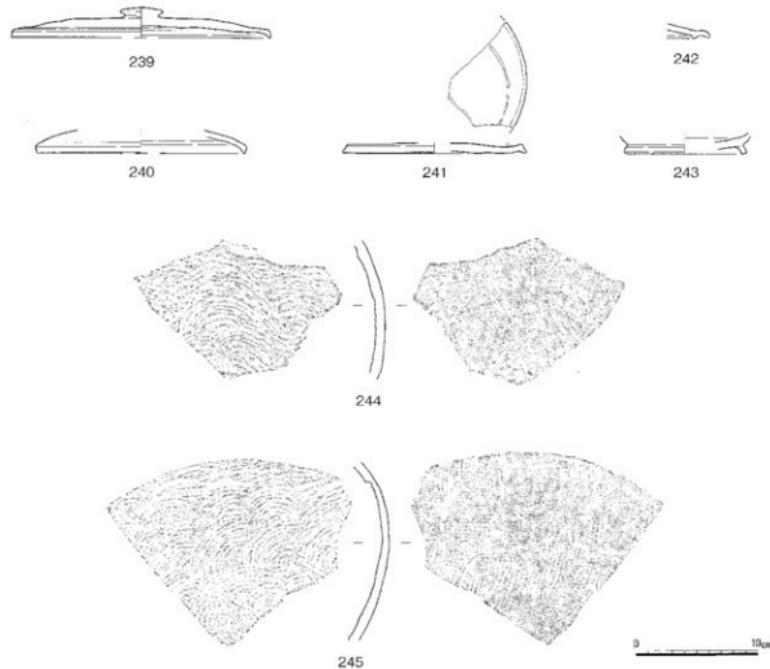
3号窯跡の焼成部外周部に排水溝や覆屋等の付随施設の有無について確認するため、トレンチ11の約50cm北側にトレンチ12を設定し地山面まで掘り下げたが、遺構については検出されなかった。地山面の傾斜角度は約23°を測った。

トレンチ12の堆積土は地山面まで4層に分かれ、上層から第1層の褐灰色砂質土の表土、第2層の褐灰色砂質土、第3層の灰黄色砂質土、第4層の0.5~5cm程度の礫が混ざる浅黄橙色砂質土である。地山直上で15×30cmの破壊1個が出土した。

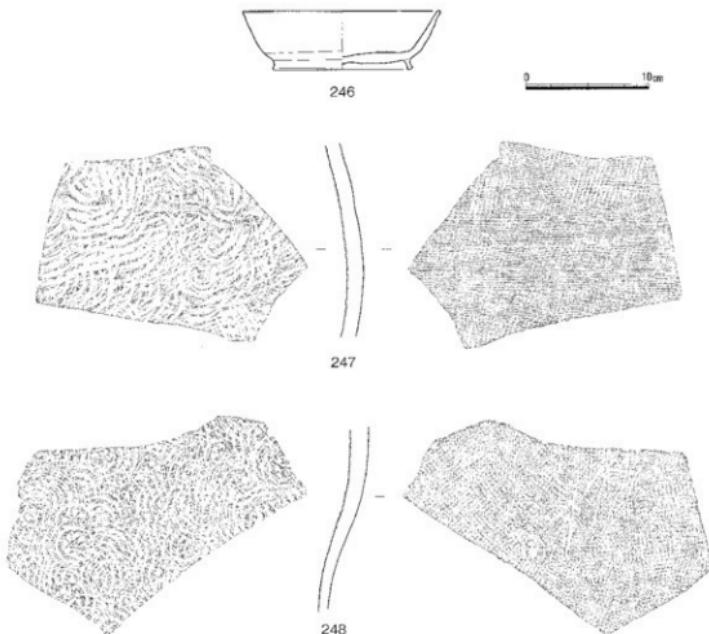
3 出土遺物（第60図、図版24）

焼成部床面出土の遺物

トレンチ5の焼成部床面からの出土遺物は少なく図示できたのは須恵器杯蓋239~242、杯身243、壺244・245である。239は扁平なつまみで中心部に向かいやや高くなっているC類に分類される（『東風古窯址群』1978）杯蓋で、天井部は丸みがなく平らである。口縁端部を屈曲する。外面には砂状の



第60図 3号窯跡T 5焼成部床面出土遺物（1/4）



第61図 3号窯跡T11煙道部出土遺物（1/4）

粒子が全体に付着している。推定口径は21.2cm、器高は2.45cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成はやや不良である。**240**は扁平なつまみを欠くC類に分類される杯蓋の口縁部で、口縁端部を屈曲し、天井部は丸みを持つようである。推定口径は17.0cmを測る。色調は内外面とも灰色で、焼成はやや不良である。**241**は扁平なつまみを欠くC類に分類される杯蓋で、口縁端部を屈曲する。天井部は扁平であるがこれは焼成時に歪みによるもので、外面に丸みを持つ杯蓋か杯身が重ね焼きされた際による付着痕があり、そのためであろう。付着痕の外面には自然釉が付着している。推定口径は15.0cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。**242**は口縁部内面にかえりを有する杯蓋である。内面にかえりを有する杯蓋にはB類に分類（『寒風古窯址群』1978）された宝珠状のつまみをもつ杯蓋があるが、本資料は小片ではあるがB類の杯蓋タイプの口径よりかなり大きく、口縁端部とかえりの間が広い。胎土は精良できめが細かい点から、1-Ⅲ号窯跡のトレンチ20の焼成部の天井崩落後の埋土から出土した杯蓋**139**の様な形態を示す杯蓋ではなかろうか。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。**243**は平底の底部に「ハ」の字状の貼り付け高台を有する杯身である。推定高台径は9.4cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は軟質で不良である。**244・245**は壺胴部片で外面は焼成が不良で残りが悪いが、格子タタキ後カキ目、内面は同心円文の当て具痕を有する。色調は内外面とも灰白色で、焼成は軟質で不良である。

煙道部出土の遺物（第61図、図版24）

トレンチ11の煙道端部で、端部上面から落ち込んだ状態の須恵器杯身246と甕胴部片247・248が出土した。246は口縁部の一部を欠くがほぼ完存するC類に分類される杯身である。底部は杯部に比べ厚みを増すが平底で、「ハ」の字状に聞く細身の貼り付け高台を有する。高台の端部はやや肥厚する。杯部は外傾し直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口径は16.0cm、器高は5.0cm高台径は10.5cmを測る。色調は外面ともにぶい黄橙色で、焼成はやや良好である。247は甕胴部片で外面は格子タタキ後カキ目、内面は同心円文の当て具痕を有する。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。248は甕胴部片で外面は格子タタキ、内面は同心円文の中心部に星状に車輪文施した当て具痕を有する。色調は外面とも灰白色で、焼成はやや良好である。（馬場・若松）

註

- (1) 西川 宏「寒風陶芸の里整備構想と高桑遺跡の危機」『考古学研究』第21巻第2号 考古学研究会 1977
(2) 山野康平「寒風古窯跡群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978

第4節 寒風古墳の調査概要

1 位置と調査の概要

寒風古墳は、2号窓跡から約40m西側、かつての寒風の畑では下から二段目の畑の西端部、標高は約49mで南東への緩斜面に立地する。地番は瀬戸内市牛窓町長浜字寒風5148番-6である。現状では内部主体の横穴式石室の一部と考えられる石材が一部露出している。また、一段目の塼と二段目の畑の境は約1mの比高差があるが、二段目の塼の南西隅が史跡指定地を南北に連なる山道側に向かい緩やかに隆起しておりかつての墳丘の名残を留めている。

寒風古墳と共に2号窓跡の立地する寒風5148番地は、昭和9年（1934）～昭和10年（1935）頃葉たばこや穀物・野菜栽培用に開墾され、現在に見る段状の畑となつたもので、この際寒風古墳の墳丘や内部主体も大きく削平を受けたものと考えられる。このことは、野口佐嘉太輔『長浜村誌統編』1977によると、昭和10年の開墾時には古墳の墳丘はすでに取り去られていたということが分かる。昭和10年2月には内部主体の横穴式石室内が掘られ、2月10日に撮影された横穴式石室の写真によると、床面に須恵器片が敷かれた須恵器床に置かれた蓋部と身前面と側面の一部を欠き、身の内部の土を取り除かれた須恵質陶棺1個体が出上している。横穴式石室の床面が須恵器床であったのは長浜地区でも今までなく『長浜村誌統編』でも『古墳の底に須恵器片を敷きつめたのは当地方に於いては最初の発見なり』と記されていた。

その後、横穴式石室は埋められ、昭和53年（1978）1月に寒風古窓跡群緊急調査委員会調査団による分布調査段階でも、「現状は全て畑になり、わずかに石材が一部露出しているのみである。」と記されている。

このため、寒風古墳の規模、横穴式石室の規模や須恵器床の状況、遺物の有無、古墳の時期等を確認するため、現在石室の一部と考えられる露出している石材部分を中心に調査区を設定した。設定したトレンチは、横穴式石室・周溝の位置や規模を確認するためトレンチ8-a（1m×10m）。横穴式石室の位置、規模確認のためトレンチ8-b（2m×2.7m）。周溝の位置、規模確認のためトレンチ8-c（0.5m×6.4m）。規模確認のためトレンチ8-d（0.5m×3m）の計4本である。

2 遺構

墳丘（第62図）

現状でもわずかに認められる地面の隆起部分と露出する石材を半切する形、すなわち史跡地内を南北に走る山道に平行する形で設定したトレンチ8-aでは、第1層の表土、第2層の耕作土直下で内部主体の横穴式石室の石材と掘方の埋土を確認した。このため寒風古墳の墳丘についてはすでに削平により無く、横穴式石室の天井石や側石が取り除かれた昭和10年段階で墳丘のほとんどは失われていたものと考えられる。

寒風古墳の立地する地形は、北西から南東へ向けての緩斜面であり、トレンチの地山の土層断面からも周溝外から石室掘形の上場にかけて9°の傾斜を有するが、石室掘形の下場面は標高48.8mではほぼ水平面を呈した。このことから内部主体を構築する段階で地山面が整地され、横穴式石室や墳丘盛土が行われたことが考えられる。

周溝（第62・63図、図版13）

現状では未確認であったがトレンチ8-aで寒風古墳に周溝を伴うことを確認した。位置は、周溝内側端部までの距離は横穴式石室中心部から約340cm、石室掘方端部まで約110cmを測った。検出面での幅は、180cm～210cm、深さ28cm、下場の幅は80cmを測り、やや東に向かい幅が広がり、断面は浅い「U」字形を呈した。周溝内の堆積土は5層に分かれ、周溝の最下層でかなり粘性が強く、マンガン粒子を非常に多く含む第7層の灰黄褐色粘質土、第5・6層は墳丘と墳丘外から流れ込んだ堆積層で0.1cm程のオレンジ色のブロックを含むにぶい黄橙色粘質土である。第4層が周溝内の大半を占める堆積土で、トレンチ8-c同様に炭粒子を含む灰黄色粘質土である。出土遺物は周溝底からではなく、やや浮いた状況ですべてこの第4層から壺の口縁部や車輪文を有する胴部片が出土した。

寒風古墳に周溝を有することをトレンチ8-aで確認したことから周溝の読み状況や古墳の規模を確認するため、横穴式石室の北東壁面に直行する形でトレンチ8-cを設定し周溝について発掘したところ周溝を検出した。位置は、周溝内側端部から横穴式石室中心部まで約300cm、石室掘方端部まで約140cmを測った。検出面での幅は160cm～180cm、深さ約20cm、下場の幅は約70cmを測り、やや南東に向かい幅が広がり、断面は緩やかな「U」字形を呈した。周溝内の堆積土は4層に分かれ、第5・6・7層は墳丘と墳丘外から流れ込んだにぶい黄橙色粘質土。第4層は周溝内の大半を占める堆積土で、粘性が強く炭粒子を含む暗灰黄色粘質土である。出土遺物は周溝底から約20cm浮いた、この第4層の上層から杯身3点や壺胴部片が出土した。

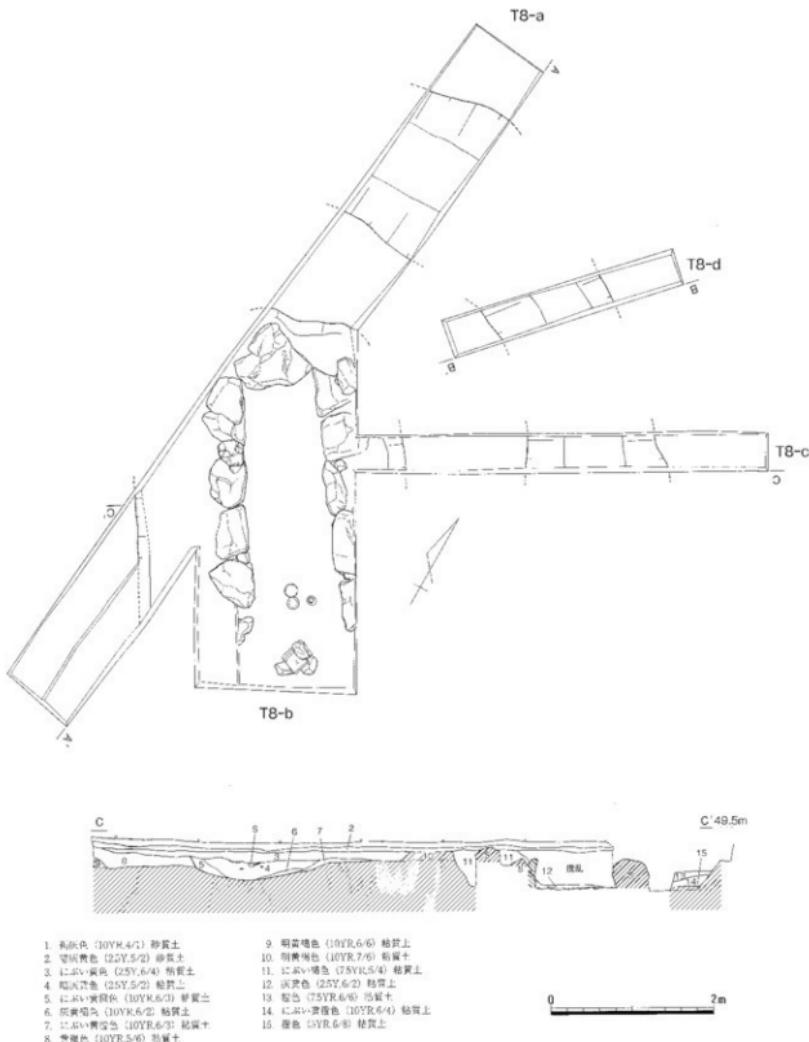
トレンチ8-a、トレンチ8-cで検出した周溝から寒風古墳の墳丘規模について推測できたが、横穴式石室の前端床面で出土した須恵器杯身や杯蓋から飛鳥時代の古墳の墳形に方形や多角形の形態があることから寒風古墳についてもその可能性について確認するため、トレンチ8-aとトレンチ8-cの間にトレンチ8-dを設定し発掘した結果、調査区のほぼ中央部で周溝を検出した。位置は、周溝内側端部から横穴式石室中心部まで約320cmを測った。検出面での幅は、140cm～150cm、深さ約30cm、下場の幅は約60cmを測り、断面は緩やかな「U」字形を呈した。周溝内の堆積土は2層に分かれ、下層は第4層の0.5cmの炭粒子を含む灰黄褐色粘質土と上層は第3層のにぶい黄色粘質土である。出土遺物は上層の第3層から杯身1点と壺胴部片が出土した。

古墳の北側という限られた範囲でのトレンチ調査であったが、寒風古墳には周溝を有することが確認された。各トレンチで検出した周溝の底部での標高は、トレンチ8-aで49.44m、トレンチ8-dで49.22m、トレンチ8-cで48.88mを測り、約4mの距離で56cmの比高差を有している。周溝が全周するかについては今回の調査では確認できなかった。古墳が緩斜面に立地しており、横穴式石室を内部主体とする当地の古墳同様、地形の高い丘陵斜面部分を掘削し、墳丘部と墳丘外の境を区画するよう墳丘端部に周溝を巡らせ、斜面に低い部分すなわち横穴式石室の位置に面した部分には周溝は存在しないものと考えられる。

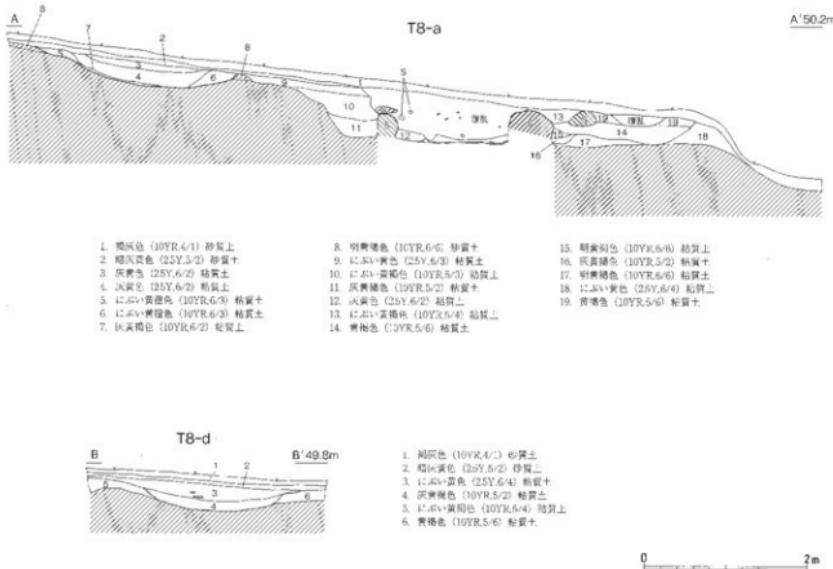
寒風古墳の規模を推定すれば、横穴式石室を円弧に描くよう巡る周溝から直径が約6.5m～約6.8mを測る小型の円墳であったと考えられる。

閉塞施設（第64図、図版12）

横穴式石室の東側壁と西側壁の根石抜き取り穴が終わる、ちょうど石室外にあたる中央部分に長さ約20～30cmの破礫3個と約30cm大の鳴尾片2個体が積み重ねられていた。他に石材は認められず、この集積箇所の性格については明確でないが、石室が終わる位置的な関係や人頃大の破礫があることか

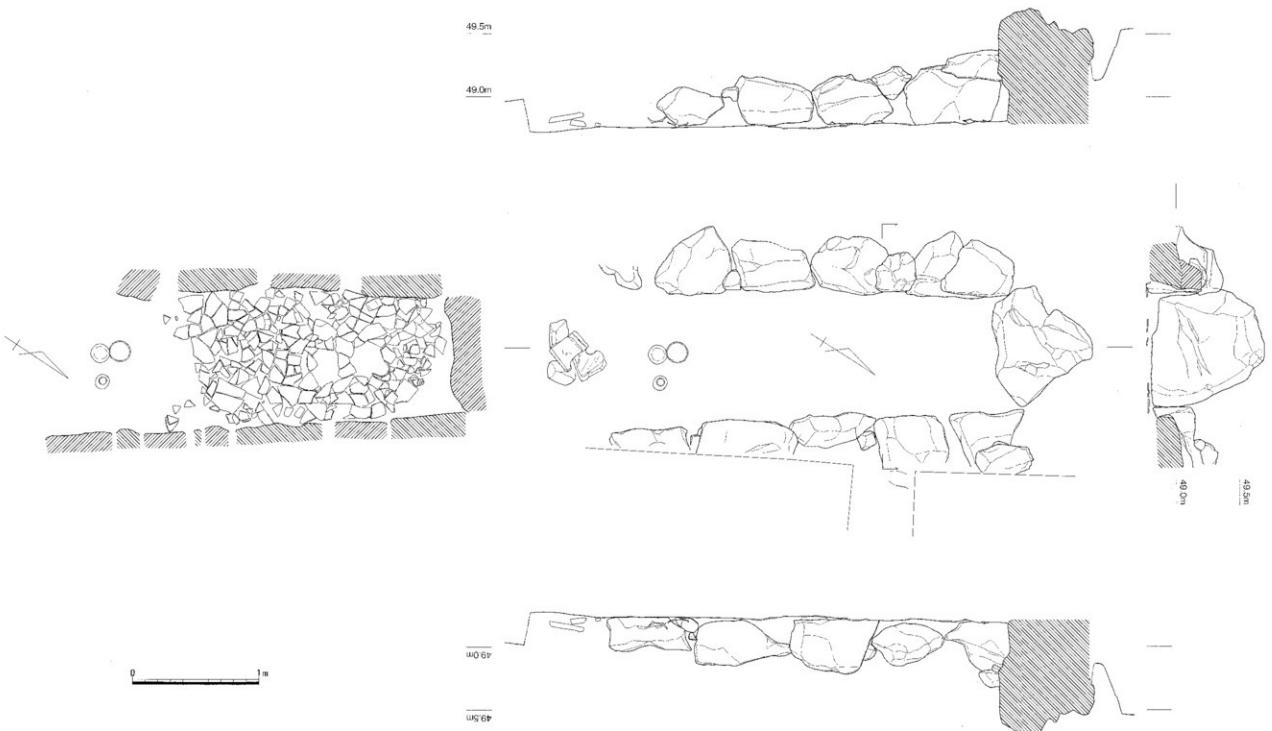


第62図 寒風古墳平面図・T 8 - c 断面図 (1/60)



第63図 寒風古墳T 8-a・T 8-d断面図 (1/60)

ら理葬が終了した段階で石室を封鎖する閉塞施設の一部ではないかと考えられる。他の多くの閉塞施設の石材は盜掘時に破壊されたものと推察される。ただし、閉塞施設として鶴尾片が転用され使用されていることから、寒風古墳の時期や被葬者の性格を考究する上で重要な資料を提供するものと考えられる。



第64図 寒塚古墳横穴式石室平・立面図、須恵器床平面図 (1/30)

石室掘形（第62・64図）

トレチ8-a、トレチ8-cの横穴式石室と周溝との関係を確認するためのトレチ部分の調査で、横穴式石室を構築するにあたり掘形を一部検出した。

掘形の平面形は、奥壁側の東側壁部分は石室の主軸に対して垂直となるが、奥壁部分では奥壁が上部から見ると三角形を呈しており、石室内面に三角形の底面部分に向けて、背面側に三角形の角部となるよう据えられているため、掘形も角部に合わせ拡張されている。石室床面の奥壁端部から掘形上場端部までの距離は約80cmを測る。掘形上場から下場へ向かい約22°の角度で地山が掘り込まれている。奥壁側の東側壁部分の掘形の堆積土は大きく2層で下層はかなり粘性の強い灰黄褐色粘質土、上層はにぶい黄褐色粘質土である。東壁部分では石室の主軸と並行する形で検出された。石室床面の東壁根石端部から掘形上場端部まで距離は約100cmを測る。掘形上場から下場へ向かい約33°の角度で地山が掘り込まれている。掘形の堆積土は粘性があり0.5~1.0cmのオレンジ色のブロックを含むにぶい褐色粘質土である。西壁部分でも石室の主軸と並行する形で検出された。石端部から掘形上場端部まで距離は約140cmを測る。西壁部分の掘形は根石の据え付け個所は地山を掘り下げているが、横穴式石室構築前に地表面を水平に整地し、西側の低い斜面に整地作業で生じた土砂の一部が造成されたものと考えられ、その後、造成土を切り込んで掘形が掘り窪めたと考えられる。第63図第18層の粘性の弱いにぶい黄色粘質土を切り込む形で、第13~17層・19層の6層の堆積土による掘形埋土が確認された。特に第14・17層は0.5~2.0cmのオレンジ色のブロックを多く含んでいた。トレチ8-cでは掘形上場から下場へ向かい39°の角度で、掘り込まれている。

限られた範囲での調査であり推定の域をでないが石室の掘形の平面形は、石室の平面形と同様長方形の形態を呈するものと考えられる。規模について、長さは石室の入口部分が未確認で不明であるが、幅は検出面で約340cmを測る。また、掘形と石室の位置関係を見ると、東壁部分と比べやや石室が東側に偏在するように構築されていることが分かる。想像をたくましく推察すると、石室構築にあたり丘陵斜面側にあたり地表面を掘り窪め安定した個所である奥壁面や東側壁面から構築され、西側壁面は東壁面に規制を受け空間が生じたのではないかと推察される。

横穴式石室（第64図、巻頭図版3）

調査の結果、調査前に地表に露出していた石材は横穴式石室の奥壁であることが確認され、寒風古墳の内部主体である横穴式石室は、天井石のすべてを欠き、1個の奥壁と両側壁石の根石となる最下段の石材を残すのみで上部の石材を欠くものの、石室の下部構造を良好に残しており横穴式石室の規模や形態を確認することができた。石室内での玄室と渡道の区別は無く、石室位置となる南東部に向かいやや側壁が開き気味で、側壁石は上部に向かいやや内傾しており天井石架設ための「持ち送り」が行われていることが推察される。石室の床面での規模は、残存長330cm、奥壁の幅93cm、玄門となる入口部の幅110cmを測る。石室の主軸方向はN-33°-Wを示す。

奥壁は1個のみ残存し、石室の幅に見合うだけの巨石を用意したもので最大幅を確保できる広口を石室側に据え置き、東西の側壁石が奥壁を挟む形で石室が構築されている。奥壁の大きさは、床面での幅90cm、高さ90cm、厚さ75cmを測り、石室内から見ると変形した台形を呈する。奥壁の変形した台形を呈する側面形から東側壁が内傾しながら積まれたとしても奥壁に面する部分には空間が生じたためこの空間の隙間に小石の小破砕が積まれ、天井石が架設されたものと推察される。壁面には赤色顔料の塗布等の痕跡は認められなかった。

東側壁は根石となる最下段の石材が5個すべて残り、奥壁から入口部までの根石の長さは約330cmを測った。各根石は長さ60~70cm×30~40cmの楕円形ないし長方形の石材を横口積にするもので根石の高さを約40cmの高さに揃えようとしている。根石と根石の隙間には小割石で塞いでいる箇所も認められた。壁面には粘土等による目張りや赤色顔料の塗布等の痕跡は認められなかった。トレント8-cの調査から、東側壁の背面に石材を安定させるために支える控え積みは存在しない。

西側壁は根石となる最下段の石材が4個と石室入口部分で側壁の石材を据え付けていた抜き取り穴を検出することができ、本来、東側壁と同様5個の根石で構築されていたことが推察された。さらに、奥壁に接する根石の上には50×25cmの大きさの長方形の石材が積まれ2段目の側壁が残存していた。各根石は奥壁に接する箇所から入口に向かい石材が小さくなっていくが、長さ50~70cm×30~45cmの楕円形ないし長方形の石材を横口積にし、根石の高さを揃えようとしていることが窺える。根石と根石の隙間には小割石で塞いでいる箇所も認められた。東側壁面同様に壁面には粘土等による目張りや赤色顔料の塗布等の痕跡は認められなかった。

寒風古墳の横穴式石室の規模や構造については、奥壁や側壁の根石から長さは330cm、幅は奥壁部分で93cm、入口部で110cmを測り、高さは奥壁の高さ約90cmであったと推察される。

ここで、奥壁の高さについて埋葬施設である須恵器陶棺から推察してみたい。寒風古墳の須恵器陶棺については昭和10年2月10日に撮影された写真には屋根部はすでに失われているが1-I号窓跡の焚口部や灰原から出土した須恵器陶棺は「切妻形」であり、寒風古墳の須恵器陶棺も同様に「切妻形」であった可能性が高いであろう。そこで、寒風古墳と同時期と考えられる瀬戸内市邑久町本庄字間キから出土した水落古墳の須恵器陶棺を基準にして考えると、水落古墳の陶棺の大きさは、身底部長さ84cm、幅41cm、身部総高35cm、屋根部長さ84cm、幅46cm、高さ23cm、陶棺の総高は58cmを測り、3列5木づつ計15本の脚を有する極めて小形の須恵器陶棺である。この水落古墳の陶棺を寒風古墳の陶棺の大きさになるよう計算してみると、昭和10年2月10日に撮影された写真には須恵器陶棺と共に須恵器床の壺片が写っており今回検出した須恵器床から推察すると寒風古墳の陶棺の幅は約60cmとされる。この幅60cmを水落古墳の須恵器陶棺の幅41cmと総高58cmをもとに計算すると寒風古墳の須恵器陶棺の総高は84.8cmとなり、寒風古墳の奥壁の高さ90cmに完全に収まることがわかる。

なお、本墳の横穴式石室は小型であり、埋葬施設として棺台の須恵器床の範囲に陶棺1個体がほとんどを占めていたことから須恵器陶棺以外の追葬による他の埋葬施設の存在についてではないと考えられる。

須恵器床（第64図、巻頭図版3）

寒風古墳を特徴づける遺構として横穴式石室床面に壺の体部片を敷きつめた須恵器床がある。この須恵器床の存在については、野口佐嘉太編『長浜村誌統編』1977にも写真が掲載されているように、昭和10年代に寒風古墳の横穴式石室内が掘られ須恵器陶棺と共に床面の須恵器床が検出されている。須恵器床については非常に珍しかったためか、当時カメラの一般への普及はない昭和10年2月10日に写真撮影がなされている。その後、須恵器陶棺については石室外に持ち出されてしまったが、須恵器床については現状のまま埋め戻されたようである。この結果を示すように、今回の調査によっても昭和10年当時の須恵器床の状況で検出することができた。

検出された須恵器床は、横穴式石室のすべてに設置されたものではなく、石室内の約67%を占めるものである。須恵器床の範囲は、入口部分の端部が明瞭な区画がなく数点の壺が移動していると考え

られるが、壺片が破碎される前の接合関係が窺える範囲までを須恵器床の範囲と考えると、長さは奥壁から約215cm、幅は約90~105cm、面積は約2.1m²を測る。

須恵器床を詳細に見ていくと、須恵器床の素になった機種は全て壺である。壺の口縁部は見られないことから、口縁部を除く体部を10~20cmの大きさに打ち割り、体部外面を上面になるよう破片を重ねることなく床面に隙間なく平面的に敷き並べている。敷き並べられた壺片を見ると左右の破片が接合していたことを窺わせる破片の単位を認めることができ、壺片を敷き並べる際、事前に壺を破碎しその混ざり合った破片を床に敷き並べたのでなく、ある程度の大きさの壺片を床面に置きその場で破碎し敷き並べたのではないだろうか。

また、敷かれた壺片が欠けている箇所が見受けられる。まず、奥壁と東側壁との隅部分である。この部分の南西箇所である須恵器床が始まる部分の壺片の多くが青海波の当て具痕がある内面が上になり、一部壺片が重なっていることから、石室東隅の須恵器床が搅乱を受けたものと考えられる。このように壺片が裏返っている箇所が他に2箇所確認された。次に須恵器床の中央部分2箇所が直径25cmの範囲で欠けている。北側の欠け部分の端部には須恵陶棺の脚部の一部が残っていた。須恵器床に須恵陶棺が置かれていた場所であり須恵陶棺の取り上げの際、搅乱を受けたものかも知れない。

横穴式石室内の埋土の掘り下げ段階で、須恵器床から移動した壺片が数点出土した。その壺の内面の当て具痕には壺に通常見られる「青海波文」と呼ばれる同心円文と共に二重構造の中に格子目状の文様を施した壺があることを確認し、須恵器床に複数の壺が使用されていることが分かった。今回の調査では検出した須恵器床を構成する壺については今後の整備もあり、寒風古墳を構成する遺構の一部として現状のまま保存し埋め戻したため使用された壺の個体等については不明である。そこで寒風古墳の須恵器床で使用された壺の個体数を考えるために、1~III号窓の埋土内に造られた土壙1出上の壺152を素に個体数を推察してみたい。壺152は口径26.4cm、高さ47.3cm、胴部最大径45.5cmを測り、口縁部を除く体部の平面積は約0.6m²である。寒風古墳の須恵器床の面積約2.1m²をこの壺1個体の体部の平面積0.6m²で割ると3.5となり、約3個半の壺により須恵器床が造られていることを推察することができる。

3 出土遺物

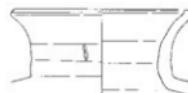
周溝出土遺物（第65図）

周溝部に設定した3本のトレンチ（トレンチ8-a、8-c、8-d）から出土した遺物はいずれも須恵器で、すべて周溝の底部からではなく、周溝がやや埋まった段階で入り込んだものであり、杯を除きすべて破損した状況で出土した。249~253はトレンチ8-aから出土した壺で、249は外反しながら開く口縁部の内側縫部をナデよりやや肥厚させる。口縁部の外面に1.4cm長さで縦に1条のヘラ記号が施されている。外面とも自然釉が付着している。色調は外面が灰白色、内面が灰色で、焼成は良好である。250は壺胴部片で外面は格子タタキ後カキ目を施す。内面は同心円文の当て具痕の後3mm幅の工具で当て具痕をミガキ状にナデ消している。251~253は壺胴部片で、外面は格子タタキ後カキ目を施す。内面は当て具痕が「十」字状の車輪文となっている。車輪文の形態から252と253は同一個体と考えられる。254~256はトレンチ8-cから出土した須恵器で、254は2個体の杯身が重ね焼きされ自然釉が付着したもので、内側の杯身の見込み部には濃緑色となるくらいの自然釉が付着している。底部はヘラ切り後ナデ状のケズリでやや丸く、椀状の体部から口縁部は垂直に立ち

上がり口縁端部をわずかに外反させる。内側の杯身の口径は11.6cm、外側の杯身の口径は11.9cm、器高は5.9cmを測る。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。**255**は杯身で、平坦な底部から口縁部に向かい直線的に開きながら立ち上がり口縁端部を丸くおさめる。口縁部は焼成によりやや歪みが認められる。復元口径は12.0cm、器高は3.8cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。**256**は壺胴部片で、外面は格子タタキ後カキ目を施す。内面は當て具痕が「十」字状の車輪文で後ハケ状の工具で斜め方向にナデを施す。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。**257**はトレーナー8-dから出土した杯身で、平坦にヘラ切り後ナデを施す底部から口縁部に向かい直線的に開きながら立ち上がり口縁端部を小さく外反し丸くおさめる。見込み部分には自然釉が付着している。また、口縁部は焼成により歪んでいる。口径は11.0~12.1cm、器高は4.6cmを測る。色調は内外面とも灰白色で、焼成は良好である。

横穴式石室埋土出土遺物（第66図、図版25）

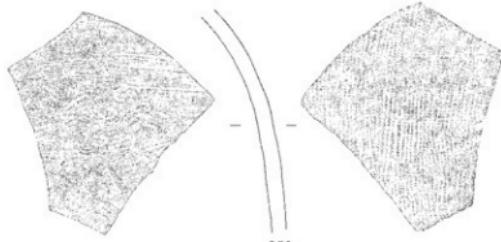
横穴式石室の埋土を床面まで掘り下げる段階で出土した遺物で、石室内が搅乱され掻き出された土砂が埋め戻されたと考えられる遺物と、須恵器床として使用された遺物である。遺物はすべて須恵器



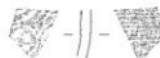
249



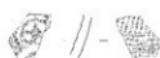
251



250



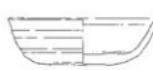
252



253



254



255

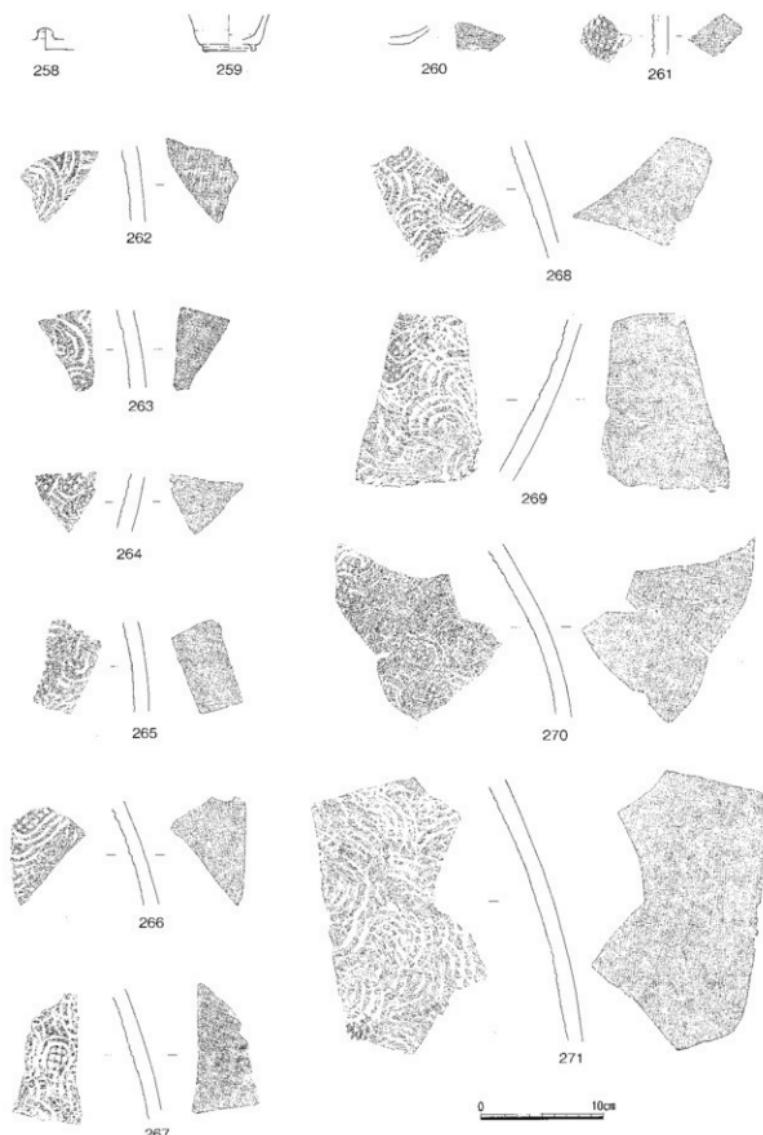


257



第65図 寒風古墳周溝出土遺物（1/4）

0 10cm



第66図 寒風古墳横穴式石室埋土出土遺物 (1/4)

であった。**258**は杯蓋で、形やジャープさに欠ける宝珠つまみを有する。宝珠つまみの径は1.2cm、高さは0.9cmを測る。内外面にわずかに自然釉が付着している。色調は外面が灰色、内面が灰白色で、焼成は良好である。**259**は高台付の杯になると小型であるため高台付の壺であるかもしれない。貼り付け高台は外方に開き、端部をやや肥厚している。体部は斜め上方へ直線的に立ち上がりっている。高台径は4.4cmを測る。色調は外面とも灰色で、焼成は良好である。**260**は杯身で、ナデを施す平底の底部と緩やかに立ち上がる杯部を有する。底部近くの杯部外面にヘラ状工具による1条の沈線が施されている。色調は外面とも灰白色で、焼成は良好である。**261**～**271**は壺胴部片で、外面は格子タタキ後カキ目を施す。内面には一般に認められる同心円文の當て具痕ではなく、梢円状の青海波文の中心部に格子状の文様を刻んだ特異な當て具痕が残る。中心部の格子状の文様について明瞭に痕跡が残る**266**・**267**・**268**の壺を観察すると、梢円の長軸方向に2条と短軸方向に3条の格子を施している。**269**の内面には當て具痕の後ヨコナデが施されている。

261～**271**と同様な格子状の當て具痕を有する壺は、時實黙水氏により1号窯跡群灰原から採集されており、現在、吉備考古館へ保管されている。また、今回の発掘調査に伴い1～1号窯跡の窯体に延長上の位置に設定した灰原のトレンチ21の北側でも表探しており、寒風古墳の須恵器床に使用された壺が1～1号窯で焼成されたものであると考えられる。

横穴式石室床面出土遺物（第67図、図版25）

272～**274**の出土状況としては、須恵器床が終わった約40cm南東、横穴式石室入口近くの中央部にまとまった状態で出土した完形品の須恵器杯蓋と杯身である。**272**の杯蓋はつまみ部を裏にして反転した状態で、**273**は高台面を上に向けて反転状態で、**274**は口縁部を上に向けた正体の状態で出土した。**272**は完形の杯蓋で、天井部中央に貼り付けているつまみ中央部がわずかに高くなってしまっており、宝珠つまみの先端部の面影を残す扁平なつまみを有する。体部を緩やかな丸みを有し、口縁端部ではほぼ垂直に屈曲し端面を丸くおさめる。天井部はヘラケズリで他はヨコナデを施す。口径は17.0cm、器高は3.7cm、つまみの径は2.9cm、高さは0.4cmを測る。色調は外面とも灰色で、焼成は硬く良好である。胎土も緻密で、整形や調整も丁寧である。**273**は杯身で、口縁部は外傾し直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部は扁平で「ハ」字状に低い高台を貼り付けている。見込み部には緑色の自然釉が付着している。底部はヘラケズリ、他はヨコナデを施す。口径は10.5cm、高台径は8.2cm、器高は3.3cmを測る。色調は外面とも灰色で、焼成は硬く良好である。**274**は杯身で、口縁部は外傾し直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部は扁平で「ハ」字状に低い貼り付け高台で端部はナデによりやや窪む。底部はヘラケズリ、他は丁寧なヨコナデを施す。口径は15.1～15.6cm、高台径は11.2cm、器高は4.5cmを測る。色調は外面とも灰色で、焼成は硬く良好である。**275**・**276**は壺の胴部片で、横穴式石室の須恵器床に接して出土したもので、須恵器床にあったものが二次的に移動したものと考えられる遺物である。外面は格子タタキ後カキ目を施す。内面は同心円文の當て具痕の後ヨコナデが施されている。色調は外面が灰色で、内面が灰白色である。焼成は良好である。**277**・**278**は須恵質陶棺の脚部片で、**277**は須恵器床で貼り付けられた壺片の欠けている2箇所の北側、奥壁側で立った状況で出土した陶棺脚部である。**278**はトレンチ8-aの東側のセクションベルトの位置にあたり須恵器床直上で出土した陶棺脚部である。2点の陶棺とも非常に焼成が悪くほとんど土師質と思われるほど軟質でもろい。脚部端部を内面にやや肥厚し端面は丸くおさめる。厚さは0.9cmで薄い。復元した脚部の径は、**277**が12.2cm、**278**が12.3cmを測る。胎土は粗い3mm以下の砂粒を多く含む。色調は外

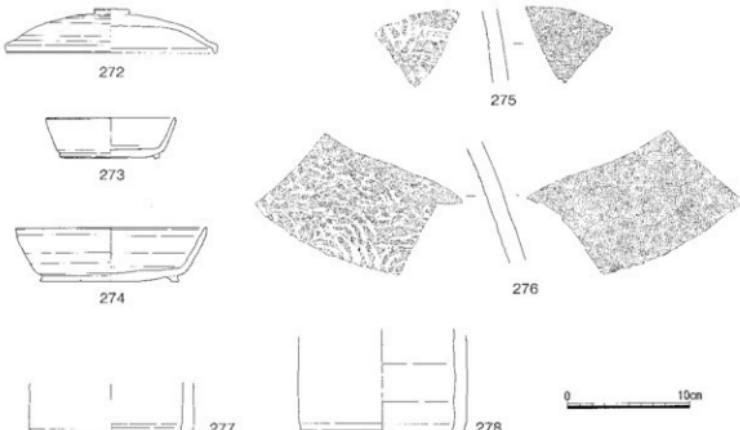
面が灰黄色・浅黄色で、内面が灰白・浅黄色である。

寒風古墳の主となる遺物として陶棺がある。昭和10年2月10日に撮影された横穴式石室の写真は石室全景を撮影したものではないが、写真から判断すると、須恵器床の位置から判断して西側壁面から約40cm離れて置かれていることが分かる。このことから須恵器床は横穴式石室内で東側壁寄りに置かれていたことが推察される。検出された須恵器は、蓋（屋根部）と方形の身前面と側面の一部を欠き、下に向かいやや斜を増す筒状の脚が2本認められる。横穴式石室の項目でも推察したが、水落古墳の陶棺の大きさを基に寒風古墳の陶棺の大きさは、長さが約123cm、幅が約60cmと推察される。蓋（屋根部）の形態は、今回の発掘調査で1-I号窓跡の焚口部や時實黒水氏により灰原から採集されている須恵器の蓋は「切妻形」であり、寒風古墳の須恵器も同様に切妻家形であった可能性が高いであろう。脚部については写真では2列しか写っていないが推定される横幅から3列であった可能性が高いであろう。焼成については、須恵器床に残された277・278の須恵器陶棺脚部片から脚部については非常に軟質で焼きが粗いものであったと推察される。

また、野口佐嘉太編『長浜村誌続編』1977によると『寒風宗時勇一氏の開畠二段目の西隅の古墳は昔の人にすでに封土は取去られ陶棺屋根全部と陶棺前半の一部破られ副葬品は一点発見された。』と記されており陶棺内か、横穴式石室内からは文書からでは不明であるが、副葬品として遺物が1点出土しているようである。さらに、松本幸男「寒風古窓跡群」「牛窓春秋」36 牛窓春秋会 1988によると『後年玄室奥の隅で台付壺の完全品も発掘せられている。』と記され、横穴式石室の奥隅で台付壺が出土している。出土位置については、横穴式石室の北東隅の須恵器床が欠け、搅乱を受けている箇所があるが、その箇所で台付壺が出土したものか注目される状態を示している。

横穴式石室閉塞施設出土遺物（第68図、図版25）

279・280は横穴式石室外で石室床面と同レベルで破縫3個と共に積み重ねされていた鶴尾片で、石室入口の閉塞施設として二次的に転用された遺物と考えられる。279は鶴部で奈良国立文化財研究所飛



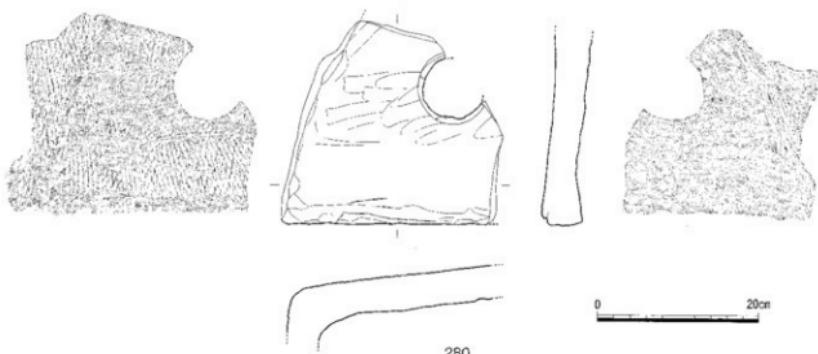
第67図 寒風古墳横穴式石室床面出土遺物（1/4）

鳥資料館発行の『日本古代の鶴尾』1980の寒風占窓跡群出土の鶴尾分類によるとB-3型式とされるもので、蕨手状の文様を基本に、先端を丸めた蕨手を下方向にして、鰭の上部から右下下がりで段状にヘラケズリしていくものである。蕨手の幅は1.2~2.0cm、鰭部の厚さは約1.7cmを測る。文様を施す前に外側は斜格子のタタキを施し蕨手状の文様を削り出している。文様以外については斜格子のタタキ目が残っている。内面は斜格子のタタキ後一部同心円文の当て具痕を施す。鰭中央部を除き端部付近はややケズリ状の「寧なヨコナデ」を施す。胎土は3mm以下のやや粗い砂粒が多く含む。色調は外側が灰色で、内側が褐色である。焼成はやや良好である。280は鶴尾の下端部で、胴部と一部頭部を含む破片である。胴部には下端部から12.7cmの位置に径9.1cmの円形の透かし穴が穿孔されている。胴部外側は斜格子のタタキを全面に施し、透かし穴付近はヨコナデにより斜格子のタタキがナデ消されている。胴部内面は横方向に粗雑な指なでが施される。頭部外側は斜格子のタタキを全面に施す。胎土は2mm以下のやや粗い砂粒を多く含む。色調は内外側とも灰白色である。焼成はやや不良である。

(馬場)



279



280



第68図 寒風古墳横穴式石室床直出土鶴尾 (1/6)

第5節 墓穴遺構3の調査概要

1 位置と調査の概要

墓穴遺構3は、寒風古窯跡群の史跡地内で一番の丘陵平坦部である、標高54~57m、南東~北東45m、北西~南東30mの舌状丘陵の頂部から南面斜面にかけて、須恵器、特に壺片が多く散布している。その須恵器散布地の南端部で南面する標高約55mの緩斜面に立地している。地番は瀬戸内市牛窓町長浜字寒風5144番-1・5145番-1である。この須恵器の散布地は、昭和53年（1978）1月に寒風古窯跡群緊急調査委員会調査団による分布調査では「1号窯址と2号窯址の間の丘陵尾根から南斜面に位置する。この散布地の中央を1号窯址に通じる山道が通過しており、この両側の畠からかなりの須恵器片の散布が認められる。灰原の可能性も考えられるが、炭、窯壁は認められない。」と記され、寒風散布地（『寒風古窯跡群』1978の分布図での表記）また、寒風池東散布地（『寒風古窯跡群』1978の調査概要での表記）と跡名で呼ばれた。（註1）その後、『改訂岡山県遺跡地図』2003では寒風遺跡と明記された。（註2）今回の報告書では『改訂岡山県遺跡地図』に準じ、墓穴遺構3を含む須恵器の散布する平坦部分を寒風遺跡として表記している。

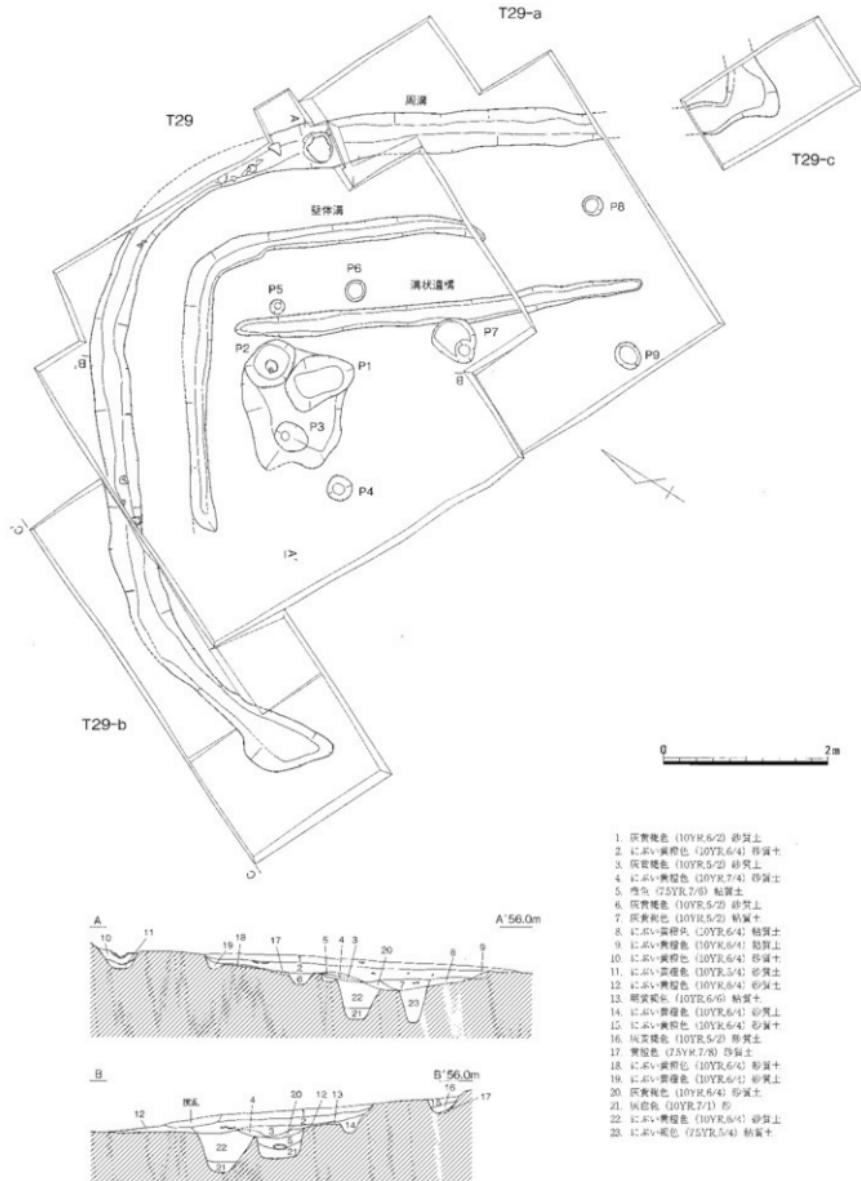
昭和53年（1978）3月に寒風古窯跡群緊急調査委員会調査団により、寒風遺跡地内の遺構の確認のためトレンチ調査が実施された。調査前の時点では、磁気探査で窯跡の反応がなく、窯壁の散布が見られないことから、窯跡に付属する遺構の存在の可能性が考えられていた。調査の結果、丘陵の長軸方向に設定した第4トレントチ南端で平面形が方形で最大深さ20cmの墓穴遺構と北側70cmの間隔で平行する溝状の遺構が検出された。溝状の遺構は墓穴遺構に付属するものと考えられ、遺構は墓穴遺構3と溝状遺構2とされた。

平成18・19年度の発掘調査は寒風遺跡で寒風古窯跡群の生産に関わる遺構である工房跡の確認を目的に、舌状の平坦な丘陵主軸や昭和53年発掘のトレントチで調査出来なかった地点に調査区を設定した。しかし、丘陵主軸の調査区（トレントチ23）やそれに直行する調査区（トレントチ35・36）では工房跡と考えられる明確な墓穴遺構は検出されなかった。このため、昭和53年発掘の第4トレントチで一部が検出された墓穴遺構3と溝状遺構2の規模・構造・時期等を確認するため調査区を設定した。設定したトレントチは、墓穴遺構3と周溝（溝状遺構2）の関係を確認するためトレントチ29（5.4m×5.5m）。墓穴遺構3の規模確認のためトレントチ29の南西側にトレントチ29-a（3m×5.2m）。周溝（溝状遺構2）南西部の位置、規模確認のためのトレントチ29-b（2m×5m）。トレントチ29の東側の周溝（溝状遺構2）の位置、規模確認のためのトレントチ29-c（1m×2m）の計4本である。

2 遺構（第69・70図、図版15）

調査の結果、墓穴遺構3と溝状遺構2は、墓穴遺構とその周囲を巡る周溝で一つの遺構を構成した。墓穴遺構3は、標高55.7mの検出面である斜面北側の地山から約20cmの深さで床面を検出した。床面は丘陵斜面の下方となる南西側に向かいに從い掘り込みがなくなる。このことは、北西の壁面から南東へ約320cmで地山面が削平を受け掘り込みがなくなり、北東の壁面から南西へ約380cmで掘り込みがなくなる。

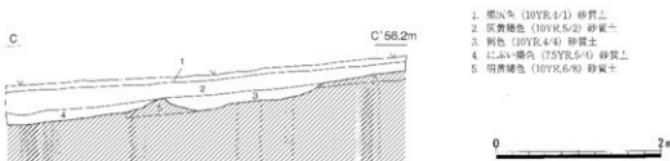
墓穴遺構3の北東側と北西側には壁体溝を巡らせていた。北東側の壁体溝の端部は地山面の削平に



第69図 竪穴構造3平・断面図 (1/60)



第70図 案穴遺構 3床面遺物出土状況平面図 (1/40)



第71図 T29-b 西壁土層断面図 (1/60)

より消失。北西側の壁体溝の端部は南北方向に屈曲を見せながら消失している。壁体溝の平面形は2方向のみの検出であったが隅丸方形を呈した。規模は幅25~35cm、深さは壁体溝の外から10~27cm、床面から6~8cmを測り、断面は逆台形を呈した。床面の中央北西寄りには140×160cm不正形の浅い土壇の中心部に87×58cm、深さ50cmを測る不正楕円形のP 1、北寄りに66×54cm、深さ25cmを測る円形のP 2、西寄りに42×34cm、深さ46cmを測る円形のP 3を検出した。P 2の最下層である砂粒や炭粒子を含む第21層の灰白色砂層の上層ではほぼ完形の平瓶1個体が置かれた状態で出土した。P 2の上層では炭の粒子や焼土を多く含む第20層の灰黄褐色砂質土が堆積していた。他に床面でP 4~P 9の6つの柱穴状のピットを検出した。特にP 4・7は床面から24~30cmの深さがあり柱穴として考えられ

るが、建物を構成する柱穴の並びにはならなかった。豎穴造構の床面を北東側の壁体溝から約80cmの間隔で平行する形で長さ505cm、幅25cm、深さ約15cmを測る溝状造構を検出した。

豎穴造構3の堆積土は基本的に2層で構成され、上層は焼土片を含む第1層の灰黃褐色砂質土、下層はやや細かい土質で焼土片や須恵器片を多く含む第2層のにぶい黃橙色砂質土である。

豎穴造構の北東から西にかけて、豎穴造構の外側約60~70cmの周堤帯状の空間地を挟み、豎穴造構を取り囲む形の幅25~35cm、深さ20~25cmを測り、断面が「U」字形の周溝が巡る。昭和53年発掘の第4トレンチで検出された溝状造構2がこの周溝であることが判明した。周溝の東側端部についてトレンチ29の西側に調査区のトレンチ29-bを設定し拡幅した結果、北西側の周溝は約600cmの長さで北東から南西へ延びた後、方向を緩やかに南に向け長さ約220cmで横幅を広げ、丘陵斜面に吸収されなくなる。周溝の東側端部についてトレンチ29の北東側に調査区のトレンチ29-a・cを設定し拡幅した結果、北東側の周溝は約650cmの長さで北西から南東へ延びた後、方向を北東へ90°の角度で屈曲して調査区外に向かう。なお、トレンチ29の北東に設定したトレンチ35の調査区中央部で東西方向に検出された溝状造構が豎穴造構3の周溝から北東へ延びる溝の可能性があると推察される。トレンチ29-aの周溝から少片であるが白色粘土塊が出土した。

以上の調査結果から、豎穴造構3の規模は、長さが北東-南西330cm以上、北西-南東340cm以上で平面形は隅丸方形を呈する。丘陵斜面上側の2方向では壁体溝を有する。床面では不正形の土壤内に3個の滑円・円形のピットと6個の小ピット、1条の溝状造構を有する。丘陵斜面下側となる南側を除き、豎穴造構の外側約60~70cmに幅35~45cmの周溝を巡らせていた。豎穴造構3の性格について、中央部に土壤・ピットを複数有することから、豎穴住居とは異なる。また、トレンチ29-aの周溝内から粘土塊片が出土した。検出遺構や出土遺物から須恵器生産に関わる工房施設的な性格を窺わせるものと推測されよう。

3 出土遺物（第72・73図、図版26）

豎穴造構3の遺物の出土状況は、中央北寄りでP1~P3が位置する不正形の土壤上部や南東・北西の壁体溝寄りを中心に多くの須恵器が破片となり出土した。須恵器片は壺・杯蓋・杯身等が出土したが、ほとんどが壺であった。現位置を保って出土した遺物として、P2の底面に据え置かれた状況で平瓶1個体が出土した。また、北東側の周溝内には壺1個体が周堤帯から周溝方向に落ち込んだ状態で出土した。壁体溝と周溝の間の周堤帯上では遺物は出土しなかった。

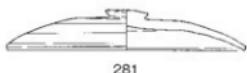
図化できた基本的な器種について報告したい。281は先端部にわずかに高まりの痕跡を有した扁平なつまみに口縁端部内側にかえりをもたず短く屈曲する口縁部。天井部は緩やかな丸みを有するもやや扁平な形態を呈するもので、「寒風古窯址群」1978分類（註1）でC類に分類される杯蓋である。天井部はヘラケズリ、内面中央部はオサエ後ナデ、他はヨコナデを施す。口径は19.0cm、器高は3.3cmを測る。色調は外面が灰色、内面が灰白色。焼成は良好である。282・283は天井部のつまみを欠くものの、短く屈曲する口縁部の特徴からC類に分類される杯蓋である。282の推定口径は17.3cmを測る。色調は外面が灰色、内面が灰白色。焼成は良好である。283は扁平な天井部で口縁端部は281・282が短く垂直に屈曲するのに比べ、なだらかに屈曲させている。推定口径も20.9cmと他の2点と比べ大きい。色調は内外面とも灰白色。焼成は非常に軟質で不良である。杯身284は椀状の身部から垂直気味に口縁部を立ち上げ端部を丸く仕上げている。底部はヘラ切り、他はヨコナデを施す。口径は11.0cm、

器高は3.2cmを測る。色調は内外面とも灰白色。焼成は良好である。**285**は器表面が焼き歪みや膨張により非常に歪んでいる。筒状で上部に向かい広がる形状から長頸壺の頸部片と考えられる。調整は外面器表面が非常に荒れているが、ヨコナデを施す。色調は内外面とも灰色でやや黒っぽい。焼成はやや良好である。平瓶**286**は口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。口頭部は体部中央よりずらし接合している。焼成時に焼け歪んだものと考えられ、口頭部は本来体部外方に向けるか水平に接合されるものが、接合部から体部中央側に大きく傾いた形状を呈した。体部上方に大きく張った肩部を有する。底部は平底でヘラ切り他はヨコナデを施す。口径8.3cm、器高11.7cm、体部径17.0cm、頸部径4.7cm、颈部長5.2cmを測る。色調は内外面とも灰白色。焼成は良好である。壺**287**は口縁部を短くほぼ垂直に立ち上げ、端部を丸く仕上げている。肩部には棒状の粘土による把手を取り付けている。蓋を付けた状態で焼成したものと考えられ、把手部分から口縁部には自然釉が付着していない。調整は外面が格子タタキ後カキ目。内面が同心円文の当て具痕後ナデを施す。推定口径は17.3cmを測る。色調は内外面とも灰白色。焼成はやや良好である。壺**288**は大形の壺の口縁部で緩やかに外反し罐部を外面に向けるよう立ち上げる。調整は口縁部がヨコナデ、肩部外面がカキ目、内面が同心円文の当て具痕を施す。口縁外面には上から2条・2条・1条の沈線を施しその内の3ヶ所にハケ状工具による波状文を施す。さらに、口縁端部にも波状文を施す。推定口径は49.8cmを測る。色調は内外面とも灰色。焼成は良好である。壺**289**は頭部から大きく外反する口縁部を有し、口縁罐部外面を1.5cm幅で肥厚している。口縁部内面と外面には自然釉が付着している。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面はタタキ後カキ目、内面は同心円文当て具痕後ナデを施す。推定口径は24.2cmを測る。色調は内外面とも灰白色。焼成は良好である。壺**290**は周溝から出土した遺物で、壺**289**と形態、大きさ等ほぼ同じで頭部から大きく外反する口縁部を有し、口縁端部外面を1.0cm幅で肥厚している。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面はタタキ後カキ目、内面は同心円文当て具痕後ナデを施す。推定口径は22.0cmを測る。色調は外面が灰色、内面が青灰色。焼成は良好である。壺**291**は堅穴造構3の北東の周溝内に落ち込んだ出土した遺物で、後世の耕作により胴部の側面が削平を受け欠くものの他はほぼ完形に復元できた。体部は中央やや上部に最大径を有するやや長胴形を有し、頭部から外傾しながら口縁部を短く立ち上げ、口縁罐部を丸く仕上げる。底部は丸底であるが、中心をわずかにずれた底部には4.5cm大の窯壁片と3.0cm大の破礫が器壁にめり込む状態で溶着していた。この様に壺の底部中心をずらした箇所が扁平に歪んだり、壺片や窯焚が溶着する例は1-Ⅲ号窯跡の埋没後作られた、土壙1から出土した壺**153**にも認められ、壺の窯体内での焼成方法を知る上でも貴重な資料となろう。肩部には径2.0cmの円形浮文を3ヶ所貼り付けている。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面は格子タタキ後カキ目、内面は同心円文当て具痕後ナデを施す。口径19.5cm、器高38.6cm、胴部最大径36.2cmを測る。色調は外面が灰白色、内面が灰色。焼成は良好である。

(馬場)

註

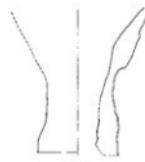
- (1) 山鹿康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978
- (2) 岡山県古代古墳文化財センター編『改訂岡山県遺跡地図』(第6分冊岡山地域) 岡山県教育委員会 2003



281



282



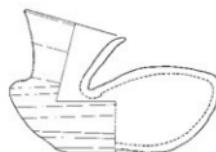
285



283



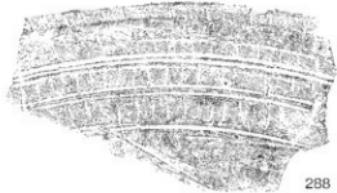
284



286



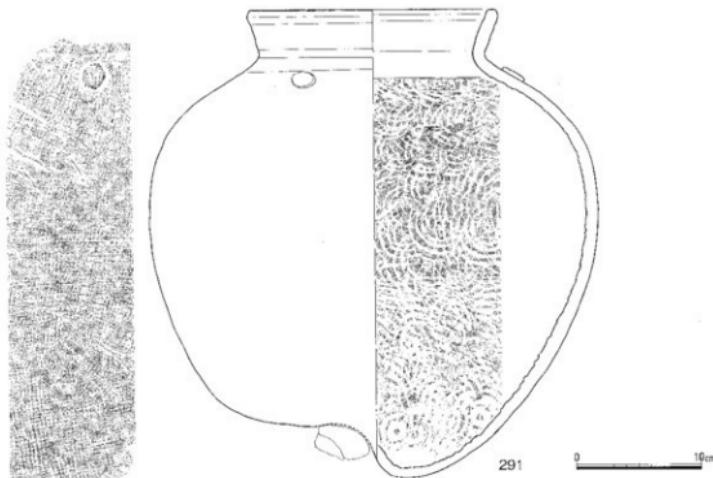
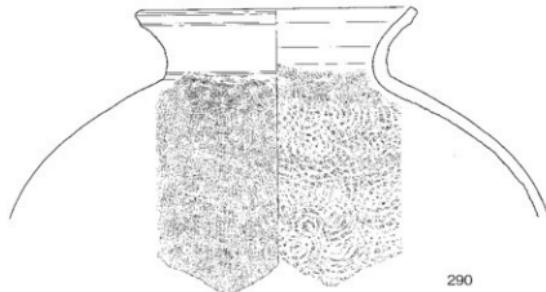
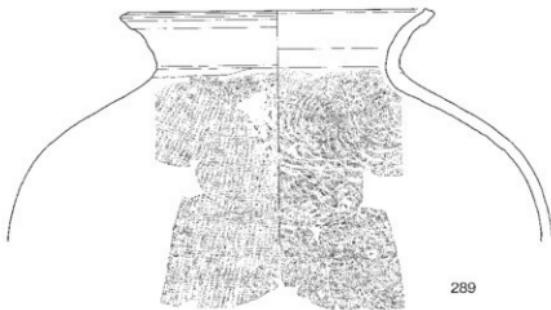
287



288

0 10cm

第72図 T29竪穴遺構3出土遺物1 (1/4)



第73図 T29型穴遺構3・周溝出土遺物2 (1/4)

第6節 その他の調査区の調査概要

1 位置と調査の概要

調査の概要については第1節の1号窯跡群、第2節の2号窯跡、第3節の3号窯跡、第4節の寒風古墳、第5節の竪穴遺構3と確認できた遺構について節を設け報告してきたところである。以下については、検出した各遺構の広がりや他の遺構の有無について確認をするため史跡地内に設けた調査区の概要について報告する。

大きく2ヵ所にまとまる調査区となっている。1ヵ所目は、1号窯跡群が1-Ⅲ号窯跡の新発見により計3基の窯跡群で構成されていることが判明したことから、1-I号窯北側での窯跡の有無について確認するためトレチ19の5m北側にトレチ30（1×6m）、1号窯跡群の北側約15mは谷部となっており東陵からの雨水が寒風池へ流れ込んでいる。この雨水の流れ谷溝を挟んで北側にも須恵器片の散布が認められることから谷溝の北側の丘陵斜面に新たな窯跡の存在も考えられ、遺構の有無について確認するためトレチ34（1×7m）、トレチ22（1×7.5m）の計3本である。

2ヵ所目は、寒風古窯跡群の史跡地内で一番の丘陵平坦部である、標高54~57m、南東-北東45m、北西-南東30mの舌状丘陵の頂部から南面斜面にかけて設定した調査区である。この地点では現在でも地表に須恵器片が多く散布しており「寒風古窯址群」1978の調査概要では「寒風池東散布地」と呼ばれた。（註1）また、「改訂岡山県遺跡地図」2003では「寒風遺跡」と明記された地点である。（註2）第5節で報告した竪穴遺構3も同じ「寒風遺跡」内の丘陵平坦地内に位置している。調査区は舌状の丘陵主軸での竪穴遺構やその他の遺構の有無について確認するためトレチ23（1×40m）、「寒風古窯跡群」1978の調査で「竪穴遺構1」の規模や時期を確認のためトレチ21-a（1.5×3.2m）、トレチ24-b（1.5×4m）、また、トレチ23で検出した遺構で窯跡区と工房区を区画すると推察される溝の規模を確認するためトレチ25-a（1×2m+0.5×15m）、トレチ25-b（2×4m）、舌状の丘陵南斜面部分での竪穴遺構やその他の遺構の有無について確認するためトレチ7-a（1×6m）、トレチ7-b（1×6m）、トレチ7-c（0.5×4m）、トレチ35（1×15m）、トレチ36（1×12m）の計10本である。

2 トレチ30（第74図）

1-I号窯北側での窯跡の有無について確認するためにトレチ19の延長上約5m北に設定した調査区である。

調査の結果、調査区が狭く規模等については不明であるが、平面が方形状を呈する窪地を検出した。底面は中央部がやや窪んでいるが平坦である。堆積土は2層確認され、最下層は第8層の土質が細かい明黄褐色砂質土で、中・上層はにぶい橙色砂質土である。堆積土中から遺物等は出土しなかった。

方形状窪地の北側の地表面の高さは61.5mであるが、南側の地山は1-I号窯跡に向かい徐々に斜面となり地山高が下がっており、調査区の南端部の地表面の高さは60.7mを測った。傾斜した地山から上には、第10層のしまり・粘性があるにぶい黄橙色砂質土で、第9層のにぶい黄橙色砂質土、第5層のにぶい橙色砂質土が堆積していた。

トレチ30では方形状の窪地を検出したものの遺物の出土もなく遺構であるかどうかは不明である。

3 トレンチ34（第75図）

1号窯跡群の北側で史跡指定地外の丘陵斜面に新たな窯跡の有無について確認するため標高約60mに設定した調査区である。

調査の結果、堆積層は大きく3層に分層でき、上層から第1層の暗灰黄色砂質土、第5層の浅黄色砂質土、下層となる第6層のしまりが強く、マンガン粒子を非常に多く含み、1~20cm大の破礫を多く含む灰黄褐色砂質土が堆積していた。調査区の北と南側では第1層と第5層の間層として第4層の黄灰色砂質土、第2層のにぶい黄橙色砂質土、第3層の灰白色砂質土が堆積していた。地山面の標高は、調査区北側で59.4m、調査区南側で59.0mを測り南側に向かいわずかに傾斜していた。遺構については何も検出しなかった。遺物は、第6層上層で流れ込みと思われる数点の須恵器壺片が出土した。

トレンチ34において遺構の検出もなく指定地外に窯跡の存在を窺わせる遺物も認められなかった。

4 トレンチ22（第76図）

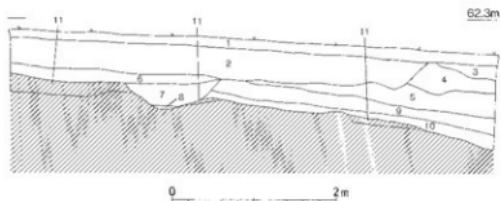
1号窯跡群の灰原の北側が谷部となっており、東丘陵からの雨水が寒風池へ谷溝を通じて流入しているが、この谷を挟んで北側にも須恵器片の散布が認められることから谷溝の北側の丘陵斜面に新たな窯跡の存在も考えられた。このため遺構の有無について確認するため北側の丘陵斜面に平行する形で設定した調査区である。

調査の結果、現地表面から約40~60cmの深さで基盤面を検出した。基盤層は1号窯跡群の所在する丘陵の基盤層と大きく異なり、黄灰色粘質土で粘土状の部分もあり粘性が強く、細かい砂粒を多く含んでいる。基盤面は調査区の北側半分では地表面とはほぼ同じで約20°の傾斜角度を有しているが、調査区の中央部の標高54.3mで傾斜角度を増し、段を有しました緩やかに傾斜している。標高53.3mの調査区南端部では基盤面がさらに角度を増し下がっている。調査区の北側の堆積層は基本的に3層に分層でき、上層から第1層の褐灰色砂質土、第2層のにぶい黄橙色粘質土、中下層の第7層である灰黄褐色砂質土である。第7層はマンガン粒子を非常に多く含み、5~30cm大の破礫を含んでいる。調査区中央部の段状部分では、下層の第7層に、第8層の黄灰色砂や第9層の黄灰色粘質土、第10層の灰黄褐色砂質土がブロック状に堆積している。調査区中央部の段状部分は遺構としては認めがたく、調査区内からは遺物は出土しなかった。このことから、トレンチ22の上部斜面には遺構は存在しないことが判明した。また、1号窯跡群の灰原の北側が谷部を挟んで北側に散布する須恵器は、後世谷溝の流路を維持するため、谷溝に堆積した須恵器を含む土砂を北側に掘り上げた結果であろうと推察される。

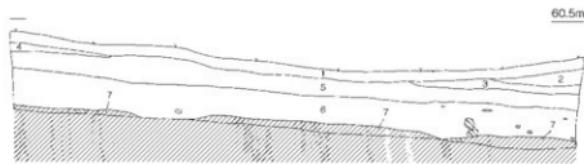
5 トレンチ23（第77図、図版16）

寒風古窯跡群の史跡地内で一番の丘陵平坦部で、須恵器片の散布から「寒風池東散布地」「寒風遺跡」となっている地点である。1978年の寒風古窯址群緊急調査委員会調査団による確認調査では、第4トレンチとして舌状丘陵の長軸方向に調査区が設定され、堅穴遺構3基、溝状遺構2条を検出している。（註1）今回の確認調査では標高55~57mの舌状丘陵の堅穴遺構を含む工房跡の遺構確認のため頂部主軸に設定した調査区である。調査区は1978年調査の第4トレンチで検出された堅穴遺構1を再検出する形で、さらに1978年調査の第12トレンチを切る形で調査区を設定した。

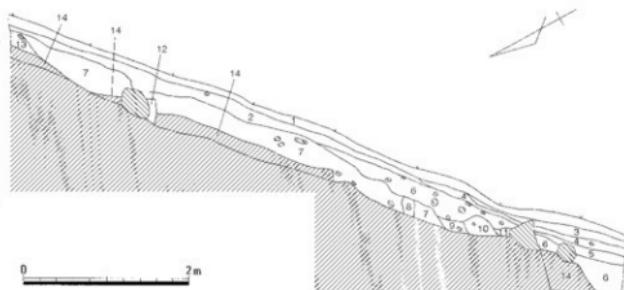
調査の結果、溝1、たわみ1~4の4基、土壙2・3（堅穴遺構1）、上壙4の3基を検出した。



第74図 T30平・断面図 (1/60)



第75図 T34平・断面図 (1/60)

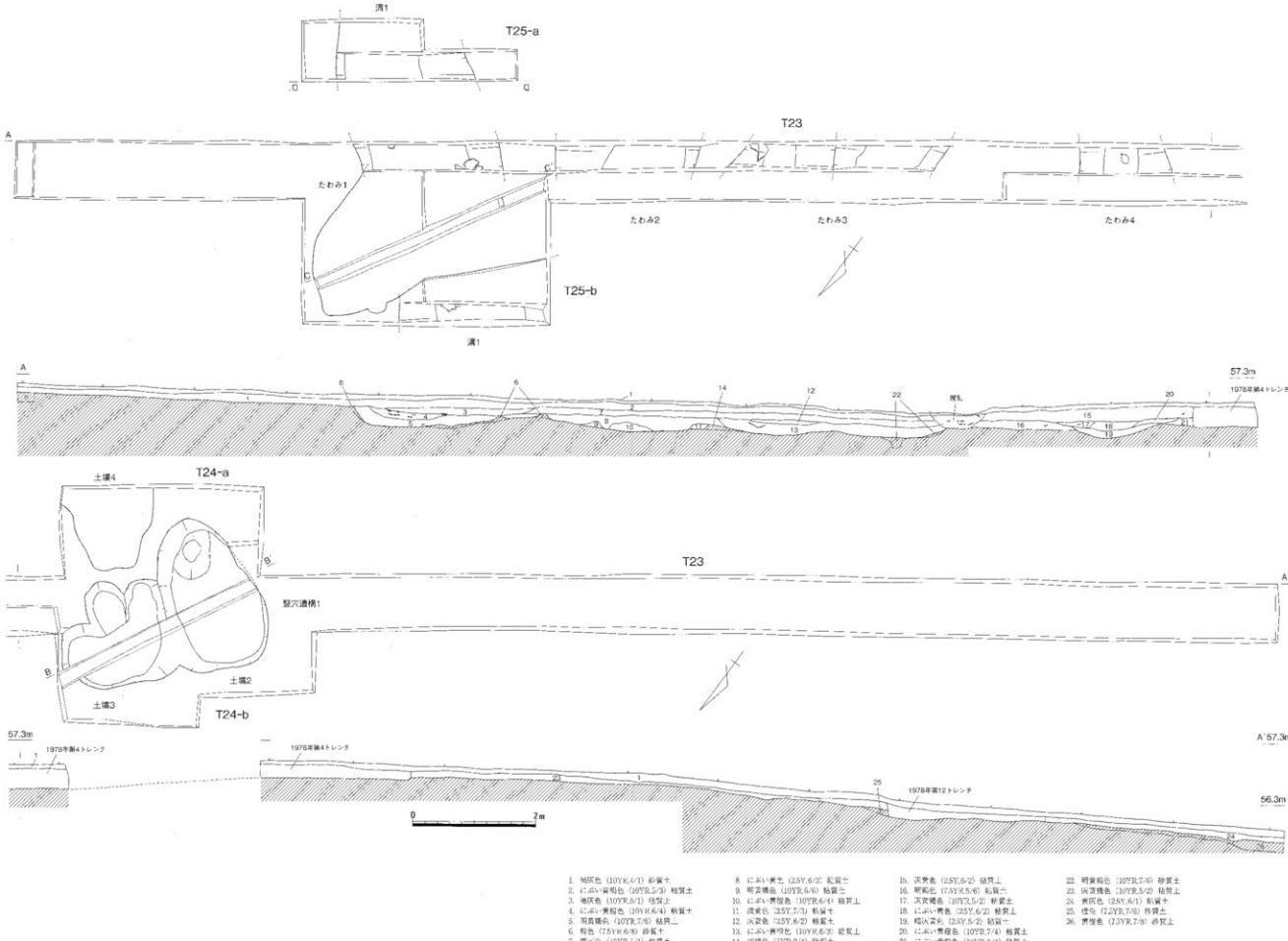


第76図 T22平・断面図 (1/60)

1. 黒灰土 (10YR 6/1) 砂質土
2. 黒色 (7.5YR 1/6) 砂質土
3. 黒色 (7.5YR 6/6) 砂質土
4. 黑白色 (7.5YR 6/6) 砂質土
5. 黑白色 (7.5YR 6/6) 砂質土
6. にじみ・黒褐色 (20YR 7/4) 砂質土
7. にじみ・黒色 (7.5YR 6/6) 砂質土
8. 黑褐色 (10YR 7/6) 砂質土
9. にじみ・黒褐色 (10YR 7/4) 砂質土
10. にじみ・黒褐色 (10YR 7/2) 砂質土
11. 黑褐色 (25Y 8/4) 砂質土

1. 黒灰褐色 (25Y 5/2) 砂質土
2. にじみ・黄褐色 (10YR 7/3) 砂質土
3. 黑白色 (10YR 8/2) 砂質土
4. 黑灰土 (25Y 7/4) 砂質土
5. 黑褐色 (25Y 7/4) 砂質土
6. 黑褐色 (10YR 6/2) 砂質土
7. 黑褐色 (25Y 8/3) 砂質土

1. 黑灰土 (10YR 6/1) 砂質土
2. にじみ・黄褐色 (10YR 6/3) 砂質土
3. にじみ・黃褐色 (10YR 6/3) 砂質土
4. 黑白色 (25Y 6/1) 砂質土
5. 黑灰土 (10YR 6/1) 砂質土
6. 黑褐色 (7.5YR 6/6) 砂質土
7. 黑褐色 (10YR 6/2) 砂質土
8. 黑褐色 (25Y 6/1) 砂質土
9. 黑褐色 (25Y 6/1) 砂質土
10. 黑褐色 (10YR 6/2) 砂質土
11. 黑褐色 (25Y 6/1) 砂質土
12. 黑褐色 (25Y 6/1) 砂質土
13. 黑褐色 (25Y 6/1) 砂質土
14. 黑褐色 (25Y 6/1) 砂質土



第77図 T23・24・25平・断面図 (1/60)

溝1と土壤2・3（竪穴遺構1）、土壤4は調査区を拡張し、調査区をトレンチ25-a・b、トレンチ24-a・bとして調査区を設定したため各トレンチの項目で報告している。

トレンチ23の堆積層は舌状丘陵の尾根筋に設定した調査区のため基盤面までの厚さは、調査区の北端部で約15cm、南端部でも約20cm程度で、基本土層は、調査区北1/3が基盤面の上層に第2層の砂質があり、0.5cm程度の焼土、炭粒子を含むにぶい黄褐色粘質土でその上層に表土層となる第1層の褐灰色砂質土である。調査区の中央部は、上層から第1層の褐灰色砂質土、第15層の灰黄色粘質土、第16層の明褐色粘質土が堆積し、調査区の南1/3は上層から第1層の褐灰色砂質土、第24層の黄灰色粘質土が堆積している。標高56.6mより南西側の基盤面は岩盤となり表面がボコボコしている。以下、検出した遺構について概説を行う。

たわみ2（第77図）

トレンチ23の調査区北端部から8.6m南側で検出した遺構で、調査区が狭いため遺構の全容は不明であるが緩やかな皿状の断面形態から「たわみ」と命名した。たわみ2の両端部は平行ではなく円形を呈するものと考えられる。大きさは、最大幅約2.5m、深さ25cmを測った。堆積土は第8層のにぶい黄色粘質土で、たわみ中央部や南壁端部に第9～11層の粘性の強いブロック状の堆積層が認められる。また、土壙断面からたわみ2はたわみ3により切られていることが分かった。遺物はほとんど出土しなかった。

たわみ3（第77図）

たわみ2を切り込む形で検出した遺構である。遺構の南北の端部は平行している。断面は緩やかな皿状で底部は中央部がやや浅くなっているため「たわみ」と命名した。大きさは、最大幅3.70cm、深さ12～25cmを測った。堆積土はしまりがあり、0.5cmの焼土粒子を含む第13層のにぶい黄橙色粘質土である。遺物は13層から須恵器甕片が出上した。

たわみ4（第77図）

たわみ3から21.0cm南西で検出した遺構である。遺構の南側の端部は北側端部の方向より西側に広がり平行していない。断面は浅い「じ」字状を呈する。土壤の可能性もあろうが、今回他の遺構同様「たわみ」と命名した。大きさは、最大幅1.70cm、深さ27cmを測った。堆積土は4層に分層された。たわみ下半部に堆積する第19層の暗灰黄色粘質土、たわみ中央の上半部に堆積する第18層のにぶい黄色粘質土、上部の側面に堆積する第17層の灰黄褐色粘質土、第20層のにぶい黄橙色粘質土が堆積していた。遺物は第17・19層から須恵器甕片が出上した。

6 トレンチ24

トレンチ23の調査区の中央部で標高56.4～56.9mの地点、1978年の寒風古窯址群緊急調査委員会調査による確認調査では、第4トレンチが設定されており、竪穴遺構1が検出された地点でもある。竪穴遺構は方形の掘方を呈し、床面では粘土塊が出土し工房跡の可能性が考えられている遺構である。今回、竪穴遺構1の全形と規模を確認するためトレンチ23の南東と北西側を拡張する調査区を設定した。トレンチ23の南東側をT24-a、北西側をT24-bとした。調査の結果、竪穴遺構1は2基の土壤が切り合っていることや他にも土壤1基と小ピットを検出した。以下、検出した遺構について概説を行う。

土壌2・3（竪穴遺構1）（第77・78図、図版16）

竪穴遺構1の全体プランと1987年調査時、床面まで掘り下げたサブトレンチの断面を再検査した結果、竪穴遺構は少なくとも2基の土壌が重なって、竪穴状の遺構となっていることが分かった。土層断面から南側の新しい土壌を土壌2とし、北側の古い土壌を土壌3とした。

土壌2は平面形が北西から南東へ長い楕円形を呈し、東側の底面が浅く窪んでいる。南側壁は一部袋状を呈している。大きさは短径150cm、長径255cm、深さ25cmを測る。堆積土は2層に分層され、上層は第3層のにぶい黄橙色粘質土、下層は粘性があり、0.2~3.0cmの炭粒子を多く含む第4層の灰黃褐色粘質土である。遺物は須恵器片がわずかに出土した。

土壌3は平面形が北東から南西へやや長い不正楕円形で、東側では浅い2ヶ所の貼り出し部分を有する。

大きさは175×190cm、深さ35cmを測る。長軸部分の床面はほぼ水平である。また、長軸部分の側壁は角度を持ち立ち上がっている。堆積土は5層に分層され、下層から第8層の褐灰色粘質土、第9層の明黄橙色粘質土、第6層のにぶい褐色粘質土、上層には粘性が強く、0.2~1.0cmの炭粒子を多く含む第5層の灰黃褐色粘質土が堆積していた。また、下層の第8層の上に粘性が非常に強くほとんど粘土層である第7層の黄橙色粘質土がブロック状に認められた。遺物は第5層から須恵器片がわずかに出土している。

土壌4（第77図）

土壌2・3の全形プラン確認で基盤面を検出時、土壌2・3の東側で検出した土壌である。南東側は未調査区外となり全形は不明であるが、土壌2同様、北西から南東へ長い楕円形を呈する平面形であると推察される。短径部の幅は150cmを測る。プランのみの検出で遺物は出土していない。

また、土壌3の西側で径15×18cm、にぶい黄橙色土を包含する柱穴状の小ビットを1基検出した。

7 トレント25

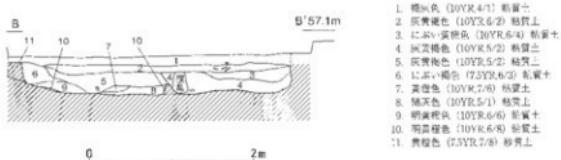
トレント23の調査区北半分で約150~300cmの幅でたわみ状の遺構が検出され、たわみ2~4として概説してきたところであるが、調査区の北側で検出したたわみ状の遺構の規模を確認するため、トレント23の北西と南東へ調査区を拡張した。北西側がT25-b、南東側がT25-aとしてたわみ状の遺構について規模確認を行った。調査の結果、溝とその上層にたわみ状遺構を確認したため、トレント23の調査区も含め遺構の概要について報告する。

たわみ1（第77・79図）

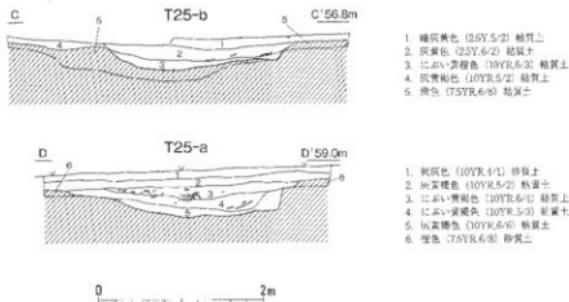
トレント23の調査区北端部から約560cmで溝を検出したため、北西側へ2×4m拡張し基盤面まで掘り下げた結果、南北方向へ長軸を有する不整長楕円形のプランを検出した。トレント25-bのC-C'の上層断面では溝1の上層にしまりが弱く、ややボソボソした暗灰黄色粘質土が堆積していた。遺物は須恵器片がわずかに出土した。

溝1（第77・79図、図版16）

たわみ1の下層で検出した溝状遺構である。流走方向を確認するためトレント23の南北に調査区を拡張した結果、南東から北西方向に流走することを確認した。南東と北西方向の端部については未調査のため全長や端部については不明である。溝の断面から1号窯跡群が立地する丘陵側の側壁は角度を有し立ち上がっている。T25-aのD-D'の断面ではほぼ垂直気味に立ち上がっている。それに



第78図 T24豊穴遺構1断面図 (1/60)



第79図 T25-a・b溝1断面図 (1/60)

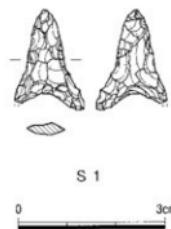
比べ、舌状丘陵が延びる南西側の側壁は緩やかに立ち上がっている。溝底面はトレンチ23では水平であるが、トレンチ25-bでは皿状を呈した。大きさは、幅210~230cm、深さ27~30cmを測った。トレンチ25-aの堆積土は3層に分層され、上層から微砂やシルト土質が細かく、須恵器や土師質土器を多く含む第3層のにじい黄褐色粘質土、中間層として、にじい黄褐色粘質土、下層にしまり粘性があり、0.5~2.0cmの炭粒子を多く含む第5層の灰黄褐色粘質土が堆積していた。遺物は第3・4層から須恵器壺、扁平なつまみで口縁部にかえりを有する土柄式の杯壺、土師質の壺片が出土した。

なお、T25-aの溝1側壁から約20cm南側で径16×19cmを測る小ピットを検出した。

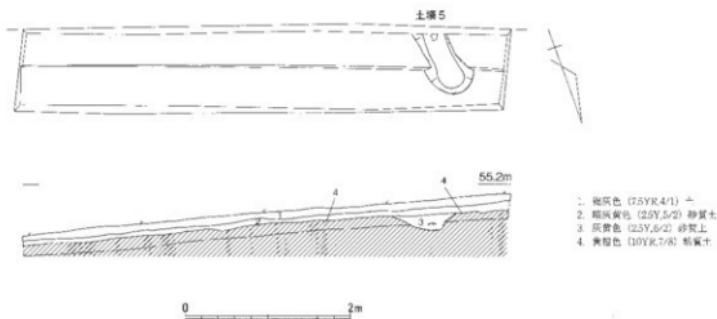
遺物 (第80図)

トレンチ23の土層断面で第3層とした層であり粘性があり全体に黒身を帯びた褐灰色粘質土からサスカイト製の石鏃1点S1が出土した。形態は三角形状を呈し側縁部をわずかに窪ませ、基部中央を内湾させる凹型式の石鏃である。基部片面の先端部を欠いている。大きさは、長さ21mm、残存幅15mm、厚さ2.5mmを測る。

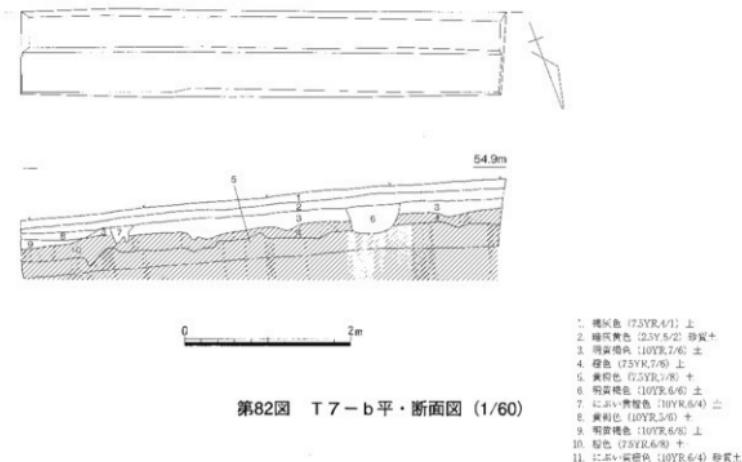
寒風古窯跡群一帯では、時實黙水氏により昭和初期から10年代にわたりサスカイト製の石鏃、打製石庖丁、石鏃が採集され小林博昭氏により『牛窓町史資料編II』へ紹介されている。(註3) 第80図のT23出土石鏃(S1)の時期は、純文時代早期から弥生時代に属している。今回出土した石鏃は縄文時代の所産



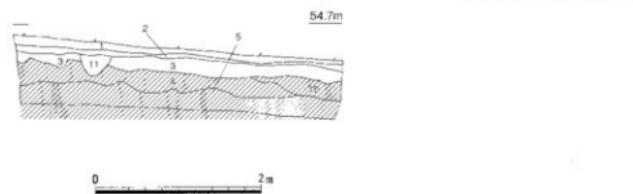
第80図 T23出土石鏃 (1/1)



第81図 T 7-a 平・断面図 (1/60)



第82図 T 7-b 平・断面図 (1/60)



第83図 T 7-c 断面図 (1/60)

と考えられる。

8 トレンチ7（第81～83図）

堅穴遺構3を確認したトレンチ29の南側斜面での工房跡の確認のため設定した調査区で、史跡指定境まで3本の調査区を設定した。北からトレンチ7-a、トレンチ7-b、トレンチ7-cである。以下、調査区の概説を行う。

トレンチ7-aは、標高55.0～54.4mの東西方向に設定した調査区である。現地表から約15～20cmで基盤面を検出した。堆積土は2層に分層され、上層は表土となる第1層の褐灰色土、下層は第2層の暗灰黄色砂質土である。調査区の西端で細長い土壌5を1基検出した。南側が調査区外で未発掘である。大きさは最大長90cm、幅52cm、深さ18cmを測った。堆積土は灰黄色砂質土である。底部から須恵器甕片が1点出土した。

トレンチ7-bは、トレンチ7-aの南2mの標高54.7～54.2mの東西方向に設定した調査区である。現地表から約15～25cmで基盤面を検出した。堆積土は2層に分層され、上層は表土となる第1層の褐灰色土、下層は第2層の暗灰黄色砂質土である。調査区の東端部では基盤面が緩やかに下がっており、第8層の黄褐色土と第9層の明黄褐色土が堆積していた。この基盤面の下りが遺構であるかどうか不明である。遺物は出土しなかった。

トレンチ7-cは、トレンチ7-bの南40cmで旧畠地の段部分の壁面を掘り下げた、標高54.5～54.2mの東西方向に設定した調査区である。現地表から約15～25cmで基盤面を検出した。現地表から約10～20cmで基盤面を検出した。堆積土は2層に分層され、上層は表土となる第1層の褐灰色土、下層は第2層の暗灰黄色砂質土である。土壌等の遺構は検出されなかった。また遺物も出土しなかった。

9 トレンチ35（第84図、図版14）

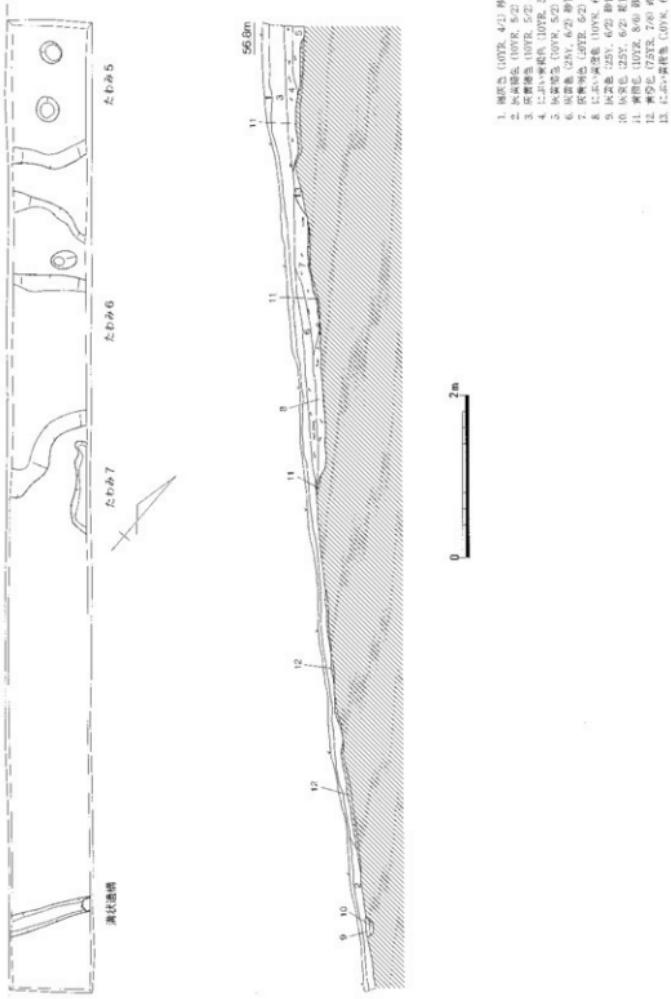
舌状の丘陵南東斜面部分での堅穴遺構やその他の遺構の有無について確認するため、標高56.3～53.9mに設定した調査区である。調査の結果、現地表下約10～20cmで地山を検出した。地山は標高55.3mで土質が変わり上部は岩盤状にガチガチであるが、下部は粘土ブロックを含む地山となる。堆積土は表土となる第1層の褐灰色砂質土、下層にはしまりがあり、オレンジ色のブロックを含む第2層の灰青褐色砂質土の2層に分層できた。

遺構は、調査区の中央部を西から東に流走する溝状遺構を1条検出した。溝状遺構は幅44cm、深さ13cmを測り、断面は浅い「U」字状を呈した。この溝状遺構の西側延長先にはトレンチ29-cで検出している、堅穴遺構3の周溝へつながる可能性があり、同一遺構と推察される。他の遺構としては溝状遺構を間に挟んで、北側と南側に柱穴状の小ビットを2基検出した。北側のビットは円形で、大きさは18×23cm、深さ30cmを測る。堆積土はにぶい黄橙色砂質土である。南側のビットも円形で、大きさは31×35cm、深さ35cmを測る。堆積土は2層に分層され、上層は土質がやや細かい第4層の灰黄褐色粘質土、中下層は灰黄褐色粘質土である。遺構からの遺物は出土しなかった。

10 トレンチ36（第85図、図版14）

舌状の丘陵南東斜面部分での堅穴遺構やその他の遺構の有無について確認するため、トレンチ35の北東10mの標高56.6～55.4mに設定した調査区である。調査の結果、調査区の北半分でたわみ状の遺





第85図 T36平・断面図 (1/60)

構を3基、調査区の南端部で溝状遺構を1条検出した。また、調査区の堆積土は基本的に2層で上層は表土となる第1層の褐灰色砂質土、下層は標高55.6mより上部は第3層の灰黄褐色砂質土で、下部は粘性がやや強い第2層の灰黄褐色砂質土である。

遺構は、たわみ状遺構の北からたわみ5・たわみ6・たわみ7とし、以下、たわみと溝状遺構について概説する。

たわみ5

平面形がやや弧を描き、側壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸している。底面には径25~30cm、深さ20~30cmを測るほぼ同じ大きさのピット2基を検出した。堆積土は2層に分層され、上層は粘性が強く、土質がやや細かい第4層にぶい黄褐色粘質土、下層は粘性が強く、砂粒を含む第5層の灰黄褐色粘質土である。第4層を中心須恵器壺片が出土した。

たわみ6

たわみ5の南東約35cmで、平面形が不正形で東側に向かい幅を狭める形態である。検出面での最大幅は376cm、深さは約20cmを測った。断面は北西部分では幅50~80cmのテラス状に一段高くなり、底面は南東に向かいやや傾斜しているが平坦面を有している。両側壁は緩やかに傾斜している。堆積土は3層に分層され南側の下層には粘性がやや強く、オレンジ色の粘土ブロックを含む第8層にぶい黄褐色粘質土、テラス状の部分は0.5~1.0cmの炭粒子を多く含む第7層の灰黄褐色砂質土、上層には第6層の灰黄色砂質土である。遺物はどの層にも含まれられていたが、第6層に比較的多くの須恵器壺片が出土した。

たわみ7

たわみ6の東約30cmで検出した遺構で、平面形は調査区の狭さから不正形であるのみで不明である。検出した最大幅は115cm、深さ10cmである。堆積土は粘性がややあり、土質が非常に細かくシルト状の灰白色砂質土である。遺物の出土はなかった。

溝状遺構

調査区の南端部で北東から南西に向かい直線的に流走し、検出した最大長は100cm、幅19~25cm、深さ8cmを測った。断面形は逆台形を示した。堆積土は2層に分層され、下層が粘性のある第10層の灰黄色粘質土、上層が土質の細かい第9層の灰黄色砂質土である。遺物は須恵器壺片が出土した。

(馬場)

註

- (1) 山藤康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978
- (2) 岡山県古代古墳文化財センター編『改訂岡山県遺跡地図』(第6分冊岡山地域) 岡山県教育委員会 2003
- (3) 小林博昭「寒風遺跡」『牛窓町史資料編Ⅱ』牛窓町 1997

第4章 まとめにかえて

第1節 1号窯跡群

1 立地

今回の確認調査により1-1号～Ⅲ号の3基の窯跡からなる1号窯跡群は2号窯跡から北北西へ約80～95m、3号窯跡から北西へ約140～155mで、標高約60～62mの寒風池のある西側に向かう丘陵緩斜面に立地する。窯体部が所在する地番は瀬戸内市牛窓町長浜字寒風5136番地で、昭和10年代に栗林として造成されかなり緩やかな斜面となっている。また、灰原が所在する地番は瀬戸内市牛窓町長浜字寒風5139番-1で、後世の造成は受けておらず雑木林となっており、やや傾斜角度を有する斜面となっている。

2 1-I号窯跡の構造と規模

トレンチ19で検出した焼成部は、岩盤を検出面から深さ約130cm掘り抜いた地下式無段の窯窓構造の登り窯である。床面は地山をほぼ水平に掘り抜き、厚さ3～4cm程度の薄さで青灰色の粘土により貼り床されていた。北側の側壁は床面から緩やかに屈曲しながら真っ直ぐに立ち上がり、南側の側壁は緩やかに屈曲し内傾しながら立ち上がり天井部に向かい横幅を狭めている。断面は南側の側壁を見るとやや「フラスコ」状を呈した。北側の側壁は床面から100cm、南側の側壁は床面から77cmまで残存しその上部である天井部は崩落していた。北側の窯壁は第14層を間層として2面あり、南側の窯壁には補修による2次窯壁は確認できなかった。確認した側壁から1-1号窯が築造された当初の第1次の最大幅は255cm、操業停止時の第2次の最大幅は240cmを測る。天井部分が崩落し全高については不明であるが、検出面からの高さから130cm以上を測る。窯の主軸はN-97°-E、床面の傾斜角度は16°を測った。

トレンチ26で窯体主軸の延長上で南側半分のプランを検出することができ、焼成部の側壁から煙道部の側壁は緩やかに立ち上がっている状態で残存していた。側壁には厚さ4cmでスサを含む粘土が貼られ、焼成を受け硬く焼け締まっていた。

トレンチ31、トレンチ31-aで検出した焚口部の平面形は、トレンチ31では円形、トレンチ31-aでは不正橢円形を呈した。トレンチ31では焚口部の端部の中央部に西側の前庭部に向け溝状の遺構を検出した。焚口部最大幅は155cmを測った。窯体の主軸方向の断面は、燃焼部方向へ向け15°の角度で下っていた。

トレンチ31で検出した前庭部は、焚口西端の中央部から西側の丘陵斜面に向かい溝状の遺構が約20cm伸びた先から、トレンチ31-aと同様「ハ」の字状に開き、その先約40～90cmから橢円形状に弧を描く平面形を呈した。前庭部の地山面は甲羅状に溝状の亀裂が走りゴツゴツした底面を見せた。底面は灰原方向へ斜めに下りながら伸びていた。

1号窯跡群の灰原は、3基の窯跡の窯体が立地する栗畠の西側山道を隔てた寒風池へ向かう標高59～51mの雑木林内に東西約22m、南北約27mの広範囲にわたって須恵器、窯壁、焼上、炭が大量に散

布しており古くから所在が知られていた。1-I号窯跡の窯体主軸の延長上の灰原中央部では丘陵斜面部分であるにも関わらず1-I号窯から多量の須恵器片・窯壁片・灰などの廃棄物によるマウンド状の高まりが認められ他の窯と比べ1-I号窯跡の須恵器生産量が多かったことを窺わせた。マウンド状の高まりを呈する灰原の堆積層は最大200cmに及んだ。灰原の堆積は中間層である黒色土を挟んで大きく上下2層に分かれて堆積した明赤褐色土層から、複数回の窯の使用により窯壁や天井部などが破損し崩落した場合、窯壁や天井に接した明赤褐色に変色した土壤が窯体内に堆積する可能性が高く、明赤褐色土が窯壁等の破損・崩落に伴うものと仮定すれば、上下2層に分かれて堆積した明赤褐色土層がトレンチ19の焼成部の北側の窯壁が2枚存在することとも関係し、1-I号窯の操業時大きく2回以上の窯体の崩落がありその際、被熱した地山の土壤が灰原へ掻き出された状態を表している可能性がある。

規模は、窯体の長さは水平距離で11.2m、斜距離で約11.5m以上、築窯時の最大幅は2.55m、操業停止時の幅は2.4m、高さは天井部分が崩落しているが残存高は1.3m以上である。窯の主軸はN-99°-E、焼成部の中央部床面の傾斜角度は16°を測る。寒風古窯跡群の窯跡では窯体幅が最大規模を測る窯であった。

3 1-I号窯跡の時期

1-I号窯跡は須恵器等の焼成・製品の搬出・焼成部内の灰や破損した窯壁が片づけられた後操業を停止したものか、焼成内に残された遺物はほとんど無く操業終了時期を検討する資料が少ないので、わずかに図化できた杯を中心に検討してみたい。

トレンチ19の焼成部床面から出土した杯蓋第17図1・2は、『寒風古窯址群』1978（註1）の分類による、天井部中央に巣石状の扁平なつまみを付け、口縁部の受け部にかえりを持たないC類に分類されるものである。また、杯身第17図3は高台部分のみであるが「ハ」の字状に短く張り出す高台を有するC類の杯蓋とセット関係にある杯身であり、西川編年（1970）（註2）で寒風3式に編年されている。今回の報告書では窯跡の番号を基準とし寒風1-I式に分類した器種である。さらに、杯身第17図4はA類の杯蓋を反転し、平坦な底部から口縁部が内湾しながら開き口縁端部を丸くおさめる形態、2号窯跡の焼成部からまとめて出土しており今回の報告書でD類と分類し、寒風2式と設定した杯身である。これらの杯は陶邑窯跡群の田辺編年（註3）ではT K48型式～MT21型式に分類されるものと考えられる。このことから1-I号窯跡は7世紀後半から8世紀初頭の時期には操業を終えたものと考えられる。

寒風古窯跡群の特異性を示す、鶴尾や須恵器陶棺などの大形製品や灰原から出土した刻書文字を書いた杯を焼成した窯がこの1-I号窯跡であり、7世紀後半の律令国家体制が整えられる中で地方窯であった邑久古窯跡群が都（中央）へ製品の供給地として位置づけされたその窯の一つが1-I号窯跡と想定される。

4 1-II号窯跡の構造と規模

トレンチ19で検出した焼成部は、岩盤を検出面から深さ約220cm掘り抜いた、地下式無段の窯窓構造の登り窯である。断面から床面は地山を浅い皿状に掘り抜き、床面の中心部の幅90cmは青灰色の砂質の強い粘土により貼り床され、残りの窯壁までの床面は岩盤掘り抜きのままであった。窯壁は調

査区の西側の土層断面では一部を除きほぼ天井部まで残存していた。窯壁は床面から大きく角度を変え屈曲し、内湾しながら立ち上がり、天井部はドーム状に丸く粘土を貼り築造している。検出した北西側の焼成部の規模は床面での幅194cm、窯体最大幅208cm、天井部までの高さ113cmを測った。

トレンチ27で検出した煙道部は、焼成部の北側壁が直線に幅を狭めながら煙道部へ向かい、煙道端部で角を有する様に屈曲し端面を丸くおさめている。焼成部から煙道部の側壁には厚さ2~4cmで粘土が貼られ、焼成を受け硬く焼け締まっていた。

トレンチ32で検出した焚口部は10~20cmの幅で被熱により隅丸長方形状で赤褐色に変色し、燃焼部の外側と窯内には貼り床面を検出した。調査区内で検出できた最大の長さは125cm、幅47cmを測り、幅から全体の約1/2を検出した。窯体主軸方向の横断面は、焚口端部から約30cmはほぼ水平に粘土の貼り床であるが、それ以降は燃焼部となり窯体内に向かいしだいに下がっていた。燃焼部は、底面は緩やかな「U」字形を呈すが、側壁で大きく屈曲しやや内湾しながら立ち上がっていた。

トレンチ32の焚口南外面で検出した前庭部は、地山が前庭部を囲むよう一段の段を持ち、焚口端部中央から西側に向かいわずかに下りながら平坦部を有する。地山面は主軸方向の中心にはほぼ平坦であったが、中心部を外れると甲羅状に溝状の亀裂が走りゴツゴツした底面を見せた。この前庭部には焚口南端部から窯主軸方向に対し約120°の角度で溝状造構1と、溝状造構1と並行する形で溝状造構2を検出した。この2条の溝の底面は平坦で、レベルから見ると前庭部外面から前庭部や焚口方向へ向かっている。2条の溝の位置関係から須恵器焼成に関わる造構と考えられる。

規模は、窯体の長さは水平距離で約10.4m、斜距離で約11.0m、最大幅208m、残存高は1.13mである。窯の主軸はN-109°-E、煙道部近くの焼成部床面の傾斜角度は31°、焼成部の中央部床面の傾斜角度は18°を測る。焼成部の天井が一部残存している窯である。

5 1-Ⅱ号窯跡の時期

トレンチ19の焼成部は焼成後天井部が崩落したため、遺物が窯詰めされ焼成された状況で出土した。これらの資料の内、岡化できた杯を中心に検討してみたい。A'類の杯蓋10点、A'類の杯身13点で内、杯身が合わせとなって出土した組数は3組。B類の杯蓋13点、B類の杯身13点で内、杯身が合わせとなって出土した組数は11組で、杯のタイプはA'類・B類ともほぼ同数であった。ただし、C類の杯は1点も出土していない。A'類の杯蓋の平均口径は10.3cm、杯身の平均口径は9.5cmを測り、B類の杯蓋の平均口径は8.1cm、杯身の平均口径は9.0cmを測った。A'類の杯身と杯蓋の合わせ状況で焼成された関係について、3組の内2組が通常の蓋と身の関係と異なり、口縁部受け部にかえりを有する身を上にした反転状態であった。また、同様に、口縁部受け部にかえりを有するA'類の杯身を反転する状態は、身のみ単体で出土した10点の内、出土状況が確認できた8点すべてが反転した状態であった。このことは偶然の杯窯詰め状況ではなく、杯蓋・杯身として焼成後の使用形態の状況を示しているのではないかと推察される。須恵器出現の古墳時代から継続的に存在するA類の杯が、新たに出現する口縁部受け部にかえりをもたない身と宝珠状のつまみを付け口縁部にかえりを有する蓋がセットとなるB類の杯と共に共する中で、口径10cm前後まで小形化したA'類の杯が、新たに出現した杯と同様に蓋身が反転した状況での使用形態へ変化していく了時期でもあった可能性を指摘しておきたい。

A'類とB類は西川編年（1970）（註2）で寒風1式に分類されている。また、伊藤・山廢編年（1996）（註4）でA'類は亀ヶ原1式とし、B類は寒風1式に分類した。1-Ⅱ号窯跡ではA'類とB類は同時

に焼成していることが判明した。このことから今回の報告書で1-II号窯跡の焼成部から出土した杯は寒風1-II式に分類し、型式的にA'類の杯を寒風1-II式(古)とし、B類の杯を寒風1-II式(新)として分類した。A'類・B類の杯は陶邑窯跡群の田辺編年(註3)ではTK217型式～TK46型式に分類されるものと考えられる。このことから1-II号窯跡は7世紀の中葉から後半の時期には操業を終えたものと考えられる。

6 1-II号窯跡の構造と規模

平成17年(2005)奈良文化研究所に委託し1号窯跡群周辺の磁気探査とGPR探査の結果、1-II号窯跡の南側約7mで道構の存在を示す反応があり今回の確認調査により新規に発見することができた窯跡である。

トレンチ18で検出した焼成部は、地山検出面から深さ約150cmで地山の岩盤を掘り抜いた、地下式無段の窯構造の登り窯である。床面は地山をほぼ水平に掘り抜き、床面の南側2/3の約140cmは青灰色砂質土により貼り床され、残りの北側1/3の床面は岩盤掘り抜きのままであった。北側の窯壁は岩盤掘り抜きのままで、内湾しながら高さ28cmまで残存していた。南側の窯壁も岩盤掘り抜きのままで、大きく内湾しながら高さ65cmまで残存していた。それ以上は天井部も含め崩落していた。断面形は「フラスコ」状、若しくは袋状土壙の形状を呈していた。トレンチ20で検出した焼成部は、トレンチ18と同様、地山上層は軟質の風化花崗岩であったが下層は硬い岩盤となり、構造は、地山検出面から深さ約165cm掘り抜いた、地下式無段の窯構造である。床面は地山を浅く皿状に掘り抜き、煙道側である調査区の東表面では窯壁寄り約20-30cmを除き非常にしまりがありセメント状の貼り床を有していた。また、焚口側である調査区の西側面では床面全体に青灰色の貼り床を確認した。北側の窯壁は床面境から内湾しながら高さ28cmまで岩盤掘り抜きのままで、それより上はスサを含む粘土で窯壁が貼られ、床面境からの高さは107cmまで残存していた。南側の窯壁も岩盤掘り抜きのままで、内湾しながら床面境から高さ63cmまで残存していた。断面形は下彫れの袋状土壙の形状を呈した。

トレンチ28で煙道周辺を弧状に開む浅い溝状構造を検出した。溝状構造の内側で煙道部から焼成部に至る窯壁を検出した。平面形では直径約80cmに復元できる様、スサを含む粘土により作られた窯壁が円形に巡り、窯壁窯体主軸方向で約66°の急角度で立ち上がっていた。

トレンチ33で焚口部と前庭部を検出した。焚口部は被熱により弧を描く様に赤褐色に変色した地山とその内側に岩盤を掘り抜いたままの焚口部から燃焼部にかけての窯壁面を検出した。さらに、窯壁面が無くなり、赤褐色の変色部分が無くなる地点から「ハ」の字状に地山を掘り込む前庭部を検出した。焚口部は調査区で左半分のみの調査であったが、平面は燃焼部からしだいに窯壁の幅が狭くなり、貼り床が無くなる箇所では弧状を呈し赤褐色に変色した床面を有した。さらに、貼り床が無くなつてから前庭部側へ約65cmまでは地山面が燃焼部に向かい緩やかに下っていた。断面は窯体側の東断面ではトレンチ18と同様、床面は地山をほぼ水平に掘り抜き、地山上に灰褐色砂質土により貼り床されていた。北側窯壁は岩盤掘り抜きのままで、ゆるやかに内湾しながら高さ85cmまで残存していた。側壁の崩落部分から上層は粘土を貼った窯壁が存在した様で、窯壁片が一部確認できた。天井部は崩落していくが断面では崩落した層状に窯壁片は確認できなかった。断面形は「フラスコ」状を呈した。

規模は、窯体の長さは水平距離で約9.8m、斜距離で約10.3m、最大幅2.0m、残存高は1.32mである。窯の主軸はN-102°-E、煙道部近くの焼成部床面の傾斜角度は19°を測る。

7 1-Ⅲ号窯跡の時期

トレンチ18の焼成部床面には天井部が崩落したため焼成時のままの状況で遺物が残されており、國化できた杯を中心に検討してみたい。杯はすべてA類に分類されるもので杯蓋は7点、杯身は16点である。出土状況から蓋身の合わせ状態ではなく、逆に、杯蓋を床面に置きその上に杯身を斜めに乗せ焼成したことにより溶着した状況で杯が2組出土している。2組の蓋と身の溶着状況がほぼ同じであり、甕の焼き台など甕の焼成時に甕を安定するための状態を呈しているものと推測している。A類の杯蓋の平均口径は13.1cm、杯身の平均口径は11.6cmを測った。杯蓋・身外面のヘラケズリや杯身の口縁内側のかえりの高さも高く丁寧なつくりである。1-Ⅱ号窯跡で出土したA類の杯と比べると口径や調整など古く位置づけられる特徴を有している。今回の報告書でこの杯を含む遺物をA類の杯を含むものを寒風1式と一括していた型式から新たに1-Ⅲ号式を設定して分類・分類した。また、有蓋高杯第40図132は天井部の丁寧なヘラケズリや扁平であるが丁寧なつまみを有し、セットとなる高杯の身は出土していないが、脚部に2段透かしを有する身とセット関係を窺わせる資料であり1-Ⅲ号窯跡の操業時期をさらにさかのほらせる資料であるかもしれない。

1-Ⅲ号窯跡の焼成部で出土した杯は陶邑窯跡群の田辺編年（註3）ではTK209型式に分類されるものと考えられる。このことから1-Ⅲ号窯跡は7世紀の初頭から前半の時期に操業されていたものと考えられる。

(馬場)

註

- (1) 山崎康平「寒風古窯跡群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』27 岡山県教育委員会 1978
- (2) 西川 宏「備前の古窯」『古代の日本』第4巻 中國・四國 角川書店 1970
- (3) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (4) 伊藤晃・山崎康平「岡山県（瀬戸内中部II）の7世紀の土器」『日本土器辞典』雄山閣 1996

第2節 2号窯跡

1 立地

2号窯跡は1-I号窯跡から水平距離で南南東へ約95m、3号窯跡から水平距離で北西へ約65mの標高約54~51mの南西に向かう丘陵緩斜面に立地する。寒風占窯跡群を含む寒風地域の盆地中心部を望む位置に立地している。煙道部外方の地山面の傾斜角度は16°、灰原での地山面の傾斜角度は14°を測った。

2 構造と規模

昭和初期の畑地の造成以前から「窯の段」といわれる落ち込みが確認されていたことから、窯体の天井部の崩落による埋没部分があることが知られていた。このため発掘調査では一部を除き、窯体の天井部分は崩落していた。トレンチ2の調査区から焼成部の構造は、地山である花崗岩質の岩盤を深さ約190cm掘り抜いた、地下式無段の窑窓構造の登り窯である。

断面から床面は地山を浅い皿状に掘り抜き、5cm程度の厚さで粘土による貼り床。床面中央部では幅50~75cm、深さ5cmで溝状ないし土壤状の掘り込みがあり、0.2cm程度の白色粒子を含む青灰色砂質土が堆積。調査区の幅が狭いため全体を確認することはできなかったが、溝状ないし土壤状の掘り込みの性格について、窯体内の湿気や水分を抜く排水施設や窯体内へ焼成時酸素を送るための空調施設、また、瀬戸内市長船町土師の木鍋山1号窯跡の焼成室中央部で2箇所円形の窪みが見られ、大窯の焼成時、窓を据え置くための施設等が想定されるが確定には至らなく、今後の類例を待ちたい。側壁は床面幅より外方へ張り出し、内清しながら天井部に向かい横幅を狭めながら立ち上がっていくもので、断面は「フラスコ」状を呈した。側壁の断面から側壁を3面持つことを確認。築窯された当初である第1次側壁の検出面での幅は約160cm、床面からの高さ約140cmを測る。第2次側壁は、第1次の側壁との間に5~10cmの間層を有し、検出面での幅は約140cm、床面からの高さ約125cmを測る。操業停止時の第3次側壁は、第2次の側壁との間に5cmの間層を有し、検出面での幅は約125cm、最大幅は205cm、床面からの高さ112cmを測る。第2次・第3次の側壁の間に第22~23層や第24層の橙色粘質上の間層が存在することから、第1次・第2次側壁が補修のため貼られる間、しばらくの操業停止期間があったものと考えられる。天井部は側壁部も含め幅約125cmにわたり崩落し、床面の上層の第40層灰褐色粘質の中に15cm×30cmの塊となり窯壁片が落ち込んでいたことから、トレンチ2での焼成部は、廃棄後窯体が空洞の状態であり他の窯体崩落箇所からの土砂の流入を受けることなく天井部が床面に崩落したものと考えられる。トレンチ1・2で検出した焼成部の側壁は構築の際、粘土を平面的に延ばしながら貼っていくのではなく、トレンチ1では長さ10cm程度の大きさの粘土ブロックを地山壁面に貼り付けて築壁している。また、トレンチ4では長さ20~25cmの扁平に延ばした粘土ブロックの側端部を外側に重ねながら貼っていく築壁状況が確認できた。

煙道部は、直線的に伸びてきた焼成部が終わる付近から外方へ不正円形に張り出し、先端部へ丸くなりながら煙道端部へ移行する。貼り床面の焼きがややまく、炭で煤けた様に暗灰色を呈した。煙道端部の立ち上がりは後世に床面近くまで削平を受けていたが、赤褐色に変色した地山面から、焼成部の床面の傾斜に比べさらに上部へ傾斜角度を増すことが確認できた。

燃焼部はトレンチ17の調査区で、5~7cmの厚さの貼り床が焼成部のある窯奥に向かい斜めに落ち込みを確認し、床面の中央部下層の灰色粘土層には炭粒子を非常に多く含み、窯焼成の燃料や木炭の残存範囲を示すものと考えられることから、この箇所が燃焼部であると考えられた。

焚口部はトレンチ3の調査区で、地山上半分の側壁を段状に掘り下げ、下半分は緩やかな「U」字状に掘り込み、底面は緩やかな皿状を呈する落ち込み遺構を検出。「U」字形を呈した下半部の地山は焼成による被熱による赤褐色の変色。この落ち込み遺構の床面には貼り床がなく、床面付近が被熱により赤褐色に変色、堆積層に窯盤片を含まない等から焚口部であると考えられた。

前庭部は焚口部から南西側のトレンチ9・13で、地山直上の堆積層である炭層が30cmの厚さで窯体部に向かい緩やかに下る状況が認められ、焚口部へと続き須恵器の搬入・搬出、燃焼に関わる一連の作業に伴う作業スペースとしての施設と考えられる。この炭層は燃焼部で使用された燃料の灰や燃えカスを含む堆積層と考えられ、平面的な広がりは、トレンチ9・13の検出状況から南北約450cm、東西約650cmの範囲で不正規円形に及ぶと推察される。

灰原は前庭部の南斜面のトレンチ10・14・15・6で、地山直上に炭粒子や須恵器、窯盤片を多く含む炭層が堆積しておりこの範囲を灰原と考えた。また、トレンチ10・15では炭層の上層へ焼土塊や須恵器片を多く含む窯体や周辺の被熱を受けた焼土の堆積層を確認した。当初、灰原に含まれる主となる焼け歪んだ須恵器片や窯盤片の分布範囲はさらに広くトレンチ6両側の下方斜面にも至っており、さらに広範囲であったろうが、畑地耕作による邪魔者として取り除かれ、一部のものは「塙の段」のゴミ穴の中へ、一部のものは畑と畑の境の畔や端に山積みされていた。確認された炭層の分布範囲を灰原の範囲とすれば、南北約10.6m、東西約13m以上、炭層の上層に堆積する焼土層は東西約8m前後と推察される。

トレンチ16・2による調査から煙道部や焼成部の外周には、丘陵上斜面からの雨水の影響を受けないための排水溝や築窯・焼成作業・窯の維持等に伴う遺構については確認されなかった。

規模は、窯体の長さは水平距離で12.7m、斜距離で約13.7m、最大幅2.05m、高さは天井部分が崩落しているが、残存高から1.12m以上を測る。窯の主軸はN-45°-E、煙道部近くの焼成部床面の傾斜角度は31°、焼成部の中央部床面の傾斜角度は16°を測る。寒風古窯跡群の窯跡では窯構造が良好に分かれる窯である。

3 時期

2号窯跡ではトレンチ2の焼成部やトレンチ1の煙道部床面から出土遺物があり操業終了時期を検討することができる。また、トレンチ10・14の灰原からまとまった遺物が出土したため操業の開始時期等について杯を中心に検討してみたい。

焼成部と煙道部の床面から出土した杯蓋は、いずれも『寒風古窯址群』1978（註1）の分類による、天井部中央に葵石状の扁平なつまみを付け、口縁部の受け部にかえりを持たないC類に分類され、寒風3式に編年されている。C類杯蓋のつまみの形状は4つのタイプに分けられ、宝珠状に中心部に向かいゆるく尖っているつまみ（Aタイプ）。つまみ中央部と周辺部がわずかに高くなり、宝珠つまみの先端部の面影を残す扁平なつまみ（Bタイプ）。葵石状のつまみ（Cタイプ）。上部中央部がわずかに窪むつまみ（Dタイプ）がある。型的にはB類杯蓋に宝珠状つまみの形状の名残を残すAタイプからDタイプへの変遷が考えられるが、2号窯跡の焼成部の床面からはいずれのタイプも出土してお

り同時期に4つのタイプが焼成されていたものと確認した。従来、C類の杯蓋とセット関係である、底部が平坦で「ハ」の字状の高台と外傾して開く口縁部を有する杯身は、トレンチ1・2からは出土しなかった。また、前庭部や灰原でも明確に図示できる遺物はなかった。このことから、2号窯跡ではC類の杯身については、杯蓋とセット関係では焼成していない可能性がある。

2号窯跡の床面出土の杯身として主となる杯身としてA類の杯蓋を反転し、底部が平坦で口縁部が外傾しながら聞き端部を丸くおさめる形態の杯身がある。口径は11.7~12.8cm、器高3.1~4.9cmを測る。『寒風古窯址群』1978で1号窯跡群灰原出土遺物の中にも同じ器種(52)が掲載されているが、資料的な数により分類はされていない。今回、D類と分類した。D類の身はセットとなる蓋がなく身のみである可能性がある。また、D類はC類の杯蓋と共に焼成していることを確認した。

トレンチ13・10の灰原からは、操業停止した焼成部の遺物より古く位置付けられる遺物として、天井部の中央に宝珠状のつまみで口縁部にかえりを有するB類の杯蓋第54図205~207と共に天井部の中央に宝珠状のつまみで口縁部端部をC類の杯蓋の様に短く旭曲し、かえりを持たない杯蓋第53図197・第54図208~211が出土している。B類は寒風一式に編年されている。

杯の分類をつまみの有無や形状を基準としたならば、従来の口縁部にかえりを有する杯蓋をB類とし、口縁部にかえりを有しない杯蓋をE類と分類する。B類の杯蓋の口径が8.3~8.8cm、器高が3.2~3.5cmを測るのに対し、E類の杯蓋の口径は10.5~10.8cm、器高が2.2~3.8cmを測り口径が一回り大きい。トレンチ10の灰原からはD類の杯身を一回り小さくした杯身第54図212・213が出土している。口径は10.6cm、11.3cmを測り、E類の杯蓋と口径的にセット関係になる可能性があろう。

以上、杯類を中心いて形態や蓋身のセット関係から、2号窯跡の操業時期はA類の杯を含まず、B類からC類・D類の遺物を含む時期で、B類・E類は陶邑窯跡群の田辺編年(註2)ではTK46型式に分類され、C類・D類はTK48型式~MT21型式に分類されるものと考えられる。操業年代は7世紀中葉から操業し8世紀初頭には操業を終えたものと考えられる。

(馬場)

註

(1) 山鹿康平「寒風古窯址群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」27 岡山県教育委員会 1978

(2) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

第3節 3号窯跡

1 立地

3号窯跡は、史跡地内の南東端部の標高43~39mの南向きの緩斜面に立地する。地山面の傾斜角度は23°を測った。1-I号窯跡からは水平距離で南東へ約150m、2号窯跡からは水平距離で南東へ約65m離れて築造され、窯からそれぞれの窯を見通すことはできない地点に所在している。

2 構造と規模

焼成部である窯体が林道工事により削平を受けている。また、焚口部以下灰原についても、林道や畠地の造成により確認することができないが、トレンチ5の調査区から構造は、地下式無段の窯窓構造の登り窯であることが確認された。規模は、検出できた長さは水平距離約6.3m、斜距離約6.6m、最大幅は1.47m、高さは天井部分が崩落しているが検出高から70cm以上である。窯の主軸はN-18°-W、床面の傾斜角度は25°を測る、寒風古窯跡群の窯跡では一番小型の窯跡となる。

焼成部の断面形態は、床面は全面にわたり甲羅状に凸凹しながら浅い皿状を呈し、側壁は天井に向かいやや内傾しながら横幅を狭めていくもので、いわゆる「プラスコ」状を呈した。床面と側壁面との境では、床面から側壁に重なるよう粘土が貼られていて、窯壁面の製作や補修の過程を知ることができた。

煙道の端部は直線的に延びてきた焼成部から丸く收められている。端部の壁面は厚さ約3~4cmで粘土が貼られ、水平面に対して71°の角度で立ち上っている。

3号窯跡の焼成により窯壁に接する地山は被熱により約10cmの厚さで赤褐色に変色していた。トレンチ5で検出した焼成部の床上にはほとんど遺物が現位置のままで出土しなかった。土層断面の堆積状況でも床直上の堆積層に1~10cm程度の破片となった天井部や側壁部片が堆積しており、窯が操業を終え窯体が空洞の状態がありその後、早い段階で天井部が崩落したものと推察される。

焚口については、林道の南下方は窯体のある丘陵斜面より、急斜面でありこの斜面が灰原として使用されたものと推察されることから、現在の林道の地下部分に焚口部が存在すると考えると、全長約10mの窯の規模が推察される。

3 時期

灰原が未確認であり遺物から3号窯跡の操業期間について検討できない。ここでは、トレンチ5の焼成部床面やトレンチ11の煙道内堆積土から出土した遺物から、窯の操業終了時期を考えてみたい。

時期的変化の特徴を示す杯蓋と杯身には『寒風古窯址群』1978の分類による、口縁部受け部にかえりをもたない杯蓋とかえりを有する杯身がセッタとなるA類、天井部中央に宝珠状のつまみを付け、口縁部にかえりを有する杯蓋と椀状の杯で口縁部の受け部にかえりを持たない杯身がセッタとなるB類。天井部中央に基石状の扁平なつまみを付け、口縁部の受け部にかえりを持たない杯蓋と底部が平底で貼り付け高台を有する杯身がセッタとなるC類の3種類のタイプに分類されている。(註1) 3号窯跡からの杯蓋第60図239~241や杯身第60図243・246はC類に分類されるものである。陶器窯跡群の出辺編年(1981)(註2)ではTK48型式~MT21型式に分類されるものと考えられる。また、

1点であるが杯蓋第60図**242**はB類の蓋と身がセット関係となるものではなく、大形の台付鉢や盤の蓋となるものと考えられC類に分類される杯とは古く位置付られよう。陶邑窯跡群の田辺編年ではT K217型式に分類されるものと考えられる。杯蓋第60図**242**が3号窯跡の操業時の製品として混入したと考えれば、3号窯跡は7世紀の中葉から操業し8世紀初頭には操業を終えたものと考えられる。

(馬場・若松)

註

- (1) 山鹿康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978
(2) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

第4節 寒風古墳

1 立地

寒風古墳は、史跡地内の寒風池南東に長さ約40mに亘る標高56mの平坦部から南東へ約40m下った緩斜面に立地する。史跡を含む周辺部の地形を見ると、寒風古窯跡群の背後の標高89.7mの丘陵部、笹場池北遺跡の背後の標高81.0mの丘陵部、中山散布地の背後の標高64.2mの丘陵部に挟まれた盆地状の地に所在している。この盆地状の地を望む地域が寒風古窯跡群の主要となる工房地域であろうと考えられる。寒風古墳はその主要工房地域内に単独で所在している。

内部主体の横穴式石室の開口方向は南東方向で、塙田地として錦海湾が埋め立てられる以前の栗利郷集落南全面に広がっていた錦海湾、さらには阿弥陀山を越えて小豆島の山並みや瀬戸内海を望むことができる。

2 構造と規模

墳丘の盛土は、立地する丘陵が畠地として開墾され、横穴式石室内の陶棺が掘り出される昭和10年2月にはすでに大きく破壊されていたようで、現在、一部露出している横穴式石室奥壁右付近でわずかに認められる土地の隆起が墳丘の名残を窺わせる程度である。墳丘の規模については、高さは不明であるが、墳径は横穴式石室の北側に設定したトレンチから円弧に描くよう巡る周溝を検出し、直径が約6.5m～約6.8mを測る小型の円墳であった。

石室の形態は、南東方向に開口した無袖式横穴式石室であった。天井石はすべて失い、側壁も西側壁の一箇所を除き、根石となる最下段の石材のみしか残存していなかった。側壁の石材は梢円形ないし長方形の石材を横口積に据えていた。側壁石は上部に向かいやや内傾しており天井石架設のための「持ち送り」の形態を示した。石室の床面での規模は、残存長330cm、奥壁の幅93cm、入口部の幅110cmを測り、横穴式石室としては小型の規模であった。石室の主軸方向はN-33°-Wである。

横穴式石室の床は、須恵器の甕の体部を10～20cmの大きさに打ち割り、体部外面を上面になるよう隙間なく平面的に敷き詰めていた「須恵器床」であった。須恵器床の範囲は、奥壁から長さ約215cm、幅は約90～105cm、面積にして約2.1m²を測った。須恵器床を有する横穴式石室は岡山県内でも類例がほとんど知らない。横穴式石室では無いが、箱式石棺の床面に須恵器窓を破碎し、甕の外面を上に敷き詰めた例として総社市のすりばち池古墳群の1・4号棺が挙げられる。時期は6世紀の前葉～中葉と考えられている。(註1)

3 時期

寒風古墳の時期について出土遺物から考えてみる。埋葬施設が横穴式石室の場合、追葬が行われ使用された時期に幅を持つ可能性があるが、寒風古墳については、小型の石室であり、須恵器床の上に置かれた須恵器陶棺の状況から石室のほとんどの空間を占めていた。このため、須恵器陶棺以外に追葬による他の埋葬施設の存在についてはないものと考えられる。

須恵器床上での副葬品については搅乱を受けており時期を特定できる遺物は出土しなかったが、須恵器床が終わった約40cm南東、横穴式石室入口近くの中央部で須恵器陶棺の被葬者に対する副葬品と

して出土した須恵器杯蓋第67図272と杯身第67図273・274がある。杯蓋第67図272は、宝珠つまみの先端部の面影を残す扁平なつまみにかえりのない口縁部と緩やかに丸みを呈する形態を示し、また、杯身第67図273・274は、底部が平坦で「ハ」字状に短く開く断面方形の貼り付け高台を有する形態を示す。これらの特徴を示す杯蓋と杯身から西川編年（1970）（註2）で「寒風3式」とされ、昭和53年（1978）寒風古窯址群緊急調査委員会調査団による確認調査の報告書（註3）でC類に分類され西川編年の「寒風3式」と同一とされた。陶邑窯跡群の田辺編年（1981）（註4）ではT K48型式～MT21型式に分類されるものと考えられる。このことから、寒風古墳の埋葬最終段階の時期は、飛鳥時代末の7世紀末頃と考えられよう。

4　被葬者

寒風古墳の被葬者を考える上で、古墳の立地、埋葬施設、須恵器床、遺物、時期等から検討すると、寒風古墳と同じ丘陵斜面に近接し須恵器窯跡が所在する。出土した遺物から、古墳が築造された同時期には1～I号窯跡、2号窯跡、3号窯跡の3基もの須恵器窯が操業されていたことが分かっている。このように窯跡と古墳が同時期に近接する位置関係にある邑久古窯跡の例として邑久町尻海に所在する新山2号窯跡とサザラシ1号墳、邑久町本庄に所在する佐井田谷窯跡と本庄佐井出口1・2号墳、長船町西須恵の桂山南麓の窯跡群と十二ヶ丘5号墳や札崎古墳群などがあり、龜田修一氏は須恵器生産に関わる人物の墓との関係が推測されると指摘している。（註5）須恵器生産との関係については、被葬者の棺として須恵質陶棺の使用が挙げられる。上記に須恵器窯と古墳が同時期に近接する関係にある古墳として例を挙げた、サザラシ1号墳、十二ヶ丘5号墳、札崎古墳群には須恵質陶棺が被葬者の棺として使用されている。

須恵質陶棺の棺台としての須恵器床に使用された大甕内側の当て具痕の中に、楕円形の中央に2×3本の格子状の文様を有するものがあり、同様の当て具痕を有する甕が1～I号窯跡の灰原と考えられる地点で表採されている。また、横穴式石室の閉塞施設の一部として転用された鷦尾の鱗部には蕨手状の文様が施されている。この鷦尾と同じ文様を有する鷦尾がかつて1号窯跡群の灰原から採集されている。

以上のように寒風古墳は1～I号窯跡（1号窯跡群）や2・3号窯跡との関係が非常に強く、寒風古窯跡群で操業がピークの時期と重なっていることが分かる。寒風古墳の被葬者は7世紀後半の律令国家体制が整えられる中で地方窯であった邑久古窯跡群が都（中央）へ製品の供給地として寒風古窯跡群が位置づけされ、須恵器の生産、工人の統括、製品の管理、供給体制を統括掌握した集団の傑出した人物ではないかと推察される。

(馬場)

註

- (1) 谷山雅彦・高田明人・武田恭彰「すりばち池古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』13 総社市教育委員会 1993
- (2) 西川空「歴斎の古窯」『古代の日本』4 角川書店 1970
- (3) 山鹿康平「寒風古窯跡群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978
- (4) 田辺昭三「須恵器人成」角川書店 1981
- (5) 龜田修一「邑久古窯跡群」『邑久町史考古編』瀬戸内市 2006

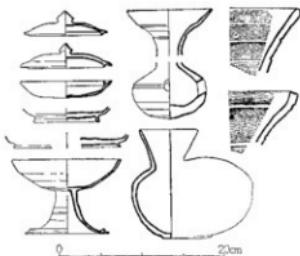
第5節 出土遺物

1 須恵器の編年

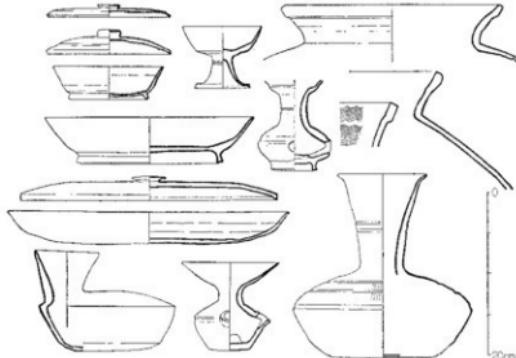
寒風古窯跡群表採須恵器による編年については、第2章調査の経過及び体制第1節調査に至る経緯の「寒風古窯跡群の調査・研究経過」で一部記載したところであるが、今回の確認調査で窯体床面から焼成時の遺物の配置状況や一定量の遺物が出土したためその資料を基に、従来の型式設定や編年の経過を整理し、従来の編年に新たな型式を追加する形で寒風古窯跡群の瀬戸内市編年案を作成した。

研究史

まず、岡山県の須恵器編年の基礎を築いた研究として西川宏氏（1930～2007）による研究があげられる。西川氏は備前地域（瀬戸内市・備前市・赤磐市・和気町）の須恵器窯跡の灰原表採資料による古墳時代後半から飛鳥時代にわたる型式設定を行い編年の大要を提示した。大要によると戸瀬池式→別所式→びくに岩式→あますづ式→亀ヶ原1式→寒風1式である。寒風古窯跡群では西川氏は時實點水氏が「寒風5148」と地番を註記した遺物が採集された2号窯跡を「寒風第1号古窯址」と呼び、灰原資料を基準に「寒風1式」を設定した。（第86図）特徴は『古墳時代須恵器の器種と形態を継承しながらも、蓋におけるぎほし形および碁石形のつまみの出現、杯などにおける高台の出現、盤という新器種の出現など新しい要素が加わり、またかめの口縁部にくし目波状文の装飾が発達する。蓋付の杯のかえりは外縁の高さと同じか、やや低目になる。はそは肩が直線的に降下し、胴には一本の沈線がめぐって丸底である。平瓶は全体が丸みをおびているが、形にまとまりがなく平底に近い。かめの口縁部の端はとくにふくらみをもつことなく、角ばるか丸みを持って終わる。同じ窯で家形陶棺が焼かれている。』としている。年代は、杯蓋の宝珠状つまみに仏教的色彩を認め、飛鳥時代に位置づけた。（註1）その後の編年として西川氏は、時實氏が「寒風5139」と地番を註記した遺物が採集された1～1号窯跡を「寒風3号古窯址」と呼び、灰原採集の一群を標種とし「寒風3式」を設定した。（第87図）特徴は「器



第86図 西川編年寒風1式（1/6）（文献1）



第87図 西川編年寒風3式（1/6）（文献1）

種と器形は、古墳時代のものと奈良時代のものとの過渡的なすがたを呈する。はそうにおける平底あるいは高台の出現と、注口部の突出、平瓶と長頸壺の肩が角ばる点は新しい特徴である。そしてつまみのぎぼし形は退化する。盤は盛行して、蓋付きで高台をつけたものほか、手づくねの無高台の大盤がある。長頸壺には高台がつくものがある。大がめの口縁部にはひきつづき波状文が施されているが、端は少しふくらんでくる。家形陶棺や鶴尾が、須恵器と同じ窯で製作されている。』としている。年代は、同じ窯で焼かれている家形陶棺が複弁を配した瓦当文を有する瀬戸内市長船町の本坊山古墳の陶棺と同時代であると考え、7世紀後半の白鳳時代に位置づけた。寒風3式以降について、さらし奥池式→鏡鑄造式→あみな谷式と鎌倉時代初頭までの編年を提示した（註2・3）。

また、昭和45年（1970）間壁忠彦氏は平安時代の須恵器窯として備前市佐山地区に所在する佐山東山窯（平安時代前半）から佐山光明見窯（平安時代後半）へ変遷することを指摘し、平安時代末には備前市伊部地区へ移り備前焼へ移行する考えを示した。（註4）

昭和53年（1978）、岡山県教育委員会は国指定史跡申請のための資料を得るために寒風古窯跡群緊急調査委員会並びに調査団を発足し、磁気探査、寒風散布地、1号窯跡群の基数の確認や規模など初めて学術的な発掘調査を行った。この報告の中で調査者である山磨康平氏は、時實氏により採集された杯をA～Cの3つに分類した。A類は口縁部の受け部にかえりを有する杯身と天井部に丸みがなく、口縁部にかえりを持たない杯蓋がセットとなるもの。B類は、天井部中央に擬宝珠状のつまみを付け、口縁部にかえりを有する杯蓋と平底で椀状の体部で口縁部にかえりを持たない杯身がセットとなるもの。C類は天井部中央に扁平なつまみを有し、口縁端部が短く屈曲する杯蓋と底部が扁平で「ハ」の字状に高台を有する杯身がセットとなるものである。発掘調査の結果、1号窯跡群のトレンチ調査により約7m離れて並行する1-I号窯（北側）と1-II号窯（南側）の2基の窯体が確認された。さらに、1-II号窯跡のトレンチにはA類とB類の杯が含まれておりC類の杯は含まれていないことが明らかとなった。このことより時實氏により1号窯跡群の灰原で多量に採集されたC類の杯は、1-I号窯跡に伴うことが判明した。A～C類の時期について山磨氏は、A類を古墳時代から続く杯蓋の最終段階で西川編年の「亀ヶ原1式」に酷似、B類を西川編年の「寒風1式」の範疇、C類を西川編年の「寒風3式」に位置づけ、A類を7世紀初頭～前半、B類を7世紀前半～中葉、C類を7世紀後半とした。（註5）

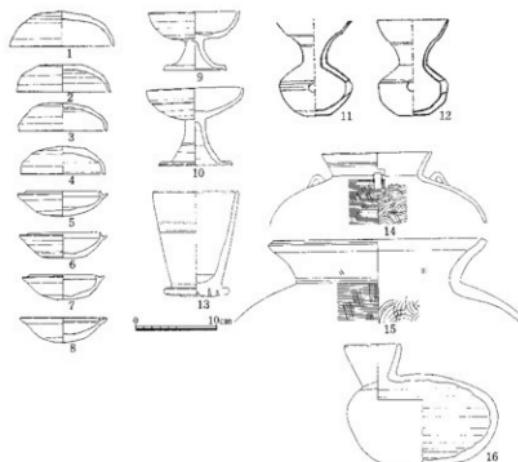
その後、昭和62年（1987）山磨康平氏は、邑久古窯跡群や瀬戸内市内の遺跡調査成果から寒風古窯

第1表 寒風古窯跡群窯跡番号対照表

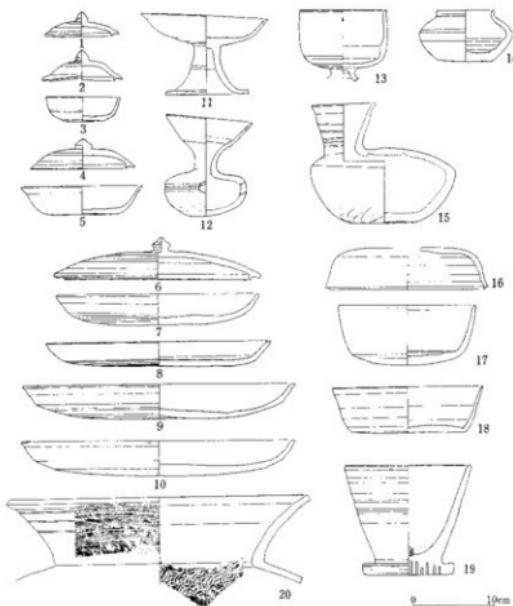
瀬戸内市埋文報告1	岡山県埋文報告27	西川宏氏番号	時實默水氏採集地番
1-I号窯跡	1-I号窯		
1-II号窯跡	1-II号窯	3号古窯址	寒風5139
1-III号窯跡	—	1号古窯址	
2号窯跡	2号窯	2号古窯址	寒風5148
3号窯跡	3号窯	4号古窯址	—

跡群の操業時期を7世紀初頭前後の「亀ヶ原1式」～7世紀末から8世紀初頭の「寒風3式」の約100年間と考えた。また、7・8世紀の西川編年体系をふまえつつ、邑久古窯跡群を中心とした7・8世紀代の須恵器の変遷概要を示した。その中で寒風1-II号窯跡を「寒風1式」と「亀ヶ原1式」とし寒風1-I号窯を「寒風3式」とした。また1981年盗掘により多量の遺物が発見された牛窓町長浜と邑久町尻海の境に位置する土橋窯跡の須恵器の杯身にA類が認められず、端面にかえりを持ち、基石状のつまみを有する杯蓋や「ハ」字状に大きく開く高台を有する杯身を含むなど、「寒風1式」と「寒風3式」の型式的間を埋める型式として「土橋式」を設定した。(註6)

昭和62年(1987)伊藤晃氏は、西川編年をベースにその後の資料を加えながら6世紀中葉から11世紀代までの邑久古窯跡群の基本的な須恵器編年を確立した。その型式的変遷は木瀬山式→(1型式未設定)→比久危石式→大堀式→亀ヶ原1式→

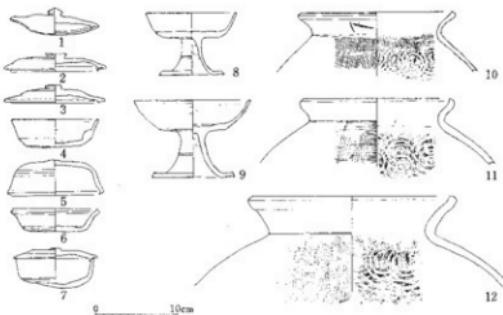


第88図 伊藤編年亀ヶ原1式(1/6)〈文献2〉



第89図 伊藤編年寒風1式(1/6)〈文献2〉

寒風1式→土橋式→寒風
 3式→さざらし奥池式→
 (型式未設定)→東山式
 →(形状式未設定)→油
 杉式である。この内、寒
 風古跡群については寒
 風1-II号窯(伊藤氏は
 寒風1-I式窯と表記)
 のA類の杯を含む遺物を
 「亀ヶ原1式」に比定し
 た。特徴として「杯は前
 型式の天堀式に比べ小形
 化する。杯蓋の口径は10
 cm、器高3~4cm前後に
 なる。立ち上がりは0.5
 cm前後で前期より短く内
 傾する。」とした。(第88
 図) 次に、寒風2号窯の
 出土遺物を指標に「寒風
 1式」に比定した。特徴
 として「杯蓋に擬宝珠状
 のつまみがつき、内面に
 返しが付つくこと、逆に
 杯身の蓋受けが消失す
 る傾向にあることであ
 る。杯蓋の口径は10cm、
 器高3cm前後である。杯
 身の口径は9cm、器高3
 cmと小形になり平底を呈
 するものが出現する。」
 とした。(第89図) 次に、
 西川編年で設定された寒
 風1式と寒風2式の間に
 新たに「土橋式」を設定
 した。特徴として「杯蓋
 は寒風1式の形状を踏襲
 するが、擬宝珠状のつま
 みが扁平化し、身受けの



第90図　伊藤編年土橋式(1/6)（文献2）



第91図　伊藤編年寒風3式(1/6)（文献2）

返しがより知くなる。杯身は亀ヶ原1式の杯蓋が身となるもの（Aタイプ）と平底のもの（Bタイプ）がある。杯蓋の口径は11~14cmで個体差が激しい。器高は2cm前後である。杯身Aの口径も9.4~13cmで個体差がある。杯身Bは口径10.5cm、器高は3.4cmで安定している。』とした。（第90図）次に、寒風1-I号窯（伊藤氏は寒風1-II式窯と表記）の出土遺物を指標として「寒風3式」に比定した。特徴として『杯蓋口縁の身受けがなくなり、口縁端部を折り返し逆三角形を呈する。天井部は丸みをもち、つまみは土橋式よりさらに扁平化した碁石状になる。杯身は底盤が平底になり効削りを行っているものと、高台の付くもの（Cタイプ）が出現する。高台は「ハ」の字状にしっかりとふんばったものである。杯蓋の口径15cm、器高3cm前後、杯身Cは口径12~14cmである。』とした。（第91図・註7）

昭和62年（1987）伊藤晃・山磨康平氏は、両氏の研究成果をもとに岡山県の7世紀の須恵器を亀ヶ原1式→寒風1式→土橋式→寒風3式の4型式に分類。8世紀の須恵器をさざらし奥池式→福谷奥池式の2型式に分類。9・10世紀の須恵器を鍛錬窯出土資料を指標とする9世紀前半代の前段階、佐山東山窯、福谷鋤池窯出土資料を指標とする中段階、百間川長谷遺跡、美作国府出土資料を指標とする10世紀初頭前後の後段階の3段階に分類した。寒風古窯跡群については寒風1-II号窯（伊藤・山磨氏は寒風1-I号窯と表記）を「亀ヶ原1式」に比定した。杯は古墳時代から続く最終段階で特徴として『杯・蓋とともに口径が小型化し、蓋の口径は10cm前後程度になる。杯の口辺部立ち上がりは、より低くなり0.5cm前後になる。なかには、受部と同等の高さのものも現われる。』とした。次に、寒風2号窯の一部を指標として「寒風1式」に比定した。特徴は『杯蓋に宝珠のつまみがつく新器種の登場である。蓋の内面には返しがつき、杯の蓋受けが消失し、亀ヶ原1式までに見られた蓋と杯の逆転した形状を呈する。杯蓋の口径10cm、器高3cm前後である。杯は口径9cm前後のやや平底気味の器種が多い。』とした。次に、西川編年の寒風1式と寒風3式の間に、土橋窯出土資料の一部をもって「土橋式」を設定した。特徴は、『杯蓋の宝珠つまみが扁平化し、口辺内面のかえしがより短くなる。杯には、新たに高台を持つ器種が出現する。高台は次期の寒風3式と比較し、シャープなつくりで八の字形に大きく開き、高台の内側の縁のみが接する。』とした。次に、寒風1-I号窯（伊藤・山磨氏は寒風1-II号窯と表記）を指標として「寒風3式」に比定した。特徴は『杯蓋の内面のかえしが消失し、口縁が逆三角形を呈する。天井部は丸みを持ち、蓋のツマミは土橋式よりさらに扁平となり碁石状を呈する。杯の高台はやや低くなり、接觸面が水平なものも現れる。』とし、寒風古窯跡群を7世紀初頭前後から8世紀初頭前後の時期で4期区分し編年を行った。（註8）

平成8年（1996）亀田修一氏は、山陽地域の須恵器窯跡の研究史、概要、資料集成を行った。この中で、陶邑田辺編年や陶邑田中村編年と併行関係による山陽の主要窯跡編年を作成した。備前地区では伊藤氏の示した型式を使用し6世紀前半~9世紀前半までの窯跡の編年を整理した。それによると、戸瀬池→木鍋山1号→（ ）→比久尼岩→天堤→寒風1号（古）→土橋→（ ）→寒風1号（新）→さざらし奥池→根切池→（ ）→鍛錬場1号→東山とした。（註9）

杯の分類（瀬戸内市分類）

寒風古窯跡群の窯焼成部の床面や寒風古墳などから出土した一括性の高い杯を分類し、各研究者により策定された備前地域の編年を参考に寒風古窯跡群の須恵器編年について考えてみたい。寒風古窯跡群出土の杯の分類については1987年山磨氏によりA~Cの3分類がなされており、今回の報告にあたっても山磨氏の分類を使用し、奈良文化財研究所の分類を括弧で併記した。D類・E類については

今回の調査で出土した遺物を新たに分類追加したものである。また、伊藤・山磨氏により設定された土橋式については記号分類を付けず土橋式を分類名とした。以下、分類の特徴を記載する。

A類 1 - III号窯跡の焼成部床面出土の遺物第39図104～107・113～130を指標とするものである。(奈良文化財研究所分類:杯II)

杯蓋は天井部にわずかに丸みを持ち、口縁部内面にかえりを持たず、口縁部は屈曲させ端部に丸みを持つ形態である。調整は外面天井部がヘラケズリで他はヨコナデである。口径は12.0～15.0cmで平均13.1cm、器高は3.8～4.7cmで平均は4.3cmを測る。

杯身は口縁部受け部にかえりを有する。かえりはやや内傾し先端を細く仕上げ、9～10mmの高さを測る。受け部は外方へ内湾しながら端部に丸みを持つ。底部はやや丸みを持つ形態である。調整は底部外面がヘラケズリ、その他はヨコナデである。口径は10.8～12.8cmで平均11.6cm、器高は10.6～12.8cmで平均は11.6cm、器高は2.7～4.6cmで平均は4.1cmを測る。

A'類 1 - II号窯跡の焼成部床面出土の一部の遺物第28図32～54を指標とするものである。

杯蓋は天井部に丸みがなく平たく、口縁部を屈曲し端部に丸みを持つ形態である。調整は外面天井部がヘラ切りで他はヨコナデである。法量は口径が10.0～10.8cmで平均10.3cm、器高が3.1～4.1cmで平均は3.6cmを測る。

杯身は口縁部受け部のかえりは短く内湾し先端を細く仕上げ、5～6mmの高さを測る。受け部は外方へ内湾しながら端部に丸みを持つ形態である。調整は、底部外面がヘラ切り後ナデ、その他はヨコナデである。口径は8.9～9.9cmで平均9.5cm、器高は2.6～3.4cmで平均は3.1cmを測る。

A'類とした杯は、形態的にはA類の杯の小型タイプで同じであるが、第1章第1節の1号窯跡群の調査概要で報告したが、杯の出土状況は、杯身と杯蓋の合わせ状況で出土した3組の内2組が口縁部受け部にかえりを有する杯身を上にした逆転状態であった。また、単体で出土状況が確認できた杯身8点すべてが杯身を伏せた状態であった。さらに、1号窯跡群灰原出土の杯蓋と杯身が接合した時実資料の中にも、身の底部には自然釉がかかり、蓋の上面には砂礫を含む粘土が付着している資料がある。(写真14)このことから、1 - II号窯跡で出土した杯は、須恵器成立以降の杯蓋と杯身の関係が逆転して焼成している。このため、このタイプの杯を今回新たにA'類とした。

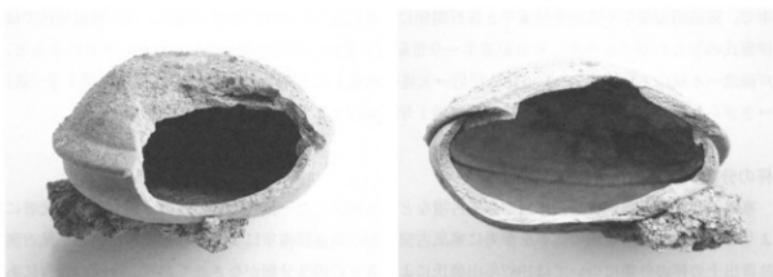


写真14 寒風1号窯跡群灰原から杯身が接合した状態で出土したA'類の時実資料

B類 1 - II号窯跡の焼成部床面出土の一部の遺物第28図55～79を指標とするものである。(奈良文化財研究所分類:杯G)

杯蓋は天井部に丸みがなく扁平な形状で、中央部に宝珠状のつまみを貼り付ける。口縁の内面端部に内傾するかえりを有する。かえりの端面は丸く仕上げている。宝珠状のつまみの形状は、径1.4～1.7cmの円柱の上に径1.4～1.7cm、高さ0.5～0.7cmの円錐を乗せ、台となる円柱部を径1.2～1.5cmにくびれを入れた形態である。調整は、外面天井部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。口径は7.6～8.4cmで平均8.1cm、器高は2.6～3.1cmで平均は2.9cmを測る。

杯身は平底気味を呈する底部から身部を口縁部に向かいまっすぐ立ちあげ、口縁部をわずかに外反気味に開き、端部を丸くおさめる形態である。調整は、底部外面がヘラ切り後ナデ、その他はヨコナデである。口径は8.1～9.0cmで平均9.0cm、器高は3.7～4.3cmで平均は4.0cmを測る。

C類 主に1 - I号窯跡の焼成部・灰原、2号窯跡の焼成部の一部の遺物第17図1、第22図20・21・23、第50図165～170を指標とするものである。(奈良文化財研究所分類:杯B)

杯蓋は天井部が平坦へ途中から笠状に口縁部に向かうものと、浅い皿状の天井部を有するものがあり、天井部中央に扁平なつまみを付け、口縁部の受け部にかえりを持たず端部を短く屈曲させる形態である。つまみの形状は、宝珠状に中心部に向かいゆるく尖っているもの(Αタイプ)。つまみ中央部と周辺部がわずかに高くなり、宝珠つまみの先端部の面影を残す扁平なもの(Βタイプ)。基石状のもの(Сタイプ)。上部中央部がわずかに窪むもの(Дタイプ)がある。型式的にはB類杯蓋に宝珠状つまみの名残を残すΑタイプからつまみ上部を窪ませるDタイプへの変遷が考えられるが、2号窯跡の焼成部の床面からはいずれのタイプのつまみも出土しておりタイプによる時期的な差は認められない。調整は天井部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。口径は15.1～19.8cm、器高は1.9～3.8cmを測り、大きさにやや差がある。

杯身は底部が平坦で「ハ」字状に聞く断面方形の貼り付け高台を有する形態である。高台の高さも3号窯跡の煙道部で出土した246のように細身で5mm以上の高さを持つものと、1 - I号窯跡焼成部床面から出土した3や寒風古墳の横穴式石室床面で出土した273・274のように5mm以下の断面四角形の低いものが認められる。調整は底部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。口径は10.5～16.0cm、器高は3.3～5.0cmを測る。団化した個体数が少なく統計的な傾向を知ることが出来ないが、杯蓋でも大きさの差があることから、杯身にも大小の大きさ分けがありそうである。

D類 2号窯跡の焼成部床面の一部の遺物第49図158～162、第50図171～177を指標とするものである。(奈良文化財研究所分類:杯A)

D類の杯はセットとなる蓋について2号窯跡焼成部床面の出土遺物の中に認められず、杯身のみの器種である可能性が高い。

杯身は底部が平坦ないし平底気味で、杯部が口縁部に向かい外傾しながら開き、口縁部近くで角度を変え上方へ立ち上がり端部を丸くおさめる形態である。調整は平部がヘラ切り、他はヨコナデを施す。口径は11.7～12.8cm、器高3.1～4.9cmを測る。

E類 2号窯跡の前庭部、灰原の一部の遺物第53図197、第54図208～213を指標とするものである。

杯蓋は天井部が緩やかな丸みをもつものや皿状に扁平な形状で、中央部にB類に分類される形態の宝珠状のつまみを貼り付ける。口縁部の内面端部にかえりは無く、短く屈曲させる形態である。調整は、外面天井部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。口径は10.5~12.5cmで平均11.0cm、器高は2.2~3.7cmで平均3.1cmを測る。

杯身は杯蓋とセット関係で確認していないため不明な点が多いが、2号窯跡のトレンチ10の灰原から出土した杯身の中に口径的にセット関係が窺える資料をE類の杯身と考えた。底部は平底で杯部は緩やかな椀状を呈し、口縁端部をナデによりわずかに外反する形態である。B類の杯身の口径を大きくし、器高を低くした形態を呈している。調整は底部がヘラ切り、他はヨコナデを施す。口径は10.6~11.3cm、器高は3.1cmを測る。

土橋式 濑戸内市牛窓町・邑久町尻海に位置する土橋窯跡出土の一部の資料であり、伊藤編年(1987)による「土橋式」を指標とするものである。(註10)

杯蓋は天井部に丸みがなく扁平な形状で、中央部にB類に貼り付けられた宝珠状のつまみが扁平化し、口縁の内面端部に内傾するかえりをもより短くなる形態である。口径は10cm、器高は3cm前後を測る。

杯身は1号窯跡群灰原出土の時實資料(『寒風古窯址群』1978の23資料)の杯蓋・杯身が接合した状態から、底部は平底で身部は口縁部に向かい直線的に立ちあげ、口縁端部を丸くおさめる、B類の杯身を一回り大きくした形態である。

寒風古窯跡群の須恵器編年(瀬戸内市編年)

寒風古窯跡群出土の須恵器編年について西川氏は現地に残された灰原の位置や規模から寒風古窯跡群に寒風1号窯跡～寒風4号窯跡と4つの窯名を付けた。(現在の窯名称や地番は第1表の対照表による)そして、灰原から出土した須恵器を基準にして、窯番号を用いて「寒風1式」、「寒風3式」の型式設定し編年を行った。その後、各研究者による編年も窯跡の名称や窯番号を使用して型式設定されていることから今回、寒風古窯跡群の須恵器編年を行うにあたり、従来の窯跡の名称を踏襲しながら確認調査で検出した窯跡の番号を使用し、A類～E類に分類した杯を中心とし瀬戸内市編年を検討してみたい。

寒風1-Ⅲ式

1-Ⅲ号窯跡の焼成部床面出土の遺物を指標とする型式で、「寒風1-Ⅲ式」と設定する。(第92・94図)

A類に分類した杯蓋の法量は口径が12.0~15.0cmで平均は13.1cm、器高が3.8~4.7cmで平均は4.3cmを測る。杯身の法量は口径が10.8~12.8cmで平均は11.6cm、器高が2.6~3.4cmで平均は3.1cmを測る。調整は外面の天井部や底部に回転ヘラケズリを施すものである。A類の杯は西川編年(1970)の寒風1式や伊藤・山崎編年(1996)の亀ヶ原1式の杯と比べ口径が大きく、杯身のかえりはやや内傾し高さ1cm程度を測る。A類の杯は邑久古窯跡群の中では西川氏により天堤式と型式設定された天堤窯跡(瀬戸内市邑久町庄田)出土遺物に酷似する。また、1点ではあるが有蓋高杯の蓋が出土しており、有蓋高杯の生産の下限を示す型式である。

A類の杯を畿内の陶器編年と対比すると出迎編年(1981)のTK209式、中村編年(1978)のⅡ型式第5段階に属すると考えられる。時期は7世紀第1四半世紀頃と考えられる。

寒風1-II式

1-II号窯跡の焼成部床面で窯詰めの状況で残された遺物を指標とする型式で、「寒風1-II式」と設定する。(第93・94図) 寒風1-II式にはA'類の口縁部の受け部にかえりを有する身とかえりをもたない蓋がセットとなる、古墳時代須恵器の出現以来の器形と、B類の口縁部の受け部にかえりをもたない身に宝珠状のつまみを持ち、口縁部にかえりを有する蓋がセットとなる器形の2つの別形式が共存する型式である。しかし、A'類は須恵器出現から続くA類の杯口径が最小化する最終段階のものであり、B類はこの段階から新たに出現する形式である。時期的にA'類とB類に生産終了時の新旧差を認められる龟ヶ原1号窯跡の存在からA'類の一群を指標とし寒風1-II式の古段階である「寒風1-II式(古)」を設定。B類の一群を指標とし寒風1-II式の新段階である「寒風1-II式(新)」を設定する。

- 1 寒風1-II式(古)** A'類に分類した杯蓋は天井部に丸みがなく扁平で、口縁部を屈曲する。調整は外面天井部がヘラ切りで他はヨコナデである。法量は口径が10.0~10.8cmで平均10.3cm、器高が3.1~4.1cmで平均は3.6cmを測る。杯身は口縁部受け部のかえりは短く内湾する。調整は、底部外面がヘラ切り後ナデ、その他はヨコナデである。法量は口径が8.9~9.9cmで平均9.5cm、器高が2.6~3.4cmで平均は3.1cmを測る。口径、高さともA類の杯でもっとも縮小化が進んだ最終段階の杯である。出土状況や遺物外面に残された砂粒を含む粘土塊の付着や自然釉の付着状況から、この型式で蓋と身が逆転している可能性が高く、この段階の杯をA'類にした所以がそこにある。A'類の杯は蓋と身の機能や使用方法、B類の杯の出現との関係などが注目される資料である。

A'類が出土した遺跡として龟ヶ原1号窯跡がある。出土した杯蓋の口径は10.4cm、高さ3.2cm、杯身の口径は9.4~10.0cm、高さ2.7~3.0cmを測る。B類は含まずA'類しか出土しておらず寒風1-II式(古)の基準となる窯跡である。また、蓋の上面に粗い砂粒を含む粘土塊の付着や、身の底部に自然釉が溶着する資料(写真15)が認められ、寒風1-II式(古)=龟ヶ原1式ですでに焼成時、杯の蓋と身が逆転しているようである。

伊藤・山野編年(1996)の龟ヶ原1式に属するもので、畿内の陶邑編年と対比すると田辺編年(1981)のTK217式、中村編年(1978)のII型式第6段階に属すると考えられる。時期は7世紀第2四半世紀頃と考えられる。

- 2 寒風1-II式(新)** B類に分類した杯は金属器を模したと言われる扁平な杯蓋の中央部に宝珠状のつまみを貼り付け、口縁の内面にわずかなかえりを有する特徴的な形態である。法量は口径が7.6~8.4cmで平均8.1cm、器高が2.6~3.1cmで平均は2.9cmを測る。

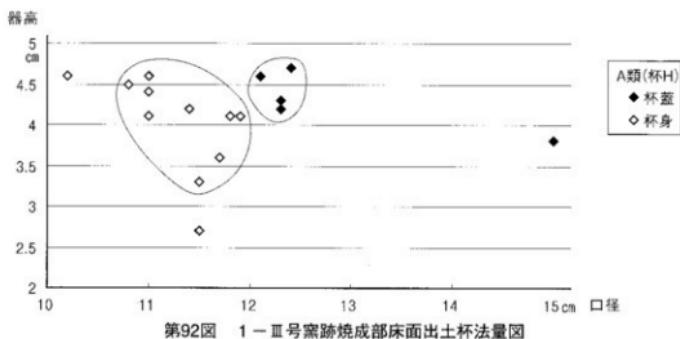
杯身は平底気味の底部で杯部を直線的に立ちあげ、口縁部をわずかに外反気味に聞く形態である。法量は口径が8.1~9.0cmで平均9.0cm、器高が3.7~4.3cmで平均は4.0cmを測る。



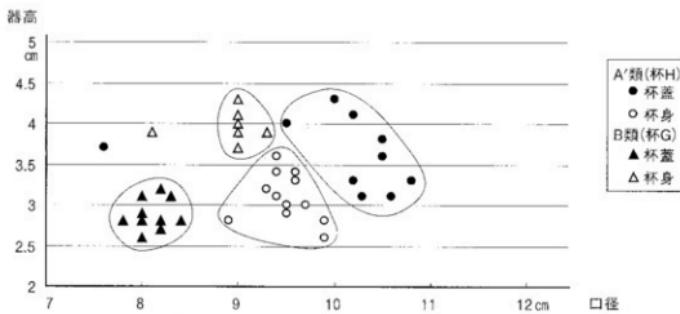
写真15 亀ヶ原1号窯跡から出土した杯蓋
(蓋の上部に粘土塊が付着していて、窯体床面に逆転した状態で焼成されたものと考えられる)

杯蓋、杯身とも法量のバラツキがなく、杯の系譜の中で一番小形化する時期である。しかし、調整は丁寧な仕上げを行っている。

伊藤・山野編年（1996）の「寒風I式」に属するもので、畿内の陶邑編年と対比すると田辺編年（1981）のTK217式、中村編年（1978）のⅢ型式第1段階に属すると考えられる。時期は7世紀後半から第3四半世紀前半頃と考えられる。



第92図 1-Ⅲ号窯跡焼成部床面出土杯法量図



第93図 1-II号窯跡焼成部床面出土杯法量図

土橋式

杯の分類で記した土橋窯跡出土の一部の資料を指標とするものである。（第94図）昭和58年（1983）盜掘された遺物を報告した岡田博氏が「蓋B」と分類した杯蓋は、天井部に丸みがなく扁平な形状で、中央部に扁平なつまみを有し、口縁の内面端部に非常に短く内傾するかえりをもつ形態である。法量は口径が11.0～14.0cm、器高が1.9～2.5cmを測る。

杯身は平底で、口縁部に向かい直線的に立ちあがり口縁端部を丸くおさめる。B類の杯身を一回り大きくした形態である。（註10）

寒風古窯跡群の窯跡から「土橋式」に該当する遺物は時寶資料に1号窯跡群から杯身・杯蓋がセット状況の杯がある程度である。このことから「土橋式」の杯は、寒風古窯跡群で生産は極めて少なかったものと考えられ、寒風古窯跡群の窯から型式設定することは難しい。邑久古窯跡群の中でも「土

橋式」の杯の確認はなく、生産地、生産量、時期が極めて限られた型式であろう。

伊藤編年（1987）の「土橋式」に属するもので、伊藤・山房編年（1996）の外反する高い高台を有する杯身を除く杯を標識とするものである。畿内の陶邑編年と対比する明確な資料がない。田辺編年（1981）のTK217式とMT21式の間に位置付け、中村編年（1978）のⅢ型式第2段階に属すると考えられる。時期は7世紀第3四半世紀前半頃と考えられる。

寒風2式

2号窯跡の灰原、前庭部、焼成部床面で出土した遺物を指標とする型式で、「寒風2式」と設定する。（第94図）寒風2式には口縁部の受け部にかえりをもたない身に宝珠状のつまりを持ち、口縁部にかえりを有するB類と分類した杯の他、今回D類・E類と分類した杯を含み、從來の寒風編年の「寒風1式」と「寒風3式」の間を埋める2つの別形式が共伴する型式として設定するものである。窓体内での出土関係から生産時に新旧差を認められ、E類の一群を指標とし寒風2式の古段階である「寒風2式（古）」を設定。D類の一群を指標とし寒風2式の新段階である「寒風2式（新）」を設定する。

1 寒風2式（古） E類として分類した杯を指標とするもので、2号窯跡の焼成部からではなく前庭部や灰原から出土しており2号窯の操業前段階で生産されていた杯である。灰原ではB類に分類した杯も含んでおり2号窯跡の生産開始時期を窺わせる。

杯蓋は扁平な天井中央部にB類に分類される形態の宝珠状のつまりを貼り付け、口縁部の内面端部にかえりは無い形態である。法量は口径が10.5~12.5cmで平均11.0cm、器高が2.2~3.7cmで平均3.1cmを測る。

杯身はセット関係で出土した例が無く明確にはわからない。しかし、杯蓋と共に出土した杯身の中に底部が平底で、杯部が緩やかな椀状を呈し口縁端部をわずかに外反する、B類の杯身の口径を大きくし、器高を低くした形が共伴しておりこの杯が身になる可能性があろう。法量は口径が10.6~11.3cm、器高が3.1cmを測る。

畿内の陶邑編年と対比すると田辺編年（1981）のTK48式、中村編年（1978）のⅢ型式第3段階に属すると考えられる。時期は7世紀第3四半世紀頃と考えられる。

寒風2式（古）の指標とした杯E類の位置づけについては不明な点が多い。このことは、この時期の小型杯には杯蓋のつまりの形状や口縁部のかえりの有無により、B類（宝珠つまり+かえり有）、E類（宝珠つまり+かえり無）、土橋式（扁平つまり+かえり有）、C類（扁平つまり+かえり無）の4つの分類ができ、さらに杯身の形状や高台の有無により分類され、蓋、身のセット関係からさらに細分されるものとなり、寒風古窯跡群の各窯から出土する各型式の共伴関係から編年の位置づけを行った。寒風古窯跡群では、I~III号窯跡ではA類。I~II号窯跡の焼成部の最終段階でA'類とB類が共伴。2号窯跡では灰原出土遺物から前半期にB類とE類が共伴し、焼成部床面の最終段階でD類とC類が共伴。I~I号窯跡では焼成部出土遺物からD類とC類が共伴していることから、A類→A'類→B類→E類→D類・C類の時系列を想定することができよう。

2 寒風2式（新） D類として分類した杯を指標とするもので、2号窯跡の焼成部床面からC類と分類した杯蓋と共に比較的まとまって出土した。このため寒風2式（新）を設定する。

杯身は底部が平坦ないし平底気味で、口縁部に向かい椀状に開きながら、口縁部近くで角度を変え上方へ立ち上がる形態である。法量は口径が11.7~12.8cm、器高3.1~4.9cmを測る。

D類の杯はセットとなる蓋について2号窯跡焼成部床面の出土遺物の中に認められず、杯身のみの器種である可能性が高い。畿内の陶邑編年と対比すると田辺編年（1981）のMT21式、中村編年（1978）のIV型式第1段階に属すると考えられる。時期は7世紀第4四半世紀頃と考えられる。

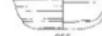
寒風1-I式

主に1-I号窯跡の焼成部や灰原、2号窯跡の焼成部から出土したC類に分類した杯を指標とする型式である。（第94図）西川氏は1-I号窯跡を3号古窯址と命名し、C類の杯を含む遺物を「寒風3式」として型式を設定したものにあたる。（第91図）今回、窯跡の名称から「寒風1-I式」を設定する。

杯蓋は天井部が平坦で笠状のものと、浅い皿状を有するものがある。天井部中央には扁平なつまみを貼り付け、口縁部の受け部にかえりを持たない形態である。つまみの形状には杯C類の説明で紹介したがA～Dの4つのタイプがあり、型的には宝珠状の名残を残すAタイプから上部が窪むDタイプへの変遷が考えられるが、2号窯跡の焼成部出土遺物からではタイプによる時期的な差を確認することはできなかった。法量は口径が15.1～19.8cm、器高は1.9～3.8cmを測り、大きさに差がある。

杯身は口縁部に向かい直線的に外傾し、口縁端部を丸くおさめ、底部は平坦で「ハ」字状に開く断面方形の貼り付け高台を有する形態である。1号窯跡群灰原出土の高台の高さは低く、断面が方形で丁寧に形成した身が多く認められる。細く高い高台を有する杯身は口径が15cm以下の小形のものに多く認められる傾向にある。1号窯跡群灰原や3号窯跡、寒風古墳出土資料から法量は口径が10.5～16.0cm、器高は3.3～5.0cmを測る。法量差があり、杯蓋同様杯身にも大小の大きさ分けがありそうである。

C類の杯は西川編年（1970）の「寒風3式」、伊藤編年（1987）の「寒風3式」、伊藤・山房編年（1996）の「寒風3式」に属するもので、畿内の陶邑編年と対比すると田辺編年（1981）のMT21式、中村編年（1978）のIV型式第1段階に属すると考えられる。時期は7世紀第4四半世紀後半から8世紀第1四半世紀前半頃と考えられる。

		高杯・短頸壺(蓋)			
寒風1-III式	A類	   			
		105 121 130 132		寒風1-III号窯跡焼成部	
寒風1-II式(古)	A'類	   			
		33 42 44 96		寒風1-II号窯跡焼成部	
寒風1-II式(新)	B類	    			
		56 57 59 84 85		寒風1-II号窯跡焼成部	
土橋式		  			
		158 160 211		寒風1号窯跡群灰原	
寒風2式(古)	E類	   			
		212 213 210 211		寒風2号窯跡灰原	
寒風2式(新)	D類	   			
		162 175 158 160		寒風2号窯跡焼成部	
寒風1-I式	C類	   			
		272 273 165 167		寒風古墳周溝	
寒風1-1号窯跡焼成部(1) 寒風1号窯跡群灰原(25) 2号窯跡焼成部(165-167-170) 寒風古墳(272-274)					

第94図 寒風古窯遺跡群須恵器編年(瀬戸内市編年)(1/6)

第2表 寒風古窯跡群の須恵器編年表

年代	陶邑窯跡		西川編年(3) (1970)	伊藤・山磨編年 (4) (1996)	龜田編年(5) (1996)	瀬戸内市編年 (2009)
	田辺編年(1) (1981)	中村編年(2) (1978)				
600 - 700	TK 209	II - 5	天提式		天提	寒風1-I式
	TK 217	II - 6	寒風1式	亀ヶ原1式		寒風1-II式 (古)
		III - 1			寒風1号(古)	
		(III - 2)		寒風1式		寒風1-II式 (新)
	(TK 46)				土橋	土橋式
	(TK 48)	(III - 3)		土橋式		寒風2式(古)
700	MT 21	IV - 1	寒風3式	寒風3式	寒風1号(新)	寒風2式(新)
						寒風1-I式

参考文献

- 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981
- 中村沿「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』 大阪府教育委員会 1978
- 西川宏「備前の古窯」『古代の日本』4 角川書店 1970
- 伊藤晃・山崎康平「岡山県(瀬戸内中部Ⅱ)の7世紀の土器」『日本土器辞典』 雄山閣出版 1996
- 龜田修一「丘山陽(山口、岡山、広島)」『須恵器集成図録』第5巻西日本編 雄山閣出版 1996

2 刻書文字

奈良時代初頭の古代邑久郡は岡山県南東部の吉井川東岸から兵庫県の県境に至る海岸地帯で、現在の瀬戸内市・備前市・和気町・岡山市の一帯・赤磐市の一部を含む広大な範囲を有し、南部は瀬戸内海に面し海上交通の要所を占めていた。また、恵まれた自然環境により地域の特産品に恵まれて、古代律令体制下で中央の都に運ばれた貢納品の付札としての木簡には邑久郡関係の地名を墨書きしたものが30例と岡山県下でも特に多く出土しているという特色がある。(註11) また、租税としての調の貢納品には備前国では食器類や貯蔵具の上器類が特に多く、中・四国最大規模を有する須恵器生産地である邑久古窯跡群の立地する邑久郡が調の貢納品の土器類を主に担っていたと考えられる。このことは、後に紹介する生産段階の須恵器へ文字が書かれる要因の一つを示すものであろう。

今回の確認調査で1-I号窯跡灰原に設定したトレンチ21から須恵器杯蓋第22図25、杯身第22図26、壺第22図27にヘラ書きによる文字ないし文字と思われる資料が出土した。焼成前の器面が乾燥して硬化する以前に意図的に刻書されたもので、そこには寒風古窯跡群の工房に文字を書くことできる人物や書く必要性があったことを窺わせるもので、寒風古窯跡群の性格を考える上で重要な資料となるものである。ここでは、1-I号窯跡灰原から出土した線刻文字の観察結果と古代邑久郡(現:瀬戸内市)に関連する上器や須恵器陶棺などの陶器に刻書や墨書きされた文字と考えられる資料の紹介を行いたい。

杯蓋25(第22図・第97図13)は1-I号窯跡の灰原から出土した資料で、口縁部を欠き、天井中央部の直径8.4cm範囲をシャープにヘラケズリして平坦部とし、中心部に中央部と周辺部をわずかに高くし、宝珠つまみの面影を残す径3.8cmの扁平なつまみを貼り付けている。横ナデ調整された天井部外面にヘラケズリされた平坦面との境から口縁部にかけて2文字が幅1.0mmの先端が細いヘラ状工具により縦書きで刻書されている。2文字の上端から下端まで大きさは2.8cm、1文字1.5~1.8cm大を測る。また、天井平坦部にはヘラ状工具により長さ約4cmにわたりやや弧を描くヘラ記号状の1条の沈線が施されている。

1字目は明らかに「大」と認められる文字で、1画目の始筆は左上から静かにヘラ状工具をおろし、右方向に直線的に送筆し、終筆はとめにより端部の粘土が盛り上がっている。2画目の始筆は斜め右上から力強くヘラ状工具を入れ、左下方向にやや弧を描くように送筆し、終筆は軽くとめを行う。3画目は1画目と2画目の交点からではなく、交点からやや下に離れた地点から始筆をはじめ、静かにヘラ状工具をおろし、斜め右方向にややかぶせるように送筆し、終筆はとめにより端部の粘土が盛り上がっている。

2字目は楷書体には無い文字であるが、3画目の2ヶ所の屈曲した送筆から「皮」の行書体に近いもので「皮」の文字として解読した。総画は4画で、標準の筆画と比べ、1画目と2画目が異なっている。1画目の始筆はヘラ状工具の先端を斜め左上から静かにおろし、斜め左下方向にわずかに外湾しながら送筆し、終筆はとめにより端部の粘土が盛り上がる。2画目は1画日の下から1/4の線上から右上がり気味に送筆し、途中で左下方向に鋭く折れて、終筆は器面からヘラ状工具を離しはね状に終わる。3画目の始筆はヘラ状工具の先端を斜め左上から静かにおろし、1画目の横線の上では、左方向に大きく屈曲させ、また、1画目の横線の下では右方向に大きく屈曲しながら送筆し、終筆は左下方向にはねにより終わる。4画目は3画目の下端部近くの線と直行する形で始筆はヘラ状工具の先端を真上から静かにおろし、左上から右下へ直線的に送筆し、終筆ははねにより終わる。

杯蓋が製作され焼成前の器面が硬化する以前に刻書されており、刻まれた線の周りやとめ部分には粘土の盛り上がりが明瞭に残っている。また、いずれの刻書も力強く、書きなれた筆跡を窺わせる。

第97回杯蓋12は、杯蓋25が出土する以前は寒風古窯跡群で文字が刻書された資料として亀田修一氏により資料報告がされている。(註12) 出土地点・器種・刻書文字・刻書箇所・時期等すべてが同じであり寒風古窯跡群の性格を考究する上で貴重な資料であるため、再度紹介する。杯蓋12は寒風1号窯跡群の灰原から個人により採集され、口径20.8cm、器高は焼け歪みによるものか天井部は扁平であり約2.0cmを測る。天井中央部の直径7.4cm範囲をヘラケズリして平坦部とし、中心部に中央部と周辺部をわずかに高くし、宝珠つまみの面影を残す径3.8~4.0cmの扁平なつまみを貼り付けている。横ナデ調整された天井部外面にヘラケズリされた平坦面との境近くから口縁部にかけて2文字が幅1.0mmの先端が細いヘラ状工具により縦書きで刻書されている。2文字の上端から下端まで大きさは2.0cm、1文字0.9~1.1cm大を測り、杯蓋25より若干小ぶりな刻書である。2文字の文字・筆順・書体・工具は杯蓋25とまるで同じであり、同一人物が同一工具によって書いたものと考えてよかろう。

杯身26(第22図・第88図14)は1-I号窯跡の灰原から出土した杯部片で、口縁部を外傾し端部を丸くおさめる。底部を欠くが底面に高台を有する「寒風古窯址群」1978分類によるC類となる形態を示すであろう。杯部外面には杯を反転した状態で杯蓋25の工具に比べ非常に先端が細い工具により縦書きで刻書されている。2文字の上端の1字は一部欠けているが下端まで大きさは2.1cm以上。1文字1.7cm大を測る。

1字目は杯蓋12・25と同様に「人」の文字で、1画目の始筆は左から水平に先端の細い工具を入れ、右方向に直線的に送筆し、終筆は破損により確認できない。2画目の始筆は欠くが、斜め右上から左下方向にやや弧を描くように送筆し、終筆は軽くとめを行う。3画目は杯蓋12・25と同様に1画目と2画目の交点からではなく、交点からやや下から始筆をはじめ、静かにヘラ状工具をおろし、斜め右方向に直線的に送筆し、終筆は軽くとめを行う。

2字目は杯蓋12・25で認められた3画目の2ヶ所の屈曲した送筆がない。しかし、他の画はほぼ同じであり、杯蓋12・25と同様「皮」の文字として解読した。総画は4画で、標準の筆画と比べ、1画目と2画目が異なっている。1画目の始筆は細いヘラ状工具の先端を右上から静かにおろし、斜め左下方向に直線的に送筆し、終筆はとめにより端部の粘土がわずかに盛り上がる。2画目は1画目の1/2よりわずかに下の線上から右上がり気味に送筆し、終筆近くで右下に三角形を描く様に屈曲して終わる。また、三角形状の屈曲部の下には弧状の線刻が施されている。3画目の始筆はヘラ状工具の先端を斜め右上から静かにおろし、斜め左下方向に弧を描きながら送筆し、終筆ははねにより終わる。4画目は3画日の下端部近くの線と直行する形で始筆はヘラ状工具の先端を左上から静かにおろし、右下へ緩やかに蛇行しながら送筆し、終筆ははねにより終わる。この4画目を書く前に、同様な刻書がなされていたことが推察される様で、4画目の送筆の中央上部には4画目と平行する刻線が一部認められる。

この杯身も製作され焼成前の器面が硬化する以前に刻書されており、深く刻まれた線の周りやとめ部分には粘土の盛り上がりが若干残っている。刻書は杯蓋12・25と比べ先端の細い工具を使用しているためか、力強さはあまり無く、2字目の「皮」の2画日のやや粗い終筆や4画日の書き直しの筆跡から文字を書き慣れた感じが少なく感じる。杯蓋12・25を刻書した人物とは別人であろうと推察される。

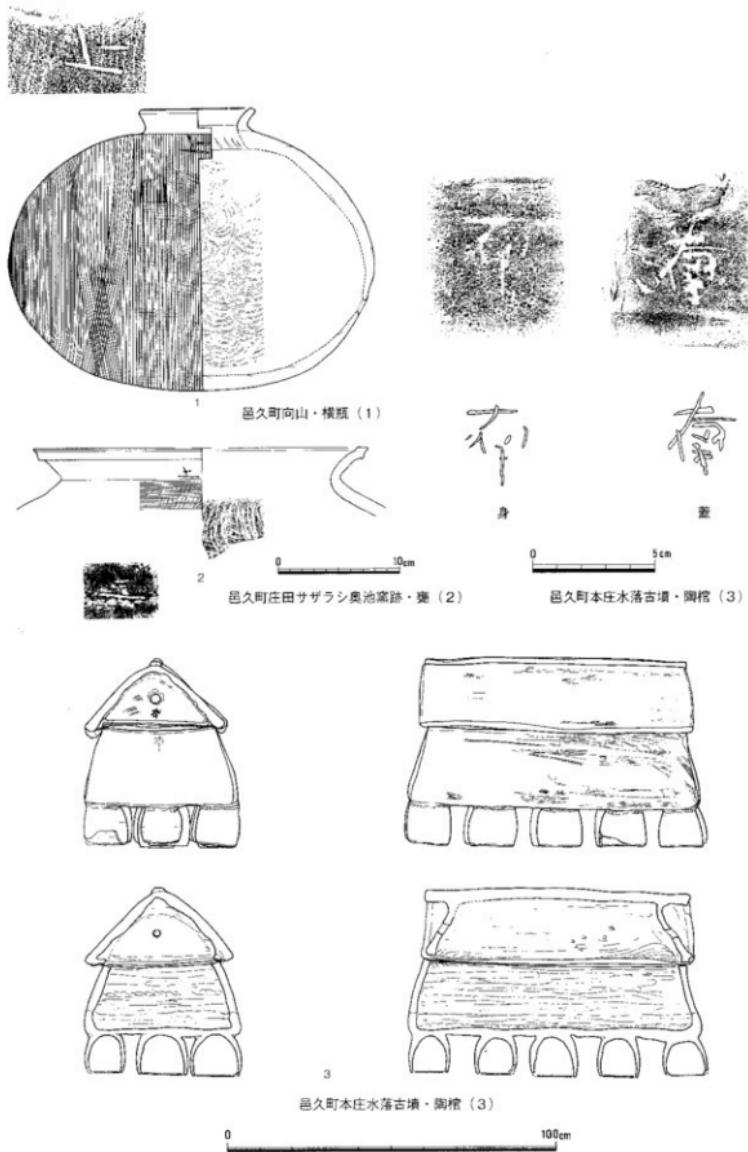
第3表 濑戸内市（旧邑久郡）関連出土文字一覧表

番号	文字（読み）	器種	特徴	時期	出土地（遺跡）	備考（記入部位）	文献
1	上？	須恵器 横瓶	ヘラ書き	7～8世紀	邑久町向山	体部上位外面	(1)
2	ヒ？	須恵器壺	ヘラ書き	7世紀	邑久町庄田 サザラシ 奥池窯跡	口頭部外面	(2)
3	南	須恵器 陶棺	ヘラ書き	7～8世紀	邑久町山手 水落古墳	屍模の表部分と棺身外 面に各1文字	(1) (3)
4	大？	須恵器 壺	ヘラ書き	7世紀	邑久町尻海 三谷窯跡	口縁部内面	(1) (4)
5	大久	須恵器 平瓶	ヘラ書き	7世紀	和気郡和氣町藤野大田 原字藤原の古墳	体部上位外面	(1) (5)
6	大仇	須恵器 平瓶	ヘラ書き	7～8世紀	伝瀬戸内市内	体部上位外面	(1)
7	口東口	須恵器 杯身	墨書	8～9世紀	邑久町尾張 門田遺跡	体部外面	(1)
8	判	須恵器 杯身	墨書	8～9世紀	邑久町尾張 門田遺跡	底部外面	(1)
9	馬群	須恵器 長颈壺	ヘラ書き	7世紀	不詳	体部上位外面	(1) (6)
10	複結縁諸他 大衆安隠長春 為法界衆生 同平等利益 為今也造立如 右啓白 為過去祖父祖 母父母成佛成 現世間自身 夫婦所生男 女平安息災也 依此海諸安 承徳二 年九月廿 五日造立 如法經塔	瓦製 碗形外筒	ヘラ書き	承徳2年 (1098)	邑久町尻海 大土井八 幡宮境内経塚	体部外面	(1) (7) (8)
11	物	須恵器 杯蓋	ヘラ書き	8世紀	長船町西須恵 西谷遺 跡	内面	(9)
12	大皮	須恵器 杯蓋	ヘラ書き	8世紀前後	牛窓町長浜 寒風1号 窯跡群	外面	(10)
13	大皮	須恵器 杯蓋	ヘラ書き	8世紀前後	牛窓町長浜 寒風1 - I号窯跡灰原	外面	

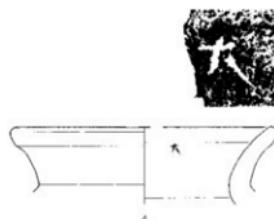
14	大皮？	須恵器 杯身	ヘラ書き	8世紀前後	牛窓町長浜 寒風1- 1号窯跡灰原	外面	
15	上？	須恵器 甕	ヘラ書き	7世紀	牛窓町長浜 寒風1- 1号窯跡灰原	口縁部外面	
16	下？	須恵器 甕	ヘラ書き	7世紀	牛窓町長浜5139 寒風 古窯跡群 1号窯跡群 灰原	口縁外面。 昭和9月11日7時實 黙水氏採集	
17	下？	須恵器 甕	ヘラ書き	7世紀	牛窓町長浜5139 寒風 古窯跡群 1号窯跡群 灰原	口縁外面。昭和15年1 月1日、地表下約1尺 5寸時實黙水氏採集	
18	上？	須恵器 甕	ヘラ書き	7世紀	牛窓町長浜5148 寒風 古窯跡群 2号窯跡	肩部外面。昭和10年2 月8日時實黙水氏採集	
19	上？	須恵器 甕	ヘラ書き	7世紀	牛窓町長浜6024 寒風 古窯跡群 3号窯跡	口縁外面。昭和2月11 月17日時實黙水氏採集	
20	上？	須恵器 平瓶	ヘラ書き	7世紀	牛窓町長浜5148 寒風 古窯跡群 2号窯跡	肩部外面。昭和15年3 月12日ムネトキユウイ チ氏寄贈	

参考文献

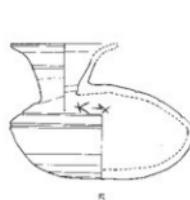
- (1) 岡田一博「文字資料」「邑久町史」考古編 潤戸内市 2006
- (2) 亀田修一「さざらし奥池空路」「邑久町史」考古編 潤戸内市 2006
- (3) 亀田修一「水落古墳」「邑久町史」考古編 潤戸内市 2006
- (4) 中野直美「三谷空路」「邑久町史」考古編 潤戸内市 2006
- (5) 間壁復子「大久」銘の平瓶と二・三の問題」「食文化研究所集報」第19号 食文化研究所 1986
- (6) 伊藤純「岡山県立博物館所蔵の須恵器銘「馬肝」について」「古代文化」第35巻第2号 古代学会 1983
- (7) 今実黙水「承徳二年陶製如意経塔」「吉備考古」第80号 吉備考古会 1950
- (8) 泰良国立博物館編「経塔遺言」東京美術 1977
- (9) 福出正敏「吉谷遺跡」長船町教育委員会 1965
- (10) 亀田修一「寒風空跡群」「牛窓町史」資料編Ⅱ 牛窓町 1997



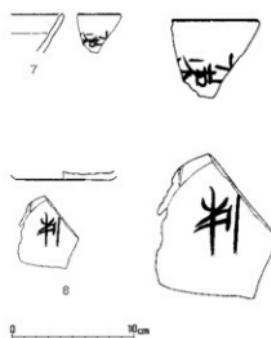
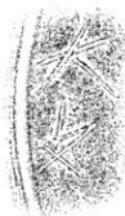
第95図 濑戸内市閻連出土文字資料 1 (1/2・1/4・1/15)



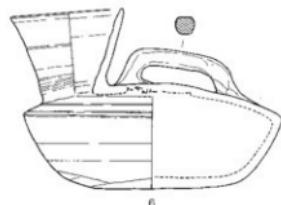
邑久町尻海 三谷窯跡・甕 (4)



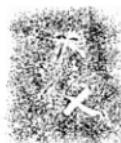
和気町鹿野大田原・平瓶 (5)



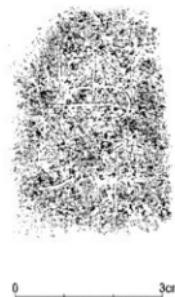
邑久町尾張 門田遺跡・杯身 (7・8)



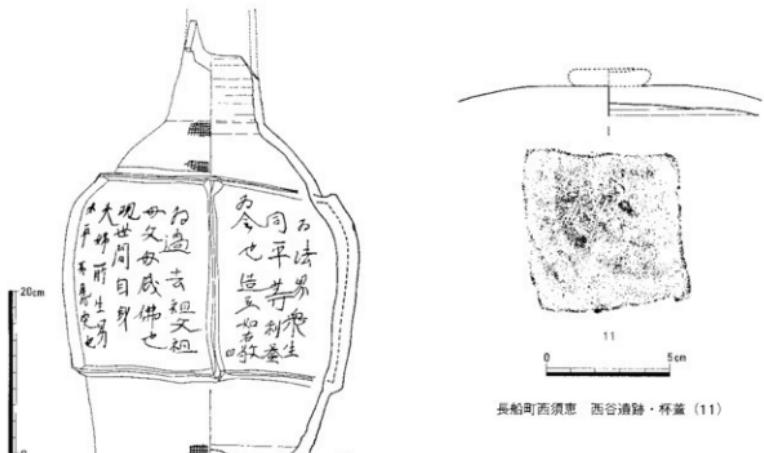
伝瀬戸内市・平瓶 (6)



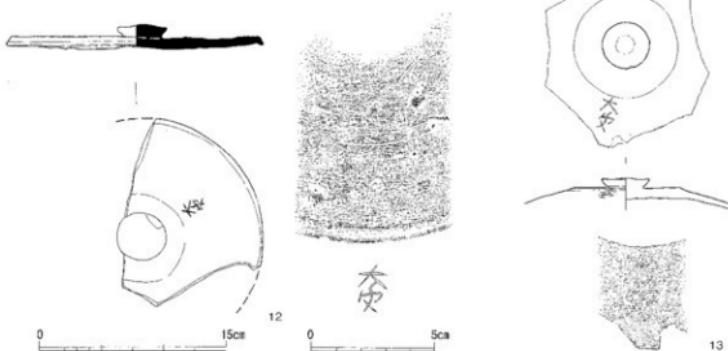
不詳・長頸壺 (9)



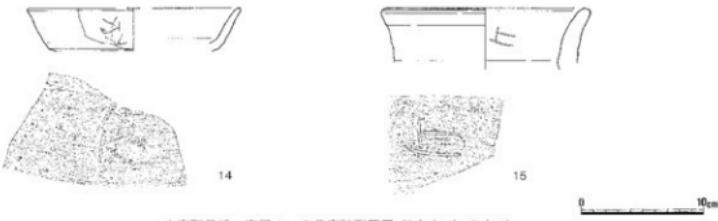
第96図 濑戸内市関連出土文字資料2 (1/4・1/2・1/1)



呂久町尻海 大土井八幡宮境内・砧形外筒 (10)



牛窓町長浜 寒風1号窯跡群・杯蓋 (12)



牛窓町長浜 寒風1~I号窯跡群灰原・杯身 (14)・蓋 (15)

第97図 濑戸内市閏連出土文字資料3 (1/6・1/4・1/2)



第98図 瀬戸内市関連出土文字資料4 (1/2)

第97図杯蓋12・13（第22図25）、杯身14（第22図26）に刻書された「大皮」の読みについて考察する。「大久」や「大仇」とヘラ書きされた平瓶（第96図5・6）は、いずれも邑久郡の地名を表記したと考えられており「オホク」と読まれている。このように漢字2字の熟語の上の字を訓で、下の字を音で読む読み方である「湯桶読み」で「大皮」を読むと「オホハ」と読める。「大皮」の意味について、刻書された須恵器の器種が杯であり杯蓋天井外面を水平にヘラケズリし、中央部に宝珠つまみの面影を残す扁平なつまみを貼り付けているなど丁寧な調整や成形がなされているが、この様に丁寧に製作された杯は、奈良の都への貢納品として生産されたものと考えられ、焼成前の製作過程最終段階において文字を刻書した意義は大きく、そこには從来出土した平瓶の刻書と同様、その製品の生産地である邑久郡か邑久郡内の地名を表記したものと考えるのが最もであると思われる。しかし、「大皮」ないし「皮」の地名については現在のところ特定できず不明である。

古代の瀬戸内市内出土の土器を中心とした、ヘラ書き、墨書き文字資料については、岡田博氏により10例が紹介されている。（註13）その内訳はヘラ書き8例、墨書き2例である。これらの資料は『邑久町史』という邑久町出土資料に限定された集成であったため、今回の寒風古窯跡群からの文字資料の出土須恵器や時實黙水氏による拓本集からの資料を含め、瀬戸内市内全域での文字資料を集成してみた。表3に掲げるよう20例の文字ないし文字と思われる資料が集成された。その内訳はヘラ書き18例、墨書き2例である。以下、岡田博氏により集成されなかった資料について紹介する。

第97図の11は長船町西須恵の西谷遺跡のNo.17掘立柱建物周辺から出土した須恵器杯蓋片である。天井部のつまみを欠くが、C類に分類される杯の扁平なつまみが貼り付けられていたと推定される。内面中央寄りに「人」と「勿」を合わせた1字が刻書されている。報告書では「物」と記述している。

第97図の15・第98図の16～20は寒風古窯跡群から出土及び採集された須恵器に刻書された資料である。第97図の15は寒風1-1号窯跡の灰原から出土した壺で、短く外反する口縁部のみの破片である。焼け歪みにより変形している。口縁内面に幅1.0mmのヘラ状工具により1.5～2.2cm大の大きさで右にやや傾いた状態で「上」と思われる1字が刻書されている。各画の切り合い関係がなく筆順については不明であるが、1画目の終筆は軽くとめを行うが、2・3画目の終筆ははねにより終わる。1・3画目はやや弧を描く。第98図の16～20は時實黙水氏により採集された須恵器のヘラ記号の拓本から「下」「上」と思われるヘラ書きである。16は1号窯跡群灰原で採集された壺の口縁で、外面に「下」と思われるヘラ書きが施される。2画目の終筆は軽くとめを行うが、1・3画目の終筆ははねにより終わる。2画目はやや弧を描く。17は1号窯跡群灰原で採集された壺の口縁で、外面に「下」と思われるヘラ書きが施される。各画目の終筆ははねにより終わる。18は2号窯跡で採集された壺で、口縁部が外方に開き、肩部に1条の沈線を有する。口縁寄りの肩部外面に「上」と思われるヘラ書き

が施される。2画目は1画目の縦線に接すことなく離れている。**19**は3号窯跡で採集された壺で、「く」の字に外反する口縁外面の先端の細いヘラ状工具により「上」と思われるヘラ書きが施される。2画目は1画日の縦線に接している。**20**は2号窯跡で採集された平瓶で、口縁部近くの肩部外面に「上」と思われるヘラ書きが施される。**18**と同様、2画目は1画日の縦線に接すことなく離れている。

以上、寒風古窯跡群出土遺物を中心として刻書による文字資料について紹介してきた。**12~14**の2字による刻書についてはまず文字資料と考えられるが、寒風古窯跡群の資料では**15~20**、また、邑久町向山出土の横瓶**1**の「上」、邑久町庄田サザラシ奥池窯跡出土の壺**2**の「上」、邑久町尻海三谷窯跡出土の壺**4**の「大」については、当初から文字を意識して書いたものか、基本的に直線の組み合わせにより結果的に文字状を呈したものか不明である。須恵器窯跡から出土する資料の中にはヘラ状工具による直線を基本に1~3本の線刻を組み合わせて、現代の陶芸作家・窯元のヘラによる陶印と似た「ヘラ記号」と呼ばれる線刻が認められるものがあり、このヘラ記号が見掛けで文字状を呈した可能性もあると考えられる。このため、表3の訛讀では1字のみ刻書された文字の後に?を付けている。

ヘラ記号が施される器種の位置は口縁部の内外面であったり、肩部や底部である。施される工程の最終段階の関係もあるが、ヘラ記号はほとんどの器種が置かれた状態で確認できる位置に施されている。**12~13**においてもヘラ記号同様に置かれた状態で文字を確認することができる。ここに何か文字・ヘラ記号を記した意味があり、記した物の意図があったと思われる。特に文字については、寒風古窯跡群の工房へ文字が書ける人物がいたか、役所から派遣された人物により杯に文字が書かれたものと考えられる。7世紀後半以降、陶硯・鶴尾・陶馬などの新しい品目の生産が始まることから、寒風古窯跡群が邑久古窯跡群の一地方窯から、中央の政策に伴い半官窯としての性格を帯びていることを窺わせる資料である。

なお、寒風古窯跡群出土の刻書文字について奈良文化財研究所名誉研究員狩野 久氏、花園大学文学部講師古市 見氏から御助言をいただいた。

3 楕円形當て具痕

甕は製作段階で粘土紐の巻上げの接合や粘土中の気泡を出すため、また、器形の成形のため外面に平行線文や格子文を施した叩き板による叩きと、内面には外面の叩きの際の當て具として無文ないしは同心円文を施した木製ないしは陶製の當て具が使用され、甕の成形を特徴付ける文様を残している。

この内面の同心円文の當て具痕の内、中央圈内や中央圈外を超えて「車輪」「星」「太陽」を想定する放射線状の文様が施されている甕がある。この文様を一般に「車輪文」と呼んでいる。車輪文の起源について考究した横山浩一氏によると『須恵器内面叩き目文の一種である車輪文は、木材の年輪をモデルにした同心円文と木材の亀裂をモデルにした放射状文とを組み合わせたもので、全体として木材の木口面の特徴を表現したものである。』と結論付けた。(註14) 車輪文を有する甕は邑久古窯跡群や瀬戸内市内の遺跡からも少なからず出土している。「牛窓町史」資料編Ⅱには平田窯跡・古市村窯跡の2カ所の窯跡から出土した車輪文が紹介されている。(註15) また、長船町地内(現:瀬戸内市長船町地内)では花尻南窯跡群・青木1号窯跡・佐府池上2号窯跡・五郎ヶ市池窯跡・亥子田谷窯跡・北谷窯跡・蓮池下池窯跡の7カ所の窯跡から20点の車輪文が出土している。その中で、佐府池上2号窯跡と亥子田谷窯跡の車輪文の類似から同一の當て具による使用が指摘されている。(註16) また『邑久町史』考古編では佐井田谷窯跡・構谷窯跡・広高窯跡・サザラシ奥池窯跡・サザラシ中池窯跡・工田窯跡・切明窯跡・本庄六池窯跡の8カ所の窯跡から出土した車輪文が紹介されている。(註17)

寒風古窯跡群の車輪文については時實黙水氏により注目されており昭和9年の段階で8種類の分類をし(註18)、また、時實黙水氏が吉備考古館へ出品した遺物カードについて再調査した松本幸男氏により16種類の車輪文が紹介されている(註19)。今回の確認調査の際にも數十点に及ぶ車輪文が出土しており、さらに寒風古窯跡群出土資料には多種多様な車輪文があることが分かった。車輪文の紹介について別の機会に譲り、今回の調査で甕内面の當て具痕に同心円文以外に楕円形を呈し、楕円形の中央圈内に格子や条線を施す資料が、1号窯跡群灰原・1-Ⅲ号窯跡・2号窯跡・寒風古墳から出土した。非常に特徴的であり、今後消費地での同資料の出土により供給先や流通圏を知る手がかりとなる資料となるものである。以下、楕円形當て具痕の観察結果について報告する。

まず、第1節1号窯跡群の調査概要でも分類したが、楕円形當て具痕の中央圈内の文様により(A・B)2つのタイプに分類する。Aタイプは當て具面に少なくとも3重以上の楕円形を刻み、中央圈内に楕円の長軸方向に平行して2条、短軸方向に平行して3条を刻み、あたかも3列×4列の計12個の格子を施すタイプである。Aタイプの當て具痕を有する資料は、1-Ⅰ号窯の主軸延長上の灰原に設定したトレンチ21北側の灰原で表探した第23図の28・29(図版18-2)である。また、第66回の261~271(図版25-1)は、本米寒風古墳横穴式石室の床面に須恵器床として使用されていたものが、盗掘により搅乱を受け横穴式石室の埋土に包含されたものである。Aタイプの當て具痕について時實黙水氏も注目しており、黙水氏により発掘され吉備考古館保管の資料の中に2点認められる。(図版19-a・b)1点目(a)は甕外面に「イツベ621 昭和14・6・24 オクグンナガハマムラ サブカゼ5139カマアト ウチガワニダエンノナカニ コウシノウチカタアリ (3重楕円形の中央に2条×3条の格子の図を描く)コノ種ノ打痕トシテワ 最初ノ発見ナリ」と註記し、1号窯跡群灰原からの出土品であることが分かる。黙水氏もこの種の當て具痕は初めて確認したもので、註記と共に當て具痕の図を記している。2点目(b)は外面に「昭和十四年八月十五日 岐久郡長浜村寒風五一三九 地表下約二尺五寸」と註記し、1点目と同じく1号窯跡群灰原からの出土品である。

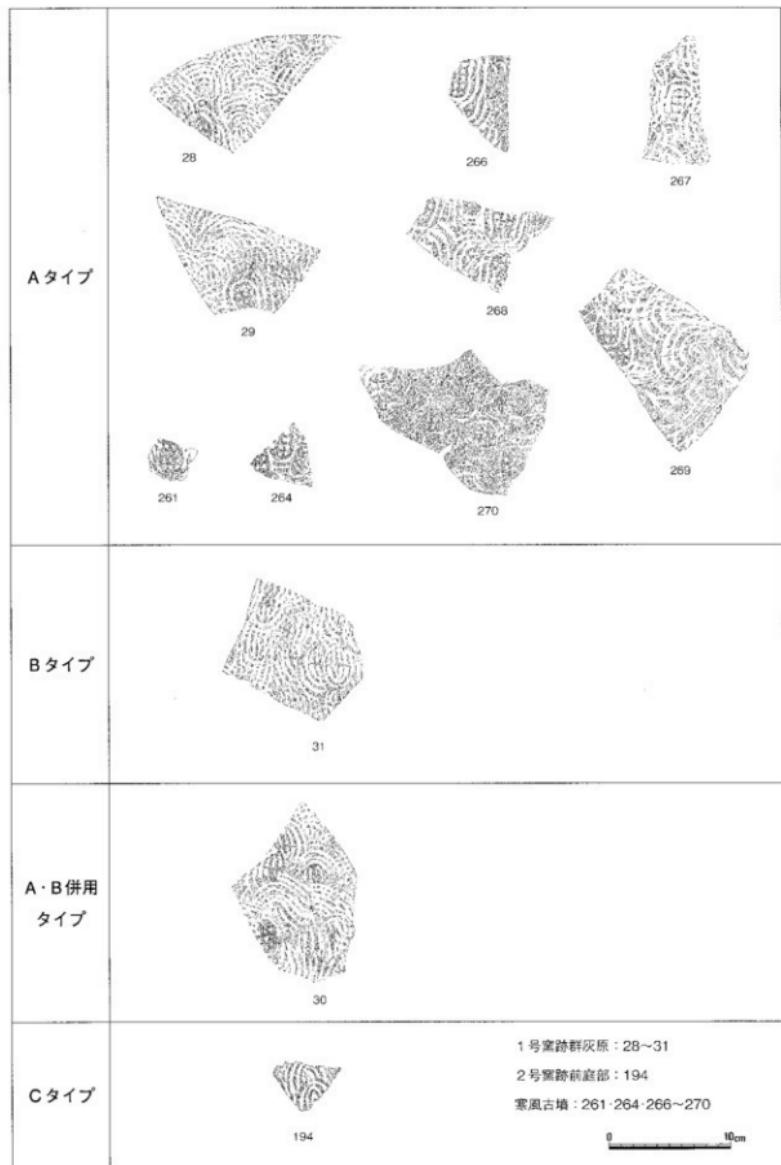
Bタイプは當て具面に3重以上の楕円形を刻み、中央圓内に楕円の長軸方向に1条の直線の刻線と刻線の左右を弧線2条により包み木葉状の線刻と、短軸方向に木葉状の線刻を串刺しする様に1条の直線を施すタイプである。Bタイプの當て具痕を有する資料は、1-I号窯の主軸延長上の灰原に設定したトレンチ21北側の灰原で表探した第23回の31（図版18-2）である。Bタイプの當て具痕も時實黒水氏により採集されており吉備考古館に3点保管されている。（図版19-c～e）1点目（c）は外面に『サブカゼフツツイケ 昭和5・9・10 イツベ13號』と註記している。ツツイケは寒風1号窯跡群の灰原西にある寒風池と寒風池の南西下にある池の2カ所を表すものであり、1号窯跡群灰原からの出土品であると推察される。2点目（d）は甕外面に『イツベ622（3重楕円形の中央圓を太く描き、2重目の短軸中央に1条の線を引く圖を描く）昭和十四年十月六日 邑久郡長浜村寒風五一三九 コノ内面内文ワ種ナリ』と註記し、1号窯跡群灰原からの出土品であることが分かる。3点目（e）は外面に『昭和十四年十月一日 邑久郡長浜村 寒風五一三九 此内側ノ打痕 ワ最初の 発見ナリ』と註記している。この甕も地番から1号窯跡群灰原からの出土品であることが分かる。資料（e）が発見された昭和14年の段階ですでに資料（c）は9年前には出土しており、黒水氏のBタイプの認識時期にズレが生じている。

A・Bタイプの2種類の當て具は基本的に同一個体に1種類の當て具を使用しているが、第23回30（図版18-2）はA・B両タイプの當て具痕を確認することができる。横山浩一氏は器面に残された叩き目から須恵器工人が複数の叩き締め道具を使用し、加工部位により道具を使い分けたことを推定している。（註20）のことから、30の内面でも加工部位の違いによりA・B両タイプの當て具が使用されたことを示すものであろうか。

A・Bタイプの2種類以外に、黒水氏は「上器ト窯址ニ就テ」（註18）の中に、3重楕円形で中央圓内が無文の當て具痕（Cタイプ）。3重楕円形の中央圓の長軸に1条を施す當て具痕（Dタイプ）。3重楕円形の中央圓の長軸中央部に平行する2条を施す當て具痕（Eタイプ）の存在を報告している。D・Eタイプとも実見していないので存在の有無については不明であるが、Cタイプの當て具痕については2号窯跡前庭部のトレンチから194（第52図）が出土している。

楕円形當て具痕を有する甕の時期について出土遺構や地点、共伴遺物から検討してみる。28～30は表探資料であるが、3基から成る1号窯跡群により形成された灰原でも1-I号窯跡寄りの灰原からの表探であることから1-I号窯跡で焼成された甕であると推察される。1-I号窯跡焼成部で天井部中央部に基石状の扁平なつまみを付け、口縁部の受け部にかえりを持たない杯蓋と「ハ」の字状に短く張り出す高台を有する杯身でいずれもC類で寒風3式に編年されるものである。また、平坦な底部から口縁部に向かい内湾しながら開く形態を有する杯身で、今回D類と分類し寒風2式に編年した遺物が出土した。さらに、鶴尾や円面鏡などの特殊な製品の焼成が行われ、寒風古窯跡群で最後まで須恵器生産が行われた窯であることが判明している。261～271は寒風古墳横穴式石室の床面に須恵器床として使用されていたものと考えられる甕片²¹で、横穴式石室の床面に残された杯蓋1点、杯身2点はいずれもC類に分類される寒風3式に編年される遺物と共伴している。時實黒水氏により発掘され出土した（a～e）の甕は註記からいずれも1号窯跡群の灰原から出土している。以上のことから、楕円形當て具痕を有する甕は1-I号窯跡で7世紀後半から8世紀初頭に焼成されたことが推察される。

今後、同じ當て具痕を有する甕が他の集落遺跡や古墳などの消費地で出土した場合、甕の流通関係や時期を考究する上で貴重な特徴を示す資料となるであろう。



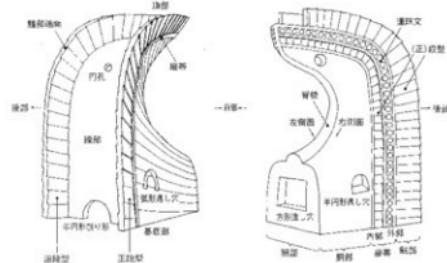
第99図 横円形當て具痕集成図（1/4）

4 鶴尾

寒風古窯跡群を特徴づける遺物として鶴尾がある。鶴尾は中国や周辺諸国で、古代建築の大棟を飾る棟飾りとして使用された瓦である。その起源については中国の漢代以降、大棟の両端を強く反り上げる傾向が見られ、吉祥と魔除けの象徴である鳳凰の翼が結びつき、鶴尾が生み出されたとの説がある。日本には、飛鳥時代に仏教文化の瓦の技術とともに、朝鮮半島南西部にあった百濟を経由して伝わり、寺院の主要な建物にまず使用され、後には宮殿建築にも使用された。(註11) 邑久古窯跡群で鶴尾が出土した窯跡は切明窯跡(瀬戸内市牛窓町長浜・邑久町尻海)、新林(官崎)窯跡(瀬戸内市邑久町庄田)、大城谷南窯跡(備前市佐山)と寒風1-I号窯跡、寒風2号窯跡(註22)を合わせて5基のみである。

寒風古窯跡群からは時實默水氏により200点に及ぶ鶴尾が採取されており、ほとんどの鶴尾は吉備考古館へ保管されている。昭和55年(1980)奈良文化財研究所飛鳥資料館の特別展示「日本古代の鶴尾」の開催に合わせ、展示品を中心に全国的に調査・集成され図録が編纂された。この中で、寒風古窯跡群から出土した鶴尾の鰐部の文様を指標として大きくA~Dの4型式に分類され、さらにその文様細部の違いによりA型式2種類、B型式6種類、C型式7種類、D型式1種類と4型式16種類に細部された。(註21)

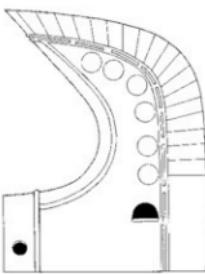
今回の確認調査において、T31の1-I号窯跡の焚口、T32の1-II号窯跡上層埋土、寒風古墳横穴式石室外から多くの鶴尾が出土した。その中で、飛鳥資料館図録「日本古代の鶴尾」で分類された以外の鶴尾が出土していた。ここでは「日本古代の鶴尾」の分類内容に一部文章を追加し復元図とともに再録し、また、昭和5年に默水氏により採集されていたが、今回の1-I号窯跡の調査で同一型式として新たに確認した文様タイプを追加して鶴尾分類を行った。第104~110図には時實默水氏により採集された鶴尾の拓本(註23)、時實コレクションとして寒風陶芸会館へ展示されていた鶴尾、今回の確認調査で出土した鶴尾を型式分類し集成した。



第100図 鶴尾部分名称(文献3)

A型式(鰐部を正段型とするもの)

A-1 全面を格子叩きした上に、幅約7~10cm幅の鰐部上縁部を浅く正段に削り出し段型とし、縹帶は断面方形の突帯を2条貼り付け、約15cm間隔で2条の縹帶間を粘土塊で継ぐ。胸部は無文であるが、縹帶の内側に最大径11cmの粘土円板を片面7枚貼り付ける。その下方には半円形の透し穴がある。脊稜部左右には2条の突帯を貼り付ける。全高を復元すると120cm以上はあると考えられる。粘土円板は西播磨地域の古代寺院で使用された鶴尾の縹帶部分に飾られる蓮華文の変形と考えられるものである。

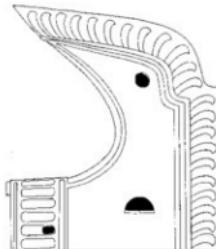


第101図 (A-1)復元図(文献3)

A-2 段型は沈線による線刻に近く、より形骸化している。

B型式 (鱗部を簾手状の段型とするもの。寒風古窯跡群生産の鶴尾の一つの特色。一般に薄手で、鱗部内面には文様をつくらず、腹部からの鱗の出が10cm前後と小さいことである。全形を復元し得る資料に乏しいが、いずれもやや小型の鶴尾であると考えられる。)

B-1 簾手文様のオリジナルと考えられるもので、文様を独立して面違いにしながら、全体として正段型を構成するという卓抜な意匠である。鱗部の前後を断面方形の突帯で挟み、胴部は無文である。外面はすべて丁寧にヘラ削りする。この型式では最も先行すると考えられる。



B-2 B-1と同様の意匠によりながらも、まず均等に弧状の段型を削り出して、それを2つずつ継ぐという機械的な手法に変化している。鱗部に削り残す突帯には格子叩き日の跡が残る。

B-3 先端を丸めた均一な段型の連続文様である。鱗端部は 第102図 (B-2)復元図(文献3) 稲を丸く落として仕上げる。格子叩き日の上をヘラ削りしている。縦帯は2条の突帯であらわす。

B-4 段型先端の巻き込みが弱くなり、接続しない波状文様となる。鱗端は丸く仕上げ、格子叩き目が多く残る。

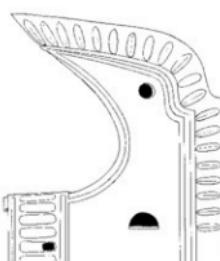
B-5 段型というよりも籠を斜めに当てた沈線に近く、その線も力を失って、単に直線に円弧を付加したような形である。鱗端に稲を残し全面をヘラ削りで調整する。

B-6 段型が波状にうねり、全く任意の曲線となる。ヘラ描きの部分以外は格子叩き日の跡が外全面に残る。

B-7 格子叩き日を施す面に、単に山形の沈線を施すのみであり、最末期にあたるものであろう。

C型式 (鱗部に段型をつくらず、文様を印刻して並べるもの。寒風古窯跡群の主要作品といってもよく、形が一定で、しかも文様にさまざまなバリエーションがある。)

C-1 伸びのある葉状文を5cm間隔で比較的密に配する。縦帯は断面方形の突帯を2条貼りつけ、葉状文が縦帯に付着するものが特色である。葉状文は輪郭を内側から斜めに削り取って、中央部に平坦な部分を残す。外面はヘラ削りであるが、内面には格子叩き日の痕跡が残る。



C-2 やや角ばった葉状文が縦帯にわずかに触れる程度に配され、文様中央にはしのぎが付く。接合可能な大破片があり、全体の意匠を復元し得る。全高約140cm、基底部前後長さ122cm。鱗部は縦帯にならって肩のあたりで段差が付くのが外形の特徴となる。縦帯は幅2.5cmの断面方形の突帯を2条並行して貼り付け、変曲部で段差を付

第103図 (C-2)復元図(文献3)

ける。胸部は無文で、基底から26cmの高さを底面とする。径17cmの半円形透かし穴がある。背面も無文と考えられる。頭部には格子状に突帯を貼り付けて巡らし、さらに前後を突帯ではさむ。頭部端面は上方中央に庇状に長さ21cmの突帯を貼り付け、大棟とのなじみをよくしており、下端中央には幅27cm、高さ19cmの弧状の割り形がある。外形は放物線に近く、基底幅67cm、高さ42cmである。腹部は無文で、やはり下端中央に縁取り形が一部残る。鰭部内面も無文で、鰭部端面は中央で縦方向に段差をつけ、外側を突出させる破片もある。内面には同心円文の当て具痕を一部に残すが、眼に触れる面はすべて刷毛目が残り、丁寧に調整されている。全体としてはいかにも独特の大膽な意匠で、高さに比して前後長さが大きい点も重厚な感を与える。

C-3 意匠はC-2によく似るが、この葉状文は綾帯から遊離したり、しのぎがなくなつて底面が平坦になる傾向がある。外面全体に格子叩き目が残るのが特徴である。

C-4 形や文様構成、調整などはC-3に良く似るが、鰭部の文様が短冊状になる。やはり中央にしのぎがあり、文様中ほどで輪郭がねじれるという独特なものである。綾帯の段差の前方に、径9cmほどの円孔があるのが注目される。

C-5 鰭の段差の部分から、下の2つが葉状文、上の短冊文と両者を併用している。段差の上下で使い分けたものであろう。斜格子の叩き目が残る。

C-6 おそらくB形式の蕨手状文様を採用している例である。これにも、段差の上にかろうじて短冊文を残している破片があり、併用の例である。斜格子の叩き目が残る。

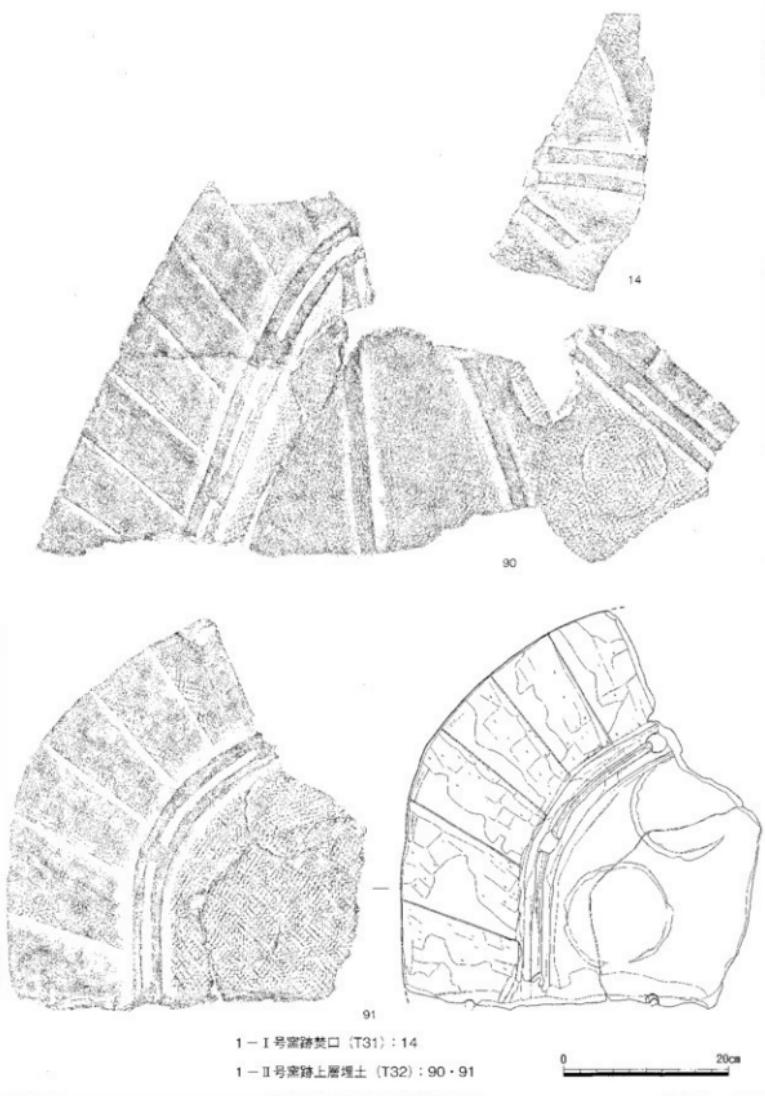
C-7 B型式の蕨手状文様を採用したものであるが、段型をつくらず蕨手状文様を印刻していることからC類として今回新たに設定した型式である。鰭部の文様や綾帯・脊綫部側面の突帯はすべてヘラ状工具による沈線やケズリを施すことにより表現している。鰭部は2条の沈線で区画された18.5cmの幅の中にヘラ状工具により右側面は蕨手を右方向に、左側面は蕨手を左方向に下線として細く描きさらに、蕨手部のみ対になるよう下線を細く描く。そして下線の2つの蕨手と軸部を断面「V」字状にヘラ状工具によりケズリ取る。この二股となった蕨手を連続して文様を施す。綾帯は2条の沈線、脊綫部側面の突帯は1条の沈線で表現している。綾帯の下には約3.5cmの円孔を施す。外面は格子タタキ後全体に斜め下方に向へラケズリを施す。内面は同心円文の当て具痕後ナデを施す。鰭部の先端部は斜めであり周間にヘラケズリを施す。

D型式（無文の鶴尾）

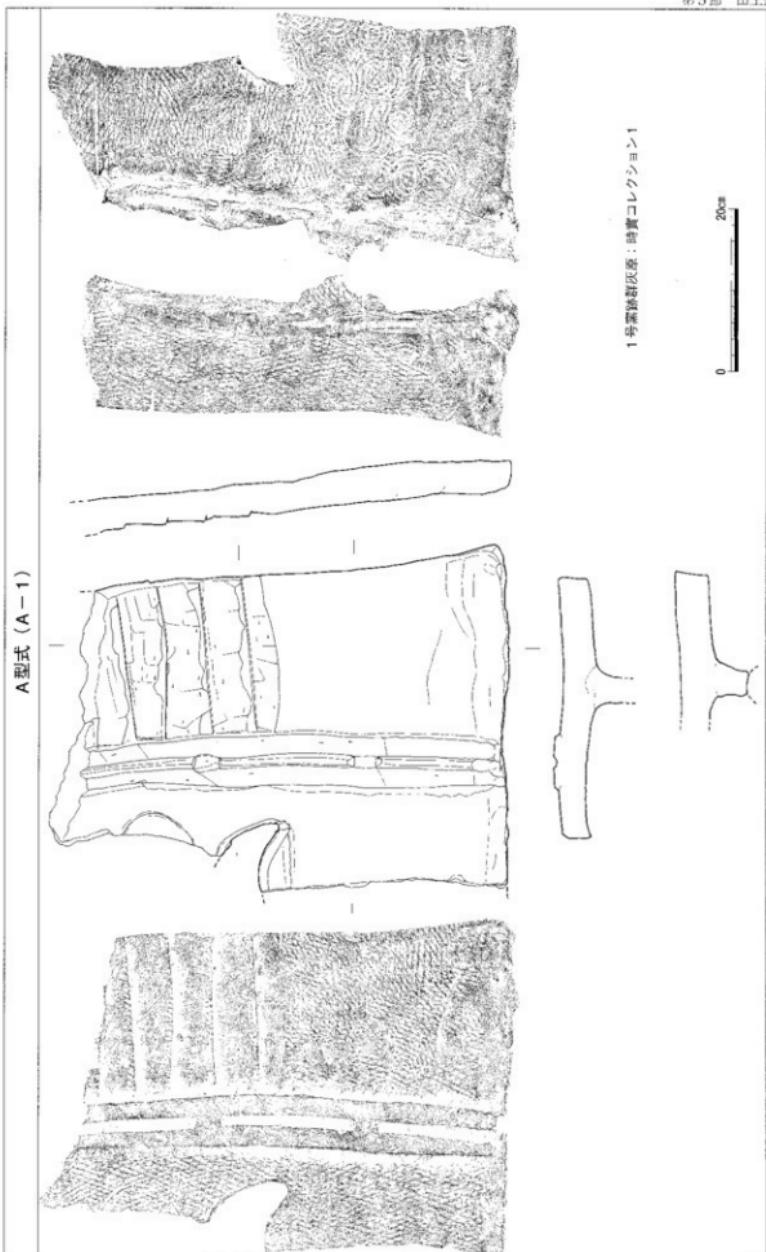
全高は約125cm、腹部からの鰭の出は9cmで鰭部は外に開き、鰭内面と腹部外面は一体の曲面になる。左右鰭部の端面部の距離は上方で42cm、基底部を復元すると70cmと、かなり上方ですばまる。腹部下端には復元幅10cm、高さ8cmの弧状の割り形がある。ゆるやかなカーブを持つ鶴尾であったと考えられる。外面はヘラ削りで調整する。

寒風古窯跡群で出土した鶴尾の鰭部に文様のうちB型式の蕨手状文様を段形に削り出して構成するものやC型式の葉状文様を1枚ずつ削り出し構成するものは、寒風古窯跡群の独特な文様である。しながら、その型式は4型式17種類に及び、他の窯跡では類を見ない程の多種多様の鶴尾が製作され

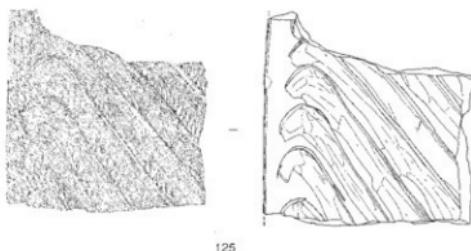
A型式 (A-1)



第104図 寒風古窯跡群出土鶴尾集成図 1 (1/6)



B型式 (B-3)



寒風古墳群穴式石室外：279

B型式 (B-5)



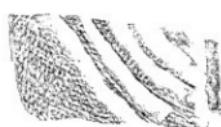
2

1号窯跡群灰原：時寶コレクション2

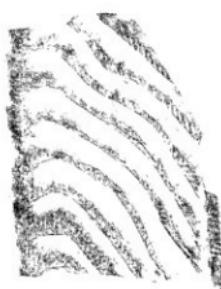
B型式 (B-6)



3



4



5

1号窯跡群灰原：時寶コレクション3～5

0 20cm

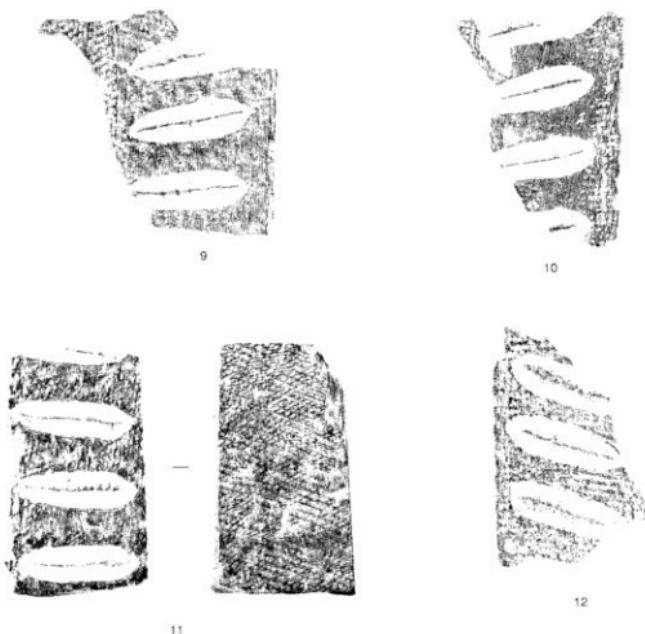
第106図 寒風古墳群出土鶴尾集成図3 (1/6)

C型式 (C-1)



1号窯跡群灰原：時寶コレクション 6~8

C型式 (C-2)

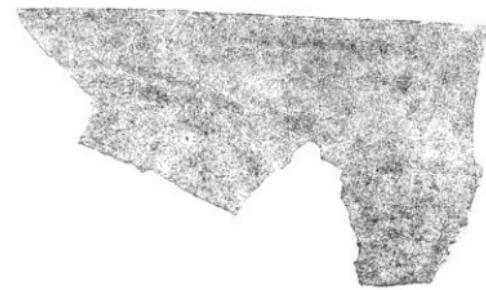


1号窯跡群灰原：時寶コレクション 9~12

0 20cm

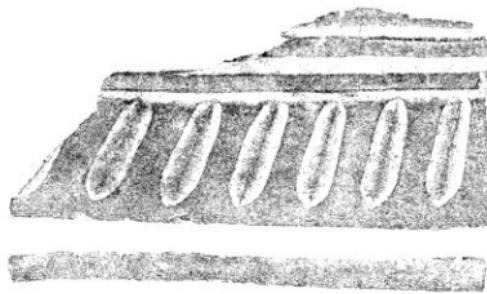
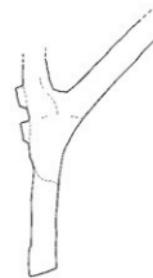
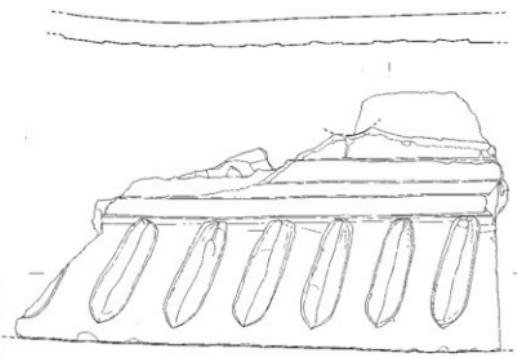
第107図 寒風古窯跡群出土鶴尾集成図4 (1/6)

C型式 (C-2)



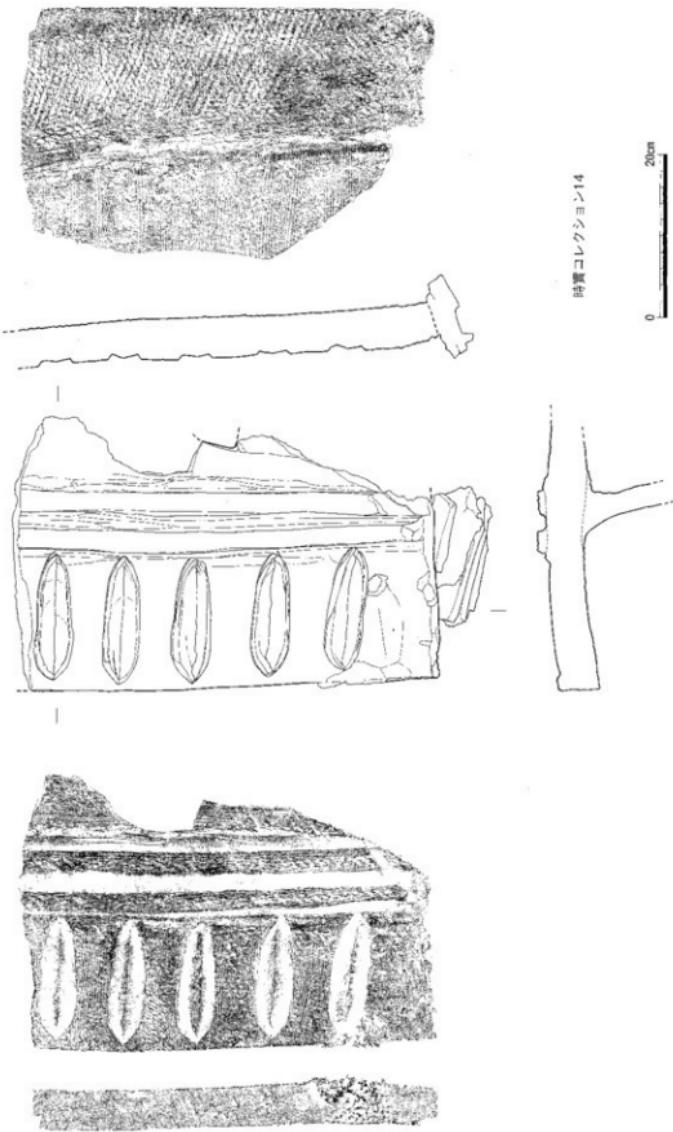
時賀コレクション13

20cm



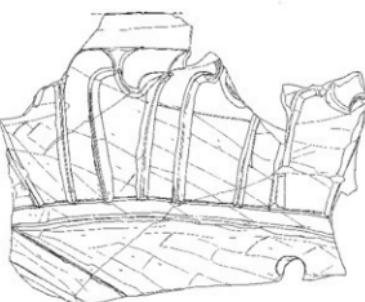
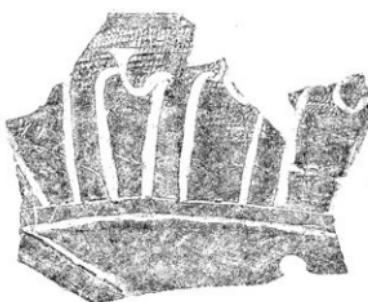
第108図 美里古窯跡群出土動尾集成図5 (1/6)

C型式 (C-2)

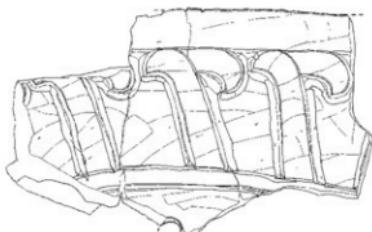


第109図 寒風古墳群出土鏡尾集成図6 (1/6)

C型式 (C-7)



11



12



13



15

1 - I号窯跡焚口 (T31) : 11~13

1号窯跡群灰原: 時寶コレクション15

0 20cm

第110図 寒風古窯跡群出土鶴尾集成図 7 (1/6)

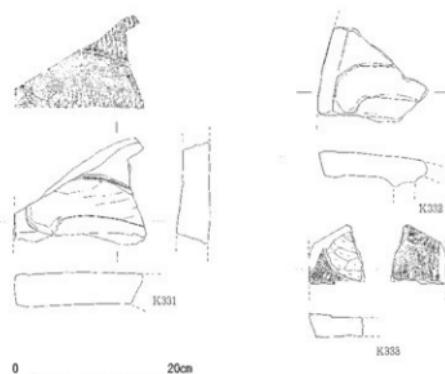
ている。このように、文様に様々なバリエーションがあることや、窯詰め状態で鷲尾が出土した滋賀県山ノ神遺跡4号窯跡（新）の例（註24）からも1回の焼成で大量的鷲尾が焼成されたとは考えられず、製作毎に前回焼成した鷲尾とは文様が異なる鷲尾が製作されていったと考えざるを得ない。

それでは、この多種多様の鷲尾はどこの寺院へ供給されていったのであろうか。岡山県内では岡山市貴田廃寺跡から文様の先端が篆手状文を削り出し正段型に配するB-2型式と陰刻による篆手文を施すC-6型式に酷似した鷲尾が出土している。（註25）（第111図）白鳳期の7世紀後半の製作年代が考えられている。また、香川県の高松市片山池1号窯跡や寒川町極楽寺跡から縫部に先端を丸めた均一の段型が連続するB-3型式に酷似する鷲尾が出土している。香川県の場合、製品の供給とみるか、工人の移動・製作とみるか議論の分かれることである。（註21）さらに、百濟王氏の氏寺「百濟尼寺」と考えられている大阪府細工谷遺跡から寒風古窯跡群のC-1型式の葉状文の中心にしのぎ状の沈線を施すタイプで寒風古窯跡群から北東約1kmに位置する新林（宮崎）窯跡出土の鷲尾（第5図）に酷似した鷲尾が出土している。鷲尾の蛍光X線分析法による胎土分析の結果、細工谷遺跡出土の鷲尾が新林（宮崎）窯跡を含めた寒風古窯跡群周辺地域の窯で製作され運ばれた可能性が証明された。（註26）今後、理化学的な手法により寒風古窯跡群から供給された鷲尾の証明は、寒風古窯跡群の性格や政治的背景の考究する上で貴重な資料となるであろう。

（馬場）

註

- 西川宏「備前における須恵器の繩年の研究－古墳時代－」『岡山県私学紀要』（2）岡山県私学協会 1966
- 西川宏「衆業」、（5）瀬戸内「日本の考古学」IV歴史時代（上）河出書房新書 1967
- 西川宏「備前の古窯」『古代の日本』第4巻 中国・西國 角川書店 1970
- 岡嶽忠彦「備前の古窯」『古代の日本』第4巻 中国・西國 角川書店 1970
- 山野康平「寒風古窯跡群」「岡山県埋蔵文化財発掘報告」27 岡山県教育委員会 1978
- 山野康平「七、八世紀の須恵器」『吉備の考古学－古備世界の盛衰を追う－』福武書店 1987
- 伊藤晃「古代窯業生産」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987
- 伊藤晃・山野康平「岡山県（瀬戸内中郡）の7世紀の土器」『日本土器辞典』雄山閣 1996
- 亀田修一「山陽・丁須窯跡集成図録」第5巻 西日本編 雄山閣出版 1996
- 杯Bと分類した中でつまみが宝珠状を呈する1点は、今回B類に分類した寒風1-Ⅲ式（古）であり、今回「I・II式」からは除く。岡田博「土橋窯跡」「益久町史」考古編 瀬戸内市 2006
- 狩野久・古市亮「第1章古代『益久町史』史料編（上）」瀬戸内市 2007
- 亀田修一「寒風古窯跡群」「牛窓町史」資料編 II 牛窓町 1997
- 岡田博「文字資料」「益久町史」考古編 瀬戸内市 2006
- 横山浩一「須恵器に見える亨輪文印き目の起源」『古代技術史叢』岩波書店 2003



第111図 賞田廃寺跡出土鷲尾（1/6）（文献4）

B-2型式と陰刻による篆手文を施すC-6型式に酷似した鷲尾が出土している。（註25）（第111図）

白鳳期の7世紀後半の製作年代が考えられている。また、香川県の高松市片山池1号窯跡や寒川町極

楽寺跡から縫部に先端を丸めた均一の段型が連続するB-3型式に酷似する鷲尾が出土している。香

川県の場合、製品の供給とみるか、工人の移動・製作とみるか議論の分かれることである。（註21）

さらに、百濟王氏の氏寺「百濟尼寺」と考えられている大阪府細工谷遺跡から寒風古窯跡群のC-1

型式の葉状文の中心にしのぎ状の沈線を施すタイプで寒風古窯跡群から北東約1kmに位置する新林

（宮崎）窯跡出土の鷲尾（第5図）に酷似した鷲尾が出土している。鷲尾の蛍光X線分析法による胎

土分析の結果、細工谷遺跡出土の鷲尾が新林（宮崎）窯跡を含めた寒風古窯跡群周辺地域の窯で製作

され運ばれた可能性が証明された。（註26）今後、理化学的な手法により寒風古窯跡群から供給

された鷲尾の証明は、寒風古窯跡群の性格や政治的背景の考究する上で貴重な資料となるであろう。

（馬場）

註

- 西川宏「備前における須恵器の繩年の研究－古墳時代－」『岡山県私学紀要』（2）岡山県私学協会 1966
- 西川宏「衆業」、（5）瀬戸内「日本の考古学」IV歴史時代（上）河出書房新書 1967
- 西川宏「備前の古窯」『古代の日本』第4巻 中国・西國 角川書店 1970
- 岡嶽忠彦「備前の古窯」『古代の日本』第4巻 中国・西國 角川書店 1970
- 山野康平「寒風古窯跡群」「岡山県埋蔵文化財発掘報告」27 岡山県教育委員会 1978
- 山野康平「七、八世紀の須恵器」『吉備の考古学－古備世界の盛衰を追う－』福武書店 1987
- 伊藤晃「古代窯業生産」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987
- 伊藤晃・山野康平「岡山県（瀬戸内中郡）の7世紀の土器」『日本土器辞典』雄山閣 1996
- 亀田修一「山陽・丁須窯跡集成図録」第5巻 西日本編 雄山閣出版 1996
- 杯Bと分類した中でつまみが宝珠状を呈する1点は、今回B類に分類した寒風1-Ⅲ式（古）であり、今回「I・II式」からは除く。岡田博「土橋窯跡」「益久町史」考古編 瀬戸内市 2006
- 狩野久・古市亮「第1章古代『益久町史』史料編（上）」瀬戸内市 2007
- 亀田修一「寒風古窯跡群」「牛窓町史」資料編 II 牛窓町 1997
- 岡田博「文字資料」「益久町史」考古編 瀬戸内市 2006
- 横山浩一「須恵器に見える亨輪文印き日の起源」『古代技術史叢』岩波書店 2003

- (15) 龜田修一「須恵器空跡」『牛窓町史』資料編Ⅱ 牛窓町 1997
- (16) 池田浩「車輪文当て具のある須恵器」『長船町史』史料編(上) 長船町 1998
- (17) 龜田修一・中野雅美「邑久古窯跡群」『邑久町史』考古編 須戸内市 2006
- (18) 時賀黙水「土器ト窯址ニ就テ」『吉備考古』第20号 吉備考古会 1934
- (19) 松本亨男「須恵器考古館出品物について」『牛窓春秋』創刊号 牛窓春秋会 1981
- (20) 横山浩・「須恵器製作用叩き鍛め道具の新例 -九州大学筑紫キャンパス内出土品-」『古代技術学致』 岩波書店 2003
- (21) 猪熊兼勝・大脇潔・松本修自・津村広志「日本古代の鰐尾」 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980
- (22) 平成17・18年度の確認調査では、寒風2号窯跡の窯体、前蓋部、灰原の窯体区や窯体天井が崩落し「強の段」と呼ばれていた原地から出土した遺物の中には陶棺を含むものの明確に鰐尾と確認できる破片は1点も出土しなかった。このため、寒風2号窯跡では鰐尾の焼成は極めて数が少なかったのではないかと考えている。
- (23) 春93-94・97年に使用した鰐尾の拓本は、時賀黙水氏により昭和5年に採集された須恵器甕、壺、鰐尾等の文様の拓本集に収められたものである。
- (24) 造賀県大津市山ノ神道跡4号窯跡(新)は全長9.5m、焚口、燃焼部の幅約1.4m、焼成部の幅約1.6m、高さ推定1.6mを測る。焼成途中で窯体天井が崩落したため小製台座の上に乗せられた4基の鰐尾が焼詰め状態のままで出土している。須崎吉生・田中久雄「山ノ神道跡発掘調査報告書暨-重要遺跡山ノ神道跡に係る確認調査-」 大津市教育委員会 2005
- (25) 高橋伸二・崩崎由・出宮健尚・速藤亮「史跡貢田庵寺跡-史跡環境整備事業に伴う発掘調査報告-」 岡山市教育委員会 2005
- (26) 白石純「科学が語る須恵器・瓦(鰐尾)の移動」『牛窓町史』通史編 牛窓町 2001

参考文献

- (1) 西川宏「備前古窯」『古代の日本』第4巻 中団・辰巳 講談社 1970
- (2) 伊藤亮「古代窯業生産」『岡山県の考古学』 古川弘文館 1987
- (3) 猪熊兼勝・大脇潔・松本修自・津村広志「日本古代の鰐尾」 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980
- (4) 高橋伸二・崩崎由・出宮健尚・速藤亮「史跡貢田庵寺跡-史跡環境整備事業に伴う発掘調査報告-」 岡山市教育委員会 2005

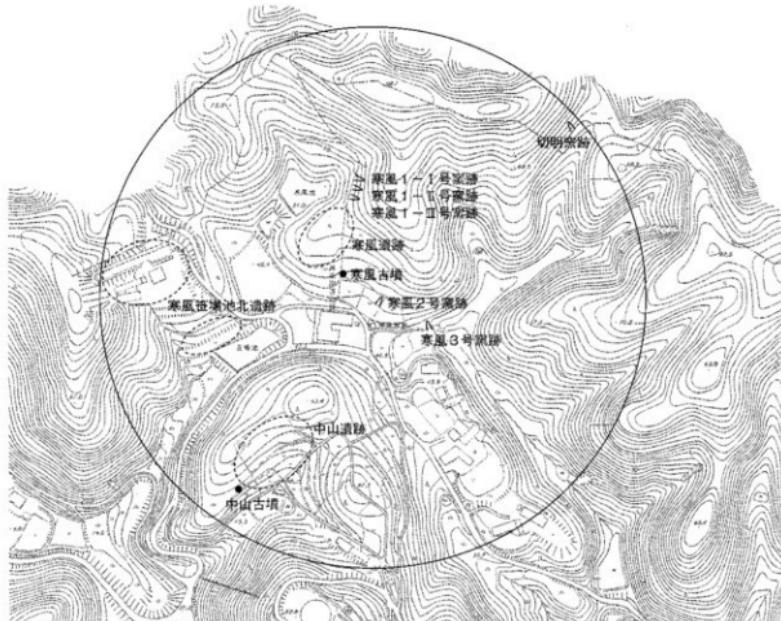
第6節 寒風古窯跡群の変遷と位置付け

今回の史跡地内の確認調査により5基の窯跡の位置や規模などの基礎資料を得ることができた。また、窯以外に工房跡と考えられる堅穴遺構、土壙、溝状遺構、須恵器床の横穴式石室を有する寒風古墳など寒風古窯跡群に関連すると考えられる遺構も検出された。さらに、今回の確認調査に併せ、史跡周辺部の悉皆調査を実施した。以前の発掘調査の成果を合わせ寒風古窯跡群の変遷と位置付を行つてみたい。

寒風古窯跡群と周辺部の遺跡

まず、史跡指定地内の遺構状況として窯は、南北方向に延びる標高約60~62mの丘陵の緩斜面で、寒風池のある西斜面に向かい1-I~II号までの3基の窯がほぼ並行するよう計画的に築かれた1号窯跡群。1-I号窯跡から南南東へ約95mで鉢場池のある南西に向かい標高約51~54mの丘陵の緩斜面に築かれた2号窯跡。2号窯跡から南東へ約65mで錦海濱へ続く南南東に向かい標高約42m丘陵の緩斜面に築かれた3号窯跡で計5基の窯が存在する。

窯以外の関連遺構として、1号窯跡群の南西に位置し史跡地内で一番の丘陵平坦部である、標高54~57m、南東~北東45m、北西~南東30mの舌状丘陵の頂部から南面斜面の寒風遺跡である。1978年

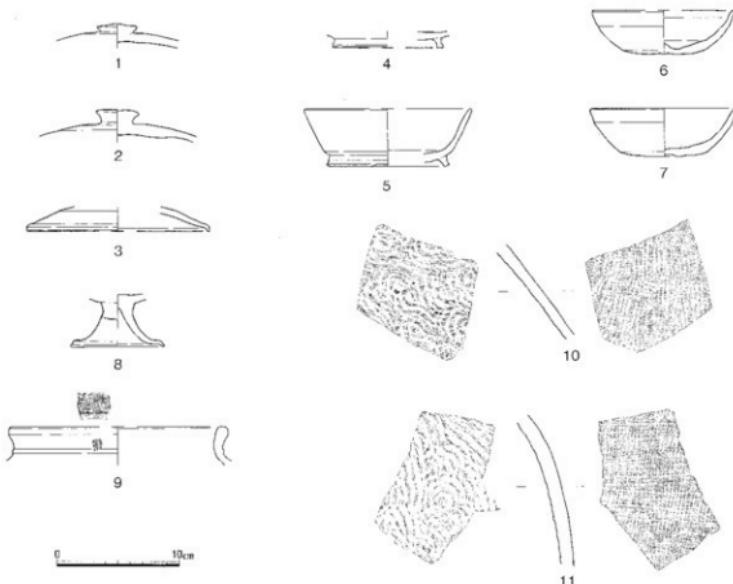


第112図 2号窯跡を中心に直径560m内の寒風古窯跡群周辺遺跡分布図 (1/5,000)

の寒風古窯址群緊急調査委員会調査団による確認調査では、寒風古窯跡群と同時期の遺構として、堅穴造構3基（堅穴造構1・3・4）、溝状造構2基が検出された。今回の確認調査では1978年で検出された遺構を拡張し全容を確認した結果、堅穴造構1基、溝状造構3基、たわみ状造構7基、土壙4基を検出した。舌状丘陵の付根位置には1号窯跡群の所在する丘陵斜面部と平坦部を区画するかのように幅210～230cmを測る溝を配し、舌状丘陵の南面側に堅穴造構を始め、窯に関連すると考えられる遺構が存在する。中でも、堅穴造構3は平面形が隅丸方形を呈し、周囲に周溝を巡らせるものである。床面中央部には土壙・ピットを複数有し、周溝内から粘土塊片が出土しており、須恵器生産に関わる工房施設的な性格を窺わせる。土壙2（1978年の確認調査で堅穴造構1とされた）から粘土塊が出土しており、粘土の備蓄土壙とも考えられる。

また、工房施設的な遺構が存在する舌状丘陵平坦部から南東へ約40m下った緩斜面に立地する寒風古墳は、内部主体である横穴式石室が須恵器床で、使用された墓内側の當て具痕が1～I号窯跡の灰原出土甕の當て具痕と同一である。さらに、横穴式石室の閉塞施設の一部として転用された鶴尾片の文様と同じ文様の鶴尾片が1号窯跡群灰原で採集されているなど1号窯跡群との関係が強い人物に関わる古墳であると考えられる。

さて、史跡指定地は背後の標高89.7mの丘陵部、箇場池北遺跡の背後の標高81.0mの丘陵部、中山遺跡を含む南面の標高87.0mの丘陵部に挟まれた盆地状の中に所在している。範囲として2号窯跡を中心として直径560mの範囲で史跡指定地外の遺構状況を見ていく。（第112図）まず窯跡として、寒



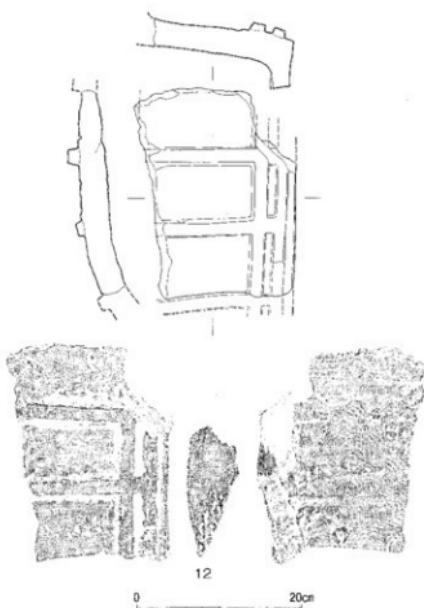
第113図 切明窯跡灰原採集遺物 (1/4)

風3号窯跡から北西に向かい、邑久町大土井集落へ抜ける山道を約250m奥に入った南面する丘陵斜面に切明窯跡が所在する。平成19年度に実施した分布調査において、窯体については規模等について明確に確認できなかったが、畠地として丘陵斜面を段状に削平した崖面で灰原を確認した。灰原から窯堂と共に出土した遺物で図化できた資料は、扁平であるが擬宝珠状や厚みを有するC類の杯蓋1～3、「ハ」の字状にやや高さがある高台を有するC類の杯身4・5、平底で口縁部に向かい椀状に立ち上がるD類の杯身6・7、高杯の脚8、頸部外面にヘラ記号を有する甕9、甕胴部片10・11である。(第113図)また、切明窯跡からは時實氏により鷦尾が採集されている。頭部から胴部片で、胴部の頭部側に2条の粘土帯とおそらく並行する形で2条の粘土帯を施し、その間を7cm間隔で粘土帯を貼りつなぐものと考えられる。内面には同心円文の當て具痕が明瞭に残存している。寒風1-I号窯跡出土の鷦尾に酷似する資料である。(第114図)(註1・2)

窯以外の関連遺構として、寒風古窯跡群からやや浅い谷を挟み約200m西側の標高約50mの丘陵南東部に位置する散布地で、笠場池北側斜面にあたる笠場池北遺跡である。昭和56年(1981)民間開発に伴い笠場池北遺跡の北側地点において発掘調査が実施された。調査の結果、堅穴状住居状遺構1、溝状遺構1、楕円形土壙2、不整形土壙及び柱穴状土壙10数個が検出された。(第115図)溝状遺構の西端コーナー付近からは須恵質陶器(第8図)の他、A類の杯1～5、D類の杯7・8、C類の杯9～11、高杯12～15、甕16～19が出土している。(第116図)また、笠場池のすぐ北側の畠地部分からも須恵器片の散布が見られ笠場池北遺跡の南側地点としている。遺跡出土遺物は寒風古窯跡群の操業時期と重複している。また、極めて近い近接した位置にあるなどの関係から寒風古窯跡群との密接な関係をもつ遺跡であることが指摘されている。

寒風2号窯跡から谷を挟んで南西約170mの丘陵南斜面に位置し、東西約110m、南北約60mの範囲に須恵器片の散布が見られる中山遺跡が所在する。遺物の散布量は少なく性格については不明である。他に、昭和53年(1978)に寒風古窯址群緊急調査委員会調査隊による分布調査では寒風池の北側の南斜面に位置する散布地として寒風池遺跡(当時の名称:寒風池北散布地)があるが、今回の探査では須恵器の採集はできなかった。

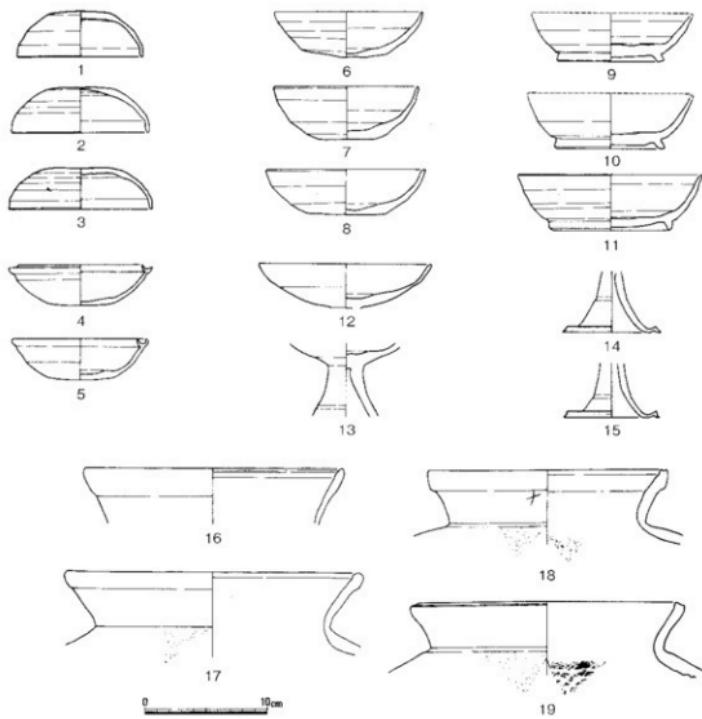
さらに、中山遺跡の所在する丘陵南斜面に中山古墳が存在する。内部主体は南に開口する横穴式石



第114図 切明窯跡出土鷦尾(1/6)(文献1)



第115図 寒風篠場池北遺跡遺構全体図 (1/200) (文献2)



第116図 寒風篠場池北遺跡溝状遺構出土遺物 (1/4) (文献2)

室で、須恵質陶棺、高台付の杯が出土したと伝えられている。現在天井石が無く畠の開拓時に出た石が石室内に充満されている。石室の大きさは長さ400cm、奥壁の上幅80cm、開口部幅113cmを測る。寒風古墳と同規模で陶棺を有する。出土遺物のC類と考えられる杯身の出土から寒風古窯跡群との関連する古墳であると推察される。

寒風古窯跡群の変遷

今回の確認調査により窯体に残された遺物や灰原出土の遺物から寒風古窯跡群の操業時期や変遷についてまとめてみたい。(第4表) まず、7世紀初頭に寒風1-I号窯が寒風の丘陵西斜面に単独で作られ操業が始まられる。その後、1-II号窯が操業を終えると、北側の同じ西斜面に1-II号窯が築かれ操業が始まられる。1-II号窯の操業にやや遅れて2号窯が寒風の丘陵の南西斜面に築かれ操業が行われる。1-II号窯が7世紀中葉過ぎに操業を終え、次に、1-I号窯の灰原から土橋式の杯が出土していることから、寒風の丘陵西斜面の1-I号窯の操業が始まるようである。その後、7世紀の後半以降、寒風の丘陵の南斜面に3号窯や切明窯が増え寒風古窯跡群の操業が4基になるという最盛期を迎え、1-I号窯や2号窯で須恵質陶棺と円面鏡、さらに1-I号窯、切明窯で鷦尾の生産など政治的・文化的、大型ないし特殊な製品の生産が行われる。その後、8世紀前半には寒風古窯跡群の約100年間にわたる操業を終えることが判明した。

また、寒風池の南丘陵の平坦地に立地する寒風遺跡で検出した工房ではないかと考えられる堅穴状造構から寒風1-I式の遺物が出土。1-I号窯・2号窯・3号窯、切明窯の操業時には寒風古墳が築かれるなど、工房や工人の生産体制に関わる造構が窯と共に検出されてきたことにより、寒風古窯跡群の須恵器生産に関連する具体的な様子が見え始めてきている。

第4表 寒風古窯跡群変遷表

遺構 分類	窯跡					
	1-I号窯跡	1-II号窯跡	2号窯跡	1-I号窯跡	3号窯跡	切明窯跡
寒風1-I式	■					
寒風1-II式(古)		■				
寒風1-II式(新)		■	■			
土橋式				■		
寒風2式(古)						
寒風2式(新)					■	■
寒風1-I式			■	■		

寒風古窯跡群の位置付け

約130基からなる邑久古窯跡群の中で寒風古窯跡群の位置付けについて、出土遺物と7世紀から8世紀前半という時代背景から検討してみたい。まず、先学の研究によると、亀田修一氏は、同時代の窯は「出土遺物の中に古墳時代から奈良時代に移り変わる時代を反映したものが生産されている…現や文字を書いた杯蓋などはこの地域の須恵器生産が役所などと関わっている」とし、供給先に、同地域の邑久郡衙や備前国府、近隣の郡衙、駅家などの官に関わる役所などを想定している。(註4)

その中で、大阪府細工谷遺跡出土の7世紀後半の鶴尾は、邑久町宮崎（新林）窯跡出土の鶴尾と文様、製作技法が酷似していたが胎土分析により供給先として確定的となった。（註5）さらに、邑久古窯跡群出土の8世紀後半の須恵器を自然科学的な分析を実施した結果、平城京に運ばれたものがあることも判明したことから、7世紀から8世紀前半の当時の都である藤原京へ寒風古窯跡群を含め邑久古窯跡群から須恵器が運ばれていた可能性が高いことを指摘している。この都への須恵器の運搬であるが、須恵器、鶴尾の都や大阪への製品搬出の交通網について、寒風古窯跡群は南へ約1km谷を下れば瀬戸内海に至り、瀬戸内海へとつながる地に位置し、海を使った製品搬送の交通手段の便利さに寒風古窯跡群の盛行のポイントであると考えられている。（註4）

また、山本悦世氏は寒風古窯跡群を生み出す邑久郡（現：瀬戸内市）の歴史的環境を整理した。文献史学から『渡来系の人々との関係が古くから強い地である・・・倭政権とのつながりが色濃かった』とし、牛窓湾周辺の古墳時代前半からの前方後円墳の築造や黒島古墳出土の朝鮮半島の伽耶や新羅地域の陶質土器から青備海部直一族との関係の深さが指摘されていることを受け『牛窓湾周辺のこの地には、古い段階から渡来系の人々の活動が重要な意味を持って残されている。』とし、これら地域的な特性に邑久古窯跡群での須恵器生産成立の土壤を求めている。さらに、寒風古窯跡群の生産品から、古墳時代からの須恵器形態から新たな法律的な食器様相を示す須恵器形態の転換しており『都への供給が強く意識され、中央から地方へという物流形態が、地方から中央政権へという流れに転換したととらえられる。これは中央と地方の政治的な統治形態の変化、律令制の整備と強く関わる変化と評価できよう。』と7世紀の社会的変革の中で優れた製品を生み出していった寒風古窯跡群の時代的背景を総括した。（註6）

以上、先学による寒風古窯跡群の位置付けについて指摘されているように、古墳時代後半（6世紀中葉）～平安時代後半まで生産が行われた邑久古窯跡群の窯は、立地移動の中で、寒風古窯跡群の5基の窯の内最初に築かれた1～Ⅲ号窯は、長船町西須恵地域に加え南側の瀬戸内海寄りに生産域を広げてきた邑久古窯跡群の窯数の拡大時から、切明窯を含む寒風2式以降段階の寒風古窯跡群の生産ピーク時には、瀬戸内海寄りの新たな生産域に窯が集中していく。また、製品の中にも鶴尾や硯さらには文字が刻字された須恵器・陶馬など政治的・文化的な品が生産されていくことから、当時の政治的・文化的中心地への供給を受けもった半官窯的な生産地としての位置付けができるのではないかと推察される。

註

- (1) 亀田修一「切明窯跡」『牛窓町史』資料編Ⅱ 牛窓町 1997
- (2) 亀田修一「切明窯跡」『邑久町史』考古編 瀬戸内市 2006
- (3) 江見正己「寒風並場池北遺跡」並場池北遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会 1982
- (4) 亀田修一「須恵器作り」『牛窓町史』通史編 牛窓町 2001
- (5) 白石 純「科学が語る須恵器・瓦（鶴尾）の移動」『牛窓町史』通史編 牛窓町 2001
- (6) 山本悦世『寒風古窯址群』吉備人出版 2002

参考文献

- (1) 亀田修一「切明窯跡」『邑久町史』考古編 瀬戸内市 2006
- (2) 江見正己「寒風並場池北遺跡」並場池北遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会 1982

附載1 昭和53年確認調査の出土遺物

山 磨 康 平

1. はじめに

昭和53年1～3月に国史跡指定の申請のための基礎資料を得ることを目的に、磁気探査とトレンチによる確認調査を実施した。その結果、窯跡4基の確認や工房跡とみられる堅穴造構を新たに検出した。これらの成果とともに從来出土し各所に保管されている遺物もあわせて『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27「寒風古窯址群」として報告している。ただ確認調査時の出土遺物については、調査が3月下旬に行われ報告書刊行に間に合わず未報告のままであった。今回、改めて寒風1号窯跡群下方の灰原に設定した第3トレンチ(ST3)からの出土遺物についてここに報告することとした。

2. 第3トレンチの状況

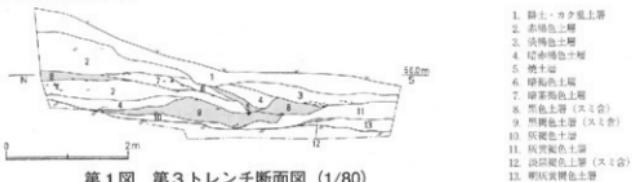
確認調査に先駆けて実施した磁気探査の結果、1号窯跡群下方の灰原が想定される付近に磁気異常が認められ、新規の窯跡の可能性も考えられたためにトレンチを設置した。トレンチは寒風池東岸の西向きの傾斜面に、斜面に直交し1×6mの規模で設定した。調査の結果、灰原が北東端で最大厚さ1.6mをなし、南に向かい徐々に浅くなり南端では80cmほどの堆積が認められた。新規の窯跡は検出できなかつたもののコンテナ30箱分の主に寒風1～II号窯跡の製品とみられる遺物が出土した。

トレンチ東壁の断面観察では、第1層が厚さ40cmほどの擾乱土で、第2層から13層までが灰原の堆積層であった。複数回の操業が行われた様で炭層および炭を含む層を第8、9層で確認した。また第5層では焼上層が認められた。南端の第11～13層はいずれもかなり堅くしまった土質で、第13層ではほとんど遺物を含まず、やや異なった堆積状況であった。

遺物の取り上げは南北と北半に大別し、さらに上、中、下層および最下層に分けて行った。土器類表の土層項目の記号については、掘り下げ時の遺物の取り上げ順の番号（主に上→下層）である。土層断面図と必ずしも対応していないが、AとBの一部が北半、G、Hが南半の上層の遺物、D、Fが北半の、I、Kが南半の下層の遺物、Eが北半、Nが中間付近の最下層の取り上げ遺物である。これ以外は中層付近の取り上げ遺物で、そのほかに、礫面抜き取りの遺物を掲載している。

3. 出土遺物について

第3トレンチからは主に須恵器が出土し、器種は蓋杯、瓶、鉢、皿、脚付碗、捏鉢、高杯、甌、平瓶、長頸壺、短頸壺、甕等がある。そのほかに未掲載であるが明らかに1～I号窯跡の製品とみられる鰐尾の破片、高台付蓋杯（杯B）、平瓶の把手片？等が上層の擾乱層中から出土している。以下器種ごとに特徴を記述する。



第1図 第3トレンチ断面図 (1/80)

杯蓋（1～60、135～143） 杯Hと内面にカエリを持つ杯Gに大別できる。杯Hは口径9.6～11.3cmの範疇に収まり、天井部がやや平なものと丸味を持つものがある。口縁端部は垂直気味に下がるもののか外反気味のものが多く、端部が内湾するものもある。口縁端部は8がやや尖り気味である以外は丸く收めている。天井部外面は観察可能なものはいずれもヘラ切り調整である。なお、60は杯身93とセットで出土している。

杯Gは口径7.2～8.2cmとやや小振りで、天井部中央に宝珠様のつまみが付き、内面端部に内傾するカエリを施している。137はつまみの下半が広く乳頭状である。天井部外面は回転ヘラケズリ調整を施すものが多い。

杯身（61～134、144～153） 蓋と同様に杯HとGに大別できる。杯Hは大きく3分類できる。このうち口径8.6～10.4cmで杯蓋のサイズに対応するものが大半を占める。立ち上がりは4、5mm前後が主で、立ち上がりが受け部径より低い101・124も認められる。口径12.3cmの61は、若干大振りな厚手の造りで、立ち上がりが9mmを測る。62～66は小片のため推定口径8.8～12.4cmと幅があるが類似した形態特徴を持つ。134は口径8cmと極端に小さい。

外面底部の調整は確認できる限りではヘラ切り未調整であるが、底部周辺部をヘラによる粗い回転ナデ？調整を施したものもある。体部外而是自然釉のかかったものが多い。

杯Gは口径8.2～9.5cmで、端部は外傾し直線的に立ち上がるものと垂直もしくは若干外傾気味に立ち上がるものがある。底部外面は149・152・153でヘラケズリ調整が認められる。145・149・151は体部に沈線を施している。

蓋（154・155） 154は口径16.5cmの大型品で鉢等の蓋が考えられる。155は口径6.1cmでつまみの痕跡が残り、長頸蓋の蓋と考えられる。天井部外面はヘラケズリが認められる。

椀（156～158） 156は底部が欠損しているが若干厚みを持ち他の器種も考えられる。157は直径12.8cmで杯Gの大型品の形状である。底部外面はヘラケズリを施している。158は口縁端部が外反して立ち上がる。全体に薄手でシャープな造りである。

鉢（159・160） 160は口径19cmほどの大型品で口縁端部は内傾し、やや窪む面を持つ。

皿（161・162） 口径28cmほどを測る大型品で内湾気味に立ち上がる。161は外傾する口縁部に窪んだ端面を持つ。底部外面はヘラケズリを施す。162は口縁部がやや肥厚し、端面は丸味を持つ。

脚付椀（163～171） 脚部と一体になったものは出土していないが脚部直径が8.5cmの小型品と直径10～13cmのものがある。165はやや外傾気味で2条の沈線を、163・164では1条の沈線を施す。脚端部はいずれも内面下方に拡大し三角形状をなし端部が接合する。

捏鉢（172） 口縁端部が内湾気味に外傾し、立ち上がり端面は凹面をなす。体部外面に2条の沈線を施す。

高杯（173～248） 杯部直径12～13cmを中心の大型品と直径9cmほどの小型品とがある、大型品には、長脚と若干短めの脚部が認められ、長脚には1、2条の沈線を施すものが多く、また杯部外面にも沈線を施すものがある。杯部は底面が若干平坦なものと底部より椀状に内湾するものがある。口縁部は端部が外反気味に立ち上がるものと内湾気味のものとがあり、端部は丸く收めている。189は杯部直径17.1cmを測る特大の大型品である。小型品は杯Gの杯部に脚を接合した形状である。杯、脚部ともに外面に1、2条の沈線を施しているものが多い。

いずれも脚端部は外反し端部で短く屈曲し外面下方に拡張している。179は極端に屈曲し段をなし

ている。

龜 (249~251) 口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。頸部と口縁部の境には沈線を設け段がつく。249は頸部に、251は体部中央の穿孔部に1条の沈線を施す。

平瓶 (252~256) 252は肩のやや張り気味の形状をなし、体部下端外面はヘラケズリである。体部上面にいずれも閉塞部がある。口縁端部は丸味を持つ。

長頸壺 (257~267) 257は亀裂があるものの完形品である。頸部に2条と体部に3条の沈線を施し、体部の沈線の間に刺突文を施している。口縁部は外反し端部は若干上方に引き延ばしている。底部外面はヘラケズリを施している。体部は丸味を持つ257以外では肩の張った形状のものが多い。沈線は258の頸部、259・260・263の体部にも認められる。258は口縁端部を内傾し拡張している。265は杯H等の高台の可能性もある。266・267はハの字形に大きく開く高台で、266は脚端部を下方に拡張している。

短頸壺 (268~281) 壺は口縁端部が内外に拡張するもの268・270・271・275、端部が三角形状をなすもの269・274、内傾し拡張のもの273、下方に延び丸く収めるもの272と変化に富んでいる。壺281は肩がやや張り、口縁部が外傾し立ち上がる。そのほかは丸味を持つ体部で、端部が垂直に立ち上がるものが多いが、278はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部はいずれも丸く収めている。体部に沈線を施しているものが多い。

壺 (282~287) いずれも口頸部片で器種を断定できない。282は直口の口縁部で端面は平坦で、頸部に1条の沈線がある。286・287は口縁端部を内側の上方に拡張している。

甕 (288~323) 口縁部が直立気味のもの、僅かに外傾気味のもの、外反し端部が肥厚するものとしないもの、大きく外反する大型のもの等がある。直口する289は複合口縁の形状である。294は把手を有し口縁部は丸く収める。295~300は短頸の器種である。

大型甕は口縁端部が僅かに肥厚するものが多く、端部外面には刺突文と櫛描波状文を施すものがある。頸部には櫛描波状文を施し、その間を沈線により分割しているものが多い。322では櫛描波状文を沈線の間に2段に施している。320はやや内湾する口縁部で端面には肥厚が認められない。

4. 若干の資料分析

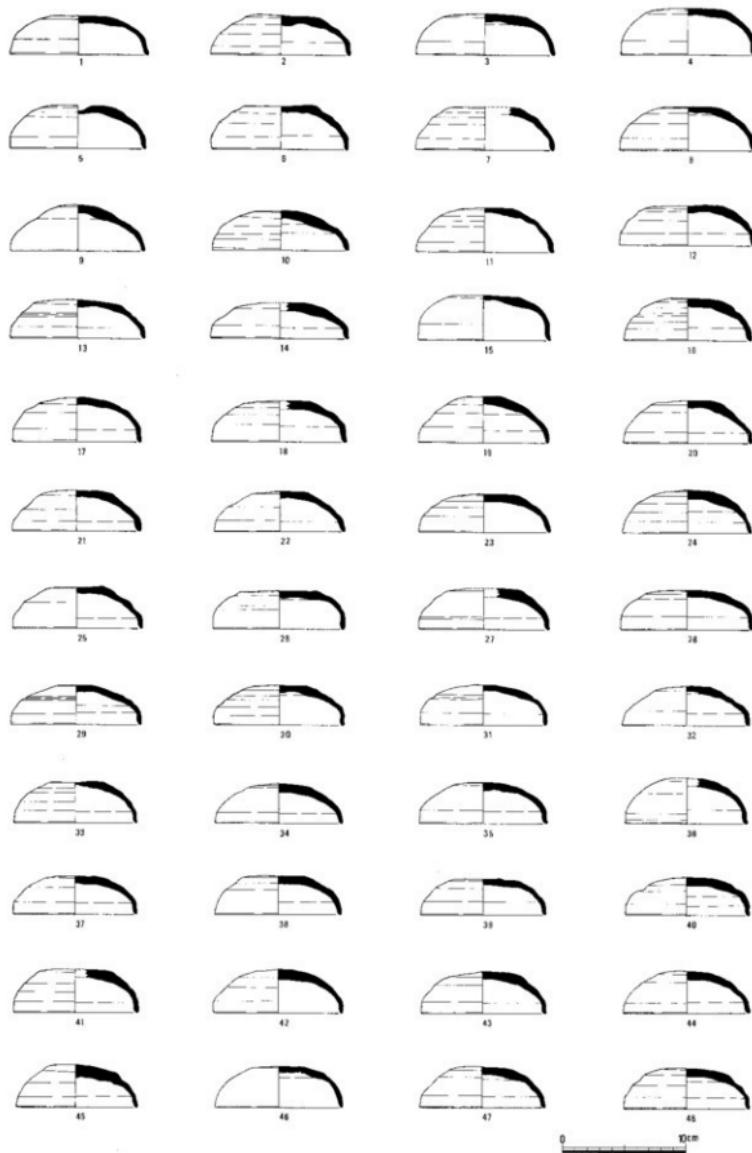
出土遺物のうち主に蓋杯を中心として法量、出土量、共伴関係等の若干の分析を行った。なお、杯Hについては、掲載土器以外に計測可能な遺物を含めている。

法量：蓋杯（杯H）は法量分布図に示すように蓋が口径9.6~11.3cm、高さ2.6~3.8cmの間に、身が口径8.6~10.4cm、高さ2.6~3.9cmの間に集中している。蓋と身のセット関係を詳細にみると、杯蓋では口径11.1cm、10.4cm、9.8cm付近にピークがあるようで、これに杯身の口径を対応させてみると10.1cm、9.4cm、8.9cm付近のピークが対応するものとみられる。ただ灰原の分層による遺物取り上げが法量分布に必ずしも反映せず齟齬をきたしている。

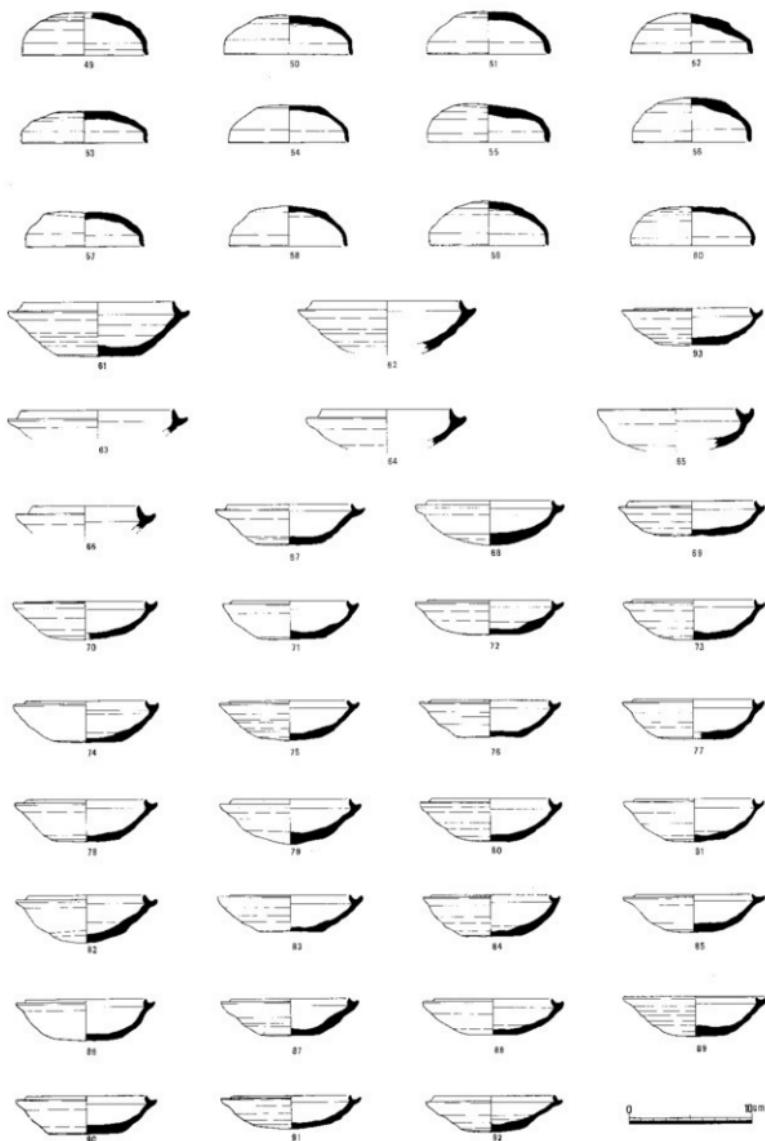
やや厚手の杯身61~66は掲載した以外はほとんどなく、1~II号窯の操業の開始期もしくは新規のI~III号窯の混入の可能性がある。また、最も法量の小さい134は1点のみ確認している。

出土数量：ST3出土のコンテナ30箱分の識別可能な器種の口縁部計測による個体数の算出を行った。413個体を確認し、杯H蓋119、同身195、杯G蓋16、同身5、高杯31、壺甕類27、その他20の構成である。蓋杯のみの割合は杯H蓋36%、同身58%、杯G蓋5%、同身1%の比率である。

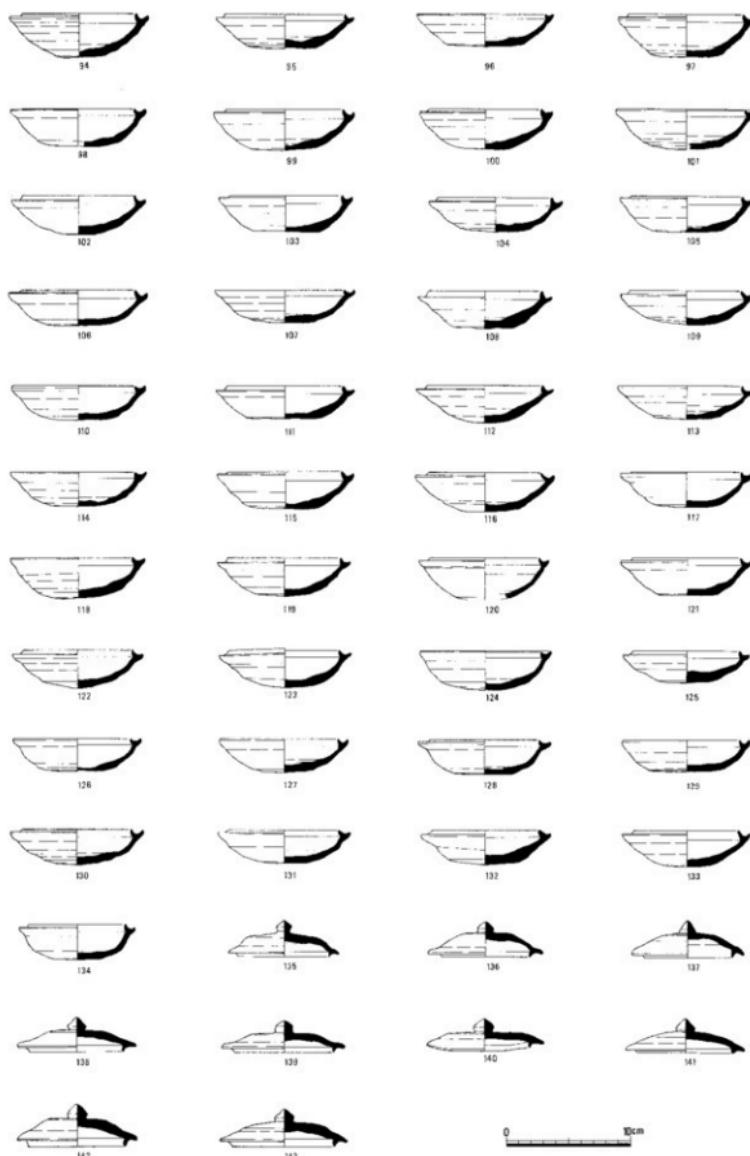
杯Gの出現：出土状況は上層（A、H）からの出土が比較的多いものの各層から杯Hと共に共存し、まんべんなく出土している。また絶対数が少ないものの法量の差が認められる。



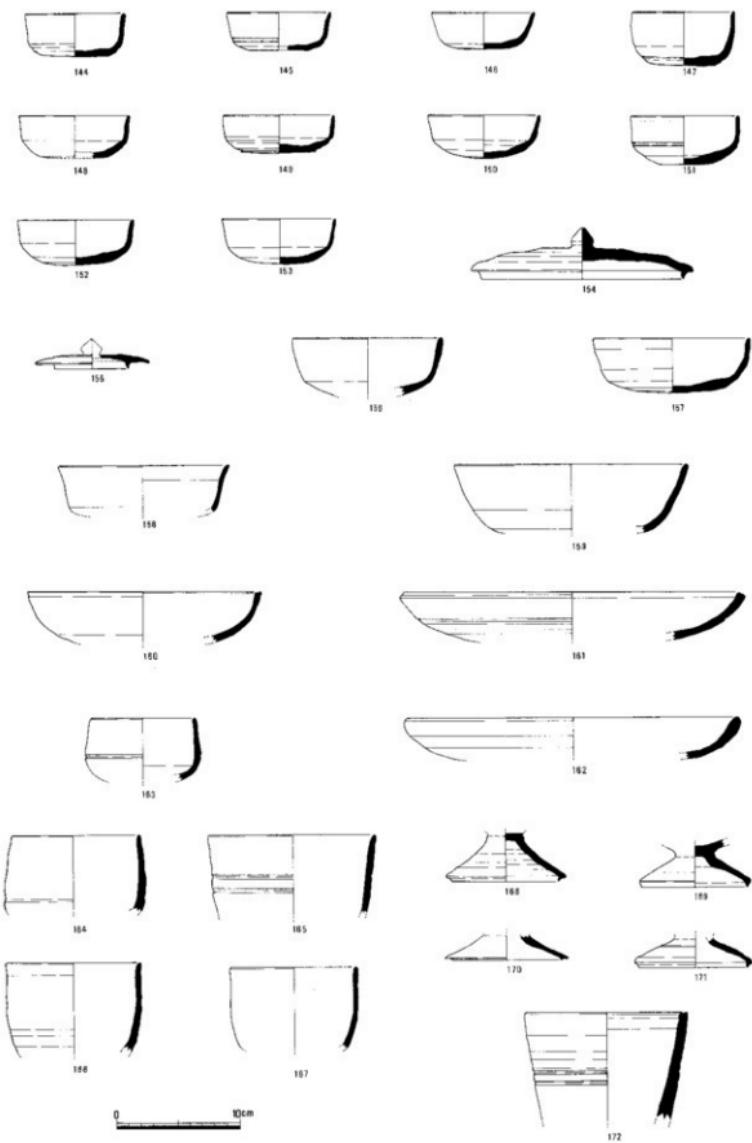
第2図 第3トレンチ出土遺物 1 (1/4)



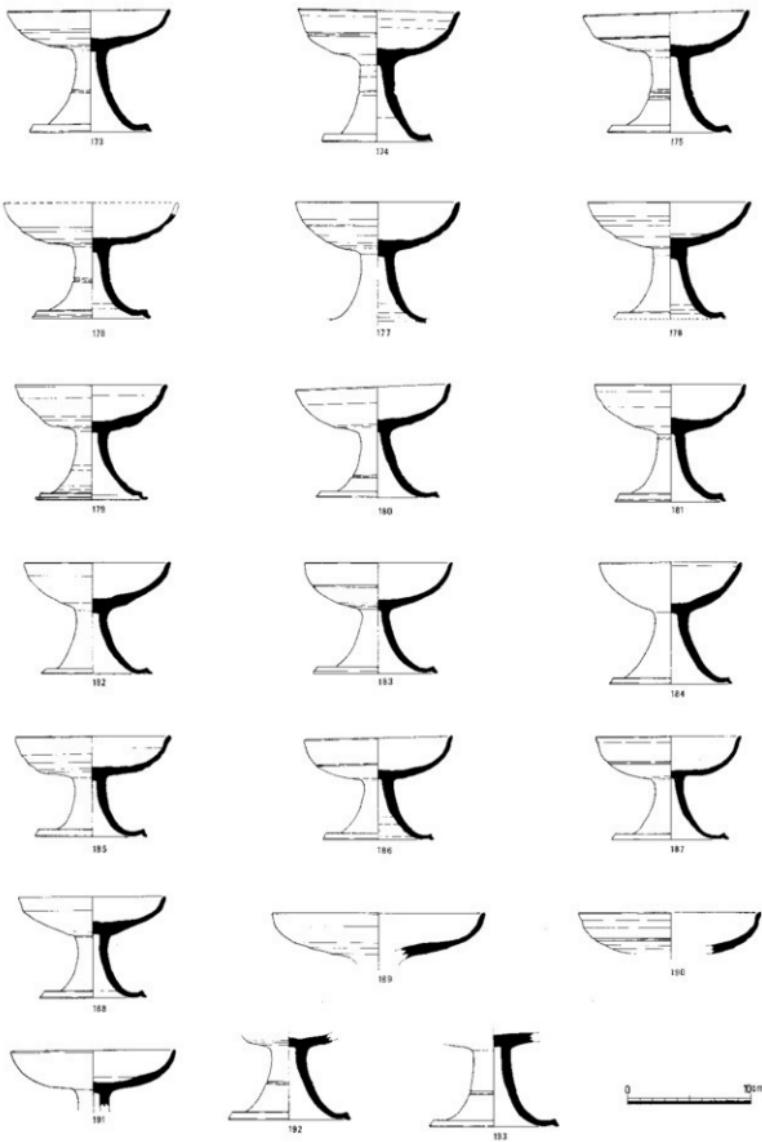
第3図 第3トレンチ出土遺物2 (1/4)



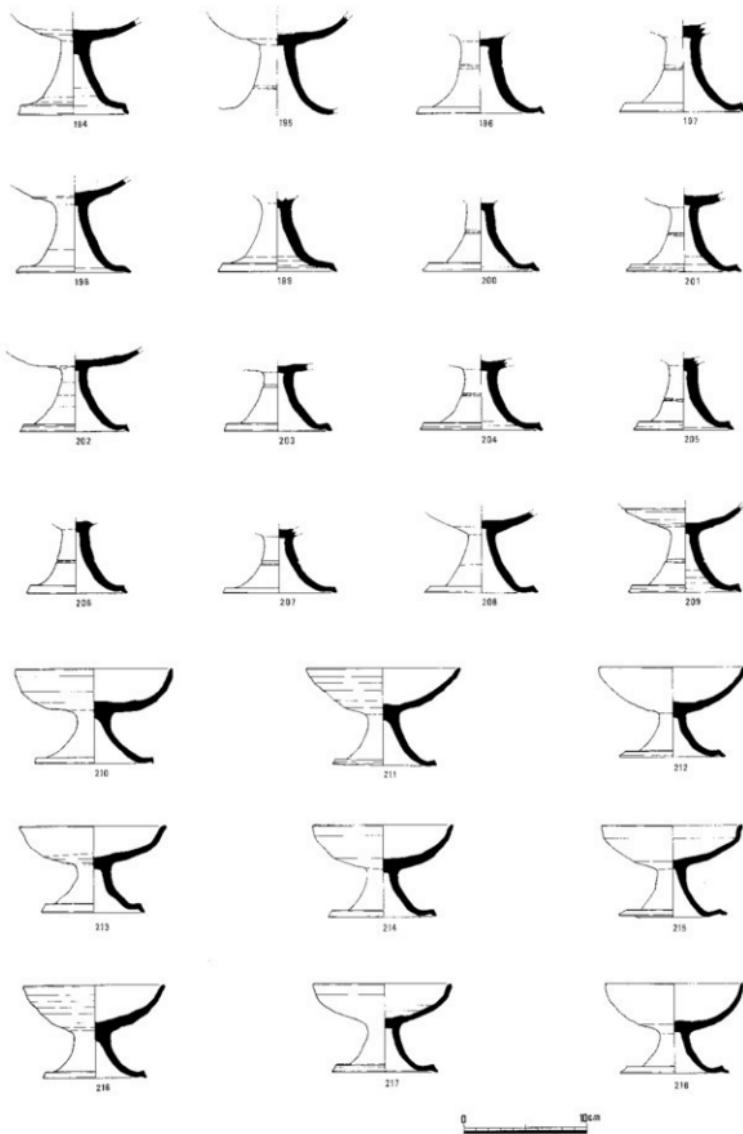
第4図 第3トレンチ出土遺物3 (1/4)



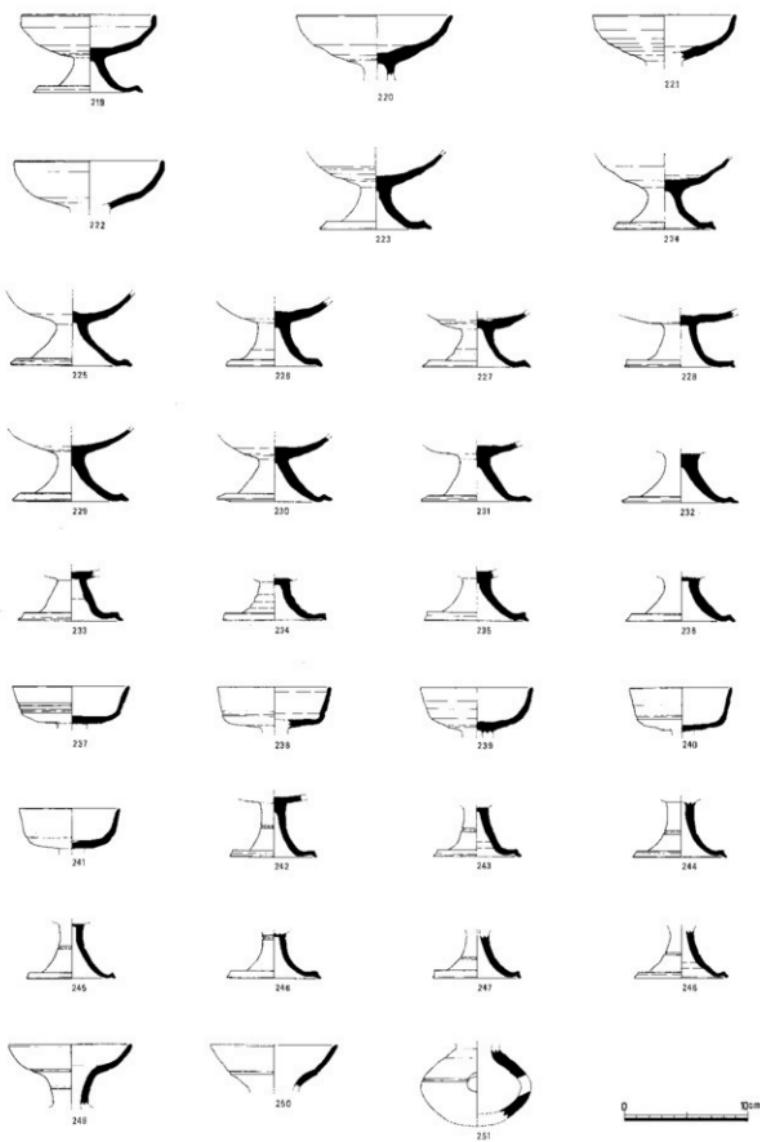
第5図 第3トレンチ出土遺物4 (1/4)



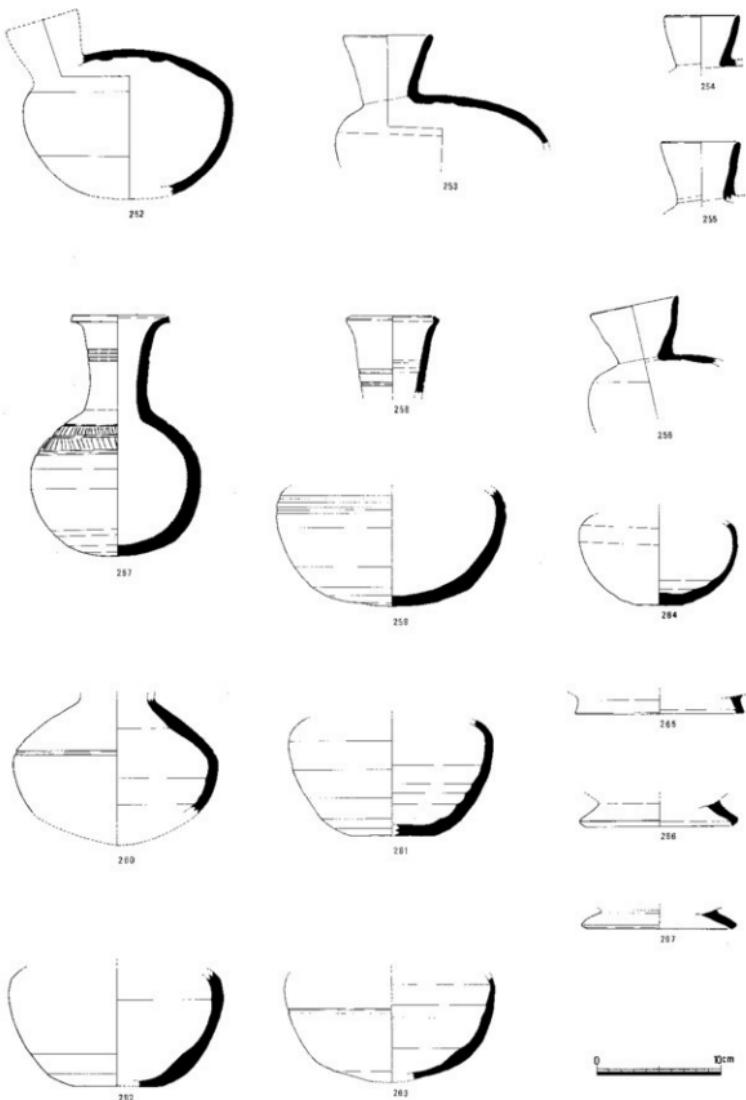
第6図 第3トレンチ出土遺物5 (1/4)



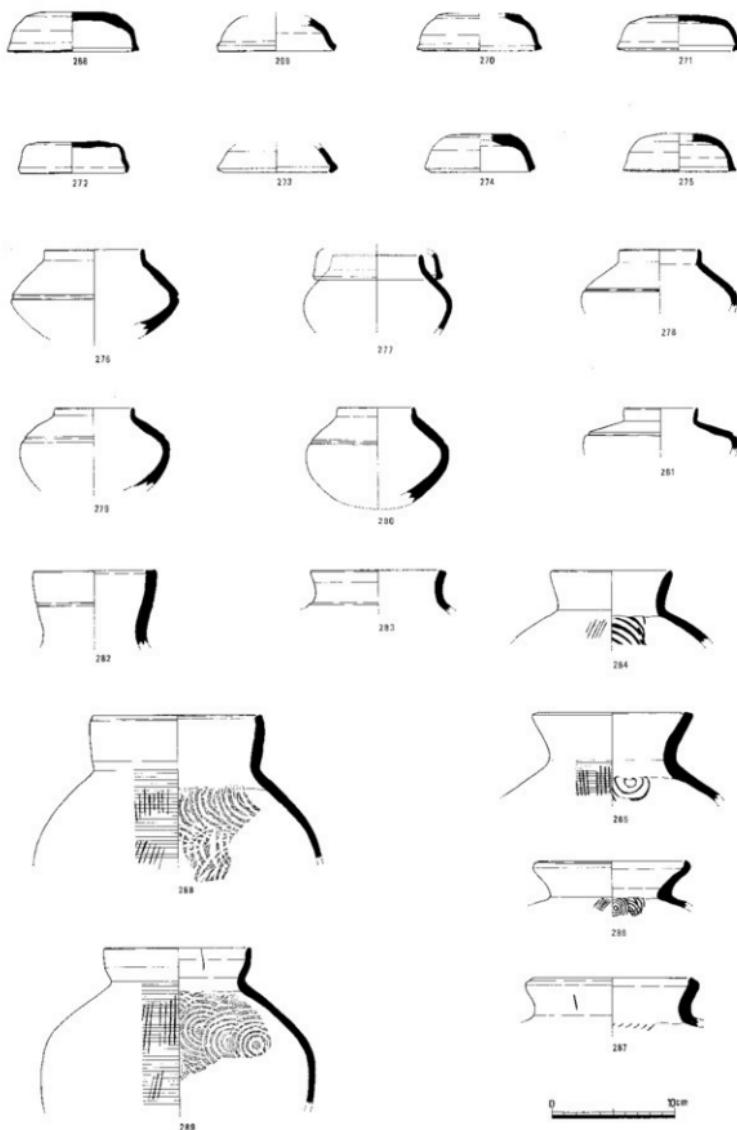
第7図 第3トレンチ出土遺物6 (1/4)



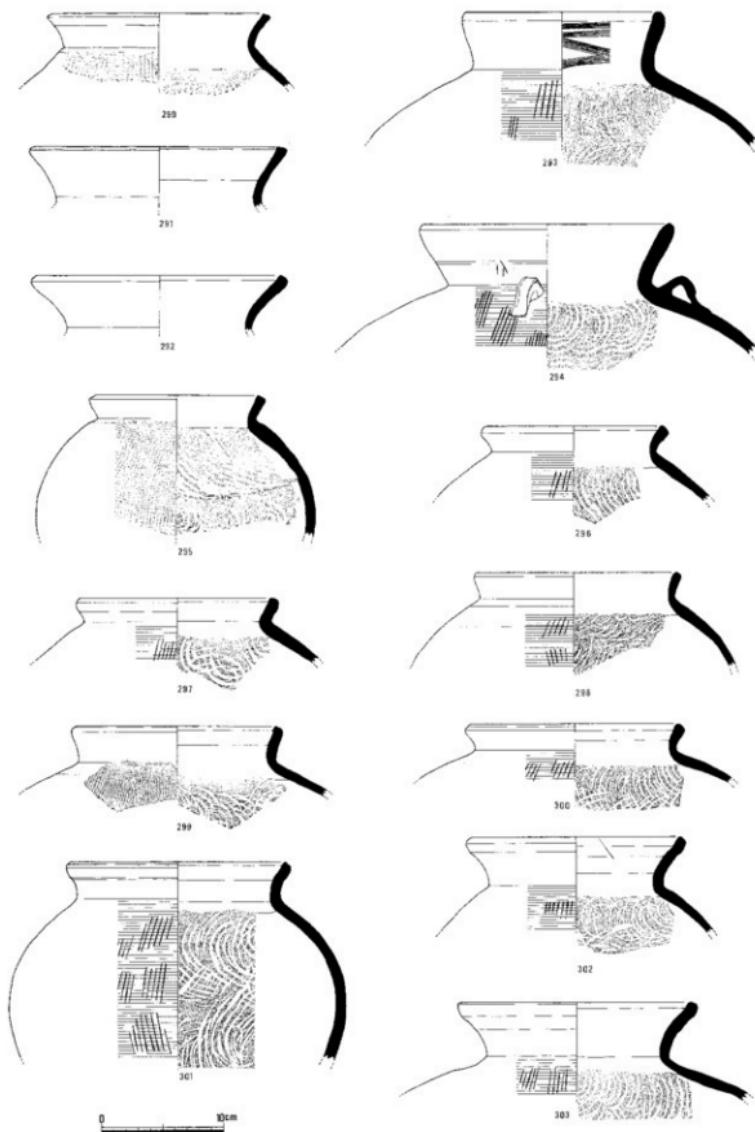
第8図 第3トレンチ出土遺物7 (1/4)



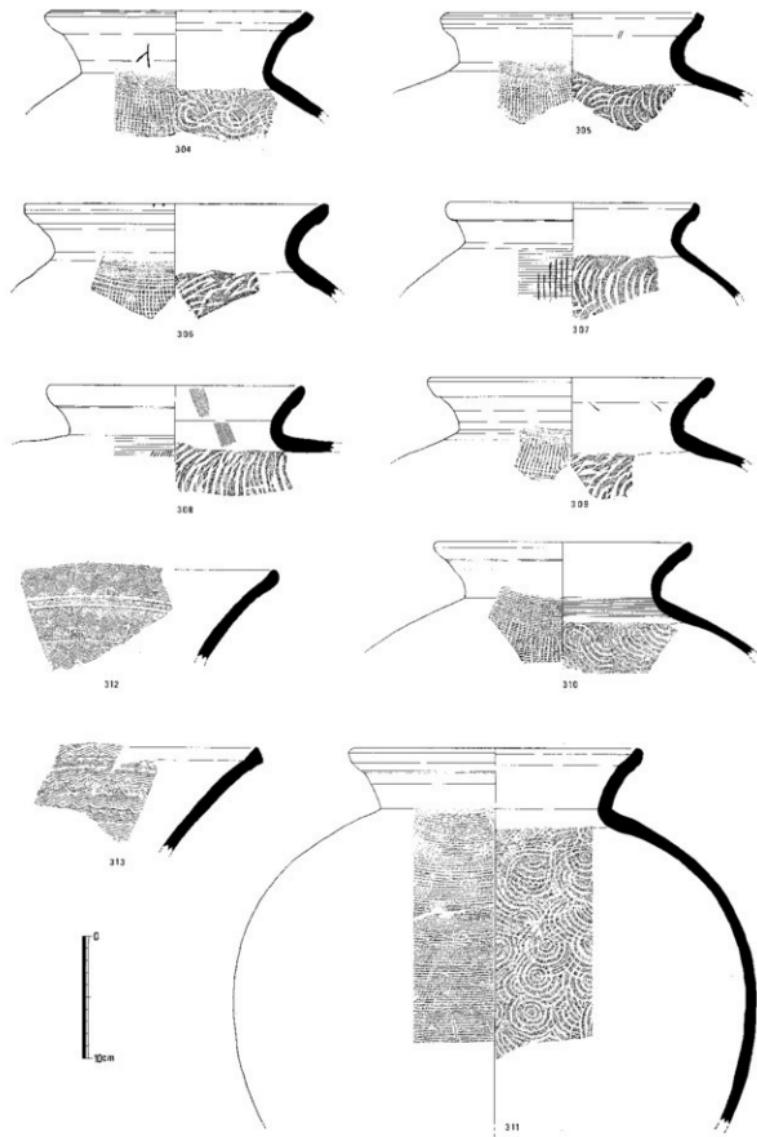
第9図 第3トレンチ出土遺物8 (1/4)



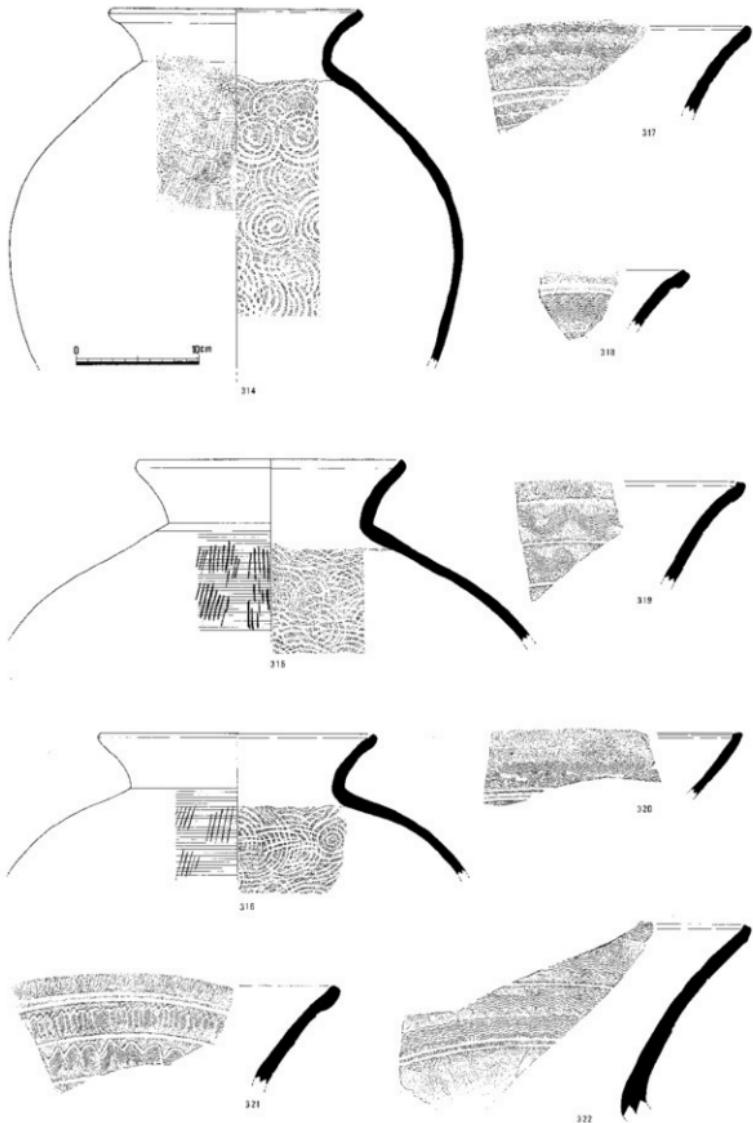
第10図 第3トレンチ出土遺物9' (1/4)



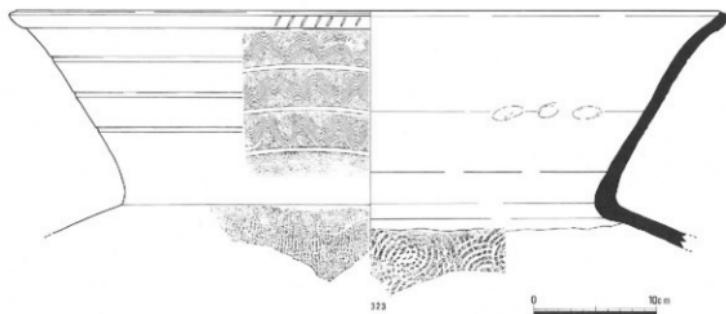
第11図 第3トレンチ出土遺物10 (1/4)



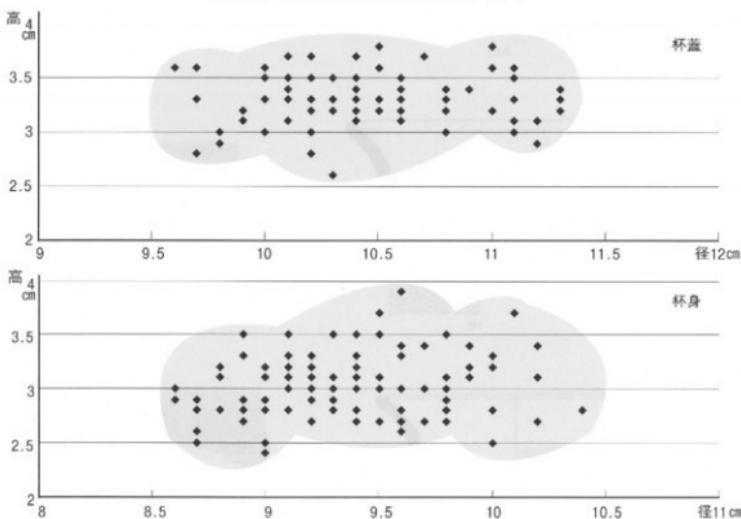
第12図 第3トレンチ出土遺物11 (1/4)



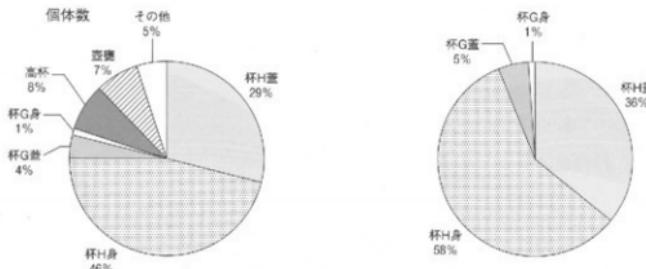
第13図 第3トレンチ出土遺物12 (1/4)



第14図 第3トレンチ出土遺物13 (1/4)



第15図 第3トレンチ出土主要杯H法量図



第16図 第3トレンチ出土遺物器種構成

第1表 土器観察表

器種 番号	出土 場所	器種	計測値(cm)		外因色調	胎土	焼成	残存	形態、手法など
			口径	直径					
1 E	杯蓋		11.0		3.2	灰~灰褐色	密	堅膜	1/3残 天井部外ヘタキリ
2 K	杯蓋		11.3		3.3	灰褐色~淡灰褐色	密	堅膜 (焼きぶくれ)	2/3(葉小) 天井部外ヘタキリ
3 B	杯盤		11.3		3.4	灰褐色	砂粒やや多い	堅膜 (無厚付壁)	3/4残 天井部外ヘタキリ
4 B	杯蓋		11.0		3.8	灰褐色	密	軟質	1/2残 天井部外ヘタキリ
5 C	杯盤		11.1		3.5	灰褐色	密	良好	1/3残 天井部外ヘタキリ
6 F	杯蓋		11.0		3.6	灰白~灰褐色	密	軟質	2/3残 天井部外ヘタキリ
7 G	杯蓋		11.1		3.5	灰白色	密	軟質	1/3残 天井部外ヘタキリ
8 D	杯蓋		11.1		3.6	浅灰褐色~淡灰褐色	密	軟質	2/3残 天井部外ヘタキリ
9 A	杯蓋		11.0		3.8	灰褐色	密(黒色厚)	堅膜	1/2残 天井部外ヘタキリ
10 E	杯蓋		11.0		3.2	灰~灰褐色	密	良好	1/2残 天井部外ヘタキリ
11 A	杯蓋		11.1		3.6	灰褐色	密	堅膜	1/2残(葉) 天井部外ヘタキリ
12 F	杯蓋		11.1		3.3	灰~灰褐色	密	堅膜	1/3残 大井部外ヘタキリ
13 F	杯蓋		11.0		3.2	灰~灰褐色	密	堅膜	1/4残(葉) 天井部外ヘタキリ
14 I	杯蓋		11.1		3.0	黄灰褐色	密	微細	1/3残 天井部外側内凹凸
15 西屋 中層	外蓋		10.7		3.7	灰褐色(一部自然色)	密	堅膜	1/3残 外不明瞭、天井部内仕上げナダ
16 B	杯盤		10.6		3.5	灰褐色	砂粒やや多い	堅膜	2/3残 天井部外ヘタキリ
17 E	杯蓋		10.5		3.6	灰白~灰褐色	密(黑色厚)	魚鱗	3/4残 天井部外ヘタキリ、鰯往仕上げナダ
18 B	杯蓋		10.9		3.4	灰褐色~深褐色(自然色)	密	堅膜	1/4残 天井部外ヘタキリ
19 A	杯蓋		10.5		3.8	淡灰褐色~淡灰褐色	密	良好	1/3残 天井部外ヘタキリ後ナダが
20 K	杯蓋		10.6		3.5	灰~淡灰褐色	密	堅膜 (焼きぶくれ)	2/3残 天井部外ヘタキリ、破片付
21 K	杯盤		10.5		3.3	褐~深褐色	密	堅膜 (焼きぶくれ)	1/3残 天井部外ヘタキリ後ナダ
22 K	杯蓋		10.5		3.2	灰~灰褐色	密(声色控)	堅膜	1/3残 天井部外ヘタキリ
23 C	杯蓋		10.6		3.1	灰褐色(自然色)	密	堅膜	2/3残 外調整不明瞭
24 C	杯蓋		10.6		3.5	灰褐色(一部自然色)	密	堅膜	2/3残(葉小) 天井部外ヘタキリ
25 F	杯盤		10.6		3.3	灰~深褐色	密	良好	2/3残(葉) 天井部外ヘタキリ
26 C	杯蓋		10.6		3.1	灰~灰褐色	密	堅膜	1/3残(葉小) 天井部外ヘタキリ、同内仕上げナダ、丘積
27 F	杯蓋		10.5		3.2	灰白~灰褐色	密	軟質	1/3残 天井部外ヘタキリか
28 C	杯蓋		10.8		3.2	灰褐色	密	堅膜	1/4残 天井部外ヘタキリ
29 C	杯蓋		10.6		3.2	灰褐色	密	堅膜	1/2残 天井部外ヘタキリ
30 A	外蓋		10.5		3.2	灰褐色(一部自然色)	密(黑色松)	堅膜	1/2残 天井部外ヘタキリ
31 D	杯盤		10.2		3.3	灰褐色(一部自然色)	密	堅膜	1/2残(葉小) 天井部外ヘタキリ後ナダが
32 A	杯蓋		10.4		3.2	青灰色	密(黑色厚)	堅膜	1/2残(葉小) 不明瞭、天井部記号「×」記号
33 D	杯蓋		10.1		3.3	灰~青褐色	密	良好	3/4残 天井部外ヘタキリ
34 D	杯蓋		10.3		3.3	淡灰青色	密	堅膜	1/4残 外調整不明瞭
35 D	杯蓋		10.4		3.4	淡灰青色	密	微細	1/3残 天井部外ヘタキリか、同内仕上げナダ
36 F	杯蓋		10.1		3.7	青灰色	密	良好	1/4残 天井部外ヘタキリ、同内仕上げナダ
37 H	汗壺		10.1		3.1	灰青色	密	良好	1/2残 天井部外ヘタキリ
38 B	杯盤		10.3		3.2	灰褐色(一部自然色)	密	堅膜	1/2残 不明
39 D	杯盤		10.2		3.0	淡灰褐色	密	堅膜	2/3残(葉) 天井部外ヘタキリ
40 H	杯蓋		10.2		3.2	天青(一部自然色)	2~3mmの砂粒	堅膜	1/2残(葉大) 天井部外ヘタキリ
41 M	杯蓋		10.2		3.5	灰~淡灰褐色	密	堅膜	1/2残 天井部外ヘタキリか
42 N	杯蓋		10.5		3.6	白灰(一部自然色)	密	堅膜	1/3残 天井部外ヘタキリか
43 G	杯盤		10.1		3.5	灰~青褐色	密	良好	2/3残 天井部外ヘタキリ
44 K	杯蓋		10.4		3.4	灰~灰青色	密	堅膜	3/4残 天井部外ヘタキリ
45 k	杯蓋		10.0		3.5	灰青色(自然粒)	密	堅膜 (焼きぶくれ)	2/3残(葉) 天井部外ヘタキリ
46 A	杯蓋		10.4		3.4	灰褐色	密	良好	1/2残 天井部外ヘタキリ
47 K	杯蓋		10.1		3.4	淡灰褐色	密	軟質	1/3残 天井部外ヘタキリ後ナダ
48 I	杯蓋		10.4		3.3	灰~淡灰褐色	密	堅膜	1/2残 天井部外ヘタキリ
49 A	杯蓋		10.3		3.5	淡灰褐色	密	良好	1/2残 天井部外ヘタキリ
50 A	杯蓋		10.4		3.2	灰褐色	密(黑色松)	堅膜	1/2残 天井部外ヘタキリか
51 K	杯蓋		10.0		3.5	灰~灰青色	密	堅膜	1/3残 天井部外ヘタキリ
52 M	杯蓋		10.0		3.3	灰青色	密	堅膜 (焼きぶくれ)	一般欠損 天井部外ヘタキリか
53 D	杯蓋		10.3		2.6	灰灰	密	良好	1/4残(葉大) 天井部外ヘタキリ
54 A	杯蓋		9.8		3.0	灰褐色	密	堅膜	1/2残 天井部外ヘタキリ
55 M	杯蓋		9.9		3.1	灰褐色(一部自然色)	密	堅膜	2/3残(葉大) 天井部外ヘタキリか、同内仕上げナダ
56 G	杯蓋		9.7		3.6	灰褐色	密	良好	2/3残(葉大) 天井部外ヘタキリ後ナダ
57 M	杯蓋		9.7		2.8	灰~青褐色	密	堅膜 (焼きぶくれ)	一般欠損 天井部中央粘土柱

番号	出土 番号	器種	計測値 (cm)			外観色調	胎土	焼成	残存	形態、手法など
			口径	直径	高さ					
58 K		杯身	9.7		3.3	濃灰褐色	密	堅緻	2/3残	大井部外ヘラキリか、立ち上がり5mm
59 H		杯蓋	9.6		3.6	灰色 (自然釉)	2~3mmほどの砂粒	やや軟質	2/3残	天井部外ヘラキリ接ナデか、同内仕上げナデ
60 K		杯身	9.9		3.2	淡灰褐色 (自然釉)	密	堅緻	1/2残	大井部外ヘラキリ2cmとセット
61 G		杯身	12.3	14.7	4.5	緑褐色 (自然釉)	密 (黒色粒)	堅緻	1/3残	外不規則、天井部内仕上げナデ、立ち上がり5mm
62 K		杯身	(12.1)	(14.5)	3.3	試焼色 (自然釉)	密	堅緻	小片	立ち上がり5mm
63 D		杯身	(12.4)	(14.6)	3.6	灰色 (自然釉)	密 (黒色粒)	堅緻	小片	立ち上がり5mm
64 K		杯身	(10.5)	(13.2)	3.7	灰~青灰色	密	堅緻	小片	立ち上がり5mm、外底かぶり状
65 K		杯身	(9.8)	(12.7)	3.4	青灰色	密	魚好	小片	底部外ヘラキリか、立ち上がり5mm
66 A		杯身	(8.6)	(11.6)	3.8	青灰色 (自然釉)	密 (黒色粒)	魚好	小片	立ち上がり5mm
67 K		杯身	10.2	12.1	3.4	灰色 (薄く自然釉)	密	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、立ち上がり5mm
68 D		杯身	10.1	12.1	3.7	灰褐色 (一部自然釉)	密	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリか、立ち上がり4mm
69 C		杯身	10.4	12.0	2.8	灰褐色	密 (黒色粒)	堅緻	1/4残	底部外ヘラキリか、立ち上がり5mm
70 東盤 中盤		杯身	9.9	11.8	3.1	灰色 (自然釉)	密	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり3mm
71 D		杯身	9.4	11.0	3.1	灰青色 (一部自然釉)	密 (單色粒)	堅緻	1/2残 (正大)	底部外ヘラキリか、立ち上がり5mm
72 C		杯身	10.0	12.0	2.8	灰色 (自然釉)	密 (黒色粒)	堅緻	1/4残	外調整不明、立ち上がり2mm
73 G		杯身	10.0	11.6	3.2	灰褐色 (薄く自然釉)	密 (黒色粒)	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり6mm
74 D		杯身	9.9	11.9	3.4	灰色 (自然釉)	密	堅緻	2/3残 (重小)	外不規則、立ち上がり4mm
75 G		杯身	9.6	11.4	3.3	青灰色	2mmほどの砂粒	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリか、立ち上がり4mm
76 K		杯身	9.6	11.4	3.0	灰褐色 (自然釉)	2mmほどの砂粒	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリか、立ち上がり3mm
77 E		杯身	9.9	11.7	3.2	灰青~灰色	2mmほどの砂粒	良好	1/4残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
78 K		杯身	9.7	11.6	3.1	濃灰褐色 (自然釉)	密	堅緻	1/2残 (重小)	底部外ヘラキリか、立ち上がり4mm
79 K		杯身	9.5	11.5	3.7	灰褐色 (自然釉)	密 (重疊付着)	堅緻	ほぼ完形	底部外不規則、同内仕上げナデ、立ち上がり4mm
80 F		杯身	9.5	11.4	3.5	灰色 (一部自然釉)	密	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり5mm
81 B		杯身	9.8	11.6	3.5	灰青色	密 (黒色粒)	堅緻	1/4残	底部外ヘラキリか、立ち上がり5mm
82 A		杯身	9.6	11.6	3.9	灰褐色 (自然釉)	密	堅緻	2/3残	底部外ヘラキリか、立ち上がり5mm
83 A		杯身	9.7	11.8	3	青灰色	密	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
84 B		杯身	9.5	11	3.1	灰褐色 (一部自然釉)	密	良好	2/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり5mm
85 A		杯身	9.5	11.7	3.1	灰褐色	密	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリか、立ち上がり2mm
86 D		杯身	9.9	11.4	3.4	灰褐色	密 (黒色粒)	堅緻	1/4残	底部外ヘラキリか、立ち上がり4mm
87 F		杯身	9.6	11.2	3.0	灰色 (一部自然釉)	密	堅緻	1/2残	底部外不規則、立ち上がり4mm
88 B		杯身	9.5	11.4	3.0	灰褐色 (自然釉)	密	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
89 H		杯身	9.9	11.9	3.2	灰~灰褐色 (自然釉)	密 (黒色粒)	堅緻	完形	底部外ヘラキリ、立ち上がり5mm
90 E		杯身	9.8	11.6	3.1	灰青~灰色 (薄く自然釉)	密	堅緻	3/4残 (正大)	底部外ヘラキリ、同内仕上げナデ、立ち上がり4mm
91 K		杯身	9.6	11.4	2.8	灰褐色 (愛宕郡自然釉)	密	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
92 I		杯身	9.7	11	3.0	青灰褐色 (自然釉)	密 (黒色粒)	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ接ナデ、立ち上がり5mm
93 K		杯身	9.4	11.5	3.0	灰色 (一部自然釉)	密	堅緻	1/2残	外調整不明、立ち上がり4mm
94 E		杯身	9.3	11.4	3.3	灰白色 (自然釉)	密	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリか、立ち上がり4mm
95 C		杯身	9.7	11.2	2.7	青灰色	密	堅緻	1/4残	底部外ヘラキリか、立ち上がり3mm
96 K		杯身	9.8	11.1	2.7	濃綠褐色 (自然釉)	密	堅緻	2/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり2mm
97 E		杯身	9.4	11.2	3.5	灰褐色 (自然釉)	密	堅緻	1/4残	外調整不明、立ち上がり4mm
98 M		杯身	9.2	11.1	3.0	灰~灰褐色	密	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり3mm
99 A		杯身	9.4	11.3	3.3	灰色 (自然釉)	密 (黒色粒)	堅緻	完形 (重小)	底部外ヘラキリ、立ち上がり5mm
100 A		杯身	9.1	10.9	3.3	灰褐色 (一部自然釉)	密	堅緻	2/3残	外調整不明、立ち上がり4mm
101 R		杯身	9.6	11.3	3.3	灰褐色 (自然釉)	密	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり2mm発 認より高い
102 D		杯身	9.2	11.0	3.2	灰褐色 (自然釉)	2~3mmの砂粒	堅緻	1/2残	外調整不明、立ち上がり5mm
103 I		杯身	9.0	10.8	2.9	灰色	密	ほぼ完形 (重 小)	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm	
104 T		杯身	9.3	10.9	2.8	濃灰~墨灰色	密	堅緻	2/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
105 A		杯身	9.1	10.9	3.0	灰色 (一部自然釉)	密	堅緻	1/2残 (重小)	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
106 D		杯身	8.8	10.7	3.1	濃綠色 (全面自然釉)	密	堅緻 (重疊付着)	1/4残	外調整不明、立ち上がり4mm
107 A		杯身	9.5	11.2	2.7	灰褐色 (自然釉)	密	堅緻	3/4残	底部外ヘラキリ、同内仕上げナデ、立ち上がり3mm
108 J		杯身	9.3	10.9	3.1	淡青灰褐色 (自然釉)	密	堅緻 (砂粒ふくれ)	1/3残	天井部外ヘラキリ、立ち上がり6mm
109 K		杯身	9.0	10.8	2.8	灰褐色 (薄く自然釉)	密 (黒色粒)	堅緻	完形 (重み)	底部外ヘラキリか、立ち上がり4mm
110 G		杯身	9.2	11.0	2.9	濃灰褐色 (内部墨自然釉)	密	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、同内仕上げナデ、立ち上がり2mm
111 A		杯身	9.4	11.2	2.7	灰褐色 (自然釉)	密 (黑色粒)	堅緻	1/4残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
112 C		杯身	9.4	11.1	3.1	灰青色 (自然釉)	砂粒少く(墨色粒)	堅緻	1/4残 (重小)	底部外ヘラキリか、立ち上がり4mm
113 S		杯身	9.1	11.1	2.8	灰褐色 (斑点付自然釉)	砂粒少く(墨色粒)	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
114 K		杯身	9.3	11.2	2.8	灰褐色 (自然釉)	砂粒少く(墨色粒)	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、同内仕上げナデ、立ち上がり2mm

通 番 号	出 土 場 所	器種	計測値 (cm)			外觀色調	施上	焼成	残存	形態、手法など
			口径	底径	器高					
115 G	杯身		9.1	11.0	3.0	青灰色（一部自然釉）	素	堅緻	2/3残	底部外ヘラキリ後仕上げナデ、立ち上がり4mm
116 C	杯身		9.1	11.3	3.2	灰褐色（丸脚縫）	素（黑色粒）	堅緻（氣壁付）	2/3残	底部外ヘラキリか、立ち上がり4mm
117 F	杯身		9.0	10.8	2.9	灰色	3mmほどの砂粒	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、内仕上げナデ、立ち上がり3mm
118 F	杯身		8.9	11.1	3.1	灰色	素（黑色粒）	堅緻	3/4残	底部外ヘラキリ後仕上げナデ、立ち上がり3mm
119 I	杯身		9.1	10.7	3.1	灰白色（自然釉）	素	堅緻	完形（歪小）	底部外ヘラキリ後仕上げナデ、立ち上がり4mm
120 C	杯身		8.9	10.6	3.3	淡青灰色	素	角切	1/2残	底部外ヘラキリ、内仕上げナデ、立ち上がり4mm
121 D	杯身		9.3	11.4	2.9	灰色（自然釉）	素	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、立ち上がり5mm
122 F	杯身		9.0	10.7	3.1	灰色（自然釉）	素	堅緻	1/2残	外観質不明、立ち上がり4mm
123 西面 中腹	杯身		8.8	10.7	3.2	灰～灰白色（自然釉）	素	堅緻	完形（歪小）	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
124 F	杯身		9.0	10.7	3.2	灰白色（一部自然釉）	素	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
125 K	杯身		8.7	10.4	2.6	過熟色（白色粒）	素	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり3mm
126 H	杯身		8.9	10.5	2.7	灰色	2~3mmの砂粒	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり3mm
127 B	杯身		8.7	10.4	2.6	灰～灰青色	素	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、立ち上がり3mm
C	杯身		8.9	10.8	2.8	青灰色	素（黑色粒）	堅緻	2/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
129 C	杯身		8.7	10.3	2.5	灰青色	素（粉砂粒）	堅緻	1/3残	底部外ヘラキリ、内仕上げナデ、立ち上がり4mm
130 E	杯身		8.9	11.0	2.9	灰褐色（一部自然釉）	素	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
131 D	杯身		8.8	10.7	2.8	灰褐色（一部自然釉）	3mm砂粒	堅緻	1/4残	底部外ヘラキリ後仕上げナデ、立ち上がり3mm
132 M	杯身		8.7	10.6	2.9	灰褐色（自然釉）	素	堅緻（燒毛ぐれ）	2/3残	底部外ヘラキリ、立ち上がり4mm
133 A	杯身		8.6	10.6	3.0	灰青色	素	良好	1/2残	底部外ヘラキリ、立ち上がり5mm
134 A	杯身		8.6	9.6	2.9	淡水褐色	素	堅緻	2/3残	底部外ヘラキリ、同内仕上げナデ、立ち上がり4mm
135 A	杯底		7.5	9.0	3.0	淡赤褐色（自然釉）	素	堅緻	完形	底部小崩陥
136 J	杯底		7.2	9.4	2.9	灰～灰濃灰色	素	堅緻	1/2残（歪大）	内外ともヨコナデか
137 B	杯底		7.3	9.3	3.1	灰褐色	素	良好	1/2残	天井部外ヘラキリか
138 K	杯底		7.7	9.8	2.9	淡褐色	素	良好	1/3残	天井部外ヘラキリか
139 H	杯底		8.0	10.0	2.6	灰色（薄く自然釉）	素	堅緻	完形（歪）	ヨコナデ
140 西面 小腹	亞笠		7.3	9.6	2.7	灰褐色（自然釉）	素	堅緻	完形（歪）	外観質不明瞭
141 K	杯底		7.8	9.8	2.8	灰白色（自然釉）	素（黑色粒）	堅緻	1/3残（歪）	天井部外ヘラキリか
142 G	杯底		8.0	9.9	3.2	灰～灰青色（自然釉）	素	堅緻	一船欠損	ヨコナデ
143 A	作蓋		8.2	10.4	3.1	灰白色（自然釉）	素（黑色粒）	堅緻	完形（歪）	天井部外ヘラケズリ周内仕上げナデ
144 A	作底		8.2	9.5	3.5	灰青～灰赤色	素（黑色粒）	良好	2/3残（歪小）	底部外ヘラキリか
145 M	杯身		8.4	9.1	3.1	青灰色	素	堅緻	1/3残	底部ナデ、肩に浅い沈痕
146 K	杯身		8.5	9.0	3.0	淡灰褐色	細膩（褐色粒）	堅緻	1/4残	底部外ヘラキリか
147 A	杯身		8.4	9.4	4.4	灰～灰赤色	素（黑色粒）	堅緻	2/3残	底部外ハリ痕
148 A	杯身		9.4	9.5	3.5	淡灰～灰赤色	素	良好	1/3残（歪小）	底部外ヘラキリか
149 F	杯身		8.9	9.6	3.2	青灰色	素	堅緻	1/2残	底詰外ヘラケズリ、沈痕
150 F	杯身		9.2	9.6	3.6	灰褐色	素	堅緻	1/2残（歪小）	底部外ヘラケズリ
151 B	杯身		9.0	9.7	4.0	灰白～灰青色	素	堅緻	1/2残	底部外ヘラキリか、沈痕
152 B	杯身		9.5	9.7	3.7	淡褐色	素	良好	3/4残	底部外ヘラキリか
153 D	杯身		9.1	9.7	3.7	灰～灰白色	素	良好	1/2残（歪小）	底部外ヘラケズリ、同内仕上げナデ
154 G	蓋		16.5	18.1	4.2	灰褐色（薄く自然釉）	素（黑色粒）	堅緻	1/4残	天井部内仕上げナデ
155 C	作蓋		6.1	9.4	4.1	灰褐色	素	堅緻	1/3残	天井部外ヘラケズリ
156 K	瓶		12.2	12.5	4.5	灰褐色	素	堅緻	1/3残	ヨコナデ
157 D	瓶		12.8	13.0	4.5	灰褐色	素	良好	1/2残	底部外ヘラケズリ
158 B	瓶		13.9	14.0	4.5	淡灰～淡黃褐色	素	良好	1/4残	薄手
159 C	鉢	(190)	159	160	4.5	淡褐色	素	軽質	小片	底部外ヘラケズリか
160 A	鉢	(190)	160	161	4.5	灰褐色	素	軽質	1/5残	底部外ヘラケズリ
161 C	皿	(280)	161	162	4.5	灰褐色～淡灰色	素	軽質	小片	底部外ヘラケズリ
162 A	皿	(27.5)	162	163	4.2	淡青褐色	素	軽質	小片	底部外ヘラケズリ、外一語ヘラケズリ
163 H	耳付瓶		8.5	9.5	4.5	淡青色	素	良好	1/5残	底部外不完全ナデ、沈痕
164 A	耳付瓶		10.5	11.5	4.8	青灰色（一部自然釉）	素	堅緻	1/4残	内外ヨコナデ、体部外に辯擦
165 C	耳付瓶		12.5	13.5	4.8	灰～灰白色	素	良好	1/5残	体部外：2条の沈痕
166 B	耳付瓶		11.0	12.0	4.8	灰褐色～褐色	素	堅緻	1/4残	内外ヨコナデ
167 C	耳付瓶		10.2	11.0	4.8	灰褐色～淡灰色	素	堅緻	1/5残	内外ヨコナデ
168 F	耳付瓶		10.7	11.5	4.8	灰～灰青色	素	良好	脚部完形	内外ヨコナデ
169 C	耳付瓶		10.0	11.0	4.8	灰褐色～淡褐色	3mmほどの砂粒	良好	脚部完形	瓶底部内仕上げナデ
170 A	耳付瓶		10.0	11.0	4.8	淡褐色	素	軽質	1/4残	内外ヨコナデ
171 A	耳付瓶		9.7	10.5	4.8	淡灰色	素	軽質	1/4残	体部外に2条の沈痕
172 N-J	性跡		13.1	14.0	4.8	淡青灰色	2mmほどの砂粒	堅緻	1/4残	体部外に2条の沈痕

編 番 号	出 土 場 所	形 様	計測値(cm)			外因色調	边上	焼成	残存	形態、手伝など
			口徑	底径	高さ					
173	K・M 窓杯	13.2 脚径9.9	10.0	9.5	灰~灰青色	密	良	杯部1/3強	杯、脚部外に1条の沈線	
174	K 高杯	13.2 脚径9.9	10.8	9.8	灰~灰白色	密	軟質	杯部1/2強	杯、脚部外に1条の沈線	
175	K 窓杯	13.4 脚径10.1	9.8	9.8	灰褐色(杯部外に自然鉛)	密	堅焼	杯部1/3強	杯部に2条、杯部に1条の沈線	
176	H 窓杯	脚径9.6	灰~灰白色	密	やや軟質	杯部1/4強	杯部外に1条の沈線		やや軟質	
177	K 窓杯	13.3	浅黄褐~淡赤褐色	密	軟質	杯部1/3強	杯部外ヘラケズリ		内外套コナデ	
178	H 高杯	13.3 脚径9.2	9.5	9.5	灰白色	密	軟質	杯部一部	内外套コナデ	
179	K 窓杯	12.4 脚径9.2	9.4	9.4	灰白色	密	軟質	2/3強	杯底部内仕上げナデ	
180	K 高杯	12.5 脚径10.1	9.1	9.1	灰白色	密	軟質	杯部1/2強	杯部外に1条の沈線	
181	F 窓杯	12.2 脚径9.9	9.6	9.6	灰~灰褐色	密	良好	2/3強(过大)	内外套コナデ	
182	K 窓杯	11.9 脚径9.1	9.1	9.1	灰~灰白色	4cmほどの砂粒	やや軟質	一部欠損	内外套コナデ	
183	E 窓杯	11.8 脚径9.1	9.1	9.1	灰~淡灰褐色	密	良好	杯部1/2強	杯底部外ヘラケズリにNコナテ	
184	A 窓杯	11.5 脚径9.9	10	9.5	灰~灰褐色	密	堅焼	杯部1/3強	内外套コナデ	
185	東竈 中層	窓杯	12.7 脚径9.2	8.2	灰褐色	5cmほどの砂粒	堅焼	1/3強	内外套コナデ	
186	N 高杯	11.9 脚径8.9	8.4	8.4	灰褐色	密	堅焼	杯部1/3強	内外套コナデ、杯部外に1条の沈線 3.6cmと細孔	
187	N 高杯	11.8 脚径9.5	8.4	8.4	灰褐色	密	堅焼	杯部1/3強	内外套コナデ、杯部外に1条の沈線	
188	H 高杯	12.0 (8.7)	8.4	8.4	灰褐色	2cmほどの砂粒	堅焼	杯部小片	内外套コナデ	
189	H 高杯	17.1	浅灰褐色	密	やや軟質	1/4強	杯部外下ヘラケズリ後ナデ、杯 底部内仕上げナデ			
190	N 高杯	14.8	灰白色(自然鉛)	密	堅焼	1/3強	内外套コナデ、杯底外に沈線			
191	B 窓杯	13.1	濃灰褐色	密	堅焼	杯部1/3強	杯底部内仕上げナデ			
192	H 高杯	脚径9.9	白灰色	密	良	1/3強	杯部外に1条の沈線			
193	F 窓杯	脚径10.5	灰褐色(自然鉛)	密	堅焼	脚部完形	杯部外に1条の沈線			
194	E 窓杯	脚径9.0	灰褐色	密	良	杯底1/4強	内外套コナデ			
195	J 窓杯	脚径9.0	灰~灰褐色	密	良好	杯部内仕上げナデ、脚部外に1条 の沈線				
196	G 窓杯	脚径 10.6	淡灰~灰褐色(自然鉛)	最大3cmの砂粒	堅焼	脚部完形	脚部外に1条の沈線			
197	C 窓杯	脚径 10.2	淡水褐色	密	やや軟質	脚部2/3強	杯底部内仕上げナデ、脚部外に1条 の沈線			
198	F 窓杯	脚径9.3	灰褐色	密	良	脚部完形	杯底部外ヘラケズリ(ア)			
199	H 窓杯	脚径9.6	灰褐色	密	堅焼	1/3強	脚部内に1条の浅い沈線			
200	L 窓杯	脚径9.5	灰褐色	2~3mmの砂粒	良好	2/3強	脚部外に1条の浅い沈線			
201	J 窓杯	脚径9.4	灰~白灰色	密	軟質	脚部は一部 脚部内仕上げナデ	脚底馬上仕上げナデ			
202	A 窓杯	脚径8.9	灰褐色	密	堅焼	脚部1/3強	内外套コナデ			
203	F 高杯	脚径8.6	灰褐色	密	やや軟質	1/3強	脚部外に1条の沈線			
204	J 窓杯	脚径9.9	灰褐色	2cmほどの砂粒	堅焼	脚部1/3強	脚部内に1条の沈線			
205	K 窓杯	脚径8.1	淡灰褐色(自然鉛)	やや粗い	堅焼	脚部完形	脚部外に1条の沈線			
206	K 窓杯	脚径8.1	淡灰褐色(自然鉛)	やや粗い	堅焼	脚部完形	脚部内に1条の沈線			
207	C 窓杯	脚径9.1	灰褐色~淡茶灰褐色	密	良	脚部1/3強	脚部内に1条の沈線			
208	F 窓杯	脚径9.2	灰褐色(自然鉛)	密	堅焼	脚部2/3強	内外套コナデ			
209	F 窓杯	脚径9.2	灰褐色	密	良好	脚部完形	脚部内仕上げナデ、外上ハラ ケズリ(ア)			
210	K 窓杯	12.7 脚径9.6	7.7	7.7	灰~灰白色	密	軟質	2/3強	外ヨコナデ、内底	
211	K 窓杯	12.5 脚径8.5	7.9	7.9	灰~灰白色	密	やや軟質	1/2強	内外套コナデ	
212	D 窓杯	11.8 脚径9.2	7.4	7.4	灰褐色	2~3mmの砂粒	やや軟質	杯底1/2強	杯底部内仕上げナデ	
213	西竈 中層	窓杯	11.9 脚径8.4	7.1	白灰色	密	軟質	杯部1/3強	脚底馬上仕上げナデ、脚底部内 ヘラケズリ(ア)	
214	M 窓杯	11.4 脚径9.9	7.5	7.5	灰~白灰色	密	軟質	杯部1/2強	内外套コナデ	
215	東竈 中層	窓杯	11.4 脚径8.8	7.5	白灰色	密	軟質	杯部1/4強	内外套コナデ	
216	K 窓杯	11.5 脚径8.5	7.6	7.6	淡青褐色	密	軟質	脚部完形	杯底部内仕上げナデ	
217	K 窓杯	11.2 脚径8.6	7.4	7.4	淡黄褐色	密	軟質	脚部1/3強	内外套コナデ	
218	D 窓杯	11.1 脚径8.8	7.4	7.4	灰褐色	密	やや軟質	杯部1/3強	内外套コナデ	
219	F 窓杯	10.8 脚径8.7	6.4	6.4	灰褐色	密	良	杯部1/3強	杯底部内仕上げナデ	
220	D 窓杯	12.7	灰白色	密	軟質	脚部2/3強	杯底部外一部ヘラケズリ			
221	E 窓杯	11.6	灰白色	密	軟質	脚部1/2強	内外套コナデ			
222	K 窓杯	12.0	灰褐色~淡赤褐色	密	堅焼	杯部1/3強	内外套コナデ			
223	F 窓杯	脚径9.1	灰~淡青褐色	密	良	脚部1/3強	内外套コナデ			
224	K 窓杯	脚径8.3	浅黄色	密	軟質	杯底1/2強	内外套コナデ、薄手			
225	M 窓杯	脚径8.9	灰褐色	密	良	脚部1/4強	内外套コナデ			
226	A 窓杯	脚径7.8	灰白色	密	やや軟質	小片	杯底部内仕上げナデ			
227	S 窓杯	脚径8.9	通灰~灰褐色	密	良好	杯部小片	内外套コナデ			
228	R 窓杯	脚径8.9	灰~灰褐色(自然鉛)	密	堅焼	脚部(密)	内外套コナデ			
229	E 窓杯	脚径9.3	灰褐色	密	良	脚部2/3強	杯底部内ヘラケズリか			
230	E 窓杯	脚径9.4	灰白色	密	軟質	脚部1/4強	杯底部外ヘラケズリ			

附載1 昭和53年確認調査の出土遺物

番号	出土位置	出土地	断面幅(cm)			外側面肉	筋土	被成	残存	形態、手法など
			口径	直径	容積					
231 E	高杯	脚付9.0	灰色	密	良	脚部1/3残	杯底部内仕上げナダ			
232 A	高杯	脚付9.5	天白色	密	較質	脚部完形	内外ヨコナダ			
233 J	高杯	脚付8.4	灰色(一部に火色)	密	やや軟質	脚部完形	内底ヨコナダ			
234 D	高杯	脚付8.4	酒火色	3mmほどの砂粒	良好	脚部一部欠損	内底ヨコナダ			
235 C	高杯	脚付8.5	灰白色	密	較質	脚部完形	杯底部内仕上げナダ			
236 B	高杯	脚付8.9	淡灰白~灰褐色	密	較質	脚部1/3残	内外ヨコナダ			
237 K	高杯	9.5	灰色(一部自然釉)	密	堅致	脚部1/3欠損	内底ヨコナダ、外に2条の沈線			
238 M	高杯	9.2	灰色	密	堅致	脚部1/3残	内外ヨコナダ、外に1条の沈線			
239 M	高杯	9.2	灰~青灰色	密	良好	脚部1/3残	内外ヨコナダ			
240 A	高杯	8.3	淡灰褐色~火色	密	良	脚部1/3残	杯部外に浅い沈線			
241 A	高杯	8.0	青灰色	密	堅致	脚部1/3残	杯部外に浅い沈線			
242 H	高杯	脚付7.0	青灰色(一部自然釉)	密	堅致	脚部2/3残	脚部外に1条の沈線			
243 G	高杯	脚付7.1	灰~白灰色	密	較質	脚部2/3残	脚部外に1条の沈線			
244 A	高杯	脚付7.7	灰褐色	密	やや軟質	脚部4/5残	脚部外に1条の沈線			
245 A	高杯	脚付7.1	灰白色	密(無色粒)	堅致	脚部3/4残	脚部外に1条の沈線			
246 B	高杯	脚付7.7	灰色(自然釉)	密(黑色粒)	堅致	脚部2/3残	脚部外に1条の沈線			
247 A	高杯	脚付7.2	灰青色(自然釉)	密	堅致	脚部3/4残	脚部外に1条の沈線			
248 K	高杯	脚付7.7	青紫灰色	密	堅致	脚部1/3残	脚部外に1条の沈線			
249 J	瓶	9.9	灰色(一部自然釉)	密	堅致	口縁部一部	口縁部と瓶部外に浅い沈線			
250 D	瓶	10.4	灰色	密	良	口縁部1/3残	瓶部外に浅い沈線			
251 A	瓶	9.0	灰白色	密(黑色粒)	堅致	1/4残	体部外に浅い沈線			
252 A-B	下瓶	16.9	灰~淡黄色	密	較質	体部1/2残	体部下端ヘラケズリ			
253 H	平底	7.3	淡灰白色(自然釉)	密	堅致	底部1/2残	内底ヨコナダ			
254 A	子瓶	6.1	灰色	密	良好	1/2残	内外ヨコナダ			
255 I'	平底	6.4	灰色	密	良好	口縁はぼ起立	内外ヨコナダ			
256 素盞	平底	7.2	灰色	密	良好	口縁部分	内外ヨコナダ			
257 K	長颈壺	8.0 13.6	灰~淡灰白色(自然釉)	密	堅致	竿形(直)	竿部、体部沈痕と体剥離突、体部トマツケズリ			
258 F	長颈壺	7.5	灰~灰白色(自然釉)	密	堅致	小片	竿部2条光痕			
259 R-D	長颈壺	18.5	灰~黑灰色	3mmほどの砂粒	較質	底致	底部外ヘラケズリ、筒内仕上げナダ			
260 K	長颈壺	16.5	灰褐色(自然釉)	密	堅致	1/4残	内外ヨコナダ			
261 G-F	長颈壺	16.5	灰青色	密	良好	1/3残	体部外下端ヘラケズリ			
262 A	長颈壺	17.4	灰色(自然釉)	密(黑色粒)	堅致	1/4残	体部外下半ヘラケズリ			
263 M-N	長颈壺	17.0	灰褐色(自然釉)	密致	微密	1/3残	底部外ナダ			
264 N-M	長颈壺	12.8	灰色(自然釉)	3mmほどの砂粒	堅致	2/3残	底部外ナダ			
265 B	長颈壺	脚付13.6	淡灰~淡赤茶褐色	密	良	1/5残	内外ヨコナダ			
266 C	長颈壺	脚付12.8	灰褐色(自然釉)	密	堅致	小片	内外ヨコナダ			
267 H	長颈壺	脚付12.5	灰褐色	密	堅致	1/5残	内外ヨコナダ			
268 H	把頭壺	10.6	32.灰青色(自然釉)	密	堅致	2/3残(直)	天井部外ナダ			
269 G	把頭壺	9.8	灰褐色	やや粗い	堅致	1/5残	外側不明瞭、内底ヨコナダ			
270 G	把頭壺	10.1	30.淡灰褐色	密(黑色粒)	堅致	1/5残	天井部外ナダ			
271 F	把頭壺	10.2	灰白色(自然釉)	密	堅致	1/4残	天井部外ヘラケズリ			
272 A	把頭壺	9.0	25.灰褐色	密(黑色粒)	良好	1/3残	天井部外ヘラケズリ			
273 A	把頭壺	9.8	灰~灰褐色(自然釉)	密(黑色粒)	堅致	1/4残	内底ヨコナダ			
274 H	把頭壺	9.0	31.灰褐色(落く自然釉)	密	堅致	1/3残	天井部外不明瞭			
275 A	把頭壺	9.2	31.灰褐色(自然釉)	密	良好	1/4残	天井部外ヘラケズリ			
276 N	經通壺	7.9 13.5	淡褐色(自然釉)	密	堅致	1/3残	内底ヨコナダ			
277 D	經通壺	7.1 12.0	灰色(自然釉)	密	堅致	1/4残(薄小)	内外ヨコナダ、蓋付裏			
278 A	經通壺	6.4 12.6	灰褐色(自然釉)	密(黑色粒)	堅致	1/4残	内外ヨコナダ、体部外1条の沈線			
279 E-F	經通壺	6.4 12.0	灰白色	密	やや軟質	2/3残	内外ヨコナダ、肩に沈線			
280 N-素盞 中腰	短颈壺	6.2 11.6 (8.2)	灰褐色	密	良	1/2残	内外ヨコナダ			
281 D	短颈壺	6.0 12.5	淡青色(一部自然釉)	密	堅致	1/4残	内外ヨコナダ、蓋の直路、肩に沈線			
282 A	壺	9.9	青灰色(内底自然釉)	密	良好	小片	不明瞭			
283 N	壺	10.9	灰~灰青色	密	堅致	小片	内外ヨコナダ			
284 N	壺	9.9	灰褐色	密	良好	1/2残	外半ドタキにカキメ、内同心四タクキ			

番号	出土場所	器種	剖面値 (cm)			外面部質	胎上	焼成	残存	態様、手法など
			口径	底径	厚度					
285	B	甕	13.1			灰褐色（薄く自然釉）	密	堅密（深盤付蓋）	1/5強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
286	F	甕	12.9			黑从色	密	堅密	1/5強	外平行タキニ、内同心円タキ
287	F	甕	14.2			白灰色	密	軟質	小片	内同心円タキ、ヘラ記号
288	D	甕	13.6			灰褐色（薄く自然釉）	密	堅密	1/5強（底小）	外堅密平行タキニにカキメ、内同心円タキ
289	K	甕	11.8	22.3		海綿～赤褐色	密	やや軟質	1/6強（底小）	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
290	G	甕	18.3			灰褐色	密	良	1/5強（底）	内平行タキニにカキメ、内同心円タキ
291	K	甕	21.0			浅黄褐色	密	軟質	小片	内凹ヨコタナフ
292	J	甕	21.0			灰褐色～灰褐色	密	堅密	小片	内凹ヨコタナフ
293	L	甕	16.5			灰～灰褐色（自然釉）	密	堅密	2/3強（底入）	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
294	I-G	甕	20.9			灰褐色（自然釉）	密	堅密	口縁部（底大）	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ、ヘラ記号
295	A	甕	14.5	22.9		灰褐色～灰褐色（内自然釉）	密	堅密	1/5強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
296	E	甕	15.4			灰白色（自然釉）	密	堅密	1/5強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
297	N	甕	16.6			白灰色	密	軟質	小片	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
298	N	甕	17.0			灰褐色	密	やや軟質	小片	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
299	E	甕	17.4			灰白色	密	軟質	1/5強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
300	F	甕	18.0			灰褐色（自然釉）	密	堅密	1/5強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
301	K-F	甕	18.5	27.5		灰白色	密	軟質	1/3強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
302	G	甕	18.0			灰褐色（自然釉）	密	堅密	小片（底）	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
303	西壁中層	甕	19.7			灰褐色（一部自然釉）	密	堅密	小片（底小）	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
304	C	甕	22.0			白灰～黒褐色	密	軟質	1/5強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ、ヘラ記号
305	E	甕	21.5			白灰色	密	軟質	1/5強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ、ヘラ記号
306	F	甕	25.0			灰白色	密	軟質	1/4強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ、ヘラ記号
307	N	甕	20.8			灰白色	密	軟質	1/5強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
308	J	甕	21.0			灰青色	密	良	1/3強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
309	N	甕	23.4			淡青灰～灰色	密	良好	小片	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
310	K	甕	21.0			灰～灰褐色	密	良好	1/2強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
311	N	甕	23.8	42.6		灰～淡緑色（自然釉）	密	堅密	1/3強（底）	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
312	G	甕				淡灰色（薄く自然釉）	密	堅密	小片	口縁部外に鶴嘴波状
313	A-II	甕				灰褐色（内自然釉）	密	堅密	小片	口縁部外に鶴嘴波状
314	L	甕	20.9	37.0		灰褐色（自然釉）	密	堅密	体部中央まで	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
315	H-D-K	甕	22.0			灰白～白灰色	密	堅密	1/4強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
316	H	甕	22.7			灰褐色（内外自然釉）	5mmほどの移栓	堅密（深盤付蓋）	1/4強	外平行タキニにカキメ、内同心円タキ
317	I	甕	41.8			灰褐色	密	灰	小片	口縁部外に鶴嘴波状と沈摩
318	J	甕				灰褐色	密	良好	小片	口縁部外に鶴嘴波状と沈摩
319	B	甕				酒灰褐色	密	堅密	小片	口縁部外に鶴嘴波状、沈摩、剥突
320	C	甕				灰～青灰色	密	堅密	小片（底）	口縁部外に鶴嘴波状と沈摩、剥突
321	G	甕				青灰色	密	堅密	小片	口縁部外に鶴嘴波状、沈摩、剥突
322	F-E	甕				灰褐色（薄く自然釉）	5mmほどの移栓	堅密	小片	口縁部外に鶴嘴波状と沈摩
323	D	甕	58.9			漂灰褐色	密	堅密	1/5強	口縁部外に鶴嘴波状、沈摩、剥突

附載2 寒風古窯跡群の物理探査

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

金田 明大・西村 康・西口 和彦

はじめに

寒風古窯跡群は、古代における窯業製品の…人生産地である備前地域の中核的な窯として著名である。1977年には、岡山県教育委員会と奈良国立文化財研究所が共同で磁気探査を実施し、4つの地点において磁気異常を認めている（岡山県教育委員会1978）。

備前国は延喜式において須恵器の調査図の1つとしてあげられており、古代宮都を含めた広域の供給が想定されるが、未だその実態は明らかになっておらず、その実態の解明が待たれるところである。従って、寒風窯の研究は備前地域のみに限らず、より広範囲にわたる歴史事象の研究を行う上で不可欠なものといえ、その重要性は現在においても変わりがない。

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所では、物理探査による窯業生産遺跡の情報収集を課題のひとつとしており、今回、瀬戸内市教育委員会との共同研究として再び寒風窯の物理探査を行うこととした。今回の探査においては、史跡指定地内における窯の分布の把握と、遺跡範囲の確定を目的とする。また、探査成果を反映した発掘調査の実施と成果の検討を通じて、探査技術の応用・向上や発掘調査との有効な連携を進める実践を行うこととした。

今回の寒風窯の探査は、2005年3月5・6日および11～13日に実施した。

まず、対象範囲に東西・南北30mの方眼を設定した。これは平面直角座標系（平成十四年国土交通省告示第九号）V系に基づいているが、計測の手間を考慮して、やや北で東に振る軸線となる。

これによると、対象範囲内は21の地区に分割できる（図1）。いずれの探査もこの地区割に従ってデータを取得した。

成果については2005年の史跡寒風古窯跡群整備委員会や、学会等で一部について報告を行っているが（金田他2006）、技術的な進展も含め、今回の報告に際して一部再解析を行っている。

以下、手法別に探査の成果について述べる。

探査方法

本遺跡の探査には、磁気探査、地中レーダ（GPR）探査、電気探査の3つの手法を用いた。通常、熱残留磁気を有する窯の探査は磁気探査により行うことが一般的であるが、今回は後継して予定されている試掘調査に資するより詳細な情報を得ること、各探査手法間の比較検討と特性に応じた情報の統合による遺構の判定を目的として、磁気探査を中心としつつ、必要な部分において他の手法における探査を実施し、今後の生産遺跡における探査のより効果的な適用を検討することとした。

磁気探査

磁気探査は磁気を地表から計測し、地中に存在する磁気を帯びた対象物の有無を検討する方法である。窯は高熱に熱せられることにより熱残留磁気を獲得しているため、実績がある対象である。

今回の磁気探査では、フラックスゲート磁力計によるもの（図2）と、プロトン磁力計による計測（図3）を行った。前者は、迅速な情報の取得が可能であるが、比較的浅い部分の磁気異常のみを捉えるに留まる。後者はやや作業効率が劣るもの、より深い部分の磁気異常を捉えることが可能である。このため、まずフラックスゲート磁力計により対象範囲全体を対象として探査を行い、その結果を受けて、必要な部分に応じてプロトン磁力計や他の手法による探査を追加することとした。

フラックスゲート磁力計はFM-36・18（いずれも英Geoscan Research社）を用いた。この磁力計は地磁気の鉛直成分の差分を計測するものである。探査面積は約16200m²である。

プロトン磁力計は、G-856（米Geometrics社）2台を連動させて行った。この磁力計は地磁気の全磁力を計測するものである。探査面積は約1600m²である。

いずれの成果もnT（ナノテスラ）で磁気強度を示す。

成果はSurfer8（Golden Software社）を用いて平面図を作成した。

GPR探査

GPRによる探査は、電磁波をアンテナから地中へ発信し、その反射波を受信することで、遺構・遺物や地層の境界などの存在を検討する方法である。深度は時間ns（ナノセコンド）で記録される（図4）。使用するアンテナの周波数により、有効な探査深度と分解能に違いがあるため、目的とする対象に応じて、アンテナとデータの収録時間を選択することとなる。

1号窯付近（16・19地区）および2号窯付近（6地区）2ヶ所で実施した。前者は1978年の探査による反応がみられたものの、前述の通り磁気探査による窯の存在を把握することが難しかった点と、周辺に未知の窯が存在する可能性が指摘されていたことで、磁気探査以外の方法での検討が必要と判断した。後者については良好な遺存状況を様々な方法により検討することとした。

機器はSIR-2P型（米GSSI社）と中心周波数400MHzのアンテナを用いて行った。解析はGPR-Slice5.0および6.0（Dean Goodman氏作成）により行った。取得された断面データ（プロファイル）をタイムスライス法により一定時間（深度）毎に並べて、平面図を作成した。この平面図と断面図を用いて、遺構の可能性の高い反応を検討することとした。探査面積は約2800m²である。

電気探査

電気探査は、地中の比抵抗を測定することにより、遺構などの地下の異常を捉える方法である（図5）。この方法には多様な手法が存在するが、今回電気探査として述べるのは直流電気探査法の中の比抵抗法によるものである。

これは、接地した電極を用いて、地中に電流を流し、その電位（抵抗）を測定するものである。電流および電位電極の配置に応じて複数の方法がある。今回の探査ではwenner法を用いた。

機器はRM15（英Geoscan Research社）を用いた。解析・表示はRES2DINV（Geotomo Software社）・Surfer8（Golden Software社）を用いた。なお、解析は大韓民国文化財研究所吳玄德氏の協力を得た。探査面積は約1200m²である。

以後、探査の成果を対象範囲全域、1号窯周辺、2号窯周辺の3つの探査対象地別に報告を行う。

全域の探査

フラックスゲート磁力計による探査

今回の探査では、計測は東西方向に行い、南北1m間隔の測線を設定し、東西1m間隔で計測を行った（図6）。

この結果、数箇所の地点で磁気反応を明らかにすることができる。2号窯の存在が知られている位置では北側に負、南側に正の値をとる反応をみることができる。

なお、1978年の探査において明瞭な磁気異常を確認することができた1号窯周辺をはじめとして、3号窯・4号窯付近においても強い磁気異常が存在する部分があるが、その位置の多くはコンクリート製の史跡境界杭と一致しており、杭の中に鉄綱などの心材が入っていることによる反応であろう。このため、これらの窯の周辺は以前に比べて窯の磁気異常を明瞭に捉えることが難しくなっている。指定され、また整備された状況において、非破壊的な手段による検討は、遺跡の保全と活用を両立させる方法として利用が進むと考えられるが、その可能性を残すためには、探査の障害になる物の設置はなるべく避けることが望ましい。今後、史跡整備を行う上で、注意が必要であろう。

1号窯周辺の探査

GPR探査

1号窯としては1-I・1-II号窯の2基の窯の存在が知られている（岡山県教育委員会1978）。これらの窯は西側に緩やかに傾斜する斜面に構築されている。このため、走査を南北方向に1m間隔で行った。

この結果、X=140~145、Y=65~72（1-I号窯）、X=132~136、Y=64~73（1-II号窯）の部分に長楕円形状の反射が存在しており、これを窯と考えることができる。但し、1-I号窯を考える地点については、反射が明瞭でない部分もあり、代わりに窯の中央に南北に強い線状の反射をみるとることができた。これは、以前に実施された発掘調査のトレンチの影響と考えられる（図7・8）。

注目されるのは1-II号窯の更に南のX=125~130、Y=61~72の部分に長い楕円形の反射が存在する点である。形状や長軸の方向から窯である可能性が高いと考えたが、プロファイルの検討によれば他の2基の窯より深い位置に存在しており、発掘調査による検討が必要であると考えた（図9）。成果を受けて実施された試掘調査により2基の窯に先行する時期の窯であることが確認され、探査と小面積の調査によって遺構の存在と内容を明らかにすることができた。

2号窯周辺の探査

プロトン磁力計による探査

フラックスゲート磁力計によって、2号窯は状態よく保存されていることが予想できた。このため、より詳細な情報を取得するためにプロトン磁力計による探査を実施した。計測は東西方向に行い、南北1m間隔の測線を設定し、東西1mの間隔で記録を行った。

この結果、より詳細な窯の規模を想定することが可能である（図10）。周辺は、南側に緩やかに傾斜しており、耕作地の造成によって、地形が雑壠状に整形されている。フラックスゲート磁力計による探査では、南側の低い段では磁気異常が明確に捉えられるものの、一段上がった北側、つまり窯の上端がどこまで延びているのか、という点は明確ではない。これは、磁気はその発生源から離れると

急激にその力が減衰するためであり、特に浅い部分の磁気異常しか取得できないフックスゲート磁力計では、下の段に比して地表との深さが増す上の段の磁気異常の有無を判断することが難しい（図11）。

プロトン磁力計による成果をみると、段の上にも磁気異常が連続しており、窓が上段の範囲まで及ぶことが確認できる。

GPR探査

2号窓は南に緩やかに傾斜する斜面に東北-西南を長軸にとって構築されていることが磁気探査の結果判断された。このため、南北15m、東西20mの範囲を東西方向に1m間隔で走査した（図12・13）。

まず、表層近く（0.6ns）では、磁気探査のところで述べた段差がみられる。続いて深さ3.9nsから27nsまでの南北50m、東西102m付近を中心として、円形の反射を明瞭にみることができることが注目できる。磁気探査の結果では、この反射の存在を明瞭に認識することはできておらず、同一の磁化方向を示しているものではないと考えることができる。従って、この円形の反射は窓など、熱を受けた状態のまま埋没している対象ではなく、後世の土坑である可能性が高く、また内部に金属などの磁気を帯びたものの存在は少ないと考えることができる。反射の強さからも、締まった土などの堆積が予想された。

24-30ns以下では、長径円形状の反射をみることができる。これは、磁気探査の成果と一致しており、窓の存在を捉えていると考えることができる。窓の中央部は土坑と想定した部分に影響を受けて明瞭でない部分があり、一部破壊されているとも考えることができる。なお、GPRによって明らかにされた窓体の位置は、磁気探査が示す双極子磁場の正負の境界部分となる。窓の探査は対象の特性上、磁気探査が中心となるが、これだけでその形状などを考えることは難しい。GPRを併用することにより磁気探査のみでは明らかにできない窓体の位置や詳細を示すことが可能であることを示すことができる。

試掘調査の結果、上部に想定された土坑が存在し、埋土中に窓壁片や焼成不良品などが多く含まれている状況が確認できた。窓の探査にGPRを利用することの有用性を示す好例といえるだろう。

電気探査

電気探査は東西方向に0.5m間隔で電極を配して、1m間隔で測定を行った。結果は、2次元のインバージョンを行った後、深さ毎の平面図として示す。

電気探査においても、GPRと同様に窓の位置を捉えることができる（図14）。50mおよび55mラインの断面図をみると、窓体が高い抵抗を示していることがわかる（図15）。

まとめ

土中に大きな影響を与えることなく、その情報を取得することができる文化財探査の手法は、発掘調査に比べて短期間でかつ遺構を破壊せずに広範囲の地中の情報を明らかにすることができます。その反面、取得できる情報は手法の特性に応じてそれぞれ限界を有しており、それのみで遺跡の情報を十分に取得できるものではない。考古学において必要とされる時期やより詳細な遺構の形態、含まれる

遺物の情報については、やはり発掘調査による検討が必要となる。

しかし、発掘調査を実施するにあたり、遺構の発掘を必要最小限に留め、また十分な情報を獲得するためには、調査前に可能な限りの情報を得ることが必要であり、物理探査は最も有益な方法のひとつといえる。

今回、1号窯と呼称されてきた2基の窯の南側に、新たに1基の窯の存在を、また2号窯の詳細な残存状況と、上部に土坑の存在を探査により想定することができた。その成果を参考に試掘調査区が設定され、より深い年代を示す窯の存在を確認したこと、窯の上に存在した土坑の性格を明らかにすることができたのは、大きな成果といえるだろう。

地表観察、探査から発掘へという作業行程は、遺跡を調査する上で理想的な過程といえる。寒風窯でそれを実践し、また成果を受ける形で試掘調査を行って相互の成果の比較検討ができたことは、今後この調査方法を実践し、推進していく上で価値の高い成果であるといえる。

岡山県教育委員会 1978 寒風古窯址群 岡山県教育委員会

金田明大・西村 康・西口和彦・馬場昌一・若松拳史 2006 備前寒風窯跡における物理探査と発掘調査 日本文化財探査学会研究発表要旨集

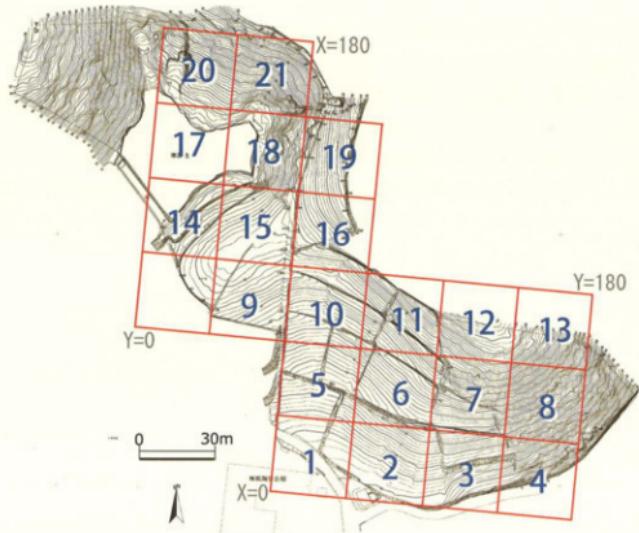


図1 グリッド設定図 (1/2,000)



図2 フラックスゲート磁力計による探査



図3 プロトン磁力計による探査



図4 GPRによる探査



図5 電気探査

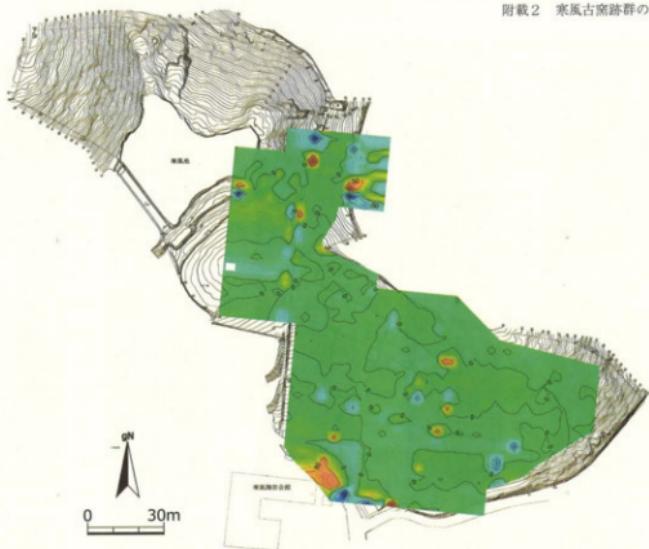


図6 フラックスゲート磁力計による遺跡全体の探査平面図（1/2,000）

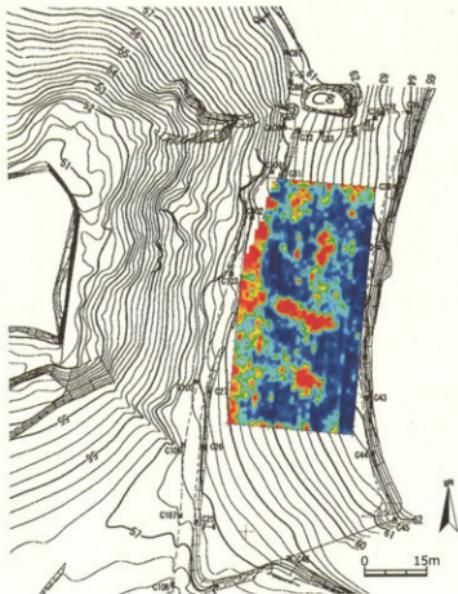


図7 GPRによる1号窯周辺の探査平面図（35-57nsの成果を累積表示）（1/1,000）

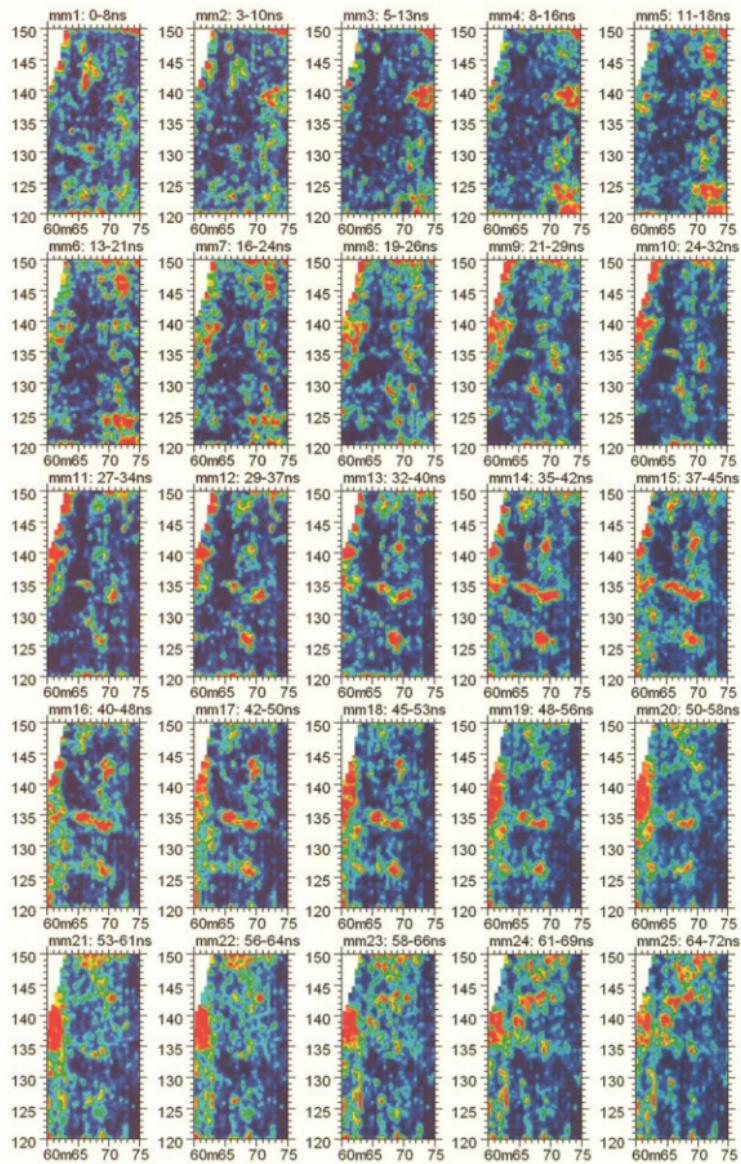


図8 GPRによる1号窯周辺の探査平面図（深度別）

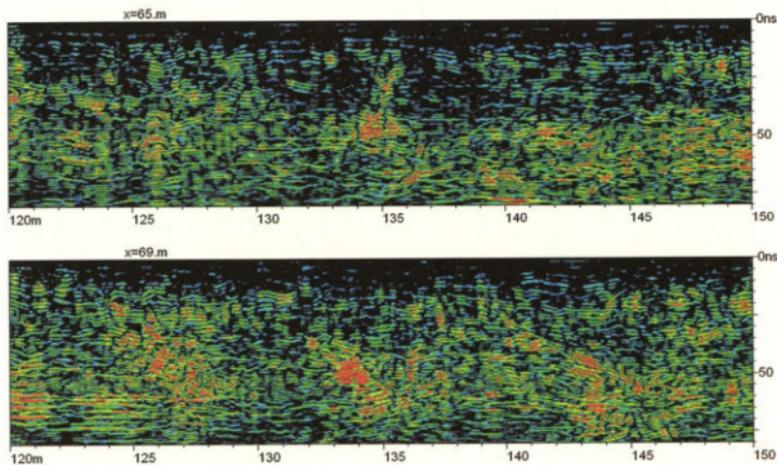


図9 GPRによる1号窯周辺の探査断面図

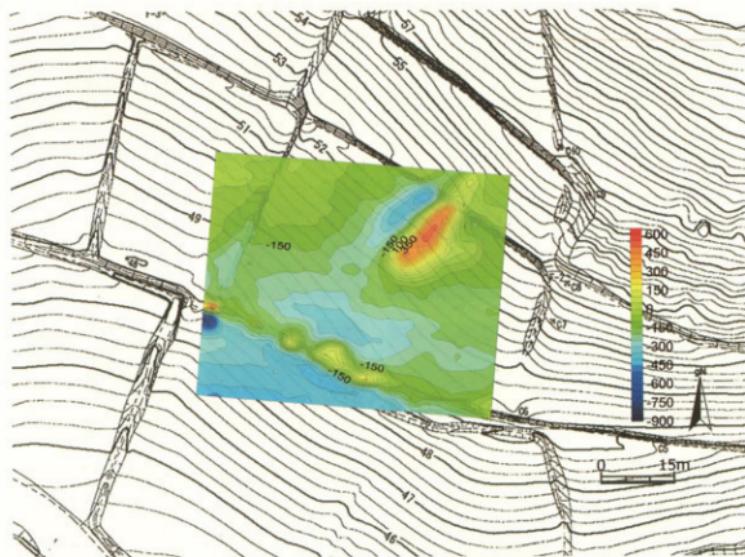


図10 プロトン磁力計による2号窯周辺の探査平面図（1/1,000）

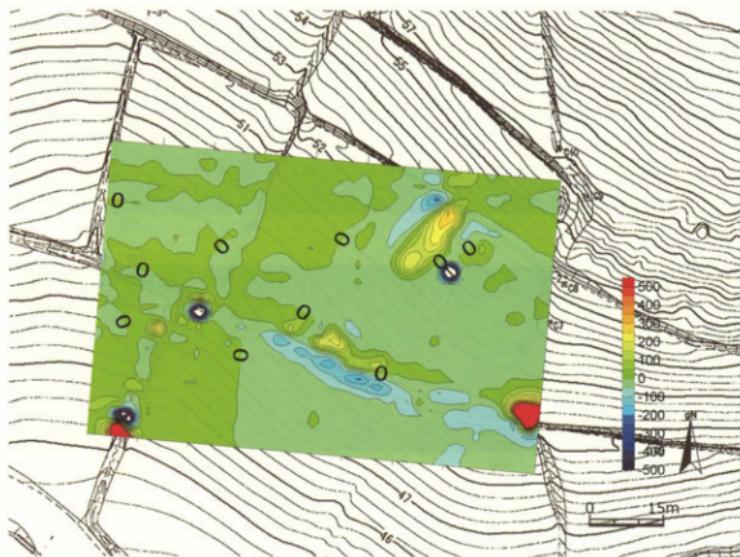


図11 フラックスゲート磁力計による2号窯周辺の探査平面図（1/1,000）

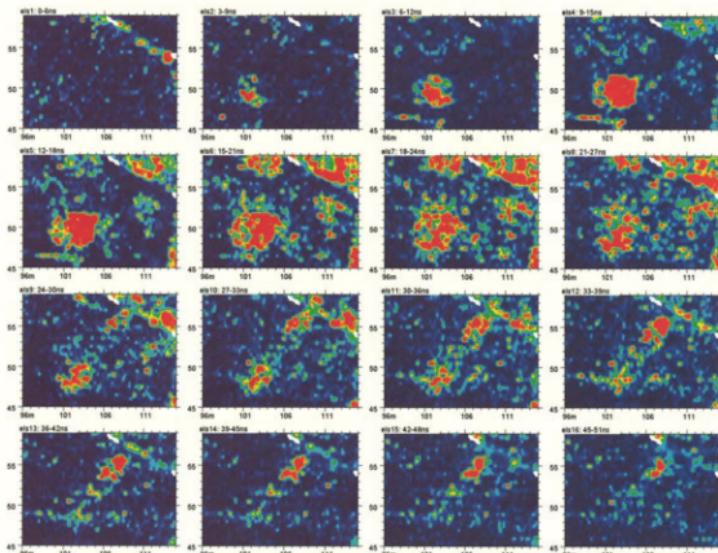


図12 GPRによる2号窯周辺の探査平面図（深度別）

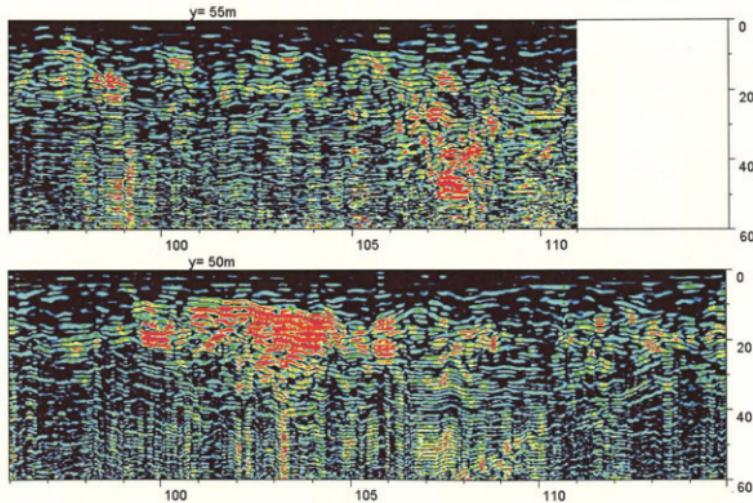


図13 GPRによる2号窯周辺の探査断面図

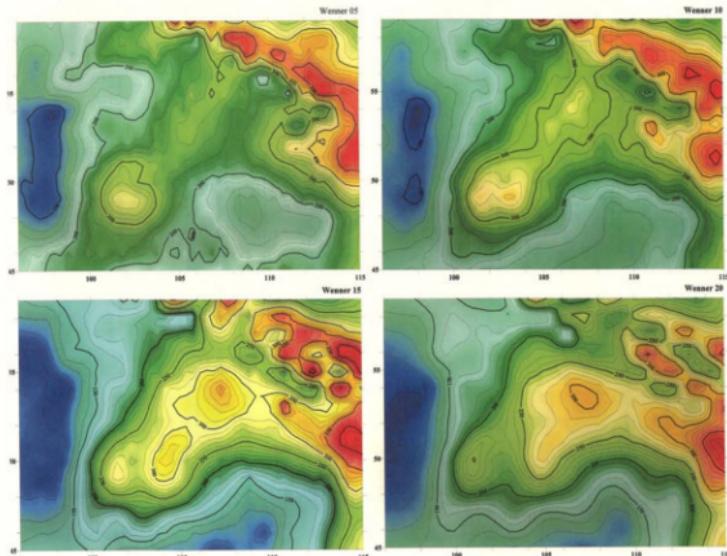


図14 電気探査による2号窯周辺の探査平面図（深度別）

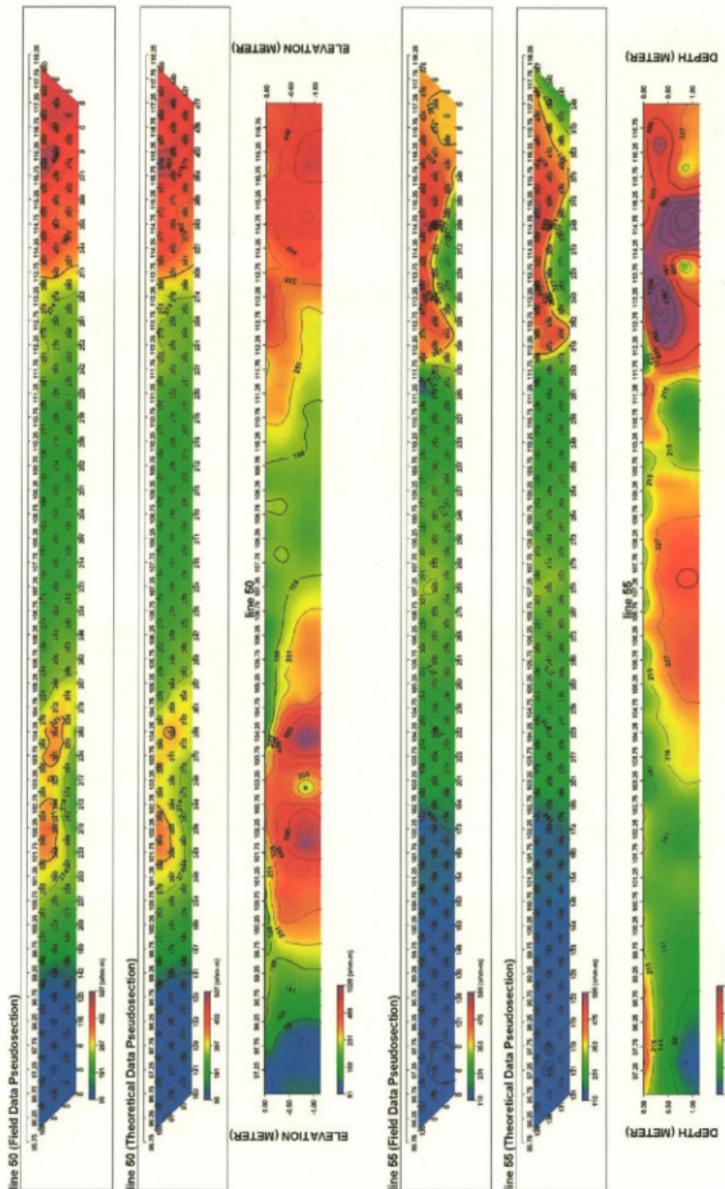


図15 電気探査による2号窯周辺の探査断面図

附載3 寒風古窯跡群出土遺物の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

1. 分析目的

この分析では、寒風古窯跡群および周辺遺跡から出土した遺物の理化学的な胎土分析を実施し、以下のことについて検討した。

- (1) 寒風古窯跡群から出土した鶴尾・陶棺・杯・高杯・甕・窯壁粘土の遺物が種類や時期などで胎土に差異があるかどうか。
- (2) 寒風古窯跡群と周辺遺跡の寒風古墳、水落古墳、新林窯跡から出土した鶴尾・陶棺が寒風古窯跡群出土試料と胎土に差があるかどうか検討した。

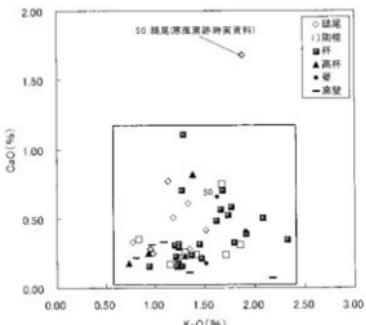
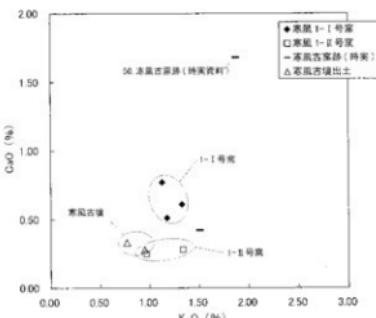
2. 分析結果

分析方法・試料

理化学的な分析方法は、蛍光X線分析法で実施した。この方法は、試料に含まれる成分（元素）量を測定するもので、その成分量の違いから胎土の差を推定する方法である。また蛍光X線分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間のため、多量に試料を分析するのに有効である。しかし、測定試料は均質性が求められることから、分析試料を2 gほど粉末にする必要があり、一部破壊分析である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーアンスツルメンツ社製SEA2010 L）を使用し、 SiO_2 ・ TiO_2 ・ Al_2O_3 ・ Fe_2O_3 ・ MnO ・ MgO ・ CaO ・ Na_2O ・ K_2O ・ P_2O_5 の10元素を測定した。第1表の出土試料分析値一覧表から CaO （カルシウム）、 K_2O （カリウム）の元素に顕著な違いがみられた。そこで、これらの元素のXY散布図を作成し、胎土の比較を行った。

なお分析に供した試料は、第1表に示した寒風古窯跡群出土の鶴尾・陶棺・杯・高杯・甕・窯壁の44点と寒風古墳、水落古墳、新林窯跡出土の鶴尾・陶棺・杯・甕など7点の合計51点である。

第1図 種類別胎土の比較 (K_2O - CaO 散布図)第2図 出土地点別鶴尾の胎土比較 (K_2O - CaO 散布図)

蛍光X線分析結果

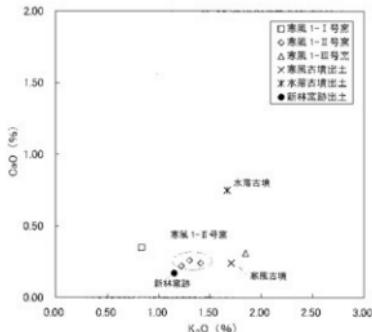
第1図K₂O-CaO散布図では、寒風古窯跡群内出土の鶴尾・陶棺・杯・高杯・甕・窯跡などの種類別での胎土を比較したところ、種類別に関係なくほぼ全部の種類がK₂O量約0.7%～約2.3%、CaO量約0.07%～約1.28%の範囲に分布した。ただ、試料番号50の寒風古窯跡（時実資料）のみが離れて分布した。

第2図K₂O-CaO散布図では、寒風古窯跡群出土の鶴尾が窯跡群内で胎土に差異があるかどうか調べた。その結果、各出土別でまとまる傾向がみられた。つまり、1-I号窯、1-II号窯、1-III号窯の各出土別でまとまる傾向にある。

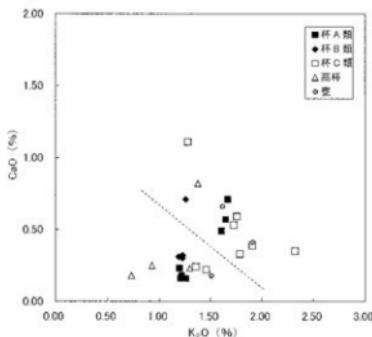
第3図K₂O-CaO散布図では、寒風古窯跡群、寒風古墳、水落古墳、新林窯跡から出土した陶棺の胎土比較を行った。寒風古窯跡1-I号窯出土の陶棺（3点）は1つにまとまり、他の1-I号窯、1-III号窯とは少し異なる胎土となつた。また1-II号窯と新林窯跡出土の陶棺が胎土的に一致し、寒風古墳出土の陶棺も1-III号窯と胎土が類似していた。なお、水落古墳出土の陶棺だけは、単独で分布し寒風古窯跡群とは異なつていた。

第4図K₂O-CaO散布図では、器種別で胎土に差異があるかどうか検討した。その結果、散布図に示しているように破線ラインを境界として、大きく2つに分類できるようみえる。しかし、この2つの分類では、器種別に関係なく杯・高杯・甕とも2つにわかつた。

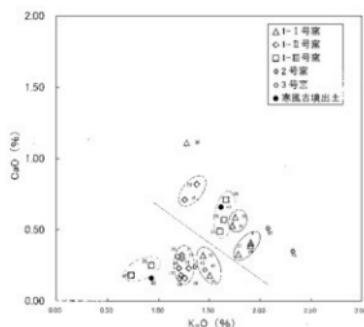
第5図K₂O-CaO散布図では、時期別での胎土比較を行つた。その結果、時期に関係なく各窯跡内で2つに胎土に分類できるようである。また散布図のように、小さなまとまりがみられる。それは、1-I号窯は試料番号31・35と9・33・34と10・32で、1-II号窯は19・23と15・16・17・18・20・21・22・24で、1-III号窯は25・26・27と28・29である。



第3図 出土地点別陶棺の胎土比較 (K₂O-CaO散布図)



第4図 杯・高杯・甕の器種別胎土の比較 (K₂O-CaO散布図)



第5図 杯・高杯・甕の時期別胎土の比較 (K₂O-CaO散布図)

3.まとめ

寒風古窯跡群ほか出土遺物の胎土分析を実施したところ、以下のことが明らかになった。

- (1) 寒風古窯跡群出土の鶴尾・陶棺・杯・高杯・壺・窯壁などの種類別での胎土を比較したところ、種類別に関係なくほぼ全部の種類がまとまりの範囲は広いが、1つにまとまる傾向があった。
したがって、この分布範囲が寒風古窯跡群の分布領域と想定される。
- (2) 寒風古窯跡群内出土の鶴尾が窯跡群内で胎土に差異があるかどうかでは、各出土地点別で胎土がまとまつた。これは、各地点の鶴尾がほぼ同じ粘土で製作されていることが推測される。なお、試料番号50の時実資料のみがCaO成分量が多く含まれ、胎土が異なっていた。
- (3) 寒風古窯跡群・寒風古墳・水落古墳・新林窯跡から出土した陶棺の胎土比較では、各出土地点の陶棺(1-I号・1-II号・1-III号)で、少しずつ胎土が異なるようである。これは、陶棺ごとに胎土が異なることを示しているのであろうか。また、新林窯跡試料と寒風古窯試料の胎土が類似していた。なお、水落古墳出土の陶棺だけは、単独で分布し寒風古窯跡群とは異なっていた。今回の分析データでは、他に產地を求める必要がある。
- (4) 杯・高杯・壺などの器種・時期別で胎土に差異があるかどうかでは、大きく2つの胎土に分類できるようにみえる。これは、器種・時期などに関係なくわかれることから、同一器種でも2つの胎土があると推測される。製作者の違いなのか、あるいは分析試料を増やすと、1つのグループにまとまるのか、試料の蓄積を行い再検討する必要がある。また、第5図の散布図のようにすべての試料ではないが、個々の試料で各出土地点別でまとまる傾向にある。これは製作者および同じ粘土の使用などが推測されるのではないだろうか。今後の課題である。

この分析の機会を与えていただいた、馬場昌一氏および瀬戸内市教育委員会の職員の方々にはいろいろご教示いただいた。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

第1表 寒風古窯跡群ほか胎土分析試料一覧

半定量: SiO₂~P₂O₅, (%)

試料番号	遺跡名	地区名	形種	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	
1	寒風古窯跡	T31 1-1 号窯	燒山	71.38	0.58	18.13	4.57	0.07	1.39	0.51	1.81	1.18	0.22	
2	寒風古窯跡	T31 1-1 号窯	焚口	70.68	0.73	17.62	4.43	0.06	1.18	0.77	0.59	1.13	0.27	
3	寒風古窯跡	T31 1-1 号窯	燒山	72.45	0.78	16.78	3.49	0.06	1.07	0.52	0.46	0.77	0.46	
4	寒風古窯跡	T32 1-1 号窯	焚口	73.17	0.59	18.02	3.87	0.08	1.38	0.25	0.46	0.97	0.05	
5	寒風古窯跡	T32 1-2 号窯	6号	75.51	0.63	16.53	4.11	0.06	0.99	0.28	0.26	1.34	0.13	
6	寒風古窯跡	T31 1-1 号窯	焚口	71.87	0.69	17.22	4.43	0.06	1.44	0.61	1.99	1.33	0.18	
7	寒風古窯跡	T32 1-1 号窯	燒上	70.68	0.51	18.89	3.55	0.05	1.56	0.26	2.79	1.30	0.21	
8	寒風古窯跡	T18 1-1号窯	上部十櫛	67.21	0.72	19.29	6.68	0.08	1.31	0.31	2.26	1.85	0.06	
9	寒風古窯跡	T18 1-1号窯	上部十櫛	70.68	0.43	16.36	3.19	0.05	1.59	0.41	3.25	1.91	0.02	
10	寒風古窯跡	T18 1-1号窯	上部十櫛	67.94	0.55	21.30	4.37	0.05	1.55	0.18	2.87	1.51	0.13	
11	寒風古窯跡	T32 1-1号窯	焚口埋土	20.12	0.59	19.48	3.63	0.05	1.56	0.22	2.89	1.22	0.10	
12	寒風古窯跡	T19 1-8号窯	埋上	72.33	0.52	18.95	3.74	0.04	1.30	0.24	1.67	1.41	0.20	
13	水落古墳		陶柱(脚)	69.13	0.50	19.48	4.39	0.06	1.46	0.25	2.14	1.67	0.16	
14	新林(古窯跡)		陶柱(脚)	72.99	0.70	17.52	3.69	0.03	1.50	0.17	1.96	1.15	0.16	
15	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.33	杯(重) A類	74.07	0.74	16.50	4.50	0.05	1.12	0.23	2.07	1.20	0.16
16	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.33	杯(重) A類	75.97	0.65	16.65	4.28	0.06	1.85	0.16	2.53	1.26	0.16
17	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.34	杯(重) A類	74.31	0.79	16.57	4.53	0.05	1.31	0.18	0.81	1.22	0.13
18	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.34	杯(重) A類	73.92	0.69	16.71	4.44	0.06	1.25	0.18	1.29	1.21	0.16
19	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.36	杯(重) B類	72.26	0.75	16.24	4.44	0.10	1.37	0.71	2.49	1.26	0.15
20	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.36	杯(重) B類	71.73	0.72	16.76	4.61	0.06	1.55	0.31	2.75	1.19	0.15
21	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.23	杯(重) B類	71.80	0.67	16.95	4.59	0.07	1.66	0.32	2.21	1.23	0.15
22	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.23	杯(重) B類	71.22	0.72	16.90	4.48	0.06	1.54	0.30	3.18	1.23	0.09
23	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.23	杯(重) B類	72.94	0.68	16.11	4.47	0.11	1.41	0.82	1.75	1.58	0.11
24	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	床底No.14	杯(重)	73.31	0.58	16.43	4.35	0.06	1.28	0.23	1.89	1.30	0.17
25	寒風古窯跡	T18 1-2号窯	床底No.78	杯(重) A類	71.38	0.52	15.75	4.03	0.04	1.48	0.57	2.24	1.65	0.15
26	寒風古窯跡	T18 1-2号窯	床底No.78	杯(重) A類	66.59	0.41	16.90	3.31	0.05	2.71	0.60	2.76	1.29	0.10
27	寒風古窯跡	T18 1-2号窯	床底No.78	杯(重) A類	70.28	0.53	15.85	4.36	0.05	1.76	0.49	1.99	1.61	0.14
28	寒風古窯跡	T20 1-1号窯	西側部分	窓灰	70.28	0.71	16.51	4.09	0.04	1.46	0.45	1.22	0.49	0.03
29	寒風古窯跡	T20 1-1号窯	床底上部	粗粒灰(重)	74.01	0.66	15.52	4.19	0.06	1.39	0.25	0.98	0.55	1.66
30	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	堆土	66.94	0.63	20.06	4.84	0.07	1.77	1.11	2.66	1.28	0.12	
31	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	堆土	72.84	0.51	16.64	4.30	0.07	1.51	0.53	2.21	1.73	0.23	
32	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	堆土	72.62	0.61	17.30	3.85	0.06	1.51	0.32	1.88	1.44	0.13	
33	寒風古窯跡	T21 1-1号窯灰吹成中央部	杯(重) C類	72.08	0.54	17.48	3.48	0.07	1.48	0.33	2.29	1.79	0.19	
34	寒風古窯跡	T21 1-1号窯灰吹成中央部	杯(重) C類	69.24	0.39	20.16	3.63	0.05	1.57	0.39	2.31	1.91	0.13	
35	寒風古窯跡	T21 1-1号窯灰吹成中央部	杯(重) C類	69.86	0.53	19.29	3.44	0.05	1.33	0.59	2.67	1.76	0.14	
36	寒風古窯跡	T3 1-1号窯	細粒	78.11	0.55	12.55	4.03	0.05	1.24	0.22	2.11	0.80	0.26	
37	寒風古窯跡	T19 1-2号窯	典例内	7.81	0.44	18.09	5.06	0.07	1.47	0.11	1.26	1.34	0.21	
38	寒風古窯跡	T20 1-1号窯	細粒	69.04	0.25	16.88	5.25	0.06	1.45	0.07	2.72	2.17	0.15	
39	寒風古窯跡	T2 2号窯	3枚目西側	典例	77.81	0.54	12.42	4.48	0.06	1.21	0.33	1.67	1.08	0.16
40	寒風古窯跡	T5 3号窯	埋土	76.90	0.65	12.75	4.24	0.06	1.43	0.31	2.32	0.96	0.25	
41	寒風古窯跡	T8 横穴式石室壁土	甕(内側)C類	71.24	0.48	18.77	3.55	0.04	1.20	0.66	2.02	1.62	0.17	
42	寒風古窯跡	T8 四周	甕(身)	71.01	0.85	19.03	3.07	0.04	1.67	0.16	2.92	0.98	0.18	
43	寒風古窯跡	T8 横穴式石室壁土	陶柱(脚)	70.74	0.44	19.15	4.08	0.05	1.21	0.24	1.92	1.71	0.24	
44	寒風古窯跡	T8 横穴式石室壁土	陶柱(脚)	73.91	0.62	16.56	3.97	0.05	1.38	0.28	1.55	0.95	0.58	
45	寒風古窯跡	T8 横穴式石室壁土	陶柱(脚)	73.62	0.59	15.01	3.39	0.11	1.40	1.65	0.00	1.83	2.19	
46	寒風古窯跡	T1 2号窯	杯(重) C類	66.65	0.52	23.26	3.28	0.04	1.55	0.35	1.75	2.38	0.12	
47	寒風古窯跡	T18 2号窯	杯(身)	74.32	0.49	16.57	2.76	0.04	1.55	0.51	1.17	2.08	0.28	
48	寒風古窯跡	T5 3号窯	杯(重) C類	69.13	0.55	20.56	4.34	0.05	1.39	0.24	2.01	1.36	0.22	
49	寒風古窯跡	T11 3号窯	埋土	70.46	0.63	18.01	3.23	0.04	1.14	0.36	1.05	1.26	0.39	
50	寒風古窯跡	時実資料	四址	73.68	0.63	15.09	3.49	0.11	1.32	1.68	0.00	1.88	2.04	
51	寒風古窯跡	時実資料	舗瓦	75.15	0.52	14.81	3.02	0.05	1.66	0.42	2.38	1.51	0.24	

附載4 濑戸内市寒風古窯跡群出土炭化物の樹種

(株)吉田生物研究所

1. 試料

試料は瀬戸内市寒風古窯跡群から出土した用途不明品3点である。

2. 観察方法

炭化物の数mm立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科マツ属〔二葉松類〕(*Pinus* sp.)

(遺物No.1~3) (写真No.1~3)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射状細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属〔二葉松類〕はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総観」雄山閣出版（1988）

島地謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載I~V」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑本編I・II」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

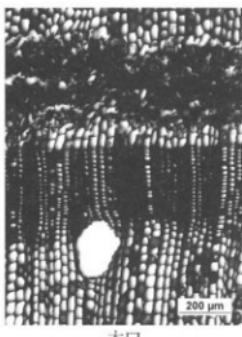
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

瀬戸内市寒風古窯跡群出土炭化材同定表

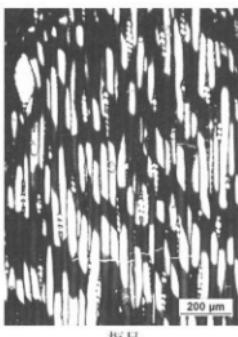
No.	造構名	品名	樹種
1	T32 (1- II号窯跡) 27層浅黄砂質土	炭化材（試料1）	マツ科マツ属〔二葉松類〕
2	T32 (1- II号窯跡) 23層黒粘土質土	炭化材（試料2）	マツ科マツ属〔二葉松類〕
3	T33 (1- III号窯跡) 25層黒砂質土	炭化材（試料3）	マツ科マツ属〔二葉松類〕



木口

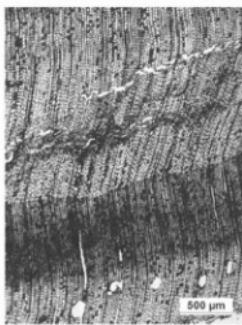


柾目

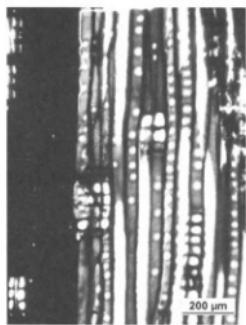


板目

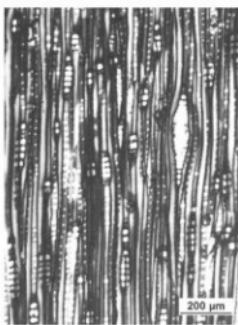
No-1 マツ科マツ属 [二葉松類]



木口

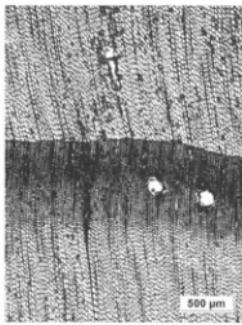


柾目

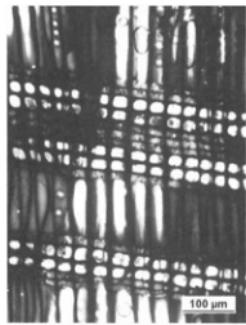


板目

No-2 マツ科マツ属 [二葉松類]



木口



柾目



板目

No-3 マツ科マツ属 [二葉松類]

土器觀察表

戸数 名号	遺構名	トレン ジ番号	器種	法面(二)				軒腰		備考		
				口直	脚高	脚厚付	底大径	外面	内面			
1	I-1号墓跡	T19	杯蓋	(251)	19			ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ、オサ ニ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	外底や器表有
2	I-1号墓跡	T19	杯蓋					ヨコナヂ		底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	器表有
3	I-1号墓跡	T19	杯身		97			ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ、ナヂ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	器盤厚く重量あり
4	I-1号墓跡	T19	杯身	(118)	35			ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	内外側候伏形有り
5	I-1号墓跡	T19	杯身	(101)				ヨコナヂ	ヨコナヂ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	内外側候伏形有り。内表や みあり。内蓋わずかに自然候伏
6	I-1号墓跡	T19	盤	(212)				ヨコナヂ、ヘラ 裏	ヨコナヂ、ヘラ 裏	底白 (10Y6/1)	底白 (10Y6/1)	内表候伏形有り。内表や みあり。内蓋わずかに自然候伏
7	I-1号墓跡	T19	盤					ヨコナヂ、透底 文、沈底、陶突	ヨコナヂ	底白 (75Y5/1)	底白 (75Y7/1)	外表面ごくわずかに自然候伏
8	I-1号墓跡	T19	盤					タケキ能カキ文	ヨコナヂ、透底 文	底白 (25Y6/1)	ヨコナヂ、透底 (25Y6/1)	内表有
9	I-1号墓跡	T19	円底鉢	(208)				ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	内表有
10	I-1号墓跡	T19	器底					扇子状タキ 底、ヨコナヂ、オサニ ナヂ、脇付付 脚面	ヨコナヂ、ナヂ、 オサニ	底白 (25Y7/1) 底白 (25Y7/2)	底白 (25Y7/1)	透かしあり。先端側面ケズリ、底 面に施墨あり
11	I-1号墓跡	T31	器底					扇子状タキ底 ヘラケズリ、花 模、V字の溝に よる扇子状水紋	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (25Y6/1)	底白 (25Y7/3)	内孔あり。底付有。わずかに自然候 伏有
12	I-1号墓跡	T31	器底					扇子状タキ底 ヨコナヂ、ナヂ、 V字の溝に よる扇子状水紋	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (10Y6/1)		内孔あり。底付有。わずかに自然候 伏有
13	I-1号墓跡	T31	器底					扇子状タキ底 ヘラケズリ、花 模、V字の溝に よる扇子状水紋	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ、ナヂ	底白 (10Y7/1)		底付有
14	I-1号墓跡	T31	器底					扇子状タキ底 ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ、ナヂ、 脇付付脚 脇付付脚	ヨコナヂナヂ、 ナヂ、ケズリ	透底性 底白 (10Y8/3)		
15	I-1号墓跡	T31	器底					扇子状タキ底 ヨコナヂ、ケズリ	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (10Y7/1)		透かしあり
16	I-1号墓跡	T31	器底					扇子状タキ底 ヨコナヂ、ナヂ	ヨコナヂ、ナヂ	底白 (25Y6/1) (25Y7/2)		透底不明
17	I-1号墓跡	T31	器底					扇子状タキ底 ヨコナヂ、ナヂ	ヨコナヂ	底白 (25Y7/1)		透かしあり。豆みあり。底付有
18	I-1号墓跡	T31	器底					扇子状タキ底 ヨコナヂ、ナヂ		透底性 底白 (10Y8/3)		底の上端
19	I-1号墓跡	T31	器底					扇子状タキ底 ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (25Y7/1)		底表火照りが深め部分、天井部等に上 部の近赤色斑、底付有。
20	I-1号墓跡底盤	T21	杯蓋	140	31			ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y8/1)	底表熱覺でひびき、土質のよ い色斑、つまり断面合分に朱の調 い工芸品あり。透底性有
21	I-1号墓跡底盤	T21	杯蓋	(251)	33			ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y8/1)	底表熱覺でひびき、土質のよ い色斑、つまり断面合分に朱の調 い工芸品あり。透底性有
22	I-1号墓跡底盤	T21	器底					ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ	底白 (25Y7/1)		内西に水平状のハラ福
23	I-1号墓跡A层	T21	杯身	(141)	41	(83)		ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	高台付合の模様模様
24	I-1号墓跡底盤	T21	器底	(202)				ヨコナヂ	ヨコナヂ	底白 (25Y7/1)		外國へと貿易有り。自然候伏有
25	I-1号墓跡底盤	T21	器底					ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ	底白 (10Y6/2)	底白 (10Y5/2)	外側唇付文字(大字)あり。透より 輪廓く、大字。内外側自然候伏付
26	I-1号墓跡底盤	T21	杯身	(173)				ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ	底白 (10Y5/1)	底白 (10Y6/1)	外側唇付文字(大字)あり。透より 輪廓く、大字。内外側自然候伏付
27	I-1号墓跡底盤	T21	器底	160				ヨコナヂ	ヨコナヂ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	内面唇付文字(大字)あり。透より 輪廓く、大字。底付有
28	I-1号墓跡底盤	T21	器底					ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	内面唇付文字(大字)あり。透より 輪廓く、大字。底付有
29	I-1号墓跡底盤	T21	器底					ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	内面唇付文字(大字)あり。透より 輪廓く、大字。底付有
30	I-1号墓跡底盤	T21	器底					ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (25Y6/1)	底白 (25Y7/1)	内面唇付文字(大字)あり。透より 輪廓く、大字。底付有
31	I-1号墓跡底盤	T21	器底					ヨコナヂ、ケズ リ	ヨコナヂ、ナヂ、 ケズリ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	内面唇付文字(大字)あり。透より 輪廓く、大字。底付有
32	I-1号墓跡	T19	杯蓋	102	38			ヨコナヂ、ヘラ 切り	ヨコナヂ、ナヂ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	透底缺の次節で止上
33	I-1号墓跡	T19	杯蓋	102	41			ヨコナヂ、ヘラ 切り	ヨコナヂ、ナヂ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	透底あり。43とセッタ。
34	I-1号墓跡	T19	杯蓋	105	38			ヨコナヂ、ヘラ 切り	ヨコナヂ、ナヂ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	透底あり。44とセッタ。天井化の段 で止上
35	I-1号墓跡	T19	杯蓋	100	43			ヨコナヂ、ヘラ 切り	ヨコナヂ、ナヂ	底白 (25Y7/1)	底白 (25Y7/1)	透底あり。45とセッタ。天井化の段 で止上
36	I-1号墓跡	T19	杯蓋	108	33			ヨコナヂ、ヘラ 切り	ヨコナヂ、ナヂ	底白 (25Y6/1)	底白 (25Y6/1)	透底あり。内西側自然候伏付

面積番号	遺物名	トレーナー番号	形種	古墳(件)			特徴		状況		備考		
				口径	深奥	奥拵津	最大径	外縁	内縁	外縁	内縁		
37	1-Ⅰ号窯跡	T19	杯蓋	7.6	37			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	赤み灰。六角錐当然付灰。縁表削落	
38	1-Ⅱ号窯跡	T19	杯蓋	9.5	40			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	ナダ	灰(346/0)	灰(346/0)	赤みあり。天風港の状態で出土。
39	1-Ⅲ号窯跡	T19	杯蓋	10.6	36			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	ナダ	灰(346/0)	灰(346/0)	置みあり。人達港の状態で出土。
40	1-Ⅳ号窯跡	T19	杯蓋	10.6	31			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(109Y/1)	灰(346/0)		
41	1-Ⅴ号窯跡	T19	杯蓋	(10.3)	31			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	赤みあり。外壁帯板付灰	
42	1-Ⅵ号窯跡	T19	杯身	9.4	34		11.3	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(345/0)	立ビット。人達港の状態で出土	
43	1-Ⅶ号窯跡	T19	杯身	9.0	34		10.9	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	アダ	灰(346/0)	灰(345/0)	置みあり。33とセット
44	1-Ⅷ号窯跡	T19	杯身	9.6	34		11.4	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	34とセット。天風港の状態で出土。	
45	1-Ⅸ号窯跡	T19	杯身	9.3	32		11.2	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(345/0)	天地港の駆け出上。外壁・腰壁付灰。路去削落	
46	1-Ⅹ号窯跡	T19	杯身	9.7	30		11.5	ヨコナゲ、ヘラ 切り、ケズ	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	置みあり。天風港の駆け出上。外壁・腰壁付灰	
47	1-Ⅺ号窯跡	T19	杯身	9.5	29		11.5	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(25Y/1)	灰(346/0)	やや赤みあり。外壁剥落削落。天風港の駆け出上。	
48	1-Ⅻ号窯跡	T19	杯身	9.6	33		11.4	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	天風港の状態で出土。口沿第一ド片に付灰あり。	
49	1-Ⅼ号窯跡	T19	杯身	8.9	28		10.9	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(346/0)	天風港の状態で出土。外壁帯板等部あり	
50	1-Ⅽ号窯跡	T19	杯身	9.4	31		11.3	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(347/0)	天風港の状態で出土。砂浜付灰有り	
51	1-Ⅾ号窯跡	T19	杯身	9.5	30		11.3	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(5Y/1)	灰(346/0)	天風港の状態で出土。外壁・腰壁付灰。	
52	1-Ⅿ号窯跡	T19	杯身	9.9	28		11.9	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	置みあり。五重塗の状態で出土。外壁・腰壁付灰。	
53	1-ⅰ号空跡	T19	杯身	9.4	36		11.2	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(346/0)	置みあり。天風港の状態で出土。外壁・腰壁付灰。口沿斜削落有り	
54	1-ⅱ号空跡	T19	杯身	9.9	26		11.9	ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(347/0)	手みす。砂浜付灰有	
55	1-ⅲ号空跡	T19	杯身	-	64		10.1	ヨコナゲ、シズ リ、ヘラ切り	シズ	灰(347/0)		手みす。杯身が破壊してしまった。つまり縦断面分離。	
56	1-ⅳ号空跡	T19	杯蓋	8.2	28		10.0	ヨコナゲ、シズ リ	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(345/0)	63とセット。焼成した状態で出土。外壁・腰壁付灰。	
57	1-ⅴ号空跡	T19	杯蓋	8.0	26		9.8	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ、ナダ	灰(347/0)	灰(345/0)	71とセット。焼成した状態で出土。外壁・腰壁付灰。	
58	1-ⅶ号空跡	T19	杯蓋	7.8	28		9.6	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(345/0)	置みあり。70とセット。外壁・腰壁付灰。	
59	1-ⅷ号空跡	T19	杯蓋	8.2	27		10.0	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ	灰(25Y/1)	灰(347/0)	69とセット。つまり縦断面分離。	
60	1-ⅸ号空跡	T19	杯蓋	8.3	31		10.2	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(347/0)	72とセット。	
61	1-ⅹ号空跡	T19	杯蓋	8.0	29		9.8	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(346/0)	73とセット。	
62	1-ⅻ号空跡	T19	杯蓋	8.2	32		10.1	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(346/0)	74とセット。外壁・腰壁付灰。芯表剥落。	
63	1-ⅼ号空跡	T19	杯蓋	8.0	31		9.8	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(347/0)	75とセット。やや傾斜で芯表剥落。つまり縦断面分離。	
64	1-ⅽ号空跡	T19	杯蓋	8.4	40		10.3	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(346/0)	76とセット。天風港の状態で出土。	
65	1-ⅾ号空跡	T19	杯蓋	8.3			10.1	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ	灰(346/0)		76とセット。外壁・腰壁付灰。芯表剥落。	
66	1-ⅿ号空跡	T19	杯蓋	(7.6)			(9.6)	ヨコナゲ、ケズ リ?	ヨコナゲ	灰(25Y/1)		76とセット。天風港の状態で出土。外壁・腰壁付灰。	
67	1-ⅰ号空跡	T19	杯蓋	7.9			9.8	ヨコナゲ、ケズ リ	ヨコナゲ	灰(347/0)	灰(347/0)	77とセット。	
68	1-ⅱ号空跡	T19	杯身	9.0	37			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	78とセット。横軋した状態で出土。	
69	1-ⅲ号空跡	T19	杯身	9.0	41			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	79とセット。	
70	1-ⅳ号空跡	T19	杯身	9.0	40			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	置みあり。80とセット。	
71	1-ⅴ号空跡	T19	杯身	9.0	40			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	灰(346/0)	灰(346/0)	置みあり。82とセット。横軋した状態で出土。	
72	1-ⅶ号空跡	T19	杯身	9.3	39			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	ナダ	灰(347/0)	60とセット。	
73	1-ⅷ号空跡	T19	杯身	9.0	40			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	ナダ	灰(346/0)	61とセット。	
74	1-ⅸ号空跡	T19	杯身	9.0	39			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	ナダ	灰(346/0)	62とセット。	
75	1-ⅹ号空跡	T19	杯身	9.0	39			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	ナダ	灰(346/0)	63とセット。やや傾斜で芯表剥離。	
76	1-ⅻ号空跡	T19	杯身	9.0	37			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	ナダ	灰(346/0)	65とセット。	
77	1-ⅽ号空跡	T19	杯身	9.0	43			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	ナダ	灰(346/0)	67とセット。	
78	1-ⅿ号空跡	T19	杯身	8.1	39			ヨコナゲ、ヘラ 切り	ヨコナゲ	ナダ	灰(346/0)	置みあり。	

測量番号	遺構名	トレンチ番号	設備	法面 (cm)			特徴		色調	備考	
				凸面	凹面	底面	外側	内側			
79	1 - II 号墓跡	T19	井戸	9.0	4.1		ヨコナダ、ヘラ 切り	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	好みあり。模範した状態で出土
80	1 - 工号空跡	T19	井戸	(9.2)			ヨコナダ	ヨコナダ	黄 (25Y6/1)	黄 (25Y6/1)	内凹面一部自然剥離
81	1 - II 号墓跡	T19	井戸	(9.0)			ヨコナダ	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	内凹面一部自然剥離
82	1 - II 号墓跡	T19	井戸				ヨコナダ	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	好み大により付及不可視。内外面自然剥離
83	1 - 工号空跡	T19	井戸	9.1			ヨコナダ	ヨコナダ、シル リ?	灰 (75Y6/1)	灰 (N7/0)	模範した状態で出土。外面部自然剥離
84	1 - II 号墓跡	T19	井戸	(9.3)			ヨコナダ、凹面	ヨコナダ	灰白 (25Y7/1)	灰白 (25Y7/1)	内外面自然剥離
85	1 - III 号墓跡	T19	井戸	(9.2)	9.6 (6.2)	106	ヨコナダ、直縁 切り	ヨコナダ、シル リ?	灰白 (25Y6/1)	灰白 (25Y6/1)	好み大。複数した状態で出土。内外面自然剥離
86	1 - III 号墓跡	T19	直縁井戸	9.2	3.5		ヨコナダ、ヘラ 切り	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	好み大。外面部自然剥離。斜井底。内底に土入る
87	1 - III 号墓跡	T19	井戸				ヨコナダ、直縁 アーチ、ヘラ鋸形 切り	ヨコナダ	灰 (N7/0)	灰白 (N7/0)	外周へ剥離?
88	1 - III 号墓跡	T19	井戸				ヨコナダ、直縁 アーチ	ヨコナダ	灰 (25Y7/2)	灰 (25Y7/1)	内凹面自然剥離
89	1 - II 号墓跡	T19	井戸				タクタ、カタツ ム	タクタ、カタツ ム	灰白 (N7/0)	灰 (N7/0)	
90	1 - III 号墓跡上層	T32	施設				塔子状アーチ、 脇せり、脇せり 受け突起、ケズリ 直の段	塔子状アーチ、 脇せり、脇せり 受け突起、ケズリ 直の段	灰白 (25Y7/1)	灰白 (25Y7/2)	透かし穴入り。92が造か部分に残 合。円形船室曲面離れあり。壁孔1 ヶあり。
91	1 - II 号墓跡上層	T32	施設				塔子状アーチ、 ケズリ、脇せり 受け突起、ケズリ 直の段	塔子状アーチ、 ケズリ、脇せり 受け突起、ケズリ 直の段	灰 (25Y7/2)	灰 (25Y7/2)	円形船室離れ直2ヶあり。隙孔2 ヶあり。
92	1 - III 号墓跡上層	T32	施設	掘立柱 部分			前×後 7.5×7.5 幅41	前×後 7.5×7.5 幅41	塔子状アーチ、 サエ、ナフ	塔子状アーチ、 サエ、ナフ	90の丸孔部分に接合する。6トの柱 十脚で穿孔部分をふきいでいた
93	1 - III 号墓跡上層	T32	施設	(幅×横 9.3×9.4 厚0.8			塔子状アーチ、 サエ、ナフ	塔子状アーチ、 サエ、ナフ	灰白 (N7/1)	灰白 (N7/1)	施場に傾斜柱脚
94	1 - III 号墓跡上層	T32	施設				塔子状アーチ、 サエ状	塔子状アーチ、 サエ	灰白 (25Y7/2)	灰白 (25Y7/2)	施場に傾斜柱脚
95	1 - III 号墓跡上層	T32	施設				塔子状アーチ、 サエ、ナフ	塔子状アーチ、 サエ、ナフ	灰白 (N7/1)	灰白 (N7/1)	施場に施設柱直角あり
96	1 - III 号墓跡上層	T32	施設				ヘリケツリ	ヘリケツリ	灰白 (25Y8/2)	灰白 (25Y8/2)	身の上端から下端まで風呂。
97	1 - III 号墓跡上層	T32	施設				ケズリ、オサエ、 ナフ	ケズリ、オサエ、 ナフ	灰白 (N7/1)	灰白 (N7/1)	身の上端直角部あり
98	1 - III 号墓跡上層	T19	陶短管				タクタ、ケズリ、 サエ状	タクタ、ケズリ、 サエ状	灰白 (N7/1)	灰白 (N7/1)	四角柱の脚。身上端はけ付け現
99	1 - III 号墓跡上層	T19	陶短管				ケズリ、ナフ	ケズリ、ナフ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	四角柱の脚。円柱柱に移上端り付 け現
100	1 - III 号墓跡上層	T19	陶短管	前・横 1.5×1.5 厚1.5 下段 1.5×1.5 厚1.5 上段 1.5×1.5 厚1.5			ケズリ、ナフ	ケズリ、ナフ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	亞角柱の脚。円柱柱に前上付け現 れ。円柱柱と脚部付合部の 主要となる
101	1 - II 分室墓上層	T32	中空日 前後押 手				ケズリ、オサエ、 ナフ	ケズリ、オサエ、 ナフ	灰白 (N7/1)	灰白 (N7/1)	壁孔あり。施場
102	1 - II 分室墓	T18	井戸				ヨコナダ	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	壁孔 (N7/0)
103	1 - II 分室墓	T18	井戸	(12.0)		(12.4)	ヨコナダ	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	手標記一辺面表剥離
104	1 - II 分室墓	T18	井戸	12.3	4.3		ヨコナダ、ヘラ 切り	ヨコナダ、ヘラ 切り	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	好みあり。瓦足送の状態で出土
105	1 - II 分室墓	T18	直井	12.4	4.7		ヨコナダ、ケズ リ	ヨコナダ、ケズ リ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	外周部表面剥離。口沿部へ内底部付 合
106	1 - III 号墓跡	T20	井戸	(15.0)	3.8		ヨコナダ、ヘラ 切り	ヨコナダ、ヘラ 切り	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	好み大。内外面自然剥離。外周部付 合部付合
107	1 - II 号墓跡	T18	直井	(15.6)		(15.8)	ヨコナダ	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰 (10Y4/1)	好み部分に外縁の口付部分残存。 直角柱柱
108	1 - II 号墓跡	T18	直井				ヨコナダ	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰 (N4/0)	好み部分に外縁の口付部分残存。 直角柱柱
109	1 - II 号墓跡	T18	直井				ヨコナダ	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰 (10Y4/0)	外周部付合物あり
110	1 - II 号墓跡	T18	直井				ヨコナダ	ヨコナダ	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	好みあり。口底部分付合物あり
111	1 - II 号墓跡	T18	直井				ヨコナダ	ヨコナダ	灰白 (N7/0)	灰 (N6/0)	内底部剥離
112	1 - II 号墓跡	T20	井戸				ヨコナダ	ヨコナダ	灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	好み部分に内底部剥離現象
113	1 - II 号墓跡	T18	直井	10.8	4.5	133	ヨコナダ	ヨコナダ、オサ エ、ナフ	灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	好みあり。口底部ナフ付合物あり。 内底部付合物あり。外周部付合物あり。外周部 自然剥離
114	1 - II 号墓跡	T18	直井	11.0	4.4	136	ヨコナダ、ケズ リ	ヨコナダ	灰 (N5/0)	灰 (N4/0)	好みあり。表面剥離直角あり。口底 部に十脚付合物。外周部直角等。外周部 自然剥離
115	1 - II 号墓跡	T18	直井	11.0	4.4	137	ヨコナダ、ケズ リ	ヨコナダ、ナフ	灰白 (25Y7/1)	灰白 (25Y7/1)	瓦足送の状態で出土。
116	1 - II 号墓跡	T20	井戸	(11.0)		(13.4)	ヨコナダ、ケズ リ	ヨコナダ、ナフ	灰白 (N3/0)	灰白 (N3/0)	好み人

渡航 番号	渡航名	トラン ザ番 号番	番号	往路(回)			特徴		帰路		備考
				口往	サ往	逆脚往	最大往	外前	内面	外面	
117	1-10号輪廓	T20	舟身	11.0	27		14.2	ヨコナデ、ヘタ 切り?	ヨコナデ、ナデ	灰(N3/0)	灰(44/0) 灰(575/2)
118	1-10号空港	T18	舟身	10.2	46		135	ヨコナデ、タス リ、ヘタ切り	ヨコナデ、ナデ	灰(N4/0)	灰(44/0)
119	1-10号空港	T18	舟身	(11.7)	36		14.5	ヨコナデ。アラ タスリ	ヨコナデ、ナデ	灰(N3/0)	灰(10785/1)
120	1-10号輪廓	T18	舟身	(11.8)	41		(144)	ヨコナデ?		灰白(SV4/1)	灰白(SV7/1)
121	1-10号輪廓	T18	舟身	11.0	46		137	ヨコナデ?	ヨコナデ	灰白(SV7/0)	灰(44/0)
122	1-10号輪廊	T18	舟身	11.4	42		135	ヨコナデ。ヘタ 切り?	ヨコナデ。オカ エ。ナタ?	灰(44/0)	灰(44/0)
123	1-10号輪廊	T18	舟身	11.9	41		14.0	ヨコナデ。ヘタ 切り?タスリ。ナタ?	ヨコナデ。オカ エ。ナタ?	灰(SV4/1)	灰(SV4/1)
124	1-10号輪廊	T18	舟身	(12.6)			(15.0)	ヨコナデ。タス リ?	ヨコナデ	灰(N4/0)	灰(44/0)
125	1-10号空港	T18	舟身	(12.6)			(14.8)	ヨコナデ?	ヨコナデ	灰(N4/0)	灰(N4/0)
126	1-10号輪廊	T18	舟身	(12.8)			(15.0)	ヨコナデ。タス リ?	ヨコナデ	灰(255/2)	灰(SV4/1)
127	1-10号空港	T18	舟身	(12.8)			(15.4)	ヨコナデ?	ヨコナデ	灰白(SV4/0)	灰(N4/0)
128	1-10号輪廊	T18	舟身	12.0	46			ヨコナデ。カズメ タスリ?	ヨコナデ。オカ エ。ナタ?	灰(SV2/4)	灰(SV4/1)
129	1-10号輪廊	T18	舟身	12.3	42			ヨコナデ?	ヨコナデ	灰(N3/0)	灰(N7/0)
130	1-10号輪廊	T18	舟身	11.5	33		132	ヨコナデ?	ヨコナデ	オリーブ墨 (SV3/3)	灰(33/0)
131	1-10号輪廊	T18	舟身					ヨコナデ	ヨコナデ	灰(35/4/1)	外ケズリのヨコナデ
132	1-10号空港	T20	舟身	13.8	57			ヨコナデ。タス リ?	ヨコナデ	灰(35/4/0)	4盒窓の件
133	1-10号輪廊	T18	舟身	(8.0)	(9.6)			ヨコナデ?	ヨコナデ	青灰 (10B/5/1)	青灰(SV5/1)
134	1-10号輪廊	T18	舟身	(15.0)	(15.6)			ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 (757/1)	灰白(SV5/1)
135	1-10号輪廊	T18	舟身					タタキ、カキメ	タタキ	黑(N2/0)	外面部表灰色
136	1-10号輪廊	T18	舟身					タタキ、カキメ	タタキ	灰白 (10781)	外面部表黑色
137	1-10号輪廊	T18	舟身					タタキカキメ	タタキ	灰(94/0)	青灰 (10B/5/1)
138	1-10号輪廊	T18	舟身					タタキ、カキメ	タタキ	灰(SV4/0)	モノトーンの黒字
139	1-10号輪廊上層	T20	舟身	(17.0)			(20.8)	ヨコナデ。タス リ?波状、波 状、波紋、波 紋	ヨコナデ。ナデ	灰白 (757/1)	1-10号輪廊あり。舟底側板板厚度 に波状りあります。舟底の中央部に波 状の浮き浮力
140	1-10号輪廊上層	T20	舟身	20.8	34			ヨコナデ。ヘタ 切り、カズメ?	ヨコナデ	灰白(SV7/0)	灰白(SV7/0)
141	1-10号輪廊上層	T20	舟身	20.3	37			ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄 (257/2)	外面部表灰色アリ。輪廓線を 強調
142	1-10号輪廊上層	T20	舟身	(8.6)			(10.6)	ヨコナデ。タス リ?	ヨコナデ	灰(SV7/1)	弱めの黒字
143	1-10号輪廊上層	T20	舟身	(9.6)			(11.4)	ヨコナデ。タス リ?	ヨコナデ	灰白(SV7/0)	灰白(SV7/0)
144	1-10号輪廊上層	T20	舟身	(14.4)	34		(11.8)	ヨコナデ。タス リ?四瓣	ヨコナデ。タス リ?	灰白 (757/1)	全体部表黑色
145	1-10号輪廊上層	T20	舟身	(12.6)				ヨコナデ	ヨコナデ。シ グリ。ナタ?	灰白(SV7/0)	外面部表灰色アリ。輪廓線を 強調
146	1-10号輪廊上層	T20	舟身	(12.0)	96	92		ヨコナデ?	ヨコナデ。タス リ?	灰白(SV7/0)	灰白(SV7/0)
147	1-10号輪廊上層	T20	舟身	10.1	10.8			ヨコナデ。シ グリ?	ヨコナデ。シ グリ?	灰白(NZ/0)	灰白(NZ/0)
148	1-10号輪廊上層	T20	舟身	7.0	7.6			ヨコナデ。団體	ヨコナデ	灰白(NZ/0)	灰白(NZ/0)
149	1-10号輪廊上層	T20	舟身	8.9	9.1			ヨコナデ。内面 凹凸?	ヨコナデ。シ グリ?	灰白 (757/1)	弱めの黒字
150	1-10号輪廊上層	T18	舟身	12.2	13.4			ヨコナデ。タス リ?	ヨコナデ。オカ エ。ナタ?	灰(N3/0)	やや赤みあります。内面部表灰色アリ。 内面部表黑色アリ
151	1-10号輪廊上層	T20	舟身					輪廓線	輪廓線	灰(25V/6)	内面部表黑色、蓋板車輪部アリ。
152	1-10号輪廊上層	T18	舟身	26.4	47.3			ヨコナデ。内 面のハムメ後 子タスキ	ヨコナデ。オカ エ。ナタ?、ハ ムメ後子タスキ リ?ヨコナデ	灰白 (SV8/2)	灰白 (NZ/0)
153	1-10号輪廊上層	T18	舟身	24.2	46.6			ヨコナデ。後 子タスキ後子 タスキ付	ヨコナデ。ナ ダ?、ハムメ後 子タスキ後子 タスキ付?	灰白 (NZ/0)	灰白 (N6/0)
154	1-10号輪廊上層	T18	舟身					横子タスキ。後 子タスキ?	横子タスキ。ヘ タタキ?	灰白 (255/1)	舟の表面が汚れてます。舟底の左端 に浮き浮力

発掘番号	遺物名	トランク番号	器種	重量 (cm)				形状		色調		備考
				口径	高さ	底径	最大幅	外腹	内面	外腹	内面	
155	2号空器	T 1	杯形	(17.1)	24			ヨコナ? ケズ? ヨコナ?	ヨコナ?	灰白 (N7/0)	灰 (N5/0)	外表面に非常に暗木質感。つまみの位置は全体の中央ではなく、ずれている。つまみの作りも手作り。
156	2号漏斗	T 1	杯形	11.7	33			ヨコナ?	ヨコナ?	灰 (N4/0)	暗灰 (N8/0)	口部唇部剥落。口部底がなり凹みあり。内面付着物あり。
157	2号漏斗	T 1	杯形	(17.8)				ヨコナ?	ヨコナ?	灰 (N4/0)	灰 (N6/0)	内面唇部剥落。口部底がなり凹みあり。
158	2号空器	T 1	杯形	(11.6)	39			ヨコナ?	ヨコナ?	暗灰 (N3/0)	灰 (N4/0)	内面や底部剥落。口部底がなり凹みあり。
159	2号漏斗	T 1	杯形	(12.0)				ヨコナ?	ヨコナ?	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	内面剥落。口部底がなり凹みあり。
160	2号空器	T 1	杯形	(11.9)	49	73		ヨコナ?	ヨコナ?	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	外表面真黄色。口部底がなり凹みあり。口部底のみ大。外肩一端自然縫合。器底剥落。
161	2号漏斗	T 1	杯形	22.1	49	68		ヨコナ?	ヨコナ?	青灰色 (N7/7)	灰白 (N7/0)	口部底のみ大。外肩一端自然縫合。器底剥落。
162	2号空器	T 1	杯形	12.8	41			ヨコナ?	ヨコナ?	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	内面のみ自然剥落。器底剥落。口部底のみあり。内面剥脱記: あり
163	2号漏斗	T 1	更					器子状タコ足	器子状タコ足	灰 (7.37/1)	灰白 (N7/0)	
164	2号漏斗	T 1	更					平行タキ、カキ心円、火文	平行タキ、カキ心円、火文	灰 (2.57/4)	灰 (2.57/4)	内外両方にやや剥落感。
165	2号空器	T 2	杯形	(16.2)	35			ヨコナ?、北側キメ	ヨコナ?	灰白 (7.37/1)	灰白 (N7/0)	外表面水垢斑
166	2号漏斗	T 2	杯形					ヨコナ?、カズリ	カズリ	灰白 (10Y6/1)	灰白 (Q10Y7/1)	つまみ部分の下方三分は、ケズリ取った箇所が明確に残る
167	2号漏斗	T 2	杯形	(19.4)	27			ヨコナ?、カズリ	ヨコナ?、カズリ	灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	
168	2号漏斗	T 2	杯形	(16.6)	25			ヨコナ?、カズリ	ヨコナ?	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	
169	2号空器	T 2	杯形					ヨコナ?、カズリ	ヨコナ?、ナガ	灰 (7.35/1)	灰白 (N7/0)	外表面水垢斑
170	2号漏斗	T 2	杯形	(18.9)	30			ヨコナ?、カズリ	ヨコナ?、ナガ	オレンジ系 (2.5GY6/2)	青灰色 (2.5GY7/1)	
171	2号空器	T 2	杯形	(10.7)	43			ヨコナ?	ヨコナ?	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	外表面水垢斑
172	2号漏斗	T 2	杯形	(11.4)				ヨコナ?、ナガ	ヨコナ?	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	内面に経年色の自然転化。口部底にわずかに凹みあり。
173	2号空器	T 2	杯形	(7.20)				ヨコナ?	ヨコナ?	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	
174	2号空器	T 2	杯形	(12.4)	31			ヨコナ?、ナガ	ヨコナ?	灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	朱みあり。足元部分に静止性黒斑がある。外表面口部に黒斑底の上を走る、赤色部分あり。各底部分付着物あり。
175	2号空器	T 2	杯形	(12.8)	35			ヨコナ?	ヨコナ?	灰 (N6/0)	灰 (N5/0)	口部底のみあり。見込み部分付着物。外表面口部に深紅褐色による濃い赤色部あり。
176	2号漏斗	T 2	杯形			68		ヨコナ?、カズリ	ヨコナ?	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	内面自然済付着
177	2号空器	T 2	杯形	(12.3)	37			ヨコナ?	ヨコナ?	灰 (N6/0)	灰白 (N7/0)	外表面自然済付着。脱塗装の粘土底付着
178	2号漏斗	T 2	更					平行タキ	ヨコナ?、当て真張	灰 (N6/0)	灰白 (N6/0)	外表面自然済付着
179	2号空器	T 2	更					平行タキ、カズメ	ヨコナ?、当て真張	灰 (7.35/1)	灰 (7.35/1)	内面や唇部剥落
180	2号空器	T 2	杯形	(9.5)				ヨコナ?、カズリ、火文	ヨコナ?	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	外面上川字状のハラ弧跡あり
181	2号漏斗	T 2	杯形	(16.2)				ヨコナ?、カズリ	ヨコナ?	灰 (2.5V5/2)	灰 (2.5V6/6)	内外両面に墨済感
182	2号漏斗	T 2	杯形	(13.7)	34			ヨコナ?、ヘタ	ヨコナ?	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	朱み大。外肩ごくわずかに自然転化。内面剥脱記。
183	2号漏斗	T 2	漏					平行タキ、ナガ	ヨコナ?	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	外面上川字状のハラ弧跡あり
184	2号漏斗	T 2	杯形	11.5	23			ヨコナ?	ヨコナ?、ナガ	灰 (N6/0)	灰 (N4/0)	外表面自然済付着。付着物あり
185	2号空器	T 2	杯形					ヨコナ?、ナガ	ヨコナ?、ナガ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	外表面へナ起立あり
186	2号漏斗	T 4	更		84			ヨコナ?	ヨコナ?、シガ	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	外表面自然済付着
187	2号空器	T 9	杯形	(8.84)	45			ヨコナ?、カズリ	ヨコナ?、ナガ	灰白 (N7/0)	灰 (N6/0)	外面わざかに自然転化。外面や脇部剥落。
188	2号空器	T 9	杯形	(19.3)	25			ヨコナ?、カズリ	ヨコナ?、ナガ	灰白 (N6/0)	灰白 (2.5V7/1)	朱みあり。外表面自然済付着。器底底付着物あり。
189	2号空器	T 9	杯形	(16.2)				ヨコナ?、カズリ	ヨコナ?、ナガ	灰白 (N6/0)	灰白 (2.5V7/1)	外表面ごくわずかに自然転化付着。
190	2号漏斗	T 9	杯形	(12.0)	40			ヨコナ?、ヘタ	ヨコナ?	灰白 (7.35/1)	灰白 (2.5V7/1)	外表面自然済付着。内面口部付近に墨済色に墨済部分あり
191	2号空器	T 9	杯形	13.1	46			ヨコナ?、ヘタ	ヨコナ?	灰白 (2.5V7/1)	灰白 (2.5V7/1)	杯豆と底豆ね続き。内面土瘤の口縁付近及び外側付着物の外剥離口唇部剥離付着。
192	2号漏斗	T 9	杯形	(13.6)	40			ヨコナ?、ヘタ	ヨコナ?、ナガ	灰白 (2.5V7/1)	灰白 (2.5V7/1)	口縁部凹みあり。内西自然済付着。外面口唇部付着。
193	2号空器	T 9	更?					ヨコナ?	ヨコナ?	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	外面上川字記号
194	2号空器	T 9	更?					テキキ強カヌメ	楕円形の内側凹	灰白 (2.5V7/1)	灰白 (N7/0)	外表面わざかに自然転化。
195	2号漏斗	T 9	更?					桔子キタキナキ	唐松文、ハケメ	灰白 (N6/0)	灰白 (N7/0)	外表面、底面に自然済付着。外表面付着物あり。十字状輪郭線。
196	2号漏斗	T 9	?					タキキ、オサキ	当て真張	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	外表面自然済付着。つまみは宝珠式顎で口唇部はかわりのないC型。
197	2号漏斗	T 12	杯形	11.0				ヨコナ?、カズリ?	ヨコナ?	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	

記載番号	遺構名	ナンバーキューブ番号	法堤(cm)			特徴		色調		備考	
			口付	谷底	河岸	外側	内側	外側	内側		
196	2号空路	T13 手垂	(136)			ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)		
199	2号廻廊	T13 手垂	160	1.4		ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	並みあり。外側わざむに自然乾燥材質、内側剥離。口付部内側に手付石痕	
200	2号廻廊	T13 手垂	(94)	47		ヨコナデ、ヘル 切り抜きナ?	ヨコナデ	灰白 (N7/0)	灰 (N6/0)	やや並みあり。B類の手付?	
301	2号空路	T13 手垂	120	45		ヨコナデ、ナデ、 ケズリ、ヘル切 り	ヨコナデ、ナデ	灰白 (107/1)	灰白 (N7/0)		
302	2号空路	T13 床板		82		ヨンナデ、沈降 1条	ヨコナデ	灰 (N4/0)	灰白 (5Y8/1)	内面に黒色と白角に変色している場 所あり。	
203	2号廻廊	T13 壁	(109)			ヨコナデ、ケズ リ、ナラ木	ヨコナデ、面て 真木、ヘル切	灰白 (107/1)	灰白 (N7/0)	外側自然乾燥材質。山形部内側へ少 量剥離。	
304	2号空路	T13 壁・柱 (手垂)	(14.0) (脚垂)			ヨコナデ、ケズ リ?	ヨコナデ	灰白 (N7/0)	灰白 (5Y7/1)	頂部内側とが葉内面、側面部分に多 量の自然乾燥材質	
305	2号空路床版	T10 手垂	(88)	32	(108)	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	灰白 (25Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	外側自然乾燥材質	
306	2号廻廊床版	T10 手垂	81	35		ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	外雨や姿勢剥離。	
307	2号廻廊床版	T10 手垂	(88)	335	(108)	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ナダ	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	口付剥離あり。外側自然乾燥材質、 内面繊維剥離付。	
308	2号空路床版	T10 手垂	(105)	26		ヨコナデ、ケズ リ?	ヨコナデ	灰白 (107/1)	灰白 (5Y8/1)	外表面繊維剥離。つまみ筋は主柱1本 で口付部はかなりのないC類。	
309	2号廻廊床版	T10 手垂	(107)	22		ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (5Y6/1)	灰白 (N7/0)	掌手をくり、つまみ筋はB類、口 縁部C類。	
310	2号廻廊床版	T10 手垂	(125)	375		ヨコナデ	ヨコナデ、ナダ	灰白 (107/1)	灰白 (N7/0)	外表面繊維剥離。つまみ筋はB類、 口縁部C類。	
311	2号空路床版	T10 手垂	(108)	37		ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	外表面に迷路色の自然乾燥材質に付 着。つまみ筋はE類、山形部C類。	
312	2号廻廊床版	T10 手垂	(105)	31		ヨコナデ、ヘル 切り、ナラ木	ヨコナデ、オサ エ	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	外雨ごくわずかに自然乾燥材質	
313	2号廻廊床版	T10 手垂	11.0	34		ヨコナデ、ヘル 切り	ヨコナデ、ナダ	灰 (N5/0)	灰白 (N7/0)	外雨一部自然乾燥材質。口縁部内側一 箇所に黒色に変色。	
314	2号空路床版	T10 手垂				ヨコナデ、ヘル 切り剥離	ヨコナデ、ナデ	灰白 (5Y7/1)	灰白 (N7/0)	内面へ黒きあり。断面打町にく?	
315	2号廻廊床版	T10 手垂	(130)			ヨコナデ、ケ リ?	ヨコナデ、ナダ	灰 (5.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)		
216	2号廻廊床版	T10 手垂	(119)	77	86	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 (107/1)	灰白 (107/1)		
217	2号空路床版	T10 手垂		95		ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	灰 (N5/0)	灰 (N6/0)		
218	2号廻廊床版	T10 手垂		(10.0)		ヨコナデ、シ リ	ヨコナデ、シリ	灰 (N5/0)	灰 (N6/0)		
219	2号廻廊床版	T10 手垂				ヨコナデ、ナデ、 ケズリ? シシリ	ヨコナデ、ナデ、 ケズリ? シシリ	灰 (7.5Y6/1)	灰白 (7.5Y7/1)	外表面自然剥離付。	
220	2号廻廊床版	T10 手垂		94		ヨコナデ	ヨコナデ、シ リ、ナダ	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)		
221	2号空路床版	T10 手垂		98		ヨコナデ	ヨコナデ、シ リ	灰 (5Y5/1)	灰 (N6/0)	外表面自然乾燥材質。	
222	2号廻廊床版	T10 手垂		103		ヨコナデ、ケズ リ、沈降? 木 脚	ヨコナデ、ナデ、 シリ	灰白 (N8/0)	灰白 (5Y8/1)	外表面自然乾燥材質。全体に非常に黒 みあり。	
223	2号廻廊床版	T10 ハツカ	(108)			ヨコナデ、沈 降? 2条	ヨコナデ?	灰白 (N7/0)	灰白 (107/1)	外表面自然剥離付。	
224	2号空路床版	T10 手垂	(76)	35		ヨコナデ、ケズ リ?	ヨコナデ、ナデ	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	器具底面部分あり。	
225	2号廻廊床版	T10 手垂	(75)			ヨコナデ、ケズ リ、沈降?	ヨコナデ	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	外表面自然剥離付。經頭部の骨が一部 剥離。口縁部膨大。	
226	2号廻廊床版	T10 手垂	(62)	76		ヨコナデ、ケズ リ? 沈降? 1条	ヨコナデ	灰白 (N7/0)	灰白 (7.5Y7/1)		
227	2号廻廊床版	T10 手垂	(202)			ヨコナデ、ケズ リ?	ヨコナデ	灰 (N6/0)	灰白 (N7/0)	外表面自然剥離付。	
228	2号空路床版	T10 壁	(164)			ヨコナデ、ケズ リ、ナラ木	ヨコナデ、当り 木、ナラ木	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y7/1)	内面表面自然剥離付。外面上に円形土附 着。ナラ木。	
229	2号廻廊床版	T10 壁	(200)			ヨコナデ、ケズ リ、ナラ木	ヨコナデ、面て 真木、ヘル切	灰色	灰白 (N7/0)	内面表面自然剥離付。口縁部内側へ少 量剥離。	
230	2号廻廊床版	T10 壁	(194)			ヨコナデ、ケズ リ、ナラ木? 沈 降? 2条	ヨコナデ、面て 真木、ナラ木? 沈 降? 2条	ヨコナデ、面て 真木、ナラ木	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	外表面自然剥離付。星形半輪文
231	2号廻廊床版	T10 壁				タタキ、カキノ	墨脱文	灰白 (2.5Y8/2)	灰白 (2.5Y7/1)	2列と同一個体か? 1字決着複文	
232	2号廻廊床版	T10 壁				タタキ、カキノ	墨脱文	灰白 (2.5Y8/2)	灰白 (2.5Y7/1)	2列+2列=4列か? 千字決着複文	
233	2号廻廊床版	T10 壁	(98)		(122)	ヨコナデ、ケズ リ?	ヨコナデ	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (N6/0)	外表面自然剥離付。	
234	2号空路床版	T10 手垂	(156)	26	(179)	ヨコナデ、ケズ リ?	ヨコナデ	ソリーピク (2.5G6Y6/1)	灰白 (N7/0)	外表面自然剥離付。笠人、C類のつまみ筋に剥離の骨が付いて いる。	
235	2号廻廊床版	T10 手垂	(118)	37		ヨコナデ、ヘル 切り	ヨコナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰白 (7.5Y7/1)	外表面自然剥離付。器蓋剥離。	
236	2号廻廊床版	T10 手垂		74		ヨコナデ	ヨコナデ	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	外表面自然剥離付。半球あり。	
237	2号空路? 1次	T3 内面裏	(198)	(196)		ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 (N7/0)	灰白 (7.5Y7/1)	やや茎みあり。ちぎれにごくわずかに 自然剥離付。剥離に弓形剥離かしらり	
238	2号廻路? 1次	T3 茎の 脚?				ケズリ、オサエ、 ナデ	ヨコナデ	灰 (N5/0)			
239	3号廻路	T5 手垂	(212)	245		ヨコナデ、ケズ リ?	ヨコナデ、ナ デ?	灰白 (107/1)	灰白 (107/1)	器具底面。外表面农作物質あり	

査号 番号	遺構名	トレン シント リ	岩機 石機	法量 (cm)			特徴		色調	備考	
				口径	高さ	底脚径	最大径	外側	内側		
240	3号窓跡	T 5	手掘	(17.0)				ヨコナゲ、 ケズナゲ	ヨコナゲ、 ナゲ	灰 (10Y6/1) 灰 (10Y6/1)	墨あり。外側土器付着痕あり、その 外側部分に自然剥離層
241	3号窓跡	T 5	手掘	(15.0)				ヨコナゲ、ケズ ナゲ	ヨコナゲ、ナゲ	灰 (5Y7/1) 灰 (5Y7/1)	墨あり。
242	3号窓跡	T 5	手掘?					ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 (N6/0) 灰 (N6/0)	地上現れ。小片だが口端剥離は大。
243	3号窓跡	T 5	手掘	(9.4)				ヨコナゲ	ヨコナゲ、ナゲ	灰 (5Y7/1) 灰 (5Y7/1)	墨あり。
244	3号窓跡	T 5	裏					硝子状タキ カキメ	硝子状タキ カキメ	灰 (7) 灰 (5Y8/1) 灰 (5Y8/1)	外表面摩擦
245	3号窓跡	T 5	裏					硝子状タキ カキメ	硝子状タキ カキメ	灰 (7) 灰 (5Y8/1) 灰 (5Y8/1)	外表面摩擦
246	3号窓跡	T 11	手身	160	48	11.0		ヨコナゲ	ヨコナゲ、ナゲ	灰 (10Y6/1) (10Y6/1)	全体的に表面剥離
247	3号窓跡	T 11	裏					硝子状タキ カキメ	硝子状タキ カキメ	灰 (10Y6/1) 灰 (10Y6/1)	墨あり。
248	3号窓跡	T 11	裏					硝子状タキ	硝子状タキ	灰 (7) 灰 (5Y8/1) 灰 (5Y8/1)	外側や器表剥落。星形卓抜文
249	水瓶古墳	T 8 -a	手身	14.0				ヨコナゲ、ヘラ カキメ	ヨコナゲ	灰 (N7/0) 灰 (10Y6/1)	内表面自然剥離層。外側ヘラ記号あ る。
250	水瓶古墳	T 8 -a	裏					硝子状タキ カキメ	硝子状タキ カキメ	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	墨あり。
251	水瓶古墳	T 8 -a	裏					タキキ、カキメ	タキキ、カキメ	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	外表面自然剥離
252	水瓶古墳	T 8	裏					タキキ、カキメ	タキキ、カキメ	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	外表面自然剥離
253	水瓶古墳	T 8	裏					タキキ、カキメ	タキキ、カキメ	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	外表面自然剥離
254	寒風古墳	T 8 -c	手身	(11.6) 11.9	5.9			ヨコナゲ、ハラ カキメ	ヨコナゲ、 ナゲ	灰 (N6/0) 灰 (7.5Y7/1)	内表面自然剥離層。足込み部分は削 り落とし付着。足込み部分有り。 2枚重ねで有り。
255	寒風古墳	T 8 -c	手身	(12.0)	3.8			ヨコナゲ、ハラ カキメ	ヨコナゲ	灰 (7) (6Y7/1)	墨あり
256	寒風古墳	T 8 -c	裏					硝子状タキ カキメ	硝子状タキ カキメ	灰 (10Y6/1) 灰 (10Y6/1)	字字次第繋文
257	寒風古墳	T 8 d	手身	12.2	4.6			ヨコナゲ、ナゲ	ヨコナゲ	灰 (N7/0) (7.5Y7/1)	見込み自然剥離。墨あり
258	寒風古墳	T 8 -b	裏					ヨコナゲ	ナゲ	灰 (7.5Y6/1) (7.5Y7/1)	内表面自然剥離層。つまみ部複合部 分は複数箇所
259	寒風古墳	T 8 -b	裏?		(4.4)			ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 (N6/0) 灰 (N6/0)	墨あり。
260	寒風古墳	T 8 -b	手身					ヨコナゲ、ナゲ、 ヘラ括弧	ヨコナゲ	灰 (5Y7/1) 灰 (N7/0)	外側ヘラ彫き?
261	寒風古墳	T 8 -b	裏					硝子状タキ カキメ	硝子状タキ カキメ	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	内表面自然剥離層。つまみ部複合部 分は複数箇所
262	寒風古墳	T 8 -b	裏					硝子状タキ カキメ	硝子状タキ カキメ	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	内表面自然剥離
263	寒風古墳	T 8 -c	裏					硝子状タキ カキメ、ヨコナ ゲ	硝子状タキ カキメ、ヨコナ ゲ	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	正円ではなく西円形の中に硝子状の 模様がある草写文
264	寒風古墳	T 8	裏					硝子状タキ カキメ	硝子状タキ カキメ	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	正円ではなく西円形の中に硝子状の 模様がある草写文
265	寒風古墳	T 8 -c	裏					カキメ、ナゲ	半輪文	灰 (7.5Y7/1) 灰 (N7/0)	正円
266	寒風古墳	T 8 -c	裏					硝子状タキ カキメ	硝子状タキ カキメ	灰 (N5/0) 灰 (N5/0)	硝子状の半輪文
267	寒風古墳	T 8 -b	裏					タキキ後カキメ	半輪文	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	斜面上にわずかに自然剥離層。3重の 西円内に格子状草写文
268	寒風古墳	T 8 -b	裏					タキキ後カキメ	半輪文	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	3重の西円内に格子状草写文
269	寒風古墳	T 8 -c	裏					タキキ、カキメ	半輪文、ヨコナ ゲ	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	斜面上にわずかに自然剥離層
270	寒風古墳	T 8 -b	裏					タキキ、カキメ	半輪文	灰 (N6/0) 灰 (N7/0)	斜面上に自然剥離付着
271	寒風古墳	T 8 -b	裏					タキキ、カキメ	半輪文	灰 (N7/0) 灰 (N7/0)	斜面上に自然剥離付着
272	寒風古墳	T 8 -b	手身	17.0	37			ヨコナゲ、ケズ ナゲ	ヨコナゲ、ナゲ	灰 (N6/0) 灰 (N6/0)	天端部の状態で出土。縦書き
273	寒風古墳	T 8 -b	手身	10.5	3.3	8.2		ヨコナゲ、ケズ ナゲ	ヨコナゲ	灰 (N5/0) 灰 (N5/0)	見込み部分に自然剥離付着。やや小切 の跡。天端部の状態で出土。
274	寒風古墳	T 8 -b	手身	15.5	4.5	11.2		ヨコナゲ、ナゲ、 ケズナゲ	ヨコナゲ	灰 (N5/0) 灰 (N5/0)	見込み部分に自然剥離付着
275	寒風古墳	T 8 -c	手身					タキキ、カキメ	タキキ、カキメ	灰 (N6/0) 灰 (N6/0)	見込み部分に自然剥離付着
276	寒風古墳	T 8 -c	裏					タキキ、カキメ	墨(?)、ナゲ	灰 (N6/0) 灰 (N7/0)	墨(?)、ナゲ
277	寒風古墳	T 8	開削痕					硝子状タキ カキメ	ナゲ	灰 (5Y7/2) 灰 (5Y7/2)	墨(?)、ナゲ
278	寒風古墳	T 8	開削痕					ヨコナゲ	墨(?)	墨(?) (2.5Y7/4)	墨(?)、ナゲ
279	寒風古墳	T 8	脚尾					硝子状タキ カキメ	ヨコナゲ、ナ ゲ	灰 (10Y6/1) (10Y6/1)	墨(?)の透かし部分である
280	寒風古墳	T 8	脚尾					硝子状タキ カキメ	ヨコナゲナゲ (ヨ コナゲナゲ)	灰 (N7/0) (7.5Y7/1)	墨(?)の透かし部分である

編 号	遺物名	トロ ンナ ガサ	器種	計量 (cm)				特徴		色調		備考
				口径	高さ	直径	最大径	外側	内面	外側	内面	
281	堅式造縫3	T29	灰瓦	19.0	33			ヨコナギ、ケビヨコナギ、ミキエ、ナギ		灰 (10Y6/1) 灰白 (10Y7/1)		
282	堅式造縫3	T29	粘土	(17.3)				ヨコナギ	ヨコナギ	灰 (M6-0)	灰白 (M7/0)	外側自然焼付有
283	堅式造縫3	T29	粘土	(20.9)						灰白 (5Y7/2)	灰白 (5Y8/2)	内外面自然焼付
284	堅式造縫3	T29	牛骨	11.0	32			ヨコナギ、ヘラ 私物	ヨコナギ	灰白 (M7/0)	灰白 (M8/0)	
285	堅式造縫3	T29	馬頭 瓦?					4コナギ		灰 (7.5Y5/1)	灰 (N5w/0)	赤みが常に大。表面赤常に灰白。外側自然焼付有
286	堅式造縫3	T29	牛頭	(8.3)	117		17.0	ヨコナギ、ナギヨコナギ		灰白 (M7/0) 灰 (N5w/0)		ほほ先型。赤みややあり
287	堅式造縫3	T29	持手公 器	(17.3)				ヨコナギ、タクヨコナギ、ズサ キツカキメ、エナギ		灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	持手1ヶ残存。裏部から上に自然焼付なし。蓋付きの状態で焼成?
288	堅式造縫3	T29	灰	(49.8)				ヨコナギ、波状ヨコナギ、ヒテ 丸、沈割、真裏		灰 (10Y6/1)	灰 (M6/0)	赤みあり。内外面自然焼付有
289	堅式造縫3	T29	灰	(24.2)				ヨコナギ、タクヨコナギ、当て キ浅カキメ		灰白 (10Y7/1)		云々部分や蓋あり。内外面自然 焼付有
290	堅式造縫3	T29	灰	22.0				ヨコナギ、タクヨコナギ、当て キ浅カキメ	真裏	灰 (M6-0)	青灰 (10R6G/1)	やや赤みあり
291	堅式造縫3	T29	壳	19.5	38.6		堅式造 火候	ヨコナギ、桔子 タクキ後カキメ、ヨコナギ、當て カキメ、円形洋文	真裏	灰白 (M7/0)	灰 (M6/0)	口縁部内面～外壁裏部にかけてナギ かき付有。裏部は内面に凹凸有。蓋付 有。蓋付き灰入。底盤のワイヤー 部分に蓋埋入。下部灰等付有

石器観察表

測 定 値	トレンチ番号	器種	計量(最大)(cm)			重 量(g)	石 材	現 存	考 察
			長 さ	幅	厚 さ				
S 1	T23	石錐	21	15	2.5	0.96	セミカット	基端欠損	断面丸

図版 1



1 寒風古窯跡群空中写真（南西上空から）



2 1号窯跡群空中写真（左から1-I号・1-II号・1-III号）（西上空から）

図版2



1 1-I号窯跡焼成部 (T19: 北から)



2 1-II号窯跡煙道部 (T26: 西から)



3 1-I号窯跡焚口部 (T31: 西から)

図版3



1 1-II号窯跡焼成部 (T19: 北西から)



2 1-II号窯跡煙道部 (T27: 西から)



3 1-II号窯跡焚口部 (T32: 西から)

図版4



1 1-Ⅲ号窯跡焼成部 (T20: 西から)

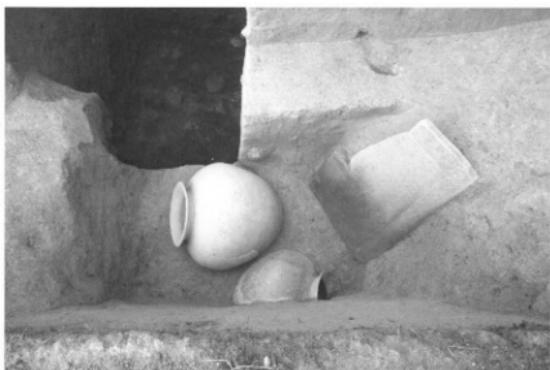


2 1-Ⅲ号窯跡煙道部 (T28: 西から)

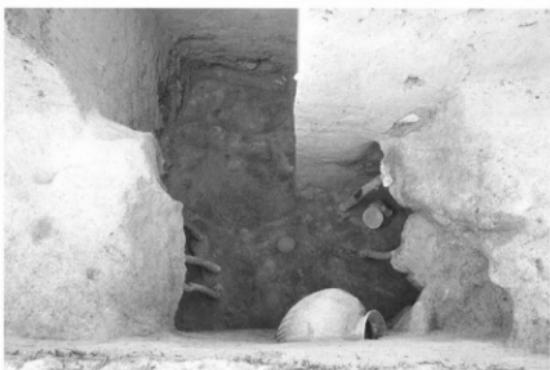


3 1-Ⅲ号窯跡焚口部 (T33: 西から)

図版5



1 1-Ⅲ号窯跡上層
土壤遺物出土状況
(T18: 南東から)



2 1-Ⅲ号窯跡焼成部
床面遺物出土状況
(T18: 南東から)



3 1-Ⅲ号窯跡焼成部
土層断面
(T18: 西から)

図版6



1 1-I号窯跡灰原 (T21: 西上空から)



2 1-I号窯跡灰原断面 (T21: 西から)



3 全景 (T22: 南西から)

図版7



1 1-I号窯跡中央部
土層断面
(T21: 北東から)

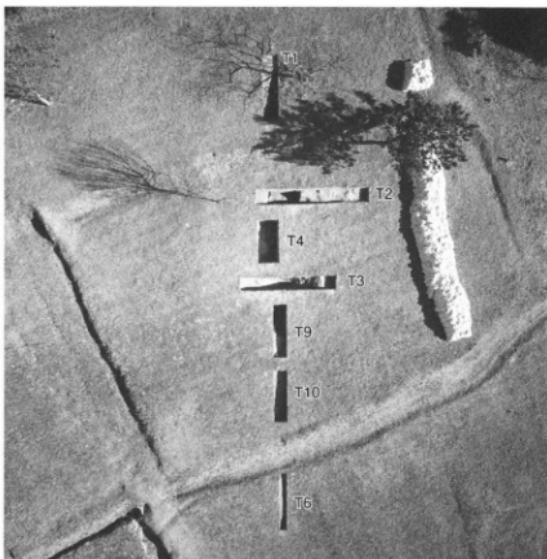


2 全景
(T34: 北西から)



3 全景
(T30: 北から)

図版8



1 2号窯跡
(上からT1・T2・T4・T3・
T9・T10・T6)
(南西から)



2 2号窯跡焼成部断面 (T2: 南西から)

図版9



1 2号窯跡煙道部
(T1: 西から)



2 2号窯跡焼成部
(T4: 北西から)



3 2号窯跡焚口部
(T3: 西から)

図版10



1 2号窯跡前庭部
(T9 : 北から)



2 2号窯跡灰原
(T10 : 西から)



3 2号窯跡灰原
(T14 : 南から)

図版11



1 3号窯跡焼成部断面 (T5: 南東から)

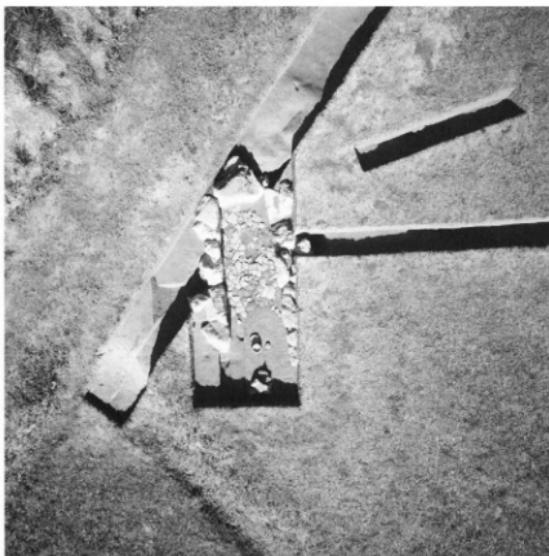


2 3号窯跡(上からT5・T11・T12) (北上空から)



3 3号窯跡煙道部 (T11: 南東から)

図版12



1 寒風古墳
(南東上空から)



2 寒風古墳横穴式石室遺物出土状況 (T8-b : 北東から)

1 寒風古墳
横穴式石室
(T8-b : 南東から)



2 寒風古墳周溝
(T8-a : 西から)



3 寒風古墳周溝
(T8-c : 西から)



図版14



1 寒風遺跡（寒風池東散布地）（南西上空から）

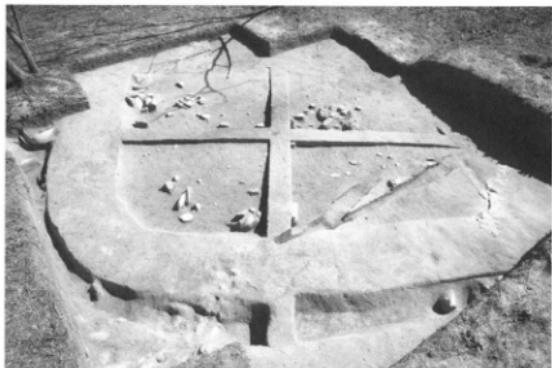


2 全景（T36：北西から）



3 全景（T35：南東から）

1 竪穴遺構3
遺物出土状況
(T29 : 北西から)



2 竪穴遺構3
(T29 : 北西から)



3 竪穴遺構3
P2平瓶出土状況
(T29 : 南東から)



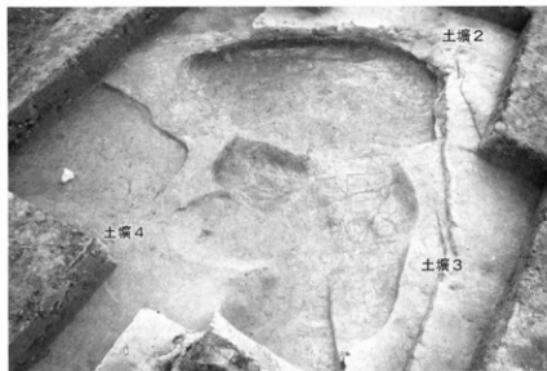
図版16



1 全景
(T23・T25 : 北東から)

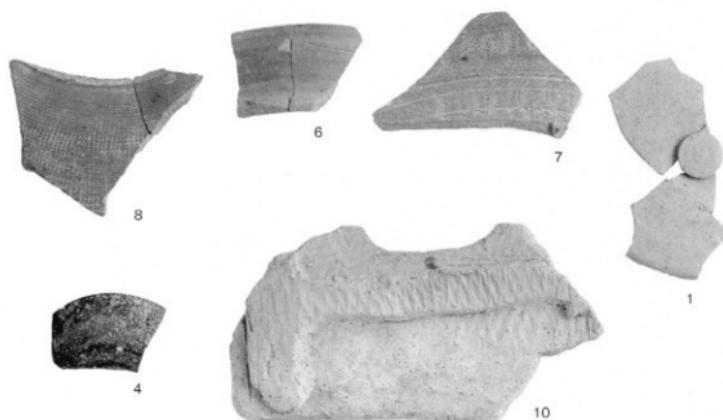


2 溝1
(T25 : 南東から)



3 土壌2～4
(T24 : 北東から)

図版17



1 1-I号窯跡焼成部出土遺物 (T19)



2 1-I号窯跡焚口出土遺物 (T31)

19

図版18



25

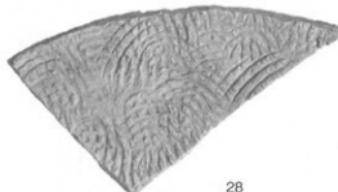


27



26

1 1-I号窯跡群灰原出土
刻書文字須恵器 (T21)



28



29



30



31

2 1号窯跡群灰原表採集の橢円形當て具痕を有する甕

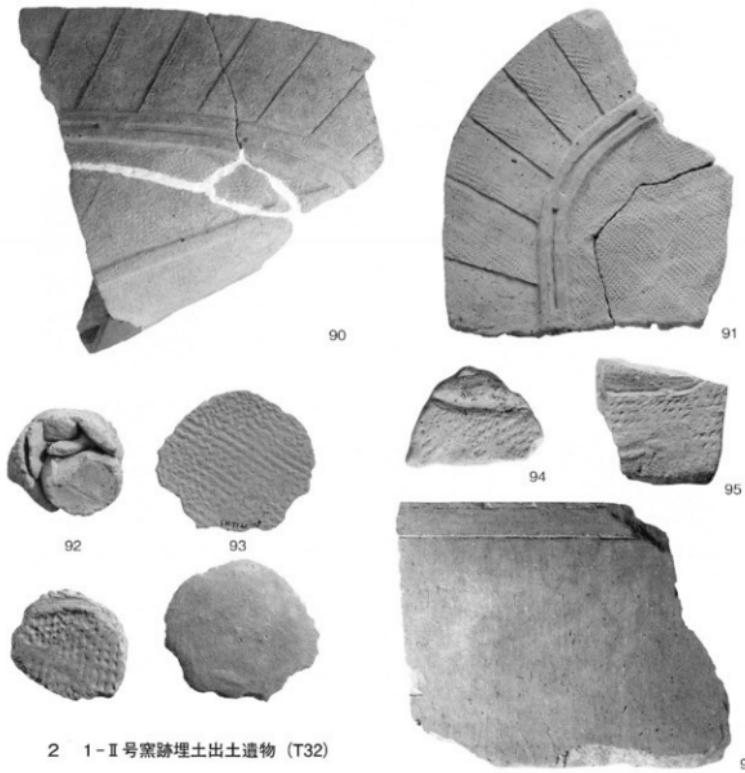
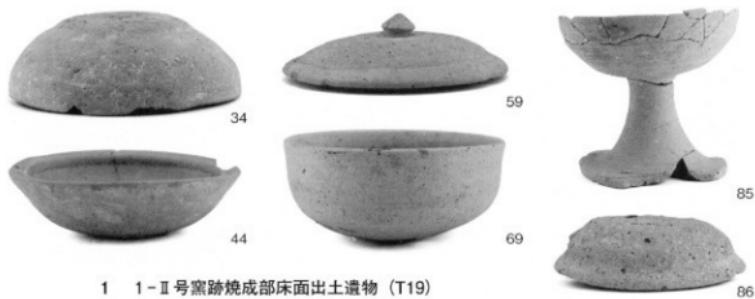
図版19

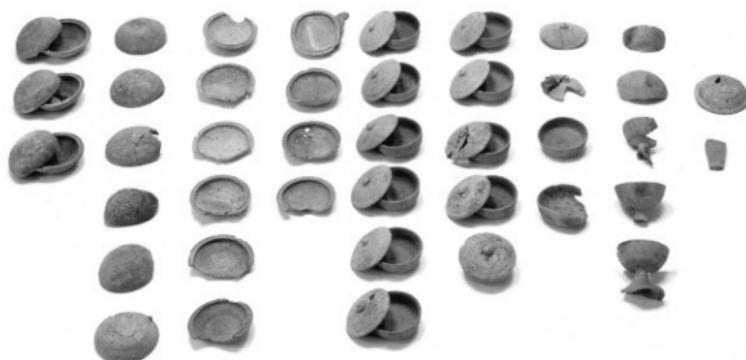


参考資料 1号窯跡群灰原出土椿円形當て具痕

を有する壺（吉備考古館保管）

図版20





1 1-Ⅱ号窯跡焼成部床面出土遺物 (T20)

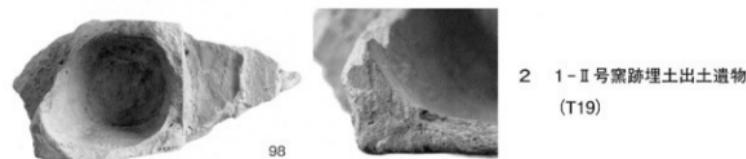


97



99

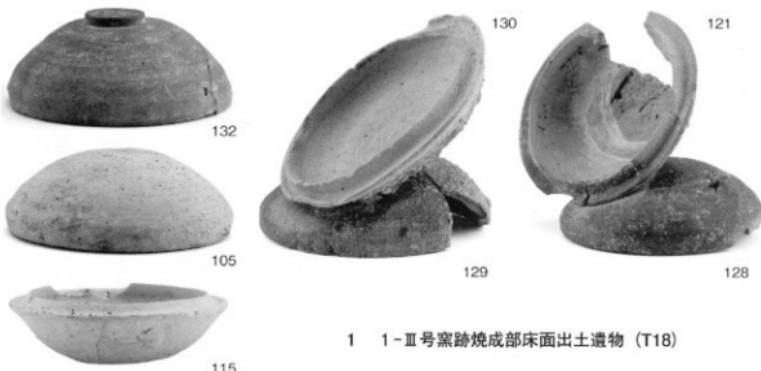
100



98

2 1-Ⅱ号窯跡埋土出土遺物
(T19)

図版22



1 1-III号窯跡焼成部床面出土遺物 (T18)

2 1-III号窯跡埋土出土遺物
(T20)



139

3 参考資料

1号窯跡灰原出土遺物
(吉備考古館保管)





1 1 - III号窯跡焼成部出土遺物 (T18)



155



156

161

162

2 2号窯跡煙道部・焼成部出土遺物 (T 1)

図版24



101

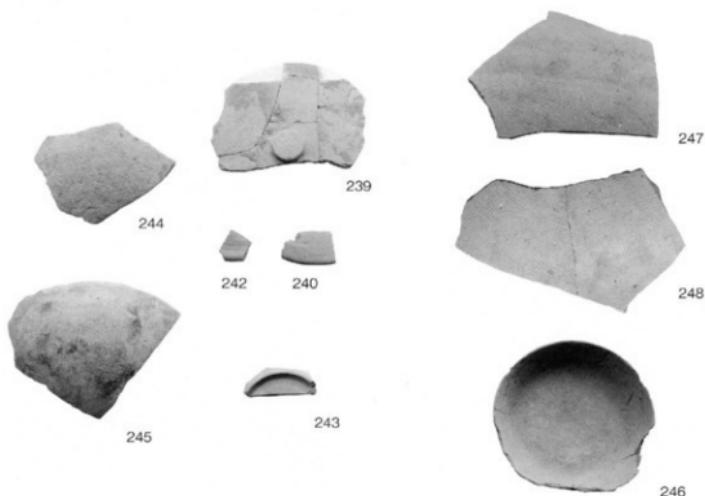
227



237

9

1 1・2号窯跡出土中空円面鏡把手・円面鏡



245

243

246

2 3号窯跡焼成部・煙道部出土遺物 (T5・11)

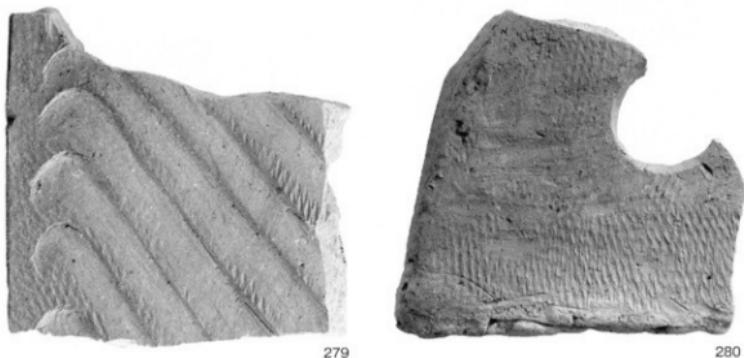
図版25



1 寒風古墳須恵器床に使用された甕内面の楕円形當て具痕



2 寒風古墳横穴式石室内出土遺物



3 寒風古墳横穴式石室前庭部出土鶴尾

図版26



286



291

1 堪穴遺構3出土遺物 (T29)



2 参考資料 1号窯跡群採集鶴尾 (時實資料)

報告書抄録

ふりがな	しせきさぶかぜこようせきぐん						
書名	史跡寒風古窯跡群						
副書名	史跡整備に伴う確認調査						
巻次							
シリーズ名	瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	1						
編著者名	馬場昌一・若松拳史・関幸代・山廬康平・金田明大・西村康・西口和彦・白石純						
編集機関	岡山県瀬戸内市教育委員会						
所在地	〒701-4392 岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓4911 TEL0869-34-5640						
発行機関	岡山県瀬戸内市教育委員会						
所在地	〒701-4392 岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓4911 TEL0869-34-5640						
発行年月日	2009年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
史跡 寒風古窯跡群	岡山県瀬戸内市 牛窓町長浜字 寒風5136番地他	212	34° 65° 50°	134° 13° 71°	2005.11.8 ~ 2006.3.18 2006.10.19 ~ 2007.3.28 2007.11.13 ~ 2008.3.11	334.7m ²	史跡整備 に伴う確 認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
史跡 寒風古窯跡群	窯跡	飛鳥時代	1 - I号窯跡	須恵器 鶴尾 陶棺 刻書文字入り 須恵器	須恵器 鶴尾 陶棺 刻書文字入り 須恵器		
		飛鳥時代	1 - II号窯跡	須恵器	焼成部床面に窯詰めの状態 で遺物出土。窯体長10.4m、 最大幅2.08m。		
		飛鳥時代	1 - III号窯跡	須恵器	確認調査により新規発見。 窯体長9.8m、最大幅2.0m。		
		飛鳥時代	2号窯跡	須恵器	窯体長12.7m、最大幅2.05m。		
		飛鳥時代	3号窯跡	須恵器	推定窯体長10.0m、最大幅 1.47m。		
		飛鳥時代	寒風古墳	須恵器 鶴尾 陶棺	墳形約6.5mの円墳。無袖式 横穴式石室が須恵器床。		
		飛鳥時代	堅穴遺構3	須恵器	周溝を伴う隅丸方形の堅穴 状遺構。工房跡か。		

瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告 1

史跡寒風古窯跡群

史跡整備に伴う確認調査

平成21年3月27日 印刷

平成21年3月31日 発行

編 集 濑戸内市教育委員会
岡山県瀬戸内市生庭町牛窓4911

発 行 濑戸内市教育委員会
岡山県瀬戸内市生庭町牛窓4911

印 刷 サンコー印刷株式会社
岡山県倉敷市真壁871-2

